

鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 26

平成 21 年度発掘調査報告 (第 2 分冊)

長谷小路周辺遺跡

円覚寺旧境内遺跡

大 楽 寺 跡

円覚寺旧境内遺跡

笹 目 遺 跡

浄明寺旧境内遺跡

円覚寺門前遺跡

平成 22 年 3 月

鎌倉市教育委員会

鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 26

平成 21 年度発掘調査報告

(第 2 分冊)

長谷小路周辺遺跡

円覚寺旧境内遺跡

大 楽 寺 跡

円覚寺旧境内遺跡

笹 目 遺 跡

浄明寺旧境内遺跡

円覚寺門前遺跡

平成 22 年 3 月

鎌倉市教育委員会



円覚寺旧境内遺跡 第2面全景（西から）



笹目遺跡 調査地点全景（南から）

ご あ い さ つ

近年、鎌倉の街では古い家屋や店舗の建て替えが相次いでいます。その中で、埋蔵文化財に影響のある工事も多くなっています。このため、個人専用住宅等の建設に際しては、昭和59年度から国・県の補助を受けて鎌倉市教育委員会が調査主体となって発掘調査の実施にあたってまいりました。

先人の遺産である文化財を守ることは、現在に生きる我々の責務であり、市内のおよそ6割の地域が埋蔵文化財包蔵地となっている本市の場合、特に市民の皆様のご理解とご協力なくしては、埋蔵文化財の保存や発掘調査の実施が困難であることは言うまでもありません。

本書は平成15、16及び17年度に国・県の補助を受けて鎌倉市教育委員会が実施した個人専用住宅等の建築に伴う発掘調査の記録として12ヶ所の調査成果を掲載しました。

調査の実施にあたり埋蔵文化財に対する深い御理解をいただくとともに、調査の期間中、物心両面にわたり多大なご協力をいただきました事業者・工事関係者の皆様に心からお礼を申し上げます。

平成22年3月31日

鎌倉市教育委員会

例 言

- 1 本書は平成21年度の国庫補助事業埋蔵文化財緊急調査に係る発掘調査報告書（第1分冊及び第2分冊）である。
- 2 本書所収の調査地点及び所収分冊は別表・別図のとおりである。
- 3 現地調査及び出土資料の整理は、鎌倉市教育委員会文化財課が実施した。
- 4 出土遺物及び調査に関する図面及び写真等は、鎌倉市教育委員会文化財課が保管している。
- 5 各調査の成果は、それぞれの報告を参照されたい。

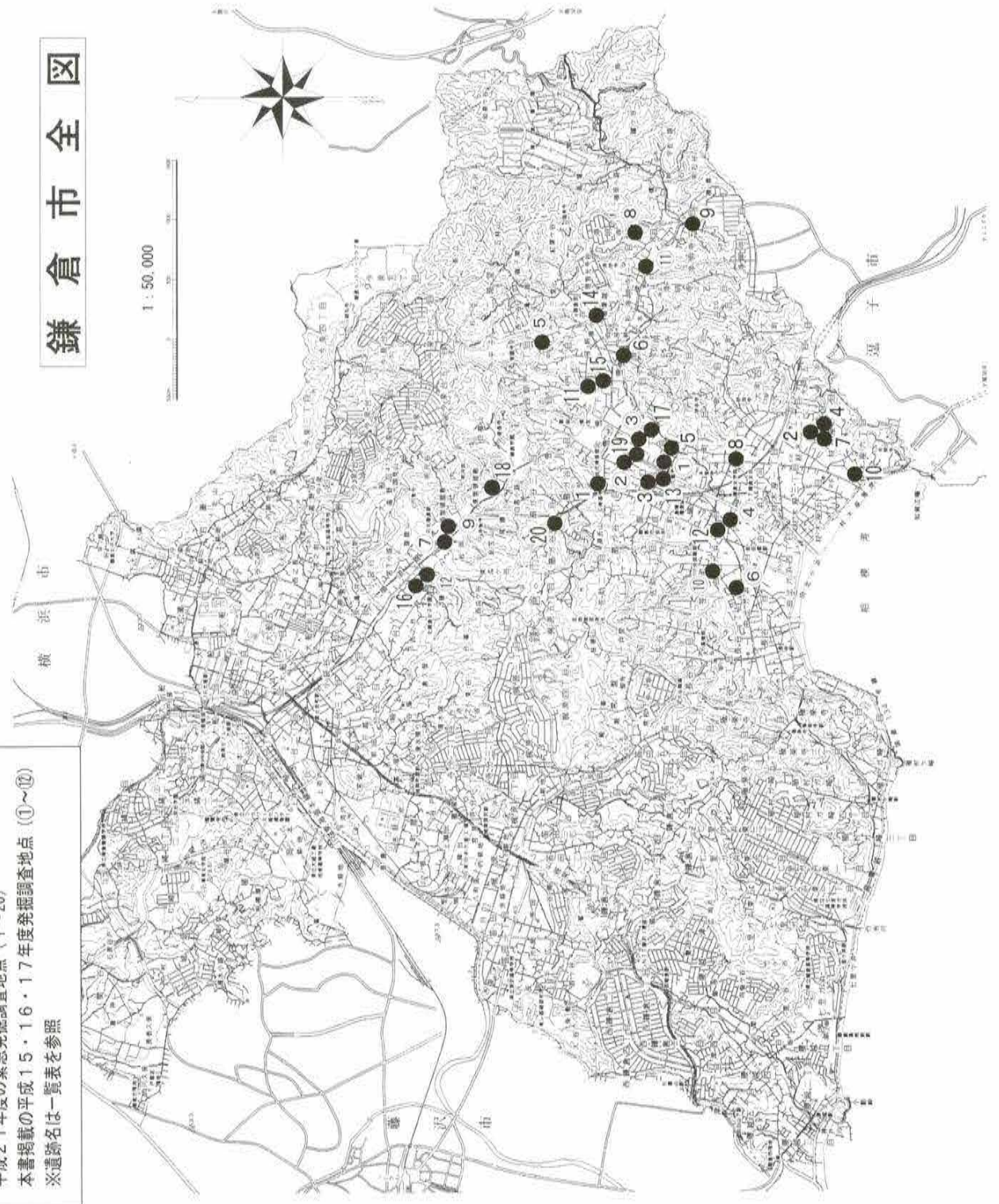
総目次

(第2分冊)

例言	II
調査地点位置図	IV
6 長谷小路周辺遺跡 (No. 236) 長谷一丁目 265 番 19 地点	
第1章 遺跡の位置と歴史的環境	5
第2章 調査の経緯と経過	7
第3章 発見した遺構と遺物	9
第4章 まとめ	28
7 円覚寺旧境内遺跡 (No. 434) 山ノ内字西管領屋敷 377 番 1 地点	
第1章 遺跡の位置と歴史的環境	52
第2章 調査の概要	55
第3章 検出遺構と出土遺物	58
第4章 まとめ	80
8 大楽寺跡 (No. 262) 浄明寺四丁目 246 番 1 地点	
第1章 遺跡の位置と歴史的環境	98
第2章 調査の概要	101
第3章 検出遺構と出土遺物	106
第4章 まとめ	127
9 円覚寺旧境内遺跡 (No. 434) 山ノ内字瑞鹿山 393 番地点	
第1章 調査に至る経緯	145
第2章 遺跡概観	146
第3章 調査経過	153
第4章 発見された遺構と遺物	156
第5章 まとめ	175
10 笹目遺跡 (No. 207) 笹目町 423 番 2 外地点	
第1章 調査概観	191
第2章 検出された遺構と出土遺物	195
第3章 まとめ	215
11 浄妙寺旧境内遺跡 (No. 408) 浄明寺三丁目 115 番 14 外地点	
第1章 遺跡の立地と環境	233
第2章 調査の経過と方法	235
第3章 検出された遺構と遺物	238
第4章 まとめ	252
12 円覚寺門前遺跡 (No. 287) 山ノ内字藤源治 947 番 8 地点	
第1章 調査の経緯	267
第2章 遺跡概観	268
第3章 調査経過	274
第4章 発見された遺構と遺物	277
第5章 まとめ	294

鎌倉市全図

平成21年度の緊急発掘調査地点（1～20）
本書掲載の平成15・16・17年度発掘調査地点（①～⑩）
※遺跡名は一覧表を参照



は せ こうじ しゅうへん い せき
長谷小路周辺遺跡 (No. 236)

長谷一丁目265番19

例 言

1. 本報告は鎌倉市長谷一丁目 265 番 19 に所在する個人専用住宅建設に伴い実施された、長谷小路周辺遺跡（神奈川県遺跡台帳 No. 236）の緊急調査報告である。
2. 発掘調査は、平成 17 年 2 月 25 日から同年 4 月 11 日にかけて鎌倉市教育委員会が実施した。
3. 調査体制は以下の通りである。
調査担当者：伊丹まどか
調査員：鈴木絵美
調査作業員：奥山利平・清水光一・清水政利・田口康雄・川島仁司
測量：福田誠・石元道子
協力機関名：（社）鎌倉市シルバー人材センター
4. 出土品整理体制は以下のとおりである。
遺物実測：鈴木絵美
トレース：鈴木絵美・吉田桂子
遺構写真撮影：鈴木絵美
遺物写真撮影：須佐仁和
図版作成：須佐直子・吉田桂子
執筆・編集：伊丹まどか・須佐直子・鈴木絵美
5. 発掘調査における出土遺物・図面類・写真などの資料は、鎌倉市教育委員会が保管している。
6. 凡例は以下のとおりである
図版縮尺 全測図：1 / 80 遺構図：1 / 60 遺物図：1 / 30
遺構実測図において焼痕の箇所と油煤付着箇所は黒く塗りつぶして表わしている。
文章中、および法量表において「かわらけ」と表記したものは、全て「轆轤成型」の製品を示す
遺構No.は、発掘作業中に便宜的に付したものであり、遺構の新旧・形状・性格を表すものではない。
出土遺物のうち、実測図に表わせなかった遺物は、それぞれの遺構・遺物説明の末に、遺物名と破片数値を示した。
法量表…復元実測を行った場合は、法量の数値に（ ）を付してある。径は直径を表わす。
7. 現地調査および資料整理に当たっては、多くの方からのご指導、ご教授を賜りました。
記して感謝の意を表わします。（敬称略・50 音順）
大塚悠介・押木弘己・古田土俊一・菊川泉・斎木秀雄・汐見一夫・宗臺秀明・浜野浩美・原廣志・福田誠・本城裕・松島義章・馬淵和雄

本文目次

第1章 遺跡の位置と歴史的環境	4
第2章 調査の経緯と経過	8
第3章 発見した遺構と遺物	10
第4章 まとめ	30
表 1	32
法量表	33
出土遺物破片数表	39

挿図目次

図1 調査地点と周辺の遺跡	5	図10 第2面遺構出土遺物(2)	18
図2 調査測量軸の設定図	9	図11 第3面全測図・調査区壁土層堆積図	21
図3 第1面・第2面全測図	11	図12 第3面・遺構11・43	22
図4 第1面・遺構20・21・22・23・27	12	図13 第3面遺構出土遺物(1)	23
図5 第1面遺構出土遺物	12	図14 第3面遺構出土遺物(2)	24
図6 第1面面上・構成土出土遺物	13	図15 第3面遺構出土遺物(3)・最終トレンチ出土遺物	27
図7 第2面・遺構7・8・9・10・12・14	15	図16 表採・攪乱出土遺物	28
図8 第2面・遺構29-A・29-B・31・32・34・35	16		
図9 第2面遺構出土遺物(1)	17		

写真図版目次

図版1 第1面・第2面・第3面遺構全景・個別遺構	42
図版2 第1面遺構・面上・構成土出土遺物	43
図版3 第2面遺構出土遺物	44
図版4 第2面遺構出土遺物・第3面遺構出土遺物	45
図版5 第3面遺構出土遺物	46
図版6 第3面遺構出土遺物・攪乱・表採出土遺物	47

第1章 遺跡の位置と歴史的環境

1. 遺跡の位置と歴史的環境（図1）

鎌倉市街地を南北に貫く若宮大路には、鶴岡八幡宮社頭より海浜に向かって三基の鳥居が建てられている。南側二基の鳥居の、ほぼ中間地点で県道鎌倉葉山線 311 号が若宮大路を横切り、この交差点が下馬（現、下馬交差点）である。この県道鎌倉葉山線は、諸説あるが中世の大町大路であった可能性が高く、交差点を東に進むと魚町、米町などの繁華な通りを抜け要害であった名越ヶ谷の切通しへと繋がりが、西に進むと長谷寺に突き当たり、南に折れると極楽寺を抜け稲村ガ崎、江ノ島へ向かう稲村ガ崎路。また、北に折れると大仏、大仏の切通しを超え武蔵国へと繋がる鎌倉の東西交通における重要な幹線道路となる。

遺跡名でもある長谷小路とは、突き当たった長谷寺前から下馬に戻る途中にある六地藏までの道筋を指し、大町大路の一部とも言える。「長谷小路周辺遺跡（No. 236）」はこの長谷小路の周辺一帯の砂丘帯に位置する。遺跡地の北東方には奈良時代の鎌倉郡衙に比定されている建物群や御家人の屋敷地、南東方に向原古墳群、南には前浜と呼ばれる海浜地域に職能民の活動を推測できる遺物が多種出土し、方形堅穴建築址と呼ばれる倉庫群が立ち並ぶ集落と共に、墓域が発見されている。西方には遺跡地周辺の地名の由来ともなる甘縄神社（和銅三年（710）年開創）が鎮座し、『吾妻鏡』に因れば甘縄と言う地名が見られ（注1）神明社の南方に安達藤九郎盛長以来、安達一族の屋敷があったとされる。また、安達氏以外にも多くの有力武士が甘縄に屋敷地を構えていたことが判っている。『吾妻鏡』は甘縄の火災を六回ほど記載している。

遺跡地周辺には、長谷寺、高德院（大仏）、光則寺、万寿寺（廃寺）、長楽寺（廃寺）があった事が知られ、調査地は、長楽寺があったとされる谷戸の開口部周辺に当たる。

本調査地点の周辺の発掘調査成果を見ると、中世の基盤砂層の下に弥生時代後期～古墳時代前期と平安時代前期の堅穴住居址と祭祀遺構、古代（奈良・平安）の遺物を堆積する後背湿地の堆積からは、堅穴住居・墓址を伴う集落が発見されている。中世では、基盤砂層を掘り込んだ方形堅穴建築址や土坑、土坑墓などの遺構と共に、甘縄神明社周辺では屋敷地と思われる掘立柱建物址、礎石建物址、木組みの溝や堀などが発見されている。

<注>

注1 甘縄と呼ばれる地域の範囲は、甘縄神社周辺が中心域だったようだが、佐々目ヶ谷・佐助ヶ谷・無量寺谷辺りまでを含む広範な一帯が甘縄であったと推定されている。

参考文献

- 『鎌倉廃寺事典』1980年 有隣堂 貫達人・川副武胤
- 『神奈川県地名』1984年 平凡社
- 『鎌倉市史』総説編 1959年 吉川弘文館
- 『鎌倉市史』考古編 1967年 吉川弘文館
- 『鎌倉事典』東京堂出版 1987年 白井永二



※注 周辺の調査地点名
刊行物については
文章末に明記

図1 調査地点と周辺の遺跡（概報告は報告書名、未報告は地点名のみ表記。図版中の番号と対応）

笹目遺跡 (No. 207)

1 「笹目遺跡 (No. 207) 笹目町 286 番 1 地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 17 (第 2 分冊)』鎌倉市教育委員会, 2001. 3

2 「笹目遺跡 (No. 207) 笹目町 285 番 1 外地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 17 (第 2 分冊)』鎌倉市教育委員会, 2001. 3

長谷小路周辺遺跡 (No. 236)

3 由比ガ浜三丁目 223 番 11 地点

4 『長谷小路周辺遺跡由比ガ浜三丁目 228・229 番外 (No. 236) 中世前期の地割を伴う工芸職人居住地の調査』1994. 7 長谷小路周辺遺跡発掘調査団 「長谷小路周辺遺跡 (由比ガ浜三丁目 229 番外) No. 236」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 9 (第 2 分冊)』鎌倉市教育委員会 1993. 3

5 「長谷小路周辺遺跡 (No. 236) 由比ガ浜三丁目 254 番 15 外 2 筆地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 17 (第 1 分冊)』鎌倉市教育委員会 2001. 3

6 「由比ガ浜三丁目 254 番 24 地点」『神奈川県埋蔵報告 32』神奈川県教育委員会

7 「由比ガ浜三丁目 258 番 8 地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 6』鎌倉市教育委員会, 1990. 3

8 『長谷小路周辺遺跡 由比ガ浜三丁目 258 番 1 地点』長谷小路周辺遺跡発掘調査団, 1995. 6

9 『由比ガ浜三丁目 194 番 25 外遺跡調査報告』「由比ガ浜三丁目 194 番 25 外地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 5』, 1989. 3

10 「由比ガ浜三丁目 194 番 24 地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 7』鎌倉市教育委員会, 1991. 3

11 『由比ガ浜三丁目 199 番 1 地点遺跡調査報告 長谷小路周辺遺跡群内、福地ビル建設に伴う緊急発掘調査』由比ガ浜三丁目 199 番 1 地点所在遺跡発掘調査団, 1990. 7

12 『長谷小路南遺跡』「ダイヤモンドクラブ保養荘建設に伴う由比ガ浜所在遺跡の発掘調査報告書」長谷小路南遺跡発掘調査団, 1992. 2

13 『長谷小路周辺遺跡発掘調査報告書 由比ガ浜三丁目 2 番 200』長谷小路周辺遺跡発掘調査団, 1997. 9

14 「由比ガ浜三丁目地点」未報告

15 『長谷小路周辺遺跡発掘調査報告書』「由比ガ浜三丁目 194 番 40 地点」長谷小路周辺遺跡発掘調査団, 1997. 6

16 「由比ガ浜三丁目 194 番 24 地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 10 (第 2 分冊)』鎌倉市教育委員会, 1994. 3

17 由比ガ浜三丁目 1173 番外『長谷小路周辺遺跡—第 20 地点発掘調査報告—』鎌倉市長谷小路周辺遺跡発掘調査団, 2001. 3

18 由比ガ浜三丁目 1262 番 2 地点

19 『長谷小路周辺遺跡発掘調査報告書—鎌倉市由比ガ浜三丁目 1262 番 6 外地点 (No. 236)』長谷小路周辺遺跡発掘調査団, 2000. 6

20 「長谷一丁目 205 番 12 地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 18 (第 2 分冊)』鎌倉市教育委員会

21 「長谷一丁目 199 番 20 外」『神奈川県埋蔵報告 45』神奈川県教育委員会

22 「長谷二丁目 252 番 1 地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 7』鎌倉市教育委員会, 1991. 3

今小路周辺遺跡 (No. 201)

23 『今小路西遺跡』「由比ガ浜一丁目 213 番 1 地点」今小路西遺跡発掘調査団, 1993. 7

24 「今小路西遺跡 由比ガ浜一丁目 183 番 1 地点」『鎌倉市緊急調査報告書 18 第 2 分冊』鎌倉市教育

委員会 2002. 3

下馬周辺遺跡 (No. 200)

25 「下馬周辺遺跡 由比ガ浜二丁目 106 番 6・7 地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 18 (第 1 分冊)』
鎌倉市教育委員会. 2002. 3

26 「下馬周辺遺跡 (No. 200) 由比ガ浜 2 丁目 107 番 1 地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 13 (第 2 分冊)』
鎌倉市教育委員会. 1997. 3

27 「下馬周辺遺跡 (No. 200) 由比ガ浜二丁目 110 番 5 地点」『鎌倉市緊急調査報告書 17 (第 1 分冊)』
鎌倉市教育委員会. 2001. 3

31 由比ガ浜二丁目 18 番 12 地点『下馬周辺遺跡 東京電力化枕営業所改築に係る発掘調査報告書』
下馬周辺遺跡発掘調査団. 1992. 3

32 『下馬周辺遺跡発掘調査報告書 4 - 由比ガ浜二丁目 2 番 12 地点』下馬周辺遺跡発掘調査団. 1989. 9

33 由比ガ浜二丁目 2 番 10 地点

34 由比ガ浜二丁目 2 番 2 地点

35 由比ガ浜二丁目 1011 番 1 地点『下馬周辺遺跡発掘調査報告書—鎌倉女学院地点』下馬周辺遺跡発掘
調査団 1998. 3

若宮大路周辺遺跡群

28 『若宮大路周辺遺跡群発掘調査報告書—由比ガ浜一丁目 129 番 5 地点』若宮大路周辺遺跡群発掘調査
団 1995. 5

29 「若宮大路周辺遺跡群 (由比ガ浜一丁目 128 番 7 地点)」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 4』鎌倉
市教育委員会 1988. 3

30 由比ガ浜二丁目 120 番 6 地点

甘縄神社周辺遺跡 (No. 177)

36 長谷一丁目 227 番地点「伝安達泰盛邸跡」『鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報 I』鎌倉市教育委員会
1983. 3

37 「甘縄神社遺跡群 (No. 177)」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 23 (第 I 分冊)』鎌倉市教育委員会
2007. 3

38 『甘縄神社遺跡発掘調査報告書 鎌倉消防署長谷出張所改築に伴う緊急調査報告書 長谷一丁目 271
番 10 地点』甘縄神社遺跡群発掘調査団 1995. 7

第2章 調査の経緯と経過

1. 調査の経緯と経過

本地点は、鎌倉市長谷一丁目265番19地点における個人住宅建設に伴う事前調査として、平成17年2月25日から4月11日にかけて実施した。調査に伴う廃土の処理を調査地内で行わなければならないことや、隣地の建物の保全・安全等を考え、当初予定していた対象面積を狭めて調査を実施したため調査面積は約56㎡である。

調査地の現地表海拔高は約11.30mである。調査前の確認調査の成果から、現地表下約50cmまでは現代の客土層であることを確認していたため、重機による表土掘削を行い、その後人力による掘削、遺構の検出、記録保存、写真撮影を行った。

本調査では遺構の切りあい、遺構検出をした層序を考慮して3面に分けて報告しているが、地業・整地層からの遺構検出ではなく、短期間に遺構の造り替えが行われた結果であり、3期にわたる生活面として示した。

遺物は整理箱数にして10箱を数え、舶載磁器・国内産陶磁器・かわらけ・火鉢・瓦・石製品・金属製品・貝・骨などの中世遺物の他、土師器・須恵器などの古代の遺物を確認した。表土および表採出土遺物の中には、現代遺物に混じって近世遺物も出土していたが、整理作業の都合から掲載できなかったものも多い。

2. 国土座標上の位置とグリッド配置 (図2)

調査前現地表海拔高は、調査地の南側前面の歩道で9.8m、調査区基準点②の地点で11,239mを測り、約1m40cmの高低差を持つ。調査の際に設けたグリッドは、調査区外に任意の2点(基準点①・基準点②)を設け、それを基準に1m×1mの方眼を設定した。各グリッドの名称は、東西方向を西から東に向かって1から順に数字を、南北方向を北から南に向かってAから順にアルファベットを配した。また、本調査地点の位置を地図上に合成するために鎌倉市4級基準点D225(国土座標値X=-76346.154・Y=26201.224)を使用して、基準①・基準②の2点を測量した。本遺跡地の磁北方向は、グリッドの南北軸から東に2°11'20"傾く。

3. 堆積土層 (図11)

第1層の現代理土を取り除くと、灰色のスクリーントーンで表わした海成砂の砂層(中世基盤層に相当する)を掘り込んだ遺構覆土が調査区全体に広がり、地業層・整地面は見当たらない。周辺の調査青果では、黒く斜線のスクリーントーンを張った黒褐色弱粘質土の堆積層を掘り込んで弥生末から古墳時代初期の住居址。奈良時代・平安時代前期の竪穴住居址・土坑墓が確認されているが、本調査では掘削深度の制限などから確認していない。

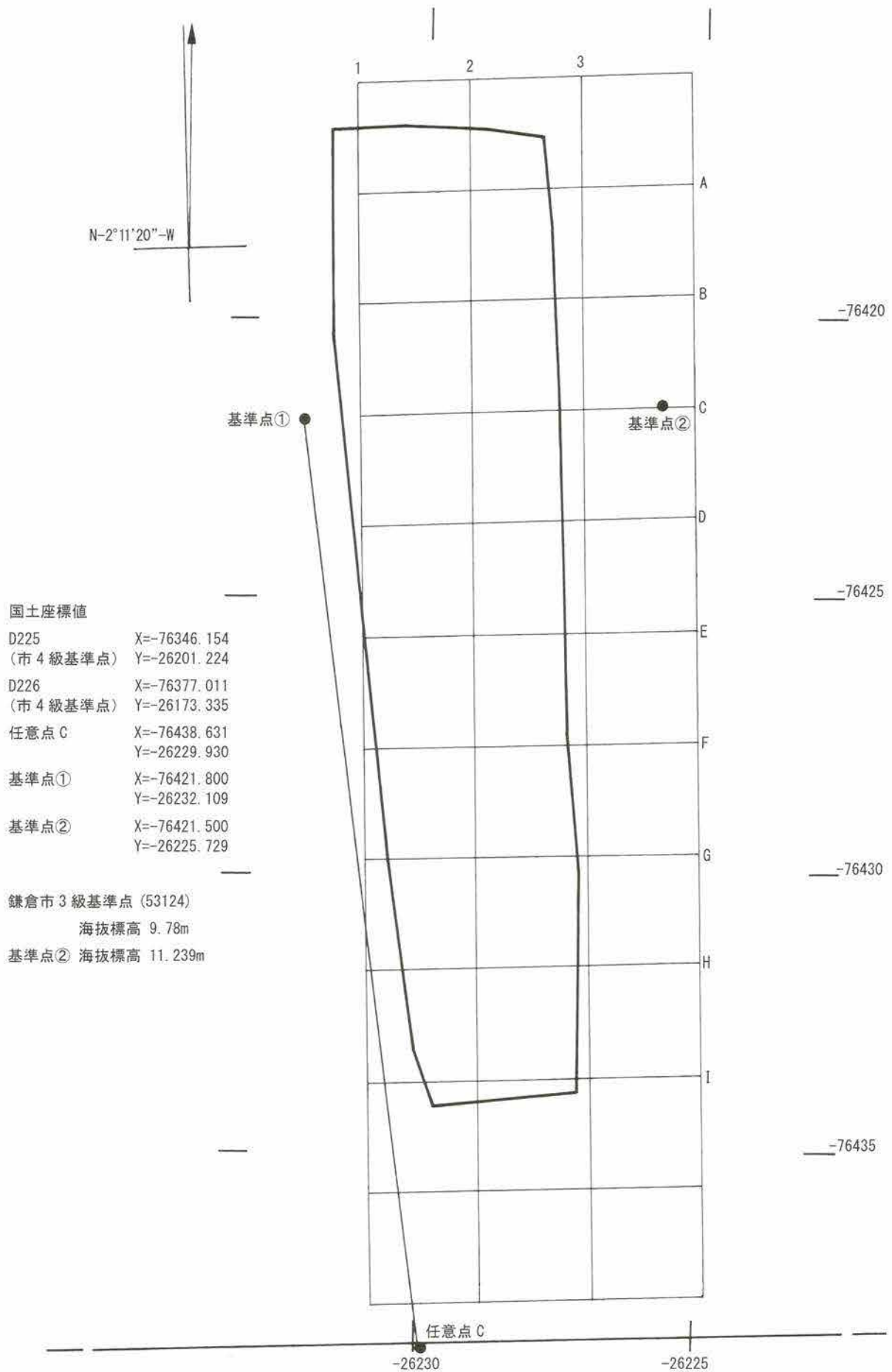


図2 調査測量軸の設定図

第3章 発見した遺構と遺物

本調査は重機によって表土を取り除いた後、人力によって下層の遺構を発見・記録の作業を行った。廃土置き場を確保するためにⅠ区・Ⅱ区と調査区を2分して調査を実施したが、本報告では両区を合わせて報告している。

調査地を含む周辺一帯は、泥岩などを利用して整地あるいは地業した生活面を掘り込んだ遺構ではなく、多くは砂層を掘り込んだ遺構群が発見される地域である。本調査地においても、海成砂層を掘り込んだ遺構群は発見されたが、地業層・生活面は確認できなかった。また、調査範囲が細長く狭小であったため、遺構の多くは調査区外に延びており、それぞれの遺構の性格・規模を正確に確認することはできなかった。

・第1面の遺構（図3）

第1面の遺構は重機によって表土を取り除き、灰白色の海成砂層上で遺構覆土を確認した。調査区北側の大半は現代の攪乱坑によって壊されており、遺構の検出・確認ができなかった。発見した遺構は、土坑1基。ピット7穴である。出土した遺物はかわらけ・舶載磁器・国産陶磁器・土製品・石製品・鉄製品・貝・骨（人骨・獣骨）があった。

遺構6（図3）

C-1グリッド。長軸65cm・短軸50cm・深さ5cmの浅いピット。覆土は茶褐色砂質土・炭化物微量・破碎泥岩少量を含む。図示できなかった遺物は、かわらけ（大）10。かわらけ（小）4。常滑窯・甕4。

遺構20（図4）

H-2グリッド。長軸55cm・短軸47cm・深さ30cm。覆土は暗褐色砂質土・破碎泥岩・炭化物微量を含む。遺構21覆土に近似している。破碎泥岩を利用して根固めをした柱穴と考えられ、遺構21と芯芯で180cmを測る。図示できなかった遺物は、かわらけ（大）3。かわらけ（小）2。青磁・画花文碗1。鉄製品・釘1である。

遺構21（図4）

H-2グリッド。長軸45cm・短軸33cm・深さ22cm。覆土は暗褐色砂質土・破碎泥岩・炭化物微量を含む。遺構20と同様に破碎泥岩を利用して根固めをした柱穴。

出土遺物（図5）

1は鉄製品・釘。図示できなかった遺物は、かわらけ（大）1。かわらけ（小）1。常滑窯・甕1。

遺構22（図4）

H-2グリッド。柱穴である。長軸44cm・深さ14cm。遺構22に切られる。覆土は暗褐色砂質土・茶褐色砂・炭化物少量を含む。柱穴底面に礎石あり。図示できなかった遺物は、かわらけ（大）1。常滑窯・甕1。鉄製品・釘1。

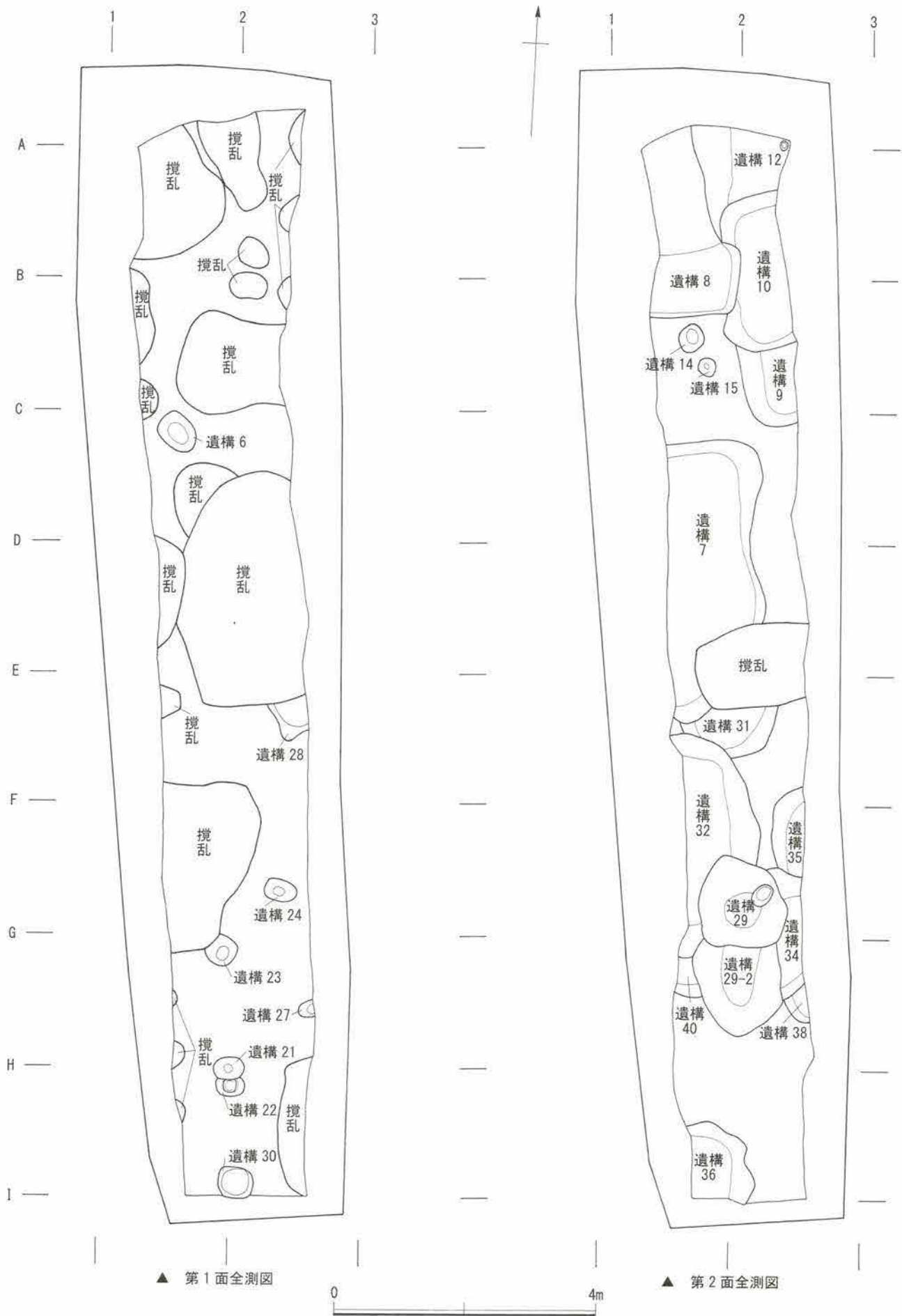


图3 第1面·第2面全測図

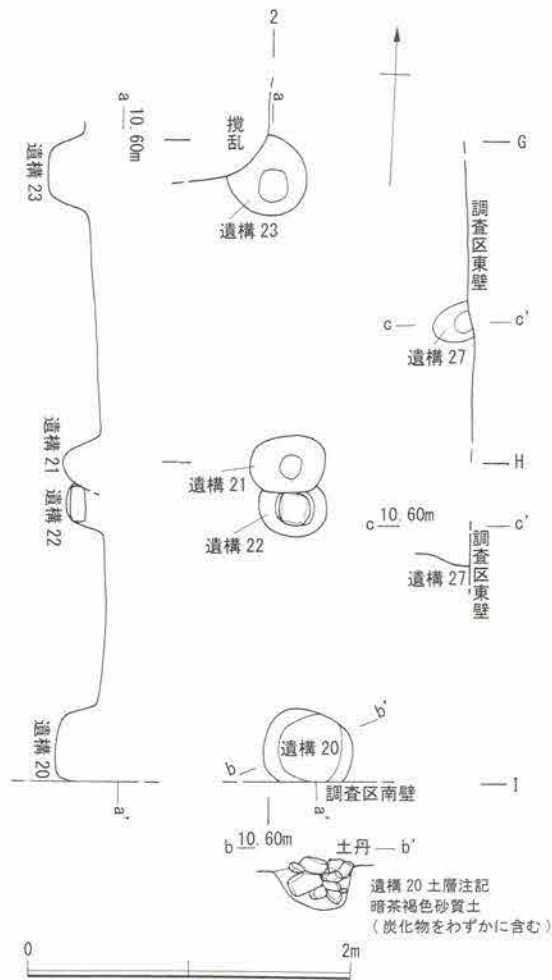


図4 第1面・遺構 20・21・22・23・27

3は石製品・硯。図示できなかつた遺物はかわらけ(大)2。貝。

遺構 28 (図3)

E-2グリッド。攪乱に大きく切られており正確な形状は不明。深さ約10cm。覆土は茶褐色砂質土・炭化物微量・植物遺体を含み、細砂で硬く締まる

出土遺物 (図5)

4はかわらけ。5は白磁・口元皿。6は常滑窯・片口鉢I類。7はかわらけ底部の転用品。円盤状に加工してある。図示できなかつた遺物は、かわらけ(大)23。かわらけ(小)7。常滑窯・片口鉢I類1。

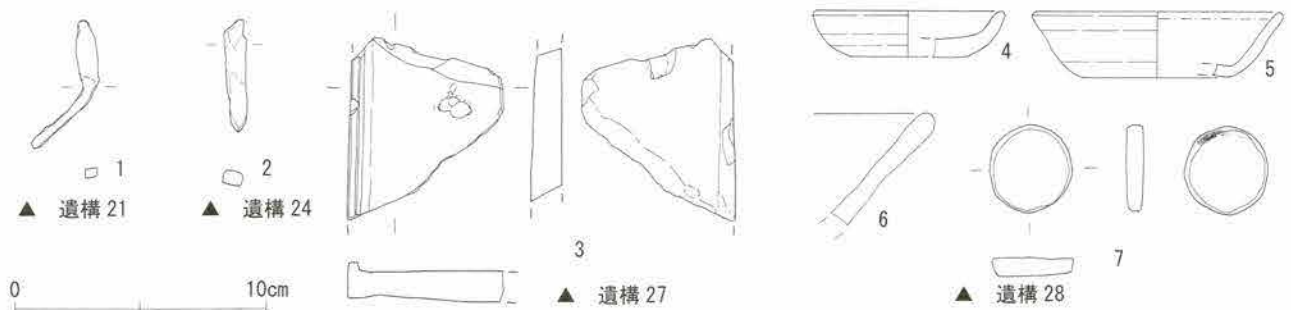


図5 第1面遺構出土遺物

第1面面上出土遺物 (図6)

1~13はかわらけ。7は内外口唇部に油煤附着。14は青磁・折縁鉢。内面単弁の蓮弁文。竜泉窯。

遺構 23 (図4)

G-1グリッド。ピットである。長軸43cm・深さ23cm。現代攪乱に切られ正確な形状は不明。覆土は茶褐色砂質土・炭化物多量・貝砂少量・破碎泥岩粒を含む。硬く締まる。図示できなかつた遺物は、かわらけ(大)2。

遺構 24 (図3)

F-2グリッド。ピットである。長軸50cm・短軸32cm・深さ28cm。覆土は茶褐色砂質土・炭化物微量を含む。硬く締まる。遺構23に覆土近似。

出土遺物 (図5)

2は鉄製品・釘。図示できなかつた遺物は、かわらけ(大)3。

遺構 27 (図4)

G-2グリッド。長軸24cm。深さ8cm。調査区外に遺構が延びており正確な形状不明。浅いピット。覆土は茶褐色砂質土・破碎泥岩粒・炭化物少量を含む。

出土遺物 (図5)

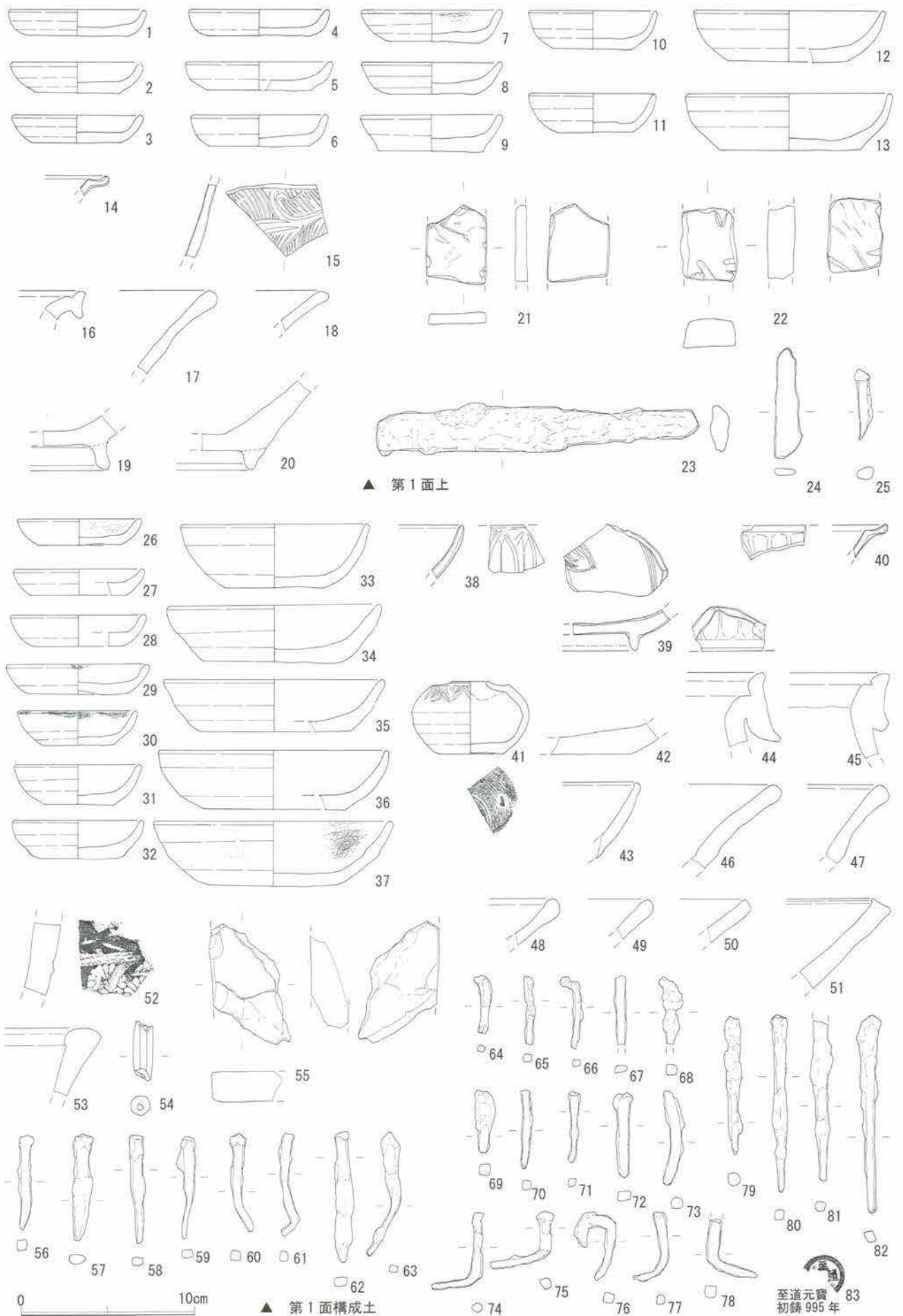


図6 第1面上・構成土出土遺物

15 は青白磁・梅瓶。16～20 は常滑窯製品。16 は甕。17～20 は片口鉢Ⅰ類。19・20 は内面磨耗。21・22 は石製品・砥石。21 は仕上げ砥。鳴滝産。22 は中砥。産地不明。23～25 は鉄製品。23・24 は刀子。25 は用途不明。

第1面構成土出土遺物（図6）

26～37 はかわらけ。26・29・30 は口唇部に油煤痕。内外面に油煤痕。37 は内外面器壁に薄く油煤痕。38～40 は青磁。38・39 は鎬蓮弁文碗。39 は内底面に双魚文の貼り付け。外面畳み付き以外は全て施釉。竜泉窯。40 は折縁鉢。内面に単弁の蓮弁文。竜泉窯。41～43 は瀬戸窯製品。41 は鉄釉。外面に蓮弁文の線刻あり。42 は折縁深皿。43 は卸皿。44～51 は常滑窯製品。44・45 は甕。46～50 は片口鉢Ⅰ類。51 は片口鉢Ⅱ類。52・53 は瓦質火鉢。52 は外側面に菊花文のスタンプ。54 は土製品・土錘。55 は滑石鍋転用品。温石か。56～82 は鉄製品・釘。83 は銭。至道元寶。（初鋳995年・北宋）

・第2面の遺構（図3）

第2面と、後述する第3面で発見した遺構は、地業した層からの遺構検出ではなく遺構の新旧で分けられている。発見した遺構は土坑11基・ピット2穴・方形堅穴建築址2軒である。

遺構7（図7）

C-1 グリッド。方形堅穴建築址である。覆土は暗褐色砂質土・炭化物微量・破碎泥岩を含む。覆土内に砂質凝灰岩の切石が出土している。幅約2m30cm。深さ約85cm。上層の攪乱がほぼ同位置にあり、正確な形状は不明であったが、床面は人為的に硬く突き固められていた。本来は2軒の方形堅穴建築址が切りあっていただけと考えている。

出土遺物（図9）

1～8 はかわらけ。1 は内折れかわらけ。9～12 は常滑窯・片口鉢Ⅰ類。10 は内面磨耗。13 は常滑窯・片口鉢Ⅱ類。14 は備前窯・播鉢。内面に8条を単位とした掻き目。15 は魚住窯・片口鉢。16 は南伊勢系土鍋。内面煤付着。17 は鏝鍋。内面煤付着。18 は瓦質火鉢・輪花型。19・20 は骨製品・筭。19の端部には装飾をしようとして中断したものか。加工痕が残る。21 は須恵器・甕。

図示できなかつた遺物はかわらけ（大）197。かわらけ（小）46。手づくねかわらけ1。瓦質・火鉢2。常滑窯・甕27。渥美窯・甕1。鉄滓2。貝。獣骨。

遺構8（図7）

A-1 グリッド。方形の土坑である。調査区外に遺構が延びてしまっているため正確な形状は不明。深さ約70cm。覆土は暗褐色砂質土・炭化物・貝砂少量・茶褐色砂を含む。

出土遺物（図9）

22・23 はかわらけ。24 は鉄製品・釘。

図示できなかつた遺物は、かわらけ（大）16。かわらけ（小）9。常滑窯・甕3。貝・獣骨。

遺構9（図7）

B-2 グリッド。方形の土坑である。遺構10に切られ正確な形状は不明。深さ約40cm。覆土は暗褐色砂質土・破碎泥岩粒少量・貝砂多・炭化物多量を含む。

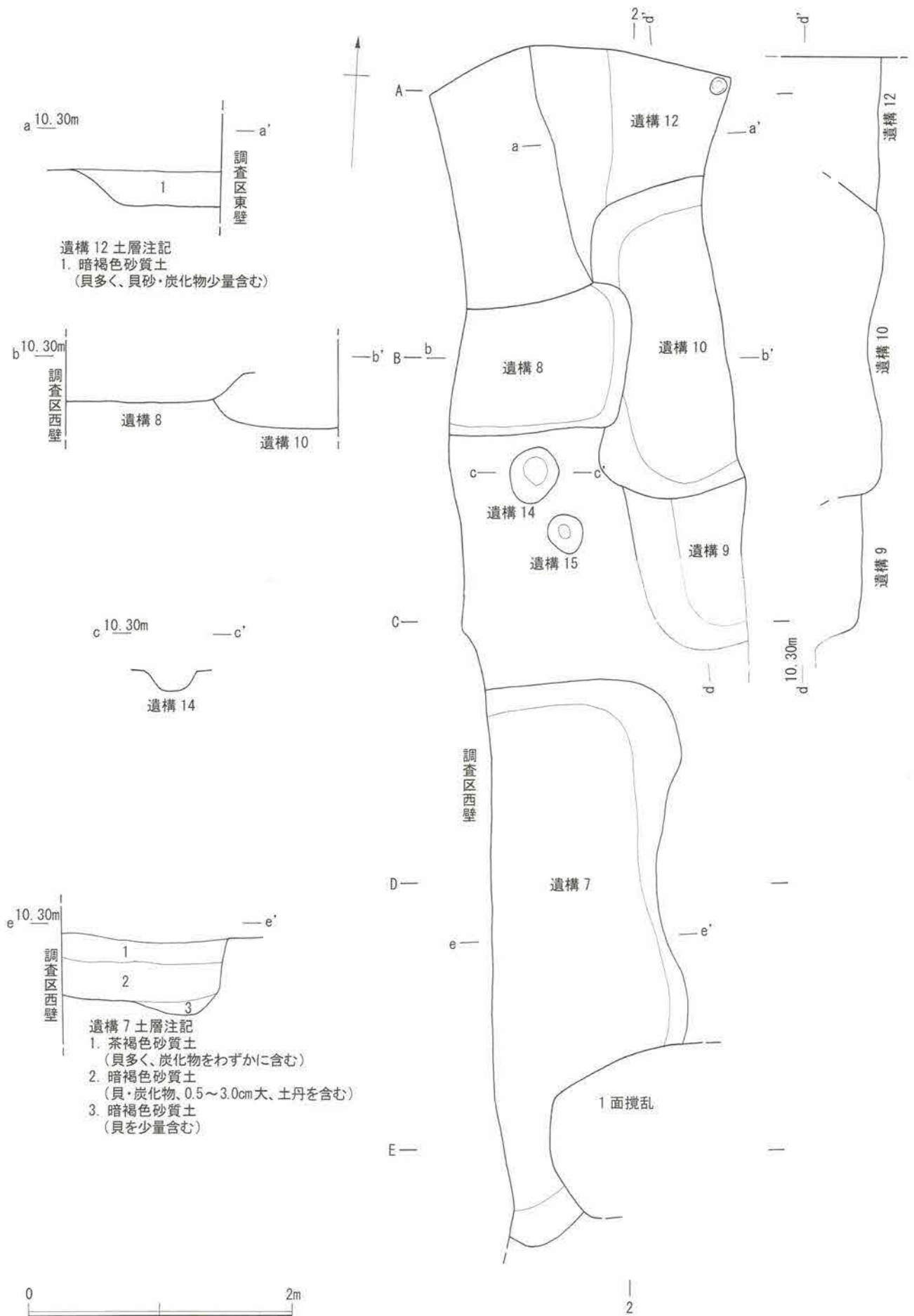
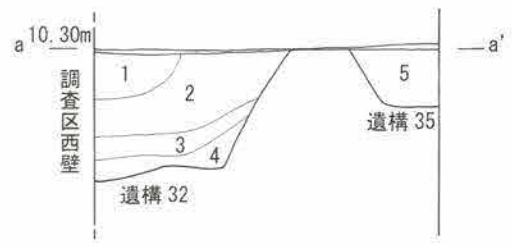
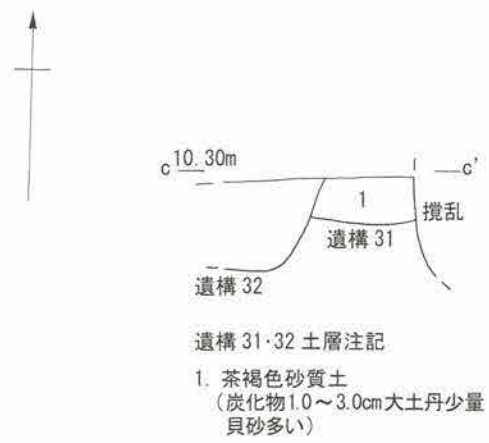
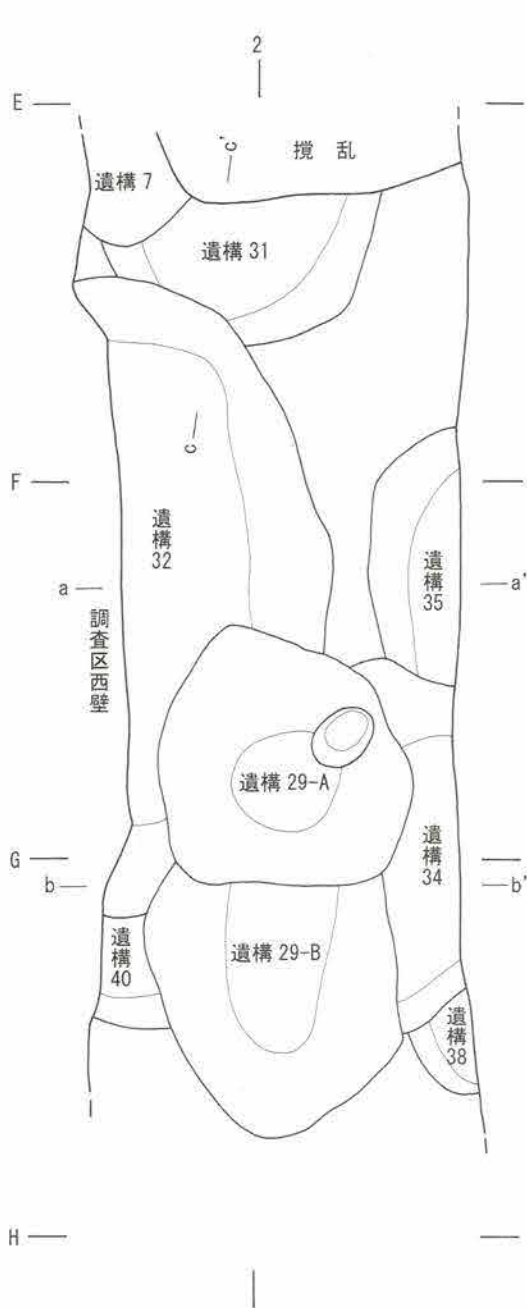
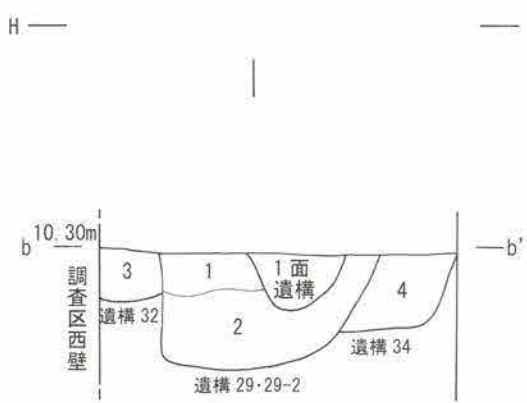


図7 第2面・遺構7・8・9・10・12・14



1. 暗褐色砂質土
(炭化物少量、貝砂0.5~1cm大土丹。貝などを多く含む)
 2. 暗褐色砂質土
(炭化物を多く、貝砂などを含む)
 3. 暗褐色砂質土
(炭化物0.5~1cm大土丹を少量含み
茶褐色砂と部分的に混じえる)
 4. 茶褐色砂質土
(細かい砂で暗褐色砂が混入する)
- } 遺構 32
5. 暗茶褐色砂質土
(炭化物少量、0.5~5.0cm大土丹多く含む)
- } 遺構 35



1. 暗茶褐色砂質土
(炭化物・かわらけ片など含む)
 2. 暗茶褐色砂質土
(炭化物・土丹粒など含む)
 3. 暗茶褐色砂質土
 4. 茶褐色砂質土
(炭化物・貝・玉石など含む)
- } 遺構 29-A・29-B
- } 遺構 32
- } 遺構 34



図8 第2面・遺構 29-A・29-B・31・32・34・35

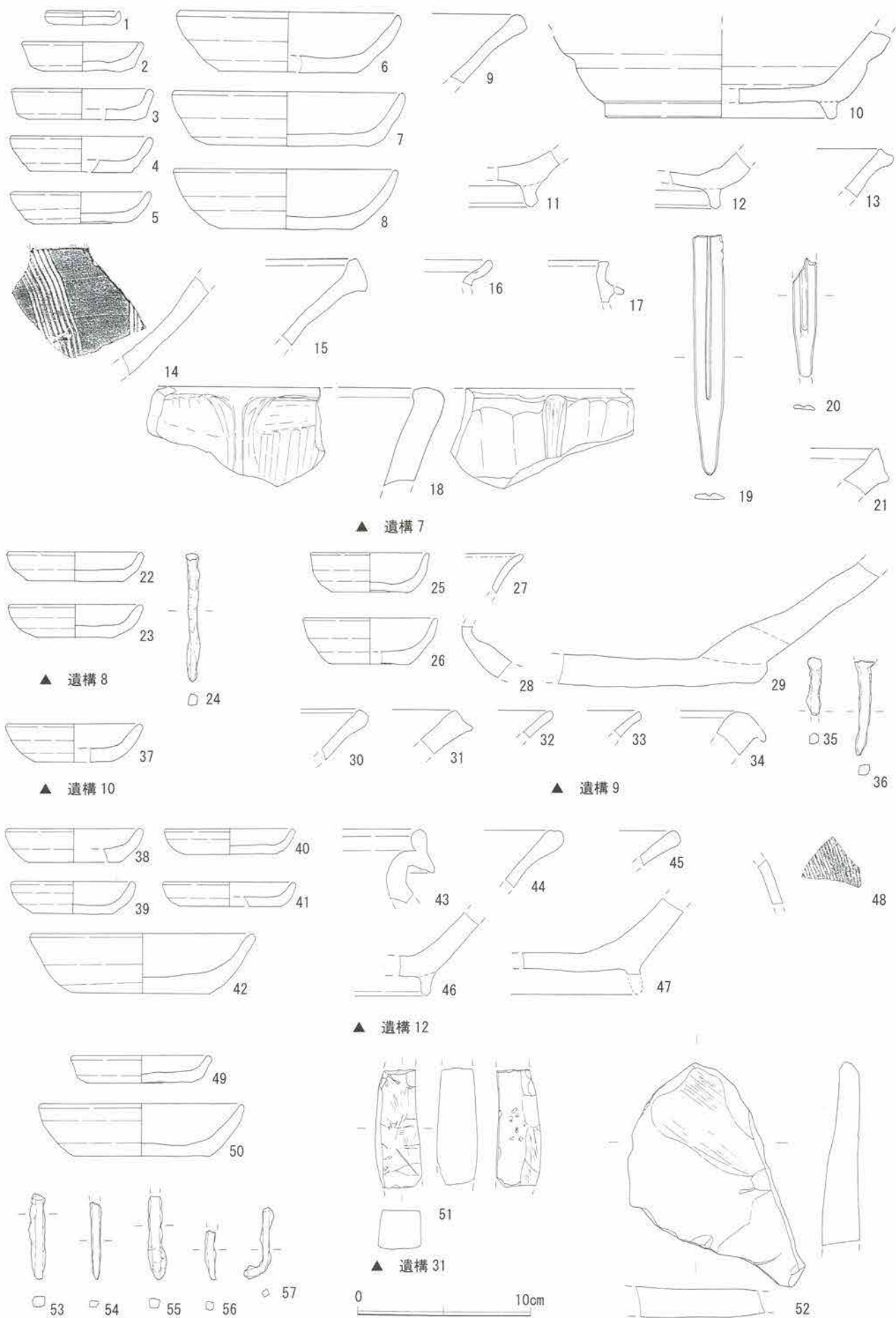


图9 第2面遺構出土遺物(1)

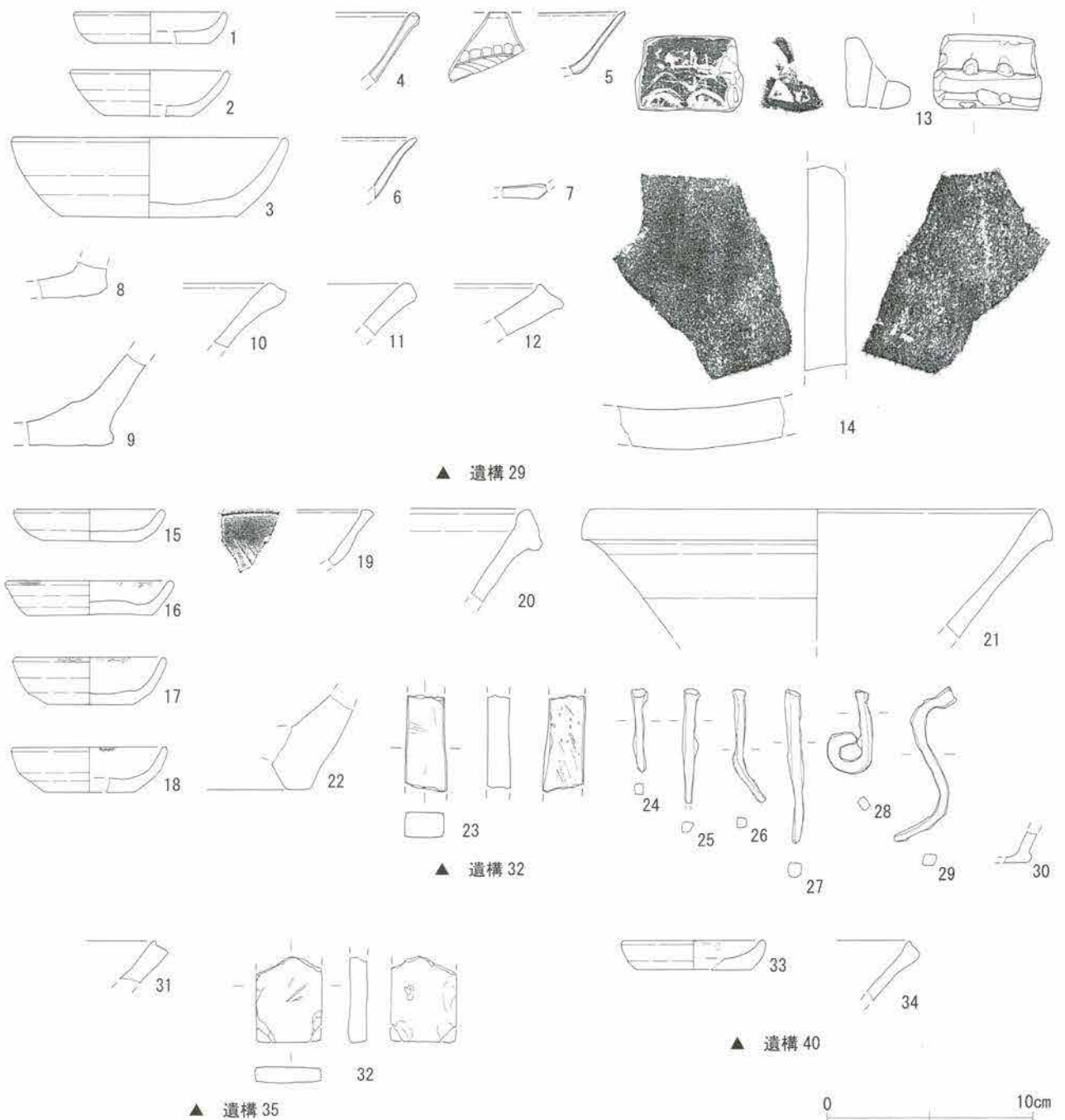


図10 第2面遺構出土遺物(2)

出土遺物(図9)

25・26はかわらけ。27は白磁・口元皿。28～31は常滑窯製品。28は壺。29は甕底部片。外底面に砂・炭化物付着。30は片口鉢Ⅰ類。31は片口鉢Ⅱ類。32・33は山茶碗。34は瓦質・火鉢。35・36は鉄製品・釘。図示できなかった遺物は、かわらけ(大)41。かわらけ(小)16。常滑窯・甕7。渥美窯・甕3。竜泉窯青磁・蓮弁文碗1。鉄製品1。貝。獣骨。

遺構10(図7)

A-1グリッド。1辺約235cm・深さ約60cmの方形の土坑である。暗褐色砂質土・破碎泥岩粒少量・貝砂多・炭化物多量を含む。

出土遺物(図9)

37はかわらけ。図示できなかった遺物は、かわらけ(大)22。かわらけ(小)11。貝。獣骨。

遺構 12 (図 7)

A-1 グリッド。調査区外に遺構が延びているため、正確な形状は不明。方形を呈する土坑と考えている。深さ約 55 cm。覆土は暗褐色砂質土・炭化物少量・破碎泥岩・貝砂を含む。

出土遺物 (図 9)

38～42 はかわらけ。43 は常滑窯・甕。44～47 は常滑窯・片口鉢 I 類。47 は内底面磨耗。48 は須恵器・甕。図示できなかった遺物は、かわらけ (大) 140。かわらけ (小) 27。常滑窯・甕 13。常滑窯・片口鉢 I 類 4。竜泉窯青磁・蓮弁文碗 1。貝。獣骨。多量のかわらけ細片は、意図的に投げ込まれたものではない。

遺構 14 (図 7)

B-1 グリッド。長軸 38 cm・短軸 35 cm・深さ 12 cm。円形の浅いピット。覆土は暗褐色砂質土・貝砂・炭化物を含む。図示できなかった遺物は、鉄製品・釘。

遺構 15 (図 3)

B-1 グリッド。長軸 15 cm・短軸 14 cm・深さ 30 cm。円形を呈するピット。覆土は暗褐色砂質土・炭化物・貝砂を含む。出土遺物はなかった。

遺構 29 (図 8)

F・G-1 グリッド。遺構プラン確認の段階ではひとつの大きな土坑として捉えていたが、セクションを残して掘り進めた結果、2つの土坑が切りあっていることが解かったため、枝番で分けて示している。

遺構 29-A

長軸 135 cm・短軸 125 cm・深さ約 25 cm。円形の土坑。覆土は暗茶褐色砂質土・炭化物。貝・褐色砂を含む。

遺構 29-B

長軸は遺構 29-A に切られる。短軸 125 cm・深さ 66 cm。覆土は暗茶褐色砂質土・茶褐色砂・有機質土・褐鉄・炭化物・破碎泥岩・泥岩粒を含む。鉄分を多く含んだ堆積物の影響か、一部堆積層が筋状に硬化し、土坑底面に厚い硬化層が観察できた。

出土遺物 (図 10)

遺構番号を枝番で、A・B と分けているが、遺物は同一遺構出土として一括で採集した。

1～3 はかわらけ。4 は青磁・香炉。竜泉窯。5 は青白磁・口元皿。内面に花文。6・7 は白磁・口元皿。8 は瀬戸窯・柄付片口鉢。外底面に柄痕。9 は常滑窯・甕。10・11 は常滑窯・片口鉢 I 類。10 は内面に厚く自然釉がかかる。12 は常滑窯・片口鉢 II 類。13 は滑石鍋転用品。滑石スタンプ。文様不明。側面となる面に三角の文様が彫刻される。14 は女瓦。縄目叩き。凸面・凹面両面に離れ砂付着。

図示できなかった遺物は、かわらけ (大) 110。かわらけ (小) 31。南伊勢系土鍋 2。瀬戸窯・壺 2。常滑窯・甕 32。常滑窯・片口鉢 I 類 1。竜泉窯青磁・蓮弁文碗 1。貝。獣骨。

遺構 31 (図 8)

E-1 グリッド。遺構 7 と遺構 32 に切られ正確な形状は不明。深さ 20 cm。円形の土坑。覆土は茶褐色砂質土・細砂・炭化物少量・破碎泥岩粒少量・貝砂多量を含む。

出土遺物 (図9)

49・50 はかわらけ。51 は石製品・砥石。中砥。産地不明。52 は自然石だが、一部に磨耗痕残る。53～57 は鉄製品・釘。図示できなかった遺物は、かわらけ (大) 36。常滑窯・甕 10。貝。骨。

遺構 32 (図8)

E-1 グリッド。円形を呈する土坑。遺構 29 に切られる。深さ 90 cm。覆土は茶褐色砂質土・炭化物多量・貝砂・破碎泥岩粒を含む。

出土遺物 (図10)

15～18 はかわらけ。16～18 は灯明皿。口唇部に油煤付着。19 は瀬戸窯・卸皿。20・21 は魚住窯・片口鉢。22 は瓦質・火鉢の脚部。23 は石製品・砥石。仕上げ砥・産地不明。24～29 は鉄製品・釘。30 は土師器・杯。

図示できなかった遺物は、かわらけ (大) 96。かわらけ (小) 50。常滑窯・甕 22。瓦質・火鉢 1。石製品・砥石 1。貝。

遺構 34 (図8)

F-2 グリッド。遺構 29 に切られる。円形の土坑。深さ 60 cm。覆土は暗茶褐色砂質土・炭化物微量・褐鉄多量・細砂・破碎泥岩粒を含む。

図示できなかった遺物は、かわらけ (大) 25。かわらけ (小) 2。常滑窯・甕 3。貝。

遺構 35 (図8)

E-2 グリッド。遺構 34 に切られる。円形の土坑。深さ 20 cm。覆土は暗茶褐色砂質土・炭化物微量・褐鉄多量・泥岩粒を含む。遺構 34 覆土に近似。

出土遺物 (図10)

31 は常滑窯・片口鉢 I 類。32 は石製品・砥石。仕上げ砥・鳴滝産。図示できなかった遺物は、かわらけ (大) 12。かわらけ (小) 1。貝。

遺構 36 (図3)

H-1 グリッド。調査区外に遺構が延びていたために正確な形容は不明。深さ約 50 cm。覆土は暗茶褐色砂質土・破碎泥岩粒多量・貝砂・炭化物を含む。出土遺物は全て細片であり、図示できた遺物はなかったが、出土量は多い。

図示できなかった遺物は、かわらけ (大) 174。かわらけ (小) 9。常滑窯・甕 24。常滑窯・片口鉢 I 類 1。魚住窯・鉢 1。

遺構 40 (図3)

G-1 グリッド。遺構 29・遺構 32 に切られ、調査区外に遺構が延びているために正確な形状は不明。深さ 50 cm。覆土は暗茶褐色砂質土・炭化物微量・破碎泥岩多量・細砂・貝砂を含む。

出土遺物 (図10)

33 はかわらけ。灯明皿。内外面に油煤痕。34 は瀬戸窯・卸皿。図示できなかった遺物はかわらけ (大) 8。かわらけ (小) 12。常滑窯・甕 4。貝。獣骨。

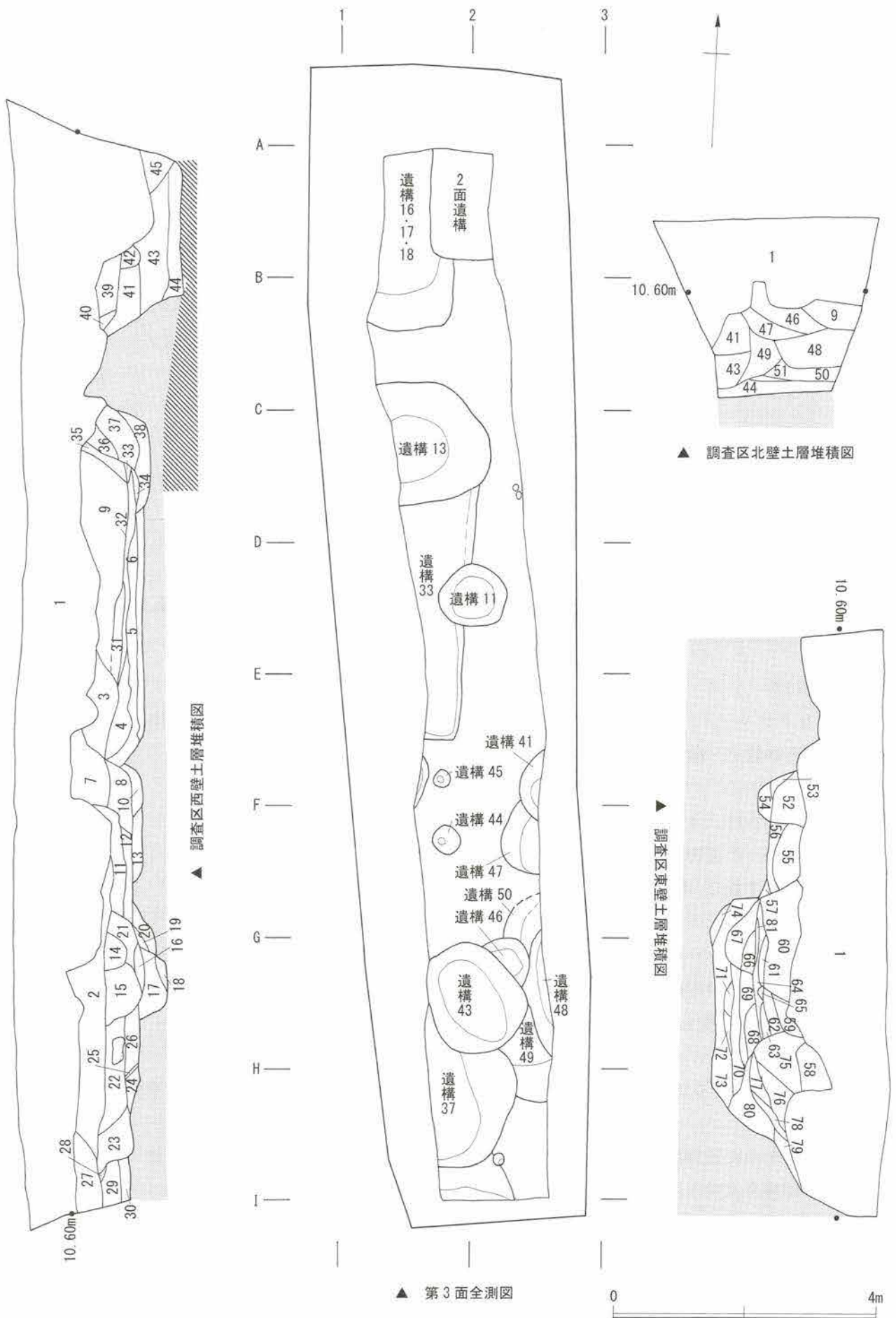


図11 第3面全測図・調査区壁土層堆積図

・第3面の遺構（図11）

発見した遺構は土坑11基・ピット2穴・方形竪穴建築址2軒である

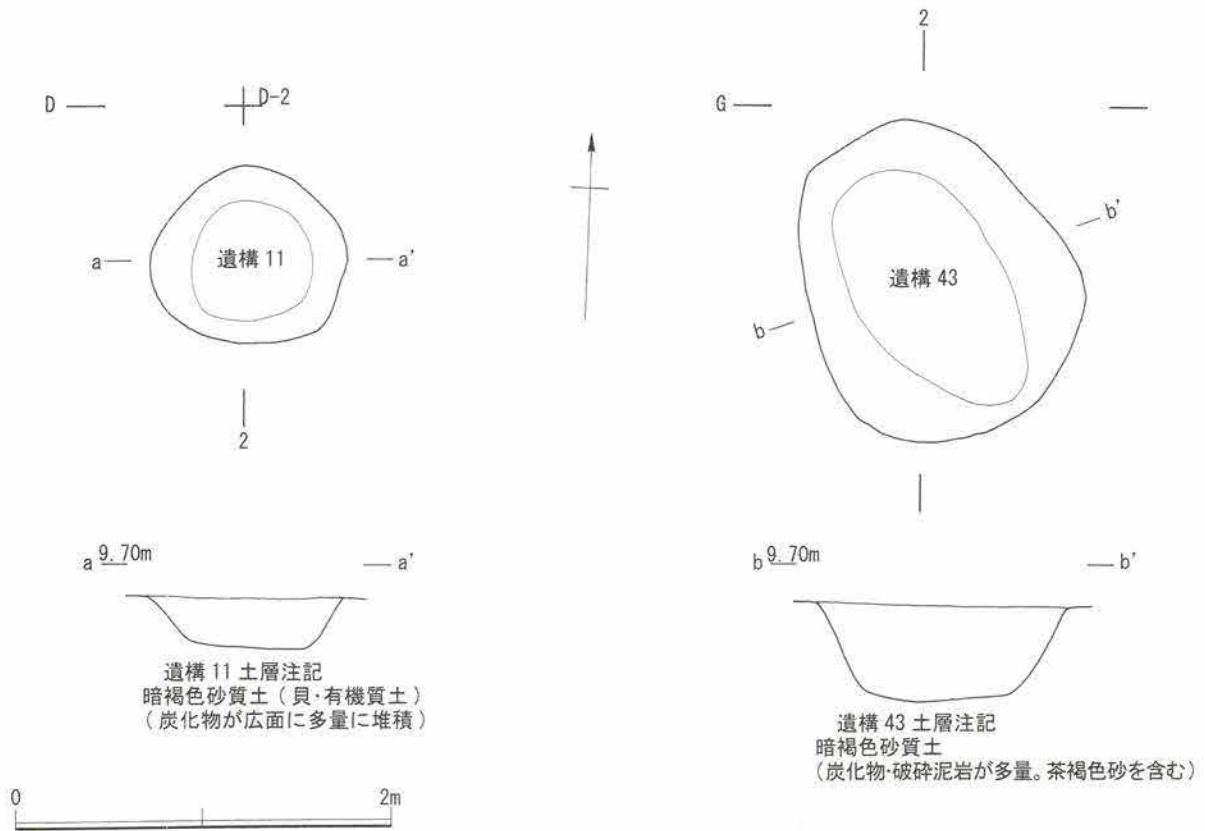


図12 第3面・遺構11・43

遺構11（図12）

D-1・2グリッド。円形の土坑。長軸102cm・短軸94cm・深さ47cm。遺構下層に炭化物が多く堆積。覆土は暗褐色砂質土・破碎泥岩少量を含む。

出土遺物（図13）

1～4はかわらけ。4は内底面と外底面に黒色の色素付着。墨か。

図示できなかった遺物はかわらけ（大）19。かわらけ（小）4。瀬戸窯・器種不明1。常滑窯・甕1。常滑窯・片口鉢I類2。鉄製品釘2。貝。獣骨。

遺構13（図11）

B-1グリッド。円形の土坑。調査区外に遺構が延びてしまっているために正確な形状は不明。幅175cm・深さ85cm。覆土は茶褐色砂質土・炭化物・褐色砂を含む。

出土遺物（図13）

5～8はかわらけ。6は灯明皿。内外面全体に油煤痕。9は白磁・口元皿。10は常滑窯・片口鉢I類。11は石製品・硯。

図示できなかった遺物は、かわらけ（大）40。かわらけ（小）10。常滑窯・甕3。常滑窯・片口鉢I類3。竜泉窯・青磁蓮弁文碗1。鉄滓1。貝。獣骨。

遺構16（図11）

A-1グリッド。調査区外に遺構が延びてしまっているために正確な形状は不明であるが、方形竪穴建築址と考えている。遺構底面（海拔8.8m）で中世基盤層下に堆積する黒褐色弱粘質土を遺構が掘り

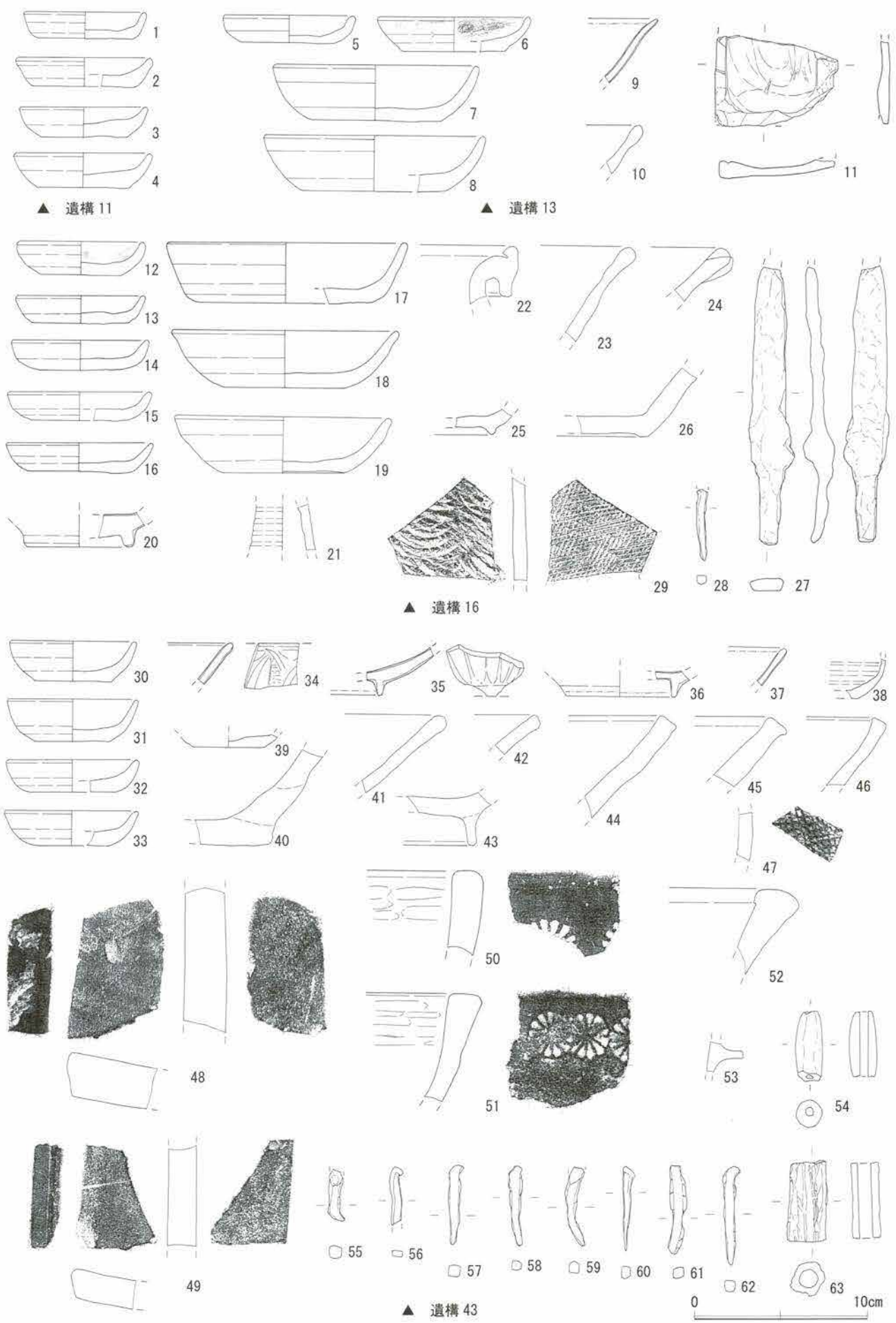


图 13 第 3 面遺構出土遺物 (1)

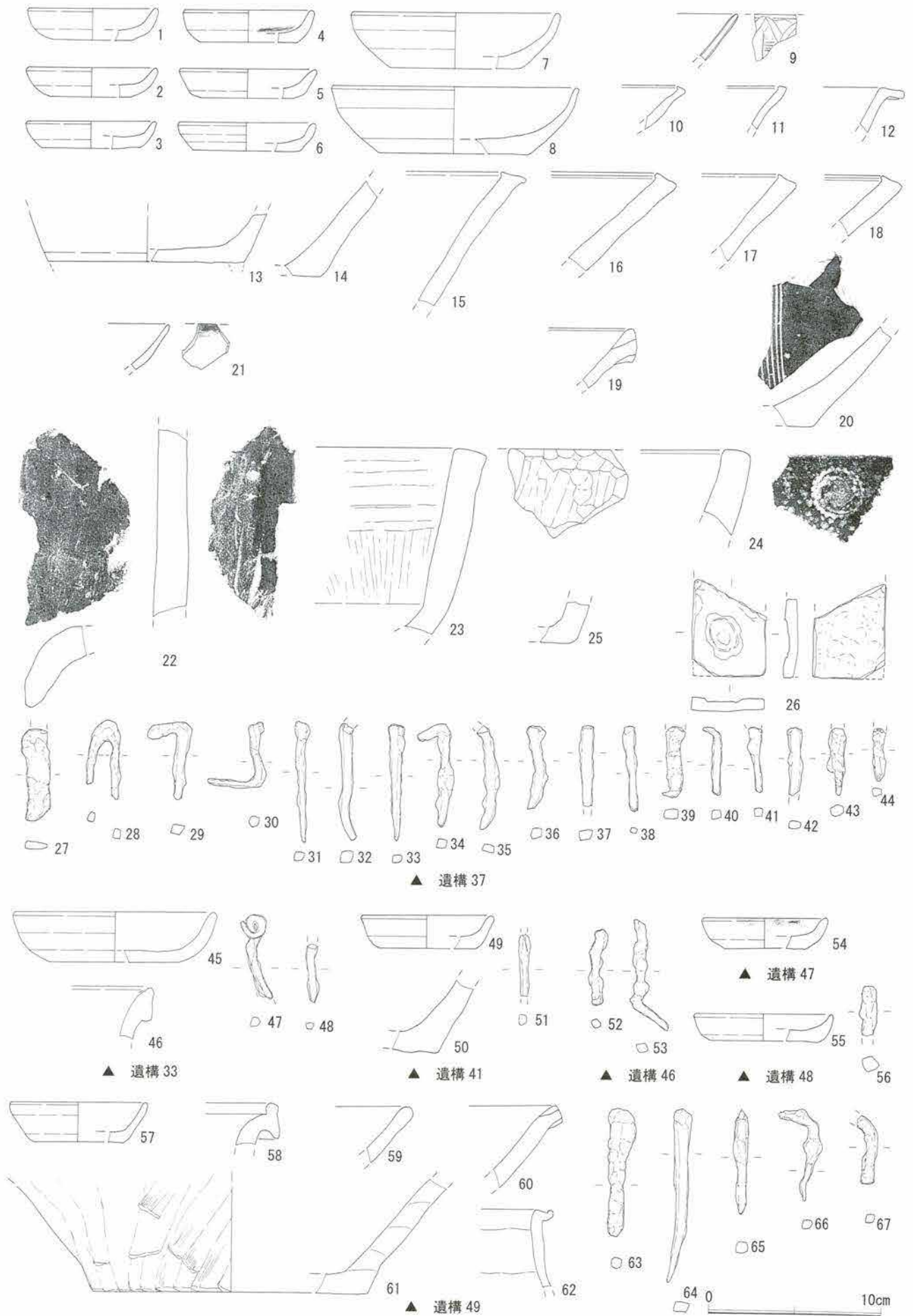


图 14 第 3 面遺構出土遺物 (2)

込んでいることを確認した。覆土は暗褐色砂質土・炭化物多量・破碎泥岩・貝砂・茶褐色砂を含む。

限定された狭小な調査範囲の中で、遺構の様相を確実に掴むことは難しいが、調査区壁の堆積状況の観察から遺構 16 は少なくとも 3 段階に造り替えが行われた方形竪穴建築址と思われる。

出土遺物 (図 13)

12～19 はかわらけ。12 は内面に油煤付着。胎土に小石粒、石英が多く混じる粗い胎土。19 は内面に薄く油煤痕。20 は青磁碗。竜泉窯。外底部露胎。21 は青白磁・梅瓶。22 は常滑窯・甕。23・24 は常滑窯・片口鉢 I 類。25 は山茶碗。26 は瓦質・火鉢。27 は鉄製品・刀子。28 は鉄製品・釘。29 は須恵器・甕。

図示できなかつた遺物は、かわらけ (大) 108。かわらけ (小) 32。土器質・火鉢 1。常滑窯・甕 19。常滑窯・片口鉢 I 類 3。貝。獣骨。実測遺物は、3 時期の遺物を一括で示したが、破片数を示した法量表では、下層・中層・上層の 3 時期に分けて出土遺物を示している。

遺構 18 (図 11)

A-1 グリッド。平面形の実測は出来なかつたが、遺構 16 の下層、同位置にある方形竪穴建築址である。覆土は茶褐色砂質土・茶褐色砂・黒色粘質土をブロック状に含む。遺構底面に不整形ではあるが安山岩 (伊豆石) が出土した。

図示できなかつた遺物は、かわらけ (大) 17。かわらけ (小) 8。常滑窯・甕 2。常滑窯・片口鉢 I 類 1。白磁・口元皿 1。鉄製品・釘 1。石製品・砥石 1。軽石 1。貝。獣骨。

遺構 33 (図 11)

C・D・E-1 グリッド。方形竪穴建築址。上層の遺構 7 と遺構 13・遺構 11 に切られる。調査区外に遺構が延びてしまっているために正確な形状は不明。深さは 14 cm と浅いが、遺構 7 に切られているためである。覆土は暗褐色砂質土・炭化物多量・破碎泥岩粒・細砂・貝砂を含む。

出土遺物 (図 14)

45 はかわらけ。46 は常滑窯・壺。内面火熱によるものか器壁が剥離している。47 は鉄製品・掛け金具。48 は鉄製品・釘。

図示できなかつた遺物は、かわらけ (大) 51。かわらけ (小) 6。貝。骨。

遺構 37 (図 11)

G-2 グリッド。土坑である。遺構 43 に切られる。深さ 103 cm。覆土は暗褐色砂質土・砂質凝灰岩 (焼痕あり)・貝砂・割れた安山岩を含む。

出土遺物 (図 14)

1～8 はかわらけ。4 は内面に油煤痕。灯明皿。8 は内面全体に白色の付着物が残る。9 は青磁・鎚蓮弁文碗。10・11 は瀬戸窯・卸皿。12 は瀬戸窯・折縁深皿。火熱を受けたためか、外面器壁が剥離している。13 は常滑窯・片口鉢 I 類。内面磨耗。高台部は剥離している。14～18 は常滑窯・片口鉢 II 類。14 は内面磨耗。19 は魚住窯・片口鉢。20 は備前窯・播鉢。21 は瓦器碗。22 は男瓦。縄目叩き。凹部布目痕。23～25 は瓦質・火鉢。23 は輪花型。24 は外側面に三つ巴のスタンプ。26 は石製品・砥石。仕上げ砥。産地不明。27 は鉄製品・刀子。28 は不明鉄製品。鉄か。29～44 は鉄製品・釘。

図示できなかつた遺物は、かわらけ (大) 125。かわらけ (小) 36。南伊勢系土鍋 1。瓦 1。瀬戸窯・器種不明 1。常滑窯・甕 33。鉄製品・釘 1。貝。獣骨。

遺構 41 (図 11)

E-2 グリッド。調査区外に遺構が延びているために正確な形状は不明。土坑である。深さ 74 cm。覆土は暗褐色砂質土・炭化物微量・泥岩粒・褐鉄を含む。

出土遺物 (図 14)

49 はかわらけ。50 は常滑窯・甕。51 は鉄製品・釘。

図示できなかつた遺物は、かわらけ (大) 7。かわらけ (小) 5。常滑窯・甕 4。常滑窯・壺 1。鉄製品・釘 1。貝。

遺構 43 (図 12)

G-1・2 グリッド。土坑である。長軸 170 cm・短軸 146 cm・深さ 58 cm。覆土は暗茶褐色砂質土・炭化物多量・破碎泥岩多量・茶褐色砂を含む。

出土遺物 (図 13)

30～33 はかわらけ。30 は内面に薄く油煤付着。34・35 は青磁・鎗蓮弁文碗。竜泉窯。36 は青磁・折縁皿。竜泉窯。37 は白磁・口元皿。38 は黒褐釉・小壺。39 は瀬戸窯・入れ子。40 は常滑窯・甕。41～43 は常滑窯・片口鉢 I 類。44～46 は常滑窯・片口鉢 II 類。47 は亀山窯・甕。48・49 は女瓦。48 は胎土灰茶褐色。49 は胎土灰色。両面に離れ砂付着。50～52 は瓦質・火鉢。50 は外側面に菊花文のスタンプ。外面に磨きが入る。輪花型。51 は外側面に 12 弁の菊花文のスタンプ。53 は鏝鍋。54 は土錘。55～62 は鉄製品・釘。63 は未製品だが、両端に切断痕が残る鹿角である。

図示できなかつた遺物は、かわらけ (大) 93。かわらけ (小) 43。土器質・火鉢 1。常滑窯・甕 31。鉄製品・釘 9。鉄滓 1。

遺構 44 (図 11)

F-1 グリッド。ピットである。長軸 47 cm・短軸 43 cm・深さ 23 cm。覆土は灰褐色砂質土・有機質土少量・暗褐色土を含む。図示できなかつた遺物は、かわらけ (大) 1。

遺構 45 (図 11)

E-1 グリッド。ピットである。長軸 27 cm・短軸 27 cm・深さ 17 cm。覆土は灰褐色砂質土・有機質土少量・炭化物微量を含む。出土遺物はなかつた。

遺構 46 (図 11)

G-2 グリッド。ピットである。遺構 43 に切られる。深さ 47 cm。覆土は暗褐色砂質土・破碎泥岩少量・貝砂・炭化物少量を含む。遺構 48 覆土に近似。

出土遺物 (図 14)

52・53 は鉄製品・釘。図示できなかつた遺物は、かわらけ (大) 11。かわらけ (小) 4。常滑窯・甕 1。渥美窯・甕 1。鉄製品・釘 3。貝。獣骨。

遺構 47 (図 11)

F-2 グリッド。土坑である。調査区外に遺構が延びているために正確な形状は不明。遺構 41 に切られる。深さ 35 cm。覆土は灰褐色砂質土・褐鉄・焼けた石。覆土全体が硬化していた。

出土遺物 (図 14)

54 はかわらけ。内外面に油煤痕。

図示できなかった遺物、かわらけ(大) 5。かわらけ(小) 4。常滑窯・甕 2。渥美窯・甕 1。貝。獣骨。

遺構 48 (図 11)

G-2 グリッド。調査区外に遺構が延びているために正確な形状は不明。土坑である。深さ 52 cm。覆土は暗褐色砂質土・炭化物少量・焼けた石・貝砂を含む。遺構 46 覆土に近似。

出土遺物 (図 14)

55 はかわらけ。56 は鉄製品・釘。図示できなかった遺物は、かわらけ(大) 9。かわらけ(小) 9。瓦質・火鉢 1。鉄製品・釘 1。貝。骨。

遺構 49 (図 11)

H-2 グリッド。遺構 37 に切られ、遺構の大半が調査区外に延びてしまっているために正確な形状は不明。深さ 82 cm。覆土は、茶褐色砂質土・炭化物・貝砂・焼けた石・茶褐色砂を含む。遺構下層に茶褐色有機質土が厚く堆積していた。

出土遺物 (図 14)

57 はかわらけ。58 は常滑窯・甕。59 は常滑窯・片口鉢 I 類。60・61 は常滑窯・片口鉢 II 類。62 は渥美窯・壺。63～67 は鉄製品・釘。図示できなかった遺物は、かわらけ(大) 44。かわらけ(小) 12。瓦質・火鉢 2。褐釉・壺 1。常滑窯・甕 16。常滑窯・片口鉢 I 類 1。渥美窯・甕 1。軽石 1。貝。骨。

遺構 50 (図 11)

G-2 グリッド。土坑である。遺構 48 に切られる。調査区外に遺構が延びてしまっているために正確な形状は不明。深さ 56 cm。覆土は茶褐色砂質土・炭化物・貝砂を含む。土坑底面に茶褐色有機質土が厚く堆積していた。

出土遺物 (図 15)

1～4 はかわらけ。3 は灯明皿。内外面口唇部に油煤付着。5 は青磁・蓮弁文碗。竜泉窯。6・7 は鉄製品・釘。図示できなかった遺物は、かわらけ(大) 15。かわらけ(小) 2。常滑窯・甕 2。

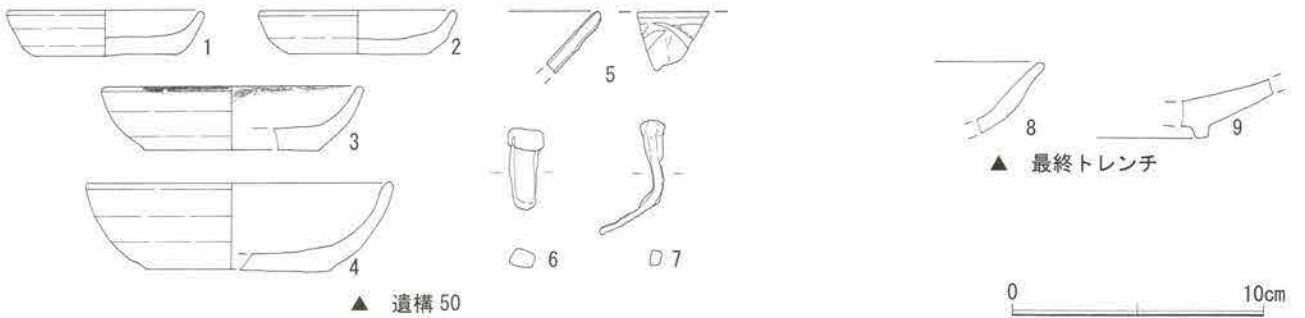


図 15 第 3 面遺構出土遺物 (3)・最終トレンチ出土遺物

最終トレンチ出土遺物 (図 15)

8 は手づくねかわらけ。9 は瀬戸窯・碗。

表採・攪乱出土遺物 (図 16)

1～27 はかわらけ。7・11・15・22・27 は灯明皿。11 は内外面に薄く油煤痕。7・15・22 は内外面

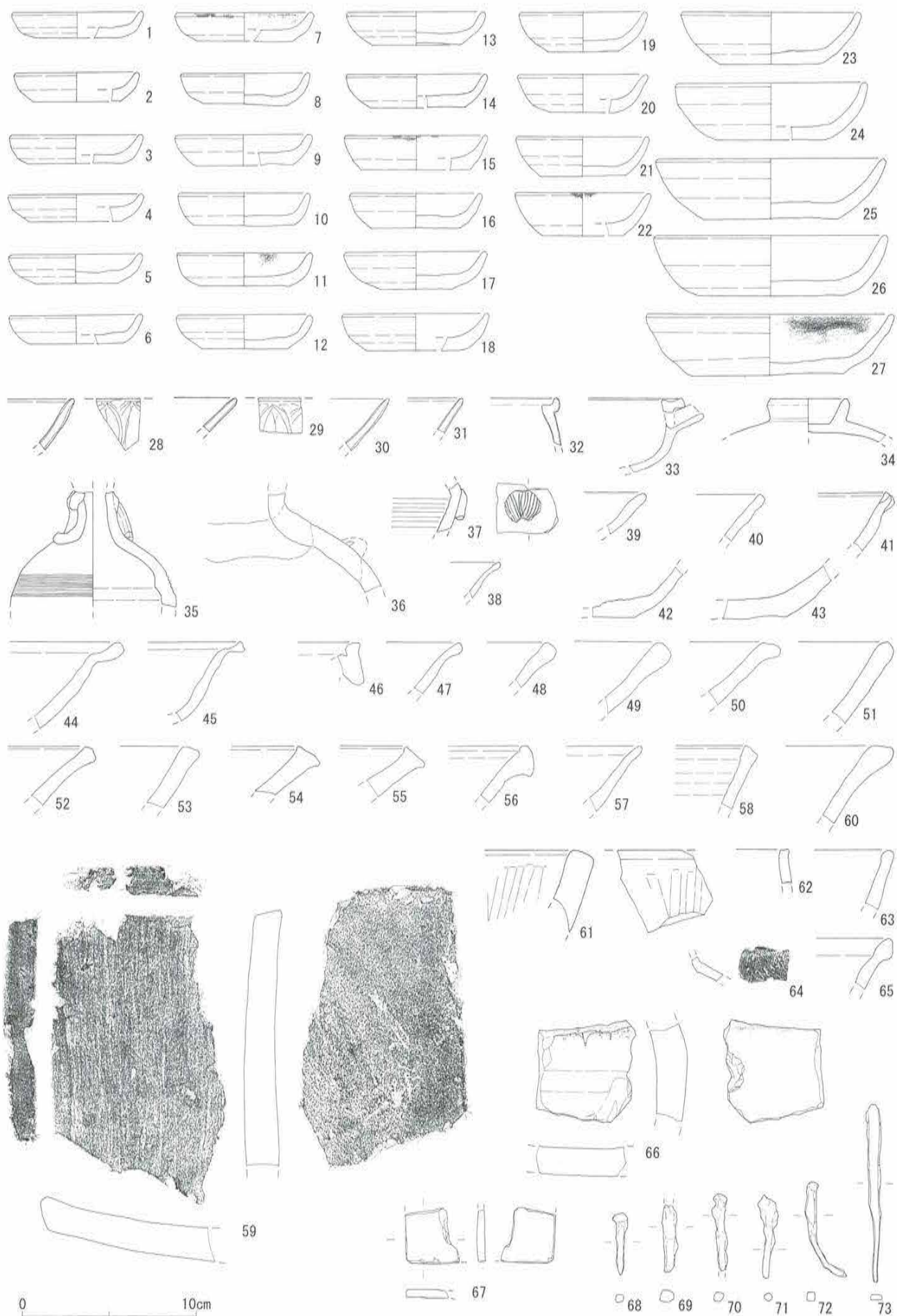


图 16 表探·搅乱出土遺物

口唇部に油煤痕。27 は内面全体に油煤痕。28 ～ 30 は青磁・鎬蓮弁文碗。竜泉窯。31 は青磁・無文碗。竜泉窯。32 は肥前・蓋物。近世。33 ～ 45 は瀬戸窯製品。33 は急須。近世。34 は蓋。胎土黄白色。近代。35 は華瓶。頸部に環がつく。36 は四耳壺。肩部に沈線が巡る。37 は小壺。肩部に蓮の花状に櫛描きで線刻した粘土塊付着。38 は入れ子。内面に薄く赤色の顔料付着。紅か。39 は縁袖小皿。40 ～ 42 は卸皿。43 は盤。44・45 は折縁深皿。46 ～ 55 は常滑窯製品。46 は甕。47 ～ 52 は片口鉢Ⅰ類。53 ～ 55 は片口鉢Ⅱ類。56 は魚住窯・片口鉢。57 は山茶碗。58 は瓦質・香炉。近世。59 は女瓦。斜格子の叩き。60・61 は瓦質火鉢。60 は近世の製品。62 は南伊勢系土鍋。63 はかわらけ質・焼き塩壺。近代。64・65 は土師器・甕。66 は不明土製品。鋳型の破片か。一部黒く炭化している。67 は石製品・砥石。仕上げ砥・鳴滝産。68 ～ 73 は鉄製品・釘。

第4章 まとめ

本調査地の位置する「長谷小路周辺遺跡」は、調査地前を東西に走る県道鎌倉葉山線 311 号の北側に面する。この道路は、鎌倉市街地の南に広がる由比ガ浜からなだらかに上る砂丘帯の北限ともいえ、砂丘帯の頂部に位置し、道路を界に北に向かって緩やかに上がる。

本調査は非常に幅の狭い範囲での調査区であったために、発見した遺構の大半が調査区外に延びてしまい、正確な形状を確認できなかった。また、事業計画による掘削深度制限などから、下層の遺構および調査区の土層堆積の様相を明らかにすることができなかった。

以下、発見した遺構・遺物について簡単なまとめを行いたい。

検出した遺構

表土を取り除いた、中世基盤層である灰褐色砂の砂層上で 3 期に亘る遺構を検出した。第 2 章で述べたように、遺構は地業あるいは整地層からの掘り込みではないために、調査区全体に広がる遺構プランを、その覆土の違いと切りあいによって 3 枚の生活面に分けて報告している。発見した遺構は方形竪穴建築址、土坑、ピット、柱穴である。

第 1 面では、上層の攪乱によって調査区内が大きく削平を受けており数穴のピットしか確認できなかった。第 2 面、第 3 面では、おそらく方形竪穴建築址であろうと考えているやや深めの掘り込みを持つ竪穴状の遺構と、直径約 1m を測る大きな円形を呈する土坑を多く確認している。この土坑の性格は不明だが、覆土中に焼痕のある安山岩・砂質凝灰岩が出土していることや、出土した炭も 3 cm から 5 cm と大き目の木材の焼け残りであり、調査区周辺での火事場の後片付け用の穴かとも考えられる。方形竪穴建築址の軸方位などの確認はできなかったが、調査地前面に東西方向に走る長谷小路（現県道鎌倉葉山 311 号線）に並ぶと思われる。

周辺の調査成果から、中世基盤層の砂層下に広がる黒褐色弱粘質砂層からは、弥生時代後期～古墳時代前期と平安時代前期の竪穴住居址と祭祀遺構や、古代（奈良・平安）の竪穴住居・墓址を伴う集落が発見されているが、本調査では掘削深度の制限により下層を掘り下げて確認できなかった。狭い範囲での推測ではあるが、確認できた黒褐色弱粘質土層の検出レベルから、土層堆積は調査区内では北から南に向かって傾斜していたと思われる。

出土した遺物

出土した遺物は整理箱で総計 10 箱を数え、出土量は少ない。その内、貝は 3 箱。動物遺体（人骨・獣骨・魚骨）は 1 箱であり、出土遺物の約 4 割が自然遺物で占められていた。

採集した貝の内訳を見ると（表 1）、方形竪穴建築址である遺構 16 からの出土量が群を抜いている。これまでの周辺遺跡の成果から、方形竪穴建築址や竪穴状遺構といった比較的大きな遺構が廃絶後に埋没する過程において、貝が多く覆土内に混入する傾向があることが分かっており、遺構 16 もその例である。

出土した貝の種別としては、キサゴ（452）、チョウセンハマグリ（431）の出土量が多い。次いで、ダンベイキサゴ（86）、アカニシ（48）、バイ（42）、サザエを有棘、無棘、蓋をそれぞれサザエ種 1 個体と数えると 39 個となり、バイに続いて多く出土している。また、ハマグリ 23 個をハマグリ種として、チョウセンハマグリに足すと 454 個となる。チョウセンハマグリとハマグリに関しては、中世基盤砂層

内と同一遺構内で貝合わせを行ってみたが、左右片側だけの出土であった。アカニシに関しては口唇部とその反対側が大きく打ち砕かれており、身を取り出した痕がわかる。貝類は調査時に廃土に紛れる事が多く、全ての貝を採集できたわけではないが、調査区全体の出土貝類の割合としてはほぼ正確な数値が出ていると考えている。現段階では出土した貝類の採集地、流通経路および流通方法、調理法など不明な点が多く、鎌倉市街地遺跡で出土した自然遺物についての資料も少ないため、今後の調査成果の蓄積を待ちたい。動物遺体である骨に関しては、浅薄な知識では正確に同定できないと判断したため、本報告では種別や部位などを示すことができなかつたことをお詫びする。

そのほかの出土遺物の大半は、轆轤成型のかわらけである。第1面構成土出土のかわらけには、胎土が精緻で粉質。薄手の器壁がやや内湾して立ち上がる薄手丸深と呼ばれるかわらけに近似したかわらけが出土している。(図6-33・図6-31)

また、実測して提示した以外にも釘の出土が目立ち、確認した方形堅穴建築址以外にも建物の存在を感じさせた。

遺跡の変遷

調査地の遺跡名である長谷小路は、県道鎌倉葉山線311号の内、現在の長谷寺から六地藏までの道筋を指すが、由比ガ浜に面する海浜地区から調査地周辺までの町並みが整えられていくのは13世紀半ば以降であることが周辺の調査成果から知られている。また、本調査地近辺では工人の存在をうかがわせる加工途中の骨、石材。鞆の羽口、錐、鑿などの工具が発見されているが、今回の調査では遺構の性格を推測できるような遺物は発見できなかった。

本調査では、第1面から3面の3期に分けた遺構面を確認した。各面の遺構は出土遺物を観察すると、大きな時期差を感じることは無く、短期間に建物などの遺構が造られたと思われるが、第3面・第2面とした黒褐色弱粘質土を掘り込んでいる遺構は13世紀半ば以降。第1面は14世紀前半であったと考えている。

参考文献

- | | | |
|--------------------|-------|-----------------|
| 『鎌倉の古道』(鎌倉国宝館論集第二) | 1958年 | 阿部正道 |
| 『鎌倉市史』総説編 | 1972年 | 鎌倉市史編纂委員会 吉川弘文館 |
| 『鎌倉市史』考古編 | 1967年 | 吉川弘文館 |
| 『鎌倉事典』白井永二 | 1987年 | 東京堂出版 |
| 『鎌倉廃寺事典』 | 1980年 | 有隣堂 貫達人 川副武胤 |
| 『日本出土銭総覧』 | 1996年 | 兵庫県埋蔵銭調査会 永井久美男 |
| 『学研生物図鑑』貝Ⅰ・貝Ⅱ | 1991年 | 株学習研究社 |

法量表

図版No.	遺物No.	面	遺構名	種別・器種	口径	底径	器高	
図5	1	第1面	遺構21	鉄製品・釘	長5.7	幅0.5	厚0.4	
	2		遺構24	鉄製品・釘	長4.6	幅0.8	厚0.5	
	3		遺構27	石製品・硯	長(6.8)	幅(6.1)	厚1.2	
	4		遺構28	かわらけ	(7.4)	(4.6)	1.8	
	5		遺構28	白磁・口元皿	(9.6)	(5.8)	2.6	
	6		遺構28	常滑窯・片口鉢Ⅰ類				
	7		遺構28	土製品・円盤状	直径約3.4		厚0.7	
図6	1	第1面	面上	かわらけ	7.8	5.8	1.5	
	2		面上	かわらけ	7.6	4.9	1.8	
	3		面上	かわらけ	(7.4)	5.1	1.5	
	4		面上	かわらけ	7.8	5.6	1.5	
	5		面上	かわらけ	(8.2)	(6.0)	1.6	
	6		面上	かわらけ	7.6	5.8	1.7	
	7		面上	かわらけ	(7.9)	5.2	1.8	
	8		面上	かわらけ	8.0	4.8	1.8	
	9		面上	かわらけ	8.0	5.9	2.1	
	10		面上	かわらけ	7.3	4.6	2.2	
	11		面上	かわらけ	7.2	4.3	2.2	
	12		面上	かわらけ	10.8	7.0	3.0	
	13		面上	かわらけ	(11.6)	(8.2)	3.2	
	14		面上	青磁・折縁皿				
	15		面上	青白磁・梅瓶				
	16		面上	常滑窯・甕				
	17		面上	常滑窯・片口鉢Ⅰ類				
	18		面上	常滑窯・片口鉢Ⅰ類				
	19		面上	常滑窯・片口鉢Ⅰ類				
	20		面上	常滑窯・片口鉢Ⅰ類				
	21		面上	石製品・砥石	長(4.6)	幅3.6	厚0.7	
	22		面上	石製品・砥石	長(4.2)	幅3.2	厚1.7	
	23		面上	鉄製品・刀子	長(18.6)	幅2.6	厚1.1	
	24		面上	鉄製品・刀子	長(6.4)	幅1.5	厚0.35	
	25		面上	鉄製品・不明	長(4.2)	幅0.9	厚0.8	
	26		第1面	構成土	かわらけ	(7.0)	4.8	1.5
	27			構成土	かわらけ	(7.4)	(5.6)	1.4
	28			構成土	かわらけ	(7.6)	5.2	1.8
	29			構成土	かわらけ	(8.0)	(5.8)	1.8
	30			構成土	かわらけ	6.7	4.1	2.0
	31			構成土	かわらけ	7.1	4.0	2.3
	32			構成土	かわらけ	7.4	4.5	2.0
	33			構成土	かわらけ	10.6	5.6	3.6
34	構成土	かわらけ		12.0	7.9	3.3		
35	構成土	かわらけ		(12.6)	(8.6)	3.1		
36	構成土	かわらけ		(13.0)	(8.2)	3.4		
37	構成土	かわらけ		13.6	7.6	3.4		
38	構成土	青磁・鎚蓮弁文碗						
39	構成土	青磁・鎚蓮弁文碗						
40	構成土	青磁・折縁皿						
41	構成土	瀬戸窯・小壺		2.2	3.6	4.2		
42	構成土	瀬戸窯・折縁深皿						
43	構成土	瀬戸窯・卸皿						
44	構成土	常滑窯・甕						
45	構成土	常滑窯・甕						
46	構成土	常滑窯・片口鉢Ⅰ類						
47	構成土	常滑窯・片口鉢Ⅰ類						
48	構成土	常滑窯・片口鉢Ⅰ類						
49	構成土	常滑窯・片口鉢Ⅰ類						
50	構成土	常滑窯・片口鉢Ⅰ類						
51	構成土	常滑窯・片口鉢Ⅱ類						
52	構成土	瓦質・火鉢						
53	構成土	瓦質・火鉢						
54	構成土	土製品・土錘		長3.5	径1.1	内径0.3		
55	構成土	滑石鍋転用品		長(5.4)	幅(4.0)	厚1.9		
56	構成土	鉄製品・釘		長5.5	幅0.6	厚0.6		
57	構成土	鉄製品・釘		長6.2	幅1.0	厚0.6		
58	構成土	鉄製品・釘		長6.4	幅0.7	厚0.5		
59	構成土	鉄製品・釘	長6.0	幅0.7	厚0.4			
60	構成土	鉄製品・釘	長5.7	幅0.6	厚0.5			

図版No.	遺物No.	面	構成	名	種別	口径	底径	器高	
図6	61	第1面	構成	土	種別	口径	底径	器高	
	62		構成	土	種別	口径	底径	器高	
	63		構成	土	種別	口径	底径	器高	
	64		構成	土	種別	口径	底径	器高	
	65		構成	土	種別	口径	底径	器高	
	66		構成	土	種別	口径	底径	器高	
	67		構成	土	種別	口径	底径	器高	
	68		構成	土	種別	口径	底径	器高	
	69		構成	土	種別	口径	底径	器高	
	70		構成	土	種別	口径	底径	器高	
	71		構成	土	種別	口径	底径	器高	
	72		構成	土	種別	口径	底径	器高	
	73		構成	土	種別	口径	底径	器高	
	74		構成	土	種別	口径	底径	器高	
75	構成	土	種別	口径	底径	器高			
76	構成	土	種別	口径	底径	器高			
77	構成	土	種別	口径	底径	器高			
78	構成	土	種別	口径	底径	器高			
79	構成	土	種別	口径	底径	器高			
80	構成	土	種別	口径	底径	器高			
81	構成	土	種別	口径	底径	器高			
82	構成	土	種別	口径	底径	器高			
83	構成	土	種別	口径	底径	器高			
図9	1	第2面	遺構	7	かわらけ	(4, 2)	(3, 2)	0, 7	
	2		遺構	7	かわらけ	(6, 8)	(4, 4)	1, 6	
	3		遺構	7	かわらけ	(7, 8)	(6, 2)	1, 7	
	4		遺構	7	かわらけ	(8, 0)	(5, 8)	2, 0	
	5		遺構	7	かわらけ	7, 8	5, 3	1, 8	
	6		遺構	7	かわらけ	(12, 6)	(8, 0)	3, 4	
	7		遺構	7	かわらけ	(13, 0)	(9, 4)	3, 1	
	8		遺構	7	かわらけ	(12, 8)	(7, 6)	3, 4	
	9		遺構	7	常滑窯・片口鉢	I類			
	10		遺構	7	常滑窯・片口鉢	I類		(13, 4)	
	11		遺構	7	常滑窯・片口鉢	I類			
	12		遺構	7	常滑窯・片口鉢	I類			
	13		遺構	7	常滑窯・片口鉢	II類			
	14		遺構	7	備前・すり鉢				
	15		遺構	7	魚住・片口鉢				
	16		遺構	7	南伊勢系土鍋				
	17		遺構	7	鋳鍋				
	18		遺構	7	瓦質・火鉢				
	19		遺構	7	骨製品・火鉢		長14, 0	幅1, 7	厚0, 35
	20		遺構	7	骨製品・火鉢		長(6, 8)	幅(1, 2)	厚0, 2
	21		遺構	7	須恵器・甕				
	22		遺構	8	かわらけ		(7, 6)	(5, 6)	1, 7
	23		遺構	8	かわらけ		(7, 6)	(4, 4)	1, 9
	24		遺構	8	鉄製品・釘		長7, 4	幅0, 5	厚0, 6
	25		遺構	9	かわらけ		(6, 7)	(4, 4)	2, 2
	26		遺構	9	かわらけ		(7, 6)	(4, 6)	2, 7
	27		遺構	9	白磁・口元皿				
	28		遺構	9	常滑窯・壺				
	29		遺構	9	常滑窯・壺				
	30		遺構	9	常滑窯・片口鉢	I類			
	31		遺構	9	常滑窯・片口鉢	II類			
	32		遺構	9	山茶碗				
	33		遺構	9	山茶碗				
	34		遺構	9	瓦質・火鉢				
35	遺構	9	鉄製品・釘		長(3, 5)	幅0, 5	厚0, 6		
36	遺構	9	鉄製品・釘		長(5, 6)	幅0, 7	厚0, 8		
37	遺構	10	かわらけ		(7, 6)	(4, 6)	2, 2		
38	遺構	12	かわらけ		(7, 6)	(5, 2)	1, 9		
39	遺構	12	かわらけ		(6, 8)	(4, 6)	1, 9		
40	遺構	12	かわらけ		(7, 4)	(5, 2)	1, 4		
41	遺構	12	かわらけ		(7, 5)	(5, 8)	1, 4		
42	遺構	12	かわらけ		12, 8	7, 9	3, 9		
43	遺構	12	常滑窯・甕						
44	遺構	12	常滑窯・片口鉢	I類					

図版No.	遺物No.	面	遺構名	種別・器種	口径	底径	器高	
図9	45	第2面	遺構12	常滑窯・片口鉢Ⅰ類				
	46		遺構12	常滑窯・片口鉢Ⅰ類				
	47	遺構12	常滑窯・片口鉢Ⅰ類					
	48	遺構12	須恵器・甕					
	49	遺構31	かわらけ		7.9	6.0	1.6	
	50	遺構31	かわらけ		(11.6)	(7.6)	3.1	
	51	遺構31	石製品・砥石		長(6.9)	幅(2.2)	厚2.4	
	52	遺構31	石		長(10.6)	幅(8.8)	厚(1.6)	
	53	遺構31	鉄製品・釘		長4.9	幅0.7	厚0.4	
	54	遺構31	鉄製品・釘		長(4.5)	幅0.5	厚0.3	
	55	遺構31	鉄製品・釘		長(4.8)	幅0.6	厚0.5	
	56	遺構31	鉄製品・釘		長(2.8)	幅0.5	厚0.5	
	57	遺構31	鉄製品・釘		長4.5	幅0.4	厚0.3	
図10	1	第2面	遺構29	かわらけ	(7.2)	幅0.11	1.5	
	2		遺構29	かわらけ	(7.6)	幅0.12	2.2	
	3	遺構29	かわらけ	(13.2)	幅0.13	3.8		
	4	遺構29	青磁・香炉					
	5	遺構29	青白磁・口元皿					
	6	遺構29	白磁・口元皿					
	7	遺構29	白磁・口元皿					
	8	遺構29	瀬戸窯・柄付片口鍋					
	9	遺構29	常滑窯・甕					
	10	遺構29	常滑窯・片口鉢Ⅰ類					
	11	遺構29	常滑窯・片口鉢Ⅰ類					
	12	遺構29	常滑窯・片口鉢Ⅱ類					
	13	遺構29	石製品・滑石スタンプ		長(3.7)	幅(5.3)	厚3.1	
	14	遺構29	女瓦				厚2.0	
	15	遺構32	かわらけ		7.2	4.8	1.5	
	16	遺構32	かわらけ		8.0	6.2	1.6	
	17	遺構32	かわらけ		(7.2)	(4.2)	2.3	
	18	遺構32	かわらけ		(7.4)	(4.4)	2.2	
	19	遺構32	瀬戸窯・卸皿					
	20	遺構32	魚住・片口鉢					
	21	遺構32	魚住・片口鉢		(22.0)			
	22	遺構32	瓦質・火鉢					
	23	遺構32	石製品・砥石		長(4.3)	幅2.0	厚1.2	
	24	遺構32	鉄製品・釘		長4.1	幅0.4	厚0.5	
	25	遺構32	鉄製品・釘		長(5.5)	幅0.6	厚0.5	
	26	遺構32	鉄製品・釘		長5.6	幅0.4	厚0.5	
	27	遺構32	鉄製品・釘		長7.6	幅0.7	厚0.7	
	28	遺構32	鉄製品・釘		長7.0	幅0.6	厚0.4	
	29	遺構32	鉄製品・釘		長8.5	幅0.6	厚0.6	
	30	遺構32	土師器・坏					
	31	遺構35	常滑窯・片口鉢Ⅱ類					
	32	遺構35	石製品・砥石		長(4.1)	幅3.2	厚0.8	
	33	遺構40	かわらけ		(6.8)	(5.6)	1.4	
	34	遺構40	瀬戸窯・卸皿					
図13	1	第3面	遺構11	かわらけ	(6.8)	(5.4)	1.5	
	2		遺構11	かわらけ	(7.6)	(6.0)	1.6	
	3	遺構11	かわらけ	(7.2)	(5.0)	1.7		
	4	第3面	遺構11	かわらけ	(7.8)	(5.4)	2.0	
	5		遺構13	かわらけ	(7.4)	(5.6)	1.6	
	6		遺構13	かわらけ	(8.6)	(6.0)	2.0	
	7		遺構13	かわらけ	(11.6)	(7.4)	3.2	
	8		遺構13	かわらけ	(12.6)	(8.4)	3.2	
	9		遺構13	白磁・口元皿				
	10		遺構13	常滑窯・片口鉢Ⅰ類				
	11		遺構13	石製品・硯		長(5.3)	幅(7.2)	厚1.0
	12		遺構16	かわらけ		(7.2)	4.6	1.9
	13		遺構16	かわらけ		(7.4)	(5.6)	1.5
	14	遺構16	かわらけ		(7.8)	(4.8)	1.7	
	15	遺構16	かわらけ		(8.2)	(5.6)	1.7	
	16	遺構16	かわらけ		8.3	5.8	1.6	
	17	遺構16	かわらけ		(13.8)	(10.0)	3.4	
18	遺構16	かわらけ		(13.0)	(7.0)	3.3		
19	遺構16	かわらけ		12.4	6.9	3.3		
20	遺構16	青磁・碗			(6.0)			

図版No.	遺物No.	面	遺構名	種別	器種	口径	底径	器高	
図13	21	第3面	遺構16	青白磁	梅瓶				
			遺構16	常滑窯	甕				
			遺構16	常滑窯	片口鉢 I 類				
			遺構16	常滑窯	片口鉢 I 類				
			遺構16	山	茶碗				
			遺構16	瓦質	火鉢				
			遺構16	鉄製品	刀子	長(16, 0)	幅2.0	厚0.6	
			遺構16	鉄製品	釘	長(4, 0)	幅0.5	厚0.6	
			遺構16	須恵器	甕				
			遺構43	かわらけ		(7, 0)	4, 4	2, 3	
			遺構43	かわらけ		(7, 4)	4, 4	2, 4	
			遺構43	かわらけ		(7, 4)	(5, 0)	1, 9	
			遺構43	かわらけ		(7, 6)	(4, 0)	2, 0	
			遺構43	青磁	鎚蓮弁文碗				
			遺構43	青磁	鎚蓮弁文碗				
			遺構43	青磁	折縁皿		(6, 4)		
			遺構43	白磁	口兀皿				
			遺構43	黒褐釉	小壺				
			遺構43	瀬戸窯	入れ子		(4, 0)		
			遺構43	常滑窯	甕				
			遺構43	常滑窯	片口鉢 I 類				
			遺構43	常滑窯	片口鉢 I 類				
			遺構43	常滑窯	片口鉢 I 類				
			遺構43	常滑窯	片口鉢 II 類				
			遺構43	常滑窯	片口鉢 II 類				
			遺構43	常滑窯	片口鉢 II 類				
			遺構43	常滑窯	片口鉢 II 類				
			遺構43	常滑窯	片口鉢 II 類				
			遺構43	常滑窯	片口鉢 II 類				
			遺構43	龜山	甕				
			遺構43	女瓦				厚(3, 6)	
			遺構43	女瓦				厚1, 6	
			遺構43	瓦質	火鉢				
			遺構43	瓦質	火鉢				
			遺構43	瓦質	火鉢				
			遺構43	南伊勢系	土鍋				
			遺構43	土製品	土錘	長4, 1	径1, 6	内径0, 5	
			遺構43	鉄製品	釘	長(3, 0)	幅0, 8	厚0, 7	
			遺構43	鉄製品	釘	長(3, 4)	幅0, 6	厚0, 4	
			遺構43	鉄製品	釘	長4, 8	幅0, 7	厚0, 8	
			遺構43	鉄製品	釘	長4, 7	幅0, 7	厚0, 7	
			遺構43	鉄製品	釘	長(4, 6)	幅0, 8	厚0, 7	
			遺構43	鉄製品	釘	長4, 9	幅0, 5	厚0, 7	
			遺構43	鉄製品	釘	長5, 3	幅0, 5	厚0, 8	
			遺構43	鉄製品	釘	長5, 9	幅0, 6	厚0, 6	
			遺構43	骨製品	未製品				
			図14	1	第3面	遺構37	かわらけ		(7, 4)
遺構37	かわらけ					(7, 4)	(4, 8)	1, 7	
遺構37	かわらけ					(7, 4)	(5, 8)	1, 6	
遺構37	かわらけ					(7, 4)	(5, 6)	1, 7	
遺構37	かわらけ					(7, 8)	(5, 4)	1, 7	
遺構37	かわらけ					(7, 8)	(6, 2)	1, 6	
遺構37	かわらけ					(11, 8)	(7, 6)	3, 1	
遺構37	かわらけ					(14, 2)	(8, 8)	3, 8	
遺構37	青磁	鎚蓮弁文碗							
遺構37	瀬戸窯	卸皿							
遺構37	瀬戸窯	卸皿							
遺構37	瀬戸窯	折縁深皿							
遺構37	常滑窯	片口鉢 I 類							
遺構37	常滑窯	片口鉢 II 類							
遺構37	常滑窯	片口鉢 II 類							
遺構37	常滑窯	片口鉢 II 類							
遺構37	常滑窯	片口鉢 II 類							
遺構37	常滑窯	片口鉢 II 類							
遺構37	魚住	片口鉢							
遺構37	備前	すり鉢							
遺構37	瓦器	碗							
遺構37	男瓦							厚1, 8	
遺構37	瓦質	火鉢							
遺構37	瓦質	火鉢							

図版No.	遺物No.	面	遺構名	種別・器種	口径	底径	器高	
図14	25	第3面	遺構37	瓦質・火鉢				
	26		遺構37	石製品・砥石	長(4, 6)	幅4, 2	厚0, 7	
	27		遺構37	鉄製品・刀子	長(5, 4)	幅1, 3	厚0, 4	
	28		遺構37	鉄製品・不明	長(4, 7)	幅0, 5	厚0, 5	
	29		遺構37	鉄製品・釘	長6, 5	幅0, 7	厚0, 6	
	30		遺構37	鉄製品・釘	長6, 5	幅0, 6	厚0, 5	
	31		遺構37	鉄製品・釘	長7, 1	幅0, 5	厚0, 5	
	32		遺構37	鉄製品・釘	長(6, 8)	幅0, 6	厚0, 7	
	33		遺構37	鉄製品・釘	長6, 7	幅0, 6	厚0, 5	
	34		遺構37	鉄製品・釘	長7, 0	幅0, 6	厚0, 5	
	35		遺構37	鉄製品・釘	長(6, 1)	幅0, 7	厚0, 4	
	36		遺構37	鉄製品・釘	長4, 9	幅0, 6	厚0, 6	
	37		遺構37	鉄製品・釘	長(4, 7)	幅0, 7	厚0, 5	
	38		遺構37	鉄製品・釘	長5, 1	幅0, 3	厚0, 2	
	39		遺構37	鉄製品・釘	長(4, 2)	幅0, 8	厚0, 5	
	40		遺構37	鉄製品・釘	長4, 2	幅0, 5	厚0, 5	
	41		遺構37	鉄製品・釘	長(3, 9)	幅0, 4	厚0, 5	
	42		遺構37	鉄製品・釘	長3, 9	幅0, 6	厚0, 5	
	43		遺構37	鉄製品・釘	長(4, 0)	幅0, 7	厚0, 7	
	44		遺構37	鉄製品・釘	長(3, 1)	幅0, 5	厚0, 5	
	45		遺構33	かわらけ		(11, 6)	(7, 6)	2, 9
	46		遺構33	常滑窯・壺				
	47		遺構33	鉄製品・金具		長(5, 0)	幅0, 6	厚0, 5
	48		遺構33	鉄製品・釘		長(3, 5)	幅(0, 4)	厚0, 3
	49		遺構41	かわらけ		(7, 4)	(5, 6)	1, 9
	50		遺構41	常滑窯・甕				
	51		遺構41	鉄製品・釘		長(3, 6)	幅0, 5	厚0, 6
	52		遺構46	鉄製品・釘		長4, 4	幅0, 6	厚0, 5
	53		遺構46	鉄製品・釘		長7, 3	幅0, 6	厚0, 5
	54		遺構47	かわらけ		(7, 2)	(4, 6)	1, 8
	55		遺構48	かわらけ		(7, 8)	(6, 2)	1, 5
	56		遺構48	鉄製品・釘		長2, 8	幅0, 9	厚0, 9
	57		遺構49	かわらけ		(7, 8)	(5, 2)	2, 3
	58		遺構49	常滑窯・甕				
	59		遺構49	常滑窯・片鉢 I 類				
	60		遺構49	常滑窯・片鉢 II 類				
	61		遺構49	常滑窯・片鉢 II 類				
62	遺構49	渥美窯・壺						
63	遺構49	鉄製品・釘		長7, 6	幅0, 6	厚0, 6		
64	遺構49	鉄製品・釘		長10, 2	幅0, 8	厚0, 5		
65	遺構49	鉄製品・釘		長6, 1	幅0, 7	厚0, 6		
66	遺構49	鉄製品・釘		長6, 3	幅0, 5	厚0, 5		
67	遺構49	鉄製品・釘		長4, 0	幅0, 4	厚0, 5		
図15	1	第3面	遺構50	かわらけ	(7, 6)	5, 8	1, 8	
	2		遺構50	かわらけ	(7, 6)	5, 6	1, 7	
	3		遺構50	かわらけ	(10, 2)	(7, 0)	2, 5	
	4		遺構50	かわらけ	(12, 0)	(7, 8)	3, 3	
	5		遺構50	青磁・鎚蓮弁文碗				
	6	遺構50	鉄製品・釘		長3, 1	幅1, 0	厚0, 7	
	7	遺構50	鉄製品・釘		長5, 6	幅0, 4	厚0, 6	
	8	最終トレンチ	手つくね					
	9		瀬戸窯・碗					
図16	1	表採・攪乱	かわらけ		(7, 4)	(5, 2)	1, 5	
	2		かわらけ		(7, 0)	(5, 0)	1, 7	
	3		かわらけ		(7, 6)	(5, 5)	1, 6	
	4		かわらけ		(7, 6)	(5, 4)	1, 6	
	5		かわらけ		(7, 4)	(4, 8)	1, 6	
	6		かわらけ		(7, 6)	(5, 4)	1, 6	
	7		かわらけ		(7, 8)	(5, 6)	1, 6	
	8		かわらけ		7, 2	4, 8	1, 8	
	9		かわらけ		(7, 6)	(5, 6)	1, 7	
	10		かわらけ		(7, 4)	(5, 8)	1, 9	
	11		かわらけ		7, 6	5, 0	1, 4	
	12		かわらけ		(7, 6)	(5, 0)	1, 9	
	13		かわらけ		(7, 8)	(5, 0)	1, 9	
	14		かわらけ		(7, 8)	(5, 4)	2, 0	
	15		かわらけ		(8, 0)	(6, 4)	2, 0	

図版No.	遺物No.	遺構名	種別・器種	口径	底径	器高
図16	16	表採・攪乱	かわらけ	(7, 4)	(5, 0)	1.9
	17		かわらけ	(8, 0)	(4, 2)	2.1
	18		かわらけ	(8, 2)	(5, 6)	2.1
	19		かわらけ	(7, 2)	(4, 0)	2.3
	20		かわらけ	(7, 4)	(4, 0)	2.1
	21		かわらけ	(7, 4)	(4, 8)	2.3
	22		かわらけ	(7, 6)	(4, 6)	2.5
	23		かわらけ	(10, 2)	(6, 0)	3.0
	24		かわらけ	(10, 8)	(6, 4)	3.2
	25		かわらけ	(13, 0)	(7, 6)	3.5
	26		かわらけ	(13, 2)	(8, 4)	3.4
	27		かわらけ	13.9	8.8	3.5
	28		青磁・鎬蓮弁文碗			
	29		青磁・鎬蓮弁文碗			
	30		青磁・鎬蓮弁文碗			
	31		青磁・無文碗			
	32		肥前・蓋物			
	33		瀬戸・窯・急須			
	34		瀬戸・窯・蓋			
	35		瀬戸・窯・華瓶			
	36		瀬戸・窯・四耳壺			
	37		瀬戸・窯・瓶子			
	38		瀬戸・窯・入れ子			
	39		瀬戸・窯・縁釉小皿			
	40		瀬戸・窯・卸皿			
	41		瀬戸・窯・卸皿			
	42		瀬戸・窯・卸皿			
	43		瀬戸・窯・皿			
	44		瀬戸・窯・折縁深皿			
	45		瀬戸・窯・折縁深皿			
	46		常滑・窯・甕			
	47		常滑・窯・片口鉢 I 類			
	48		常滑・窯・片口鉢 I 類			
	49		常滑・窯・片口鉢 I 類			
	50		常滑・窯・片口鉢 I 類			
	51		常滑・窯・片口鉢 I 類			
	52		常滑・窯・片口鉢 I 類			
	53		常滑・窯・片口鉢 II 類			
	54		常滑・窯・片口鉢 II 類			
	55		常滑・窯・片口鉢 II 類			
	56		魚住・片口鉢			
	57		山茶碗			
	58		瓦質・香炉			
	59		女瓦質			厚1.8
	60		瓦質・火鉢			
	61		瓦質・火鉢			
	62		南伊勢系土鍋			
	63		かわらけ質・焼き塩壺			
	64		土師器・甕			
	65		土師器・甕			
	66		土製品・銚子型?			厚1.5
	67		石製品・砥石	長(3.1)	幅(3.0)	厚0.5
	68		鉄製品・釘	長3.6	幅0.4	厚0.5
	69		鉄製品・釘	長(4.0)	幅0.7	厚0.7
	70		鉄製品・釘	長4.5	幅0.5	厚0.5
	71		鉄製品・釘	長4.9	幅0.5	厚0.4
	72		鉄製品・釘	長6.4	幅0.5	厚0.5
	73		鉄製品・釘	長(10.3)	幅0.7	厚0.3

出土遺物破片数表

区・面	出土地	かわらけ(大)	かわらけ(小)	手づくね	土師器	南伊勢系	瓦質火鉢	瓦	瀬戸・碗	瀬戸・壺	瀬戸・入れ子	瀬戸・折縁深皿	瀬戸・器種不明
第1面	面上	177	47					1			1		
	遺構6	10	4										
	遺構20	3	2										
	遺構21	1	2										
	遺構22	4											
	遺構23	2											
	遺構24	3											
	遺構27	2											
	遺構28	23	7										
	遺構7	198	47	1			1	2					
	遺構8	16	11										
	遺構9	42	17										
	遺構10	22	12										
	遺構12	141	28										
	遺構29	89	15				2						
	遺構29上層	9	1								2		
	遺構29下層	12	15										
	遺構30	41	9										
	遺構31	36										1	
	遺構32	96	50										
	遺構34	25	2										
	遺構35	12	2										
	遺構36	174	9										
	遺構40	8	12										
	遺構11	19	4										
	遺構13	40	10										
	遺構16上層	6	3										
	遺構16中層	103	30										
遺構16下層	17	10											
遺構33	51	6				1							
遺構37	158	42				2					2		
遺構41	7	5											
遺構42	1	7											
遺構43	95	45	1								1		
遺構44	1												
遺構46	11	4											
遺構47	5	4											
遺構48	9	9											
遺構49	44	12											
遺構50	16	8				3							
第1面構成土	166	37				3					1		
表土	192	29				3						1	
攪乱	168	50									1		
廃土山						2							
総計	2255	607	2	5	12	5	15	1	1	5	3	1	2

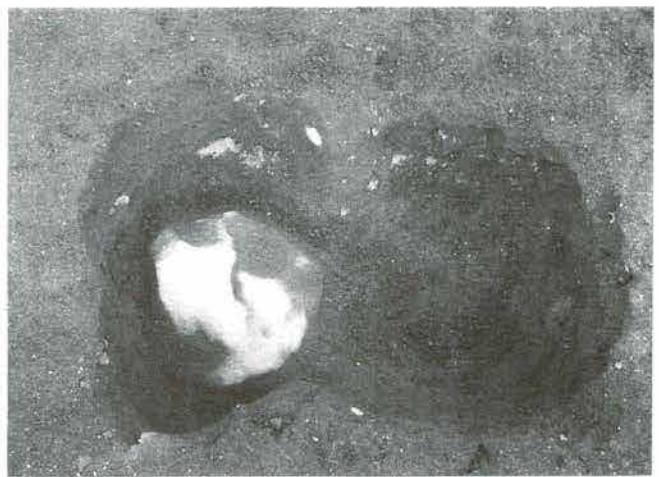
区・面	出土地	褐釉壺	常滑・甕・胴部片	常滑・甕・底部片	常滑・片口鉢Ⅰ類	常滑・片口鉢Ⅱ類	常滑・壺	渥美・甕	魚住・鉢	青磁・椀	青磁・蓮弁文碗
第1面	面上		35	2	1						1
	遺構6		4								
	遺構20										
	遺構21		1								
	遺構22		1								
	遺構23										
	遺構24										
	遺構27										
	遺構28					2					
第2面	遺構7		28						1		
	遺構8		3								
	遺構9		7						3		1
	遺構10		3								
	遺構12		13		4						1
	遺構29		26		1						
	遺構29上層										
	遺構29下層		6								1
	遺構30		2								
	遺構31		10								
	遺構32		22								
	遺構34		3				2				
	遺構35										
	遺構36		24		1					1	
	遺構40		4								
	第3面	遺構11		1		2					
遺構13			3		3						1
遺構16			3								
遺構17			16		3						
遺構18			2		1						
遺構33											
遺構37			37								
遺構41			4					1			
遺構42			2								
遺構43			31				1				1
遺構44											
遺構46			1						1		
遺構47			2						1		
遺構48											1
遺構49		1	17			1			1		
遺構50			4			1					
第1面構成土			36			3					2
表土		40			3	4				1	
攪乱		15			3						
廃土山		1									
総計		1	407	2	29	7	1	7	1	1	9

区・面	出土地	青磁・劃花文碗	青白磁・梅瓶	白磁・皿	白磁・壺	白磁・器種不明	鉄製品・釘	鉄滓	銭	石製品・砥石	チャート	軽石	炭	貝	獸骨	近世
第1面	面上					1	1	2						0	0	
	遺構6															
	遺構20	1					1									
	遺構21						1							0		
	遺構22						1									
	遺構23															
	遺構24															
	遺構27													0		
	遺構28													0		
	遺構7							2						0	0	1
第2面	遺構8													0	0	
	遺構9					2								0	0	
	遺構10													0	0	
	遺構12						1							0	0	
	遺構29					1	1			1				0	0	
	遺構29上層															
	遺構29下層															
	遺構30													0	0	
	遺構31													0	0	
	遺構32						1			1				0	0	
第3面	遺構34													0	0	
	遺構35													0	0	
	遺構36		1											0	0	
	遺構40													0	0	
	遺構11						2	1						0	0	
	遺構13													0	0	
	遺構16											1		0	0	
	遺構17							1						0	0	
	遺構18				1		2	1		1			1	0	0	
	遺構33													0	0	
第1面構成土	遺構37		1				8	1	1					1	0	
	遺構41						1							0	0	
	遺構42						10	2								
	遺構43							2								
	遺構44													0	0	
	遺構46						3							0	0	
	遺構47													0	0	
	遺構48						1							0	0	
	遺構49						1	1					1	0	0	
	遺構50						7	1						1	0	
表土						1	1						0	0		
攪乱					1	6							1	0	2	
廢土山																
総計		1	2	1	1	1	49	16	1	3	1	2	4			3

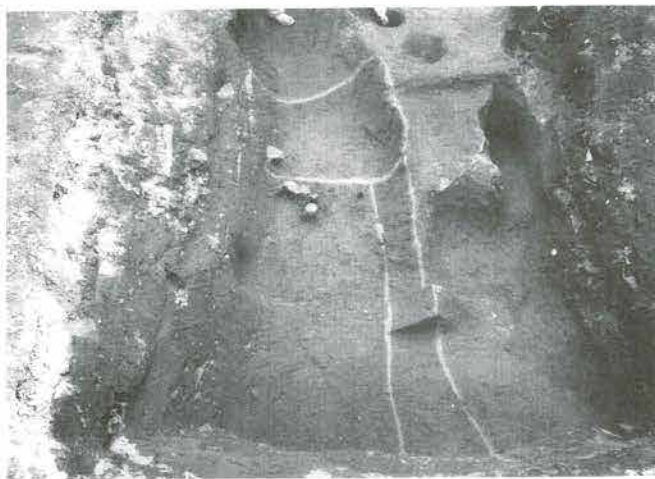
図版 1



第1面全景（南から）



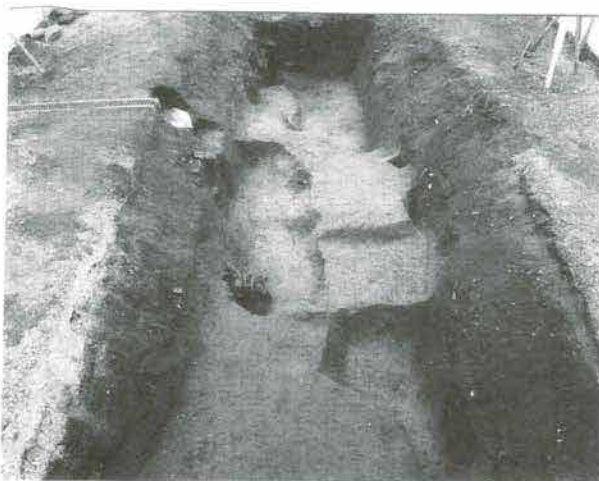
第1面 遺構 21・遺構 22（東から）



第2面 遺構 9・遺構 11・遺構 12（北から）



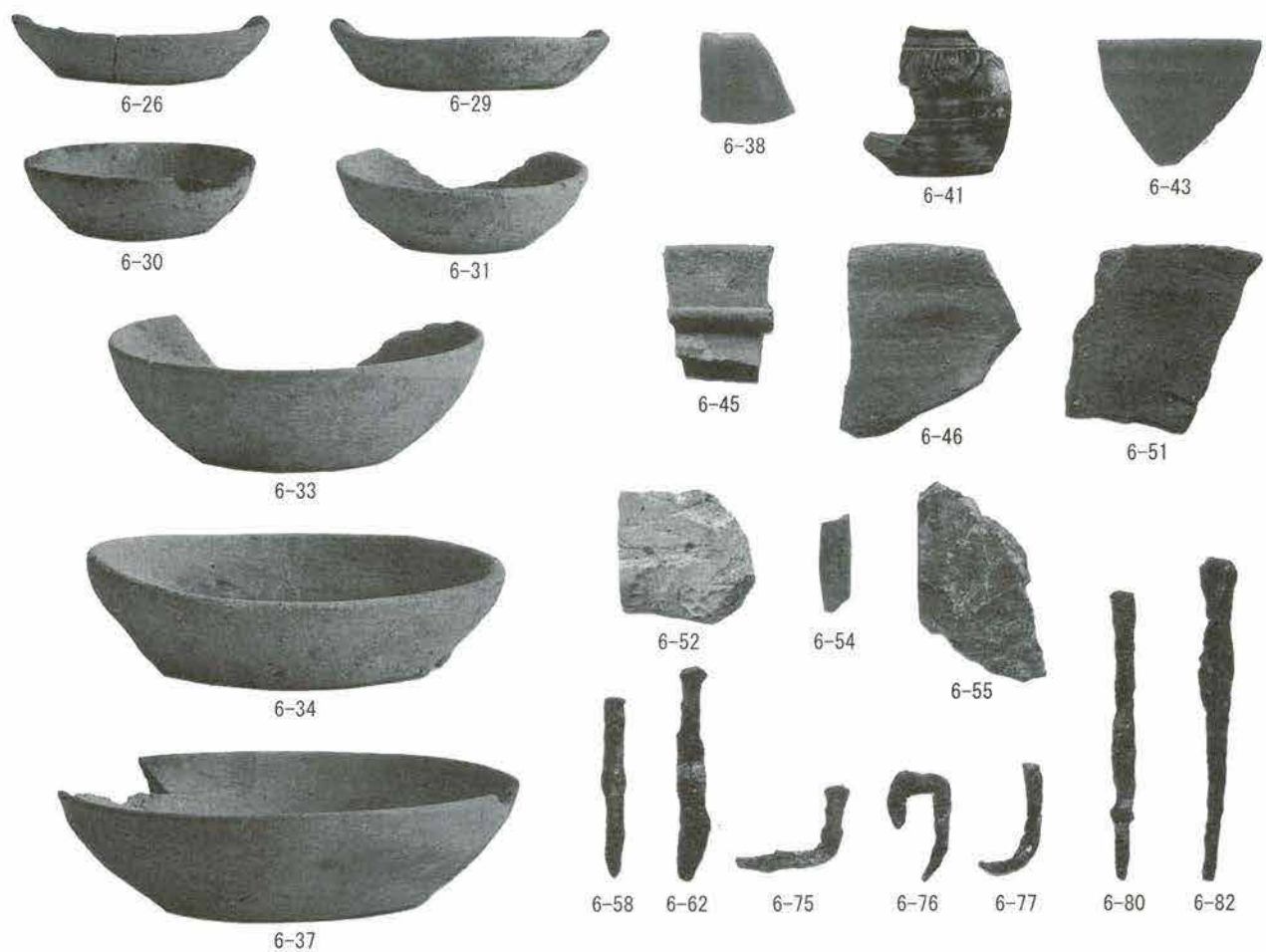
第2面全景（北から）



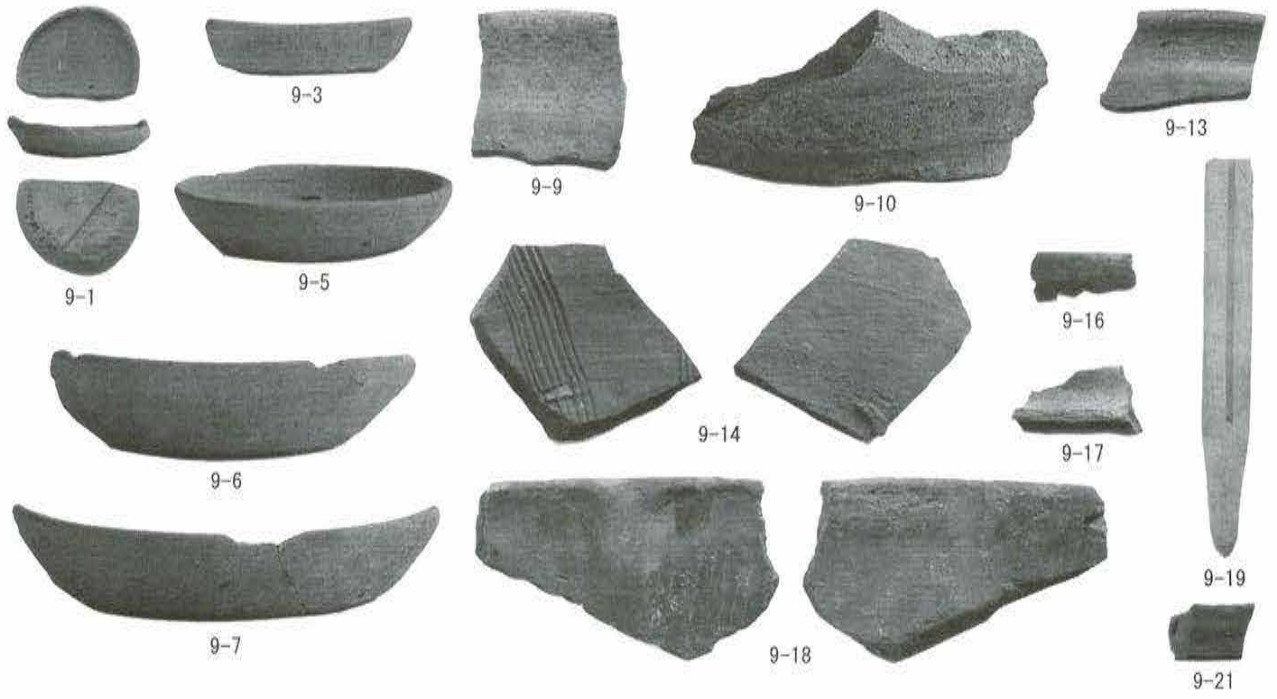
第3面全景（南から）



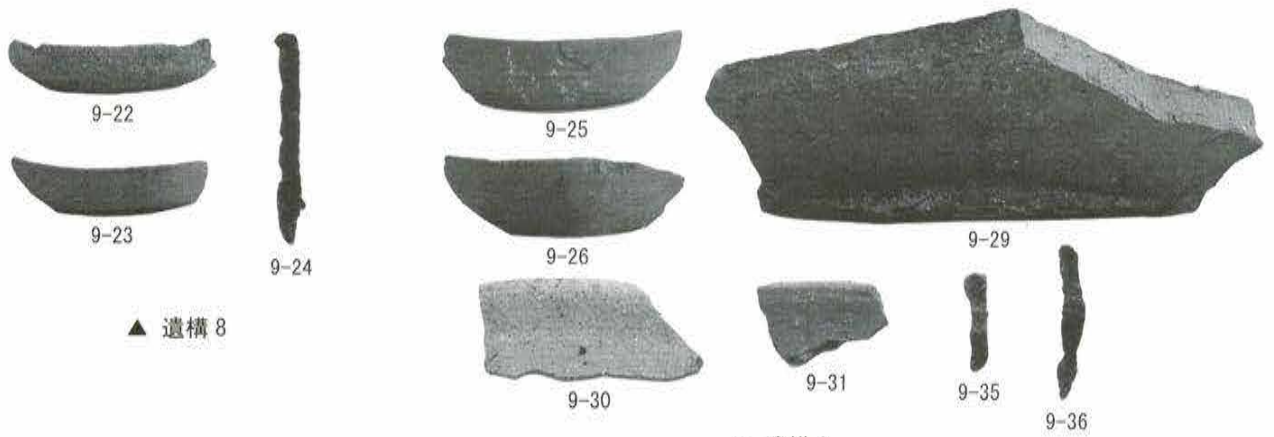
第3面 遺構 37



图版 3



▲ 遺構 7



▲ 遺構 8

▲ 遺構 9



▲ 遺構 12



▲ 遺構 31
第 2 面遺構



▲ 遺構 29



▲ 遺構 35



▲ 遺構 32

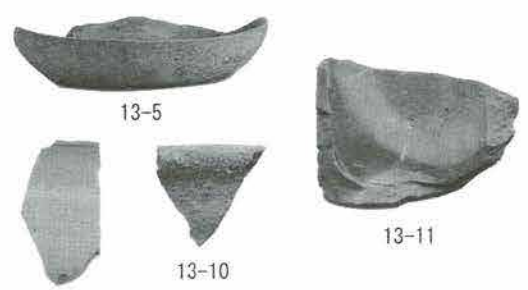
第 2 面遺構



▲ 遺構 40



▲ 遺構 11



▲ 遺構 13

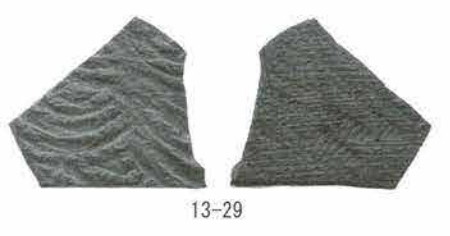


▲ 遺構 33

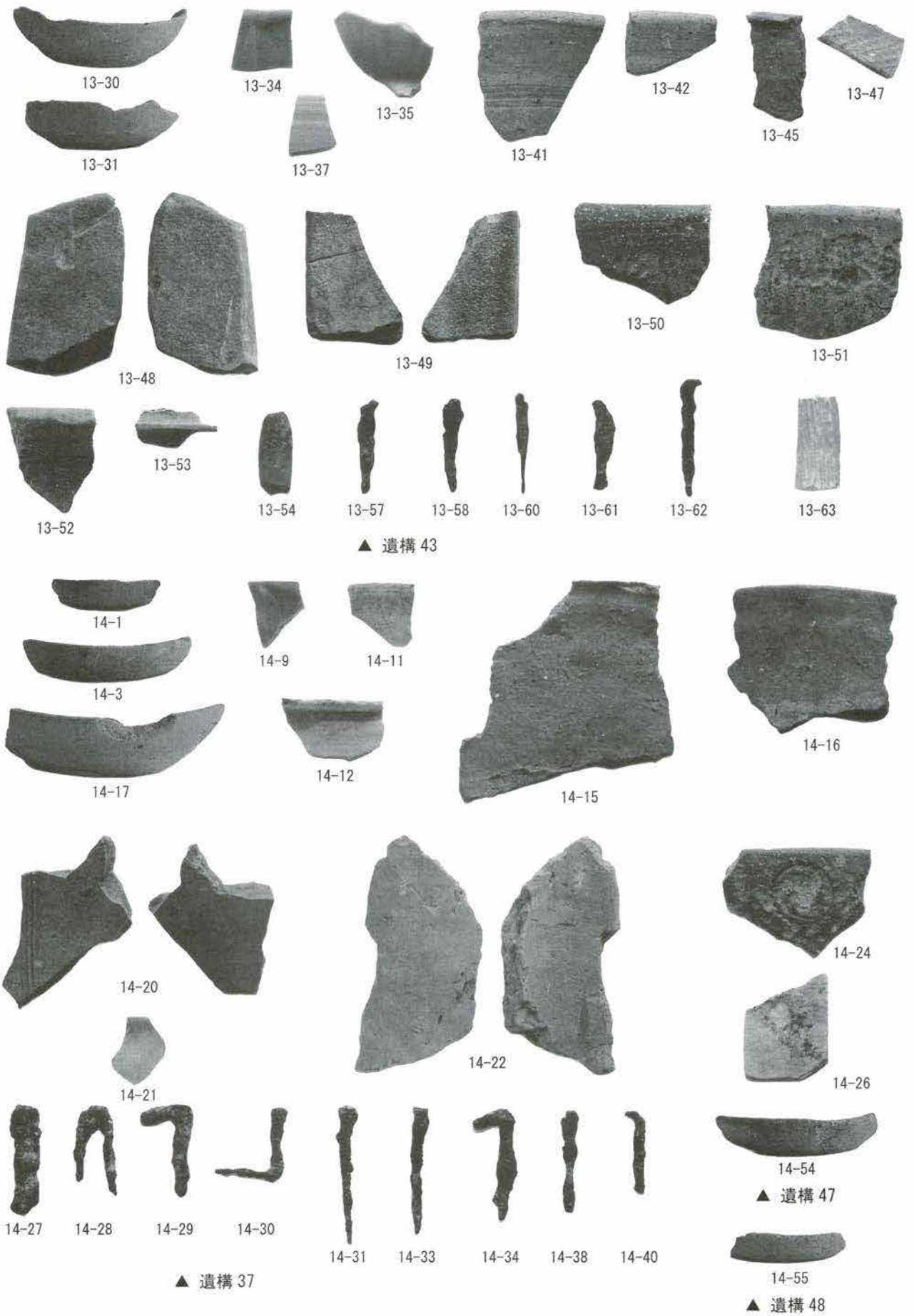


▲ 遺構 16

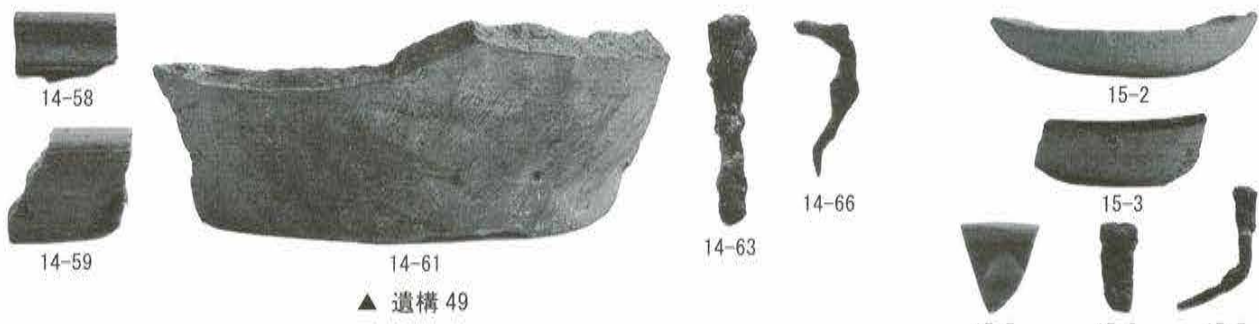
第 3 面遺構



図版 5



第 3 面遺構

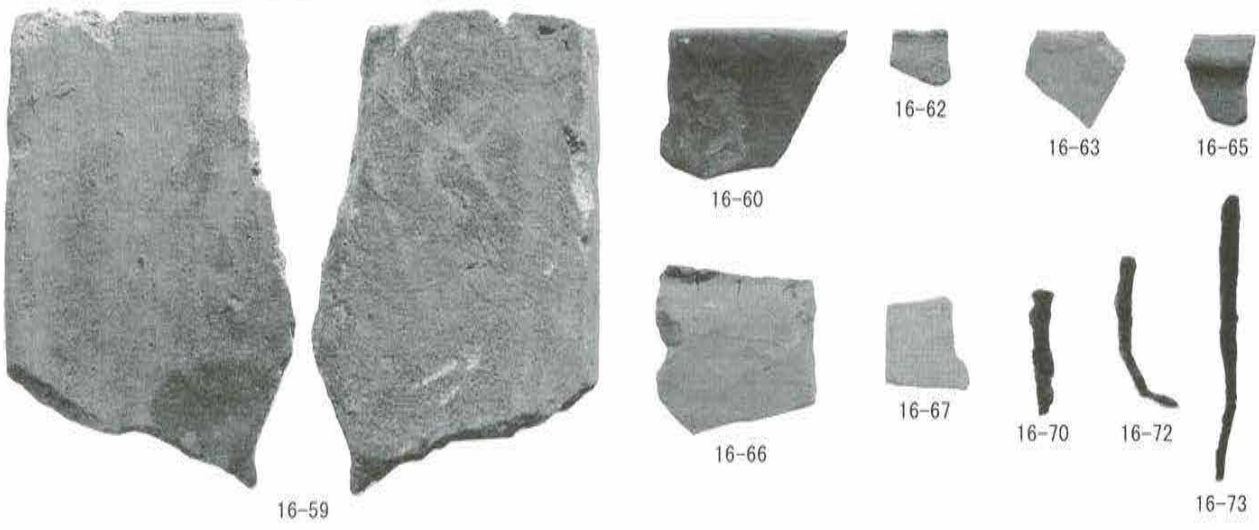
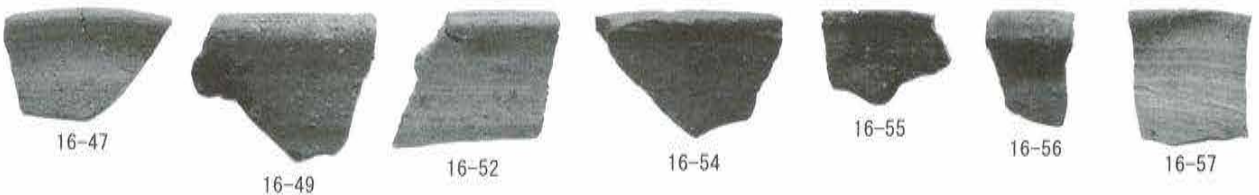
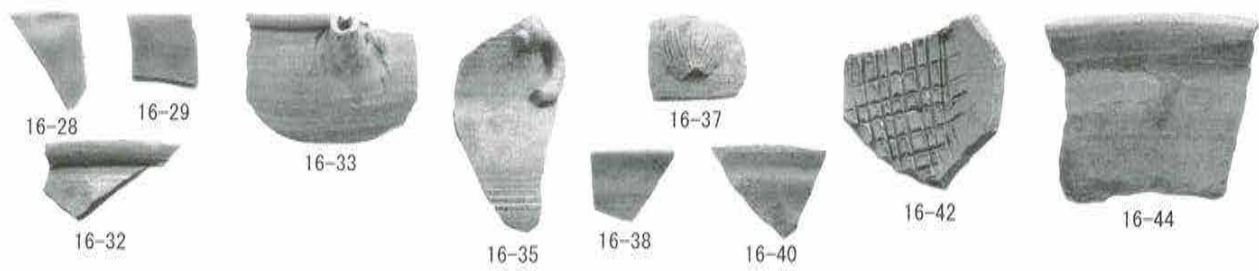
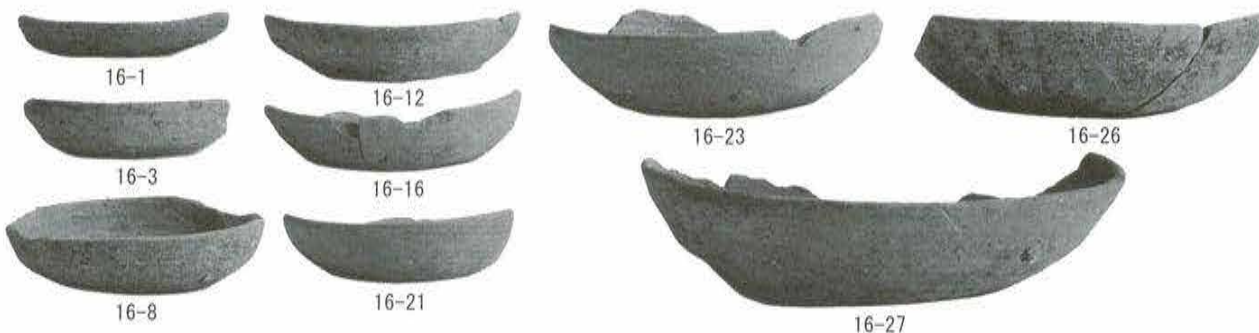


▲ 遺構 49

▲ 遺構 50



▲ 最終トレンチ










▲ 表探・攪乱

えんかく じきゆうけいだい いせき
円覚寺旧境内遺跡 (No. 434)

山ノ内字西管領屋敷377番1

例 言

1. 本書は、鎌倉市山ノ内字西管領屋敷 377 番 1 地点における個人住宅建設に伴う埋蔵文化財の緊急調査発掘調査報告である。資料整理の際の遺跡の略記号は KYK である。
2. 発掘調査は、国庫補助事業として鎌倉市教育委員会が実施した。調査期間は平成 16 年 7 月 22 日～9 月 13 日である。
3. 調査団の編成は以下の通りである。
調査の主体 鎌倉市教育委員会
調査担当 宮田眞（日本考古学協会会員）
調査補助員 安達澄代・岩澤智和・下江秀信・宮崎正二・渡辺美佐子・安藤龍馬・滝澤晶子
調査協力者 柴崎英輔・田口康雄・牛嶋道夫・中須洋二・天野隆男・安達越郎・中路正明（社団法人鎌倉市シルバー人材センター）
4. 本書の執筆・編集は以下のものが行った。
第 1 章・第 4 章 宮田眞・第 2 章・第 3 章・編集 滝澤晶子
5. 本書の図版および写真撮影は次のものが行った。
遺構図版 滝澤晶子 遺構写真 滝澤晶子
遺物図版 宇賀神雅子・渡辺美佐子 遺物写真 滝澤晶子
6. 本書の遺構・遺物の縮尺は次の通りである。（各々の図にスケールを載せている）
遺構図 1/40・1/80（遺構図の水糸高は海拔高を示す）
遺物実測図 1/3
7. 遺構実測図には次の記号が使用されている。
釉の限界線  調整の変化点  使用痕の範囲  加工痕の範囲 
攪乱の範囲  推定ライン  調査限界ライン 
8. 遺物寸法表は計測可のもののみ表にしている。遺物および Pit 寸法表の記号は以下の通り。
遺物寸法表：() = 復元値・[] = 遺存値・単位は cm
Pit 寸法表：() = 推定値あるいは推定形・単位は cm
9. 発掘調査に際して御理解・御協力を賜った、建築主及び関係者の方に深く感謝の意を表す。

本文目次

第1章 遺跡の位置と歴史的環境	52
第2章 調査の概要	55
第3章 検出遺構と出土遺物	58
第4章 まとめ	80

挿図目次

図1 遺跡周辺図	52	図13 溝1	65
図2 調査範囲と確認調査	55	図14 溝2、溝状遺構4・5、土坑6	66
図3 遺跡位置図・グリッド配置	56	図15 道路遺構、溝1(1)出土遺物	67
図4 土層図	57	図16 溝1(2)、溝2出土遺物	68
図5 1面遺構配置図	59	図17 2面出土遺物	73
図6 溝状遺構1～3、土坑2	59	図18 3面遺構配置図	74
図7 溝状遺構3出土遺物	60	図19 溝3、柱穴列1	75
図8 表土層・1面出土遺物	60	図20 溝3出土遺物	76
図9 1b面遺構配置図	62	図21 3面出土遺物	76
図10 土坑4・5	62	図22 4面遺構配置図	77
図11 土坑5出土遺物	63	図23 掘立柱建物1、柱穴列2、溝4	78
図12 2面遺構配置図	63	図24 中世層出土の古代遺物	79

写真図版目次

図版1 A 1面全景	82	図版7 A 3面全景	88
B 溝状遺構1覆土	82	B 溝3・柱穴列1	88
図版2 A 溝状遺構2・土坑2南北ベルト	83	図版8 A 溝3ベルト①	89
B 2面全景	83	B 溝3ベルト②	89
図版3 A 道路遺構・溝1	84	図版9 A 掘立柱建物1	90
B 道路遺構	84	B 柱穴列2	90
図版4 A 溝1	85	図版10 A 溝4	91
B 溝1南北ベルト	85	B 調査区東壁土層	91
図版5 A 溝2	86	図版11 出土遺物(1)	92
B 溝状遺構4北南ベルト	86	図版12 出土遺物(2)	93
図版6 A 溝状遺構5北南ベルト	87	図版13 出土遺物(3)	94
B 土坑6・Pit48北南ベルト	87		

第1章 遺跡の位置と歴史的環境

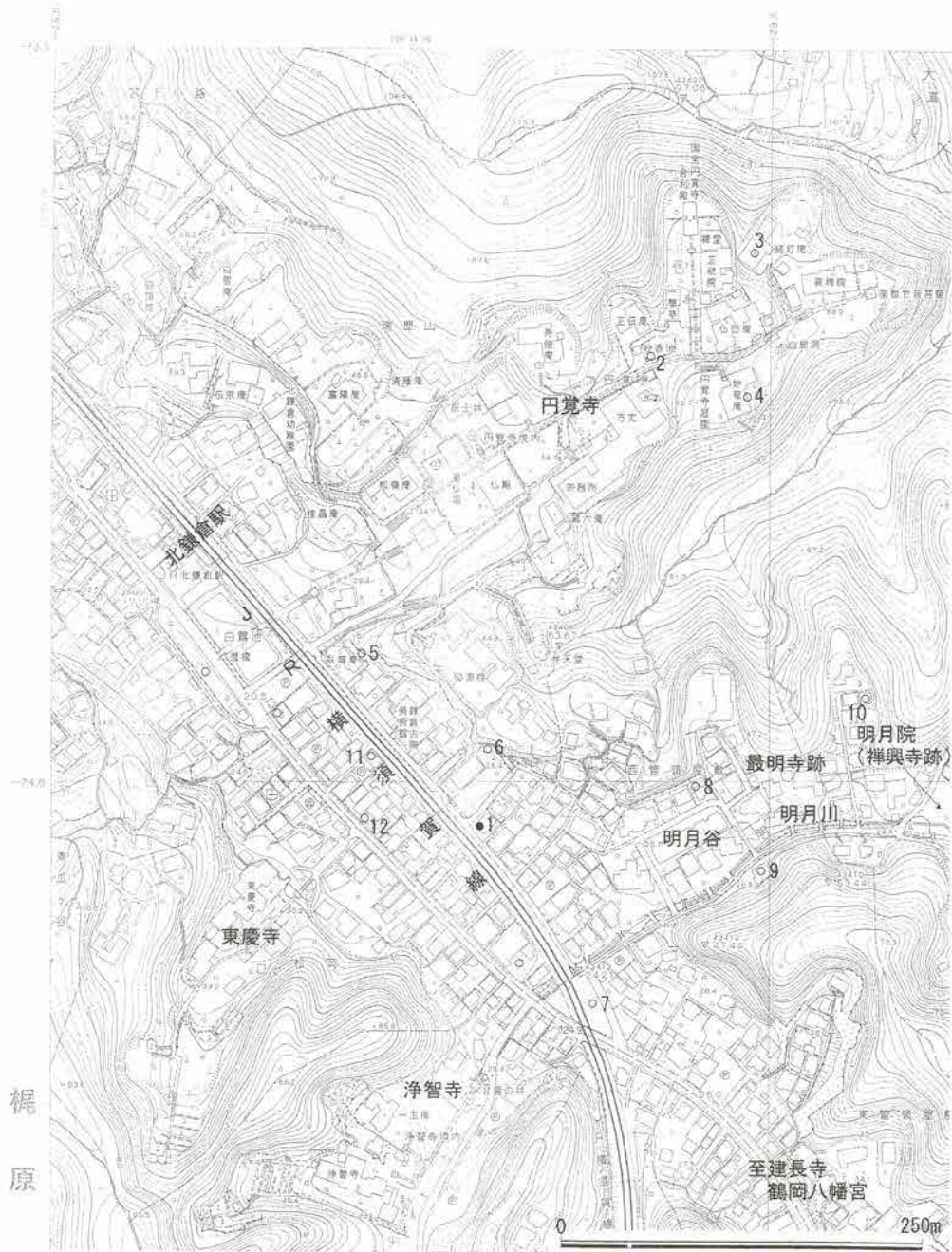


図1 遺跡周辺図

1. 本調査地
2. 妙香池遺跡
3. 続燈庵遺跡
4. 妙竜庵遺跡
5. 掃源院下やぐら群
6. 円覚寺境内西やぐら群
7. 山ノ内道周辺遺跡(山ノ内東管領屋敷180番10地点)
8. 明月院旧境内遺跡
9. 西管領屋敷南やぐら群
10. 最明寺北亭跡
11. 円覚寺旧境内遺跡(山ノ内瑞鹿山393)
12. 円覚寺旧境内遺跡(山ノ内瑞鹿山398地点)

1. 遺跡の位置

本調査地（図1-1）は、円覚寺旧境内遺跡（No.434）の一部に当たり、鎌倉市山ノ内字西管領屋敷377番1に所在する。調査地はJR横須賀線の線路東側に近接しており、北鎌倉駅改札から南東約250mの距離にある。また線路沿いの道をおよそ200m北西に辿ると、遺跡名の元になっている「円覚寺」の総門となる。総門を東に入ると広大な谷戸になっており、山門、仏殿を始めとした中心伽藍や大庫裏があり、その周囲には多くの塔頭が堂宇を展開している。また調査地点を基点に線路際の道を、円覚寺とは反対の南東方向に100m程行くと「明月谷」の入り口となる。明月谷は西向きに開口しており、谷を東に約250m入ると紫陽花で有名な「明月院」の門に辿り着く。明月谷にはこの他に、第五代執権北条時頼が建立した「最明寺」や時宗建立の「禅興寺」があったと伝える。さらに室町期以降にはこの付近の住所表示にもなっている「上杉管領屋敷」があったとされる。

2. 近接する寺院

円覚寺

遺跡名の由来である円覚寺は、瑞鹿山円覚興聖禅寺と号す。開基は北条時宗。開山は無学祖元。弘安五年（1282）12月に創建される。臨済宗円覚寺派総本山。鎌倉五山第二位。円覚寺は創建時禅宗様（唐様）の伽藍配置が整っていたが、幾多の災禍によってそれらは悉く灰燼に帰した。現在、中心伽藍は総門、山門、仏殿、方丈、庫裏などがあるが、それらは全て近世以降の再建で仏殿は昭和39年（1964）完成の鉄筋コンクリート造りである。現在残る建造物では室町期に尼寺太平寺から移された「舍利殿」が最も古い。境内は全域が国指定史跡となっている。開山以下歴代住職には、大休正念、鏡堂覚円、桃溪徳悟、一山一寧、東明慧日、夢想礎石等々名僧の名を連ねている。

円覚寺には記録によるところでは40以上に上る塔頭が存在したようだが、現在は正統院、仏日庵、黄梅院、続燈庵、如意庵、正伝庵、寿徳庵、済陰庵、松嶺院、蔵六庵、帰源院、臥龍庵、伝宗庵、富庵、白雲庵、雲頂庵の16ヶ寺が伝わる。その他に門外塔頭として東慶寺、浄智寺、瑞泉寺がある。

明月院

明月院は、上記した北条時宗が蘭溪道隆をむかえて建立した「禅興寺」の塔頭の一つであった。開基は上杉宣方（1335～1394）、開山は密室守厳で建長寺の末寺である。禅興寺は北条時宗が父時頼の建立した「最明寺」を再興したものとも伝わり、関東十刹の一つにも数えられる大寺院であったが、いったん廃絶した後、永正六年（1509）に再興される。天正九年（1581）に室町将軍足利義昭が恵澄を禅興寺住持に任命しているのを見ると、この頃までは健在であったようだが、現在、禅興寺は廃絶し明月院だけが残っている。現本堂裏には上杉宣方墓と伝える宝篋印塔を安置する「やぐら」（仏像のレリーフが彫られる）があり、境内入り口近くには北条時頼墓と伝える変形の宝篋印塔がある。

3. 近隣で実施された発掘調査

本調査地の近隣地域では、これまでに比較的多くの発掘調査が実施されてきた。今回はその中から本調査地に近隣した調査事例をいくつかを紹介したい。

続燈庵遺跡（図1-3）

円覚寺の境内地では、これまでに塔頭の敷地内を中心に幾多の発掘調査が実施されている。本項では、特殊な遺構が検出された続燈庵遺跡の調査成果を瞥見したい。続燈庵では二次に亘る調査が実施された。

第1次調査

第1次調査は、調査顧問大三輪龍彦、調査団長大橋康二のもと、続燈庵境内遺跡発掘調査団が昭和54年(1979)2月7日～21日にかけて実施した。調査は予め陥没によってその存在が知られていた「地下式壙」(第1号)が、寺院とどのような関係にあるかを明らかにするための学術調査として計画された。

調査の結果、陥没地点下より予測された「地下式壙」(地下式やぐらか)が1基検出された。地下式壙の入り口はやぐらの羨道部分が天井にあると考えてよからう。内部はやぐらの部位呼称に準じて、玄室規模は東西2.8m、南北3.8m、天井の高さは1.9m前後を測る。入り口部は玄室の南東角付近の天井に穿たれており、1辺約1mの方形をする。天井岩盤の厚さは30～40cmを測る。床面には壁に沿う位置に挿鉢状のピットが穿たれている。ピットは大まかに大型(上端径70～100cm)・中型(上端径40～60cm)・小型(上端径30cm以下)の3規格があり、西壁際に大型4口、南壁際に中型6口、北東角に小型1口が穿たれる。ピット内からの遺骨等の出土は無かった。この遺構については当寺院(続燈庵)の開山の墓所ではないかと推測されるが、内部の埋没土からの出土品は近世以降の製品が主体であり、中世期の段階で本来の機能は失われてしまったようだ。

第2次調査

第2次調査は、本堂建て替えの事前調査として、昭和62年(1987)6月11日～7月4日にかけて団長大三輪龍彦、担当大河内勉により実施された。

調査の結果、岩盤面には多くの石切り遺構(痕跡)、溝3条、鎌倉石切石を用いた石列2本等が検出された。さらに第1号地下式壙の南方約6mの地点(入り口部同士の距離)から「第2地下式壙」が発見された。第2地下式壙は1号に比較するとやや小型で、玄室の規模は東西1.7m、南北2.7mで、天井高は1.7mを測る。入り口は南東角に位置し、一辺90cmの方形をする。天井岩盤の厚さは55cmと1号より厚い。床面には挿鉢状ピットは無く、東壁際中央部に一辺80cm、深さ50cmを測る方形をした穴が穿たれていた。床面構造や玄室規模に差異はあるが機能を共有する遺構と判断できる。

山ノ内道周辺遺跡(図1-7)

調査は、鎌倉市観光案内所等社会施設建設に伴う事前調査として、平成7年1月8日～4月5日にかけて実施された。

調査の結果、鎌倉時代後期から室町期にかけての2枚の生活面が検出され、河川遺構が明月谷の谷戸奥からの流れ8条(8次期)と、山ノ内道に並行する流れ2条(2次期)が発見された。この2方向の流れは調査地内で合流する。さらに下層からは古墳時代前期から中期への移行期に当たる土器が出土。土器は小型品とミニチュア土器で、まとまった数が集中して見つかっており、出土場所が河川の合流地点である点も考慮に入れると、「水辺の祭祀」が行われた蓋然性が高く持たれる。

参考文献

- 「鎌倉市史社寺編」 昭和34年 鎌倉市教育委員会 吉川弘文館
「鎌倉廃寺事典」 昭和50年12月 貫達人・川副武胤著 有隣堂
「鎌倉事典」 昭和51年5月 白井永二編 東京堂出版
「円覚寺続燈庵一埋蔵文化財発掘調査報告書一」 1990年 続燈庵境内遺跡発掘調査団 大河内勉他
「山ノ内道周辺遺跡発掘調査報告書」 1997年12月1日 山ノ内道周辺遺跡発掘調査団編・鎌倉市教育委員会

第2章 調査の概要

1. 調査の経緯と経過

調査は鎌倉市山ノ内字西管領屋敷 377 番 1 地点における個人住宅に伴う調査として実施された。平成 16 年 5 月 26 日・27 日に鎌倉市教育委員会により確認調査が実施され、その結果、現地表下 93 cm 前後から中世遺跡が確認された。それを受け、平成 16 年 7 月 22 日～9 月 13 日にわたって本調査が実施された。調査対象面積は 67.84 m² である。資料整理の際の遺跡の略記号は K Y K である。遺物は遺物収納箱 8 箱出土した。

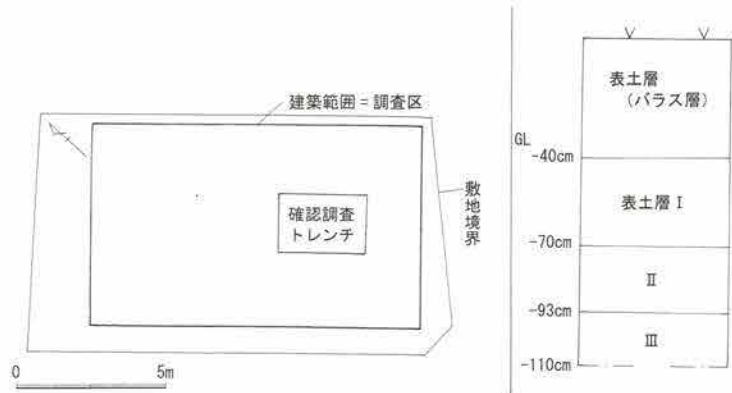


図2 調査範囲と確認調査

確認調査は敷地内、図2に示した位置に設定し、現地表下 110 cm まで掘削して行われた。現地表下 95 cm 以下は湧水が激しく、現地表下 93 ~ 110 cm に確実な中世層を確認して確認調査を終了した。その結果は以下の通り。(図2 参照)

- ・表土層：現地表下 40 cm。バラス層
- ・I 層：旧表土層 暗褐色土で締り良好。かわらけ粒・炭粒等がみられる。
- ・II 層：黄橙色ロームを多く含む土層。締りあまり良好でない。かわらけ片・炭粒・鎌倉石碎片を多く含む。
- ・III 層：暗褐色土層（中世土層）しまり良好。中世遺物多く含む。炭粒等を含む。かわらけ片を多く含む、白磁片の出土を見た。

調査経過

- 平成 16 年 7 月 22 日 重機による表土掘削後、人力による調査開始。
- 7 月 23 日～8 月 2 日 第 1 面まで粗掘り。
- 7 月 28 日 測量基準点移動・設置。
- 8 月 3 日 1 面精査。遺構検出作業
- 8 月 5 日 1 面調査終了。全景撮影・実測。
- 8 月 6 日 2 面まで粗掘り。
- 8 月 10 日 2 面遺構検出作業。
- 8 月 24 日 2 面調査終了。全景撮影・実測。
- 8 月 26 日 3 面まで粗掘り。
- 8 月 27 日 3 面精査。遺構検出作業。
- 9 月 2 日 3 面調査終了。全景撮影・実測。
- 9 月 3 日 4 面まで粗掘り。
- 9 月 7 日 任意設定のグリッドと国土座標との合成。
- 9 月 9 日 4 面精査。遺構検出。
- 9 月 10 日 4 面調査終了。全景撮影・実測。
- 9 月 13 日 現地調査終了。

2. 調査区の位置とグリッド配置 (図3)

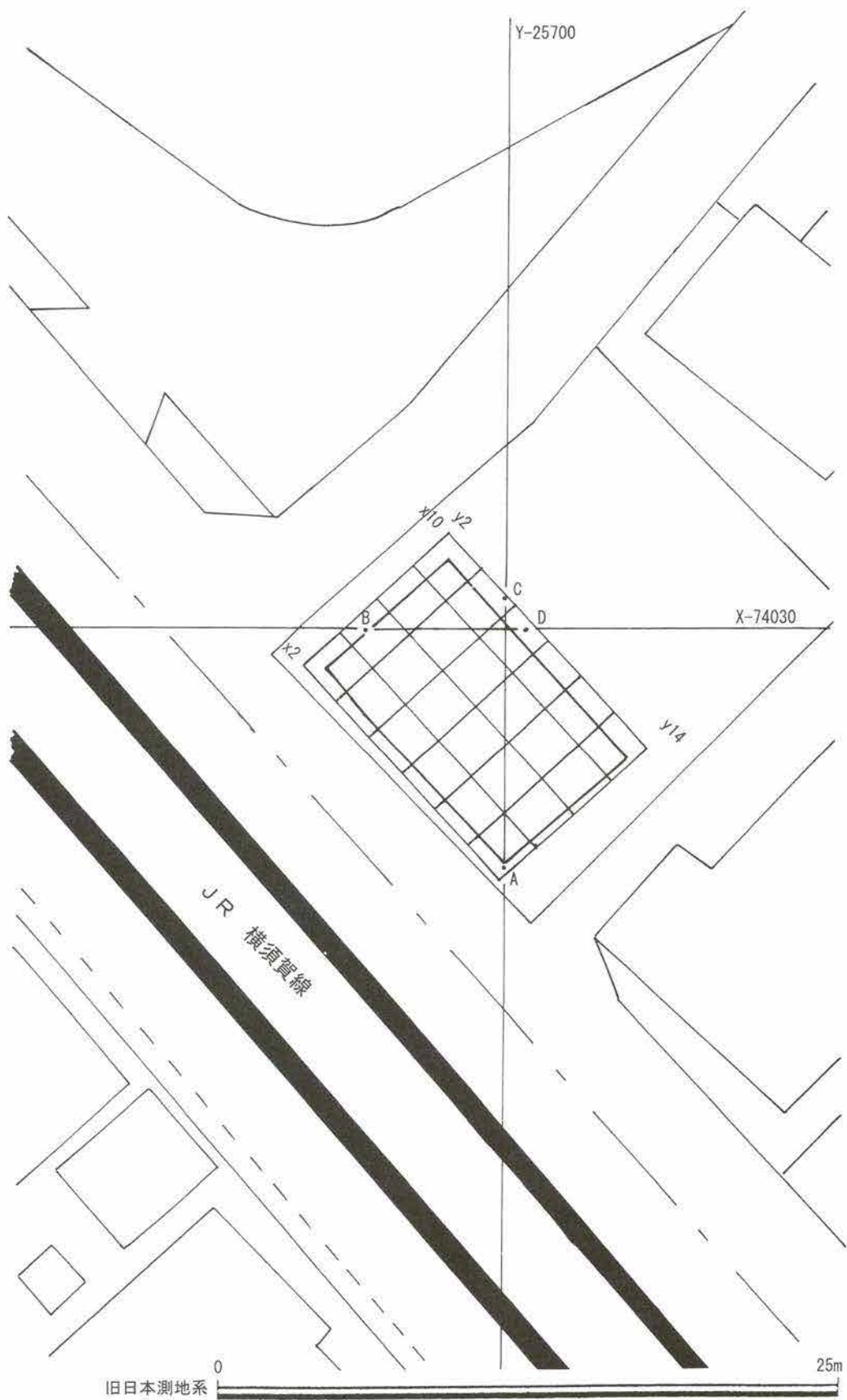


図3 遺跡位置図・グリッド配置

調査区は建物建設予定範囲に一致し、図2に示したように設定された。位置は北緯35度20分08秒、東経139度32分50秒である。

グリッドは調査区の形状に合わせて任意に設定した。(図3)グリッドと国土座標(エリア9)の関係は以下の通りである。世界測地系には国土地理院提供のソフトを使用して変換した。

A地点:グリッド(x 2.527、y 13.630) = 国土座標[旧日本測地系](X-74039.669、Y-25700.000)
= 国土座標[世界測地系](X-73683.000、Y-25993.347)

B地点:グリッド(x 4.900、y 2.715) = 国土座標[旧日本測地系](X-74030.000、Y-25705.562)
= 国土座標[世界測地系](X-73673.331、Y-25998.909)

C地点:グリッド(x 9.805、y 5.569) = 国土座標[旧日本測地系](X-74028.806、Y-25700.000)
= 国土座標[世界測地系](X-73672.138、Y-25993.347)

D地点:グリッド(x 9.790、y 7.153) = 国土座標[旧日本測地系](X-74030.000、Y-25698.962)
= 国土座標[世界測地系](X-73673.331、Y-25992.309)

グリッドy軸は北から43度西に傾いている。なお、本文中では便宜上、グリッドyマイナス方向を北として呼称し、正確な方位は各図に矢印で示している。

3. 基本土層(図4)

基本土層の測量地点A-A'は図22に記してある。現地表は海拔24.9m前後のほぼ平坦面。表土層は現地表から1.1mであった。いずれの面もほぼ平坦である。1面は海拔23.75m前後、1面下約10cm、海拔23.65m前後に1b面、1面下約15cm、海拔23.6m前後に2面、2面下5cm、海拔23.55m前後に3面、3面下約15cm、海拔23.4m前後に4面が検出された。それぞれの層厚は比較的薄く、また、4面下約25cmに地山が確認された。土層注記は以下の表の通りである。

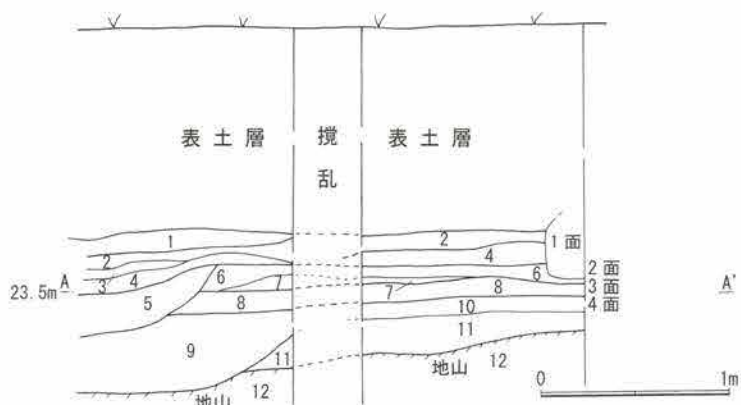


図4 土層図

番号	色調	土質	内容	締り	備考
1	暗褐色	粘質土	鎌倉石粒多	弱い	中世遺物包含層
2	暗褐色	粘質土	鎌倉石粒少・土丹少	-	
3	黄褐色	粘質土	鎌倉石粒密	弱い	
4	暗褐色	粘質土	褐鉄多・鎌倉石・かわらけ片・炭化物	良い	1面
5	青味暗灰色	粘質土	かわらけ片多・炭化物多・木片・鎌倉石粒	弱い	
6	鎌倉石碎片による地業層		かわらけ片・炭化物	硬く締る	2面
7	暗灰褐色	粘質土	鎌倉石粒・かわらけ片・炭化物	良い	
8	鎌倉石碎片による地業層		暗褐色線質土少	良い	3面
9	黒褐色	粘質土	古代遺物・木片・炭化物・土丹粒少	やや弱い	溝4覆土
10	黒褐色	粘質土	鎌倉石粒微量	良い	4面
11	黒褐色	粘質土	鎌倉石粒微量・木片微量	弱い	
12	黒褐色	粘質土	混入物なし	やや弱い	地山

第3章 検出遺構と出土遺物

今回の調査の結果、当遺跡からは合計5面の遺構面が確認された。

第1面 (図5)

第1面は海拔23.75m付近に検出されたほぼ平坦な面である。検出遺構は溝状遺構3条・土坑1基・Pit34口である。なお、土坑1・3は欠番である。

1面検出Pit (図5)

PitはPit14のように底部に安山岩が据えられているものもあるが、建物や塀などを構成するような並びはつかめなかった。Pit14の底には安山岩が2個据えられていた。Pit21・22は中間に一段平場を持つ。以下、表の通り。

Pit番号	グリッド		平面形	大きさ cm		深さ cm	備考
	x	y		東西幅	南北幅		
1	9	13	楕円形	40	34	13.3	
2	8	13	(円形)	45	-	13.6	
3	8	13	(楕円形)	38	-	14.3	
4	7	13	円形	28	26	11	
5	8	12	不整形	26	44	11.5	
6	9	12	(円形)	-	40	13.6	
7	8	11	円形	25	22	11.7	
8	5	10	卵型	35	52	16	
9	7	10	円形	70	60	25	
10	4	12	不整円形	38	30	14	
11	6	9	不整形	35	36	21	
12	6	7	円形	22	20	19	
13	8	7	円形	30	30	29	
14	8	5	円形	24	26	15.4	安山岩2個
15	8	4	円形	30	30	24	
16	7	3	円形	46	48	28.4	
17	7	5	楕円形	58	43	36	
18	6	6	円形	20	22	34	
19	5	6	円形	43	45	26.4	
20	7	12	不整形	52	37	15	
21	6	6	円形	32	30	38.5	2段
22	7	12	楕円形	68	48	22.6	2段
23	8	10	円形	24	23	11.8	
24	6	5	円形	20	16	24.7	
25	4	9	円形	32	32	22	
26	9	6	(円形)	-	42	16	
27	4	5	円形	26	26	13.5	
28	3	5	不整形	40	56	24	
29	4	4	不整形	60	68	39.4	
30	4	4	(楕円形)	34	-	14	
31	6	5	円形	30	30	23	
107	6	7	円形	66	68	8	
108	4	3	円形	50	60	30	
109	9	5	(円形)	-	30	7	

溝状遺構1 (図6)

溝状遺構1はグリッド(x7、y3)付近、海拔23.8m前後に検出された。南北方向の浅い溝状の遺構である。北は調査区外に延び、検出し得た全長は186cm、幅34cm、深さは検出面から24cmを測る。覆土は暗褐色粘質土で、かわらけ小片・暗茶褐色粘質土小ブロックを含み、粘性がややあり、締め良い。南北軸線方向はN-25°-Wである。

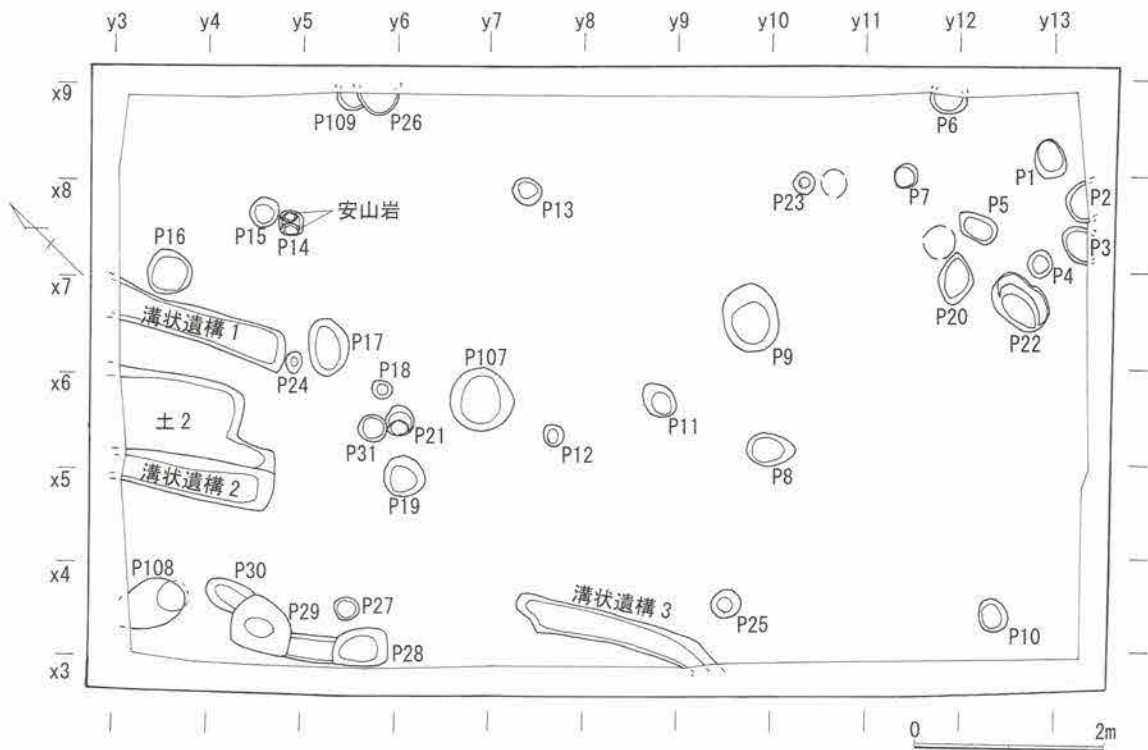


図5 1面遺構配置図

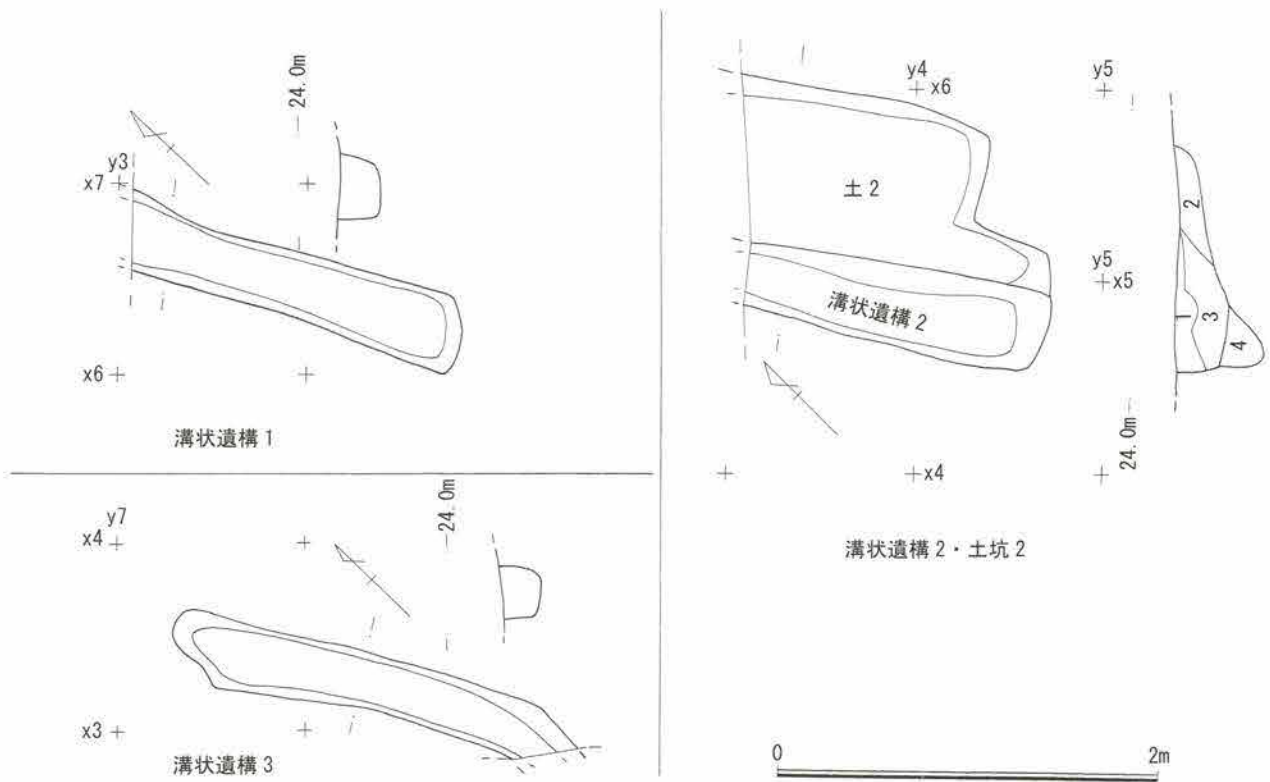


図6 溝状遺構1～3、土坑2

溝状遺構2・土坑2 (図6)

溝状遺構2はグリッド(x5、y3)付近、海拔23.8m前後に検出された。南北方向の浅い溝状の遺構である。土坑2が溝状遺構2を切っている。溝状遺構1とは並行関係にあり、その距離は芯々で160cmを測る。北は調査区外に延び、検出し得た全長は160cm、幅42cm、深さは検出面から38cmを測る。南北軸線方向はN-25°-Wである。

土坑2はグリッド(x6、y3)付近、海拔23.75m前後に検出された。溝状遺構2を切り、不整形を呈す。北は調査区外。東西幅は120cm、深さは検出面から22cm前後を測る。

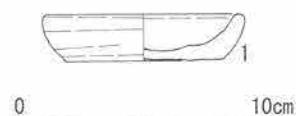


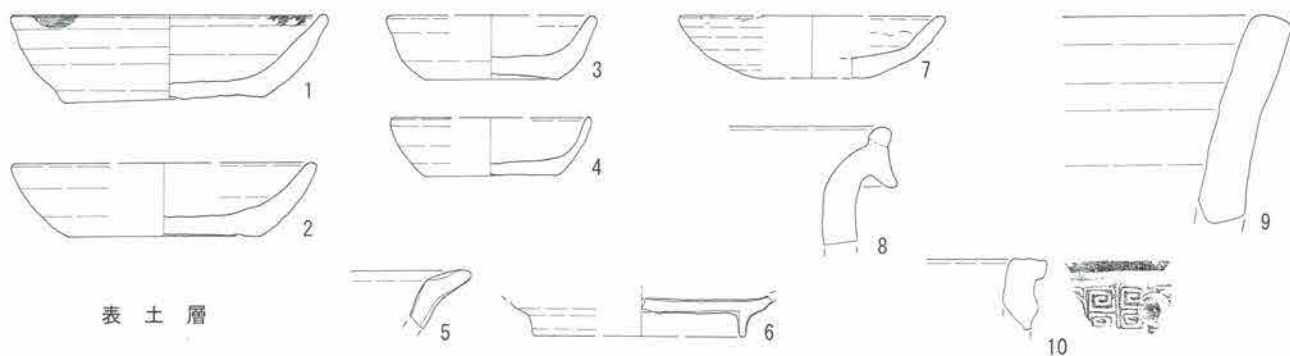
図7 溝状遺構3出土遺物

溝状遺構2と土坑2の覆土は以下の通り。

- 1層 暗茶褐色粘質土：小土丹粒（少量）。粘性あり。締り良い。（土坑2）
- 2層 黄褐色粘質土：1～2cm大の土丹粒（多）。粘性やや強い。締り良い。（土坑2）
- 3層 黄褐色粘質土：暗褐色粘質土ブロック。粘性やや強い。締り良い。（土坑2）
- 4層 暗灰色粘質土：黄褐色粘質土（少量）。粘性強い・締り良い。（溝2）

溝状遺構3（図6）

溝状遺構3はグリッド(x4、y7)付近、海拔23.7m前後に検出された。南北方向の浅い遺構である。南部は西方に緩やかに屈曲し、調査区外に延びている。検出し得た全長は220cm、幅34cm、深さは検出面から22cmを測る。覆土は暗褐色粘質土で1cm大の暗茶褐色粘質土ブロック（少量）・黄褐色粘質土ブロック・かわらけ小片を含む。粘性があり、締り良い。



表土層

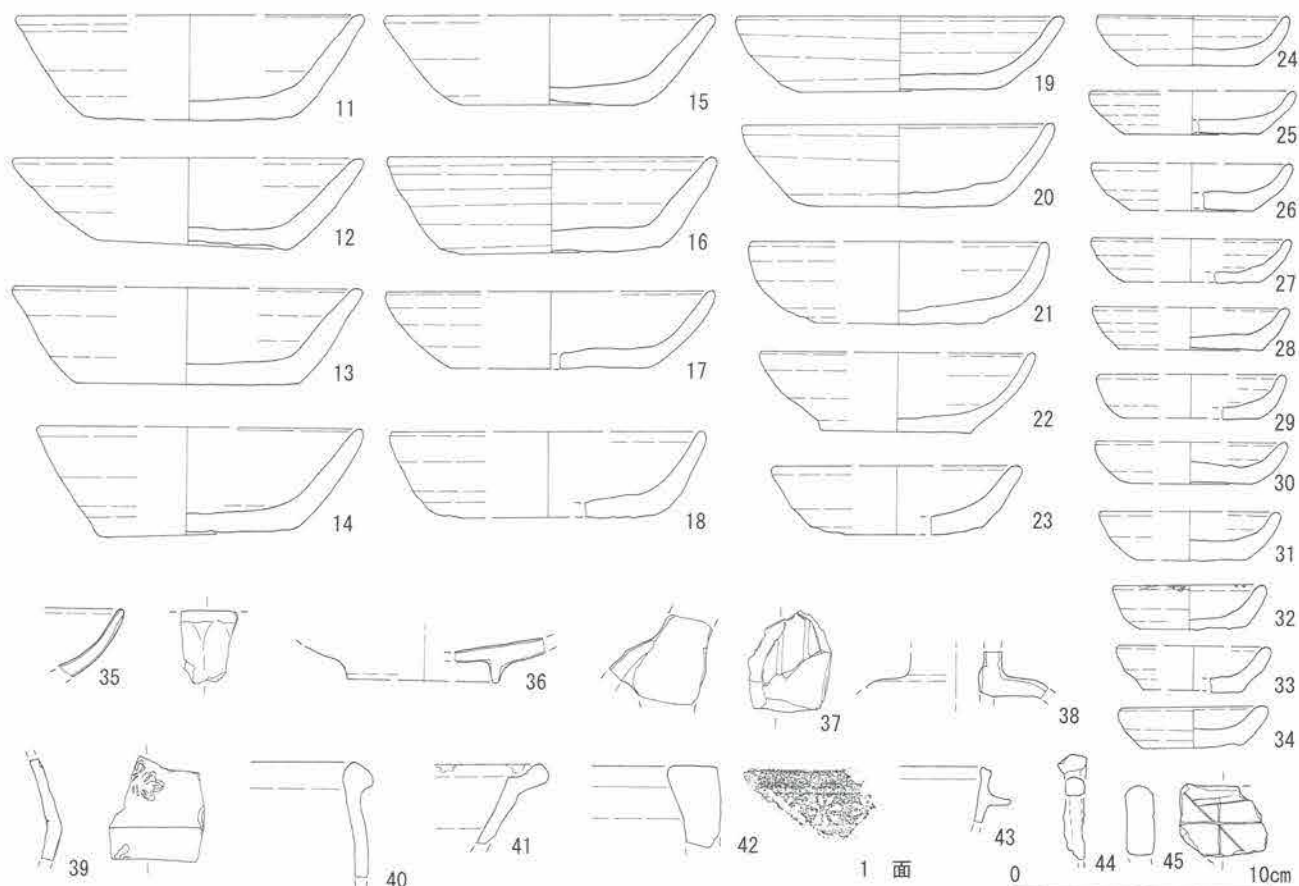


図8 表土層・1面出土遺物

溝状遺構 3 出土遺物 (図 7)

溝状遺構 3 出土遺物はかわらけの破片が数点出土しているが、小破片のため図示し得たのは図 7-1 のみであった。寸法は口径 8.0 cm、底径 6.3 cm、器高 1.8 cm を測る。底径が大きめで、浅く、厚ぼったい。内底面には指ナデ痕がある。胎土は淡橙色を呈し、微砂を含み、粉質。

図版番号	遺物番号	層位	遺構	製品名/産地	種別	口径/長さ	底径/幅	器高/厚さ	色調
8	1	表土層	-	かわらけ	轆轤成形	12.7	8.0	3.4	淡橙色系
8	2	表土層	-	かわらけ	轆轤成形	(12.2)	7.8	2.9	橙色系
8	3	表土層	-	かわらけ	轆轤成形	(8.4)	(5.2)	2.5	橙色系
8	4	表土層	-	かわらけ	轆轤成形	(8.0)	5.2	2.2	肌色系
8	6	表土層	-	舶載品	青磁鉢	-	(8.4)	-	-
8	7	表土層	-	瀬戸	縁釉小皿	(10.6)	(5.0)	2.9	-
8	11	1面	-	かわらけ	轆轤成形	(14.0)	(8.4)	4.3	橙色系
8	12	1面	-	かわらけ	轆轤成形	(14.0)	7.8	3.6	橙色系
8	13	1面	-	かわらけ	轆轤成形	(14.0)	9.1	3.9	淡橙色系
8	14	1面	-	かわらけ	轆轤成形	(13.0)	7.7	4.3	淡橙色系
8	15	1面	-	かわらけ	轆轤成形	(13.2)	7.4	3.6	橙色系
8	16	1面	-	かわらけ	轆轤成形	13.2	8.0	3.8	橙色系
8	17	1面	-	かわらけ	轆轤成形	(13.2)	(8.0)	3.2	淡橙色系
8	18	1面	-	かわらけ	轆轤成形	(12.6)	(8.4)	3.4	橙色系
8	19	1面	-	かわらけ	轆轤成形	13.1	7.9	3.0	淡橙色系
8	20	1面	-	かわらけ	轆轤成形	12.5	7.9	3.2	淡橙色系
8	21	1面	-	かわらけ	轆轤成形	(12.0)	(7.0)	3.3	淡橙色系
8	22	1面	-	かわらけ	轆轤成形	(11.0)	5.9	3.2	淡橙色系
8	23	1面	-	かわらけ	轆轤成形	(10.0)	(6.6)	2.7	淡橙色系
8	24	1面	-	かわらけ	轆轤成形	7.7	4.9	2.0	淡橙色系
8	25	1面	-	かわらけ	轆轤成形	(8.2)	5.4	1.8	淡橙色系
8	26	1面	-	かわらけ	轆轤成形	(8.0)	(4.9)	1.9	淡橙色系
8	27	1面	-	かわらけ	轆轤成形	(8.0)	(5.6)	1.7	淡橙色系
8	28	1面	-	かわらけ	轆轤成形	(7.8)	(5.0)	1.7	淡橙色系
8	29	1面	-	かわらけ	轆轤成形	(7.5)	(5.6)	1.8	淡橙色系
8	30	1面	-	かわらけ	轆轤成形	(7.6)	(5.2)	1.7	肌色系
8	31	1面	-	かわらけ	轆轤成形	(7.2)	(4.6)	1.9	橙色系
8	32	1面	-	かわらけ	轆轤成形	6.2	4.3	1.8	橙色系
8	33	1面	-	かわらけ	轆轤成形	(6.2)	(4.0)	1.8	橙色系
8	34	1面	-	かわらけ	轆轤成形	6.0	4.0	1.6	淡橙色系
8	36	1面	-	舶載品	青磁鉢	-	(6.0)	-	-
8	44	1面	-	鉄製品	釘	[4.2]	0.5	0.7	-
8	45	1面	-	滑石製品	鍋転用品	[2.7]	[3.5]	1.2	-

表土層出土遺物 (図8-1~10)

図8-1~4は轆轤成形のかわらけ。胎土は1・4が肌色、2・3が橙色を呈し、微砂を含み粉質。1の器表には煤が付着し、灯明皿である。図8-5・6は舶載の青磁。5は折れ縁鉢の口縁部片。6は鉢の底部片。釉調はいずれも青緑色を呈し、再火を受け肌荒れしている。素地は灰白色を呈し、粘性があり緻密である。図8-7は瀬戸の縁釉小皿。灰釉が縁にかけられる。胎土は黄褐色を呈し、堅緻。図8-8は常滑の甕。胎土は濃灰色を呈し、白色石粒を多く含む。器表は赤茶褐色を呈す。図8-9は瓦質手焙り。胎土は橙褐色を呈し、微砂・微石粒を多く含む。器表には薄く煤が付着している。図8-10は土風炉の口縁部片。胎土は白褐色を呈し、器表は磨かれている。外面には雷文と張付連珠文が施されている。

1面出土遺物 (図8-11~45)

図8-11~34は轆轤成形のかわらけ。11~21は大皿。22・23は中皿。24~34は小皿である。11~21・23・32~34は15世紀前半の器形。側面観は逆台形を呈し、胎部は直線的に開いて立ち上がる。大皿・中皿の口縁端部は外反する。22は薄手丸深タイプ。概ね、胎土は淡橙色を呈し、微砂を含み、粉質である。32・33は橙色を呈し、胎芯が黒く残る。図8-35~40は舶載品。35~38は青磁。35は蓮弁文碗。36は鉢の底部片。37は酒会壺の底部片。38は器種不明である。釉調は青緑色を呈し、微気泡多く失透する。光沢があるが、36は再火を受け肌荒れしている。素地は灰白色を呈し、粘性がある。35は一部橙色を呈す。39は青白磁の印花文水注の胴部片。釉調は淡水青色を呈し、再火のため肌荒れしている。内側は露胎。素地は白色を呈し、緻密。40は縁釉の盤。釉調は不透明な緑色を呈し、光沢がある。素地は灰色から肌色を呈し、粘性のある土に白色石粒を含む。焼成は良好で硬く焼き締まる。図8-41は瀬戸の折縁鉢。灰釉がかかる。胎土は灰色を呈し、硬質。図8-42は瓦質の手焙り。外面には菊花文スタンプが施される。器表は灰色を呈し、横位の磨きかけられている。胎土は白褐色を呈し、微石粒を多く含む。図8-43は土製鍔釜。口縁端部は内側に折り返されている。胎土は表面は白褐色を呈し、胎芯は黒色に残る。鍔下面に煤が付着している。図8-44は鉄製の釘。錆びひどく、遺存状態は悪い。図8-45は滑石製品。おそらく鍋の転用品。外面に線刻が施されている。

第1b面 (図9)

1b面は1-2面間、海拔23.65m付近の一部に検出された。2面と5cm程度しか差の無いほぼ同一レベルで、2面検出の溝1に重複する位置に検出された遺構群である。土坑2基、Pit4口、安山岩の礎石1個である。Pit及び礎石は並びをつかむことはできなかった。土坑も浅い掘り込みのものであった。

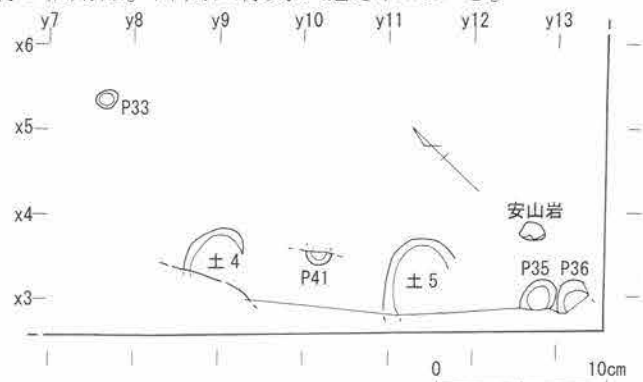


図9 1b面 遺構配置図

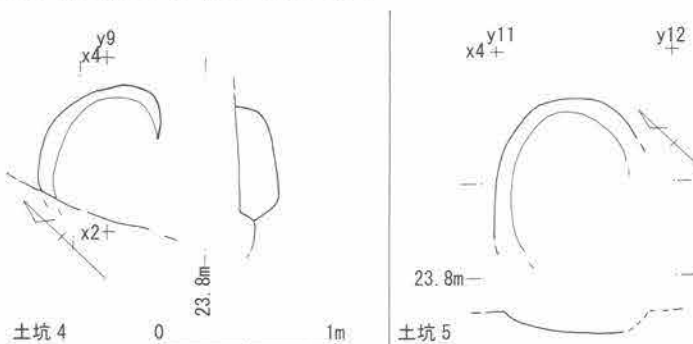


図10 1b面 土坑4・5

土坑4 (図10)

土坑4はグリッド(x4, y9)付近、海拔23.63m前後に検出された。南部は消滅している。深さは検出面から20cm前後を測る。

土坑5 (図10)

土坑5はグリッド(x4, y11)付近、海拔23.6m前後に検出された。南部は消滅し

ている。深さは検出面から 12 cm 前後を測り浅い。

土坑 5 出土遺物 (図 11)

図 11 は轆轤成形かわらけの小皿である。口径は復元で 8.0 cm 前後、底径は 5.2 cm 前後、器高は 1.6 cm 前後を測る。胎土は淡橙色～橙色を呈し、粉質である。

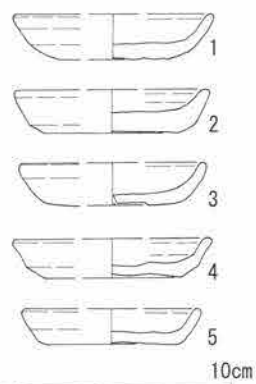


図 11 土坑 5 出土遺物

第 2 面 (図 12)

第 2 面は海拔 23.6 m 前後に検出された。溝 2 条、道路遺構、溝状遺構 2 条、土坑 1 基、Pit30 口が検出された。Pit は並びをつかめるものはなかった。ここでは、道路遺構と溝は関連性がある遺構群であるため、遺構の検出状況を記した後に遺物について記載する。

道路遺構 (図 12・13)

道路遺構はグリッド (x 9 ~ 5, y 3 ~ 13) 付近、海拔 23.7 m 付近前後に検出された。図 12 のトーンをかけた部分が硬化面である。両端は調査区外に延びる。西端は 20 cm 前後、東端は緩やかに 10 cm 前後の段差が付く。(図 12 a・b、図 13 b・c・d・e 断面図参照) 西側に側溝 (溝 1) を伴い、道幅は硬化面の最大幅は 208 cm を測る。さらに東側には 240 cm の距離を置いて軸線をほぼ同じくする溝 2 が検出された。南北軸線方向は N - 30° - W である。

溝 1 (図 12・13)

溝 1 は調査区西端、グリッド (x5 ~ 3, y 3 ~ 13) 付近、海拔 23.6 m 前後に検出され、その両端はさらに調査区外に延びる。構造は箱掘りで、両脇に根太材が据えられている。根太材は据え方によりかなりの高低差があり、12 cm 前後東側が低く据えられている。木材には芯々で 54 cm (1 尺 7 寸) 間隔で柄が切られている。検出し得た北部の根太木の柄は平面形凹型で、その他は口型である。側板は下部がごく一部遺存しているのみで、柱はすべて抜かれていた。溝幅は掘方が 120 cm、東西の根太材の間隔は芯々で 54 cm を測る。深さは検出面から 35 cm 前後を測る。南北軸線方向は N - 34° - W である。埋土の土

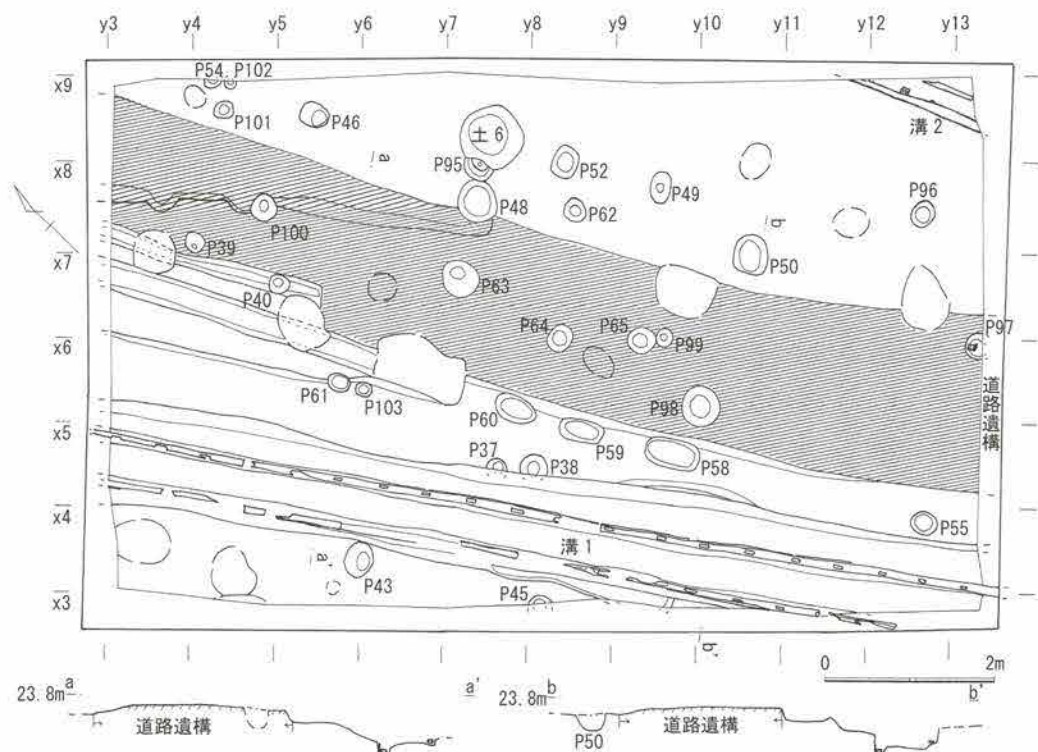


図 12 2 面遺構配置図

層注記は以下に示した表の通り。

番号	色調	土質	内容	粘性	締り	備考
1	暗褐色	粘質土	かわらけ粒・土丹粒・暗灰褐色粘土ブロック	なし	良い	道路遺構西覆土
2	暗褐色	粘質土	炭化物・土丹粒・黄褐色粘土ブロック	弱い	良い	道路遺構西覆土
3	暗褐色	粘質土	かわらけ粒・炭化物・土丹粒	弱い	良い	道路遺構西覆土
4	暗茶褐色	粘質土	かわらけ片・土丹	やや有り	悪い	道路遺構西覆土
5	暗褐色	粘質土	かわらけ片・土丹・褐鉄・暗灰褐色粘質土ブロック	やや有り	悪い	道路遺構西覆土
6	茶褐色	粘質土	かわらけ片(多)・土丹・炭化物	弱い	良い	溝1
7	暗褐色	粘質土	かわらけ片・炭化物・土丹粒・混入物少ない	弱い	やや悪い	溝1
8	暗褐色	粘質土	かわらけ片・炭化物・土丹粒	弱い	やや悪い	溝1
9	暗茶褐色	粘質土	かわらけ・炭化物・土丹・褐鉄(多)	強い	悪い	溝1
10	黄褐色	粘質土	かわらけ粒・土丹・褐鉄	強い	やや良い	裏込め
11	黄褐色	粘質土	かわらけ粒・土丹・褐鉄・暗灰褐色粘質土ブロック	強い	やや良い	据え方
12	暗青褐色	粘質土	かわらけ片・土丹・鎌倉石	とても強い	やや悪い	据え方
13	暗青褐色	粘質土	かわらけ片・土丹・鎌倉石	とても強い	やや悪い	据え方
14	暗褐色	粘質土	かわらけ粒・土丹・炭化物	弱い	良い	道路遺構西覆土
15	暗茶褐色	粘質土	かわらけ片・土丹・炭化物	やや有り	悪い	道路遺構西覆土
16	暗褐色	粘質土	かわらけ粒(やや多)・土丹(やや多)・炭化物	弱い	良い	道路遺構西覆土
17	明灰褐色	粘質土	かわらけ片・炭化物・黄褐色粒子	やや有り	やや悪い	溝1
18	明茶褐色	粘質土	褐鉄(とても多)・かわらけ片・炭化物	やや有り	やや良い	道路遺構西覆土
19	暗灰褐色	粘質土	暗灰褐色粘質土ブロック(多)・かわらけ片・炭化物・黄褐色粘質土ブロック(少)・鎌倉石粒	強い	やや悪い	溝1
20	灰褐色	粘質土	かわらけ片・炭化物・鎌倉石粒	やや強い	悪い	溝1
21	灰褐色	粘質土	かわらけ片・炭化物・土丹粒・黄褐色粘質土ブロック・混入物多い	やや強い	やや悪い	溝1
22	灰褐色	粘質土	かわらけ片・炭化物・土丹粒・黄褐色粘質土ブロック(多)	やや強い	良い	溝1
23	青褐色	粘質土	かわらけ片・炭化物・土丹粒・黄褐色粘質土ブロック(多)	強い	良い	溝1
24	暗青褐色	粘質土	炭化物(少)	強い	悪い	据え方
25	暗青褐色	粘質土	炭化物(少)	強い	悪い	据え方

溝 2 (図 12・14)

溝 2 は調査区東角、グリッド (x 9、y 12) 付近、海拔 23.5 m 前後に西壁のごく一部検出された。西壁は側板が杭 (板状) 2 本で留められ、側板の底の隙間に 3 枚の板がかませであった。溝 1 に比べて、簡易な作りである。また、底部に 1 枚板が横たわって検出された。深さは検出面から 30 cm 前後を測る。南北軸線方向は N - 28° - W である。溝 1・道路遺構とほぼ並行関係にあり、溝 1 と溝 2 の距離は最大 5 m を測る。出土遺物は溝 1 より先行するかわらけが出土している。

溝状遺構 4・5 (図 14)

溝状遺構 4・5 はグリッド (x 7、y 3) 付近、海拔 23.7 m 前後に隣り合って検出された。道路遺構の一部を切っている。いずれも調査区北外に続いている。南北軸線方向は N - 25° - W である。溝状遺構 4 の南端は攪乱されて消失している。上端幅 34 cm、深さは検出面から 35 cm 前後を測る。最深部は西側に寄っている。溝状遺構 5 の上端幅は 25 cm、深さは検出面から 15 cm 前後を測る。

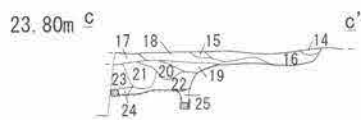
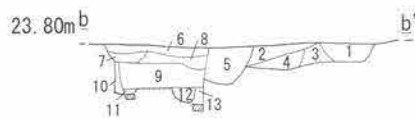


图 13 溝 1

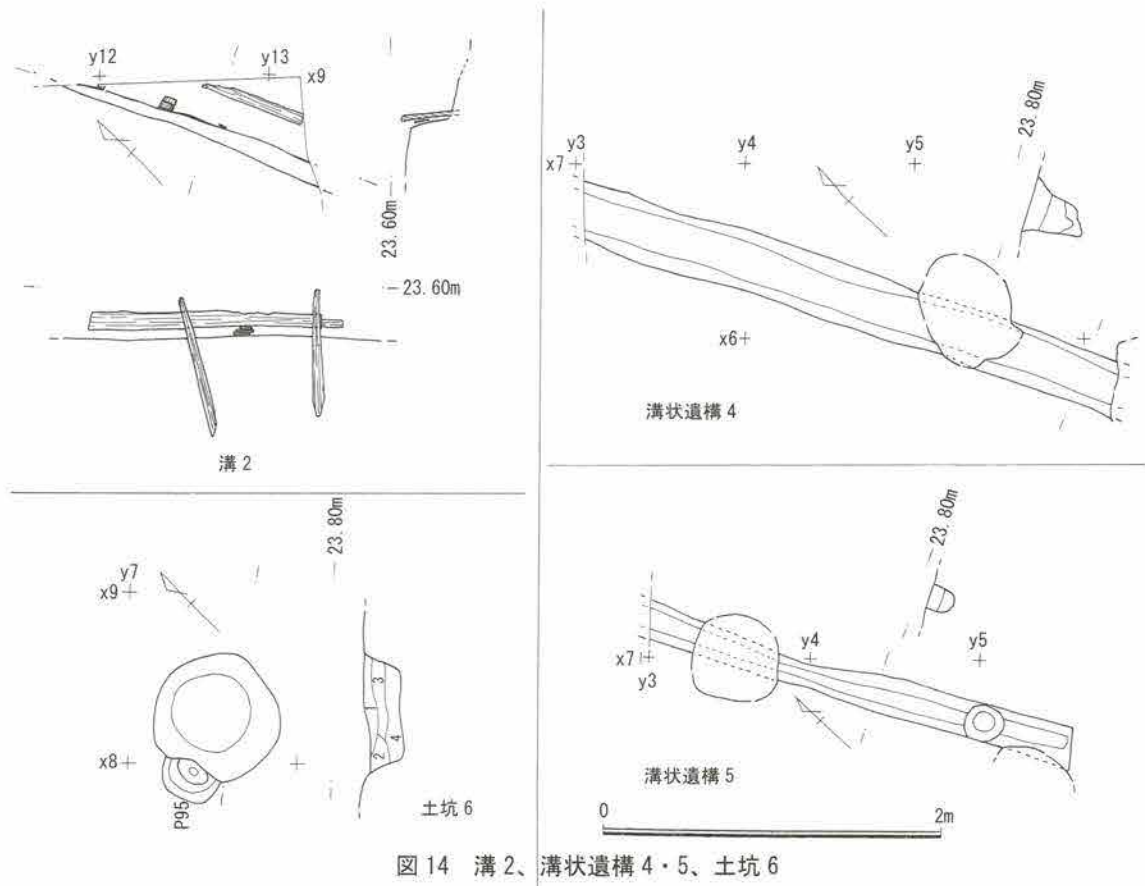


図14 溝2、溝状遺構4・5、土坑6

埋土の土層注記は以下の通り。

《溝状遺構4》

- 1層：暗灰褐色粘質土 ブロック状の粘土層 粘性やや強く、縮り良い。
- 2層：暗褐色粘質土層 1～2cm大の暗灰褐色粘質土ブロックを含む。粘性やや強く、縮り良い。
- 3層：暗灰褐色粘質土層 ブロック状の粘土層。粘性強く、縮り良い。

《溝状遺構5》

- 1層：黄褐色粘質土層 粘性あり、縮り良い。
- 2層：暗黄褐色粘質土層 1～2cm大の暗灰褐色粘質土ブロックを含む。粘性やや有り、縮り良い。

道路遺構出土遺物 (図15-1)

図15-1は舶載青磁の折縁鉢である。外面には鎬蓮弁文が施される。釉調は青緑色を呈し、再火を受け肌荒れ著しい。素地は白色を呈し緻密。

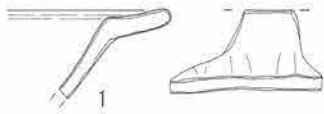
溝1出土遺物 (図15・16)

図15-2・3は溝1裏込め出土遺物である。2は轆轤成形のかわらけの小皿。口径7.9cm、底径5.1cm、器高1.9cmを測る。胎土は肌色を呈し、粉質。3は瀬戸の碗。透明の灰釉がかけられ、胎土は白褐色を呈し、硬質。口縁端部が外に摘み出されている。

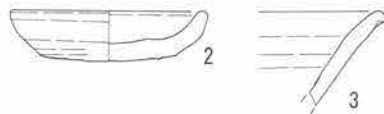
図15-4～44・図16-1～50は轆轤成形のかわらけ。図15-4～37は大皿。38～44は中皿。図16-1～49は小皿。図16-50は内折れ皿である。図15-4～27の大皿は胎部が厚く、器壁が丸味を持ち、若干底径が広い。口径は12.5～13.0cm前後を測る。

図16-1～39の小皿は胎部が厚く、底径がやや広く、浅い器形。図16-35～47は胎部が薄手だが、底径が小さめで、器壁は開き気味に立ち上がり、浅いタイプである。

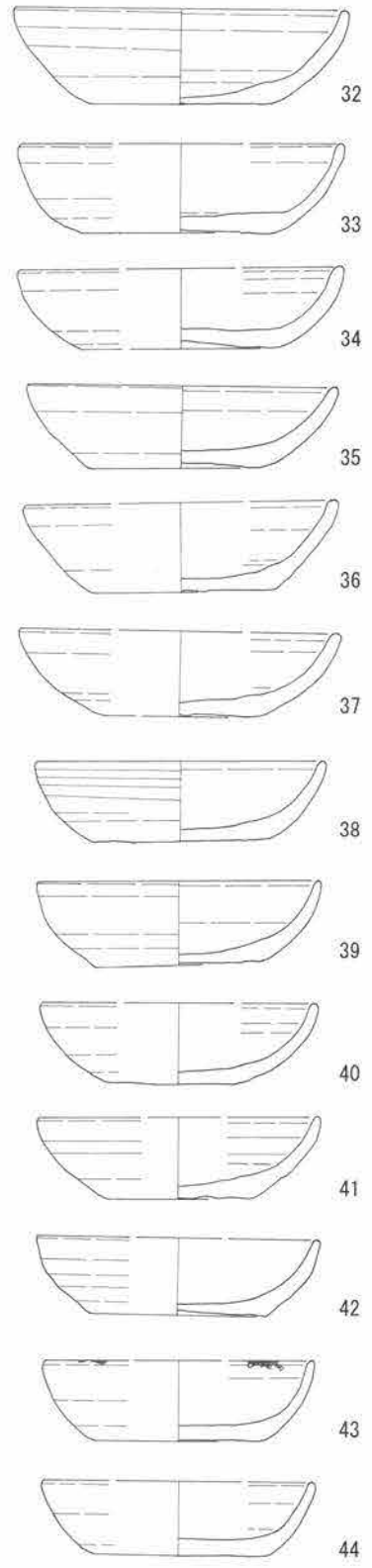
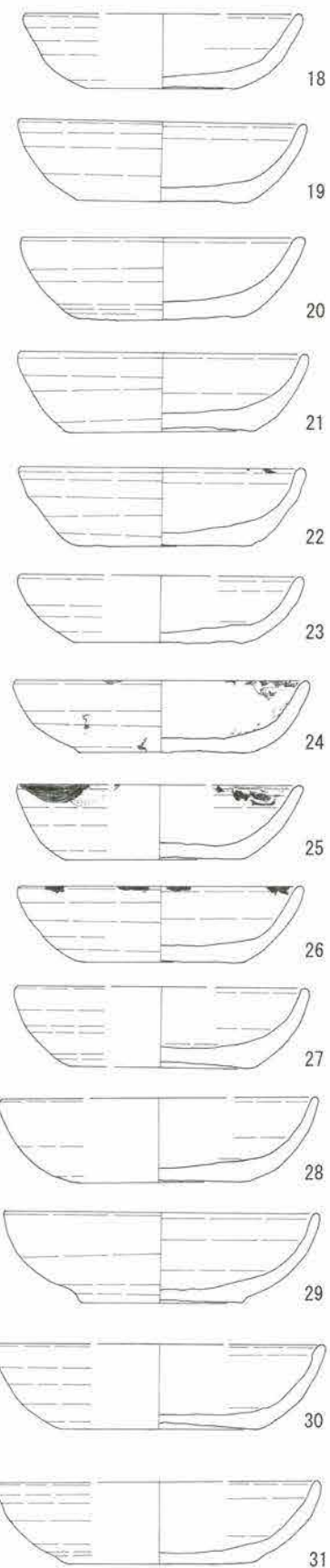
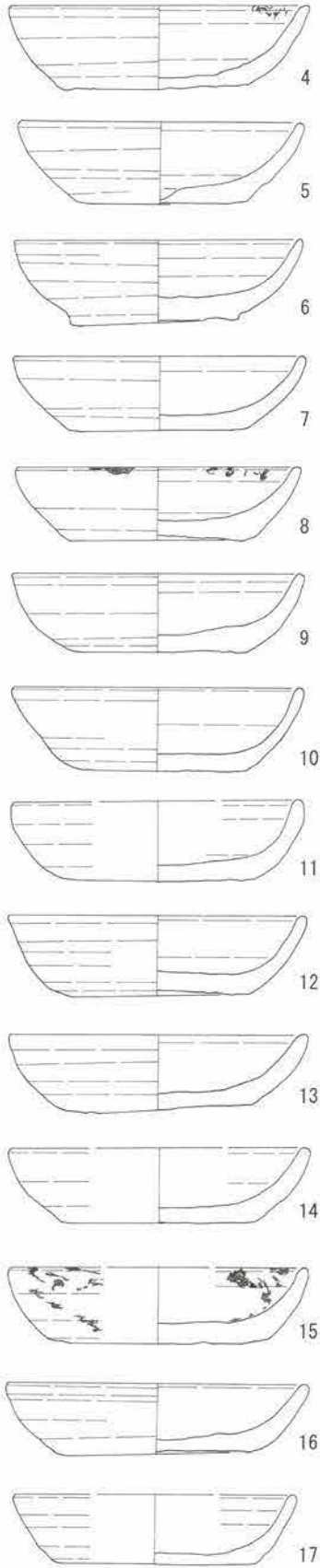
図15-28～37の大皿・図15-38～44の中皿・図16-48・49の小皿は薄手丸深タイプである。胎部が薄く作られ、器壁は丸味を持ち、深さがある。口径は大皿が13.0～14.0cm前後、中皿が11.0



道路遺構



溝1裏込め



溝1



图15 道路遺構・溝1(1)出土遺物

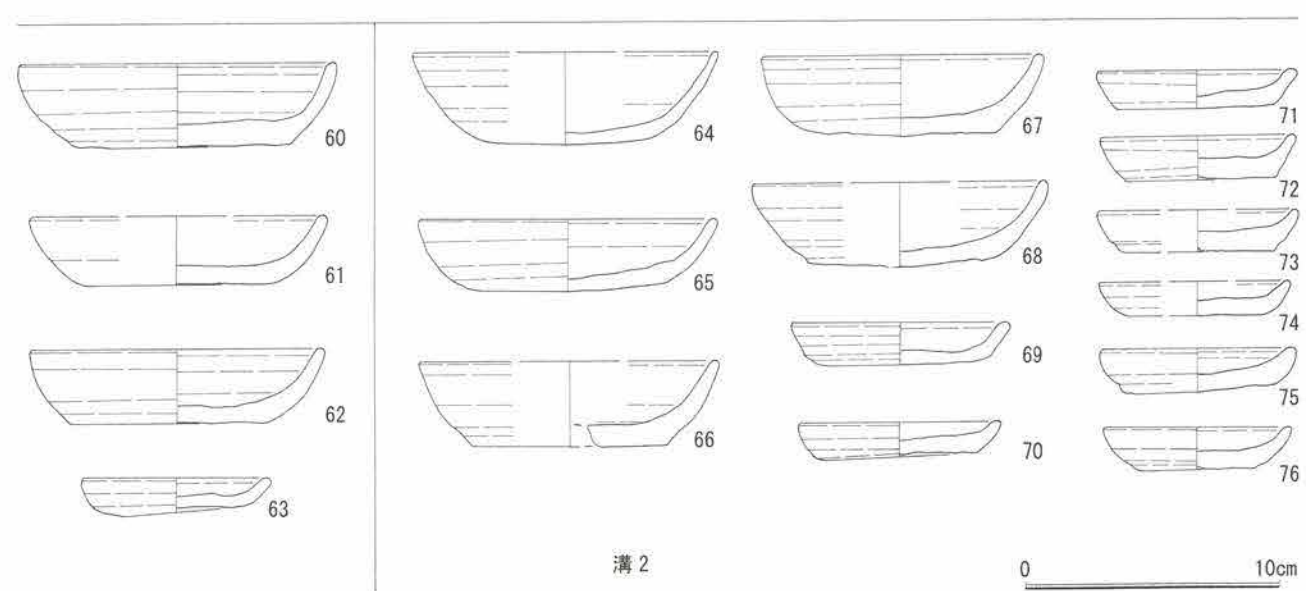
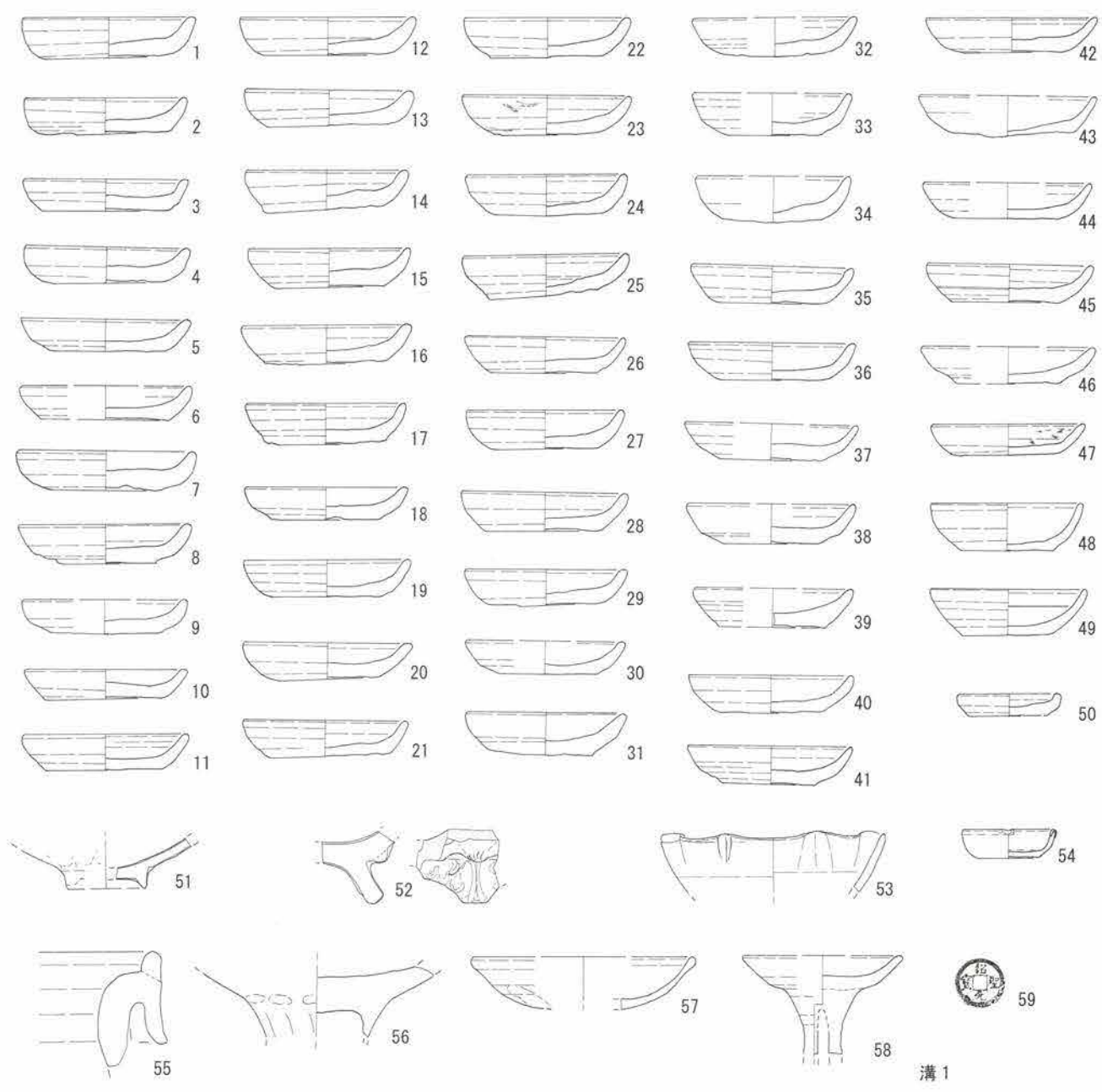


图 16 溝 1(2)・溝 2 出土遺物

図版番号	遺物番号	層位	遺構	製品名/産地	種別	口径/長さ	底径/幅	器高/厚さ	色調
15	2	2面	溝1裏込め	かわらけ	轆轤成形	7.9	5.1	1.9	肌色系
15	4	2面	溝1	かわらけ	轆轤成形	13.0	7.9	3.6	橙色系
15	5	2面	溝1	かわらけ	轆轤成形	12.4	7.0	3.6	肌色系
15	6	2面	溝1	かわらけ	轆轤成形	12.5	7.3	3.7	淡橙色系
15	7	2面	溝1	かわらけ	轆轤成形	12.6	7.7	3.3	橙色系
15	8	2面	溝1	かわらけ	轆轤成形	12.3	7.5	3.3	橙色系
15	9	2面	溝1	かわらけ	轆轤成形	12.6	7.6	3.4	橙色系
15	10	2面	溝1	かわらけ	轆轤成形	12.6	7.5	3.2	橙色系
15	11	2面	溝1	かわらけ	轆轤成形	(12.0)	8.1	3.5	橙色系
15	12	2面	溝1	かわらけ	轆轤成形	12.9	8.0	3.5	淡橙色系
15	13	2面	溝1	かわらけ	轆轤成形	12.9	8.3	3.4	肌色系
15	14	2面	溝1	かわらけ	轆轤成形	(13.0)	8.4	3.3	淡橙色系
15	15	2面	溝1	かわらけ	轆轤成形	(13.0)	8.0	3.3	橙色系
15	16	2面	溝1	かわらけ	轆轤成形	13.1	8.7	2.3	橙色系
15	17	2面	溝1	かわらけ	轆轤成形	(12.2)	8.5	3.0	肌色系
15	18	2面	溝1	かわらけ	轆轤成形	(12.2)	7.3	3.3	橙色系
15	19	2面	溝1	かわらけ	轆轤成形	12.7	7.5	3.4	淡橙色系
15	20	2面	溝1	かわらけ	轆轤成形	12.5	7.3	3.6	淡橙色系
15	21	2面	溝1	かわらけ	轆轤成形	12.7	8.4	3.6	橙色系
15	22	2面	溝1	かわらけ	轆轤成形	12.6	7.7	3.5	橙色系
15	23	2面	溝1	かわらけ	轆轤成形	(12.5)	7.2	2.9	淡橙色系
15	24	2面	溝1	かわらけ	轆轤成形	13.0	7.2	3.2	橙色系
15	25	2面	溝1	かわらけ	轆轤成形	(12.6)	7.2	3.2	橙色系
15	26	2面	溝1	かわらけ	轆轤成形	12.6	7.0	3.3	橙色系
15	27	2面	溝1	かわらけ	轆轤成形	(13.0)	(8.0)	3.4	淡橙色系
15	28	2面	溝1	かわらけ	轆轤成形	(14.0)	8.0	3.6	淡橙色系
15	29	2面	溝1	かわらけ	轆轤成形	13.8	7.1	4.0	肌色系
15	30	2面	溝1	かわらけ	轆轤成形	(14.6)	8.7	3.8	橙色系
15	31	2面	溝1	かわらけ	轆轤成形	(14.2)	(8.3)	3.6	淡橙色系
15	32	2面	溝1	かわらけ	轆轤成形	13.5	7.4	3.9	橙色系
15	33	2面	溝1	かわらけ	轆轤成形	(13.2)	7.8	3.1	橙色系
15	34	2面	溝1	かわらけ	轆轤成形	(13.2)	(7.8)	3.3	橙色系
15	35	2面	溝1	かわらけ	轆轤成形	12.6	6.9	3.4	橙色系
15	36	2面	溝1	かわらけ	轆轤成形	(12.7)	7.6	3.6	淡橙色系
15	37	2面	溝1	かわらけ	轆轤成形	(13.0)	(7.0)	3.5	橙色系
15	38	2面	溝1	かわらけ	轆轤成形	11.8	7.1	3.3	橙色系
15	39	2面	溝1	かわらけ	轆轤成形	11.5	6.8	3.4	淡橙色系
15	40	2面	溝1	かわらけ	轆轤成形	(11.2)	5.7	3.3	淡橙色系
15	41	2面	溝1	かわらけ	轆轤成形	(11.4)	6.4	3.3	橙色系
15	42	2面	溝1	かわらけ	轆轤成形	(11.4)	7.0	3.1	橙色系
15	43	2面	溝1	かわらけ	轆轤成形	(11.0)	6.2	3.2	橙色系
15	44	2面	溝1	かわらけ	轆轤成形	(11.0)	7.1	3.0	淡橙色系
16	1	2面	溝1	かわらけ	轆轤成形	8.2	6.0	2.0	肌色系
16	2	2面	溝1	かわらけ	轆轤成形	7.7	6.0	1.7	橙色系
16	3	2面	溝1	かわらけ	轆轤成形	7.8	6.0	1.5	橙色系
16	4	2面	溝1	かわらけ	轆轤成形	7.8	5.7	1.8	肌色系
16	5	2面	溝1	かわらけ	轆轤成形	8.0	5.5	1.6	橙色系
16	6	2面	溝1	かわらけ	轆轤成形	(8.2)	6.0	1.6	淡橙色系
16	7	2面	溝1	かわらけ	轆轤成形	8.5	5.7	1.8	橙色系
16	8	2面	溝1	かわらけ	轆轤成形	8.2	4.7	1.8	淡橙色系

図版番号	遺物番号	層位	遺構	製品名/産地	種別	口径/長さ	底径/幅	器高/厚さ	色調
16	9	2面	溝1	かわらけ	轆轤成形	(7.8)	5.2	1.7	淡橙色系
16	10	2面	溝1	かわらけ	轆轤成形	7.7	5.4	1.4	肌色系
16	11	2面	溝1	かわらけ	轆轤成形	7.9	5.4	1.7	肌色系
16	12	2面	溝1	かわらけ	轆轤成形	8.3	5.7	1.8	肌色系
16	13	2面	溝1	かわらけ	轆轤成形	8.0	5.8	1.8	橙色系
16	14	2面	溝1	かわらけ	轆轤成形	7.7	5.5	2.0	淡橙色系
16	15	2面	溝1	かわらけ	轆轤成形	7.7	5.2	1.9	淡橙色系
16	16	2面	溝1	かわらけ	轆轤成形	8.0	5.6	1.8	橙色系
16	17	2面	溝1	かわらけ	轆轤成形	7.6	5.8	1.9	淡橙色系
16	18	2面	溝1	かわらけ	轆轤成形	7.7	5.8	1.6	淡橙色系
16	19	2面	溝1	かわらけ	轆轤成形	7.9	5.1	1.8	淡橙色系
16	20	2面	溝1	かわらけ	轆轤成形	8.0	5.1	1.9	橙色系
16	21	2面	溝1	かわらけ	轆轤成形	7.8	5.8	1.8	橙色系
16	22	2面	溝1	かわらけ	轆轤成形	7.9	5.3	1.9	橙色系
16	23	2面	溝1	かわらけ	轆轤成形	8.0	5.2	1.9	橙色系
16	24	2面	溝1	かわらけ	轆轤成形	7.6	5.2	1.9	淡橙色系
16	25	2面	溝1	かわらけ	轆轤成形	7.9	5.3	2.1	淡橙色系
16	26	2面	溝1	かわらけ	轆轤成形	7.6	5.0	1.7	淡橙色系
16	27	2面	溝1	かわらけ	轆轤成形	7.4	5.1	1.8	肌色系
16	28	2面	溝1	かわらけ	轆轤成形	7.9	5.3	1.9	肌色系
16	29	2面	溝1	かわらけ	轆轤成形	7.7	4.9	1.8	橙色系
16	30	2面	溝1	かわらけ	轆轤成形	(7.6)	4.8	1.7	淡橙色系
16	31	2面	溝1	かわらけ	轆轤成形	7.6	5.0	2.0	肌色系
16	32	2面	溝1	かわらけ	轆轤成形	(7.8)	5.4	1.8	淡橙色系
16	33	2面	溝1	かわらけ	轆轤成形	(7.6)	4.4	2.0	淡橙色系
16	34	2面	溝1	かわらけ	轆轤成形	(7.4)	(5.2)	2.1	淡橙色系
16	35	2面	溝1	かわらけ	轆轤成形	7.7	5.1	1.8	淡橙色系
16	36	2面	溝1	かわらけ	轆轤成形	7.9	5.1	1.8	肌色系
16	37	2面	溝1	かわらけ	轆轤成形	(8.2)	4.5	1.7	肌色系
16	38	2面	溝1	かわらけ	轆轤成形	(8.0)	4.8	1.8	淡橙色系
16	39	2面	溝1	かわらけ	轆轤成形	(7.6)	(5.0)	1.9	淡橙色系
16	40	2面	溝1	かわらけ	轆轤成形	7.8	5.0	1.8	肌色系
16	41	2面	溝1	かわらけ	轆轤成形	7.8	4.5	1.8	肌色系
16	42	2面	溝1	かわらけ	轆轤成形	8.1	4.6	1.7	橙色系
16	43	2面	溝1	かわらけ	轆轤成形	(8.4)	5.7	1.9	橙色系
16	44	2面	溝1	かわらけ	轆轤成形	(8.0)	4.8	1.6	橙色系
16	45	2面	溝1	かわらけ	轆轤成形	7.9	5.1	1.8	橙色系
16	46	2面	溝1	かわらけ	轆轤成形	(8.2)	(4.6)	1.8	肌色系
16	47	2面	溝1	かわらけ	轆轤成形	7.3	4.8	1.5	肌色系
16	48	2面	溝1	かわらけ	轆轤成形	7.2	4.3	2.3	橙色系
16	49	2面	溝1	かわらけ	轆轤成形	7.4	4.2	2.3	肌色系
16	50	2面	溝1	内折れかわらけ	轆轤成形	4.9	3.8	1.1	橙色系
16	60	2面	溝2裏込め	かわらけ	轆轤成形	12.7	8.5	3.4	淡橙色系
16	61	2面	溝2裏込め	かわらけ	轆轤成形	(11.8)	7.6	2.8	淡橙色系
16	62	2面	溝2裏込め	かわらけ	轆轤成形	(11.8)	7.7	3.1	橙色系
16	63	2面	溝2裏込め	かわらけ	轆轤成形	7.6	4.5	1.6	淡橙色系
16	64	2面	溝2	かわらけ	轆轤成形	12.2	6.8	3.7	肌色系
16	65	2面	溝2	かわらけ	轆轤成形	12.2	8.1	2.9	肌色系
16	66	2面	溝2	かわらけ	轆轤成形	(12.0)	7.8	3.6	肌色系
16	67	2面	溝2	かわらけ	轆轤成形	11.4	7.7	3.2	淡橙色系

図版番号	遺物番号	層位	遺構	製品名/産地	種別	口径/長さ	底径/幅	器高/厚さ	色調
16	68	2面	溝2	かわらけ	轆轤成形	(11.8)	(7.5)	3.4	肌色系
16	69	2面	溝2	かわらけ	轆轤成形	8.7	6.4	1.7	肌色系
16	70	2面	溝2	かわらけ	轆轤成形	8.1	6.0	1.5	淡橙色系
16	71	2面	溝2	かわらけ	轆轤成形	8.0	6.4	1.6	橙色系
16	72	2面	溝2	かわらけ	轆轤成形	7.8	6.0	1.8	肌色系
16	73	2面	溝2	かわらけ	轆轤成形	(8.0)	(6.1)	1.7	肌色系
16	74	2面	溝2	かわらけ	轆轤成形	7.4	(3.2)	1.8	肌色系
16	75	2面	溝2	かわらけ	轆轤成形	7.8	5.9	1.8	肌色系
16	76	2面	溝2	かわらけ	轆轤成形	7.5	4.6	1.8	肌色系

～11.8 cm前後、小皿が7.3 cm前後を測り、底径は小さい。

概ね、胎土は肌色～淡橙色～橙色を呈し、微砂を含み、粉質である。図16-35～47のタイプと薄手丸深タイプは比較的にきめ細かい。図15-5は内底部中央に穿孔の痕跡がある。図15-4・8・10・22・24・25・26・44は灯明皿である。

図16-51・52は舶載青磁である。51は蓮弁文碗である。釉調は灰緑色を呈し、光沢は良いが微気泡多く失透している。素地は灰色を呈し、粘性があり緻密。52は香炉の脚部である。釉調は緑青色を呈し、光沢はあるが、微気泡多く失透している。やや細かく貫入が入る。脚部先端は使用により磨滅している。素地は灰白色を呈し、意図的かは不明であるが、脚部は橙色を呈す。

図16-53・54は瀬戸の入れ子である。53は八弁の輪花型で、口径は9.9 cmを測る。器表には自然釉が薄くかかる。胎土は灰色を呈し、白色石粒をごくわずか含み、緻密。54は注ぎ口が1ヶ所付く。口径4.4 cm、底径2.8 cm、器高1.4 cmを測る。器表には自然釉がかかる。胎土は灰色を呈し、緻密。

図16-55は常滑の甕の口縁部片。器表は橙褐色、胎土は黒灰色を呈す。白色石粒をやや多く含み、硬く焼き締まる。

図16-56はかわらけ質の土製品である。灯明台であろう。胎土は橙色を呈し、やや微砂・白針を多く含みざらつく。脚部は中空で壁は薄い。

図16-57は瓦器の黒縁皿である。口径は(10.6) cmを測る。口縁端部が黒色処理されている。胎土は若干青味のある灰色を呈し、堅緻である。

図16-58は白かわらけ質の灯明台。皿の口径は(7.6) cmを測る。胎土は白褐色を呈し、柱部分の胎芯は黒色を呈す。

図16-59は紹聖元寶である。(初鑄1094)

溝2出土遺物(図16)

図16-60～63は裏込め出土のかわらけである。いずれも轆轤成形で、60～62は大皿、63は小皿である。大皿は比較的底径が大きく、側面観は逆台形を呈し、器壁は丸味を持ちつつ上方に立ち上がっている。小皿は底径が大きく、浅い。胎土は淡橙色～橙色を呈し、微砂をやや多く含み、粉質である。

図16-64～76は溝2出土のかわらけである。いずれも轆轤成形で、64～68は大皿、69～76は小皿である。64は胎部は薄手だが、いわゆる薄手丸深型とは違うタイプのかわらけである。やや回転の遅い糸切りで、器形は碗形を呈し、丁寧に作られている。胎土は肌色を呈し、きめ細かく、粉質である。65～76は作りがやや粗雑で、底径が大きく、器高は浅い。胎土は肌色あるいは淡橙色を呈し、微砂を多く含む。

土坑6(図14)

土坑6はグリッド(x9、y7)付近、海拔23.6 m前後に検出された。西部の一部をPit95と切り合っ

ている。平面形は直径 74 cm のやや歪んだ円形を呈し、断面形は逆台形を呈し、深さは検出面から 20 cm 前後を測る。埋土の土層注記は以下の通り。

- 1 層：暗褐色粘質土層 炭化物・0.5～1 cm 大の土丹粒を含む。締り良い。
- 2 層：暗褐色粘質土層 炭化物・0.5～1 cm 大の土丹粒を共にやや少量含む。締り良い。
- 3 層：暗褐色粘質土層 炭化物・0.5～1 cm 大の土丹粒を共にやや少量含む。粘性やや強く、締り悪い。
- 4 層：暗褐色粘質土層 かわらけ片・炭化物共に少量含む。粘性有り、締りやや悪い。

2 面検出 Pit (図 12)

2 面からは 30 口の Pit が検出された。Pit95 は 2 段に掘り込まれていた。Pit97 は礎板と柱痕が遺存していた。しかし、建物や堀などのまとまりをつかむことはできなかった。また、殆どの Pit が検出面からの深さが、11 cm～20 cm 前後で浅い。2 面期に属するものより新しい時期のものが含まれている可能性があるが、平面プランとしては 2 面の広がり確認されたため、ここに載せた。詳細は以下の通り。

Pit 番号	グリッド		平面形	大きさ cm		深さ cm	備考	Pit 番号	グリッド		平面形	大きさ cm		深さ cm	備考
	x	y		東西幅	南北幅				x	y		東西幅	南北幅		
37	4	7	(円形)	-	24	13		60	5	8	楕円形	30	50	12	
38	4	8	(円形)	-	34	13		62	7	8	円形	26	25	16	
39	7	4	円形	23	24	12		63	6	7	円形	44	44	26	
40	7	5	円形	26	24	21		64	6	8	円形	32	30	21	
43	4	6	楕円形	30	42	9		65	6	9	楕円形	30	36	7	
45	3	8	(円形)	-	23	22		95	8	7	(円形)	[26]	36	28	2段
46	9	6	不整形円形	30	34	17		96	7	12	楕円形	31	26	12	
48	7	7	円形	44	46	14		97	6	13	(円形)	30	-	11	礎板と柱あり
49	7	9	円形	27	25	17		98	5	10	円形	47	44	23	
50	7	10	円形	46	42	23		99	6	9	円形	20	20	16	
52	8	8	円形	38	32	11		100	8	5	円形	30	32	18	
54	9	4	不明	22	-	12		101	9	4	円形	20	20	15	
55	4	12	円形	30	30	11		102	9	4	(円形)	14	-	12	
58	4	9	楕円形	36	66	9		103	6	6	円形	18	18	11	
59	5	8	楕円形	27	54	15									

2 面出土遺物 (図 17)

図 17-1～20 は轆轤成形のかわらけ。1～7 は大皿、8 は中皿、9～20 は小皿である。5～8・20 は薄手丸深タイプ系である。胎土は比較的きめ細かく、粉質である。その他はやや作りが粗雑で、底径が大きく、側面観は逆台形を呈す。小皿は浅い。胎土は微砂を多く含む。

図 17-21～23 は舶載品。21 は青磁蓮弁文碗。釉調は青緑色を呈し、光沢があり、透明度は微気泡のため若干失透する。素地は灰色を呈し、緻密。22 は緑釉の盤。釉調は濃緑色を呈し、内面に施釉されている。内面には 2 条の暗文が施されている。胎土は灰色～黄褐色を呈し、微石粒を多く含む。23 は高麗青磁の壺の胴部片。黒土と白土で葡萄文が象嵌されている。葡萄の実が 2 重の輪で表現され、外輪と葉が白土、内輪が黒土で象嵌される。釉調は若干青味のある灰色を呈し、透明度はある。素地は灰色を呈し、粘性があり緻密。

図 17-24 は常滑の甕の口縁部片。口縁部は端部を上方に摘み出し、幅の狭い縁帯を作っている。胎土は灰色を呈し、硬質で、器表は濃灰色を呈す。

図 17-25 は軒丸瓦。連珠文と三つ巴文である。瓦当部分は貼りつけ。

図 17-26～28 は鉄製の釘。錆びがひどく、遺存状態は悪い。

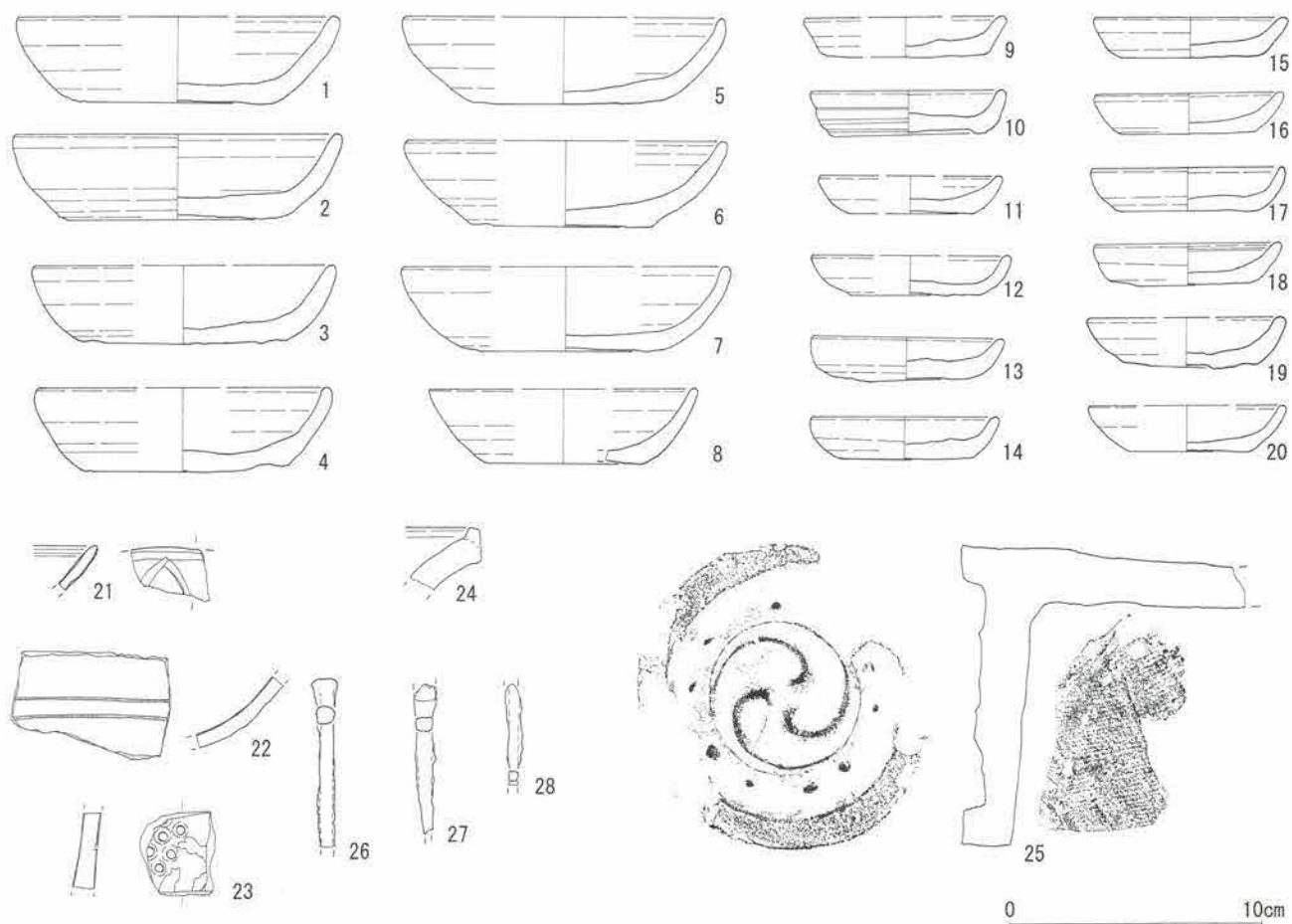


図17 2面出土遺物

図版番号	遺物番号	層位	遺構	製品名/産地	種別	口径/長さ	底径/幅	器高/厚さ	色調
17	1	2面	-	かわらけ	轆轤成形	(13.0)	8.2	3.4	橙色系
17	2	2面	-	かわらけ	轆轤成形	13.3	8.8	3.3	淡橙色系
17	3	2面	-	かわらけ	轆轤成形	(12.2)	8.4	3.2	橙色系
17	4	2面	-	かわらけ	轆轤成形	(12.0)	8.3	3.3	橙色系
17	5	2面	-	かわらけ	轆轤成形	(13.0)	7.6	3.4	橙色系
17	6	2面	-	かわらけ	轆轤成形	(13.0)	7.4	3.3	橙色系
17	7	2面	-	かわらけ	轆轤成形	(13.2)	(6.8)	3.4	橙色系
17	8	2面	-	かわらけ	轆轤成形	(10.8)	6.5	2.9	橙色系
17	9	2面	-	かわらけ	轆轤成形	(8.2)	(6.4)	1.5	肌色系
17	10	2面	-	かわらけ	轆轤成形	7.9	6.2	1.8	橙色系
17	11	2面	-	かわらけ	轆轤成形	(8.0)	5.3	1.6	淡橙色系
17	12	2面	-	かわらけ	轆轤成形	(7.4)	(5.0)	1.5	淡橙色系
17	13	2面	-	かわらけ	轆轤成形	7.8	5.6	1.8	淡橙色系
17	14	2面	-	かわらけ	轆轤成形	7.6	5.3	1.7	橙色系
17	15	2面	-	かわらけ	轆轤成形	7.8	5.7	1.6	淡橙色系
17	17	2面	-	かわらけ	轆轤成形	7.6	5.4	1.6	橙色系
17	17	2面	-	かわらけ	轆轤成形	7.8	5.4	1.7	淡橙色系
17	18	2面	-	かわらけ	轆轤成形	7.6	5.6	1.7	橙色系
17	19	2面	-	かわらけ	轆轤成形	(8.0)	5.4	2.1	肌色系
17	20	2面	-	かわらけ	轆轤成形	8.0	4.9	1.8	淡橙色系

第3面 (図 18)

第3面は海拔 23.5 m前後に検出された。第2面の直下である。検出遺構は溝1条・柱穴列1列・Pit1口である。

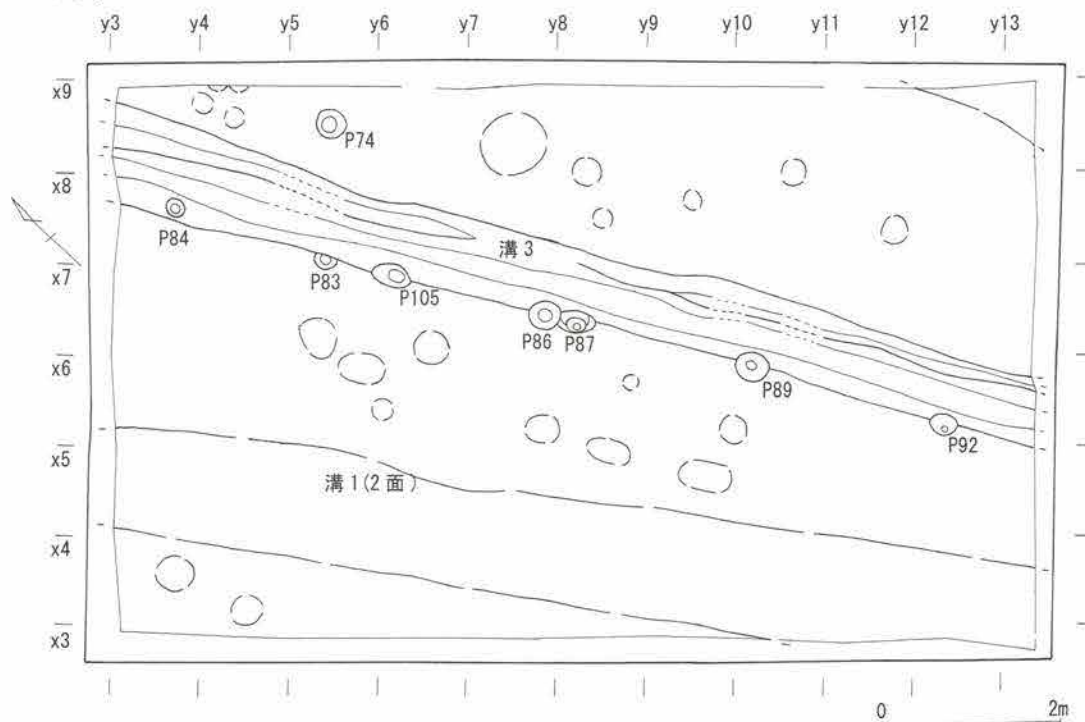


図 18 3面遺構配置図

溝3・柱穴列1 (図 19)

溝3はグリッド(x9～5、y3～13)付近、海拔 23.5 m前後に検出された。その両端は調査区外に延びる。東岸には平場が付き、最深部は西に寄っている。検出し得た全長は10 m 90 cmを測る。上端幅は80 cm前後、下端幅は30 cm前後を測る。深さは検出面から38 cm前後を測る。南北軸線方向はN-27°-Wである。埋土の土層注記は以下の表の通りである。

柱穴列1は溝3の西岸縁に検出された。Pit7口から成り、調査区外にさらに広がる。柱穴間の距離は北から苺々で、180 cm-80 cm-176 cm-38 cm-200 cm-230 cmである。柱間が一定でないこと、東西に展開の無いことからこの柱穴列は扉跡であろう。南北軸線方向はN-27°-Wで、溝3と同じである。

溝3出土遺物 (図 20)

図20-1～10は轆轤成形のかわらけである。1～6は大皿、7～10は小皿である。1～5は同じタイプで、側面観は逆台形を呈し、器壁中位から緩やかに外反して立ち上がる。6は薄手丸深型に近いタイプである。胎土は6は肌色、その他は淡橙色～橙色を呈し、粉質である。図20-11は山茶碗の底部片。内面は磨滅している。胎土は灰色を呈し、微石粒を含み、比較的きめ細かい。

3面検出Pit (図 18)

3面からは8口のPitが検出されたが、その内の7口は柱穴列を構成するものであった。グリッド(x9、y5)付近、海拔 23.5 m前後に検出されたPit74は単独で調査区の端に検出され、建物等の並びはつかめなかった。平面形は直径32 cm前後の円形を呈し、深さは検出面から50 cmを測る。

3面出土遺物 (図 21)

図21-1～3は轆轤成形のかわらけ。1は大皿、2・3は小皿である。1の側面観は逆台形を呈し、

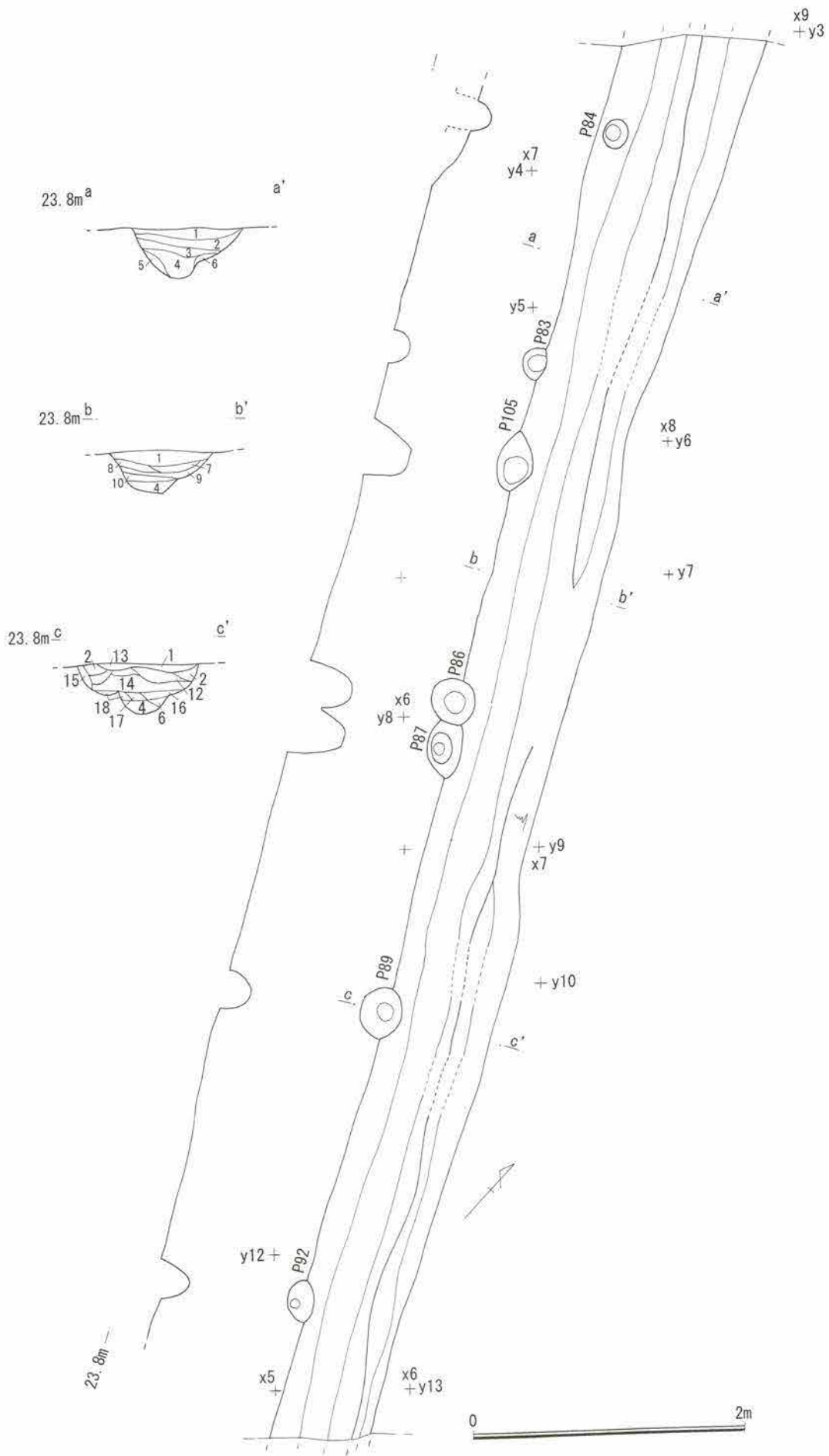


图 19 溝 3 / 柱穴列 1

番号	色調	土質	内容	粘性	締り
1	暗茶褐色	土	かわらけ細片・炭化物・0.5cm大の土丹粒・鎌倉石粒・褐鉄	-	とても良い
2	暗灰褐色	土	かわらけ片・炭化物・0.5~2cm大の土丹粒・鎌倉石粒	-	良い
3	暗褐色	粘質土	かわらけ片・炭化物・土丹粒(少)・砂利(少)	やや有り	良い
4	青灰色	土	鎌倉石粒の多い層・炭化物・0.5cm大の土丹粒	-	良い
5	暗褐色	粘質土	炭化物・0.5cm大の土丹粒・鎌倉石粒	やや有り	良い
6	暗褐色	粘質土	炭化物・褐鉄(少)	有り	良い
7	暗茶褐色	土	かわらけ細片・炭化物・0.5cm大の土丹粒・鎌倉石粒・褐鉄	-	やや悪い
8	赤茶褐色	土	かわらけ片・炭化物・褐鉄(全体に)	-	とても良い
9	暗茶褐色	粘質土	かわらけ細片・炭化物・0.5cm大の土丹粒・鎌倉石粒・褐鉄	なし	良い
10	赤茶褐色	土	かわらけ片・炭化物・褐鉄(多・全体に)	-	とても良い
11	暗茶褐色	土	かわらけ片・炭化物・0.5~2cm大の土丹粒・鎌倉石粒	-	良い
12	暗茶褐色	粘質土	かわらけ片・炭化物・0.5~2cm大の土丹粒・5cm大の鎌倉石・褐鉄(少)	やや有り	やや悪い
13	暗茶褐色	粘質土	かわらけ片・炭化物(多)・0.5~2cm大の土丹粒・鎌倉石粒	-	良い
14	暗茶褐色	粘質土	かわらけ片・炭化物・0.5~1cm大の土丹・褐鉄(下辺に帯状)	やや有り	良い
15	暗茶褐色	土	かわらけ細片・炭化物・0.5cm大の土丹粒(多)・鎌倉石粒・褐鉄	やや有り	-
16	暗褐色	粘質土	かわらけ細片・炭化物・0.5cm大の土丹粒	有り	良い
17	暗褐色	粘質土	かわらけ細片・炭化物・0.5cm大の土丹粒・鎌倉石粒	有り	良い
18	暗褐色	粘質土	17層に似るが混入物の量が少ない	有り	良い
19	暗褐色	粘質土	炭化物・褐鉄(少)	有り	良い

器壁中位で角度を上方に変えて立ち上がる。2・3は底径が小さめで、ある程度深さがある。胎土は概ね淡橙色を呈し、粉質。図21-4はの丸瓦。凸面は撫でられ、凹面は布目痕がはっきりと残る。胎土は灰色を呈し、粗いが、硬く焼き締まっている。

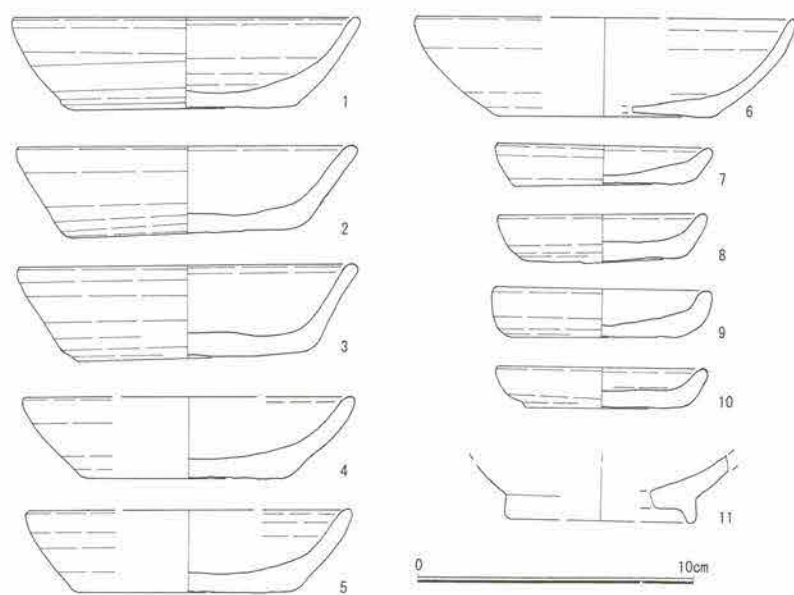


図20 溝3出土遺物

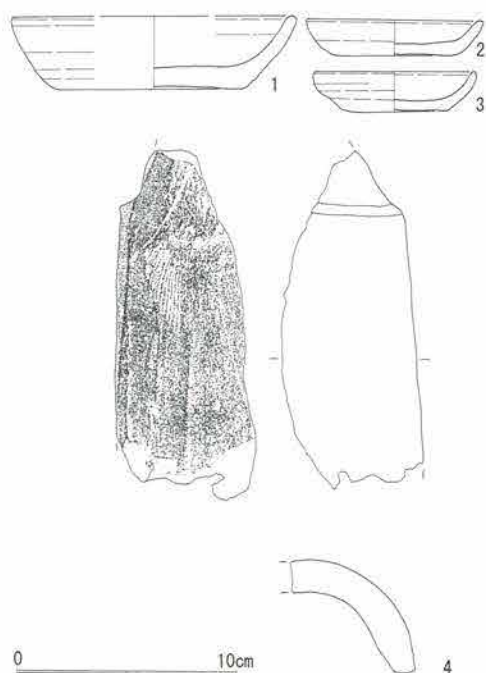


図21 3面出土遺物

図版番号	遺物番号	層位	遺構	製品名/産地	種別	口径/長さ	底径/幅	器高/厚さ	色調
20	1	3面	溝3	かわらけ	轆轤成形	12.8	8.4	2.9	橙色系
20	2	3面	溝3	かわらけ	轆轤成形	12.5	8.4	3.4	橙色系
20	3	3面	溝3	かわらけ	轆轤成形	12.5	8.3	3.4	橙色系
20	4	3面	溝3	かわらけ	轆轤成形	(12.2)	7.6	3.1	淡橙色系
20	5	3面	溝3	かわらけ	轆轤成形	(12.0)	7.9	3.1	淡橙色系
20	6	3面	溝3	かわらけ	轆轤成形	(14.0)	7.8	3.6	肌色系
20	7	3面	溝3	かわらけ	轆轤成形	8.0	6.2	1.6	淡橙色系
20	8	3面	溝3	かわらけ	轆轤成形	7.7	5.8	1.8	淡橙色系
20	9	3面	溝3	かわらけ	轆轤成形	8.1	6.1	1.8	淡橙色系
20	10	3面	溝3	かわらけ	轆轤成形	7.8	5.7	1.5	橙色系
21	1	3面	-	かわらけ	轆轤成形	(13.2)	8.6	3.3	橙色系
21	2	3面	-	かわらけ	轆轤成形	8.2	5.5	1.7	橙色系
21	3	3面	-	かわらけ	轆轤成形	8.5	4.7	1.8	肌色系

第4面 (図22)

第4面は海拔23.4m付近に検出された。掘立柱建物1棟・柱穴列1列・溝1条・Pit8口が検出された。

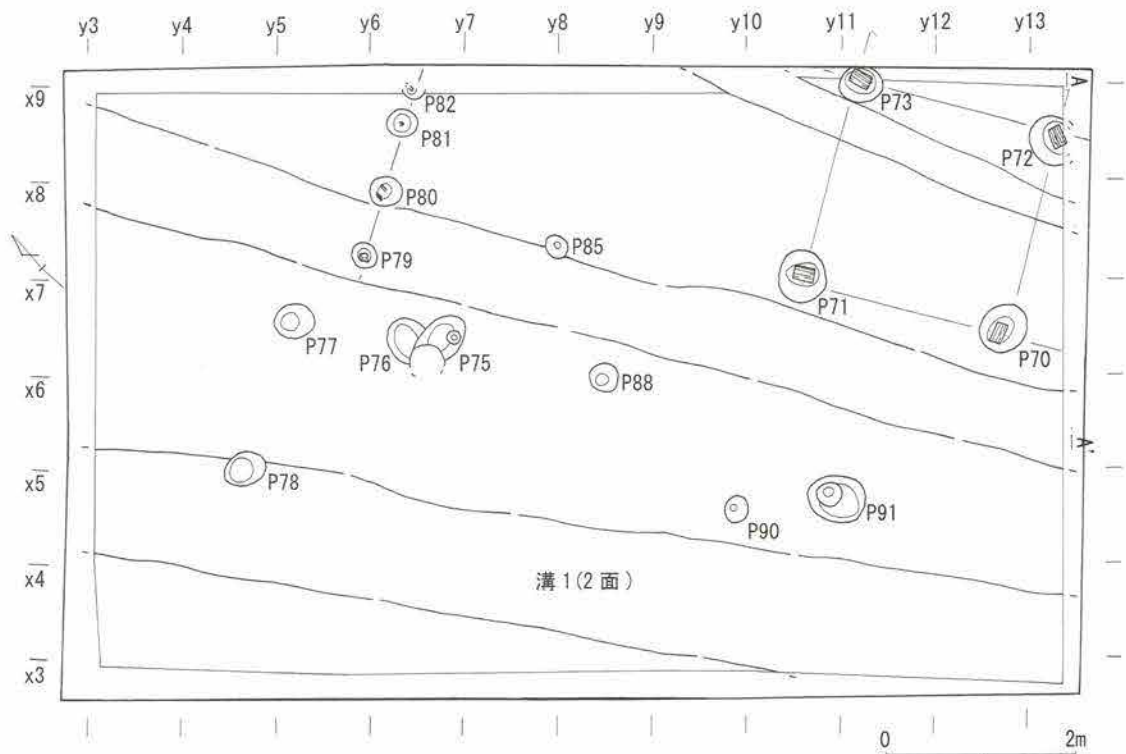
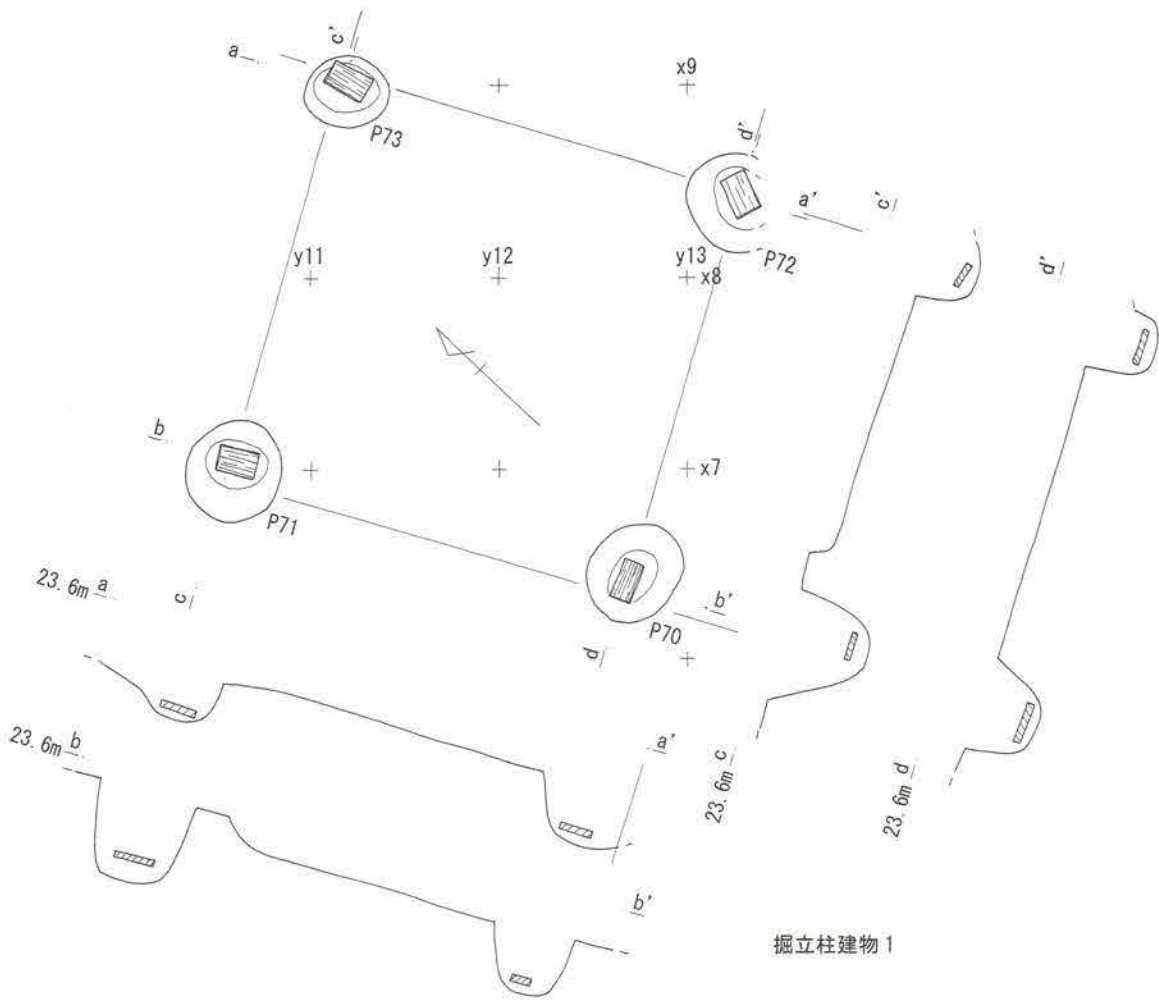


図22 4面遺構配置図

掘立柱建物1 (図23)

掘立柱建物1はグリッド(x9, y11)付近、海拔23.4~23.5m前後に検出された。柱穴4口が芯々で柱間210cm間隔に四角く並ぶ。その東と南は調査区外に延び、検出された柱穴4口は建物の北西隅である。柱穴はいずれも平面形は円形を呈し、直径は45cm~50cm前後、深さは検出面から34cm・50cm・32cm・26cm(Pit番号の小さい順)を測る。すべての柱穴に礎板が遺存し、礎板の上面レベルは海拔23.13m・23.17m・23.1m・23.14m(Pit番号の小さい順)を測る。南北軸線方向はN-27°-Wである。



掘立柱建物 1

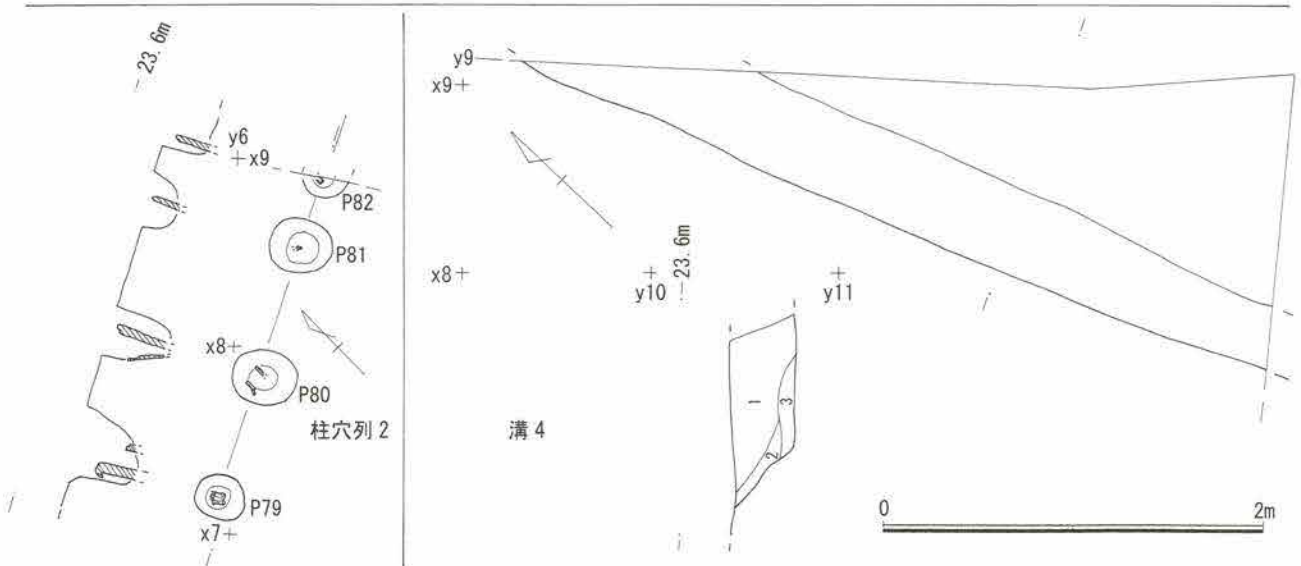


図 23 掘立柱建物 1 / 柱穴列 2 / 溝 4

柱穴列 2 (図 23・22)

柱穴列 2 はグリッド (x 9, y 6) 付近、海拔 23.4 m 前後に検出された。4 口の柱穴から成る東西方向の列で、東部は調査区外に続く。柱穴間の距離は芯々で西から 66 cm・74 cm・40 cm を測る。平面形は直径 25 cm ~ 34 cm 前後の円形を呈し、深さは検出面から 34 cm・34 cm・16 cm・24 cm を測る。すべての柱穴にやや粗末な柱が遺存していた。軸線方向は掘立柱建物 1 に並行している。掘立柱建物 1 に伴う堀

であろう。建物との距離は4 m 52 cmを測る。

4面検出Pit (図22)

4面からは掘立柱建物1と柱穴列2に属さないPitが8口検出された。詳細は以下表の通り。

Pit番号	グリッド		平面形	大きさ cm		深さ cm	備考
	x	y		東西幅	南北幅		
75	6	7	(楕円形)	-	42	28	柱2本
76	6	6	(円形)	42	-	26	
77	6	5	円形	39	40	37	
78	5	4	楕円形	34	47	34	
85	7	8	円形	20	23	24	
88	6	8	円形	28	30	23	
90	4	10	楕円形	30	22	25	
91	4	11	楕円形	46	60	31	2段

溝4 (図23)

溝4はグリッド(x9, y9)付近、海拔23.3 m前後に検出された。掘立柱建物1と重複した位置である。その大半は調査区外に広がり、詳細は不明。深さは検出面から25 cm前後を測る。南北軸線方向はN-20°-Wである。この溝は掘立柱建物1と重複する位置にあり、検出面はどちらも第4面だが、今回検出された遺構群の中で一番古い遺構である。埋土の土層注記は以下の通りである。

1層：黒褐色粘質土 炭化物・木片・1 cm大の土丹(少)を含む。粘性やや強く、縮り悪い。
 2層：黒褐色粘質土 1層に似るが、きめが粗い。
 3層：黒褐色粘質土 炭化物・木片・1 cm大の土丹(少)を含む。粘性やや強く、縮りやや良い。

- 4面出土遺物
- 4面からは青磁劃花文碗などの中世遺物が数点出土しているが、いずれも小破片で、図示し得るものはなかった。

中世層出土の古代遺物 (図24)

図24は中世層出土の古代遺物である。1・2は8世紀頃、3～5は古墳中期～後期の遺物が出土している。

中世層出土の古代遺物 (図24)

図24-1は須恵の坏の底部片。胎土は灰色を呈し、硬く焼き締まる。図24-2～5は土師。2は坏の口縁部片。口縁上面に沈線状の窪みがある。胎土は橙色を呈す。3は高坏の坏部分の破片。外面破片下部には強く稜がある。内外面ともに粗く篋磨きが施され、両面に赤彩される。胎土は淡橙色を呈し、胎芯は黒灰色を呈す。4は甕の口縁部片。内面には粗く刷毛目が残る。胎土は淡橙色を呈し、微石粒を多く含む。5は甕の底部片。胎土は淡橙色を呈し、微砂を多く含む。外面の一部には煤が付着している。

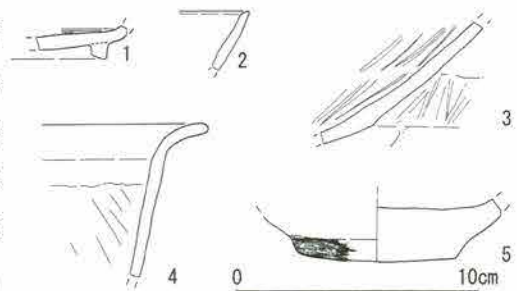


図24 中世層出土の古代遺物

第4章 まとめ

第3章で報告した調査成果に若干の考察を加えまとめとしたい。

遺跡の年代

今回の調査からは、4期の生活面（第1～4面）が検出された。各面出土かわらけの形式から以下の時期区分が置けよう。

第1面（第4期）：14世紀後半～15世紀代。

第2面（第3期）：14世紀前半。

第3面（第2期）：13世紀末～14世紀初頭頃。

第4面（第1期）：13世紀第4四半期。

各面の概要

各面の様相は時代の古い下層から順を追って概観したい。

尚今回、中世遺物の中に古代遺物が複数混入して出土している。古くは古墳中期頃の時期におくことができよう。これらは第1章で紹介した山ノ内道周辺遺跡（図1-7）から出土した古代土器と凡そ時期を並行しており、密接に関係すると考えられる。今後周辺地域で発掘調査を実施するに当たっては、この時期を念頭において計画せねばなるまい。

第1期

この面からは調査区の南東角付近から礎板を伴う柱穴が4口、建物としてのまとまりを持って検出された。柱間は何れも210cm（7尺）あり武家屋敷内で見つかる標準的な間尺を示す。また北側4.5mの距離には建物北辺の柱並びに並行する東西方向の塀の柱穴と考えられる柱穴列がある。この建物と塀は調査区の東・南方にさらに拡がりをもっており、遺構群の拡がりは広範におよぶことが予想される。

また建物と重複する位置関係に建物に先行する溝遺構が検出されており、同一地面の中で場の性格変化が確認される。

第2期

第2期面になると調査区内から建物遺構は検出されず、第1期面掘立柱建物柱建物の西側の位置に南北方向の溝（溝3）が造作される。この溝3と第1期面建物の南北軸線方向は共通しており、場としての利用の変化は認められるが、区画性は継承している。

第3期

第3期面は今回最も遺構が密度濃く検出された期間で、調査区内に限るならば最繁栄期とすることができる。調査区の西壁際には規模は小さいが南北方向の箱堀（溝1）があり、その東方約1mの距離には通路と考えられる幅2mの硬化面が並行しており、共に調査区を貫通する。また通路の東方、調査区の南東角部からも同方向の溝（溝2）が検出されている。2・3期は共通して土地を区画する遺構が検出されており、建物を中心とした生活の場は移動したようだ。

これら溝と通路は現在の山ノ内道と並行しており、往時の山ノ内道との対比が問題になるが、このま

ま北側に延長すると円覚寺の現境内にぶつかっており、円覚寺の旧境内あった内部の通路と考えたほうが良さそうだ。

第4期

第4期面では、柱穴や溝状の細長い土坑（溝状遺構1～3）等が検出されたが、建物と確定できる柱穴のまとまりはない。しかし上述の溝状遺構の軸線方向は、第1～3期遺構群の軸線方向と共通しており、区画性は継承している。遺構の検出状況を3期と比較すると調査区内においては、衰微の傾向が顕著と言わざるを得ないが、第1期から第2・3期への様相の違いを見ると、単に場の性格の変化と考えることも可能ではないか。

終わりに

以上、本調査区内における各遺構面の時期区分、遺構の変遷を一瞥した。しかし個人住宅に伴う緊急調査という調査面積の制約上、遺跡の全容をつぶさに看取することはなかなか困難な作業といえよう。今回のまとめも付会な点が多々あるように感じる。昨今このような小規模な発掘調査が中心となった鎌倉においては、それらを補うには発掘に対する格段の技術と理解が必要となることは間違いない。



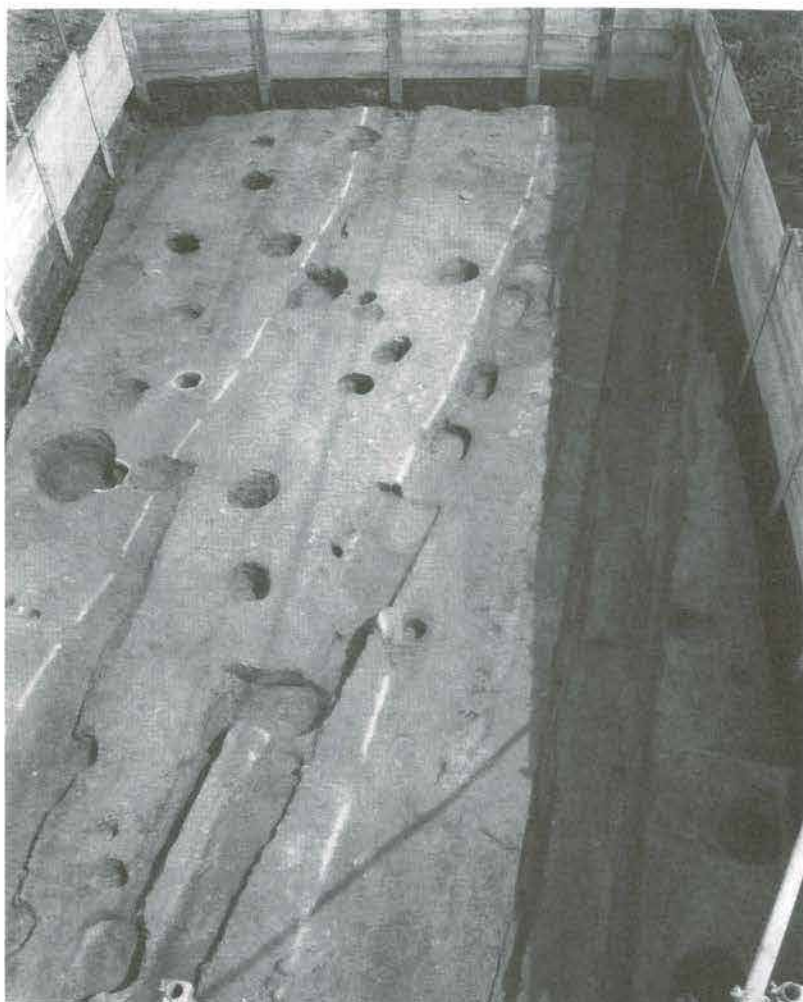
A. 1面全景（西より）



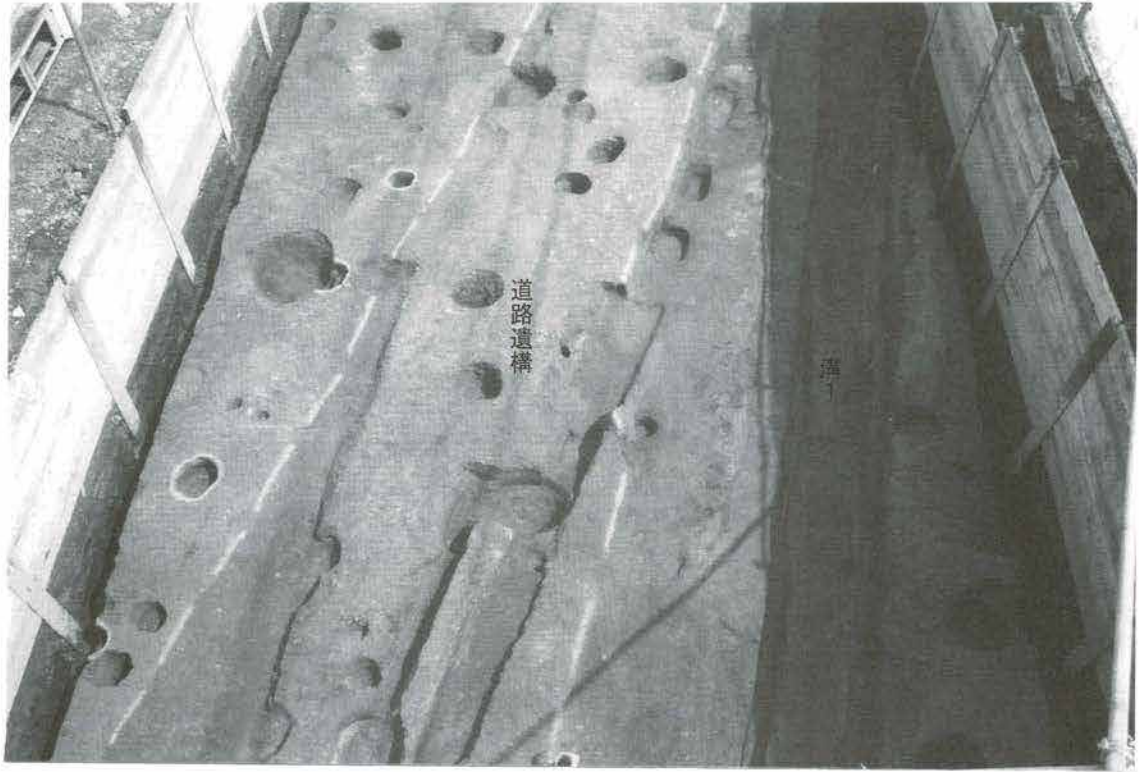
B. 溝状遺構1 覆土



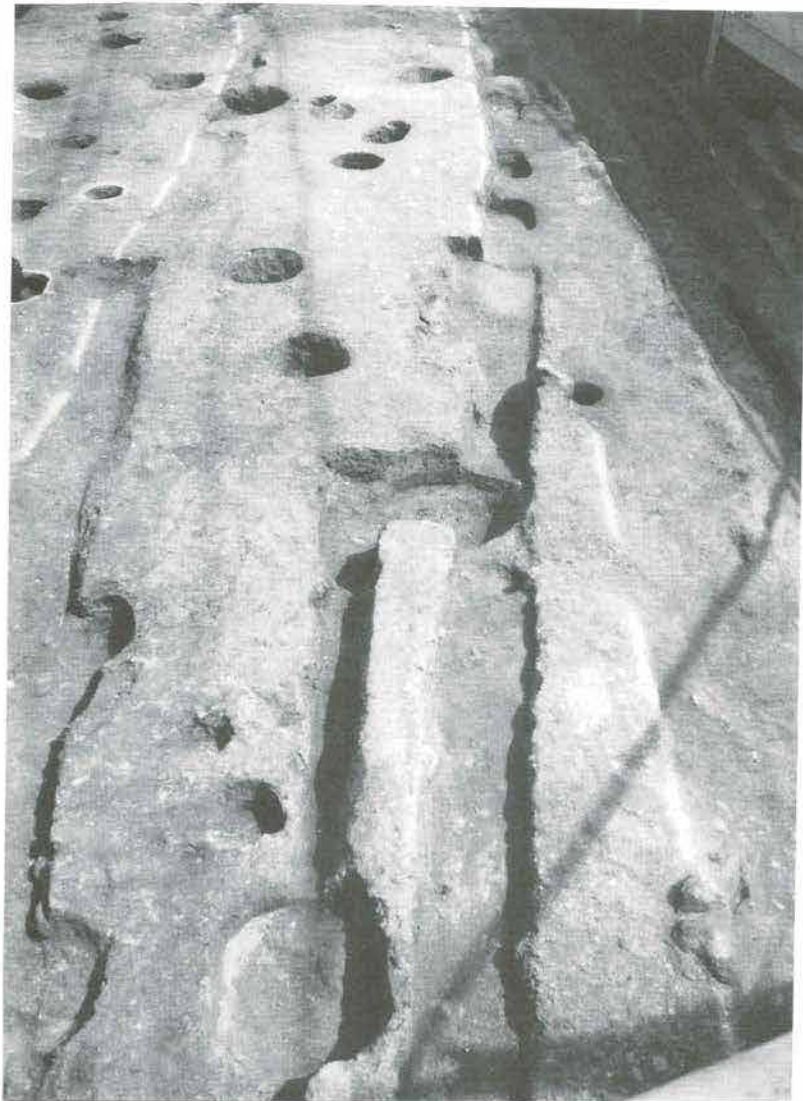
▲ A. 溝状遺構 2・土坑 2 南北ベルト



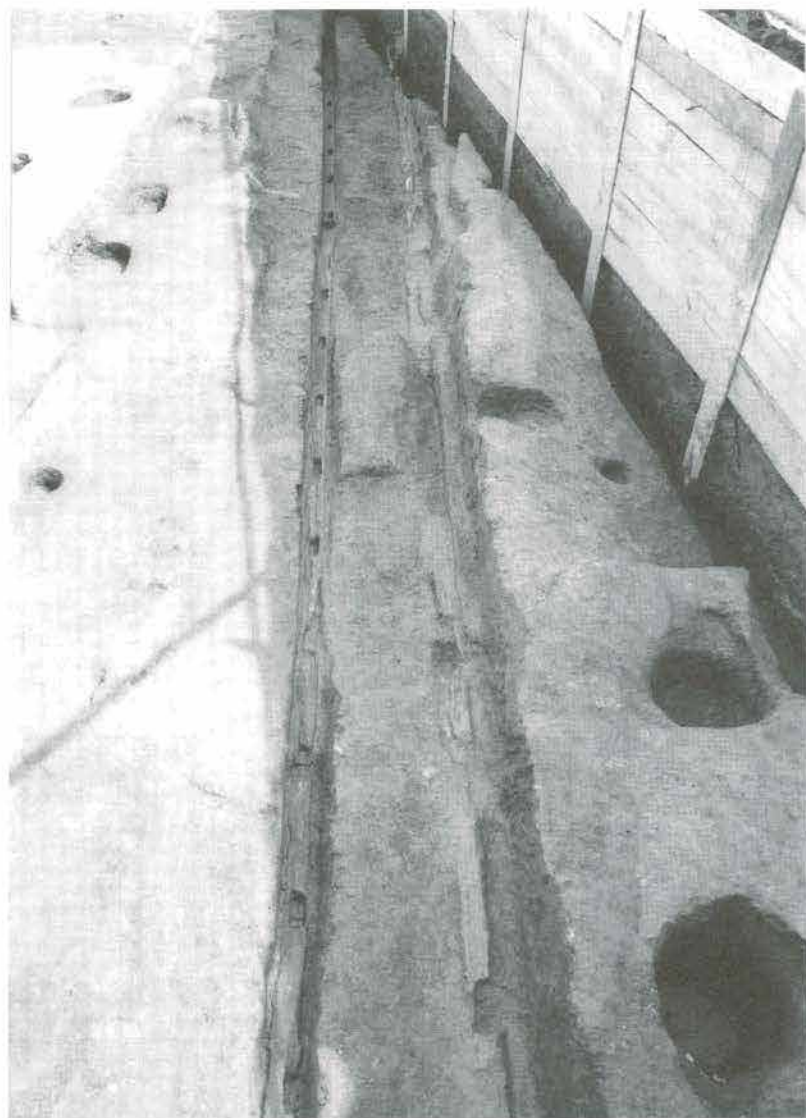
◀ B. 2面全景 (西より)



◀ A. 道路遺構・溝 (西より)



◀ B. 道路遺構 (西より)



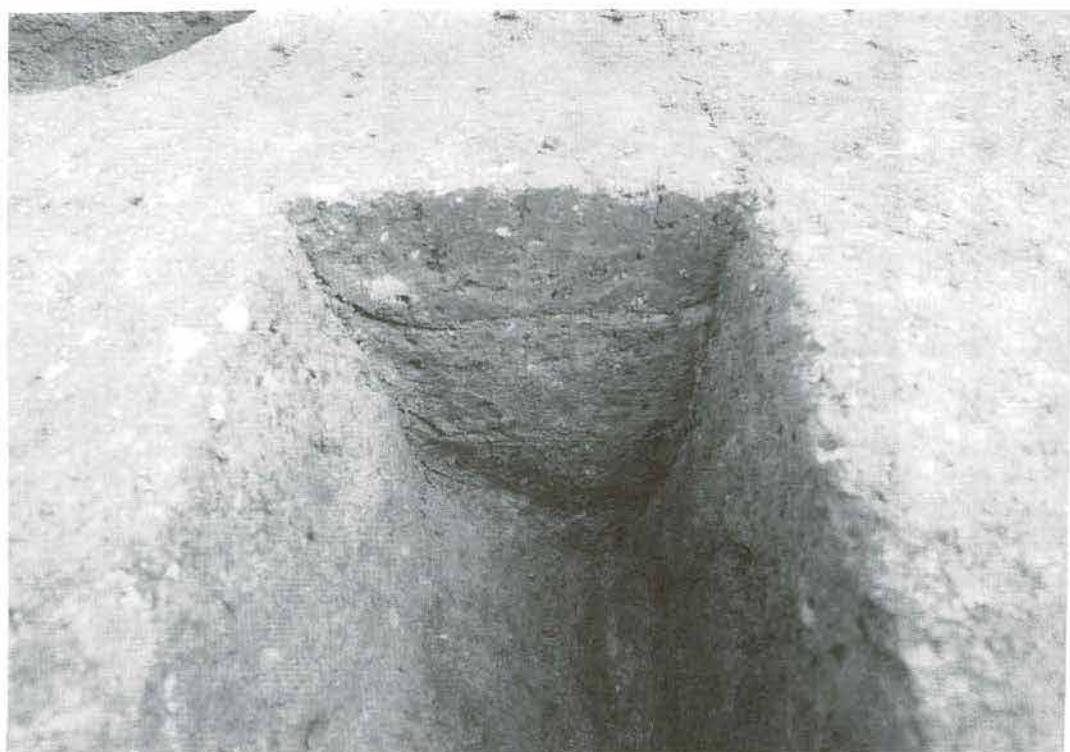
◀ A. 溝1 (西より)



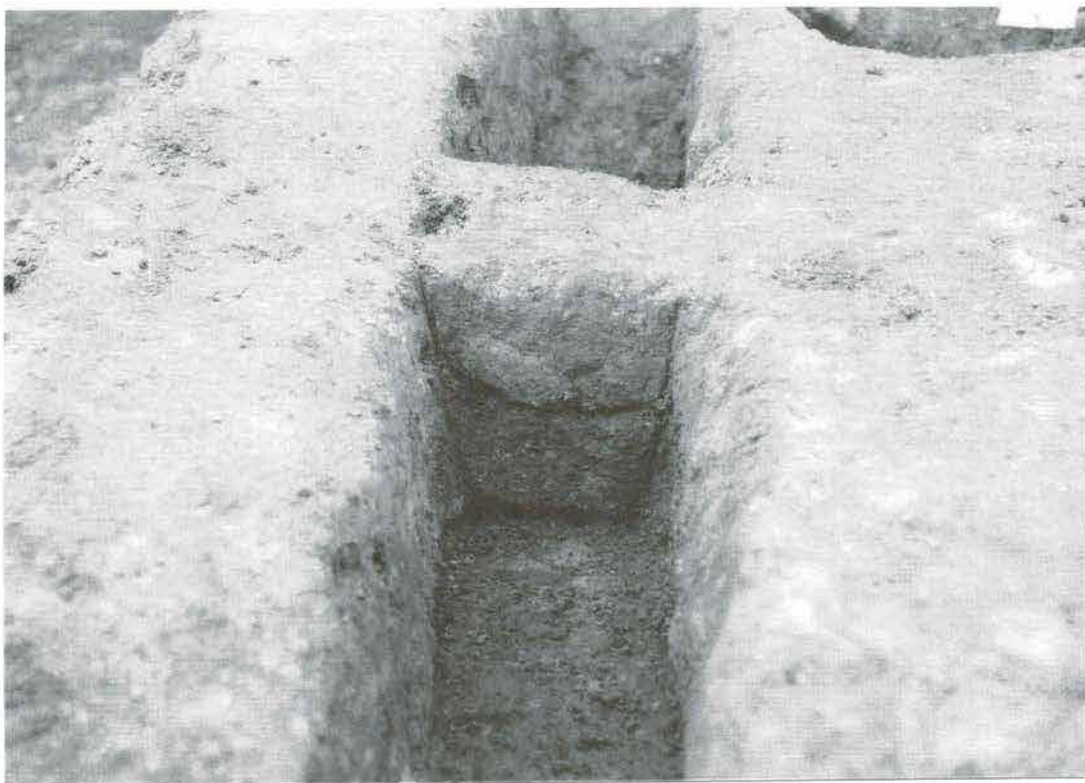
▶ B. 溝1 南北ベルト



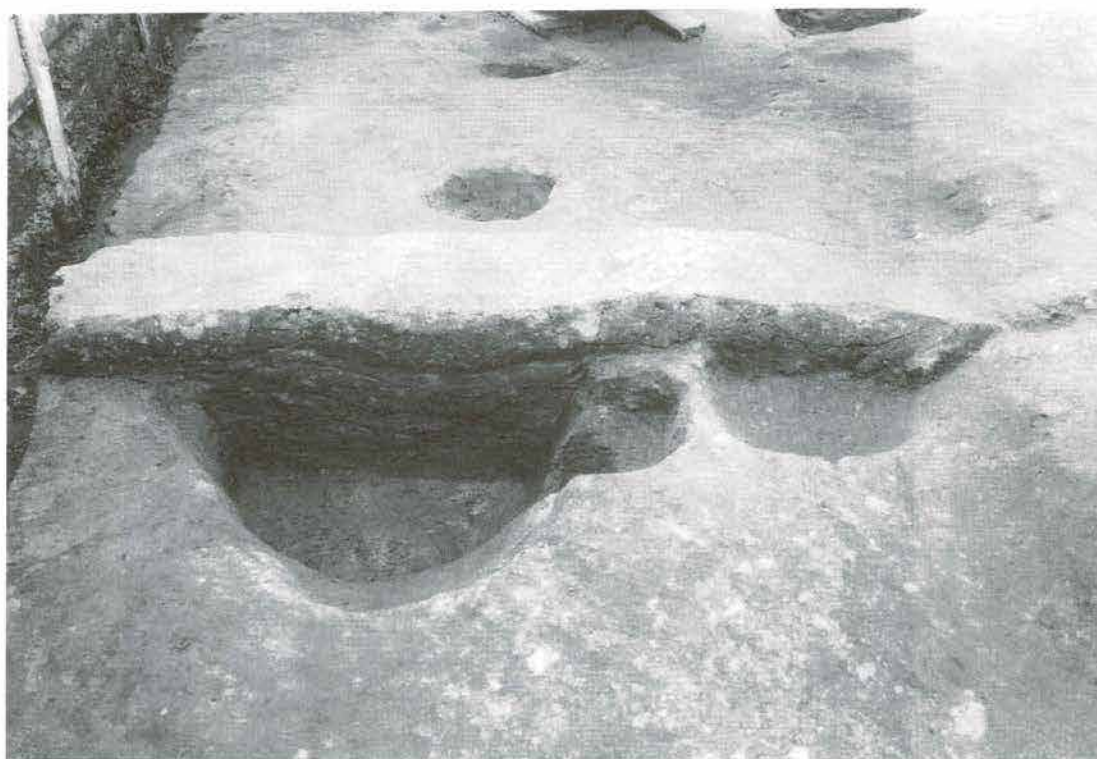
◀ A 溝2 (北より)



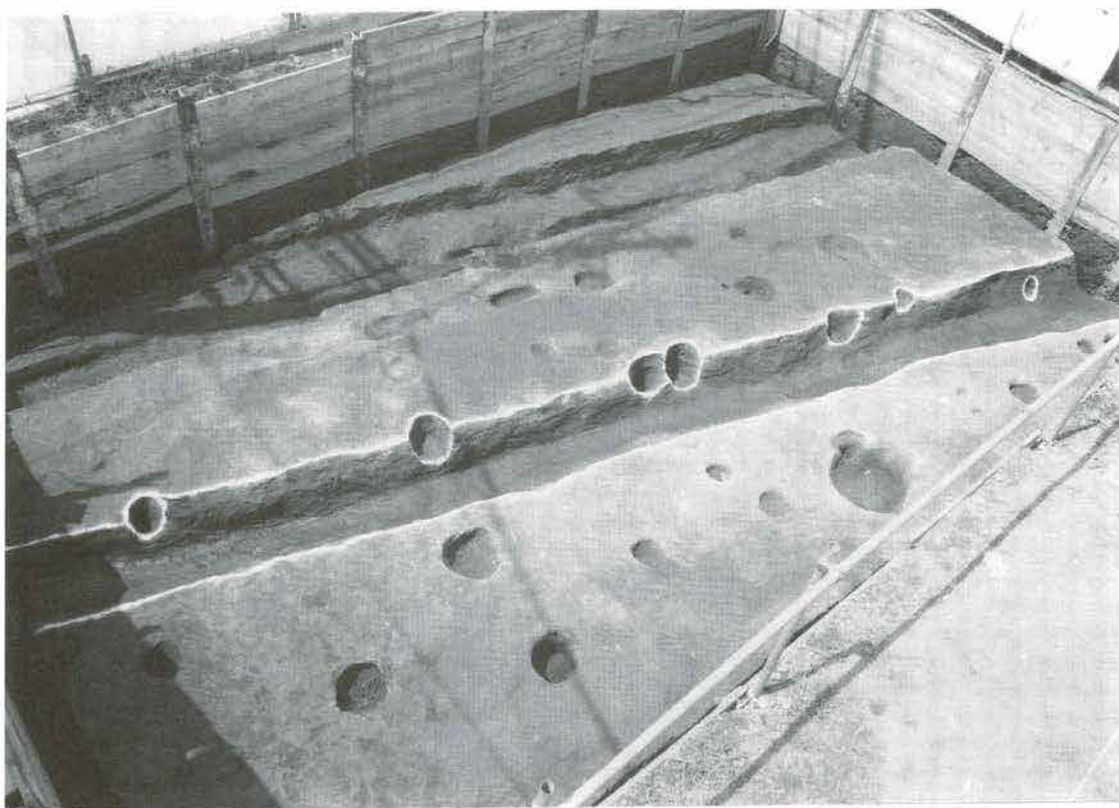
▶ B 溝状遺構4 北南ベルト



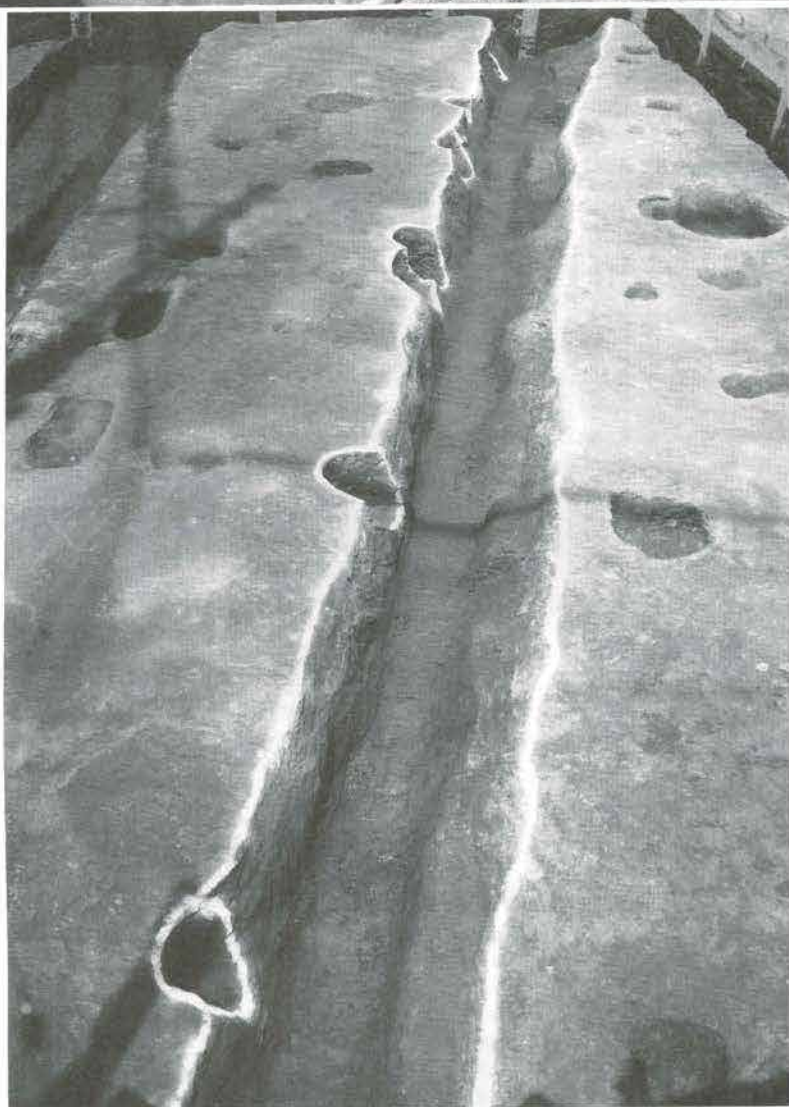
▲ A. 溝状遺構 5 南北ベルト



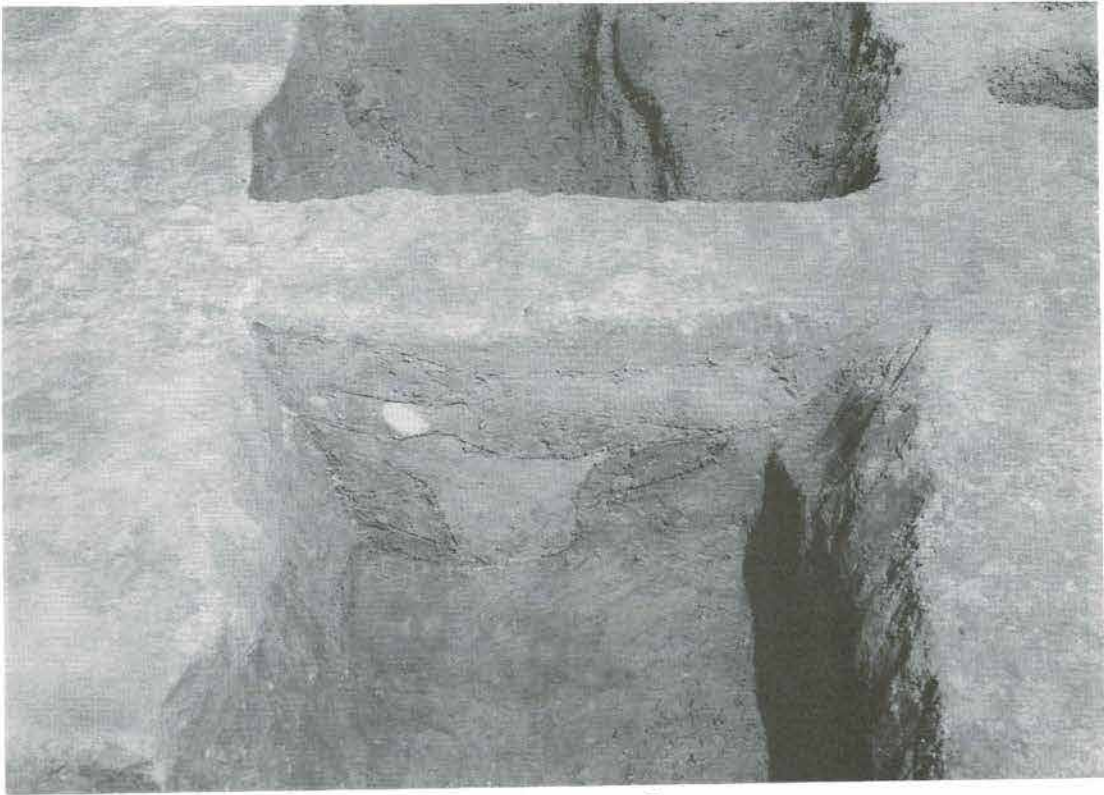
▲ B. 土坑 6・Pit48 北南ベルト



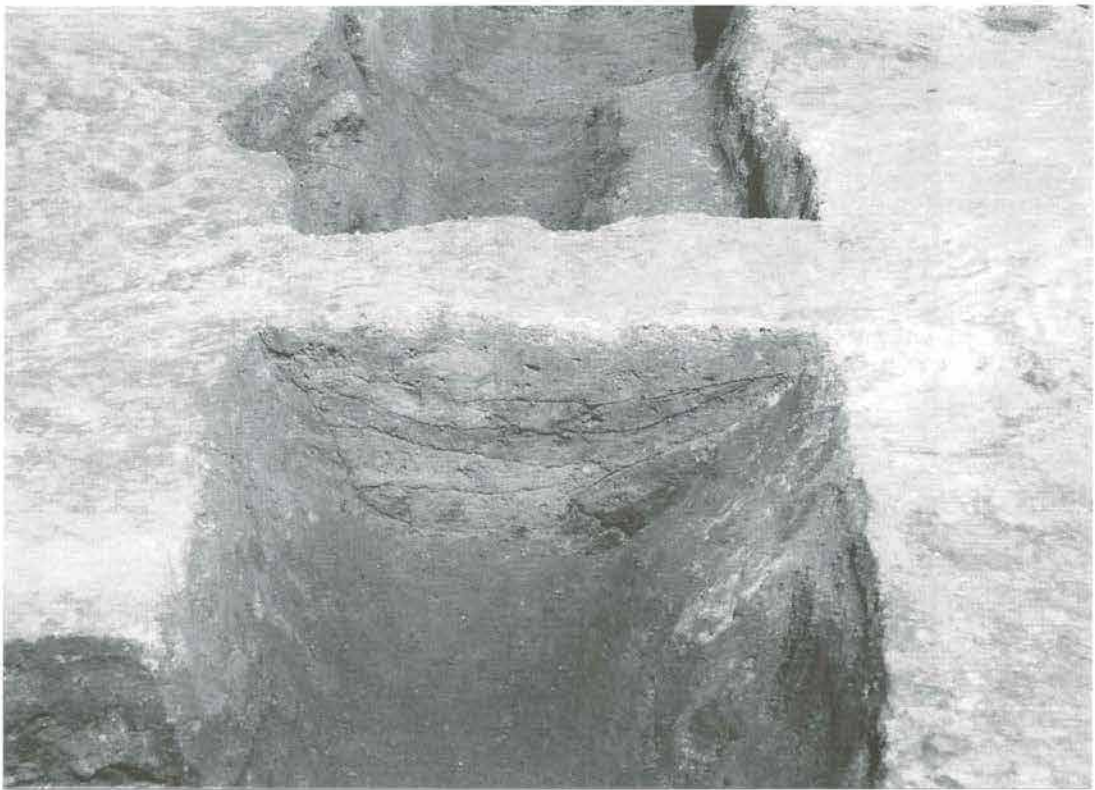
◀ A. 3面全景（北東より）



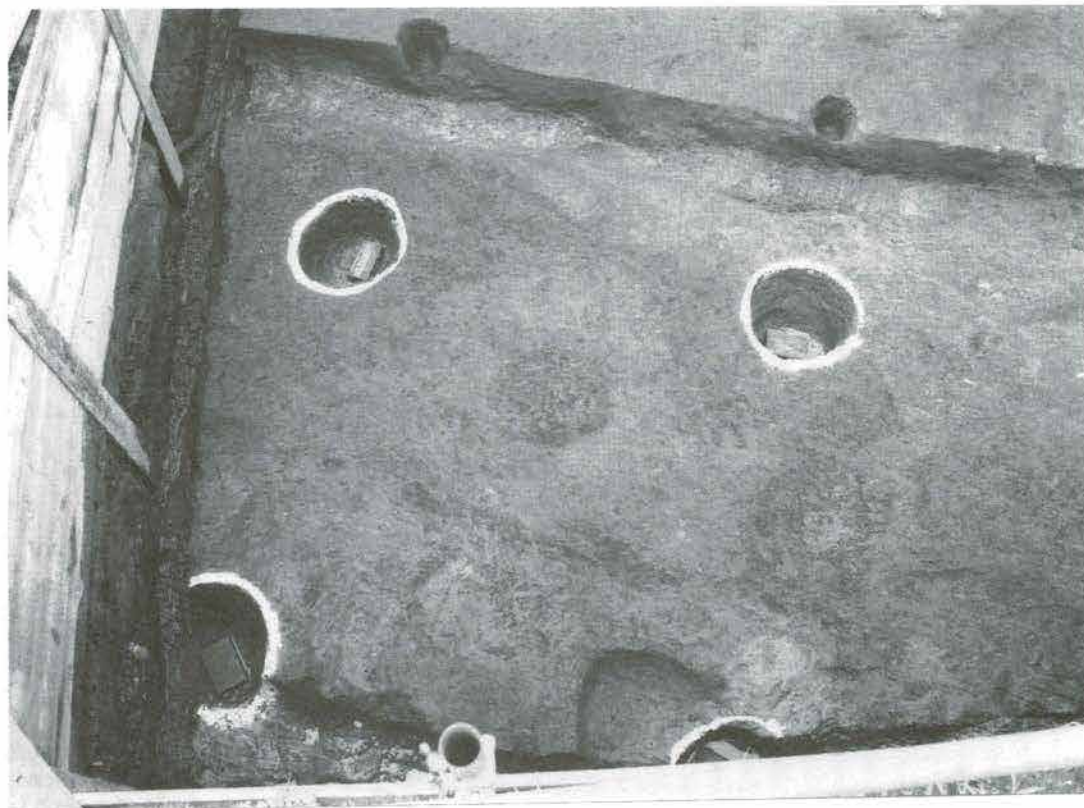
◀ B. 溝3・柱穴列1（東より）



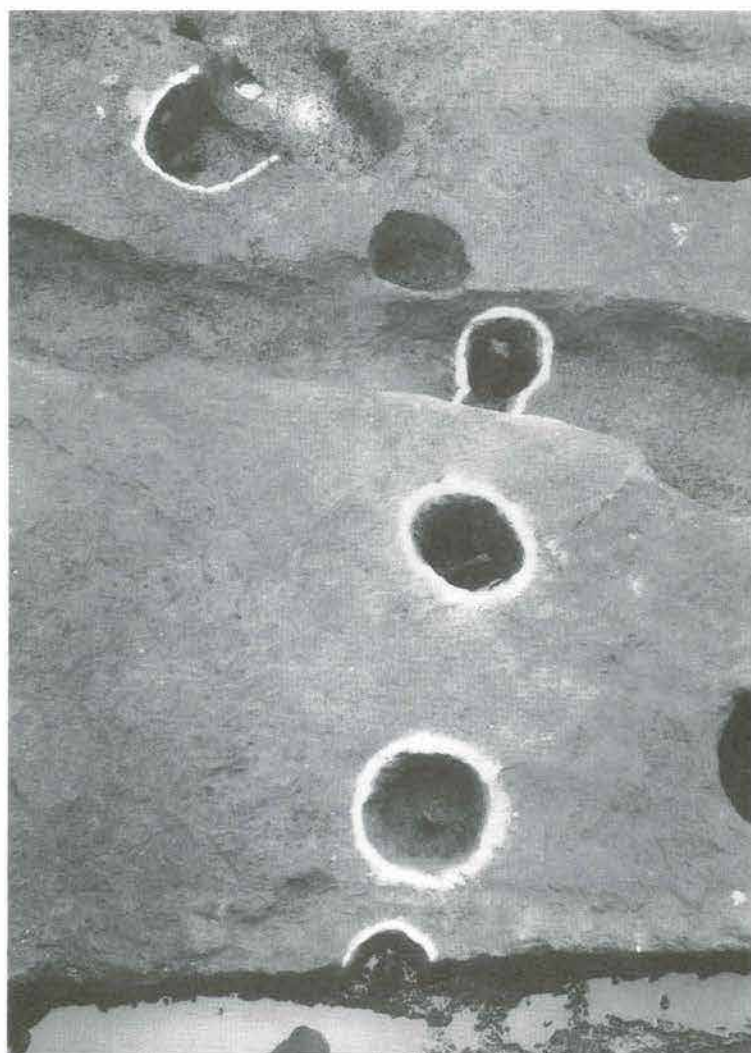
▲ A. 溝3 ベルト①



▲ B. 溝3 ベルト②



◀ A 掘立柱建物 1 (北より)



◀ B 柱穴列 2 (北より)



◀ A
溝4 (南より)

▶ B
調査区東壁土層



图版 11



7-1



8-13



8-20



8-22



8-24



8-32



8-34



8-35



8-36



8-37



8-38



8-39



8-40



8-41



8-42



8-43



8-45



15-1



15-2



15-3



15-5



15-6



15-8

出土遺物 (1)



15-21



15-29



15-35



15-41



15-42



16-1



16-2



16-7



16-10



16-11



16-20



16-31



16-45



16-47



16-48



16-49



16-50



16-51



16-52



16-54



16-55



16-53



16-56



16-57



16-58

出土遺物 (2)



16-60



16-62



16-65



16-71



16-64



16-75



17-3



17-6



17-8



17-10



17-16



17-17



17-20



17-22



20-1



20-2



17-23



20-3



20-7



20-8



17-24



21-1



21-2



24-1










24-4

出土遺物 (3)

だいらくじあと
大楽寺跡 (No. 262)

浄明寺四丁目246番1

例 言

1. 本書は、鎌倉市浄明寺四丁目 246 番 1 地点における個人住宅建設に伴う埋蔵文化財の緊急調査発掘調査報告である。資料整理の際の遺跡の略記号は JDN である。
2. 発掘調査は、国庫補助事業として鎌倉市教育委員会が実施した。調査期間は平成 17 年 2 月 22 日～4 月 21 日である。
3. 調査団の編成は以下の通りである。
調査の主体 鎌倉市教育委員会
調査担当 滝澤晶子（日本考古学協会会員）
調査補助員 安藤龍馬・下江秀信・倉方尚子
調査協力者 河原龍雄・藤枝正義・北島清一・片山直文（社団法人鎌倉市シルバー人材センター）
4. 本書の執筆・編集は以下のものを行った。
第 1 章：宮田眞 第 2 章～第 4 章・編集：滝澤晶子
5. 本書の図版および写真撮影は次のものを行った。
遺構図版 滝澤晶子 遺構写真 滝澤晶子
遺物図版 宇賀神雅子・倉方尚子 遺物写真 滝澤晶子
6. 本書の遺構・遺物の縮尺は次の通りである。（各々の図にスケールを載せている）
遺構図 1/40・1/80（遺構図の水糸高は海拔高を示す）
遺物実測図 1/3
7. 遺構実測図には次の記号が使用されている。
釉の限界線  調整の変化点  使用痕の範囲  加工痕の範囲 
攪乱の範囲  推定ライン  調査限界ライン 
8. 遺物寸法表は計測可のもののみ表にしている。遺物および Pit 寸法表の記号は以下の通り。
遺物寸法表：() = 復元値・[] = 遺存値・単位は cm
Pit 寸法表：() = 推定値あるいは推定形・単位は cm
9. 発掘調査に際して御理解・御協力を賜った、建築主及び関係者の方に深く感謝の意を表す。

本文目次

第1章 遺跡の位置と歴史的環境	98
第2章 調査の概要	101
第3章 検出遺構と出土遺物	106
第4章 まとめ	127

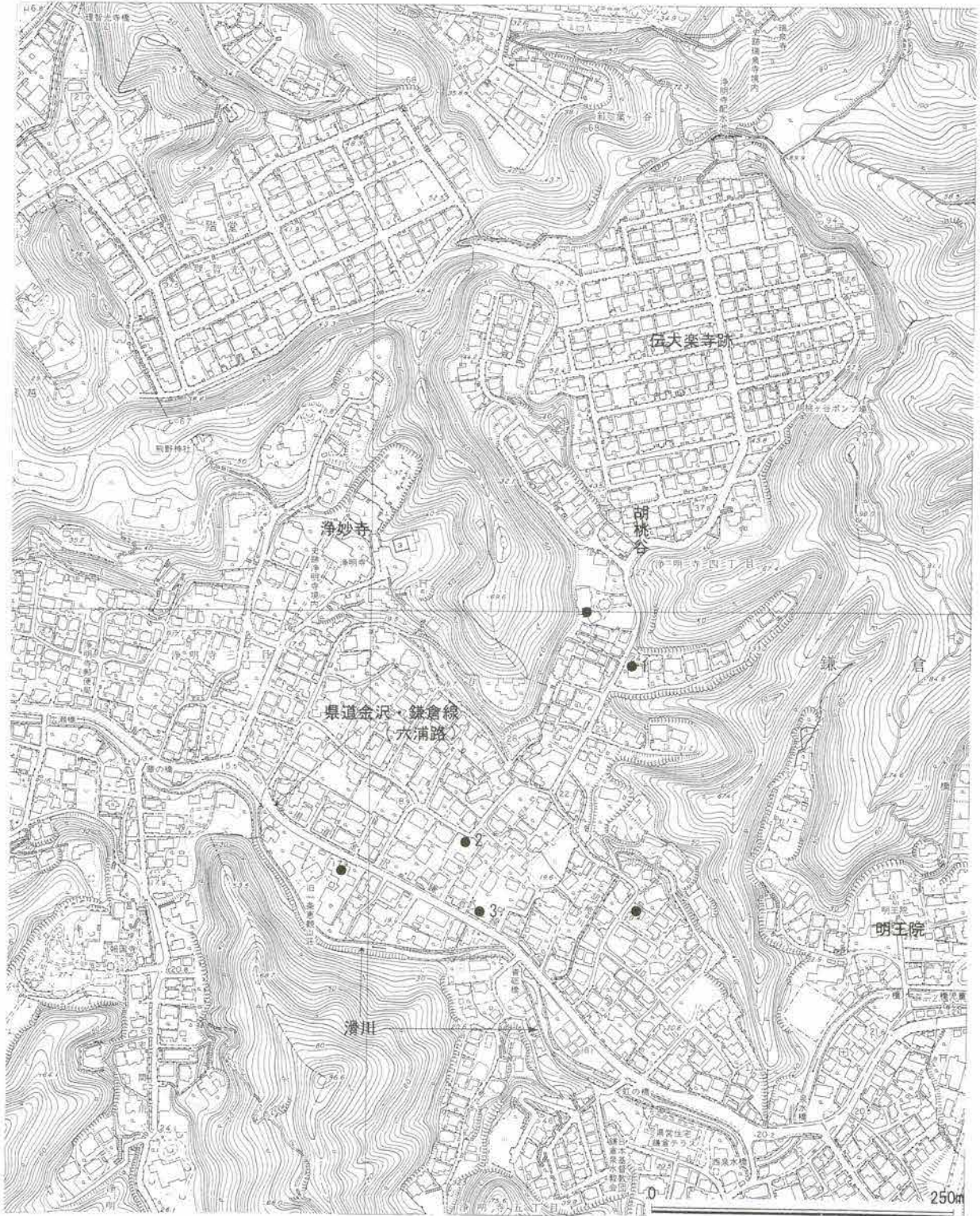
挿図目次

図1 遺跡周辺図	98	図13 4面遺構配置図	114
図2 調査範囲と確認調査	101	図14 4面出土遺物	116
図3 遺跡位置図	103	図15 5面遺構配置図	117
図4 グリッド配置図	104	図16 5面出土遺物	119
図5 基本土層図	106	図17 5b面遺構配置図	120
図6 1面遺構配置図	107	図18 石列1	120
図7 表土層出土遺物	108	図19 5b面出土遺物	120
図8 2面遺構配置図	109	図20 6面遺構配置図	121
図9 2面出土遺物	110	図21 礎石建物1	122
図10 3面遺構配置図	111	図22 6面出土遺物	123
図11 土坑1・2	112	図23 7面遺構配置図	125
図12 土坑2・3面炭化物層・3面出土遺物	113	図24 7面出土遺物	126

図版目次

図版1 A I区1面全景	128	図版7 A I区6面全景	134
B II区1面全景	128	B II区6面全景(礎石建物1)	134
図版2 A I区2面全景	129	図版8 A I区7面全景	135
B II区2面全景	129	B II区7面全景	135
図版3 A I区3面全景	130	図版9 A I区南壁土層	136
B II区3面全景	130	B II区東壁土層	136
図版4 A I区4面全景	131	図版10 出土遺物(1)	137
B II区4面全景	131	図版11 出土遺物(2)	138
図版5 A I区5面全景	132	図版12 出土遺物(3)	139
B II区5面全景	132		
図版6 A I区5b面全景	133		
B I区6面礎石建物1花崗岩礎石	133		

第1章 遺跡の位置と歴史的環境



1. 本調査地点 2. 公房屋敷跡（浄明寺三丁目143番2地点） 3. 公房屋敷跡（浄明寺三丁目151番1外）

図1 遺跡周辺図

1. 調査地の位置

本調査地は鎌倉市浄明寺四丁目 246 番 1 (図 1-1) に所在し、大楽寺跡 (No. 262) の遺跡指定範囲内に位置する。調査地は地勢的に見ると、鎌倉旧市街地を形成する平野の北端部から、東方に 2k m 以上続く広大な谷地形の中にあり、さらにその谷から派生する多くの支谷の内、北側の一つ「胡桃谷」(くるみがやつ) に位置する。胡桃谷の谷戸奥地域は、宅地造成されて全く原形を残していない。本来この谷戸奥から天園方面に続く道があったと考えられ、現在も住宅地裏からハイキングコースとして辛うじて残る。胡桃谷は鶴岡八幡宮を起点にするとの東方約 1.5k m の距離にあり、谷戸の南方 (調査地から約 250 m の距離) には、鎌倉市と横浜市をつなぐ県道金沢・鎌倉線が東西に通る。この道筋は往時には「六浦路」と称され「朝比奈切通し」を超え、鎌倉と鎌倉の外港である金沢を結ぶ重要な道であった。さらに県道を越えた南方には鎌倉旧市街地最大の河川「滑川」が西に向かって流れている。

2. 歴史的環境

現在調査地の周辺地域にはいくつかの寺院がある。近くは西方 250 m の距離に鎌倉五山第 5 位の稲荷山浄妙寺 (臨済宗建長寺派) がある。往時の浄妙寺は三門・仏殿・法堂・禅堂・経堂などを始めとする諸堂が揃い、さらに霊芝庵・瑞龍庵・法雲庵等々の塔頭があったが、現在はそれらの姿を偲ぶことはできない。

また浄妙寺とは反対側の東南方約 300 m には、真言宗の飯盛山寛喜寺明王院五大堂がある。明王院は嘉禎元年 (1335) 六月將軍藤原頼経の創建とあり、將軍の護願寺としての高い寺格を有した。明王院の別当職は鶴岡八幡宮寺・永福寺・勝長寿院の別当職とならぶ地位にあったというが、寺史詳細については謎が多い。明王院の近隣には頼朝建立の「大慈寺跡」や、「梶原景時屋敷跡」の伝承地があり、背後の山上には幕府の重臣「大江広元墓」と伝える層塔がある。その他には竹の寺として有名な「報国寺」、鎌倉時代以前から続く「杉本寺」、などが上げられる。

胡桃谷には遺跡名の「大楽寺」があったと伝えるが、その他に室町幕府の「公方屋敷」が胡桃谷の開口部付近、六浦路の北側にあったとされる。

正平四年 (1349) 足利尊氏は四男基氏を鎌倉へ下向させ、東国支配の拠点として「鎌倉府」を置いた。鎌倉府は基氏から氏満、満兼、持氏、成氏の五代に亘り、成氏が幕府に追われ古河に逃げるまでの約 100 年間続いた。鎌倉府の首長は「鎌倉公方」・「鎌倉殿」などと呼ばれ、その御所の館跡は「公方屋敷」と俗称され、現在に至るまで近隣の人々に親しまれてきた。この地に鎌倉御所が置かれたのは、ここが鎌倉幕府の頃から代々足利氏の屋敷があったからと伝える。鎌倉における足利氏の拠点がこの地と定められたのは、尊氏の父貞氏 (1273 ~ 1331) の代からである。ちなみに貞氏は浄妙寺の中興・開基である。

大楽寺

大楽寺は、胡桃山千秋大楽寺と号する律宗寺院で、開山は公珍と伝える。本尊は鉄不動 (試みの不動)。

『新編相模風土記稿』巻之九十四 村里部 鎌倉郷巻之二十六には、「大楽寺跡、胡桃谷にあり、即二階堂村大楽寺の舊跡にて今薬師堂の跡なりと傳え礎石讒に残れり、彼地に移せし時代詳ならず、彼村の條照らし見るべし、此餘宅間谷に慈昌寺・慈眼寺・宝泉庵、泉水ヶ谷に権行寺・宝生庵、十二郷ヶ谷に類長庵、飯盛山の山上に泰安寺等の寺跡と呼べるところあれど廢置の年代当時の事跡ふつにその傳なし、」とあり、江戸時代には胡桃谷は大楽寺の旧跡となっており、薬師堂の跡と伝える礎石が残ってい

たようだ。大楽寺は既に二階堂に移動しているが、その年代ははっきりしない。

また『新編鎌倉志』巻之二には「大楽寺 大楽寺は胡桃山千秋大楽寺と號す。覚園寺の門を入左方に有。律宗也。開山は公珍和尚、本尊は鐵造不動、願行作、是を試の不動と云う。大山の不動を鑄時、先試に鑄たる像と云う。愛染運慶作薬師元慶作此寺、昔は胡桃谷にありしが、後爰に移す。胡桃谷條下に詳也。」とあり、大楽寺は二階堂に所在する「覚園寺」の門を入り左方にあったとより具体的に記している。また本尊の鉄動像は、願行上人憲静が大山の本尊不動像を鑄るにあたって試しに鑄造したとあり、この像は俗に「試みの不動」と呼ばれていたらしい。現在は他の仏像と共に覚園寺愛染堂にある。ちなみに大楽寺梵鐘は現在、愛甲郡依知の浅間神社にある。

大楽寺は、鎌倉時代末期頃に胡桃谷に創建され、移動後は明治初年頃までこの二階堂の地で存続した。

3. 周辺地域の発掘調査

本調査地の周辺地域ではこれまでに小規模ながら多くの発掘調査が実施されてきた。本項ではその内ごく近隣に限って紹介したい。

図1-2 地点の調査

本調査地から南西約200mの距離にある図1-2地点（公方屋敷跡）では、個人住宅新築の事前調査として、平成4年（1992）1月6日～4月9日にかけて、鎌倉市教育委員会による発掘調査が実施された。

調査の結果、3期に亘る中世生活面（第1～3面）が確認された。遺跡は北側が溝と道路遺構で区画された、屋敷地あるいは境内地の一部と考えられる。遺跡の年代は13世紀前半～15世紀前半であるが、検出遺構、出土遺物の様相から13世紀後半～14世紀前半（第2面）が盛期と考えられる。

図1-3 地点の調査

本調査地の南南西約300mに位置する図1-3地点（公方屋敷跡）では、宅地造成に伴う事前調査として、平成6年（1994）9月1日～10月10日にかけて発掘調査が実施された。調査地は県道（旧六浦路）の北側に面する。

調査の結果、13世紀後半～15世紀前半にかけて3期に亘る中世生活面が確認された。遺跡からは道路に直交する南北方向の溝遺構に区画されており、溝の東側から礎板を残す物を含む多くの柱穴が高密度で検出された。遺跡の盛期は遺構遺物の様相から13世紀末～14世紀初頭頃に置くことができ、上記の2地点と似た時期区分を示す。両地点は鎌倉時代末期頃が一番繁華な時期を迎えたようで、公方屋敷が置かれた時代には予想外にやや衰微していたようである。

参考文献

- | | | |
|-----------------------------------|----------|-----------------------|
| 「大日本地誌大系 新編相模国風土記稿 第5巻（20頁）」 | 平成10年4月 | 雄山閣 |
| 「大日本地誌大系 新編相模国風土記稿 第6巻（25頁）」 | 平成10年4月 | 雄山閣 |
| 「鎌倉廃寺事典 貫達人・川副武胤」 | 昭和55年12月 | 有隣堂 |
| 「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書10 公方屋敷跡（1～102頁）」 | 平成6年3月 | 鎌倉市教育委員会 |
| 「公方屋敷跡発掘調査報告書 浄明寺三丁目151番1外」 | 1996年3月 | 同遺跡発掘調査団
(現株式会社博通) |

第2章 調査の概要

1. 調査の経緯と経過

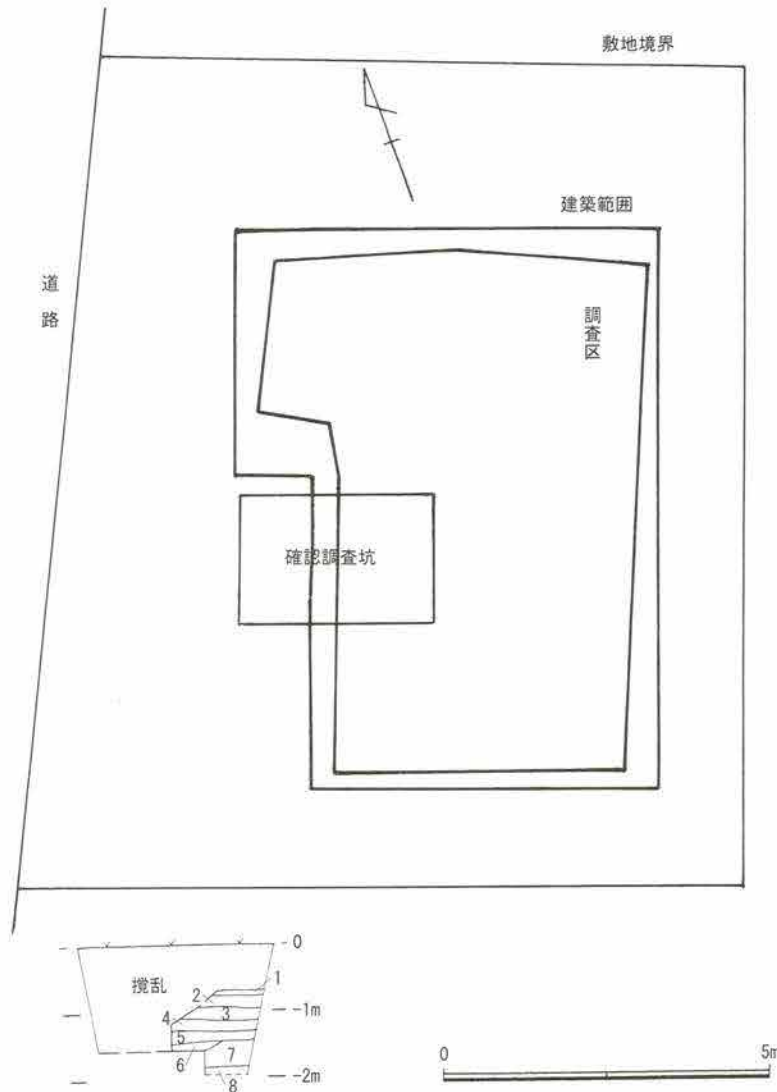


図2 調査範囲と確認調査

調査は鎌倉市浄明寺四丁目246番1地点における個人住宅に伴う調査として実施された。平成16年12月15日～17日に鎌倉市教育委員会により確認調査が実施され、その結果、現地表下80cm前後から第1面が確認され、現地表下2mまでに3面以上の中世遺跡が確認された。それを受け、平成17年2月22日～平成17年4月21日にわたって本調査が実施された。調査対象面積は41.5㎡である。調査は廃土の都合上、南北2区画に分割して実施された。資料整理の際の遺跡の略記号はJDNである。遺物は遺物収納箱5箱出土した。

確認調査

確認調査は敷地内、図2に示した位置に設定し、現地表下2mまで掘削して行われた。現地表下110cm以下は湧水があった。現地表下80cmに第1面、100cmに第2面、150cmに第3面を確認し、さらに下層にも生活面があることを確認して確認調査を終了した。その結果は以下の通り。(図2参照)

1層：中世包含層

- 2層：青灰色粘質土層 褐鉄・小土丹を含む。とてもよく締る。
- 3層：土丹層 中土丹による地業層。締り良い。
- 4層：青灰色粘質土層 やや茶色味がある。小土丹をやや多く含む。かわらけ。締りとても良い。
- 5層：青灰色粘質土層 かわらけ細片・小土丹粒多く・中土丹を含む。締りとても良い。
- 6層：土丹層 中～小土丹による土丹地業。かわらけ片。締りとても良い。
- 7層：暗青灰色粘質土層 中土丹・小土丹多く・かわらけ細片を含む。締り良い。粘性あり。
- 8層：暗青灰色粘質土層 中土丹やや多く含む。かわらけ細片。締り良い。粘性あり。

調査経過

調査は廢土の都合上、南北2区画に分割して実施された。南部（Ⅰ区）を先に調査し、その後北部（Ⅱ区）を調査した。

- 平成17年 2月22日 Ⅰ区重機による表土掘削後、人力による調査開始。
- 2月23日 1面検出。良好な地業面。
- 2月24日 1面全景撮影・測量。後、2面まで掘り下げ。
- 2月28日 2面全景撮影・測量。後、3面まで掘り下げ。
- 3月1日 3面精査。土坑1・2検出。
- 3月2日 測量基準点移動。3面全景撮影・測量。後、4面まで掘り下げ。
- 3月3日 4面全景撮影・測量。
- 3月7日 4面全景測量。5面まで掘り下げ。
- 3月8日 5面遺構検出作業。
- 3月9日 5面全景撮影・測量。後、6面まで掘り下げ。
- 3月14日 6面全景撮影・測量。7面（岩盤）まで掘り下げ。
- 3月15日 7面全景撮影・測量。
- 3月17日 重機によりⅠ区埋め戻し。Ⅱ区表土掘削。
- 3月24日 Ⅱ区1面まで掘り下げ。
- 3月26日 1面全景撮影・測量。2面全景撮影・測量。3面まで掘り下げ。
- 3月29日 3面全景撮影・測量。4面まで掘り下げ。
- 3月30日 4面全景撮影・測量。5面まで掘り下げ。
- 3月31日 5面全景撮影・測量。6面まで掘り下げ。
- 4月1日 5b面検出。
- 4月5日 5b面全景撮影・測量。6面まで掘り下げ。
- 4月6日 6面礎石建物検出。全景撮影・測量。
- 4月7日 7面（岩盤）まで掘り下げ。
- 4月8日 7面全景撮影・測量。
- 4月12日 調査終了。現場撤収。
- 4月21日 重機により埋め戻し完了。

2. 調査区の位置とグリッド配置（図2・3・4）

敷地と建築範囲と調査区の関係は図2に示したように設定された。位置は北緯35度19分19秒、東経139度34分26秒である。

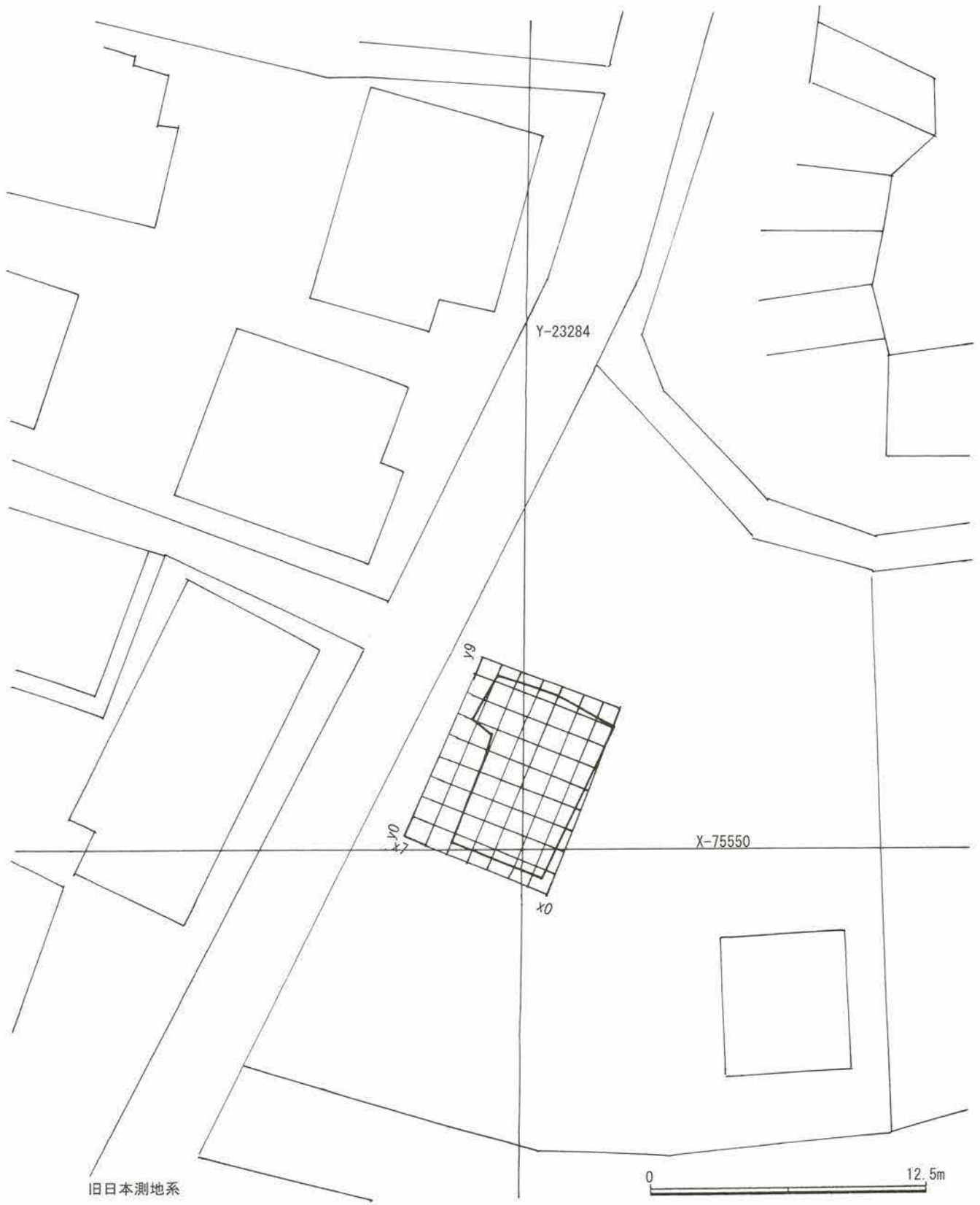


图3 遺跡位置図

グリッドは調査区の形状に合わせて任意に設定した。(図3・4) グリッドと国土座標(エリア9)の関係は以下の通りである。世界測地系には国土地理院提供のソフトを使用して変換した。

A地点:グリッド(x 3.506, y 5.345) = 国土座標〔旧日本測地系〕(X-75545.721, Y-23284.000) = 国土座標〔世界測地系〕(X-75189.121, Y-23577.442)

B地点:グリッド(x 1.596, y 0.176) = 国土座標〔旧日本測地系〕(X-75551.231, Y-23284.000) = 国土座標〔世界測地系〕(X-75194.631, Y-23577.442)

C地点:グリッド(x 5.306, y 0.136) = 国土座標〔旧日本測地系〕(X-75550.000, Y-23287.483) = 国土座標〔世界測地系〕(X-75193.400, Y-23580.925)

D地点:グリッド(x 0.344, y 1.950) = 国土座標〔旧日本測地系〕(X-75550.000, Y-23282.266) = 国土座標〔世界測地系〕(X-75193.400, Y-23575.709)

グリッドy軸は北から20度東に傾いている。なお、本文中では便宜上、グリッドyプラス方向を北として呼称し、正確な方位は各図に矢印で示している。

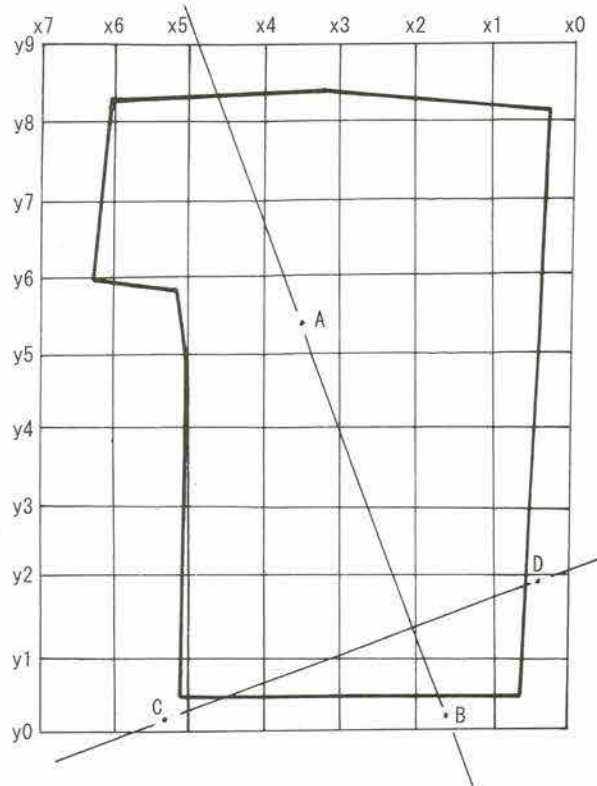


図4 グリッド配置図

3. 基本土層 (図4)

基本土層の測量地点A~Hは図23に記してある。現地表は海拔25m前後のほぼ平坦面。表土層は現地表から80cmであった。いずれの面も調査区内で、10cm程度北が高くなっている。1面は海拔24.1m前後、2面は1面下約10cm、海拔23.9~24.0m前後、3面は2面下約10cm、海拔23.8~23.9m前後、4面は3面下20cm、海拔23.6~23.9m前後、5面は4面下約20cm、海拔23.4~23.5m前後、5b面は調査区北部のみに5面下10cm、海拔23.4m前後、6面は5面下40cm、海拔23.0~23.1m前後、7面は6面下20cm、海拔22.8m~23.0m前後に検出された。7面は岩盤面である。それぞれの層厚は比較的薄い。土層注記は以下の表の通りである。

番号	色調	土質	内容	粘性	締り	備考
1	暗茶褐色	粘質土層	0.1~0.5cm大の土丹粒(多)・かわらけ細片・炭化物・褐鉄	なし	とてもよい	1面
2	暗茶褐色	粘質土層	0.5~3cm大の土丹(多)・10cm大の土丹(少)・かわらけ片・炭化物(少)	なし	とてもよい	2面
3	暗灰褐色	粘質土層	5~10cm大の土丹・鎌倉石・かわらけ細片(少)	あり	よい	3面
4	暗褐色	粘質土層	1cm大の土丹(多)・5cm大の土丹(少)・炭化物・かわらけ細片	あり	わるい	
5	暗褐色	粘質土層	0.1~0.5cm大の土丹(やや多)・炭化物(多)・かわらけ細片(ごく少)	あり	ややわるい	
6	茶褐色	粘質土層	0.1cm大の土丹(多)・かわらけ細片(多)	-	よい	
7	茶褐色	粘質土層	20~30cm大の土丹	-	-	
8	暗褐色	粘質土層	0.5~1cm大の土丹(とても多)・炭化物(少)・かわらけ細片(少)	-	よい	4面
9	暗褐色	粘質土層	0.5~1cm大の土丹(とても多)・5cm大の土丹・炭化物(少)・かわらけ細片(少)	-	あり	
10	黒褐色	粘質土層	0.5~3cm大の土丹(やや多)・炭化物(とても多)・15世紀のかわらけ片	あり	ややわるい	
11	暗褐色	粘質土層	15世紀のかわらけ(多)	-	-	

番号	色調	土質	内容	粘性	締り	備考
12	土丹地業層		細かい土丹	-	よい	
13	暗茶褐色	粘質土層	鎌倉石・土丹	つよい	わるい	
14	炭化物層		炭化物	-	とてもわるい	
15	灰褐色	粘質土層	0.1~1.0cm大の土丹(とても多)	-	よい	4面
16	土丹地業層		0.5~5.0cm大の土丹層	-	とてもよい	5面
17	灰茶褐色	粘質土層	0.1~0.5cm大の土丹(やや多)	よわい	とてもよい	
18	暗灰褐色	粘質土層	1~3cm大の土丹・炭化物(少)	とてもつよい	わるい	
19	暗灰褐色	粘質土層	1~3cm大の土丹・炭化物(少)	とてもつよい	わるい	5面
20	暗灰色	粘質土層	0.1~1.0cm,5~10cm大の土丹(多)・かわらけ片	あり	よい	
21	暗灰色	粘質土層	小土丹(少)	つよい	あり	
22	暗黒灰色	粘質土層	1~3cm大の土丹(やや多)・炭化物・かわらけ細片(少)	よわい	とてもよい	
23	暗灰色	粘質土層	3~5cm大の土丹(やや少)・炭化物(ごく少)	ややあり	よい	
24	暗黒灰色	粘質土層	小土丹(ごく少)・炭化物(ごく少)	つよい	ややわるい	
25	暗黒灰色	粘質土層	小土丹粒(やや多)・炭化物(少)	あり	よい	
26	土丹地業層		1~5cm大の土丹層	-	とてもよい	6面
27	暗黒灰色	粘質土層	粗砂と粘土の混ざった層	あり	あり	
28	暗黒灰色	粘質土層	5~10cm大の土丹(やや多)・ややざらつく土	-	よい	
29	暗黒灰色	粘質土層	5cm大の土丹・粗砂(多)	-	ややわるい	
30	土丹地業層		10cm大の土丹を含む	-	-	
31	岩盤		上層は土丹塊が散る	-	-	7面
32	暗茶褐色	粘質土層	0.5~1cm大の土丹・炭化物・かわらけ片(少)	なし	とてもよい	1面
33	暗茶褐色	粘質土層	0.5~1cm大の土丹・炭化物・かわらけ片(少)	なし	とてもよい	2面
34	暗灰褐色	粘質土層	1~5cm大の土丹(とても多)・かわらけ片・炭化物・鎌倉石粒(少)	-	よい	3面
35	暗灰褐色	粘質土層	1~5cm大の土丹(少)・かわらけ片・炭化物・鎌倉石粒(少)	-	よい	
36	暗褐色	粘質土層	1~5cm大の土丹(少)・かわらけ片・炭化物・鎌倉石粒(少)	-	ややわるい	4面
37	暗褐色	粘質土層	0.5~1cm大の土丹(少)・かわらけ片・炭化物(やや多)	あり	ややわるい	
38	暗褐色	粘質土層	0.5~1cm大の土丹(やや多)・かわらけ片・炭化物(やや多)	あり	ややわるい	5面
39	暗褐色	粘質土層	0.5~1cm大の土丹・炭化物(少)・かわらけ片	あり	ややわるい	
40	暗褐色	粘質土層	0.5~1cm大の土丹・炭化物(少)・かわらけ片・ざらつく	あり	よい	5b面
41	暗褐色	粘質土層	0.5~1cm大の土丹(少)・炭化物(少)・かわらけ片(少)・ざらつく	あり	よい	
42	暗黒灰色	粘質土層	1cm大の土丹・かわらけ片(少)・炭化物	あり	あり	
43	暗黒灰色	粘質土層	3~5cm大の土丹(やや多)・かわらけ片・炭化物・ざらつく	あり	わるい	6面
44	暗黒灰色	粘質土層	3~5cm大の土丹(やや多)・かわらけ片・炭化物・ざらつく	あり	わるい	

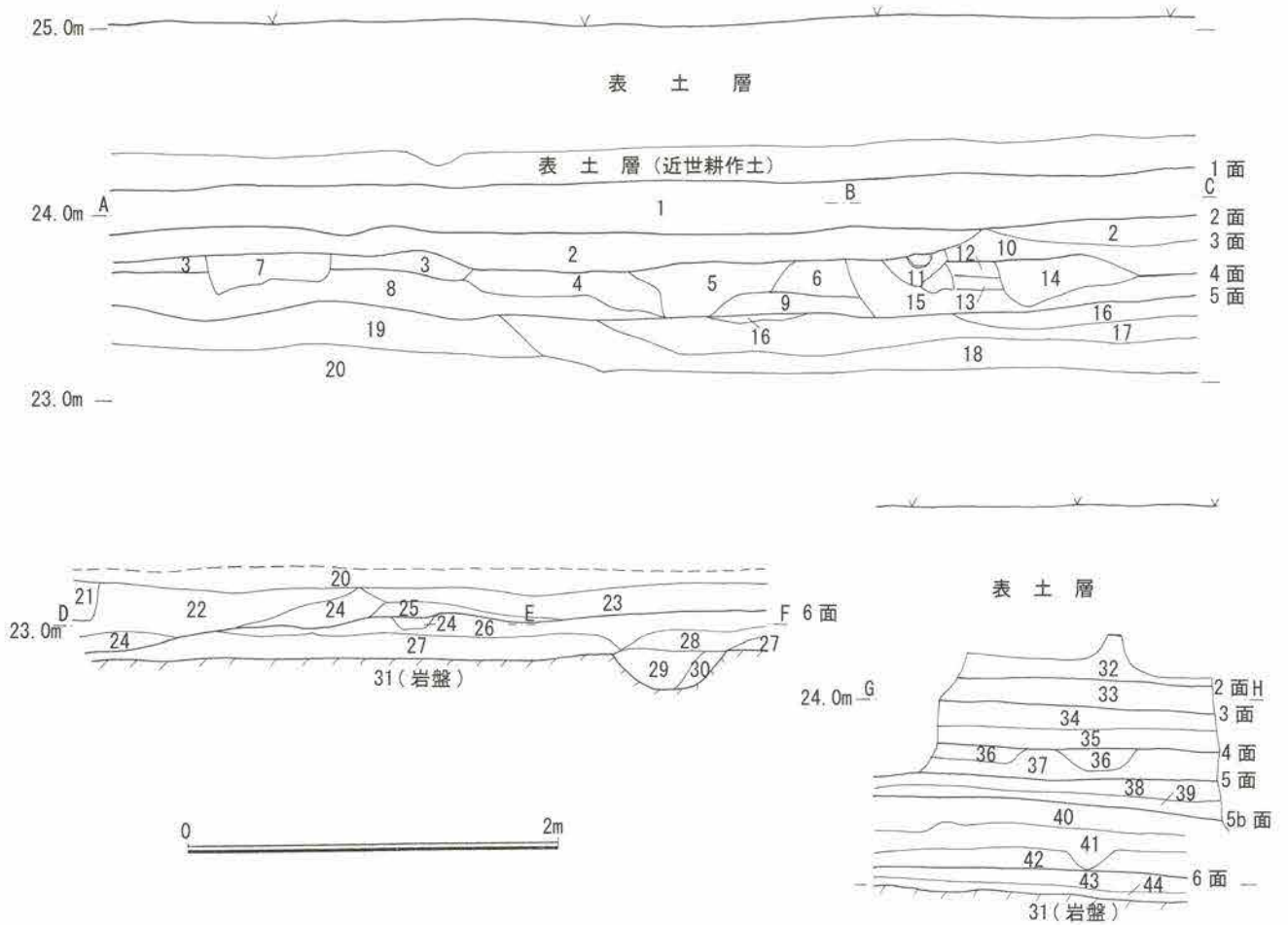


図5 基本土層図

第3章 検出遺構と出土遺物

今回の調査の結果、当遺跡からは合計7面の遺構面が確認された。

第1面 (図6)

第1面は現地表下90cm、海拔24.1m付近に検出された。ほぼ平坦な面である。非常に硬く締った地業面である。調査区の50パーセント以上が攪乱されていて、詳細は不明だが、遺存部分からは遺構は検出されなかった。出土遺物はほとんどない。

表土層出土遺物 (図7)

図7-1~5は轆轤成形のかわらけである。1~3は薄手。4・5は15世紀の厚手で、雑な作りのかわらけである。図7-6・7は瀬戸の天目茶碗。黒釉がかけられる。図7-8は輪花型の入れ子。八弁。底部糸切り。胎土は黄褐色を呈す。

図版番号	遺物番号	層位	遺構	製品名/産地	種別	口径/長さ	底径/幅	器高/厚さ	色調
7	1	表土層	-	かわらけ	轆轤成形	(13.6)	(8.0)	3.8	淡橙色系
7	2	表土層	-	かわらけ	轆轤成形	13.2	8.1	3.5	橙色系
7	3	表土層	-	かわらけ	轆轤成形	13.0	7.7	3.7	橙色系
7	4	表土層	-	かわらけ	轆轤成形	(12.6)	6.5	3.3	淡橙色系
7	5	表土層	-	かわらけ	轆轤成形	(7.6)	(4.6)	1.7	淡橙色系
7	8	表土層	-	瀬戸	輪花型入れ子	4.4	3.0	1.5	-

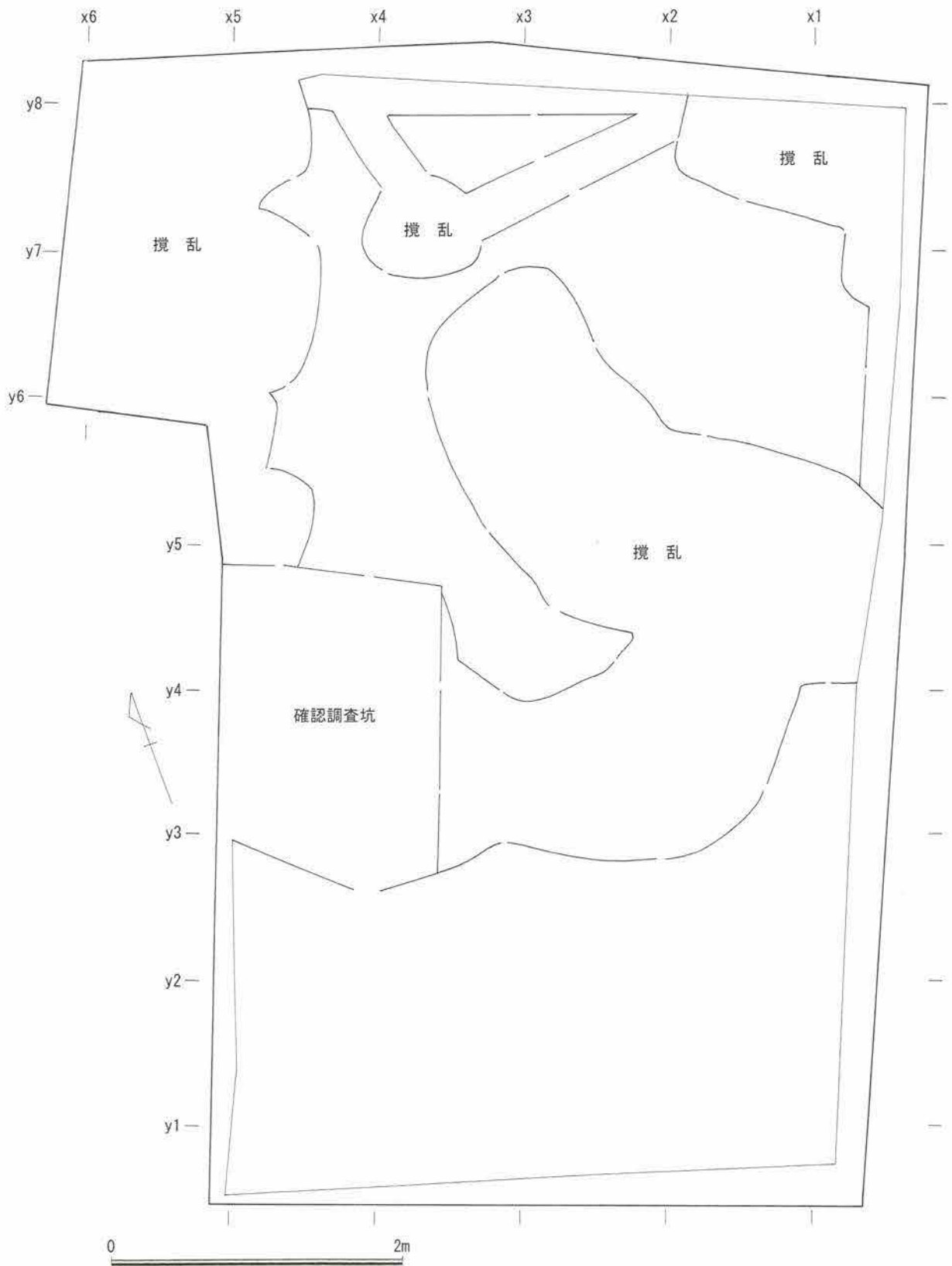


图6 1面遺構配置图

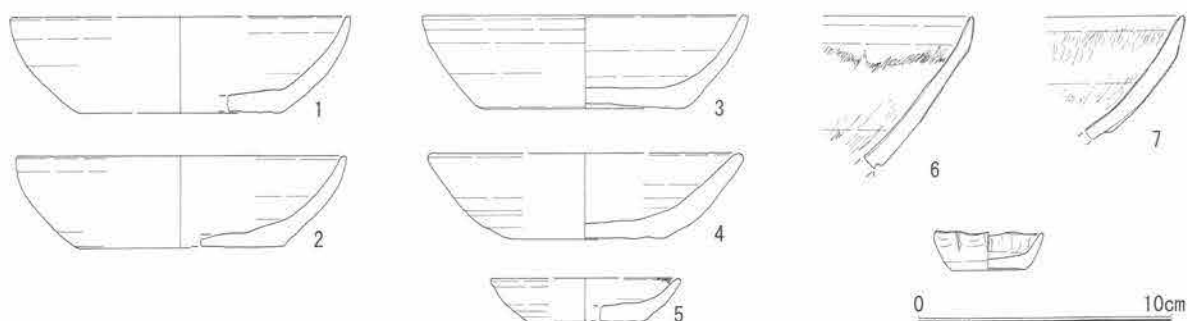


図7 表土層出土遺物

第2面 (図8)

第2面は1面下20～10cm前後、海拔23.9～24.0m付近に検出された。調査区内で北に向かって若干干上っている。非常に硬く締った地業面である。調査区の50パーセント以上が攪乱されていて、詳細は不明だが、遺存部分からは遺構は検出されなかった。出土遺物も少ない。

2面出土遺物 (図9)

図9-1～6は15世紀の轆轤成形のかわらけである。器厚は厚手で、ぼてっとしている。粗雑な作りである。胎土は肌色・橙色を呈し、白針を含み粉質。図9-7～12は舶載品。7・8は青磁蓮弁文碗の口縁部小破片。9・10は青磁碗の小破片。釉調は緑青色～黄味緑青色を呈し、8・9は微気泡多く失透する。素地は灰色を呈し、緻密。11・12は白磁の碗。釉調は白色を呈し、光沢・透明度ともに良い。素地は白色を呈し緻密。図9-13～18は瀬戸である。13は行平鍋の口縁部片。14～17は碗の口縁部片。18は皿の底部片である。13～17は灰釉がかかる。胎土は灰白色を呈し、硬質。図9-19は手焙り。胎土は淡橙色を呈し、雲母片を非常に多く含む。図9-20は瓦質の小型香炉。器表は灰色を呈し、胎土は灰味白色を呈し、石粒を含む。外面は磨かれ滑らかである。図9-21は元豊通寶。(初鑄1078年) 図9-22は上野産の中砥である。

図版番号	遺物番号	層位	遺構	製品名/産地	種別	口径/長さ	底径/幅	器高/厚さ	色調
9	1	2面	-	かわらけ	轆轤成形	(11.4)	6.7	3.2	肌色系
9	2	2面	-	かわらけ	轆轤成形	10.2	5.3	2.8	肌色系
9	3	2面	-	かわらけ	轆轤成形	(7.8)	4.2	1.9	橙色系
9	4	2面	-	かわらけ	轆轤成形	(8.2)	(5.0)	2.5	肌色系
9	5	2面	-	かわらけ	轆轤成形	(7.6)	(5.6)	2.0	橙色系
9	6	2面	-	かわらけ	轆轤成形	(6.4)	4.2	2.3	橙色系
9	12	2面	-	舶載白磁	碗	-	(4.2)	-	-
9	18	2面	-	瀬戸	皿	-	(5.0)	-	-
9	20	2面	-	瓦質	香炉	(7.0)	(6.0)	4.5	-
9	21	2面	-	銭	元豊通寶	2.4	-	-	-
9	22	2面	-	上野産	中砥	[8.0]	2.8	2.4	-



図8 2面遺構配置図

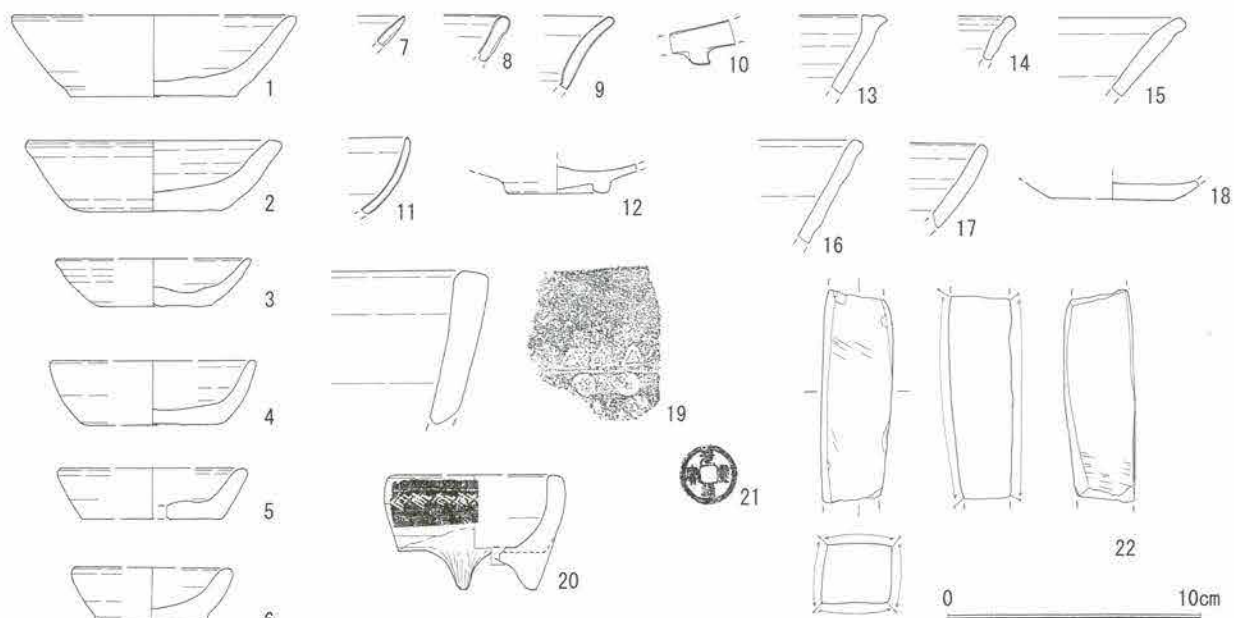


図9 2面出土遺物

第3面 (図10)

第3面は2面下10cm前後、海拔23.8～23.9m付近に検出された。調査区内で北に向かって若干上っている。やや大粒の土丹を含む地業面である。覆土の一部に炭化物が集中している層が確認された。土坑2基・Pit10口が検出された。しかし、調査区の50パーセント以上が攪乱されているため、Pitの建物等の並びをつかむことはできなかった。

土坑1・2 (図11)

土坑1・2はグリッド(X4, y3)付近、海拔23.8m前後に検出された。土坑1が土坑2を切っている。土坑2の半分は調査区外である。

土坑1はおそらく、平面形が直径60cm前後を測る不整形円形を呈し、深さは検出面から24cm前後を測る。

土坑2はその半分が調査区外のため、平面形は不明だが、検出し得た南北幅は最大125cmを測り、深さは検出面から28cm前後を測る。

土坑1・2の埋土の土層注記は以下の通りである。

1層：暗褐色粘質土層 1～5cm大の土丹・かわらけ片・炭化物（やや多）・鎌倉石（焼）粘性あり。縮り良い。

2層：暗褐色粘質土層 1～5cm大の土丹（少）・かわらけ片・炭化物。粘性あり。縮り悪い。

3層：暗褐色粘質土層 1～5cm大の土丹（少）・かわらけ片（少）・炭化物。縮りやや良い。

3面検出Pit (図10)

3面からは10口のPitが検出された。Pit7・60には土丹、Pit61には鎌倉石が据えられていたが、いずれも掘り込みは浅く、他のPitとの展開も確認できなかった。各々の詳細は以下表の通り。

Pit番号	グリッド		平面形	大きさ cm		深さ cm	備考
	x	y		東西幅	南北幅		
1	4	3	円形	30	24	11	
2	4	3	(円形)	48	43	26	
3・4	4	2	不整形円形	60	52	14	
5	4	1	(円形)	37	-	25	
6	4	1	(円形)	28	-	29	
7	4	3	楕円形	30	40	14	石上面レベル23.73m
48	1	7	楕円形	58	46	28	
60	3	3	円形	30	28	9	石上面レベル23.74m
61	2	7	(楕円形)	32	-	8	石上面レベル23.91m

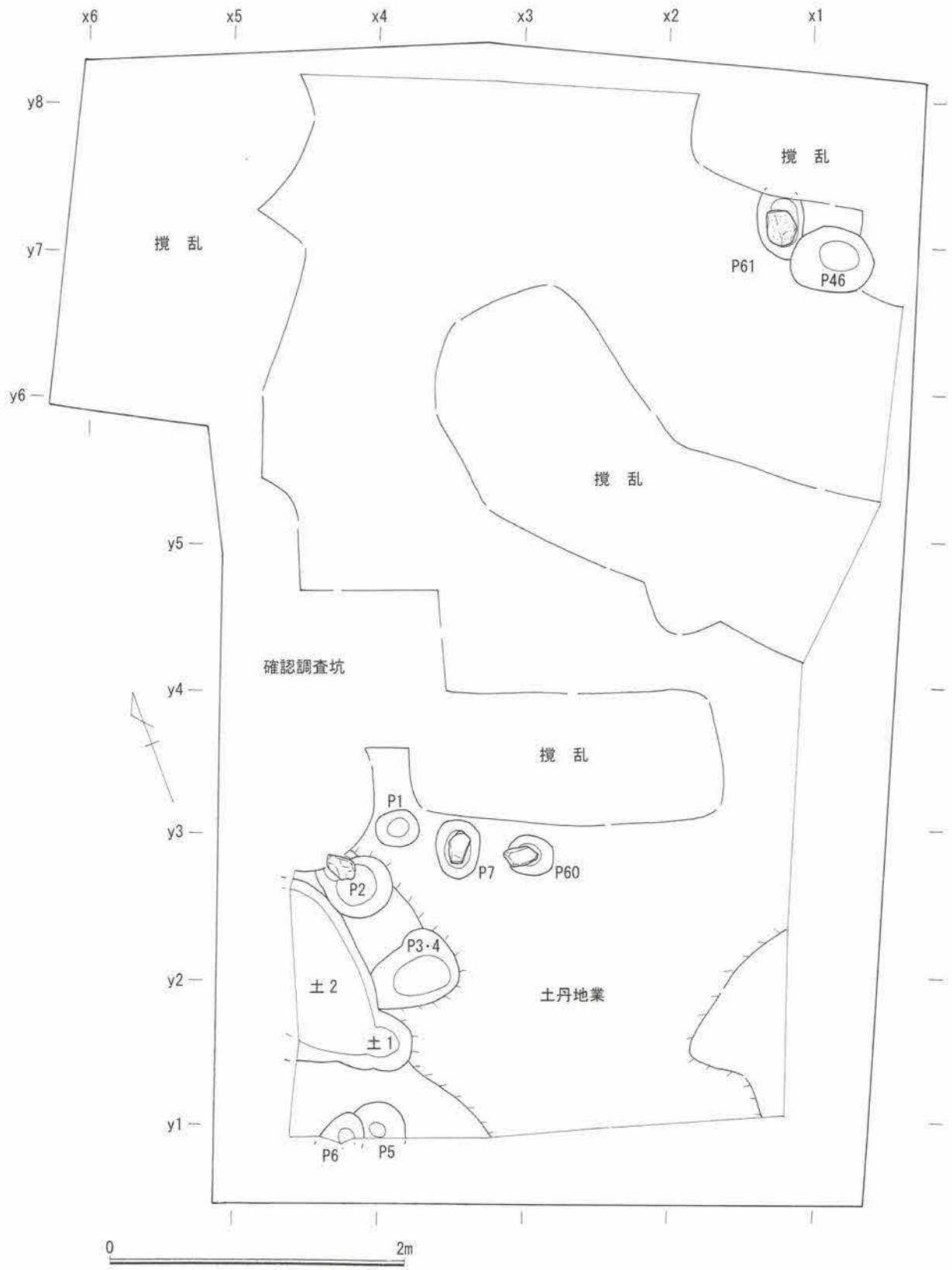


図 10 3面遺構配置図

土坑 2 出土遺物 (図 12 - 1)

図 12 - 1 は轆轤成形のかわらけである。器壁は外に開きながら立ち上がる。内底部立ち上がりが一旦ごくわずかに浅く窪む。器壁は比較的薄い。胎土は淡橙色を呈し、白針・微砂を含み、粉質である。

3 面出土遺物 (図 12 - 2 ~ 13)

図 12 - 2 ~ 13 は 3 面覆土炭化物集中層 (図 5 - 14 層) 出土の遺物である。2 ~ 12 は轆轤成形のかわらけである。大皿は底径と口径の差が小さく、側面観は逆台形を呈す。2 は内底部立ち上がり部分が一旦窪み、内側面は外反する弧を描いて立ち上がる。小皿は底径が小さめで、器壁は丸味を持つ。器高高く、深さがある。7 ~ 12 は糸切りがやや厚く切り残される。胎土は肌色~橙色を呈し、白針・小礫を含み、粉質である。5 は灯明皿である。13 は上野産の中砥である。

図 12 - 14 ~ 44 は 3 面出土遺物である。14 ~ 36 は轆轤成形のかわらけである。14 ~ 19 は大皿、20・21 は中皿、22 ~ 36 は小皿である。

大皿・中皿は口径と底径の差が小さく、側面観は逆台形を呈す。外側面が比較的直線的なのに対し、内側面は内に膨れるように弧を描いて立ち上がる。器高が高く、深さもある。小皿は底径が小さいものが多く、器壁は丸味を持つ。大中小いずれも器厚は厚手で、やや雑な作りである。図 12 - 37 ~ 39 は舶載品である。37・38 は白磁の碗。釉調は透明度の高い白色を呈し、光沢がある。素地は白色を呈し緻密。39 は青白磁の製品で、小破片のため器種は不明である。釉調は青白色を呈し、透明度・光沢ともに良い。素地は白色を呈し緻密。図 12 - 40・41 は瀬戸。40 は灰釉碗の口縁部片。41 は入れ子。図 12 - 42 は研磨痕のある瀬戸片。図 12 - 43・44 は上野産の中砥である。

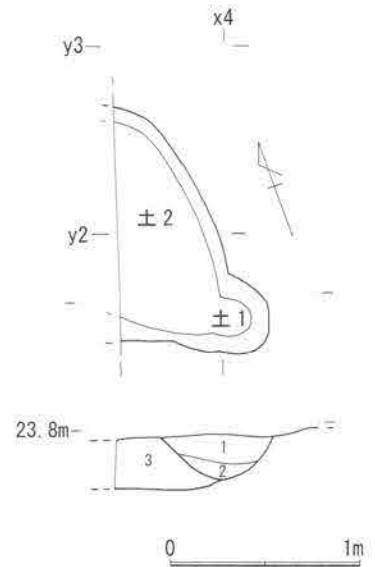


図 11 土坑 1・2

図版番号	遺物番号	層位	遺構	製品名/産地	種別	口径/長さ	底径/幅	器高/厚さ	色調
12	14	3面	-	かわらけ	轆轤成形	14.0	8.8	4.0	橙色系
12	15	3面	-	かわらけ	轆轤成形	13.8	8.4	3.7	淡橙色系
12	16	3面	-	かわらけ	轆轤成形	(12.2)	7.0	3.5	肌色系
12	17	3面	-	かわらけ	轆轤成形	(11.6)	6.0	3.0	橙色系
12	18	3面	-	かわらけ	轆轤成形	12.3	6.8	3.5	橙色系
12	19	3面	-	かわらけ	轆轤成形	12.2	6.5	3.6	橙色系
12	20	3面	-	かわらけ	轆轤成形	11.0	6.5	3.6	淡橙色系
12	21	3面	-	かわらけ	轆轤成形	10.5	5.2	3.3	淡橙色系
12	22	3面	-	かわらけ	轆轤成形	(7.4)	4.1	2.2	淡橙色系
12	23	3面	-	かわらけ	轆轤成形	7.8	3.5	2.4	肌色系
12	24	3面	-	かわらけ	轆轤成形	(8.0)	(4.8)	2.3	肌色系
12	25	3面	-	かわらけ	轆轤成形	(8.6)	(4.6)	2.4	肌色系
12	26	3面	-	かわらけ	轆轤成形	(8.4)	(6.0)	2.4	橙色系
12	27	3面	-	かわらけ	轆轤成形	(8.0)	4.0	2.5	淡橙色系
12	28	3面	-	かわらけ	轆轤成形	7.4	4.5	2.3	橙色系
12	29	3面	-	かわらけ	轆轤成形	7.4	4.2	2.3	肌色系
12	30	3面	-	かわらけ	轆轤成形	7.8	4.6	2.5	橙色系
12	31	3面	-	かわらけ	轆轤成形	7.4	4.1	2.2	淡橙色系
12	32	3面	-	かわらけ	轆轤成形	7.8	4.3	2.1	橙色系
12	33	3面	-	かわらけ	轆轤成形	(7.8)	4.0	2.1	肌色系
12	34	3面	-	かわらけ	轆轤成形	(7.0)	(3.6)	2.1	橙色系
12	35	3面	-	かわらけ	轆轤成形	6.7	4.2	2.2	淡橙色系
12	36	3面	-	かわらけ	轆轤成形	6.9	3.9	2.2	淡橙色系
12	38	3面	-	舶載白磁	碗	-	(3.4)	-	-
12	41	3面	-	瀬戸	入れ子	(5.7)	(3.4)	2.0	-
12	42	3面	-	瀬戸	研磨痕のある陶片	3.5	6.0	1.0	-
12	43	3面	-	上野産	中砥	14.3	4.0	3.1	-
12	44	3面	-	上野産	中砥	[3.8]	3.5	1.9	-

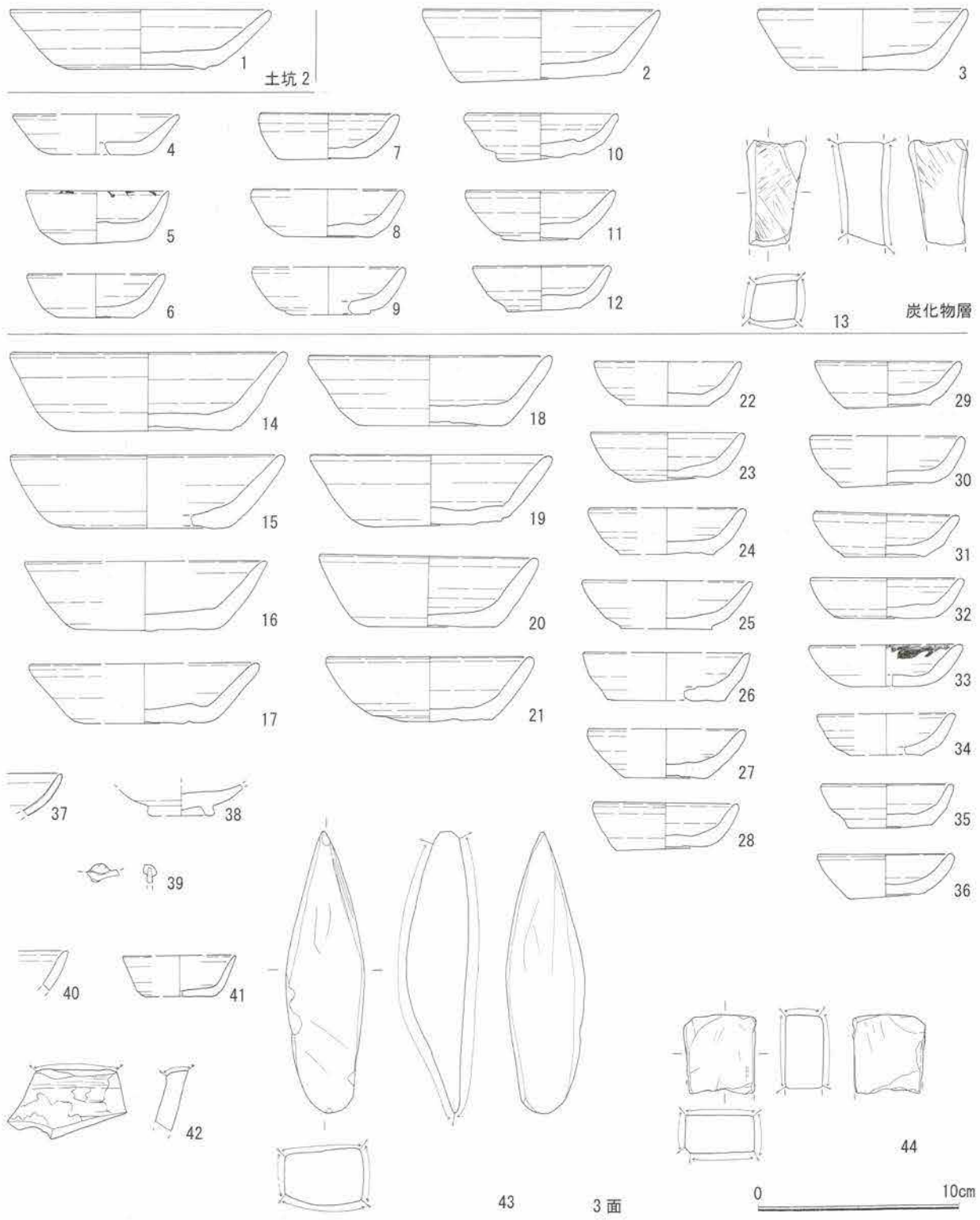


图 12 土坑 2 · 3 面炭化物層 · 3 面出土遺物

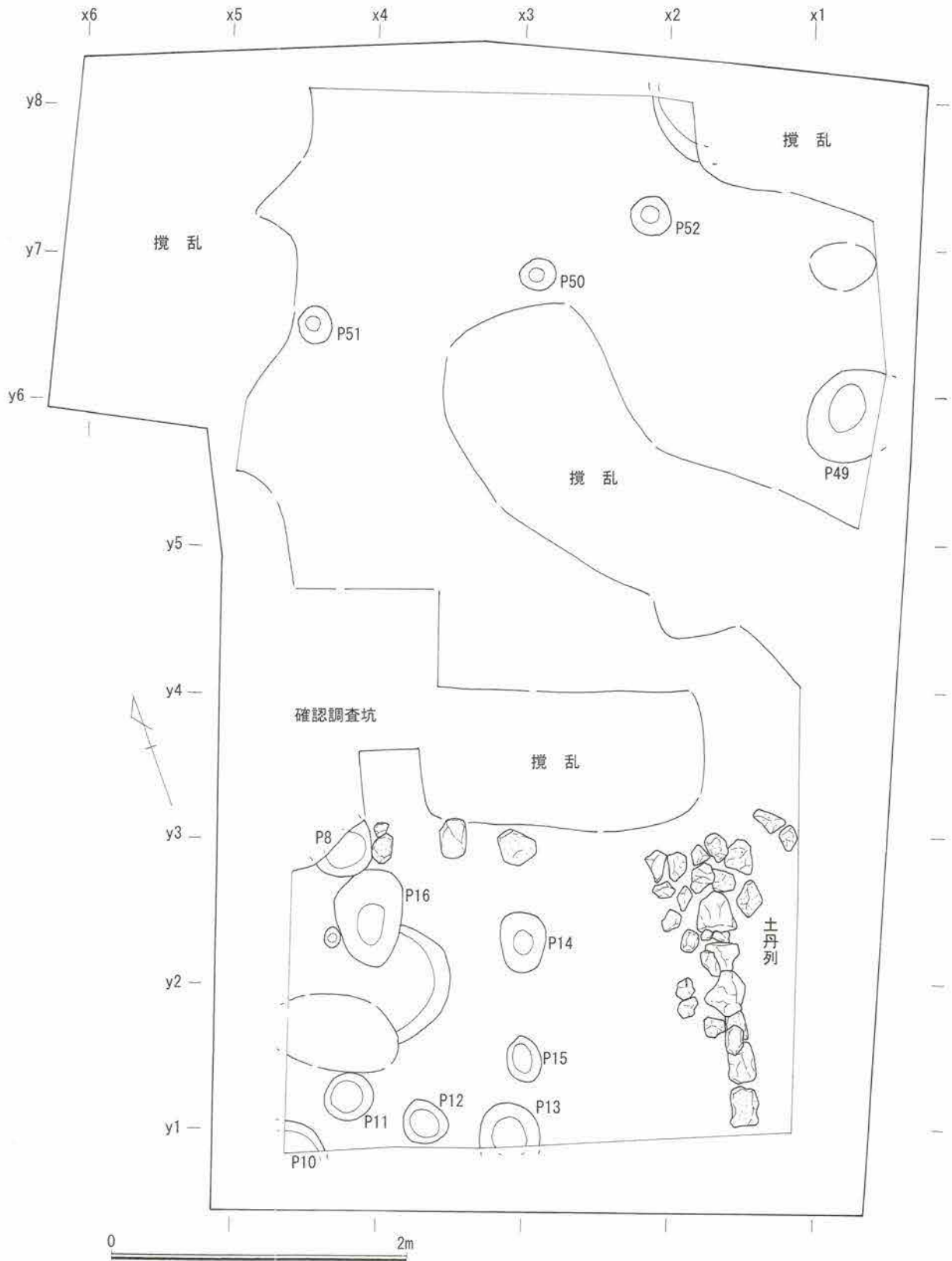


图 13 4面遺構配置図

第4面 (図13)

第4面は3面下20cm前後、海拔23.6～23.7m付近に検出された。調査区内で北に向かって若干上っている。細かい土丹を多く含む地業面である。土丹列・Pit13口が検出された。調査区の1/3程度が攪乱されている。

土丹列 (図13)

土丹列はグリッド(x2、y3)付近、海拔23.7m前後に検出された。南部は調査区外に広がる。また、土丹列北東やや列からずれた位置に土丹が2個検出され、東部も調査区外に広がる可能性がある。15～30cm前後の土丹が南北方向に並べられている。南北軸線方向はN-10°-Eである。

4面検出Pit (図13)

4面からは13口のPitが検出された。その内、南部に検出されたPit8・14・15は近隣に検出された土丹と鎌倉石各々1個と同軸上に載っており、同一遺構の一部の可能性もあるが、検出範囲が狭く、断定はできない。仮に、同一遺構であるとするとその南北軸線方向はN-17°-Eである。各々のPitの詳細は以下表のとおりである。

Pit番号	グリッド		平面形	大きさ cm		深さ cm
	x	y		東西幅	南北幅	
8	4	3	(円形)	-	40	20
10	5	1	不明	-	-	11
11	4	1	円形	35	32	13
12	4	1	円形	30	30	14
13	3	1	(円形)	40	-	17
14	3	2	楕円形	30	42	24
15	3	2	楕円形	24	32	13
16	4	3	不整形円形	46	65	49
49	1	6	円形	-	64	26
50	3	7	円形	23	23	27
51	5	7	円形	22	25	16
52	2	8	円形	27	26	30

4面出土遺物 (図14)

図14-1～16は轆轤成形のかわらけである。大皿は底径と口径の差が小さく、側面観は逆台形を呈す。内側面は内側に一旦膨らみ、外反する弧を描いて立ち上がる。小皿の器壁は丸味がある。いずれも器高が高く、深さがある。胎土は白針・微砂を含み粉質である。3は灯明皿である。図14-17は舶載青磁の碗の口縁部片。釉調は青緑色を呈し、透明度・光沢ともに良い。素地は灰色を呈す。図14-18～21は瀬戸である。18は華瓶、19は皿、20はおろし皿、21は天目茶碗である。18・19は灰釉、21は黒釉がかけられ、上部は茶色を呈す。素地は白褐色を呈す。図14-22・23は常滑のこね鉢。口縁端部は両端が外に摘み出されている。22は胎土が橙褐色、器表が赤紫色を呈し、23は橙色を呈す。口縁部には自然釉が薄くかかり光沢がある。内面は使用により磨滅している。図14-24は瓦質手焙り。器表は剥離が著しく詳細は不明だが、黒色処理されている。胎土は灰白色を呈し、石粒を多く含み、軟質。図14-25は瓦質の小壺。器表は黒色処理され、口縁内側は横位の磨きが施されている。胎土は灰白色を呈し、微石粒を含み軟質である。図14-26は鉄製の釘。図14-27は上野産の中砥である。

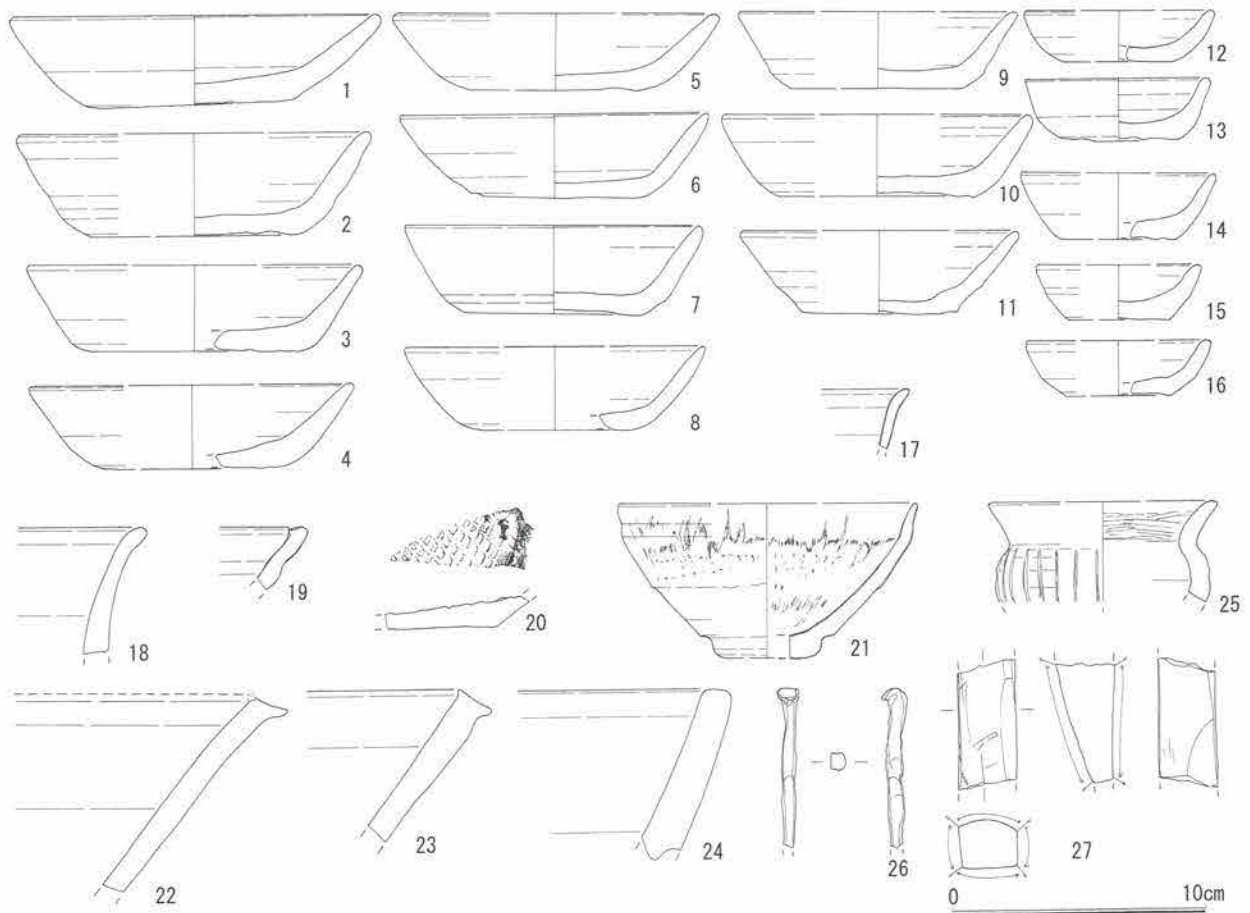


図 14 4面出土遺物

図版番号	遺物番号	層位	遺構	製品名/産地	種別	口径/長さ	底径/幅	器高/厚さ	色調
14	1	4面	-	かわらけ	轆轤成形	14.8	7.8	3.5	橙色系
14	2	4面	-	かわらけ	轆轤成形	(14.2)	(8.0)	4.0	橙色系
14	3	4面	-	かわらけ	轆轤成形	(13.4)	8.2	3.4	肌色系
14	4	4面	-	かわらけ	轆轤成形	(13.0)	7.0	3.3	橙色系
14	5	4面	-	かわらけ	轆轤成形	(13.0)	(6.7)	3.0	橙色系
14	6	4面	-	かわらけ	轆轤成形	12.4	6.2	3.3	肌色系
14	7	4面	-	かわらけ	轆轤成形	12.0	6.9	3.5	橙色系
14	8	4面	-	かわらけ	轆轤成形	(12.0)	(5.6)	3.3	肌色系
14	9	4面	-	かわらけ	轆轤成形	(11.2)	(6.9)	3.0	橙色系
14	10	4面	-	かわらけ	轆轤成形	12.4	(7.8)	3.2	淡橙色系
14	11	4面	-	かわらけ	轆轤成形	(11.2)	6.2	3.2	淡橙色系
14	12	4面	-	かわらけ	轆轤成形	(7.6)	(4.3)	2.0	淡橙色系
14	13	4面	-	かわらけ	轆轤成形	7.4	4.3	2.5	淡橙色系
14	14	4面	-	かわらけ	轆轤成形	(7.8)	(4.4)	2.6	淡橙色系
14	15	4面	-	かわらけ	轆轤成形	(6.6)	(3.9)	2.1	淡橙色系
14	16	4面	-	かわらけ	轆轤成形	(7.4)	(4.1)	2.2	橙色系
14	21	4面	-	瀬戸	天目茶碗	(12.0)	(3.2)	6.1	肌色系
14	25	4面	-	瓦質	小壺	(9.2)	-	-	-
14	26	4面	-	鉄製品	釘	[6.5]	0.6	0.7	-
14	27	4面	-	上野産	中砥	[4.8]	2.3	1.8	-

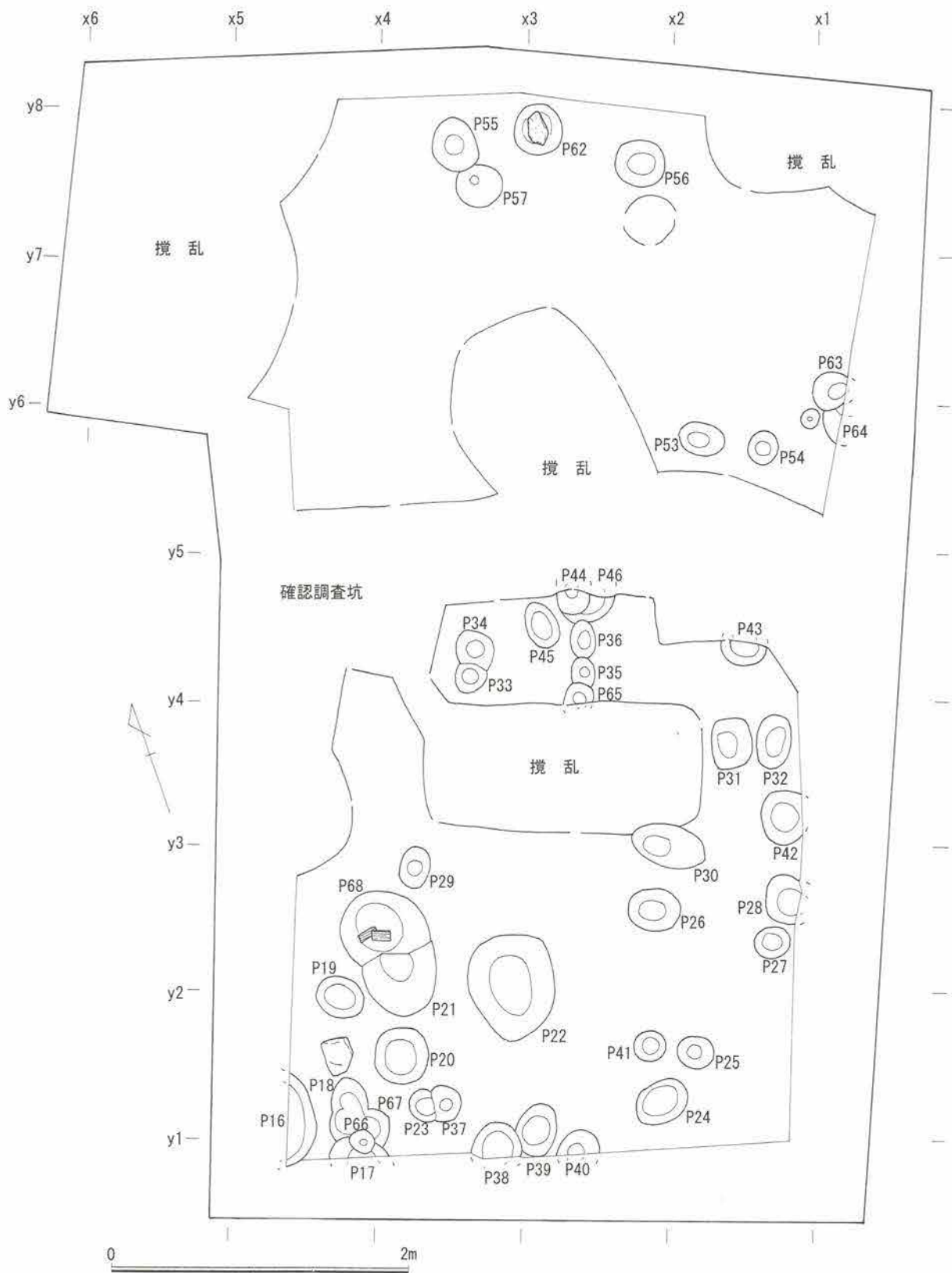


图 15 5面遺構配置図

第5面 (図15)

第5面は4面下20cm前後、海拔23.4～23.5m付近に検出された。調査区内で北に向かって若干上っている。南部はしっかりとした土丹地業面が施されている。北部は土丹地業の層が薄い。調査区の1/3程度が攪乱されている。Pit44口が検出された。

5面検出Pit (図15)

5面からは44口のPitが検出された。Pit62は礎石、Pit68は礎板を伴っているが、建物等の並びをつかむことはできなかった。各々のPitの詳細は以下表のとおりである。

Pit番号	グリッド		平面形	大きさ cm		深さ cm	備考	Pit番号	グリッド		平面形	大きさ cm		深さ cm	備考
	x	y		東西幅	南北幅				x	y		東西幅	南北幅		
16	5	1	不明	-	-	13		37	4	1	円形	-	26	12	
17	4	1	(円形)	42	-	9		38	3	1	(円形)	32	-	23	
18	4	1	(楕円形)	24	-	7		39	3	1	楕円形	28	36	19	
19	4	2	楕円形	34	28	29		40	3	1	(円形)	30	-	19	
20	4	2	円形	37	38	37		41	2	2	円形	20	18	15	
21	4	2	(円形)	50	-	39		42	1	3	楕円形	(30)	36	36	
22	3	2	不整形	60	70	40		43	2	4	(円形)	30	-	27	
23	4	1	円形	-	22	6		45	3	5	楕円形	22	32	9	
24	2	1	楕円形	34	30	20		46	3	5	(円形)	40	-	18	2段
25	2	2	円形	24	20	13		53	2	6	楕円形	30	22	21	
26	2	3	楕円形	36	28	31		54	2	6	円形	22	22	22	
27	1	3	円形	24	22	29		55	4	8	円形	31	37	11	
28	1	3	(円形)	-	34	25		56	3	8	円形	34	30	18	
29	4	3	楕円形	20	30	8		57	4	8	円形	30	30	50	
30	3	5	楕円形	18	26	19		62	3	8	円形	33	36	13	石上面レベル23.62m
30	2	3	楕円形	50	30	56		63	1	6	(円形)	-	26	11	
31	2	4	隅丸方形	28	35	42		64	1	6	不明	-	-	10	
32	1	4	楕円形	23	38	35		65	3	4	(円形)	20	-	25	
33	3	4	円形	22	18	17		66	4	1	円形	17	16	22	
34	3	4	円形	26	-	23		67	4	1	(楕円形)	40	-	9	
35	3	4	円形	17	22	23		68	4	3	(円形)	60	-	57	礎板上面レベル23.0m

5面出土遺物 (図16)

図16-1～13は轆轤成形のかわらけである。大皿は側面観が逆台形を呈し、内底立ち上がり部分にごく浅い窪みがある。内側面は一旦膨らみ、外反気味に立ち上がる。中皿と小皿は丸味がある。いずれも器高は高く、深さがある。胎土は白針・微砂を含み粉質である。図16-14～19は瀬戸である。いずれも灰釉がかけられている。14～16は折れ縁鉢、17～18は碗である。19の高台は削りだして、ごく浅い削り込みがある。図16-20は山茶碗窯系こね鉢。胎土は青味灰色を呈し、硬質。口縁端部には自然釉がごく薄くかかり、光沢がある。図16-21～24は砥石。21～23は上野産の中砥。24は伊予産の中砥である。

第5b面 (図17)

第5b面は調査区北部のみに5面下10cm、海拔23.4m前後に検出された。小土丹を含む良好な地業面である。石列1列・Pit3口が検出された。

石列1 (図18)

石列1はグリッド(x5、y7)付近、海拔23.4m前後に検出された。東西方向に2個の鎌倉石とPit2口が並ぶ。鎌倉石とPitの距離は芯々で西から126cm-100cm-126cmを測る。Pit69・70の平面形は円形を呈し、各々、直径36cm・25cm、深さは検出面から20cm・16cmを測る。東西軸線方向はE-7°-Sである。南北への平面的展開は調査区外あるいは攪乱のため不明である。しかし、南部からは5b面は検出されなかったため、南への展開はないものと考え得る。また、Pitは柱穴ではなく、礎石抜き跡であろう。

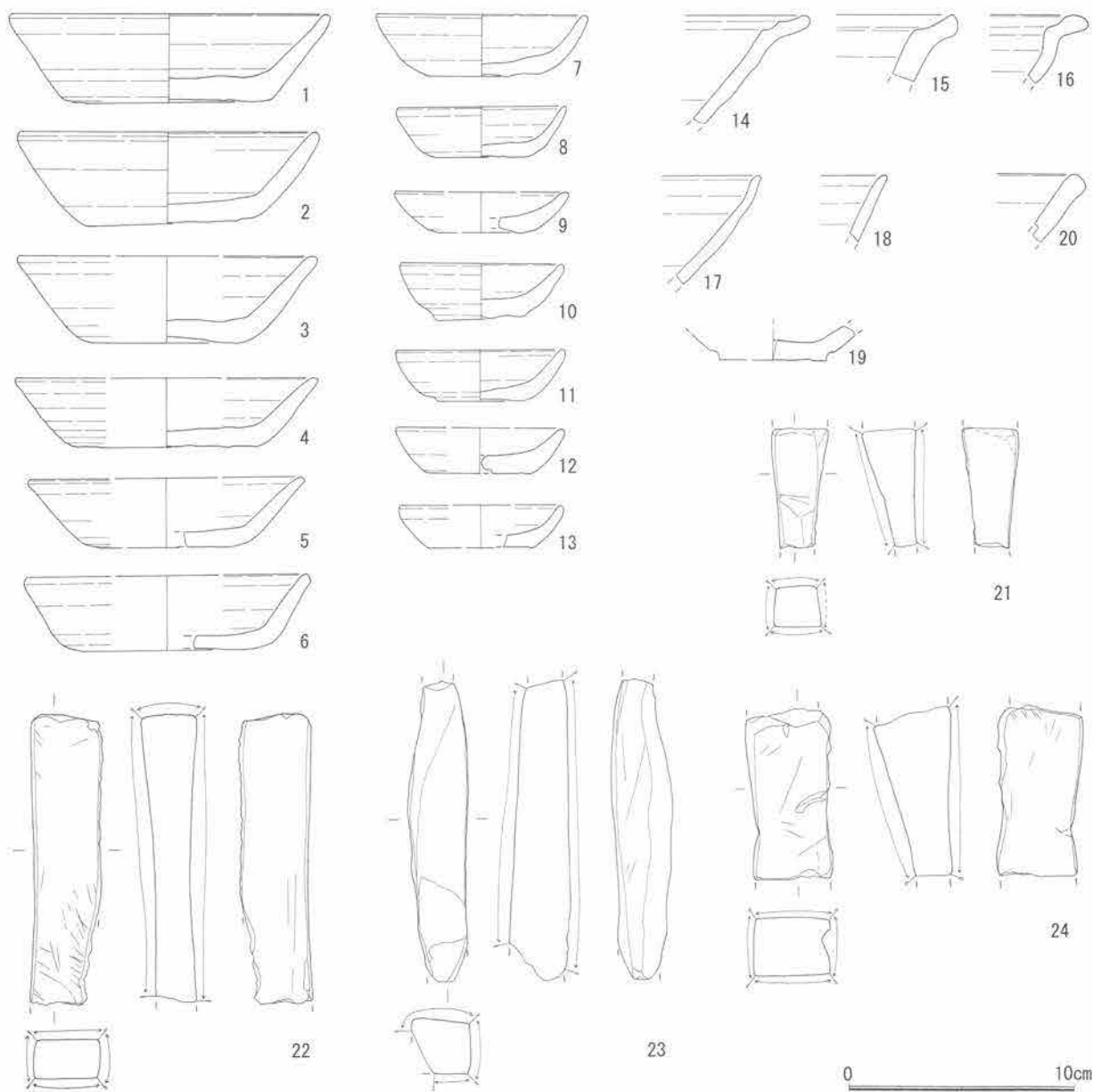


図 16 5面出土遺物

図版番号	遺物番号	層位	遺構	製品名/産地	種別	口径/長さ	底径/幅	器高/厚さ	色調
16	1	5面	-	かわらけ	轆轤成形	14.4	7.8	3.9	淡橙色系
16	2	5面	-	かわらけ	轆轤成形	13.5	6.6	4.0	淡橙色系
16	3	5面	-	かわらけ	轆轤成形	(13.4)	6.6	3.8	淡橙色系
16	4	5面	-	かわらけ	轆轤成形	(13.6)	8.2	3.0	肌色系
16	5	5面	-	かわらけ	轆轤成形	(12.4)	(5.8)	3.1	肌色系
16	6	5面	-	かわらけ	轆轤成形	(12.8)	(7.4)	3.4	淡橙色系
16	7	5面	-	かわらけ	轆轤成形	9.5	5.1	2.7	淡橙色系
16	8	5面	-	かわらけ	轆轤成形	7.6	3.9	2.2	淡橙色系
16	9	5面	-	かわらけ	轆轤成形	(7.8)	(3.8)	1.8	淡橙色系
16	10	5面	-	かわらけ	轆轤成形	7.3	4.0	2.5	橙色系
16	11	5面	-	かわらけ	轆轤成形	7.6	3.8	2.3	橙色系
16	12	5面	-	かわらけ	轆轤成形	(7.6)	(4.6)	2.0	橙色系
16	13	5面	-	かわらけ	轆轤成形	(7.4)	1.9	1.9	橙色系
16	19	5面	-	瀬戸	碗	-	(4.8)	-	-
16	21	5面	-	上野産	中砥	[5.3]	2.5	2.4	-
16	22	5面	-	上野産	中砥	[12.9]	3.2	2.5	-
16	23	5面	-	上野産	中砥	[13.4]	2.7	2.7	-
16	24	5面	-	伊予産	中砥	[7.6]	3.8	3.5	-

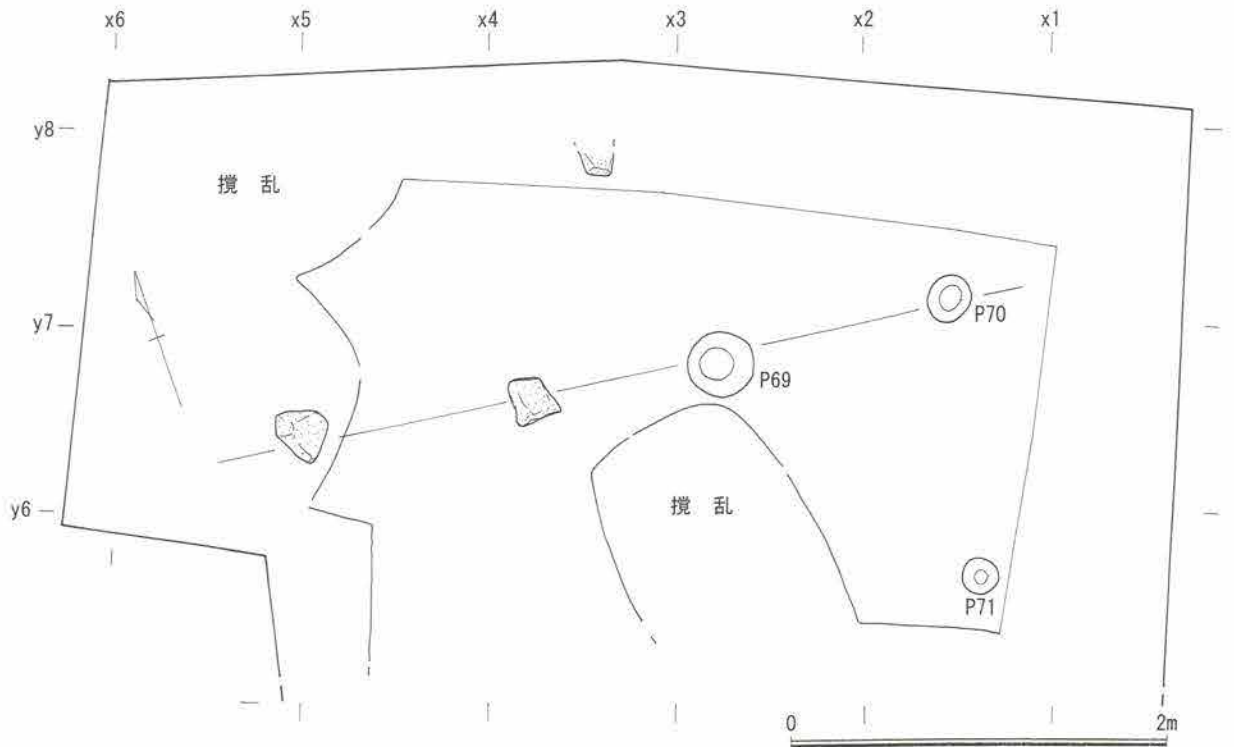


図17 5 b面遺構配置図

5 b面出土遺物 (図19)

図19-1・2は舶載品。

1は青磁櫛搔蓮弁文碗の破片。釉調は緑灰色を呈し、透明度・光沢ともに良い。素地は灰色を呈し、緻密。

2は白磁印花文碗の破片。釉調はやや青味のある白色を呈し、透明度・光沢ともに良い。素地は白色を呈し、緻密。

図19-3は天草産の中砥。長さ [5.3] cm、幅 3.3 cm、厚さ 1.2 cmを測る。

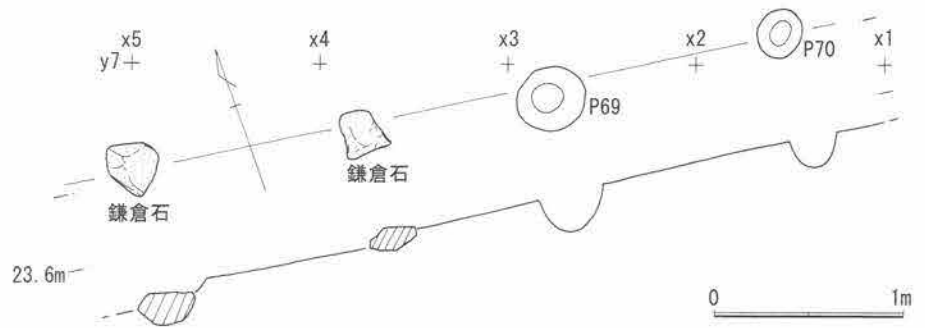


図18 石列1

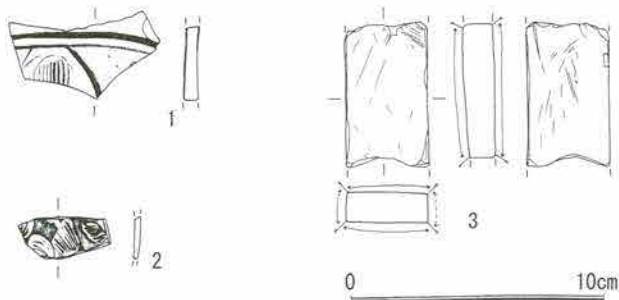


図19 5 b面出土遺物

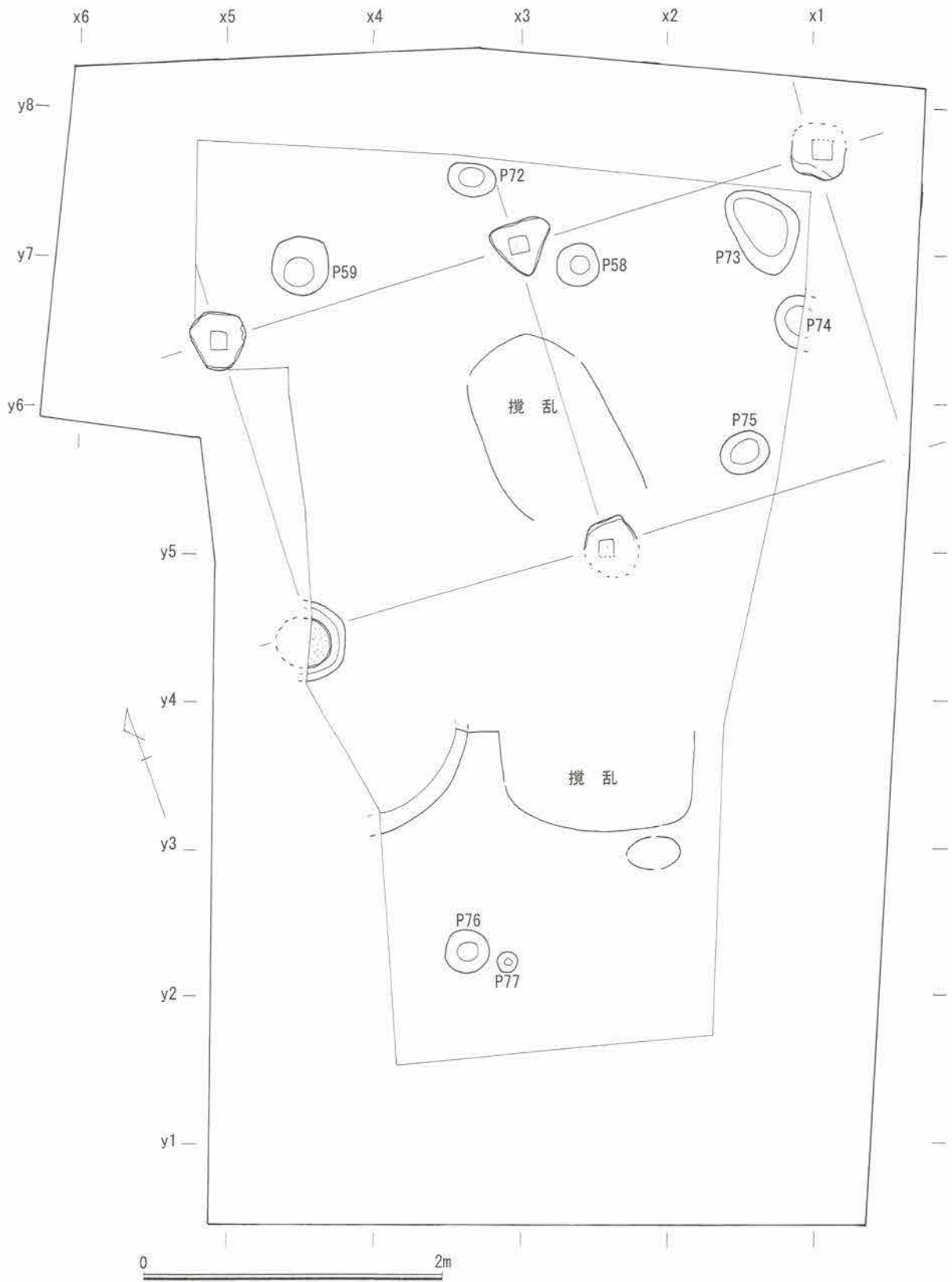


图 20 6面遺構配置図

第6面 (図20)

第6面は5面下40 cm、5b面下30 cm、海拔23.0～23.1 m前後に検出された。1～5 cm大の土丹で版築された地業面である。礎石建物1棟・Pit8口が検出された。調査深度が深くなり、I区とII区の調査区の境に安全確保のため未調査部分が発生している。

礎石建物1 (図21)

礎石建物1はグリッド(x 5、y 7)付近、海拔23.1 m前後に検出された。礎石5個が検出された。礎石は4個が安山岩で、南西隅の1個は花崗岩である。鎌倉では花崗岩の礎石は珍しい。建物は焼失したものと見られ、安山岩の礎石は橙色や黒色に変色し、上面には柱痕がくっきりと残っている。柱痕の1辺は11 cm～13 cmを測る。礎石間の距離は芯々で210 cmを測る。さらに北東西に広がるが、調査区外のため全体の規模は不明であるが、かなりの規模の建物である。南北軸線方向はN-2°-Eである。

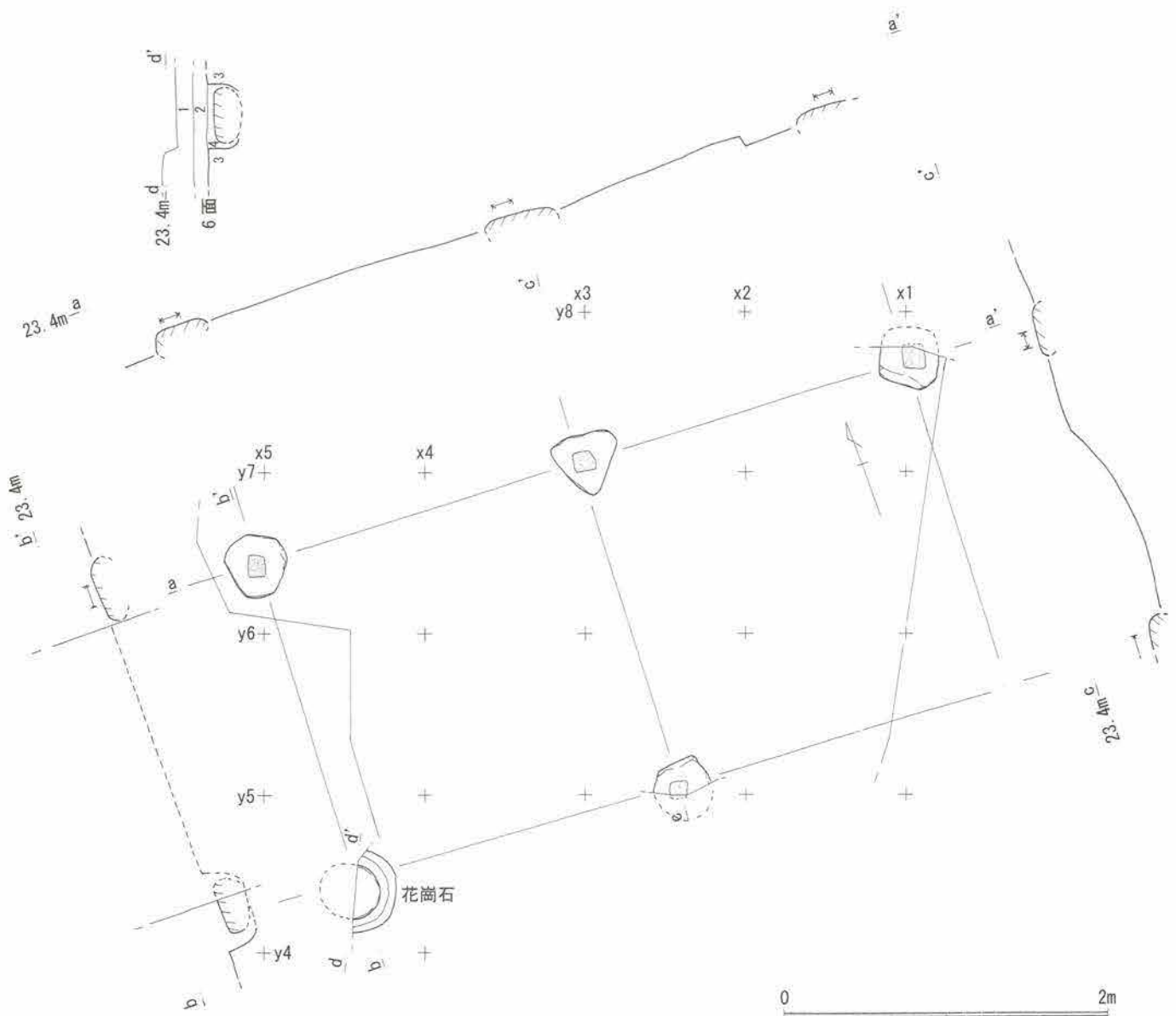


図21 礎石建物1

6面検出Pit (図20)

6面からは8口のPitが検出された。並びはつかめなかった。詳細は以下表のとおりである。

6面出土遺物 (図22)

図22-1~17は轆轤成形のかわらけである。1~6は大皿である。器壁は丸味を持って立ち上がる。器高は高く、深さがある。7~17は小皿である。7~10は底径がやや大きく、器壁は丸味を持って立ち上がり、器高が低く、浅い。11~17は底径がやや小さく、器高は高く、深さがある。器厚は薄い。12~15は灯明皿である。図22-18・19は舶載品である。18は白磁口元皿。釉調は若干青味のある白色を呈し、光沢は良いが、透明度はやや悪い。素地は灰味白色を呈し、緻密。19は緑釉の盤。内側面に複数の沈線がみられる。釉調は光沢はあるが不透明で、内側面は緑色、内底面は白褐色を呈す。素地は肌色を呈し、白色石粒や赤茶褐色粒を多く含む。図22-20は瀬戸の天目型茶碗である。褐釉がかけられ、外面には釉垂れがある。胎土は灰色を呈し、硬質。図22-21は山茶碗の口

Pit番号	グリッド		平面形	大きさ cm		深さ cm
	x	y		東西幅	南北幅	
58	3	7	円形	28	28	20
59	5	7	円形	40	40	31
72	3	8	楕円形	32	23	17
73	2	7	不整形	54	53	9
74	1	7	(円形)	-	34	13
75	2	6	円形	34	28	10
76	3	3	円形	30	30	16
77	3	3	円形	13	13	11

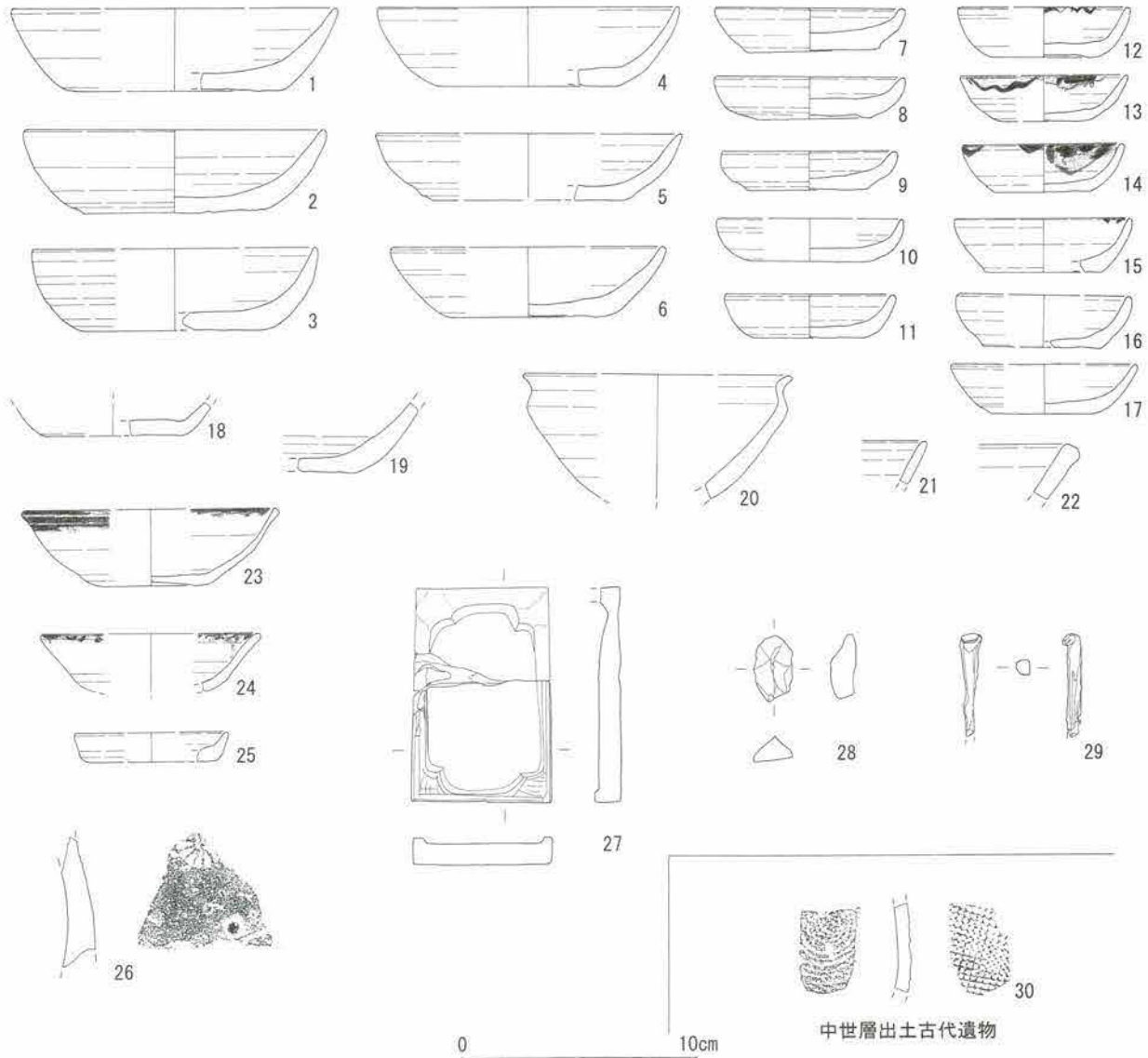


図22 6面出土遺物

縁部片。胎土は白褐色を呈し、微石粒を含む。図 22 - 22 は山茶碗窯系こね鉢の口縁部片。胎土は灰色を呈し、石粒を多く含み粗い。図 22 - 23 は瓦器黒縁碗。重ね焼きされ口縁部分が黒色処理される。底部糸切り。胎土は白色を呈し、水籤され滑らかである。図 22 - 24・25 は白かわらけである。24 は碗型。薄手で、深い器形である。胎土は白褐色を呈し、水籤され滑らかである。灯明皿として使用されている。25 は皿型である。胎土は桃白色を呈し、微石粒を含む。図 22 - 26 は手焙りの胴部片。菊花文のスタンブと張付連珠文が施される。表面は黒色処理される。胎土は赤茶褐色を呈し、微砂を多く含み粗く、脆い。図 22 - 27 は小型の硯。図 22 - 28 は火打石。図 22 - 29 は鉄製の釘。図 22 - 30 は須恵の甕の胴部片。外面には格子叩き目、内面には青海波の叩き目が残る。胎土は黒灰色を呈し、白色式粒を含み、硬質。また、この面からは動物の骨片が出土している。いずれも細かい破片で、詳細は不明だが、肋骨の破片やウマの指骨などがみられる。(写真図版 12 参照)

図版番号	遺物番号	層位	遺構	製品名/産地	種別	口径/長さ	底径/幅	器高/厚さ	色調
22	1	6面	-	かわらけ	轆轤成形	(14.0)	(8.8)	3.5	淡橙色系
22	2	6面	-	かわらけ	轆轤成形	13.0	7.5	3.5	淡橙色系
22	3	6面	-	かわらけ	轆轤成形	(12.2)	7.8	3.5	淡橙色系
22	4	6面	-	かわらけ	轆轤成形	(13.0)	7.2	3.3	淡橙色系
22	5	6面	-	かわらけ	轆轤成形	(13.2)	(8.2)	3.8	淡橙色系
22	6	6面	-	かわらけ	轆轤成形	(11.9)	(6.4)	3.0	淡橙色系
22	7	6面	-	かわらけ	轆轤成形	8.2	5.7	1.8	淡橙色系
22	8	6面	-	かわらけ	轆轤成形	8.2	4.8	1.8	橙色系
22	9	6面	-	かわらけ	轆轤成形	7.6	5.1	1.6	肌色系
22	10	6面	-	かわらけ	轆轤成形	(8.0)	(4.8)	1.8	淡橙色系
22	11	6面	-	かわらけ	轆轤成形	7.4	4.7	1.9	肌色系
22	12	6面	-	かわらけ	轆轤成形	(7.4)	4.7	2.1	肌色系
22	13	6面	-	かわらけ	轆轤成形	(7.2)	(3.4)	1.9	肌色系
22	14	6面	-	かわらけ	轆轤成形	7.0	4.2	2.0	肌色系
22	15	6面	-	かわらけ	轆轤成形	7.6	5.0	2.3	淡橙色系
22	16	6面	-	かわらけ	轆轤成形	(7.6)	(5.0)	2.2	淡橙色系
22	17	6面	-	かわらけ	轆轤成形	(8.0)	4.5	2.1	淡橙色系
22	18	6面	-	舶載白磁	口元皿	-	(5.8)	-	-
22	20	6面	-	瀬戸	天目茶碗	(11.6)	-	-	-
22	23	6面	-	瓦器	黒縁碗	11.0	4.2	3.3	-
22	24	6面	-	白かわらけ	碗	(9.4)	-	-	-
22	25	6面	-	白かわらけ	皿	(7.4)	(5.0)	1.3	-
22	27	6面	-	石製品	硯	9.3	6.0	1.1	-
22	28	6面	-	石製品	火打石	2.9	1.6	1.0	-
22	29	6面	-	鉄製品	釘	[4.5]	0.7	0.6	-

第7面 (図 23)

第7面は6面下20～10cm、海拔22.8～23.0m前後に検出された。岩盤である。Pit3口が検出された。岩盤は表面が崩れ、大小の土丹塊が散乱している。この面は生活面というよりは6面の基盤面といえよう。検出されたPitも掘り込みが10cm以下と柱穴とは言えず、上層からの掘り込みの底部付近と考えられる。

7面出土遺物 (図 24)

図 27 は轆轤成形のかわらけである。1～6は大皿。器壁は丸味を持ち、器高は高く、深さがある。器厚はやや薄い。7～14は小皿。底径が大きく、口径との差が少ない。器高低く、浅い。いずれも胎土は白針・微砂を含み9～11は微砂を多く含み砂質、その他は粉質である。3は灯明皿である。12は再火を受けたためか、全体が黒色に変色し、脆い。また、この他にウマと思われる骨の小破片が出土している。(写真図版 12)

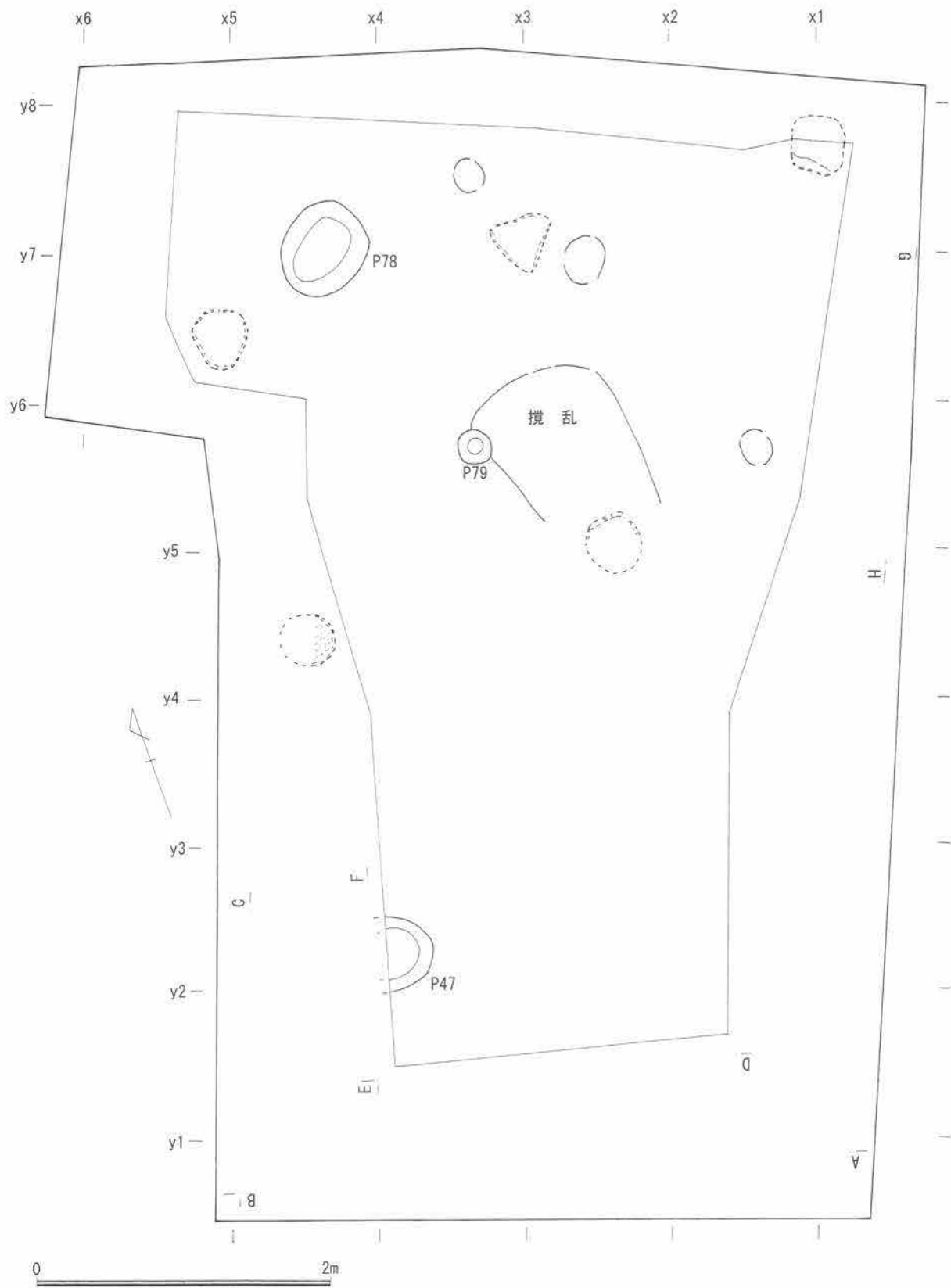


图 23 7 面遺構配置図

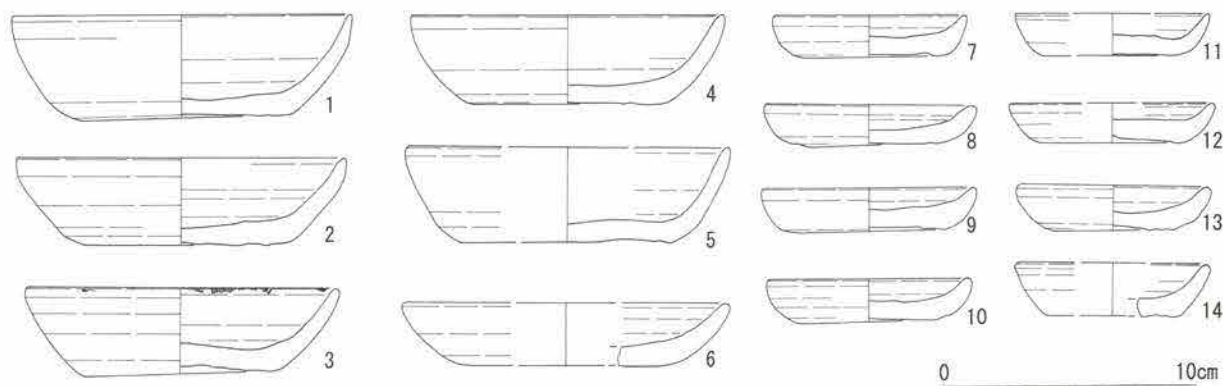


図 24 7面出土遺物

図版番号	遺物番号	層位	遺構	製品名/産地	種別	口径/長さ	底径/幅	器高/厚さ	色調
24	1	7面	-	かわらけ	轆轤成形	13.6	8.2	3.9	肌色系
24	2	7面	-	かわらけ	轆轤成形	13.2	7.2	3.4	淡橙色系
24	3	7面	-	かわらけ	轆轤成形	12.6	7.4	3.4	肌色系
24	4	7面	-	かわらけ	轆轤成形	12.6	7.3	3.5	肌色系
24	5	7面	-	かわらけ	轆轤成形	(13.0)	(8.2)	3.7	肌色系
24	6	7面	-	かわらけ	轆轤成形	(13.2)	(7.2)	2.5	淡橙色系
24	7	7面	-	かわらけ	轆轤成形	7.8	5.7	1.5	淡橙色系
24	8	7面	-	かわらけ	轆轤成形	8.6	4.9	1.6	淡橙色系
24	9	7面	-	かわらけ	轆轤成形	8.6	5.8	1.7	橙色系
24	10	7面	-	かわらけ	轆轤成形	8.2	5.3	1.7	橙色系
24	11	7面	-	かわらけ	轆轤成形	(8.0)	(5.4)	1.5	橙色系
24	12	7面	-	かわらけ	轆轤成形	(8.2)	5.6	1.6	黒色
24	13	7面	-	かわらけ	轆轤成形	7.8	4.8	1.8	肌色系
24	14	7面	-	かわらけ	轆轤成形	(7.8)	(5.0)	2.1	肌色系

第4章 まとめ

今回の調査では第3章で詳細を報告したように、合計7面にわたる生活面が検出された。調査区内が大きく攪乱されていたため、5面まではさらに調査面積が狭くなってしまった。しかし、遺存する部分からはそれを補うほどの成果が得られたといえよう。

各面の時代区分は以下の通りである。

第7面・第6面（14世紀前半）

第5面・第4面・第3面（14世紀後半～15世紀前半）

第2面（15世紀代）

第1面（15世紀以降から近世まで）

当遺跡の最下層第7面（岩盤）・第6面は14世紀前半、鎌倉時代末期～室町時代初期に比定される。その後、14世紀後半～15世紀代、室町時代にかけて、頻繁に造成が繰り返された様相が顕わになった。今回検出されたもっとも古い面には礎石建物が建てられ、その建物が火災に遭って焼失した後、調査区の面積的な制約上、建物等の大型遺構の検出は確認できなかったものの土丹版築による良好な地業が15世紀前半までに3、4回繰り返されていることが判明した。14世紀代～15世紀代に遺跡の隆盛期がみられるこの結果は当地域が鎌倉幕府滅亡後、正平四年（1349）に足利尊氏が4男基氏を東国支配の拠点として鎌倉府をおいてから（浄明寺周辺は現在も公方屋敷跡と通称されるように）公方屋敷として使用され、永享十年（1439）に鎌倉公方が幕府と対立し実質解体した時期と符合する。

今回の調査では遺跡の名称である大楽寺に直接的に関連を示す遺構あるいは遺物は発見されなかった。大楽寺に関しては現在廃寺となり、あまり詳しい資料がない。現在、厚木市依知にある浅間神社にある元、大楽寺の鐘の銘文によると文保元年（1317）に伽藍を興隆したらしいことが分かる。その後、永享十年の乱に際して火災に遭い、胡桃ヶ谷から二階堂に移ったようである。今回の調査で第6面に発見された礎石建物は柱間210cm（7尺）を測り、寺院や武家屋敷等の大型の建物が建っていたことは間違いない。この礎石建物が、大楽寺の一部であるという見方は、時期的及び規模的に見てもそう的外れな想像ではないであろう。

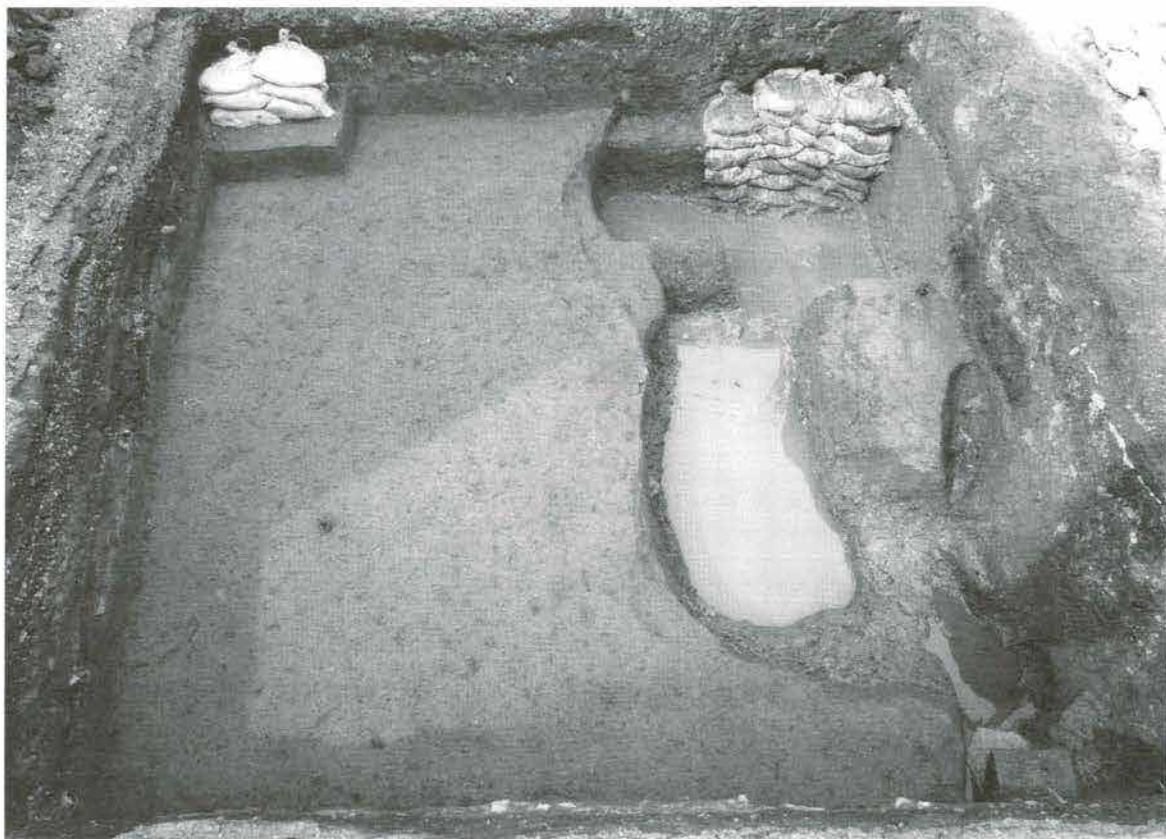
調査地点付近、特に谷戸内での発掘調査はこれ以前にはほとんど実施されておらず、現在では住宅地となった胡桃ヶ谷の往時の様相はこれまで、崖肌にやぐらが散見されるにとどまっていたが、今回の調査で、この地の様相の一端が解明されたといえよう。

参考文献

『鎌倉事典』白井永二編 東京堂出版 平成4年1月10日発行

『鎌倉の地名由来辞典』三浦勝男編 東京堂出版 2005年9月20日発行

『鎌倉廃寺事典』貫達人・川副武胤 有隣堂 昭和55年12月15日発行



▲A. I区 1面全景（東より）



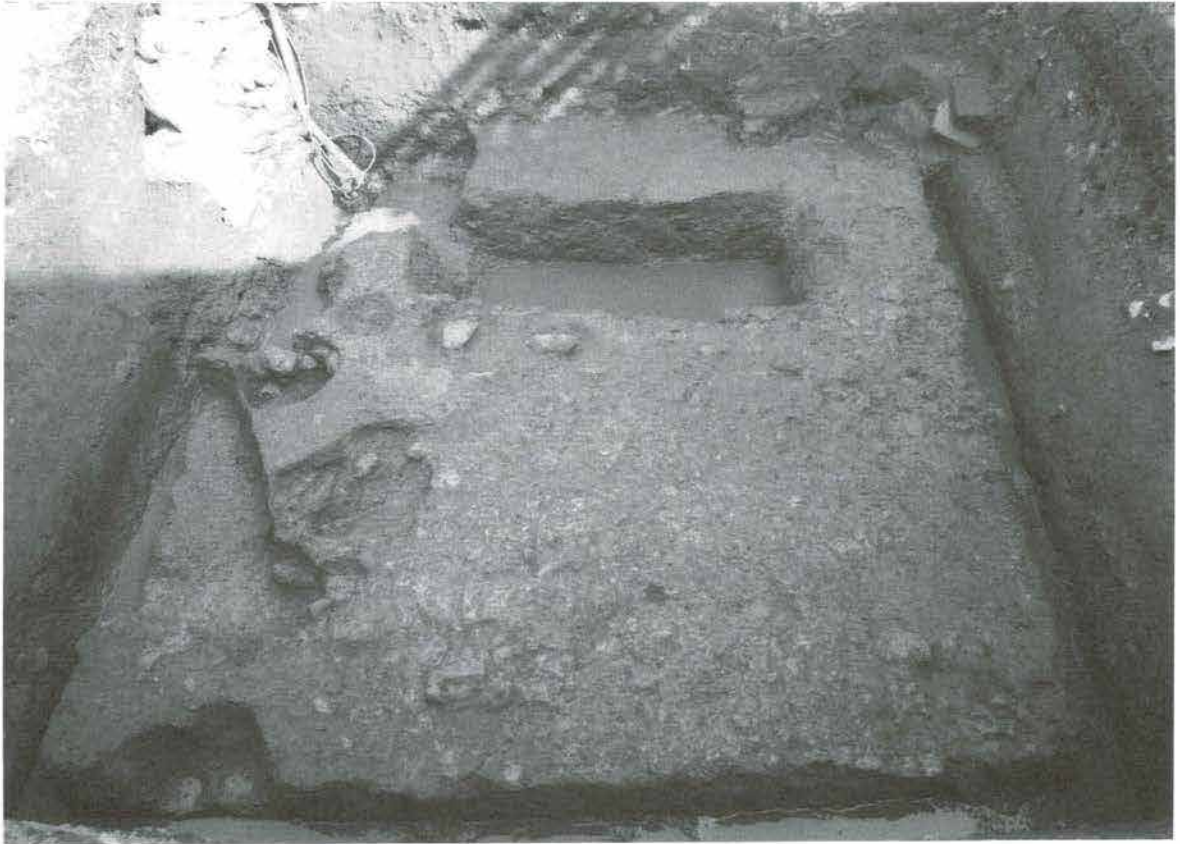
▲B. II区 1面全景（北より）



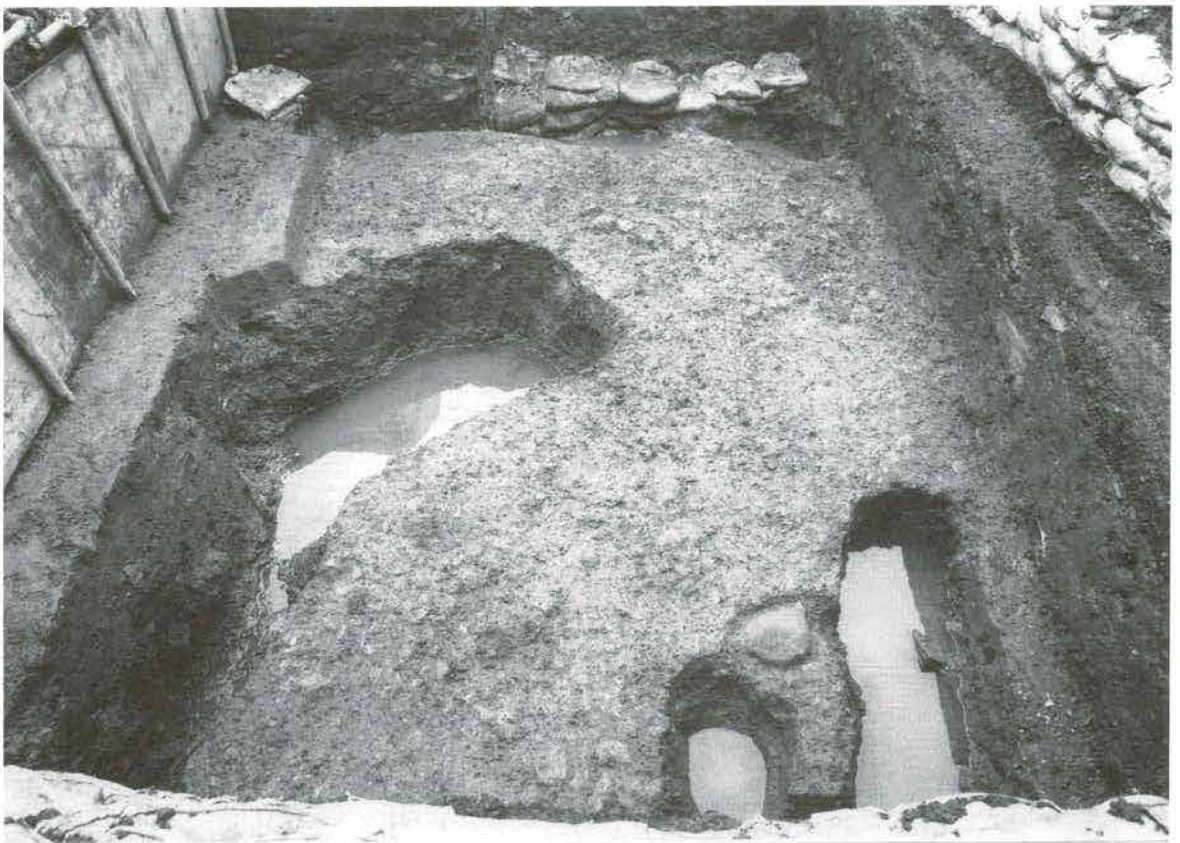
▲A. I区 2面全景 (南より)



▲B. II区 2面全景 (東より)



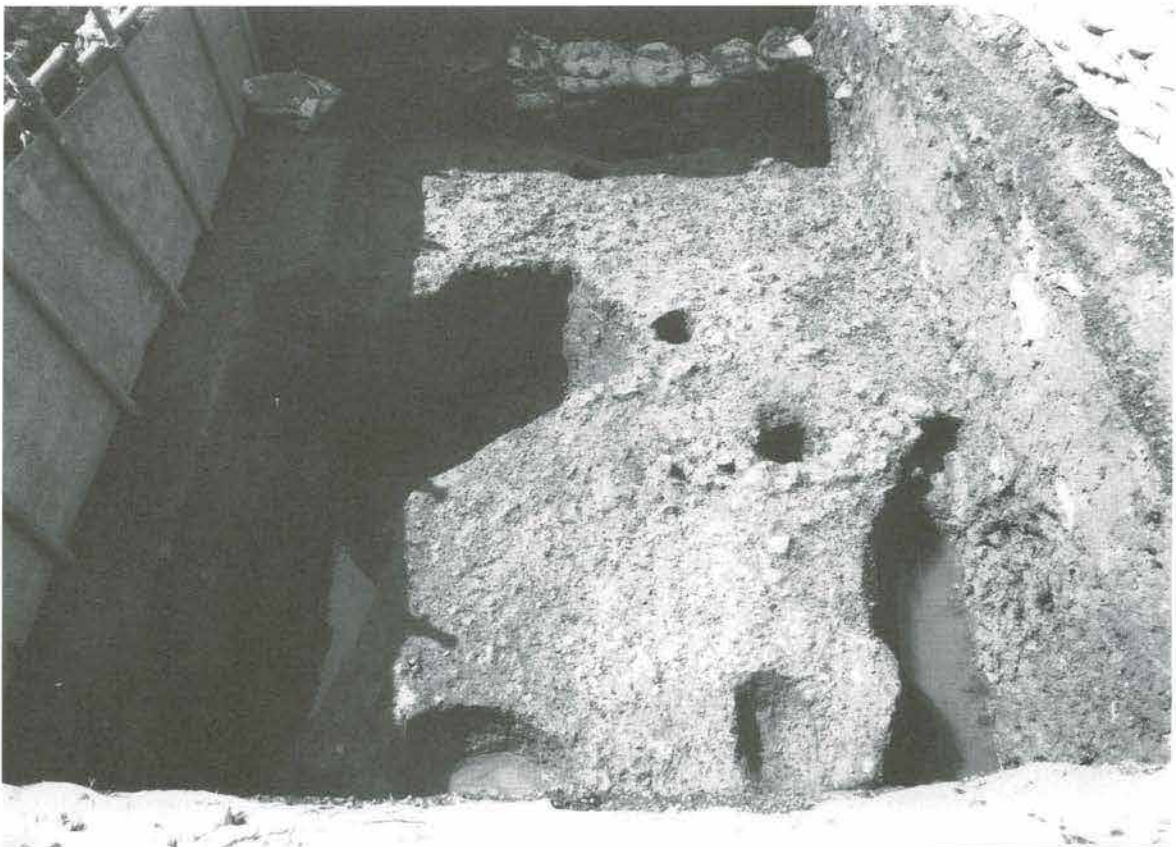
▲A. I区 3面全景（南より）



▲B. II区 3面全景（東より）



▲A. I区 4面全景（東より）



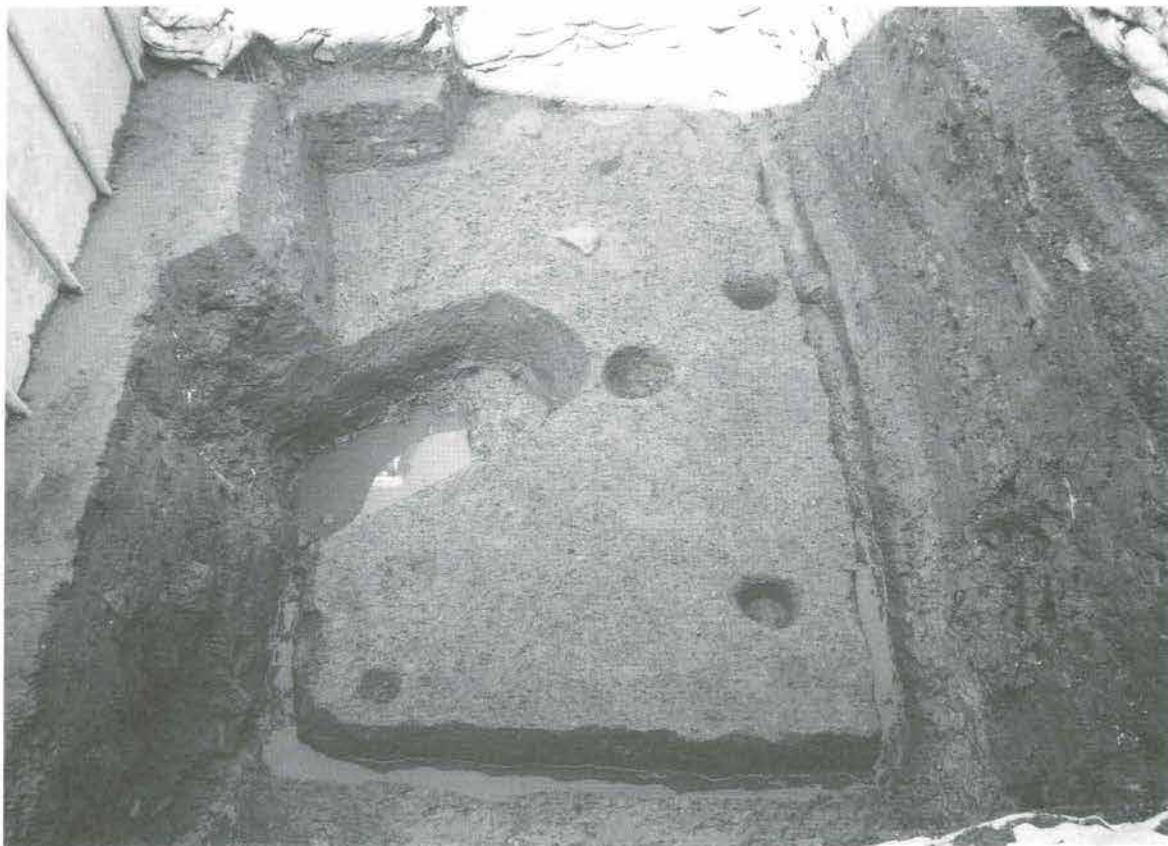
▲B. II区 4面全景（東より）



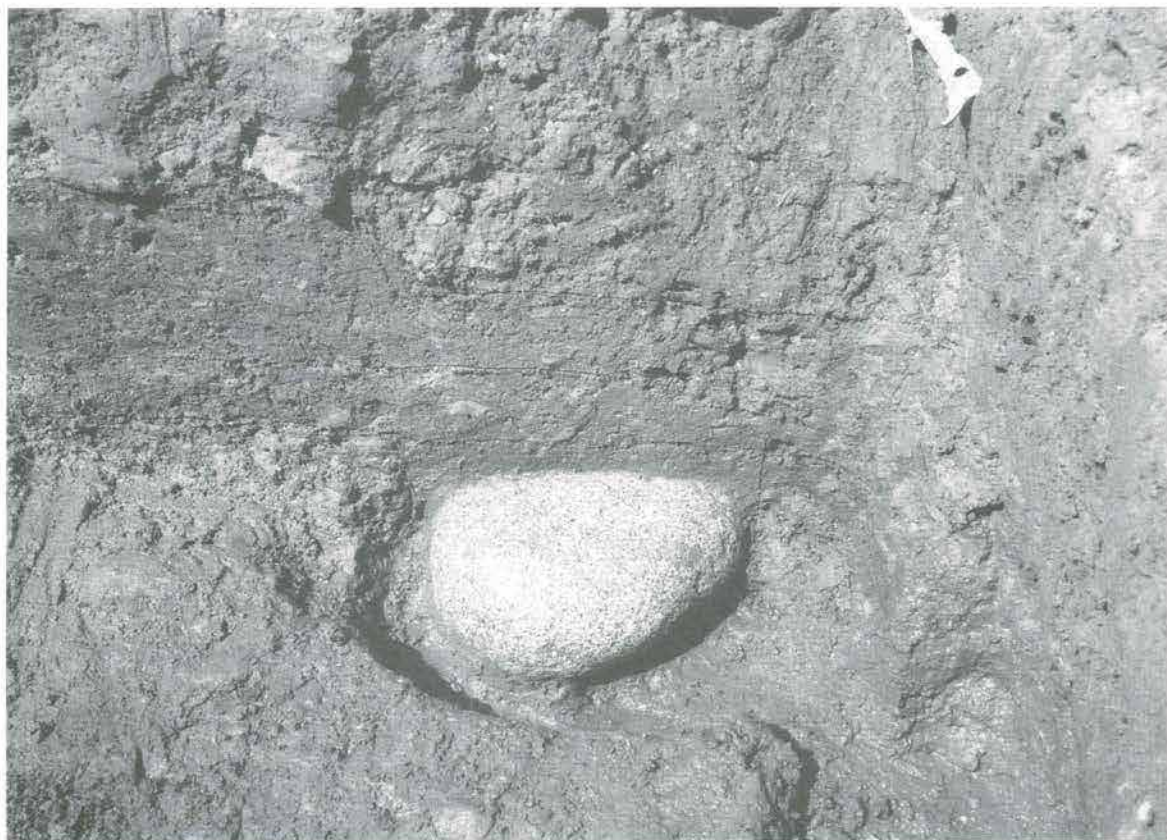
▲A. I区 5面全景 (東より)



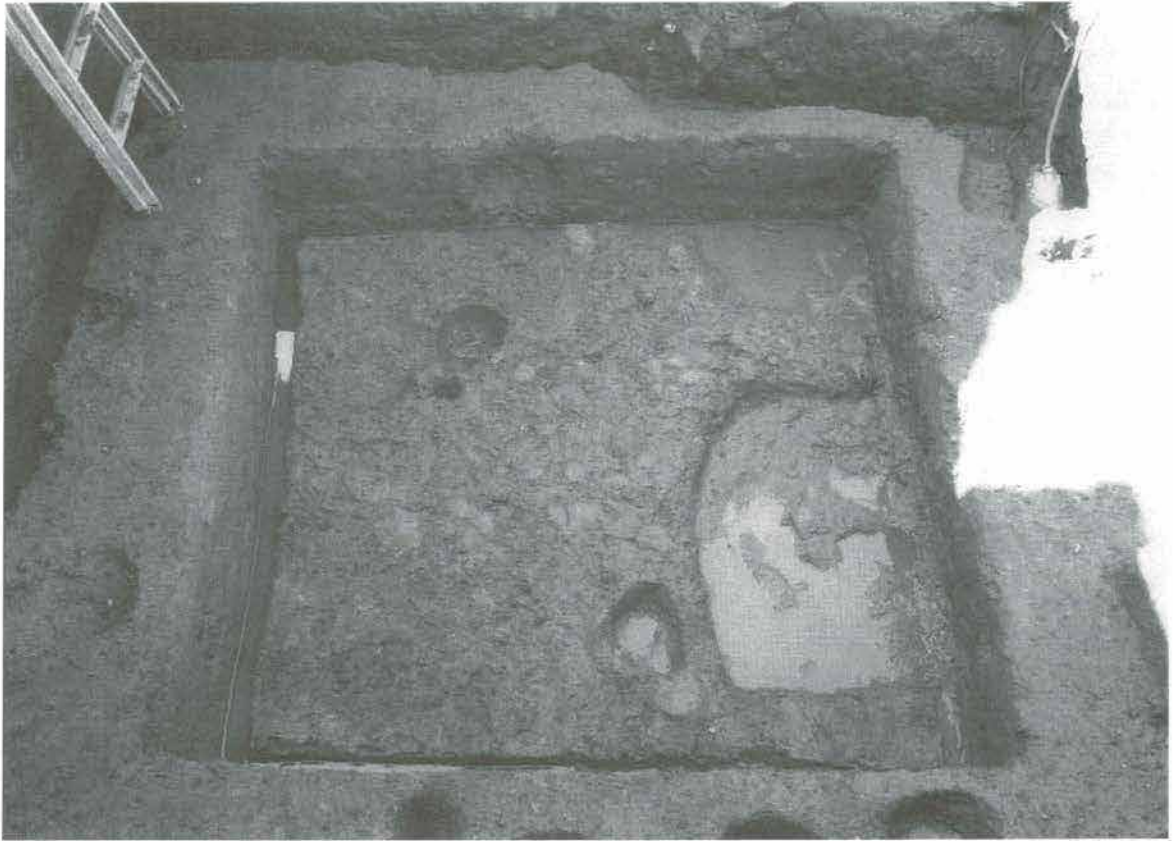
▲B. II区 5面全景 (東より)



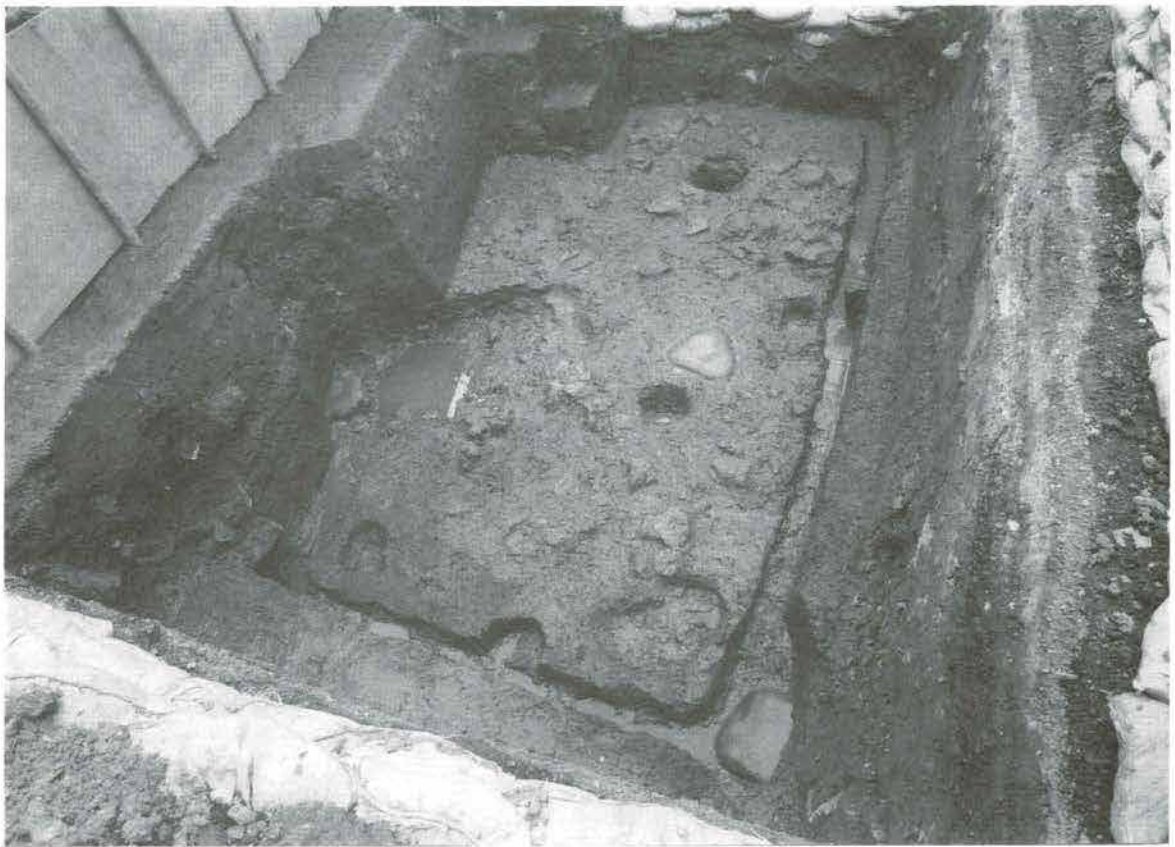
▲A. II区 5b面全景（東より）



▲B. I区 6面礎石建物1花崗岩礎石（東より）



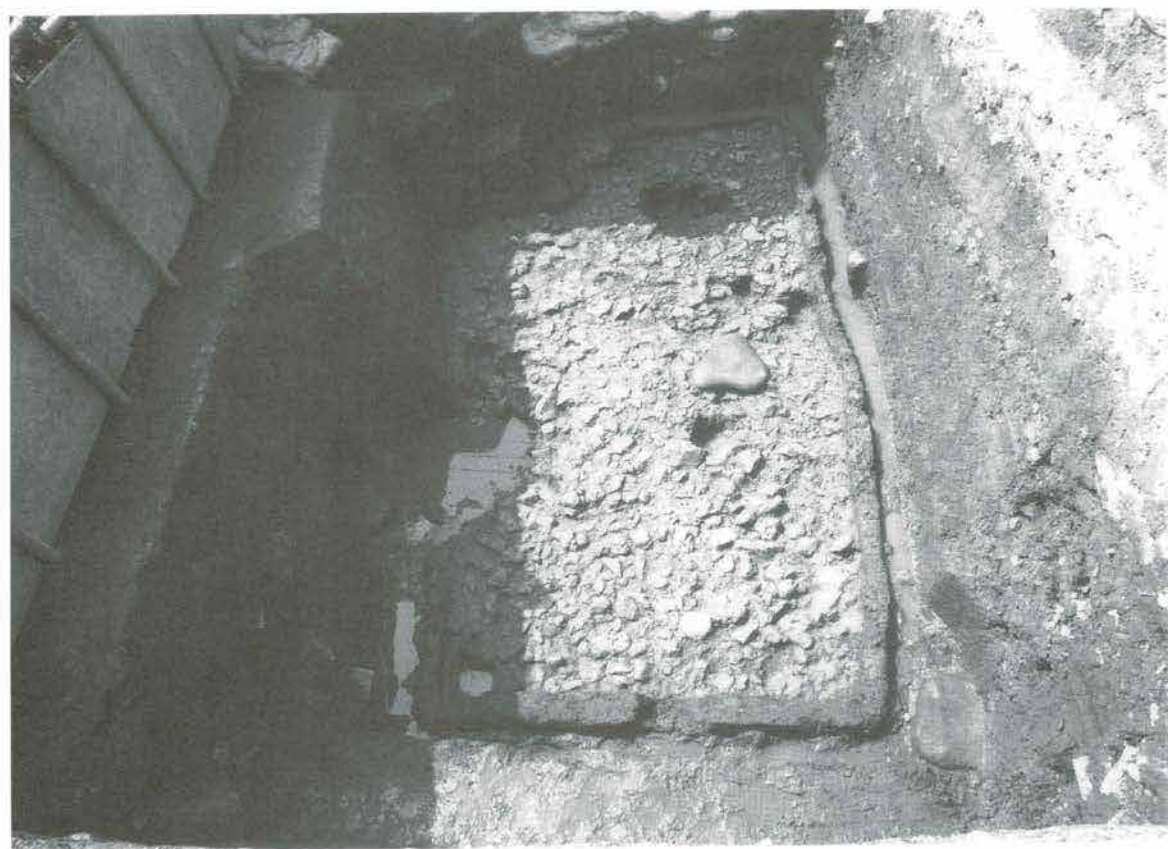
▲A. I区 6面全景(東より)



▲B. II区 6面全景(礎石建物1)(東より)



▲A. I区 7面全景（東より）



▲B. II区 7面全景（東より）



▲A. I区 南壁土層



▲B. II区 東壁土層



9-2



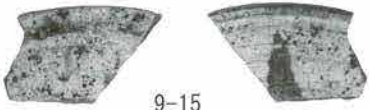
9-4



9-6



9-13



9-15



9-16



9-19



9-20



9-22



12-2



12-5



12-7



12-11



12-12



12-13



12-14



12-20



12-21



12-28



12-29



12-35



12-36



12-41



12-43



12-44



14-6



14-7



14-13



14-18



14-19



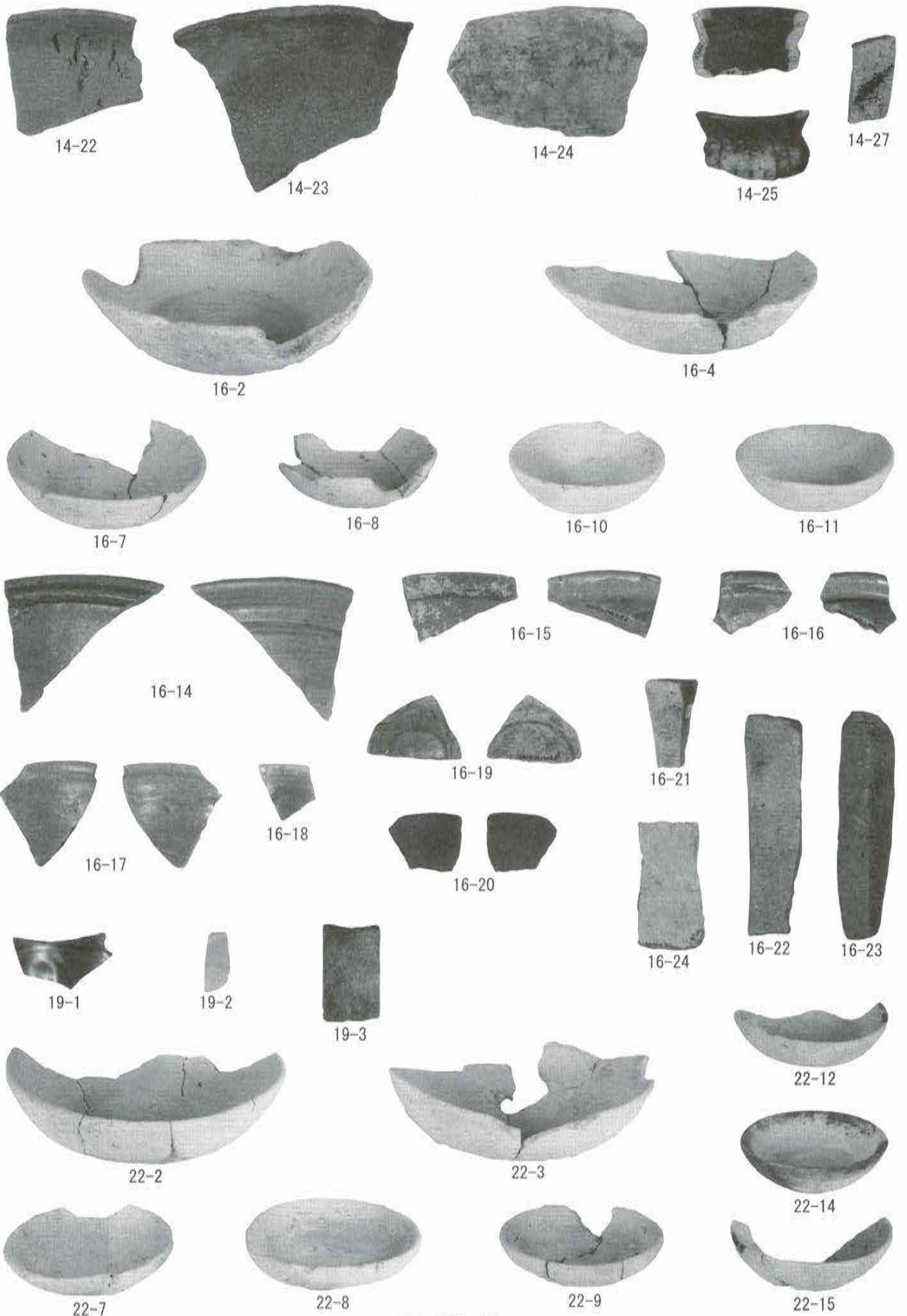
14-20



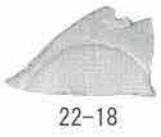
14-21

出土遺物 (1)

图版 11



出土遺物 (2)



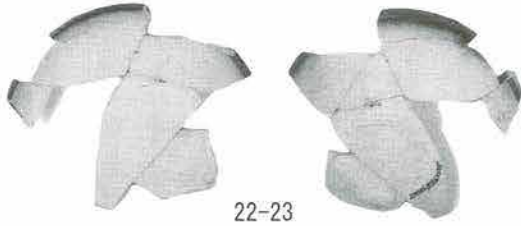
22-18



22-19



22-20



22-23



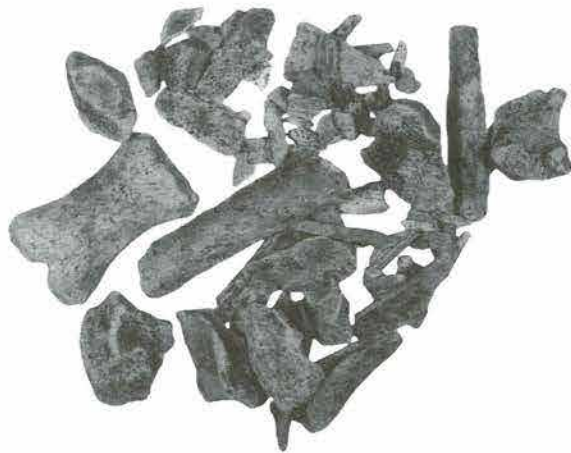
22-24



22-30



22-27



6面骨



24-1



24-3



24-7



24-10



24-12



24-13



7面骨

出土遺物 (3)

えんかくじきゅうけいだいいせき
円覚寺旧境内遺跡 (No. 434)

山ノ内字瑞鹿山393番

例 言

1. 本報は、鎌倉市山ノ内字瑞鹿山 393 番における個人住宅建設に伴う埋蔵文化財の緊急調査発掘調査報告である。
2. 発掘調査は、国庫補助事業として鎌倉市教育委員会が実施した。
調査期間は 2005 年 1 月 11 日～同年 2 月 28 日にかけて実施され、調査対象面積は 45 m²である。出土遺物に関しては鎌倉市教育委員会がこれを保管している。
3. 調査団編成は以下のとおりである。
調査の主体 鎌倉市教育委員会
調査担当 森孝子
調査員 安達澄代 安藤龍馬 下江秀信
調査協力者 浅香文保 牛島道夫 田島道夫 安達越郎（以上、社団法人鎌倉市シルバー人材センター）
4. 本書の遺構・遺物の縮尺は次の通りである。
遺構図 1/80・1/40（遺構図の水糸高は海拔高を示す。）
遺物実測図 1/3・1/6・1/1
5. 遺物実測図には次の記号が使用されている。
釉の限界線 ----- 使用痕の範囲 <====>
調整の変化点 - - - - - 加工痕の範囲 <----->
6. 本書の執筆は第 4 章の検出遺構を赤堀、他は森が行なった。
7. 本書の図版作成及び写真撮影、図版作成は次の者が分担した。
遺構図版 赤堀祐子
遺物図版 宇賀神雅子 森孝子
遺構写真 森孝子
遺物写真 赤堀祐子 森孝子
写真図版 赤堀祐子
8. 現地調査及び資料整理においては、以下の方々からご助言、ご協力を賜った。お名前を記して感謝の意を表したい。（敬称略・順不同）
馬淵和雄 原廣志 汐見一夫 松尾宣方 福田誠 浪川幹夫 吉田皓志
9. 本遺跡の略称は EK である。

本文目次

第1章 調査に至る経緯	145
第2章 遺跡概観	145
第3章 調査経過	153
1 調査の経過	153
2 調査区配置図 グリッド設定図 国土座標とグリッド	154
3 基本層序	154
第4章 発見された遺構と遺物	156
第5章 まとめ	175

挿図目次

図1 遺跡位置図	148	図12 現代井戸(2)・1面出土遺物	163
図2 本遺跡と周辺遺跡	149	図13 2面遺構配置図	164
図3 調査区配置図 グリッド設定図 国土座標表示	154	図14 土坑1～4	165
図4 基本土層抽出地点・基本土層模式図	155	図15 土坑4出土遺物	166
図5 1面遺構配置図・調査区壁面土層図	156	図16 2面出土遺物	167
図6 柱穴列1	158	図17 3面遺構配置図	168
図7 溝1	159	図18 溝2・3	169
図8 溝1出土遺物	159	図19 3面出土遺物	170
図9 井戸1	160	図20 4面出土遺物	170
図10 井戸1出土遺物	161	図21 4面下出土遺物	171
図11 表土攪乱層・現代井戸(1)出土遺物	162	図22 古代以前の遺物	171

表目次

表1 周辺遺跡の名称	150	表5 2面部材概要表	166
表2 1面ピット概要表	158	表6 3面ピット概要表	170
表3 1面板・杭材概要表	158	表7 3面部材概要表	170
表4 2面ピット概要表	166	表8 遺物観察表	172

写 真 図 版 目 次

図版 1	A. 調査地点遠景 JR 横須賀線北鎌倉駅より（北東から）	176
	B. 調査風景（南から）	176
図版 2	A. I 区 1 面ピット列 1（北西から）	177
	B. I 区 1 面ピット列 1P 2（北西から）	177
図版 3	A. I 区 1 面道（北から）	178
	B. 同（東から）	178
図版 4	A. II 区 1a 面（北西から）	179
	B. II 区 1b 面（南東から）	179
図版 5	A. 井戸 1〔北から〕	180
	B. 同・東壁土層	180
	C. 同（北から）	180
	D. 同（東から）	180
	E. 同（南から）	180
図版 6	A. I 区 2 面（北東から）	181
	B. I 区 2 面土坑 3（南東から）	181
	C. II 区 2 面（南東から）	181
	D. II 区 2 面 P 34・35 土坑 4（西から）	181
	E. II 区 2 面 P 33-35（南東から）	181
図版 7	A. I 区 3 面（北西から）	182
	B. I 区 3 面溝 3（北東から）	182
図版 8	A. II 区 3 面（南東から）	183
	B. 攪乱出土墨書板（西から）	183
図版 9	出土遺物（1）	184
図版 10	出土遺物（2）	185
図版 11	出土遺物（3）	186

第1章 調査に至る経緯

本調査地点は鎌倉市山ノ内字瑞鹿山 393 番に位置する。本地点は神奈川県遺跡台帳 NO. 434 に掲載されている円覚寺旧境内遺跡内に所在する。本遺跡地内で当地点における個人住宅建設工事計画に関する申請がなされた。鎌倉市教育委員会は本調査地点の南西側の隣地（表 1 - ⑤地点）で実施された発掘調査の成果からこの工事計画が埋蔵文化財に影響を与えると判断し、発掘調査が必要であるとの決定をした。以後、鎌倉市教育委員会と事業者との協議、事業者の文化財保護法第 57 条の 2 の届出続き、施工者と発掘調査主体者との協議をへて本調査を実施するに至った。当地点の発掘調査は 2004 年 12 月 26 日の表土掘削後、2005 年 1 月 11 日～同年 2 月 28 日まで実施した。調査面積は 45 m²である。

第2章 遺跡概観

1. 本調査地の立地

本調査地点は鎌倉市山之内字瑞鹿山 393 番に所在する。JR 北鎌倉駅南西側を通る主要地方道横浜・鎌倉線を鎌倉方面に 140m 進むと進行方向左側に路地があり、その路地を 20 m 進んだ場所が調査地点である。調査地点の北東側には JR 横須賀線が通り、本遺跡地はその線路沿いの南西側に位置する。また、線路を挟んだ対面には鎌倉五山第 2 位の「瑞鹿山円覚興聖禅寺」がある。

本遺跡地が存在する鎌倉市の地形は大きく 3 つに分かれ、滑川、柏尾川沿いの沖積地、市内の大部分を占める山地、大船北部の関谷方面に広がる関東ロームなどの洪積層によって作られている洪積台地である。山稜基盤は新世代、第 3 紀、新第 3 紀に形成されたもので、建長寺あたりが三浦層群逗子シルト岩層、それ以西からは上総層群となり北鎌倉駅西側の素掘りトンネル付近までが深沢凝灰質粗粒砂岩層、その西側からは野島凝灰質砂岩シルト岩層となる。本遺跡地の地形は市内の大部分を占めるといわれる山地であり、地域内には瑞鹿山、巨福山、金宝山等の標高 90 ～ 120m の小山が座する。その山々が複雑に入り込んでの大小の谷戸（明月谷、西瓜ヶ谷、東瓜ヶ谷等）を形成し、丘陵頂部から湧出した小河川（明月川、瓜谷川、山之内川）が地形に沿って低地に流れ込み山ノ内の中央部を貫通する小袋谷川に合流する。その流れは鎌倉市北西部を流れる柏尾川へと続く。

本調査地点が所在する山ノ内は現在の鎌倉市の中央部やや北東寄りに位置し、東側は雪ノ下、西御門、南側は扇ガ谷、西側は山崎、台、北側は大船、今泉と 7 地域と行政の境界を接する。奈良時代には相模国鎌倉郡尺度郷といわれた一角に所在する。尺度郷の初見は「正倉院文書」天平 7 年の相模国封戸租交易帳である。また、1985 年、鎌倉市「今小路西遺跡（御成小学校内）」から天平 5 年銘の木簡が出土しており鎌倉に関する最古の文書であるといわれている。山内荘は首藤資清の曾孫俊道が開発者であるといわれ、頼朝時代は八条院の本所となるが、実際は頼朝が本所、首藤氏が下司とはり実権を握っていたといわれている。範囲は現在の山ノ内、大船付近から横浜市戸塚区、栄区の一部、及び藤沢市俣野の広範囲に亘った地域であったと想定されている。

2. 歴史

源氏姓は皇族賜姓の1つである。嵯峨天皇が信以下の皇子女に源姓を与えて臣籍に下したのが初例であり、以後、皇室経済困窮の打開と皇族の藩屏構築をめざして仁明、文徳、清和、陽成、光孝、宇多、醍醐、村上、花山、三条の各天皇の皇子女に源氏姓が与えられ、夫々の始祖の天皇の名前を冠した源氏諸流が誕生する。一部大臣を輩出し権勢を誇った流派もあったが、大多数は下級官人或いは途絶する。そのなかで武士化して発展していった、その最大勢力が清和源氏で平安中、後期に勢力範囲を全国に拡大していった。その流れを汲む源頼信が甲斐守在任中の長元4(1031)年、子・頼義と共に平忠常の乱を鎮圧し、その名声により東国の源氏勢力拡大の契機をつくったといわれている。また、頼義は相模国司歴任時に東国武士の組織化を進め東国に地盤を築いてゆく。伊豆を根拠地としていた上総介平直方はこれを見込んで頼義を婿とし、頼義は直方の領地である鎌倉の地で義家を授かり以後、鎌倉が源家相伝の地となったと伝えられる。頼義が1063(康平6)年8月、由比郷に岩清水八幡宮を勧請したのもこのような背景があったからであろうと推測されている。頼義、子・義家は奥州前9年、後3年の役と2つの戦いを遂行し、「天下第1武勇の家」の名声を得て中央政界の武力権門の代表者とされるようになるが、保元、平治の乱後、一時中央舞台から姿を消す。義家から数えて4代後の源頼朝が鎌倉に武士政権である鎌倉幕府を開き、武士による政権都市を築いた。鎌倉幕府は鎌倉九代の将軍の居所で、大倉御所、宇津宮辻子御所、若宮大路御所と3箇所に移居しながら140年余り存続した。

鎌倉幕府が滅び南北朝、室町時代には関東を制御するため鎌倉府がおかれた。公方足利基氏は補佐として管領職をおいたが、その管領職の屋敷が本遺跡地内にあったといわれている。現在も本調査地点内に管領屋敷の地名が残る。また、他に扇ガ谷、犬懸ヶ谷、宅間ヶ谷の3箇所にも管領屋敷があったと推測されている。また、五山制度により大寺院は幕府から庇護され衰退の様相はない。戦国時代に突入し、鎌倉は小田原北条氏の支配になる。北条長氏は玉縄に永正9(1512)年、相模国東部一帯の押さえとして玉縄城を築城した。玉縄城は現在の山ノ内地域から北西方向3000mに位置する。北条氏支配下、氏綱は永正17(1520)、氏康は天文16(1547)年と2回の検地を実施し、禄高制による年貢、さらに棟別銭を課している。また、氏政が天正2(1574)年の検地で棟別銭の外、段銭も課したとある。北条氏は天文元～9(1532～40)年、鶴岡八幡宮再建を実施し、各地域から多数の職人を呼び寄せてこれに当たらせたといわれる。小田原衆所領役帳永禄2(1559)年によれば相当数の職人の所領が書かれており、職人が定着し、鎌倉の様相が一変した一因になると推測されている。また、戦国期には鎌倉郡に代わって小坂郡との名称となる。天正18(1580)年、小田原北条氏の旧領を与えられた徳川家康は翌年、北条氏を踏襲した検地を実施し、禄高制、棟別銭、段銭を課した。また、建長寺、円覚寺、浄智寺、東慶寺、光照寺の5寺に領地を寄付したが、寺社領も検地の対象となっていたため税を徴収されている。

江戸幕府は鶴岡八幡宮、光明寺、英勝寺には保護を与えたが、ほかの寺社は顧みられず衰退の一途を辿ってゆく。一方、江戸時代のはやりとして、古都の寺社参詣、名所遊覧が盛んになり鎌倉もその対象とはなっていたものの、その当時の鎌倉は辺鄙な農村という風情であったといわれている。戦国期に引き続き家康の時代も鎌倉は「小坂郡鎌倉の内」といわれ、鎌倉時代には四境の外であった極楽寺と山ノ内もその範囲内になっている。それ以外は東郡と呼ばれていた。家光の慶安の頃より鎌倉郡の名前が復活し、小坂郡の名前が消える。

幕末頃、外国船の接近が多くなり三浦半島沿岸の警備強化対策が行われ、この海防策のために鎌倉地域は文化7年～文政3年(1810～1820)は会津藩、文政3年～弘化4年(1820～1847)は川越藩、文政3年～嘉永6年(1847～1853)は川越藩・彦根藩、嘉永6年～安政5(1853～1858)萩藩の預地と

なり外国船到来の際の人夫、人足等に徴発された。文久3（1863）年、佐倉侯堀田鴻之丞、慶応3（1867）年、代官江川太郎左衛門、明治元年、菰山県に属し、「同年12月本年本県の所轄となる、建長寺、円覚寺、浄智寺、東慶寺、光照寺の領地は、「明治4年にいたりて上知し本県に属せり」とある。

3. 遺跡地内の歴史的環境

本遺跡地が所在する山ノ内には古跡、旧跡、寺院等が多く存在する。奥州後3年の役の際の義家の従者に藤原資道という名前がある。資道は山内首藤7代目で、その孫の俊道が義朝の家人として山之内荘に家居したといわれている。現在の長寿寺南方の白黒小路あたりに比定される。白黒小路とは首藤家の徽号とされる白一文字、黒一文字から由来されたといわれている。義朝は現在の寿福寺に邸宅を構えていたといわれており首藤家とは至近距離にある。また、現在、明月院の南西方向の地域に管領屋敷という地名が残る。『相模国鎌倉郡村誌』には「管領屋敷は明月院の馬場先東隣の畠なり」とあり、正平18年（貞治2年、1363年）上杉憲頭が足利基氏の執事（関東管領）となり、家居した場所がこの地域であると想定される。また、管領屋敷向かいの谷戸は尾藤ガ谷といわれ、北条泰時の家令の尾藤影綱の屋敷があったといわれている。また、「亀ガ谷の傍らに足利尊氏の屋敷跡があった」とある。現在、亀が谷坂の入口に長寿寺という寺があり、長寿寺は現在建長寺の塔頭となっているが開創年暦は不明である。延文の頃、足利基氏が父尊氏追福のためにこれを修営したこと、長寿寺境内の岩窟祠内には尊氏の遺髪を祀った五輪塔があること、尊氏を「長寿寺殿妙義仁山大居士」というなど、長寿寺とは非常に関係が深いことから推定して屋敷址はおそらくこの近辺であったと想定されている。

本調査地点西側を走る主要地方道横浜・鎌倉線は鎌倉街道といわれ、また、山ノ内を通るあたりを特に山ノ内道と呼ぶ。山ノ内道は山ノ内から巨福呂坂を通って鎌倉八幡宮前に至る道で、鎌倉への防御として北條氏関連のもので固められる。巨福呂坂の道は仁治元（1240）年10月、北条泰時が被官の安東藤内左衛尉を奉行として山ノ内道をつくらせたとあり、それ以前の道は亀が谷坂を越えて武蔵大路に合流している。山ノ内荘は健保1（1213）年の和田義盛の乱の行賞として義時に与えられ、以後北条氏との関係が密接となり、泰時邸、時頼邸、時宗邸があり、また、北條氏関係の大寺院も建立される。

鎌倉八幡宮より巨福呂坂を越え、山ノ内道を300m北方向に進むと北側に臨済宗建長寺派総本山巨福山建長興国禅寺がある。この地は地獄谷といわれ創建以前は心平寺が在ったといわれている。当寺は建長5（1253）年北条時頼が蘭溪道隆を開山として創建したものである。延慶元（1308）年12月太政官符宣降し勅願寺とし、至徳3（1386）年関東五山の位次が定められ五山の第1位となる。往時は塔頭49個院あったといわれるが、数回に及ぶ大火を受け、現在は外門、山門（県指定文化財）、仏殿（国指定重要文化財）、法堂（県指定文化財）、唐門（国指定重要文化財）、方丈、宝蔵、鐘楼などからなる。

建長寺より北西700mに明月谷には明月院がある。臨済宗建長寺派である。この地は北条時頼が私邸の傍らに建立した最明寺の旧址であるともいわれている。また、文永5、6（1268、69）年頃、北条時宗が蘭溪道隆を開山とし創建した福源山禅興寺があったとされる。明月院はその塔頭であるといわれる。

明月院の北西方向300mに臨済宗円覚寺派総本山瑞鹿山円覚興聖禅寺がある。弘安5（1282）年、北条時宗が仏光禅師（無学祖元）を開山として創建した。延慶元（1308）年12月太政官符宣降し勅願の道場とし、至徳3（1386）年関東五山の位次が定められ五山の第2位となる。応安7（1374）年11月23日火災を受け伽藍が全焼し、義堂周信、此山妙在、関東公方足利満氏、鎌倉府管轄下諸国の棟別銭等で永和4（1378）年仏殿が完成した。足利義満の書いた梁牌銘が伝わる。現在は総門、山門、仏殿、方丈、庫裏、書院、選仏場、鐘楼などからなる。

また、山ノ内道南側の金宝山内に臨済宗円覚寺派金峰山浄智寺がある。弘安4（1281）年、北条宗政



図1 遺跡位置図

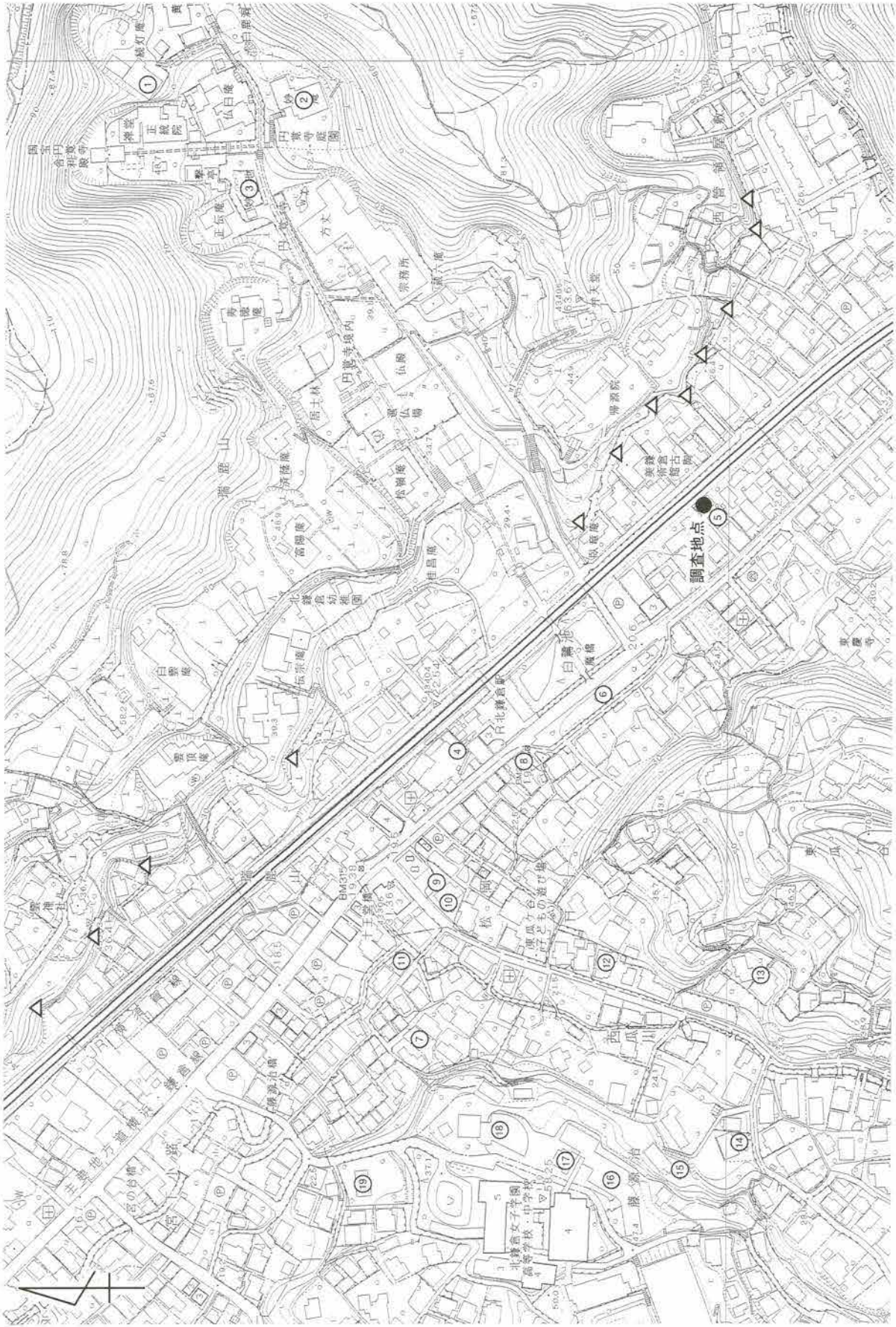


図2 本遺跡と周辺遺跡

表 1 周辺遺跡の名称

	遺跡名	調査地点	報告書
①	円覚寺統燈庵	山ノ内字端鹿山 431 番	1990『円覚寺統燈庵』統燈庵境内遺跡発掘調査団
②	円覚寺如意庵	山ノ内字端鹿山 425 番	1990『如意庵 円覚寺境内如意庵遺跡発掘調査報告書』 円覚寺如意庵遺跡発掘調査団
③	円覚寺境内（明香池）	山ノ内字端鹿山 438 番	1983『円覚寺境内（明香池）』『鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報Ⅰ 昭和 46年度～52年度』鎌倉市教育委員会
④	円覚寺旧境内遺跡 (No.434)	山ノ内字端鹿山 509 番 1	1998『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 14 平成 9 年度発掘調査報告』 鎌倉市教育委員会
⑤		山ノ内字端鹿山 393 番	本報告書に収録
⑥		山ノ内字端鹿山 393 番 3	2007『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 23 平成 18 年度発掘調査報告』 鎌倉市教育委員会
⑦	円覚寺門前馬道土塁地点		2001～2002 年調査・未報告
⑧	円覚寺門前遺跡 (No.287)	山ノ内字松岡 1344 番	2005『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 21 平成 16 年度発掘調査報告』 鎌倉市教育委員会
⑨		山ノ内字松岡 1337 番 1	2008『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 24 平成 19 年度発掘調査報告』 鎌倉市教育委員会
		山ノ内字松岡 1337 番 6	
⑩		山ノ内字松岡 1377 番 6	2007『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 23 平成 18 年度発掘調査報告』 鎌倉市教育委員会
⑪		山ノ内藤源治 951 番 2	1998『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 14 平成 9 年度発掘調査報告』 鎌倉市教育委員会
⑫		山ノ内東瓜ヶ谷 1229 番 1・5	2000『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 16 平成 11 年度発掘調査報告』 鎌倉市教育委員会
⑬	西瓜ヶ谷遺跡 (No.213)	山ノ内東瓜ヶ谷 1294 番 4・5	2006『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 22 平成 17 年度発掘調査報告』 鎌倉市教育委員会
⑭		山ノ内藤源治 930 番 5 他	2002 年調査・未報告
⑮		山ノ内藤源治 928 番 1 他	1991 年調査・未報告
⑯	台山藤源治遺跡 (No.29) (第 1 次調査)	台字藤源治 914	1985『台山藤源治遺跡』台山藤源治遺跡発掘調査団
⑰	台山藤源治遺跡 (No.29) (第 3 次調査)	山ノ内藤源治台 914 番他	1993『台山藤源治遺跡 - 第三次調査報告 -』台山遺跡発掘調査団
⑱	台山藤源治遺跡 (No.29) (第 2 次調査)	山ノ内 914～927	1996『台山藤源治遺跡 - 第 2 次調査報告 -』台山遺跡発掘調査団
⑲	台山遺跡 (No.29)	山ノ内字藤源治 860 番 1	2002『台山遺跡発掘調査報告書』有限会社（現株式）博通
△	過去に発掘調査が行なわれているやぐらが所在する地点		

没後、菩提を弔うために夫人、子師時が創建した。開山元庵普寧、請待開山大休正念、準開山南州宏海である。正安元（1299）年、北条貞時が五山に列し、至徳 3（1386）年関東五山の位次が定められ、五山の第 4 位となる。明治以降、円覚寺境外塔頭の要素を持つ。往時の塔頭等は江戸末期にはすべて廃絶し、現在境内には総門、山門、仏殿、庫裏、鐘楼などが建ち、また、鎌倉十井の「甘露ノ井」がある。

浄智寺より北方 300 m 松岡に「縁切り寺」で知られている円覚寺派東慶寺がある。円覚寺の対面に建つ。「松岡山東慶総持禅寺」と号し、創立年暦は不詳であるが、頼朝時代、その叔母が起居していたとの伝承がある。弘安 8（1283）年、北条時宗の死去後、時宗夫人が潮音院覚山尼と称して開山、子の貞時が開基と伝える。その後、後醍醐天皇の皇女が尼となり用堂尼と称して当寺に住み以来、松岡御所と称せられたという。また、江戸時代、徳川家康が豊臣秀頼遺子を当寺に置き尼僧（20 世 天秀法泰尼）として住持させ、以後、住持は黄連川家から迎えられたが 22 世玉淵法盤尼後、無住となり、塔頭の 1 つである蔭涼軒主が代行して住職している。寛永 11（1634）年、天樹院（徳川秀忠娘、豊臣秀頼室）を檀那とし仏殿が建立された。現在は横浜市三溪園に移築されている。「縁切寺」「駆込寺」といわれるが、当寺に現存する最古の縁切状は元文 3（1738）年である。

本調査地点は円覚寺旧境内遺跡といわれ、その範囲は貞治2(1363)年四月の「円覚寺文書目録」にある『円覚寺境内絵図』(一帖 寺山并門前新御寄進絵図)に当たると言われている。この絵図は円覚寺境内を朱線で表し、絵図の四方には足利直義の執事であった上杉重憲の花押が描かれたもので、元亨3(1323)年～建武2(1335)年に描かれたものであるといわれている。絵図には総門の南前面に白鷺池があり、その東側に新寄進と書かれた2区域、絵図左下に「薩摩掃部大夫入道跡」「飯嶋孫次郎入道跡」と書かれている。絵図に調査地点を合わせてみると本調査地は寄進地と書かれたその2区域の東方の一角に所在している。

また、山之内円覚寺門前町図(黄梅院蔵)がある。作成年は不詳であるが、貞享2(1685)年刊『鎌倉志』に「此比まで十王堂有が、今亡たり」と書かれている。また、絵図中の浄智寺境内に吉川惟足の屋敷が注記されているが、彼が浄智寺に隠居したのは慶安4(1651)年である。以上からこの絵図の作成年代は1651年～1685年の間と想定され、江戸時代前期の様相を理解できる良好な資料となっている。絵図は上を南として中央に山ノ内道を描き、「下馬之内五十二間」を真ん中に、その下に馬道を弓状に描き、道の両側に人名が隙間なく記載されている。そこに黒線でくっきりと円覚寺の寺域の範囲を示しており、この絵図から想定すると本調査地点は境内に位置する。その地点には久兵衛、与三右衛門、拾右衛門、長三郎等の名前がみられ、当調査地点の場所には「長三郎」と明記されている。境内前面の土地を細分して使用していた様相が伺え、借地として貸していたのではないだろうか。また、絵図で東慶寺対面、「与三右衛門」と記載された場所があるが、その場所に現在も住んでいる子孫の方から江戸時代は飛脚を生業としていたと伺った。明治22(1889)年2月国鉄横須賀線が開通したが、その際白鷺池の北西側に線路を通し境内を分断した。本遺跡地は現在この線路の南東側となっている。昭和2年に「北鎌倉駅」が建てられ、以後、この近辺の宅地化が始まった。

3. 本調査地点周辺の遺跡地

本遺跡地周辺では過去に発掘調査を実施した遺跡が点在する。周辺の各遺跡の位置と所在地は図2、及び表1の通りである。ここでは円覚寺旧境内遺跡内の遺跡地について概略を述べる。

①、②地点ともに円覚寺の塔頭である。①地点では調査地点が円覚寺という大規模寺院の塔頭という利点から中世から現代まで各時期の遺構、遺物が確認され連綿と宗教活動を引き継いできた様相が確認できた。また、鎌倉では検出例の少ない「地下式坑」が検出された。貯蔵穴の用途等を想定しているが実際は不明な点が多いといったところが実態である。②地点では19世紀中頃と想定される堂址が検出された。③地点の調査は円覚寺境内妙香池の改修工事と平行して行った確認調査である。過去に5～6回の改修工事が実施され、少なくとも2回は江戸期のものであることが確認された。また、池の形状が改修して方形になったことは確認出来たが、造成時の様相は解明されないままである。④地点では円覚寺の総門外の建物と創建前後の遺構群が検出された。創建前は水田、その後は円覚寺に関わる雑舎が建てられていたのではないかと、遺構群の様相、または文献、絵図等より推察している。⑤地点では13世紀後葉～14世紀前半に想定される遺構群が確認され、調査地点が耕作地から門前の町屋域に変化して行く様相であると推定している。

また、周辺域のやぐらの調査では帰源院下やぐら群、円覚寺境内西やぐら群、西管領屋敷やぐら群、西管領屋敷南やぐら群がある。

参考文献

鎌倉市史編纂委員会 1959年「鎌倉市史総説編」 鎌倉市 鎌倉市史編纂委員会 1959年「鎌倉市史考

古編」鎌倉市

鎌倉市教育委員会 1998年「鎌倉の自然」鎌倉市教育委員会

関幸彦 2006年 戦争の日本史5「東北の戦争と奥州合戦」吉川弘文館

下中邦彦 1984年「神奈川県の名」平凡社

神奈川県図書館協会郷土資料編集委員会 1999年「神奈川県皇国地誌相模国鎌倉郡村誌」神奈川県図書館協会

三浦勝男 1992年鎌倉国宝館図録第15集「鎌倉の古絵図1」鎌倉市教育委員会 鎌倉国宝館

日本史広辞典編集委員会 1997年「日本史広辞典」山川出版社

今小路西遺跡発掘調査団「今小路西遺跡」1990 鎌倉市教育委員会

第3章 調査経過

1. 調査の経過

鎌倉市教育委員会は2002年12月3日に表1-⑥地点の確認調査を実施した。その結果、現地表下30cmまでが近現代層、その直下にしまりのない粘性の弱い黒色粘質土層を検出した。さらに、その下30cm (GL-60cm) に中世遺構及び遺物が確認され中世第1面と判断し、中世検出面より50cm下 (GL-120cm) まで掘り下げ計2時期の中世面を確認した。確認調査の結果、3時期にわたる中世期の生活面が確認されたため鎌倉市教育委員会は埋蔵文化財への影響が避けられないことを確認し本調査が必要であると決定した。この試掘調査の結果をもとに本調査地点の調査を実施した。

調査は廃土を場内処理することが決められていたため、廃土置場を確保するため調査区を2分して半分ずつ調査を実施することに決め、東側をI区、西側をII区としI区から調査を開始した。確認調査の結果に基づき近現代層の30cmは重機により掘削し、以下を人力による作業とした。その結果、I区、及びII区の大半にまたがる大きな現代井戸が検出され、中世の遺構面は大きく攪乱されており遺存率は非常に低かった。中世の遺構面は確認調査より1面多い4面検出され、検出遺構は道路1、井戸1基、溝3条、土坑4基、柱穴群で、出土遺物は整理箱5箱である。

以下、作業経過は下記のとおりである。

2004年 12月26日 重機による表土掘削。

2005年 1月11日 I区1面の調査開始。鎌倉市3級基準点の移動。

1月12日 現代井戸、ピット群掘り上げ。道路状遺構の検出。

1月13日 1面全景撮影、及び平面図作成。

1月14日 2面への掘り下げ開始。

1月18日 土坑1、2、3、4、ピット群掘り上げ。

1月19日 2面の全景撮影、及び平面図作成。

1月20日 3面への掘り下げ開始。溝2、3、井戸1、ピット群の検出。

1月21日 3面全景撮影、及び平面図作成。

1月24日 4面への掘り下げ、ピット群の検出、掘り上げ。全景撮影、平面図作成のための測量。

1月25日 I区終了。I区埋め戻し。

1月26日 鎌倉市4級基準点の移動。

1月29日 II区表土掘削。

1月31日 II区1面調査開始。

2月1日 現代井戸掘り上げ。遺構の検出、掘り上げ。

2月3日 1面全景撮影、平面図作成。

2月4日 2面調査開始。

2月9日 井戸1、ピット群検出。

2月14日 2面全景撮影、平面図作成。

2月15日 3面調査開始。

2月17日 遺構掘り上げ。全景撮影、平面図作成。

- 2月21日 4面調査開始。全景撮影、平面図作成。
- 2月22日 地山確認調査。写真、測量による記録。
- 2月23日 西壁、南壁の土層堆積状況の記録（写真撮影、図面）
- 2月25日 調査終了。器材撤収。

2. グリッド設定図 国土座標表示 (図3)

測量のためのグリッドは調査区に平行に任意の2点をきめ、それを基準として、南北方向をX軸とし、北から南にx0、x1、x2、・・・と増え、東西方向をY軸とし、東から西にy0、y1、y2、・・・と増え北東角をおx0、y0とし測量の基準点とした。国土座標との関係はx4.161、y9.448 グリッドがx-73982.667、y-25780.000に、x6.238、y7.002グリッドがx-73985.870、y-25780.000と一致する位置にあり、測量グリッドのY軸は真北より東に49°39'51"東に振れている。

3. 基本層序 (図4)

調査区西角の2箇所（北西壁A-A'、南西壁B-B'）の堆積土層を基本土層として、掲載した。中世第1面はGL-70cm（海拔22.1m）、中世第2面はGL-90~100cm（海拔21.8~21.9m）、中世第3面はGL-100~120cm（海拔21.6~21.8m）、中世第4面はGL-110~130cm（海拔21.5~21.7m）、地山はGL-140cm（海拔21.4mで確認された）。

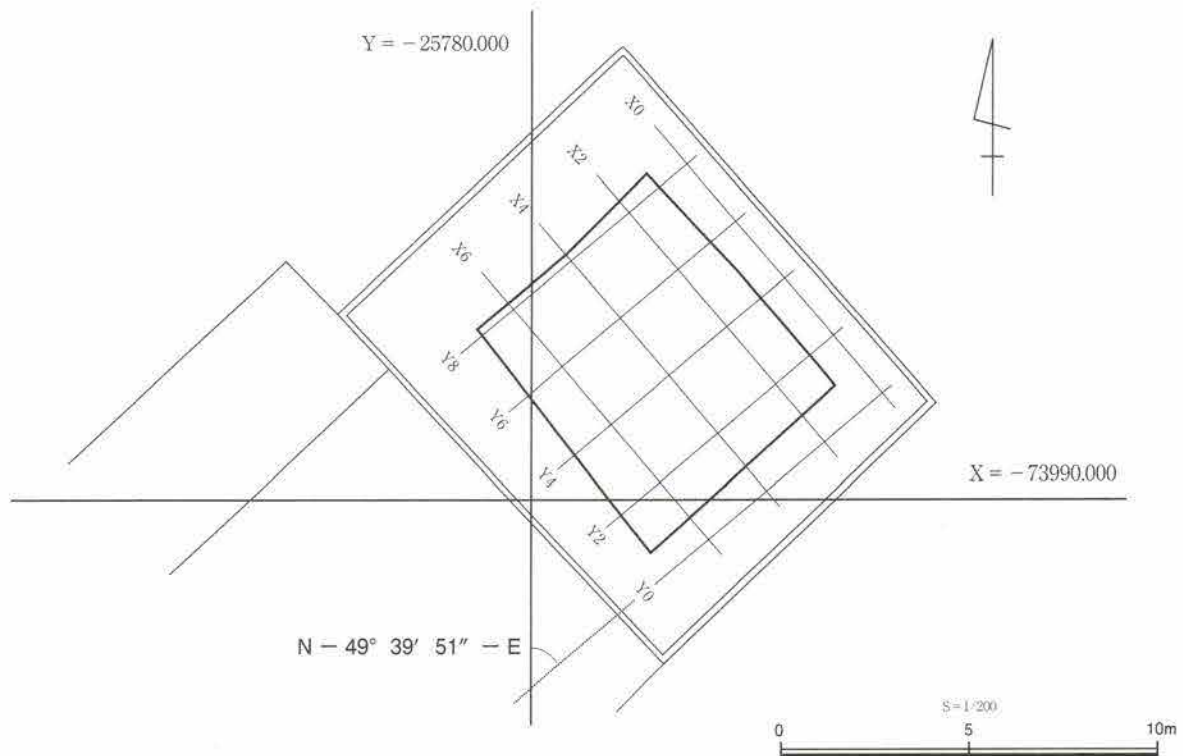
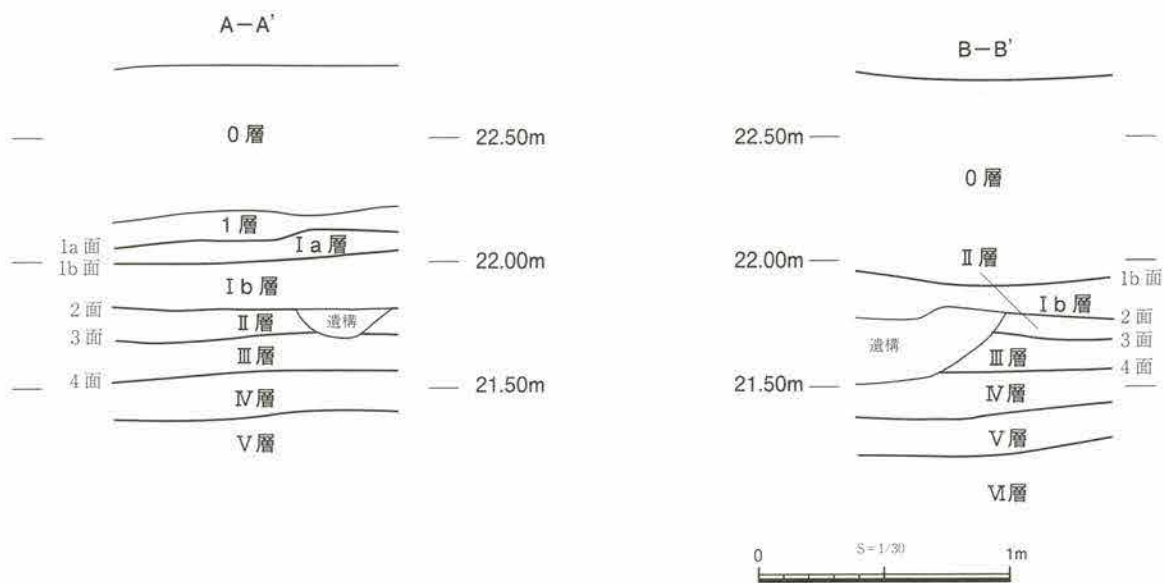
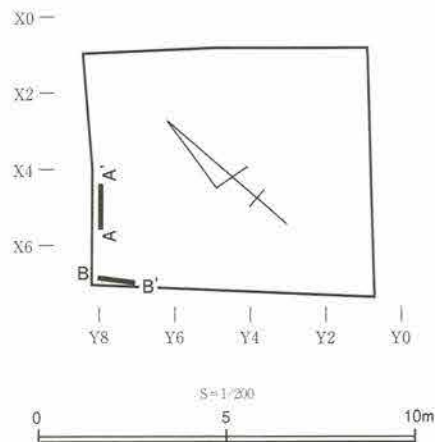


図3 グリッド設定図

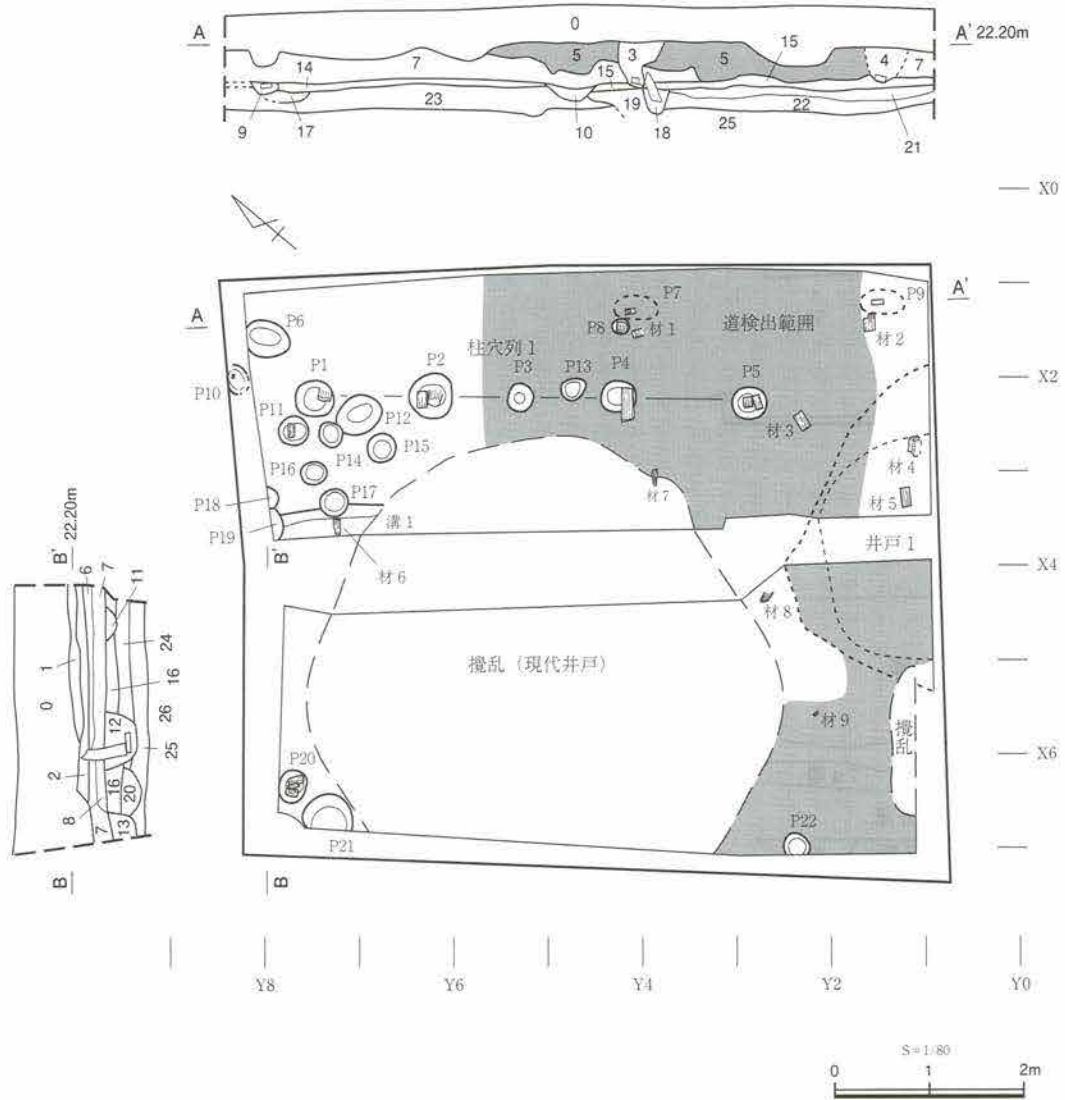


基本土層

- 0 層 表土層
- 1 層 遺物包含層
- I a 層 1a 面構成土 灰褐色砂質土を主体に土丹粒子を混える地形層。調査区南西端でのみ検出。北側・南東側は現代の削平により失われている。
- I b 層 1b 面構成土 粘土を主体に土丹塊を混える地形層。
- II 層 2 面構成土 黒褐色弱粘質土を主体に多量の鎌倉石碎片を混える地形層。
- III 層 3 面構成土 黒褐色粘質土を主体とする地形層。上面に多量の鎌倉石碎片を混える部分が見受けられる。
- IV 層 4 面構成土 黒褐色粘質土を主体に黄褐色粘土塊を混える地形層。
- V 層 自然堆積層 黒色土を主体とする。
- VI 層 自然堆積層 茶黄色粘質土を主体に腐食したヨシを多く含む。

図4 基本土層抽出地点・基本土層模式図

第4章 発見された遺構と遺物



土層説明

0層	表土層	14層	2面構成土	炭化物・木片を多く含む黒色弱粘質土。しまりなし。
1層	遺物包含層	15層	2面構成土	多量の鎌倉石砕片を築き固めた黒色弱粘質土。しまり弱い。
2層	1a面構成土	16層	2面構成土	混入物がなく黒褐色粘質土。
3層	P7覆土	17層	溝2覆土	
	土丹粒子を混じえる灰褐色砂質土。しまりややあり。	18層	P38覆土	
	10cm大の土丹塊を混じえる茶褐色粘質土。	19層	溝3覆土	
	5層に比して粘質土が多い。しまり弱い。	20層	P48覆土	鎌倉石砕片が混入する。
4層	P9覆土	21層	3面構成土	鎌倉石砕片が多く混入する黒褐色粘質土。しまりややあり。
5層	道構成土	22層	3面構成土	混入物をほとんど含まない黒褐色粘質土。しまりなし。
6層	1b面構成土	23層	3面構成土	混入物をほとんど含まない黒褐色粘質土。しまりなし。
7層	1b面構成土	24層	3面構成土	
8層	1b面構成土	25層	4面構成土	黄褐色粘土塊が混入する黒褐色粘質土。堅くしまる。
9層	P23覆土	26層	5面構成土	黒色土。中世地山。
10層	P24覆土			
11層	P32覆土			
12層	P33覆土			
13層	土坑4覆土			
	鎌倉石砕片が混入する。			
	黒褐色粘土。しまりなし。			
	炭化物・土丹が混入する茶灰色砂質土。しまりなし。			

図5 1面遺構配置図・調査区壁面土層図

中世第1面(図5)

表土を取り除いた現地地表下40～70cmで2枚の生活面が検出されている。土丹粒子を混じえる灰褐色砂質土により構成される上位の地形を1a面、土丹塊を混じえる粘質土により構成される下位の地形を1b面とした。1a面は後世の削平により大部分が失われ調査区西壁寄りの一部にのみ残存する(図5 B-B' 2層)。1a面の標高は海拔22.1m付近である。1b面は調査区西側では1a面下10cmの海拔22.0m付近にあり(図5 B-B' 6・7層)、調査区北東側では高く、海拔22.3m付近で検出されている(図5 A-A' 7層)。1面では道と思われる地形、及び、井戸1基、溝1条、柱穴列1基を含むピット22口、何らの遺構に伴うと思われる部材が9点検出されている。この内、道と思われる地形(図5 A-A' 5層)は1b面に相当し、その下からの掘り込みとなる井戸1は1b面より古い時期と考えられる。1b面で検出されたピットのいくつかは1a面から掘り込まれたものと思われるが、1aの生活面が削平されているため明確ではない。その他、溝・ピット・部材などa・b何れの面に所属するかを判断できない遺構が含まれるため、1面検出遺構としてまとめて掲載した。

柱穴列1(図6 表2)

調査I区のX2, Y2～7グリッドで検出された。5口の柱穴の配置からセット関係の成り立つ可能性が高いものと判断し、柱穴列とした。P3～P5は道の地形(1b面相当)を壊して設置されており、1a面から掘り込まれていた可能性が高いものと思われる。検出面の海拔は22.20～22.36mで、軸方向はN-39°-Wである。P3を除く4口のピットから部材が検出されており、P2は柱材を伴う深い掘り込みと、板材を伴う浅い掘り込みの2口が重なって確認されている。心々間の距離は、P1～P2(柱材)～P5が、116・90・115・125cm、P1～P2(板材)～P5の場合が105・103・115・125cmである。各柱穴の詳細は1面ピット柱穴概要(表3)を参照されたい。

道(図5)

調査I区、X0～7, Y0～5グリッドで検出された。1b面を構成する土丹地形のうち、10cm大の土丹を混じえる茶褐色粘質土を築き固めた範囲である。現地調査の所見により道として扱った。I区西側端部の状況から柱穴列1に直交する方向性を持つ地形を想定し得るが、I区南西からII区にかけての遺存状態が悪く遺構の性格を明確に出来ない。平面的に確認し得た範囲をトーンで示した。地形上面の海拔は22.17～22.35mである。井戸1より新しく、P3～P5・P7・P8より古い。部材3・7は本址の上面に接する状態で検出されており、本址より新しい別の施設に伴うものと思われる。

ピット・部材(表2・3)

1面からは柱穴列1(P1～P5)の他に17口のピットと、9ヶ所で部材が検出されており、何らの施設を構成するものと思われるが、明確なセット関係を見出せないため個別に詳細を示した。1面検出ピット概要(第2表)・1面検出部材概要(第3表)を参照されたい

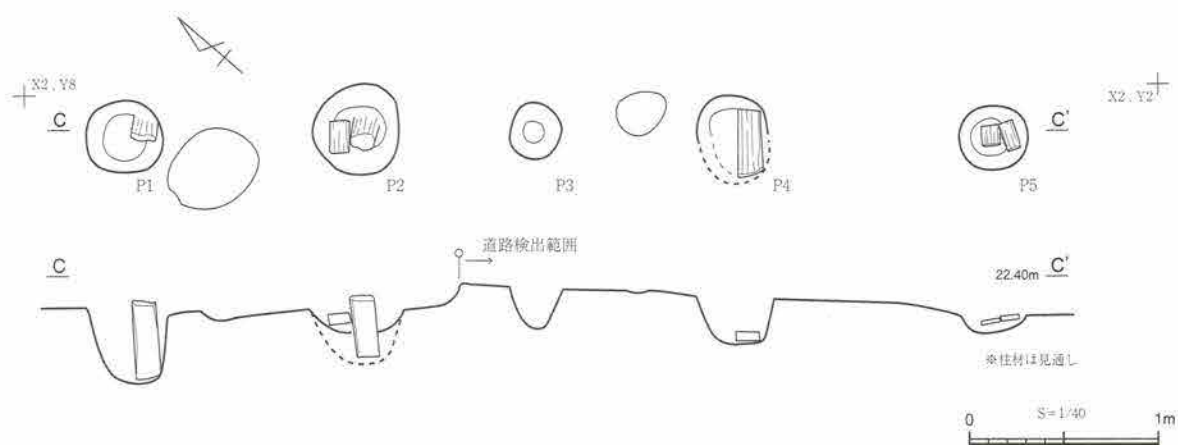


図6 柱穴列1

表2 1面ピット概要表

NO	規模 (cm)	深さ (cm)	底面標高 (m)	備考 ※部材の寸法は〔縦×横×厚さ×長さ〕、単位はcmとする。
P1	41×37	40	(21.83)	柱穴列1。柱〔15×9×40〕を伴う。
P2	46×44	13 (29)	22.10 (21.94)	柱穴列1。礎板〔19×8×5.5〕を伴う浅い掘り込みと 柱〔16×12×31〕を伴う深い掘り込みを検出。
P3	29×26	21	22.13	柱穴列1
P4	(47)×37	27	22.04	柱穴列1。礎板〔37×13×?〕を伴う。
P5	38×33	10	22.10	柱穴列1。礎板2枚〔10×10×2.5〕・〔17×8×2.5〕を伴う。
P6	49～×36	14	22.08	1部調査区外。
P7	(45)×?	49	21.85	調査区壁面土層で確認。礎板〔(10×?×3)〕・柱〔(16×?×13)〕を伴う。
P8	16×16	31	22.03	柱〔10×8×31〕を伴う。
P9	(42)×?	36	21.90	調査区壁面土層で確認。礎板〔(15×?×6)〕を伴う。
P10	30～×23～	7	21.95	1部調査区外。細い杭状の木片〔(3×?×12～)〕を伴う。
P11	32×30	14	22.15	礎板〔16×7×4〕を伴う。
P12	47～×39	10	22.09	P14と重複。切り合い不明。
P13	24×22	8	22.21	
P14	28×24	20	22.30	P12と重複。切り合い不明。
P15	30×29	10	22.12	
P16	26×23	11	22.11	
P17	29×28	16	22.03	溝1と重複。切り合い不明。
P18	18×9～	—	—	一部のみ検出。詳細不明。P19と重複。切り合い不明
P19	34×10～	—	—	一部のみ検出。詳細不明。溝1、P18と重複。切り合い不明
P20	36×28～	21	21.78	礎板2枚〔(17×8×?)〕・〔(13×4×?)〕、柱1本〔(8×?×19～)〕を伴う。
P21	58×38～	10	21.88	1部調査区外。
P22	22～×25	9	21.94	1部調査区外。

表3 1面板・杭材概要表

※寸法は、縦×横×厚さ×長さ。
※底面標高は部材の下端の高さ。また、確認しえた底面標高より更に深く埋まっている場合はxxx以下と記した。

NO	寸法 (cm)	底面標高 (m)	備考
材1	9×9×66	21.45	柱状。面に刺さった状態で検出。
材2	(18×13×?)	(22.06)	板状
材3	20×12×9	(22.10)	板状。
材4	(19×9～×17～)	22.12以下	柱状。井戸1より新。
材5	(20×11×?)	(22.02)	板状。井戸1より新。
材6	16×7×3	22.12	板状。溝1より新。
材7	(4×4×17～)	21.89以下	杭状。面に刺さった状態で検出。
材8	(14～×8×2)	21.91以下	板状。面に斜めに刺さった状態で検出。
材9	(2×2×18～)	22.05以下	杭状。面に刺さった状態で検出。

溝1(図7)

調査I区のX3, Y6~7グリッドで検出された。南東は現代井戸に攪乱され、北西はP19と重複し、両端を失っている。南西肩は未調査部分のため検出されていない。P17・P19との新旧関係は不明である。また材6は溝1上面より検出された板状の部材であり本址よりも新しい。検出面の海拔は22.2m付近で、軸方向はN-46°-Wである。断面形は逆台形に近く、下端標高は海拔22.10m前後で一定している。検出された規模は長さが108cm、最大幅端が33cm、下端が19cmまでを確認し、深さは確認面より4~12cmを測る。

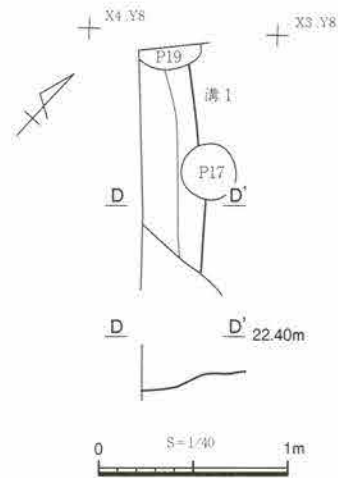


図7 溝1

溝1出土遺物(図8)

1は熙寧元宝である。



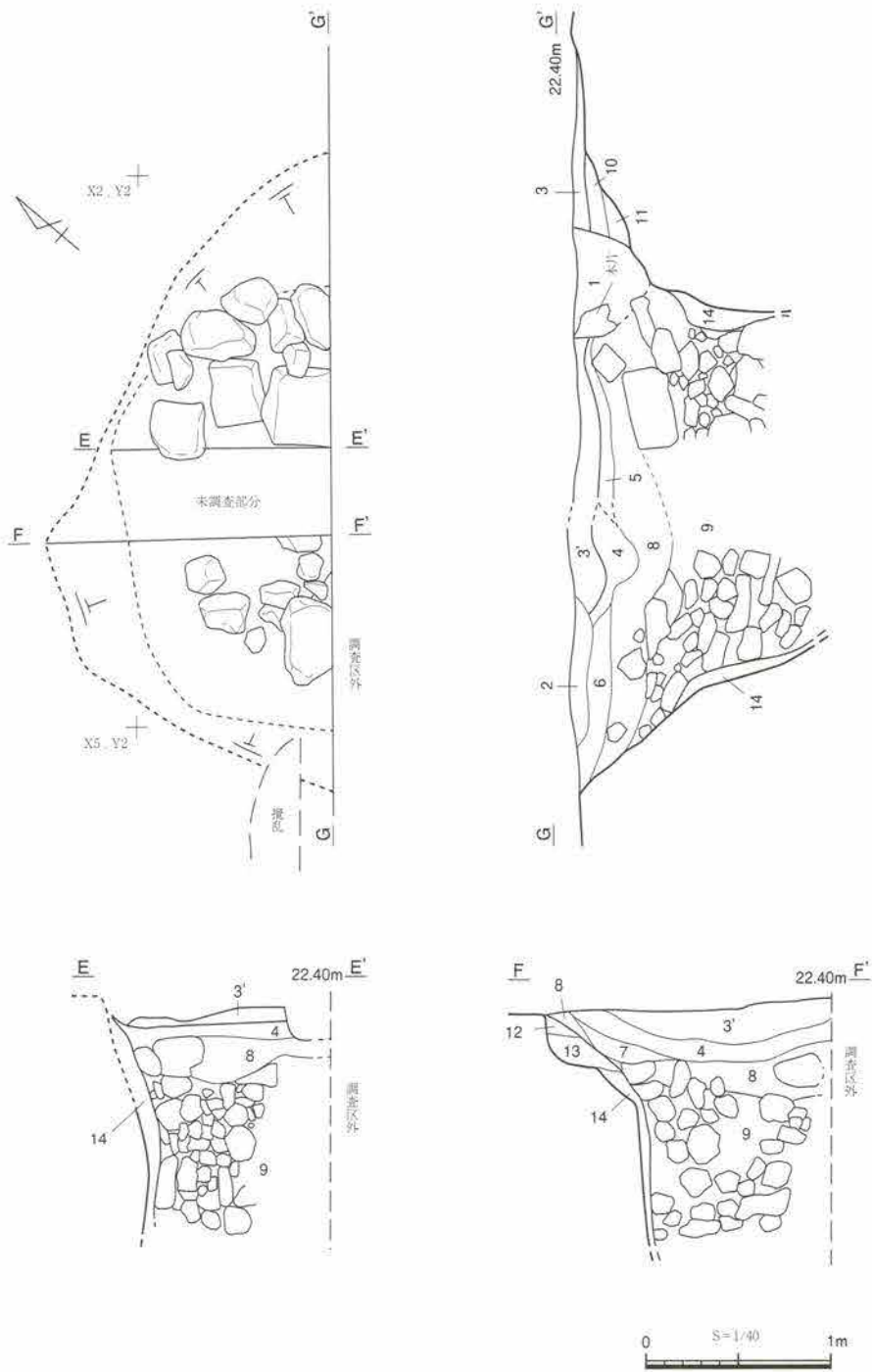
図8 溝1出土遺物

井戸1(図9)

未調査部分を挟んで調査I区・II区のX2~5, Y0~2グリッドで検出された。掘り込み面では平面プランを確認し得なかったため、土層から推測されるラインを点線で示した。南東側は調査区外に延びる。南西側の一部を攪乱により失う。本址覆土より上で検出された道の地形、本址の覆土を掘り込んで設置されたと考えられる部材4・5より本址が古い。掘り込み面の海拔は22.3m前後、検出された規模は344×163cmで、湧水のため完掘には至っていないが深さは134cmまでを確認した。堆積土層は1b面構成土である3層より下層が本址覆土となる。10~14層は掘り方埋め土と思われる、痕跡は確認されていないものの井戸枠等の施設が埋め込まれていたものと推測される。8・9層からは大小の土丹・鎌倉石塊のほか大型の鎌倉石切石なども多量に出土しており、井戸を廃棄した時期に、近隣で大がかりな施設の破却が行われている可能性もある。

井戸1出土遺物(図10)

1、2はロクロ成形のかわらけの大皿である。ともに口径、底径比の小さいものであるが、1の胎土は粗胎、2は精緻である。3は竜泉窯青磁鎚蓮弁文碗である。遺存状態が非常に悪く蓮弁文が微かに確認される。4~6は瓦で永福寺II期に比定される。4は丸瓦の玉縁部で、復元直径は18.4cmを測る大型品である。粗胎で、鎌倉ではめずらしいタイプで在地産の可能性もある。器表は被災した様相である。5、6は平瓦である。5は4と同タイプである。6は器表全体に砂粒が付着している。7は砥石である。2面の砥面が確認される。8、9は木製品、8は板草履芯の先端部の小片、9は箸で、全長19.2cmである。10は内耳鉄鍋の口縁部である。器壁は3~9mmと薄く、口縁部は外反して直線的に開く。13世紀後半に比定される。当址は土層より1面から掘り込まれたことは確実であるが出土遺物は1面の年代を大きく遡る。出土遺物は混入品と考えたい。



井戸1 土層説明

- | | | | |
|--|---|--|--|
| <p>1層 茶褐色粘質土</p> <p>2層 黒灰色粘質土</p> <p>3層 茶褐色粘質土</p> <p>4層 茶褐色粘質土</p> <p>5層 茶褐色粘質土</p> <p>6層 黒灰色粘質土</p> <p>7層 灰黄色シルト</p> <p>8層 茶灰色粘土</p> <p>9層 茶灰色粘土</p> | <p>炭化物が混入し色調黒ずむ。しまりなし。本址より新しい別遺構の覆土である可能性がある。</p> <p>混入物を含まない。しまりなし。</p> <p>土丹・鎌倉石碎片が混入する。しまりあり。1b面構成土。</p> <p>3'層は3層より土丹の混入が少なく、鎌倉石の割合が多い。3層よりしまりに欠ける。</p> <p>炭化物が混入し色調黒ずむ。土丹が少量混入する。</p> <p>炭化物が多く混入する。しまりなし。</p> <p>砂粒・かわらけ細片が若干混入する。しまりなし。</p> <p>粉砕土丹を主体とする。</p> <p>炭化物・粗砂が混入する。大型の土丹・鎌倉石を多く含む。しまりなし。</p> <p>大小の土丹・鎌倉石を密に含む。しまりなし。</p> | <p>10層 茶褐色粘質土</p> <p>11層 茶褐色粘質土</p> <p>12層</p> <p>13層</p> <p>14層</p> | <p>色調黒ずむ。土丹を少量含む。しまりなし。井戸掘り方埋め土。</p> <p>10層より土丹の塊が大きい。井戸掘り方埋め土。</p> <p>井戸掘り方埋め土。</p> <p>井戸掘り方埋め土。</p> <p>井戸掘り方埋め土。</p> |
|--|---|--|--|

図9 井戸1

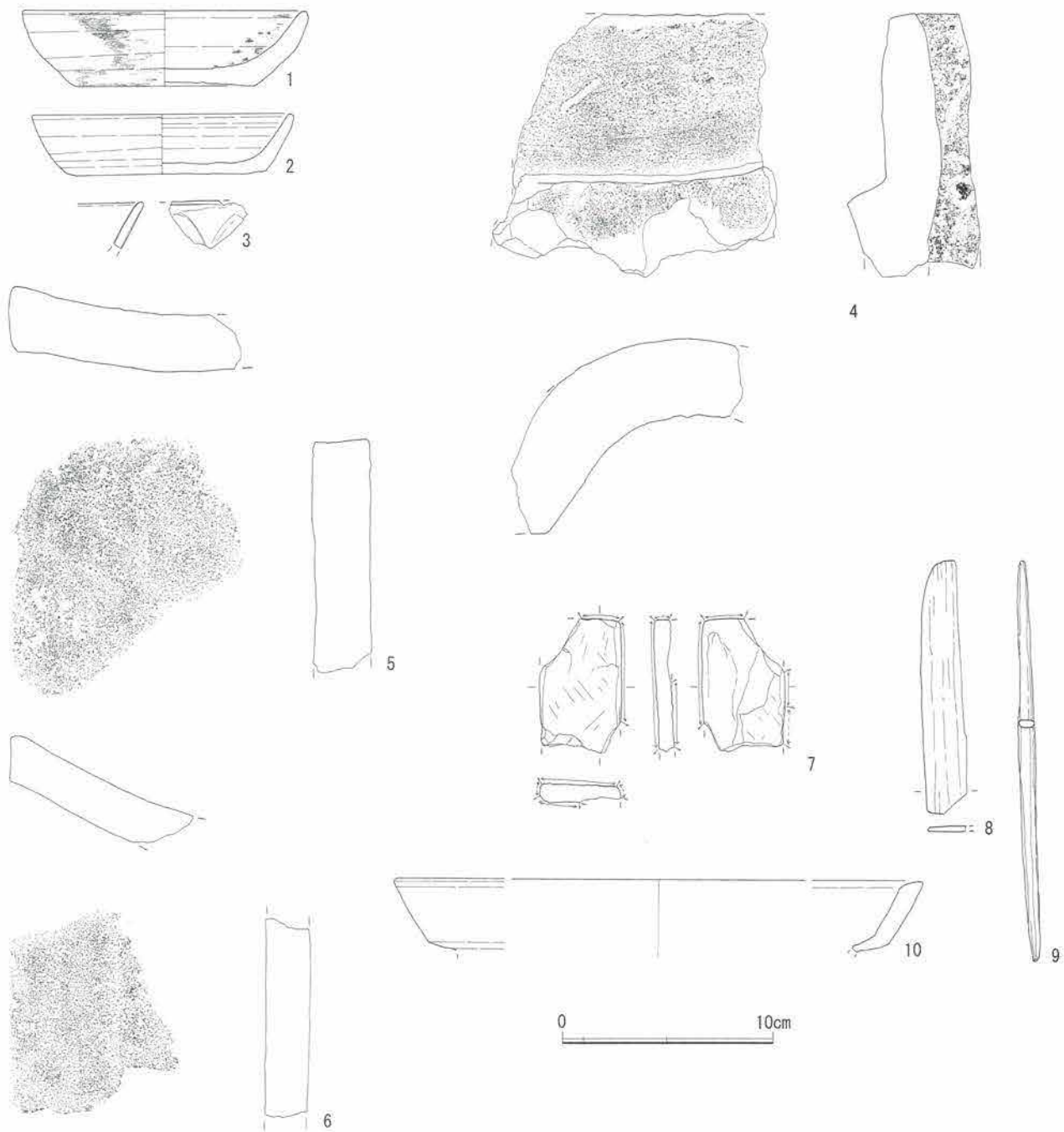


図10 井戸1出土遺物

表土攪乱層出土遺物 (図11-1~5)

図11-1、2はロクロ成形の1は中皿、2は小皿である。同質であり中、小の揃いの皿である。3は竜泉窯青磁鎚連弁文碗の口縁部の小片である。口唇端部は外反し連弁幅は細い。4は手づくね成形の白かわらけの小片である。5は近世の墨書板で3行に分けて書かれている。

〔鎌倉郷 九口 〇 □ □四尺〕
 (十) (口) (十)

現代井戸出土遺物 (図11-6~24、図12-1~6)

6、7はロクロ成形のかわらけの小皿である。ともに薄手で体部に丸みを帯びる。8、9は青磁である。9は蓮弁文が微かに認められる。10~17は常滑窯の製品である。10は片口鉢I類である。内外面に炭化物が厚く付着しており被災した様相を留める。13世紀後半期に比定される。11~14は甕である。11

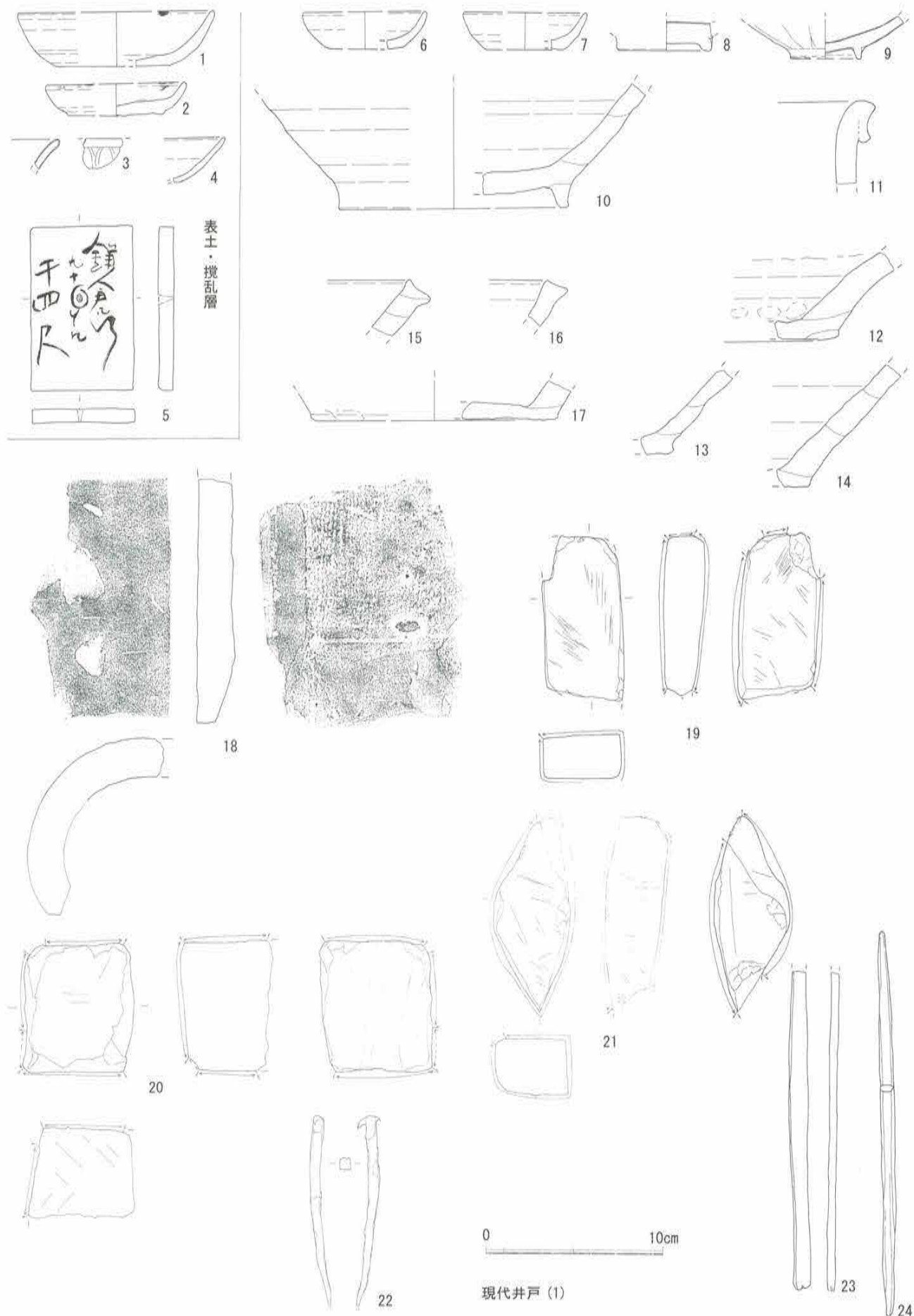


图 11 表土攪乱層・現代井戸 (1) 出土遺物

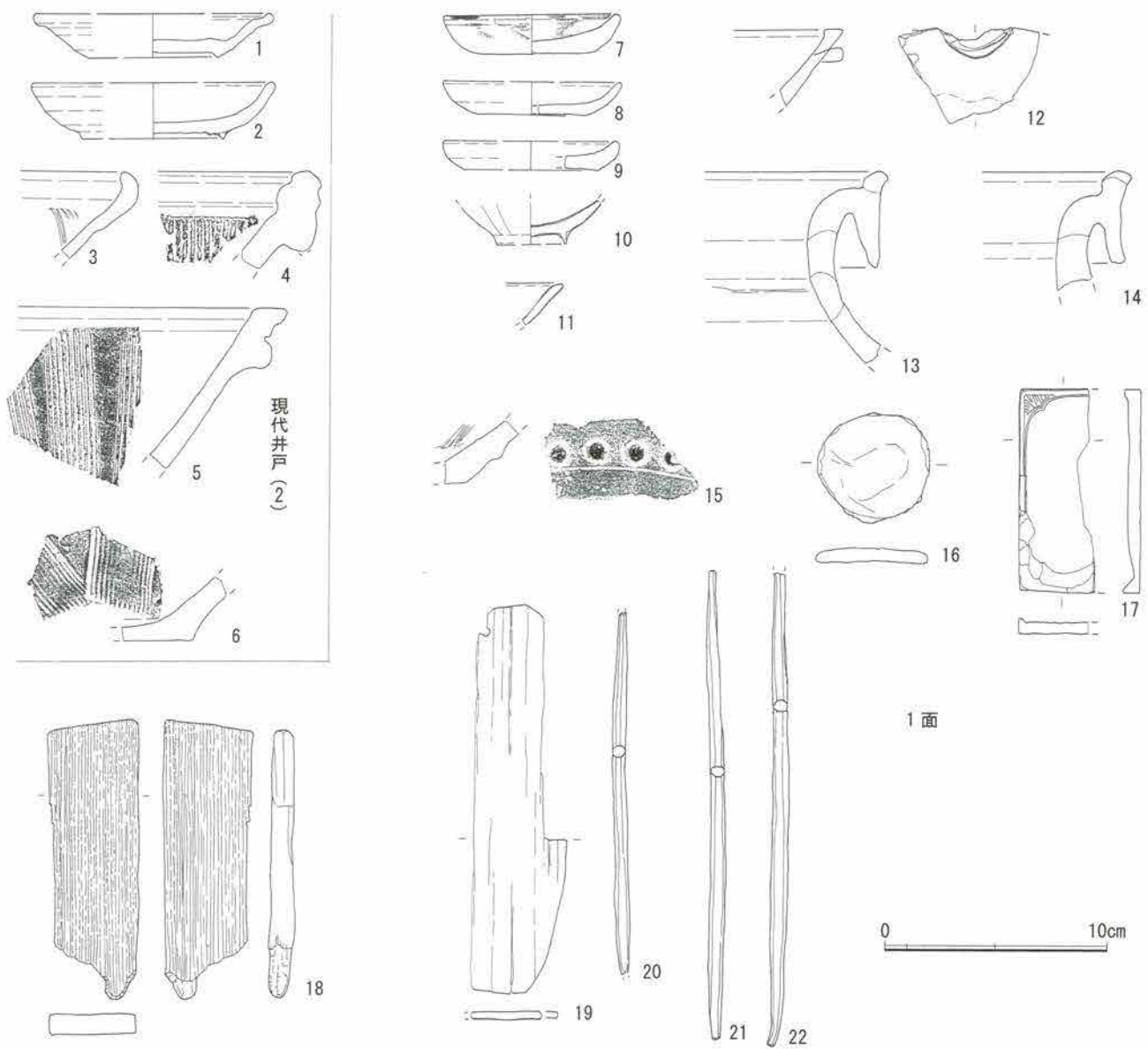


図12 現代井戸(2)・1面出土遺物

は14世紀前半に比定される甕の口縁部である。12～14は底部の小片である。12の内底面際は指頭による調整、外底面は砂底である。13の内面は磨耗が顕著であり捏鉢に転用したと想定される。14は底部際の小片であり、内面の降灰は厚い。15～17は片口鉢Ⅱ類である。15、16は口縁部の小片である。17は口縁中央部に凹が巡り口唇端部は三角形に尖る。13世紀後半に比定される。18は丸瓦である。凹面には粗い布目の圧痕が観察され、凸面は縦方向の丁寧な削り調整である。19～21は砥石である。3点全て中砥で、19は伊予産、20は天草産、21は上野産である。21は恐らく近世の所産で、16世紀は遡らない。22は鉄釘である。23、24は木製品である。23は不明木製品、端部中央に幅1mm長さ2mmの切り込みをいれる。24は箸である。

図12-1～6は近世の製品である。1、2は瀬戸窯の灰釉皿である。1は端反皿で底面の内外面は露胎である。2は丸皿である。高台は貼付けで、器表に粗い貫入がはいる。3～6は播鉢である。3は瀬戸窯、4は堺、5、6は備前である。

1面出土遺物(図12-7～22)

図12、7～9はロクロ成形のかわらけの小皿である。口径は8cmを測るが、8は薄手で胎土は精緻、7、

9は粗胎で器肉が厚い。10、11は磁器である。10は哥窯の鎬蓮弁文碗の底部で、高台壘付は露胎である。11は白磁口元皿の口縁部の小片である。12は瀬戸窯の灰釉卸皿の注口部分である。器表には細かい貫入が顕著である。13、14は常滑の甕の口縁部である。8型式、14世紀後半に比定される。15は瓦質の手焙りの底部際である。器表は横方向に丁寧な磨きが施され、珠文、沈線を1条巡らす。16はかわらけの底部を転用した円板である。17は長方硯である。前縁に波頭文を線刻、内側は四葉状になる。18～22は木製品である。18は用途不明品、差込状の凸部がある。19は板草履芯、20～22は箸、21は完形品で、全長21cmを測る。常滑の甕の年代より14世紀後半期と思われる。

中世第2面（図13）

海拔21.8～21.9m付近で検出された生活面である。構成土は黒褐色弱粘質土を主体とし、多量の鎌倉石碎片を築き固めて地形している。検出された遺構は土坑4基、ピット14口、不明遺構1基、部材6点である。

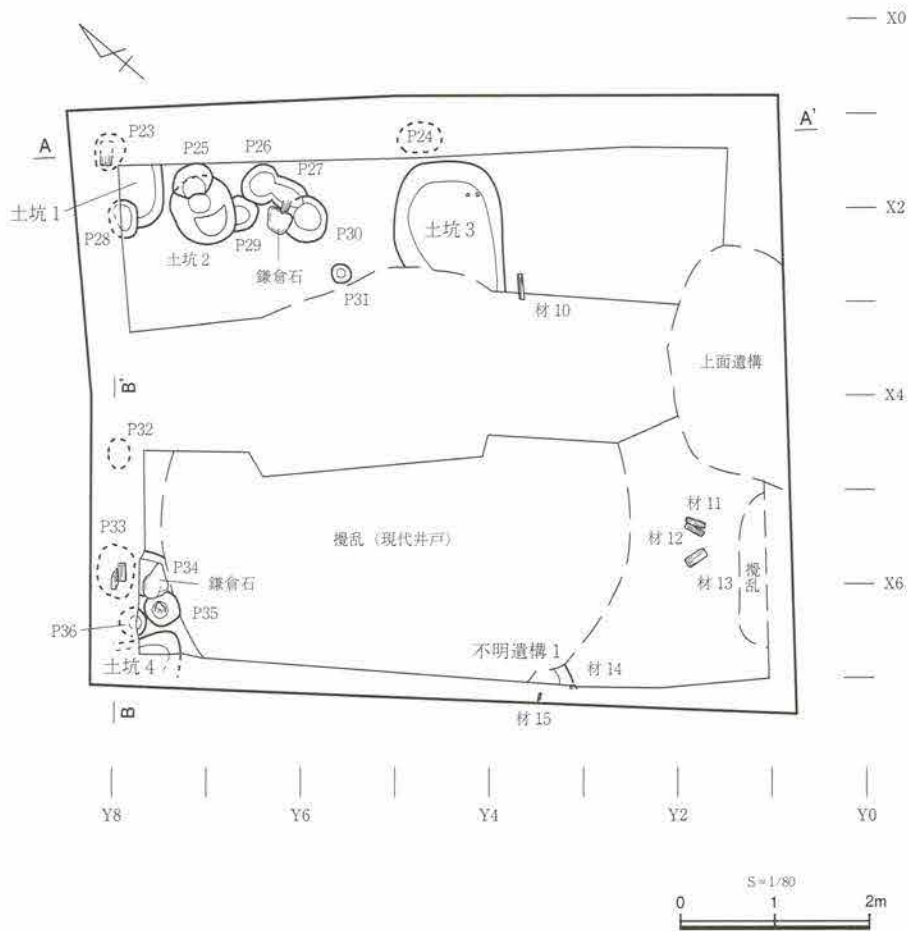
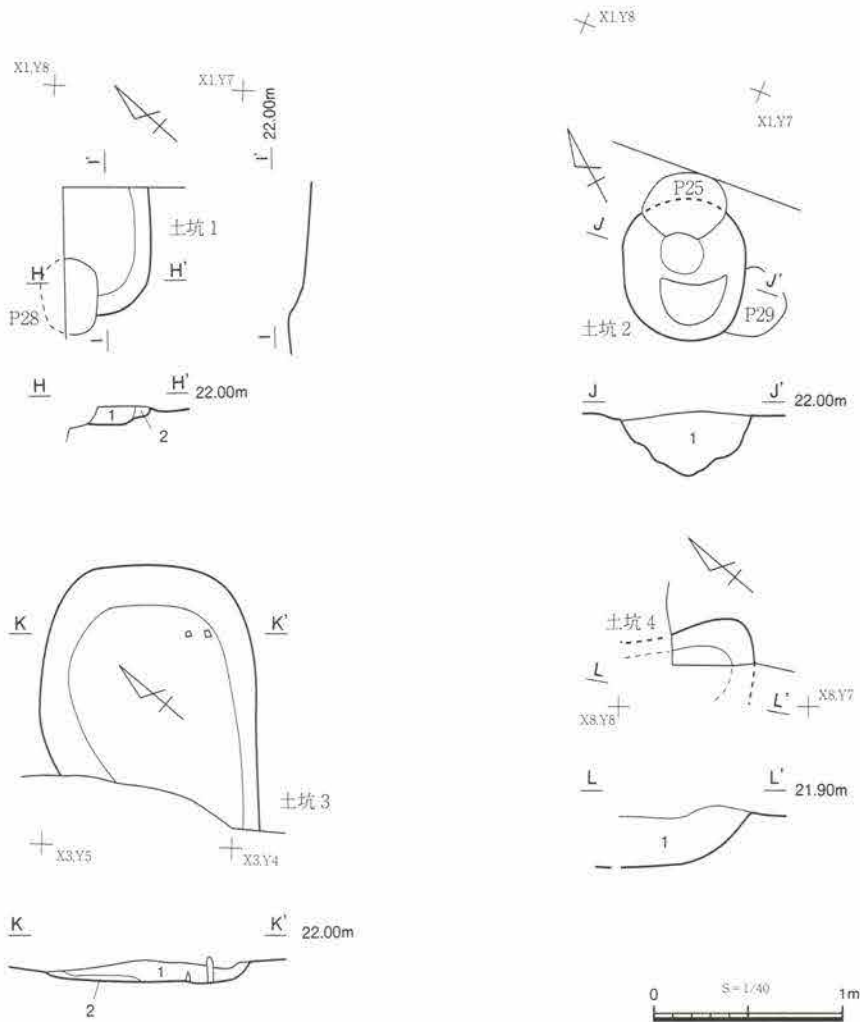


図13 2面遺構配置図

土坑1（図14）

調査I区北端のX1, Y7グリッドで検出された。北側は調査区外となる。南西側をP28に切られる。確認面の標高は海拔21.92mである。平面形は楕円形に近い形状と思われる。検出された規模は66×46cm、深さは12cmを測る。



土坑1 土層説明 (H-H')

- 1層 黒灰色粘質土 鎌倉石碎片が混入する。しまりなし。
- 2層 黒灰色粘質土 鎌倉石碎片が混入する。しまりなし。

土坑2 土層説明 (J-J')

- 1層 黒灰色粘質土 5~20cm大の鎌倉石片が多く混入する。

土坑3 土層説明 (K-K')

- 1層 黒褐色弱粘質土 木片を多く含む。粒子細かく湿質を帯び、しまりに欠ける。
- 2層 黒褐色弱粘質土 鎌倉石碎片が多く混入する。ややしまりに欠ける。

土坑4 土層説明 (L-L')

- 1層 茶灰色砂質土 土丹が混入し、しまりに欠ける。炭化物を含む。

図14 土坑1~4

土坑2(図14)

調査I区北端のX1~2, Y6~7グリッドで検出された。P25・P29を切る。確認面の標高は海拔21.92mである。平面形は楕円形を呈し、南側にテラス状部分を付帯する。検出された規模は(73)×65cm、深さは33cmを測る。

土坑3(図14)

調査I区北端のX1~2, Y3~5グリッドで検出された。南西側は現代井戸に攪乱される。確認面の標高は海拔21.83mである。平面形は隅丸長方形に近い。断面形は逆台形に近く、底面は平坦である。検出された規模は140×116cm、深さは12cmを測る。

土坑4(図14)

調査Ⅱ区北端のX7, Y7グリッドで検出された。西側は調査区外となる。確認面の標高は海拔21.80 mである。検出された規模は54×33cm、深さは23cmを測る。遺構の大半が調査区外となるため詳細は不明である。

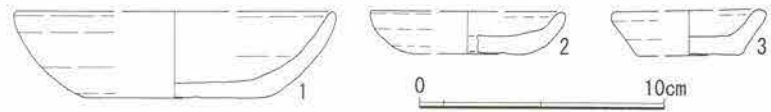


図 15 土坑 4 出土遺物

土坑 4 出土遺物 (図 15)

1～3はロクロ成形のかわらけで、1は大皿、2、3は小皿である。1の体部は丸みをもって開く。14世紀前半期に比定される。3は直線的に開く15世紀初頭に比定される。3は本遺跡の1面より後出の遺物である。本址が調査区壁際に検出されていることから表土層からの混入と考える。

不明遺構 1

調査Ⅱ区のX7, Y5グリッド付近で検出された。北側を現代井戸に攪乱される。確認面の標高は海拔21.80 mである。検出された規模は31×17cm、深さは6cmを測る。遺構の大半が調査区外となるため詳細は不明である。

ピット・部材 (表 4・5)

2面からはピット 14 口その他、6ヶ所で部材が検出されており、何らの施設を構成するものと思われるが、明確なセット関係を見出せないため個別に詳細を示した。2面検出ピット概要(第4表)・2面検出部材概要(第5表)を参照されたい。

表 4 2面検出ピット概要

NO.	規模 (cm)	深さ (cm)	底面標高 (m)	備考 ※部材の寸法は〔縦×横×厚さ・長さ〕、単位はcmとする。
P23	(27)×?	12	21.78	調査区壁面土層で確認。礎板〔(12××13×4)〕を伴う。
P24	(46)×?	28	21.70	調査区壁面土層で確認。
P25	43×33～	35	21.51	土坑 2 より旧。
P26	44×41～	20	21.67	P27 との新旧不明。
P27	40～×32	13	21.76	P30 より旧、P26 との新旧不明。
P28	(40)×17～	10	21.83	土坑 1 より新。
P29	(36)×32～	10	21.80	土坑 2 より旧
P30	(48)×(46)	20	21.70	P27 より新。
P31	23×20	26	21.62	
P32	(35)×?	12	21.70	調査区壁面土層で確認。
P33	(63)×?	36	21.48	調査区壁面土層で確認。礎板〔(22×?×5)〕・柱〔(15×?×49)〕を伴う。
P34	(43)×22～	27	21.48	
P35	38×37	(93)	20.79	柱〔(10×6×116)〕を伴う。
P36	27～×11～	8	21.55	

表 5 2面検出部材概要

※寸法は、縦×横×厚さ・長さ。
※底面標高は部材の下端の高さ。また、確認しえた底面標高より更に深く埋まっている場合は xxx 以下と記した。

NO	寸法 (cm)	底面標高 (m)	備考
材 10	(4×4×27)	21.80	柱状。
材 11	(20×4×?)	(21.81)	板状
材 12	(21×5×?)	(21.79)	板状。
材 13	(23×9×?)	(21.77)	柱状
材 14	(2×2×30～)	21.55 以下	柱状。刺さった状態で検出。不明遺構 1 との関係は不明。
材 15	(34～×6×2)	21.57 以下	板状。刺さった状態で検出。不明遺構 1 との関係は不明。

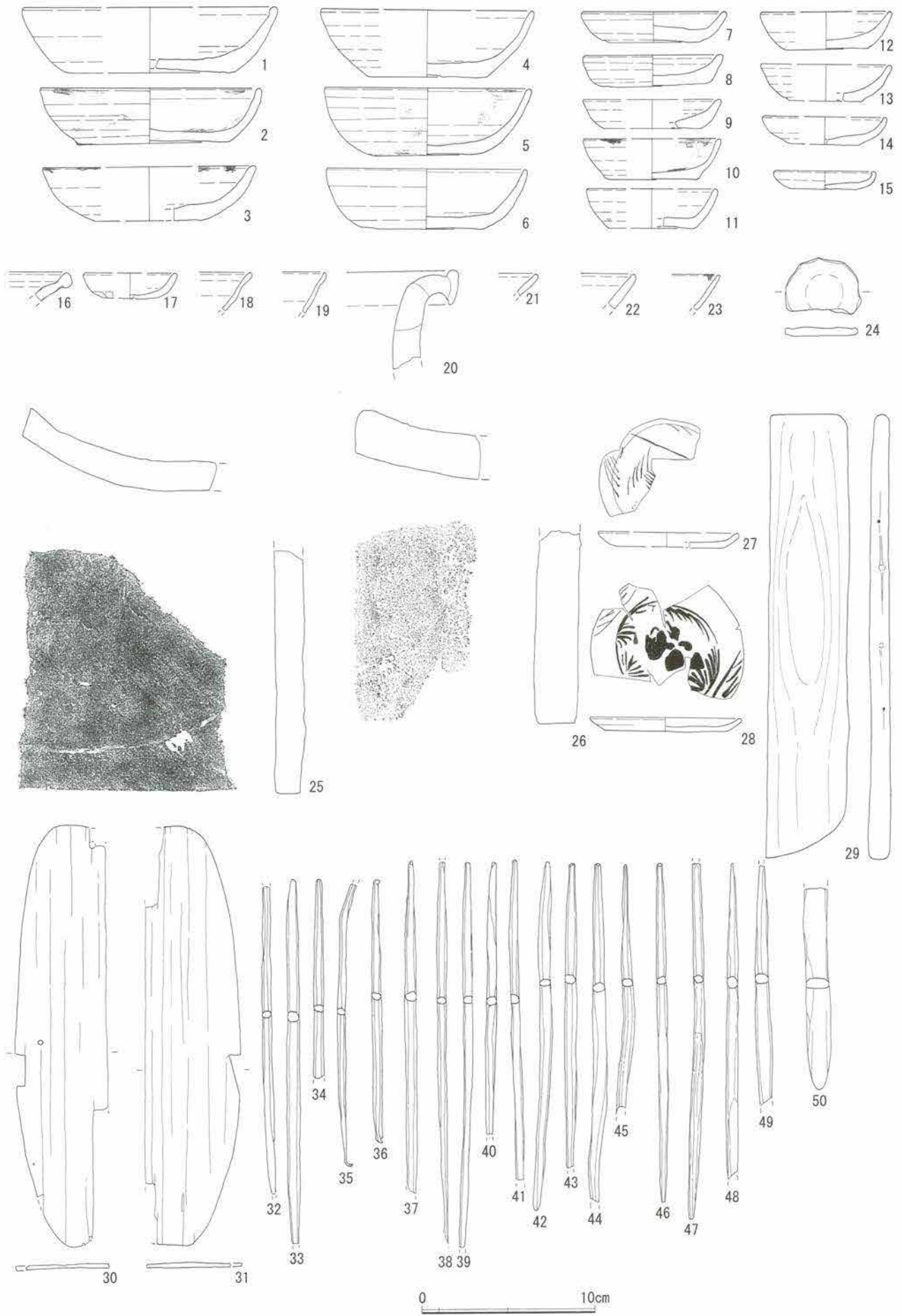


图 16 2 面出土遺物

2面出土遺物 (図16)

1～15はロクロ成形のかららけで、1～6は大皿、7～15は小皿である。1は復元口径14.8cmを測る大皿である。2, 7, 8は口径、底径比の小さいものであるが口径が若干、縮小化の傾向を示す。5は内底面の横ナデの調整をしていない。6, 10, 11は丸深タイプである。同質胎土で精緻な4, 14, 15、粗胎である9, 12, 13である。2面から出土したかわらけは概ね13世紀末～14世紀前半期と想定される。16, 17は瀬戸窯灰釉折縁皿の口縁部の小片である。器表に細かい貫入が観察される。17は入子である。外底面はへら削り調整である。13世紀初頭に比定される。18, 19は東濃型7型式の山茶碗、口縁部の小片である。13世紀後半に比定される。20は常滑の甕である。内面口縁部および外面に降灰している。6b型式13世紀後半に比定される。21, 22は白かわらけの皿の口縁部の小片である。ともに粉性の強い胎土である。23は瓦器碗の口縁部の小片である。灯明皿である。24はかわらけの底部を転用して作られた円板である。25, 26は平瓦である。凸面は斜め方向のなで成形、凹面には布目の圧痕が明瞭に残る。中世瓦では珍しい桶巻き作りである。26は被火の様相を示す。粗胎で、凸面はなで付けられている。27～50は木製品である。27, 28は漆器の皿、器高が低く平高台である。黒漆地に朱漆で手描きの草花文を描く。29は用途不明品である。端部に4箇所の小孔を有し、内2箇所の木釘を残す。30, 31は板草履芯である。全長24cmを測る大振りの製品である。32～49は箸、50は筥である。2面の年代は13世紀末～14世紀前半期であろうと想定される。

中世3面 (図17)

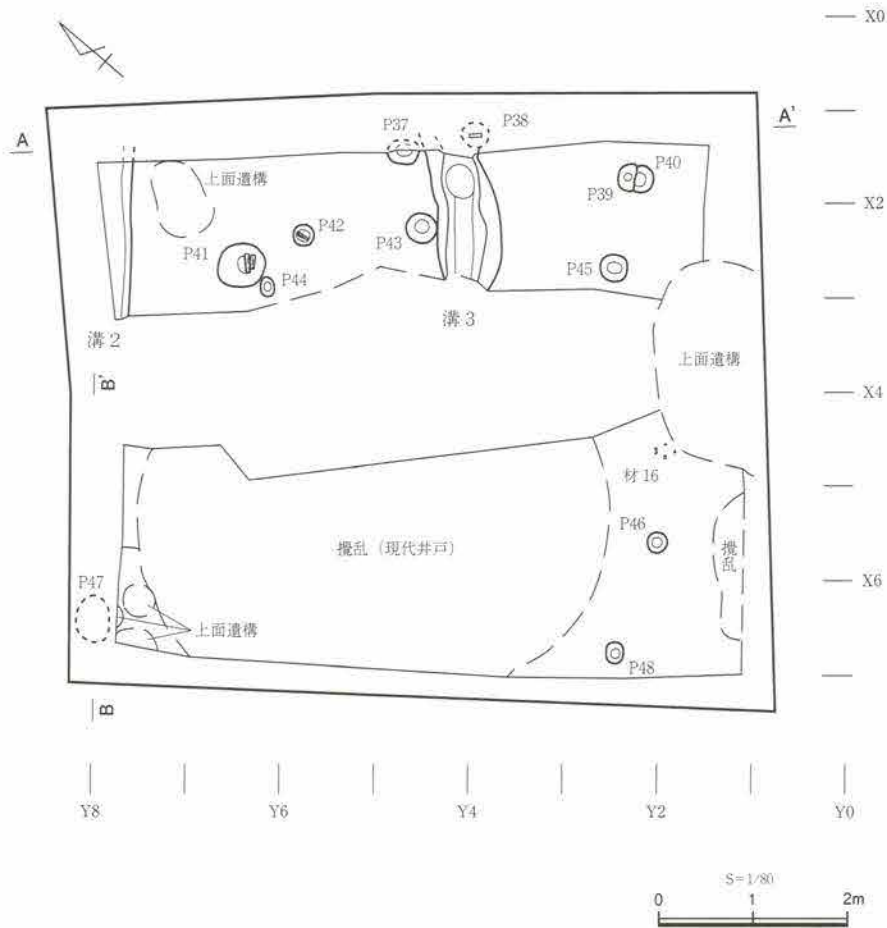
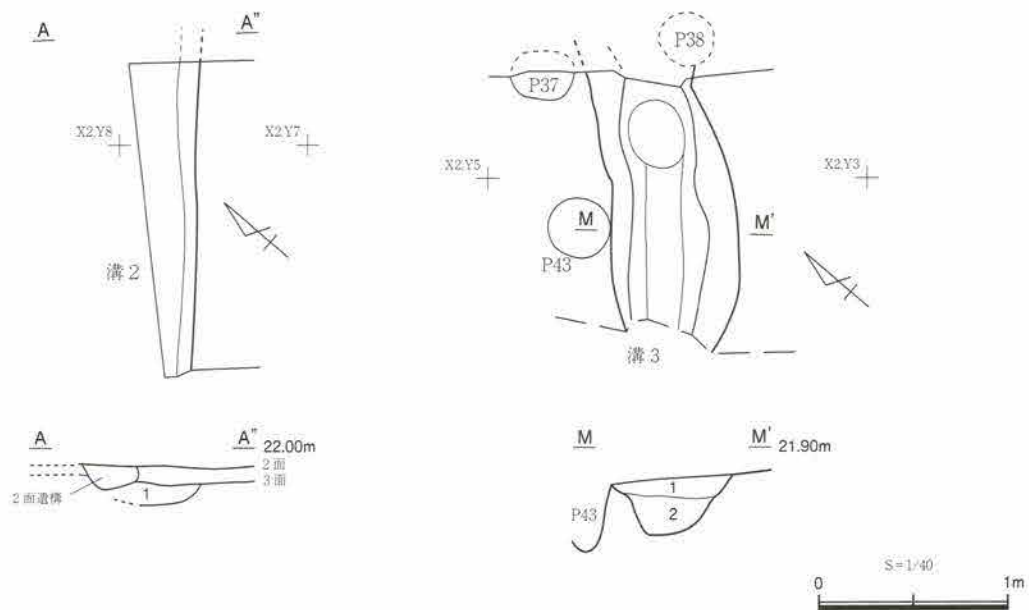


図17 3面遺構配置図



溝2 土層説明 (A-A')

1層 黒色粘質土 木片を多く含み、しまりに欠ける。

溝3 土層説明 (M-M')

1層 黒色粘質土 木片を多く含む。粒子細かく湿質を帯び、しまりに欠ける。
2層 黒色粘質土 下部は粘性が強い。混入物を含まず良くしまる。

図18 溝2・3

海拔 21.6 ~ 21.8 m 付近で検出された生活面である。構成土は黒褐色粘質土を主体とし、調査区北東側では多量の鎌倉石碎片を混じえる部分が見受けられる。検出された遺構は溝2条、ピット12口、部材4 溝2 (図18) 点である。

調査I区北端のX1~3, Y7グリッドで検出された。確認面の標高は海拔21.80m前後で、軸方向はN-50°-Wある。下端標高は海拔21.70~21.77mで北東側へ向かい若干傾斜するようである。検出された規模は長さが185cm、残存する最大幅は上端が40cm、下端が28cmで、深さは最深で10cmを測る。

溝3 (図18)

調査I区北端のX1~2, Y3~4グリッドで検出された。南西側は現代井戸の攪乱により失われている。北東側は調査区に延びる。P38よりも古い。検出面の海拔は21.80m前後で、軸方向はN-51°-Wである。断面形は逆台形を呈し、下端標高は海拔21.40m前後でほぼ一定する。検出された規模は長さが160cm、幅は上端が最大で68cm、下端は18cm前後、深さは30~34cmである。底面北東側の柱穴状に広がる一段低い部分は別遺構である可能性がある。この部分の下端標高は海拔21.43m、下端幅は28cmである。

表6 3面検出ピット概要

NO	規模 (cm)	深さ (cm)	底面標高 (m)	備考
P37	33×17～	(14)	21.66	
P38	(29)×?	28	21.56	調査区壁面土層で確認。柱 [(10×?×66)] を伴う。溝3より新。
P39	30×18～	23	21.52	P40との新旧不明
P40	30×20～	10	21.64	P39との新旧不明。
P41	48×47	68	21.12	礎板2枚 [(20×5×?)・(14×4×?)] を伴う。
P42	23×21	(8)	21.67	礎板 [(15×4×?)] を伴う。
P43	33×29	32	21.40	
P44	20×15	16	21.65	
P45	28×27	9	21.62	
P46	22×20	10	21.55	
P47	(50)×?	23	21.44	調査区壁面土層で確認。
P48	23×17	7	21.62	

表7 3面検出部材概要

※寸法は、縦×横×厚さ×長さ。
 ※底面標高は部材の下端の高さ。また、確認しえた底面標高より更に深く埋まっている場合はxxx以下と記した。

NO	寸法 (cm)	底面標高 (m)	備考
材16	2.5×1.5×27	21.54	杭状。他、周辺から杭状2本・板状1枚の小片が面に刺さった状態で検出されている。

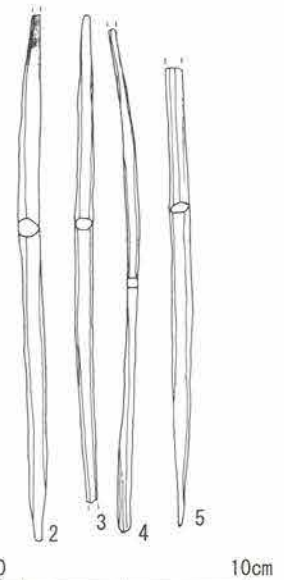
ピット・部材 (表6・7)

3面からはピット12口が検出された他、部材がまとまって検出されている地点があり、何らの施設を構成するものと思われるが、明確なセット関係を見出せないため個別に詳細を示した。3面検出ピット概要 (表6)・3面検出部材概要 (表7) を参照されたい。



3面出土遺物 (図19)

1はロクロ成形の大皿である。粉性が強く粗胎である。器肉がほぼ均一で9mm前後と厚い。13世紀後半期に比定される。2～5は木製品、箸である。



中世第4面

4面は海拔21.5から21.7mで検出された生活面である。遺構の検出はなかった。

4面出土遺物 (図20)

1は南伊勢系土鍋の口縁部の小片である。



図20 4面出土遺物

4 面下出土遺物 (図 21)

1 は鉄製品、刀子の刃先部分の小片である。

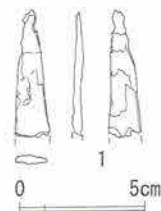


図 21 4 面下出土遺物

古代以前の遺物 (図 22)

中世層から出土した中世以前の遺物である。1, 2 は土師器の甕の口縁部の小片である。ともに口縁内部に炭化物の付着をみる。

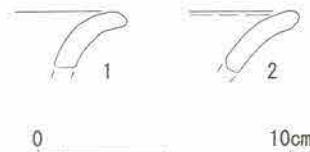


図 22 古代以前の遺物

表8 遺物観察表

単位cm ()=復元径 []=遺存した長さ

図	番号	層位	遺構	遺物名	口径/長さ	底径/幅	器高/厚さ	胎土	色調	成形	備考
8	1	1面	溝1	熙寧元宝	2.2	[1.4]					初鑄年1068年 楷書
10	1		井戸1	かわらけ	13.6	8.4	3.6	橙色/粗胎 白針、白色、 赤茶色粒子 含む		ロク口	灯明皿
	2			かわらけ	12.4	8.9	2.8	淡橙色/精緻 白針、白 色、赤茶色粒 子含む		ロク口	
	3			竜泉窯青磁 鎡蓮弁文碗	小片			灰色	灰緑色		器表に擦過痕多い
	4			丸瓦	(18.4)	[10.5]	9.2	橙色/粗胎 黒砂含む凸 面ナデ 凹面 布目の圧痕			永福寺Ⅱ期
	5			平瓦	[10.7]	[10.8]	2.6	灰色/粗胎 白色粒子を含 む			永福寺Ⅱ期
	6			平瓦	[9.3]	[9.5]	2.4	白褐色/ 白 色、赤茶色粒 子を含む			永福寺Ⅱ期
	7			砥石	[6.4]	3.9	0.9	桃灰色			鳴滝産仕上げ砥
	8			板草履芯	[12.0]	[1.8]	0.3				
	9			箸	19.2	0.7	0.4				
	10			鉄鍋	(25.2)		[3.3]				
11	1	表 土・攪 乱層		かわらけ	(11.2)	6.5	3	白褐色/精緻 白針、雲 母を含む		ロク口	灯明皿
	2			かわらけ	(8.0)	(5.4)	1.8	白褐色/精緻 白針、雲 母を含む		ロク口	灯明皿
	3			竜泉窯青磁 鎡蓮弁文碗	小片			灰色	灰緑色		
	4			白かわらけ	小片			白色		手づくね	
	5			墨書板	9.2	5.8	0.8				中央に釘穴あり
	6		現代井 戸(1)	かわらけ	(7.0)	(4.2)	2.1	橙色 白針、 雲母を含む		ロク口	
	7			かわらけ	(7.0)	4.4	2.1	橙色 白針、 雲母を含む		ロク口	
	8			青磁碗		(5.2)	1.6	灰色	暗灰緑色		貫入多い
	9			青磁竜泉窯 鎡蓮弁文碗		(4.0)	2.3	灰色	淡灰緑色		
	10			常滑窯片口 鉢Ⅰ類		(13.0)	[6.9]	暗灰色/長 石粒子多い			器表に炭化物が付着
	11			常滑窯壺	小片			灰褐色/長 石粒子多い	茶灰色		
	12			常滑窯壺	小片			黒灰色/長 石粒子多い			
	13			常滑窯壺	小片			灰色			内面に厚く降灰
	14			常滑窯壺	小片			黒灰色	灰褐色		内面摩滅顕著
	15			常滑窯片口 鉢Ⅱ類	小片			黒灰色/長 石粒子多い	茶色～灰褐色		
	16			常滑窯片口 鉢Ⅱ類	小片			黒灰色/長 石粒子多い	茶色		内面に降灰
	17			常滑窯片口 鉢Ⅱ類	小片	(14.0)	[2.2]	赤褐色/長 石粒子混入			
	18			丸瓦	13.6	9.9	2	暗灰色			凸面削り調整
	19			砥石	[9.2]	4.5	2	灰白色			伊予産中砥
	20			砥石	7.1	[6.1]	5.1	桃灰色			天草産中砥
	21			砥石	11.2	4.3	3.2	緑灰色			上野産中砥 近世
	22			鉄釘	[10.7]	0.7	0.7				
	23			不明木製品	[18]	1.2	0.4				
	24			箸	21.7	0.8	0.4				
12	1		現代井 戸(2)	瀬戸端反皿	(10.8)	(5.8)	2.0	白色	灰釉		
	2			瀬戸丸皿	(11.0)	(6.3)	2.4	白褐色	灰釉		
	3			瀬戸搦鉢	口縁部小片			白色	暗紫色		
	4			堺搦鉢	口縁部小片			褐色/長石 粒子多い			
	5			備前搦鉢	口縁部小片			灰褐色	赤茶色		
	6			備前搦鉢	底部小片			灰色	茶色		
	7	1面		かわらけ	(8.0)	5.6	1.7	淡褐色/白 針、白色、赤 茶色粒子含		ロク口	灯明皿

図	番号	層位	遺構	遺物名	口径/長さ	底径/幅	器高/厚さ	胎土	色調	成形	備考
	8	1面		かわらけ	(8.0)	(4.9)	1.5	淡橙色/精緻白針、白色、赤茶色粒子を含む		ロクロ	
	9			かわらけ	(8.0)	(6.0)	1.3	橙色/白針、白色、赤茶色粒子を含む		ロクロ	
	10			哥窯青磁鎮蓮弁文碗		(3.2)	[1.9]	灰白色	灰青色		
	11			白磁口元皿	口縁部小片			白色	緑味白色		
	12			瀬戸卸皿	口縁部小片			灰色	灰釉		
	13			常滑壺	口縁部小片			暗灰色/長石粒子多い	暗茶紫色		肩部に降灰
	14			常滑壺	口縁部小片			灰色	茶色		口縁～頸部に降灰
	15			瓦質手あぶり	底部際小片			白色		横方向の磨き	
	16			円板	5.0	5.1	0.6	橙色			かわらけの底部転用
	17			硯	9.3	[3.5]	0.7	黒色			
	18			用途不明木製品	12.7	3.9	0.8				先端部で凸状
	19			板草履芯	17.6	[4.3]	0.3				
	20			箸	[16.7]	0.5	0.6				
	21			箸	21.2	0.7	0.5				
	22			箸	[21.5]	0.6	0.5				
15	1	2面	土坑4	かわらけ	(13.2)	7.6	3.5	白褐色/白針 金雲母を含む		ロクロ	
	2			かわらけ	(8.0)	(4.8)	1.7	橙色/白針 微砂を含む		ロクロ	
	3			かわらけ	(6.4)	(4.3)	1.8	橙色/白針 赤茶色粒子を含む		ロクロ	
16	1	2面		かわらけ	(14.8)	(9.4)	3.6	橙色/白針 雲母 赤茶色粒子 微砂を含む		ロクロ	
	2			かわらけ	12.7	8.7	3.2	暗白褐色/精緻白針 白色粒子を含む		ロクロ	灯明皿
	3			かわらけ	(12.4)	(6.2)	3.1	暗白褐色/白針 雲母 白色粒子を含む		ロクロ	灯明皿
	4			かわらけ	(12.4)	6.7	3.8	白褐色/白針 雲母 白色粒子を含む		ロクロ	
	5			かわらけ	12.0	6.4	3.9	淡橙色/精緻白針 雲母を含む		ロクロ	灯明皿
	6			かわらけ	11.6	7.0	3.5	橙色/精緻白針 雲母 赤茶色粒子を含む		ロクロ	
	7			かわらけ	8.4	5.2	1.8	白褐色/精緻白針、雲母を含む		ロクロ	
	8			かわらけ	8.1	6.1	1.8	白褐色/白針、雲母 微砂を含む		ロクロ	
	9			かわらけ	(8.0)	(5.6)	1.7	淡橙色/精緻白針 雲母を含む		ロクロ	灯明皿
	10			かわらけ	(8.0)	5.0	2.3	淡橙色/精緻白針 雲母を含む		ロクロ	
	11			かわらけ	(7.6)	(5.0)	2.3	橙色/白針、雲母、微砂を含む		ロクロ	
	12			かわらけ	(7.6)	4.8	2.2	橙色/白針、雲母、微砂を含む		ロクロ	
	13			かわらけ	(7.6)	(4.2)	2.1	橙色/白針、雲母、微砂を含む		ロクロ	
	14			かわらけ	7.2	(3.9)	1.5	白褐色/精緻白針、雲母、黒色粒子を含む		ロクロ	

図	番号	層位	遺構	遺物名	口径／長さ	底径／幅	器高／厚さ	胎土	色調	成形	備考
	15			かわらけ	5.9	3.7	1.0	白褐色／精緻 白針、雲母 黒色粒子を含む		口ク口	内折れ
	16			瀬戸折縁皿	口縁部小片			白色	灰釉		
	17			瀬戸入れ子	口縁部小片			白色			外底部へラ削り
	18			東濃型山茶碗	口縁部小片			灰白色			
	19			東濃型山茶碗	口縁部小片			灰白色			
	20			常滑壺	口縁部小片			灰色／長石 粒子多い	赤茶色		
	21			白かわらけ	口縁部小片			白色			
	22			白かわらけ	口縁部小片			白色			
	23			瓦器碗	口縁部小片			黒色			灯明皿
	24			円板	4.4	3.0	0.5				かわらけの底部を転用
	25			平瓦	[14.6]	[11.8]	1.7	灰色／白色 粒子多い	灰色		凸面削り調整 桶まき作り
	26			平瓦	[11.6]	[7.2]	2.7	黒色／粗胎	黒色		凸面なで付け 永福寺Ⅱ期以降、被災
	27			漆皿	(8.2)	(6.2)	0.8				草文
	28			漆皿	8.8	7.0	0.8				草花文
	29			不明木製品	25.7	4.7	1.0				2箇所にも釘あり
	30			板草履芯	24.2	[4.9]	0.25				小孔2箇所にも有り
	31			板草履芯	24.0	[5.5]	0.3				
	32			箸	[17.7]	0.4	0.5				
	33			箸	[17.8]	0.4	0.5				
	34			箸	[22]	0.6	0.5				
	35			箸	[11.6]	0.4	0.4				
	36			箸	[16.5]	0.3	0.4				
	37			箸	15.0	0.4	0.5				
	38			箸	[19.3]	0.5	0.6				
	39			箸	[22.1]	0.4	0.4				
	40			箸	[22.3]	0.5	0.4				
	41			箸	[15.7]	0.5	0.5				
	42			箸	[18.6]	0.5	0.5				
	43			箸	20.1	0.6	0.4				
	44			箸	[17.6]	0.5	0.6				
	45			箸	[14.2]	0.5	0.5				
	46			箸	19.6	0.4	0.4				
	47			箸	[20.5]	0.5	0.5				
	48			箸	[18.0]	0.7	0.6				
	49			箸	[13.7]	0.6	0.6				
	50			篋	[11.6]	1.4	0.6				
19	1	3面		かわらけ	12.3	8.3	3.5	橙色／白針、 雲母を含む		口ク口	灯明皿
	2			箸	[21.0]	0.9	0.7				先端部炭化
	3			箸	[19.5]	0.7	0.5				
	4			箸	[20]	0.4	0.4				
	5			箸	[18.7]	0.4	0.7				
20	1	4面		土鍋	口縁部小片			淡灰桃色/ 白色粒子含 む。			南伊勢系
21	1	4面下		鉄製刀子	[5.0]	[1.3]	0.3				刃先
22	1	中世 以前 遺物		土師壺	口縁部小片			淡灰桃色/ 雲母、白色粒 子、微砂を含 む。			口縁部炭化物付着
	2			土師壺	口縁部小片			淡灰桃色/ 雲母、白色粒 子、微砂を含 む。			口縁部炭化物付着

第5章 まとめ

今回の調査地点は現代の削平を受け、近世以降の土層は失われていた。今回、確認出来たのは中世期の4面の生活面が検出された。出土遺物はさほど変化が見られず、また少量であり、年代の特定は難しいが、円覚寺創建以降の開発と考えられ概ね13世紀後半～14世紀前半であると思われる。

以下、各時期の様相を述べる。

中世第4面

褐鉄分の多い黒色粘質土で、粘性が強くしまりのよい面である。山ノ内道に平行な溝2条が検出され、溝の両側に柱穴が点在する閑散とした状況である。出土遺物は13世紀前半に比定されるものも出土しているが、近隣の遺跡地と同様、開発されるのは円覚寺創建以降、13世紀後半～末頃であろうと想定される。

中世第3面

土丹粒子を多く含む灰茶色粘質土で粘性がありしまりの良好な生活面である。山ノ内道に直交する溝の両側に柵を設け、建物を構築した様子で、整然としている。4面時より生活空間が広がった様相で、出土遺物から14世紀前葉に比定される。円覚寺が隆盛期に向かう、それに付随するような開発の状況である。

中世第2面

土丹粒子、かわらけ細片を含む茶褐色粘質土で、褐鉄分が多く粘性がありしまりの良好な生活面である。3面とさほど時期差はないが、若干の時期差をみて14世紀中頃であろうか。3面時の溝は踏襲するが柵は設けない。溝および、溝の両側の柱穴群はやや大型化する。前時期同様、円覚寺の様相を反映し隆盛をみるような遺構群の状況である。

中世第1面

土丹粒子、鎌倉石粒子、炭化物片を含む茶褐色粘質土で粘性がありしまりの良好な生活面である。出土遺物から14世紀前半期に比定される。溝は山ノ内道と平行方向に変化し、溝の両側の遺構群は谷戸奥側を意識して開発したのであろうか。谷戸奥側に明確な土丹地形が確認された。山ノ内道側は空間が多く居住域といった様相が感じられない。

各時期ともに地境溝の検出がありその両側に遺構群が展開する。各時期の溝の軸方向は一定方向を示し山ノ内道と平行、或いは直交関係を示す。遺跡存続期間中、敷地の面積、位置等小規模な地割の変化は見て取れるが、基本的な軸が変化した様相はみられない。第1章で述べた円覚寺境内、及び門前を描いた絵図のとおり、小さな建物がこの近辺にも建てられていたような状況ではなかったと思われる。

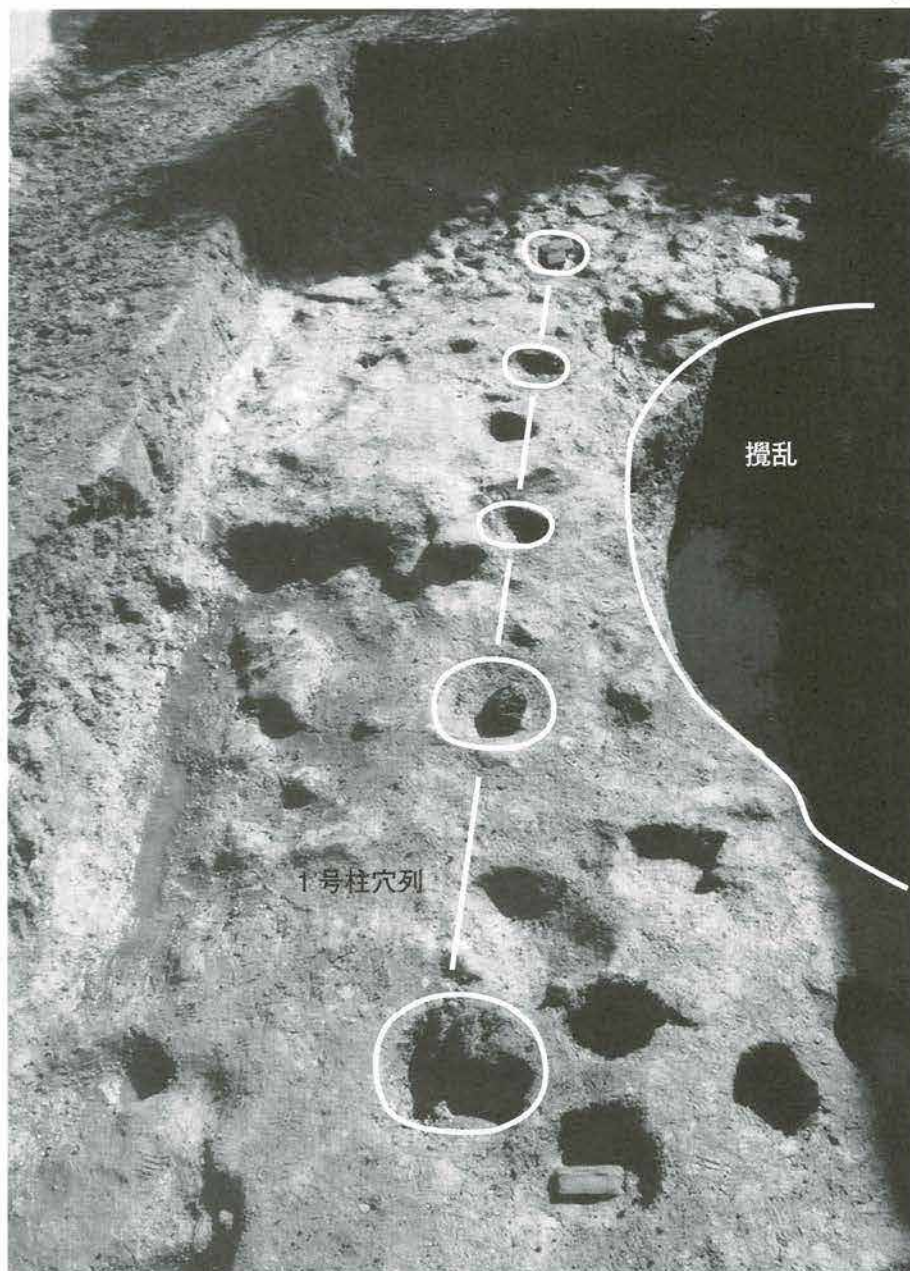
また、本遺跡地東方100mの台地上には弥生時代～平安時代の遺跡地である台山藤源治遺跡（現北鎌倉女子学園）がある。当遺跡地内では弥生時代後期～古代にかけての遺物が発見されているが、該期の遺構群は検出されなかった。流路により運搬されたものが氾濫時に本遺跡地に流れ込み堆積したか、或いは搬入した造成土に混入していたものと判断したい。



▲ A. 調査地点遠景 JR横須賀線北鎌倉駅より（北東から）



▲ B. 調査風景（南から）



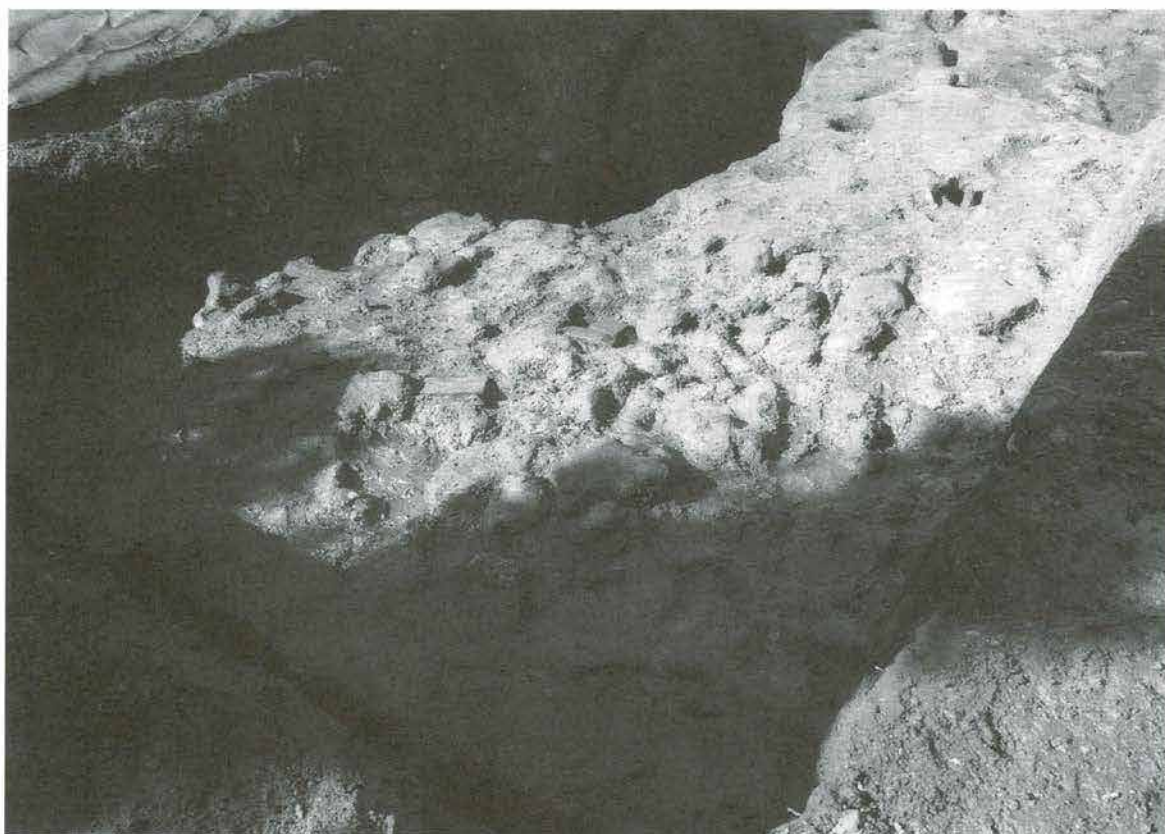
▲ A. I区1面 柱穴列1 (北西から)



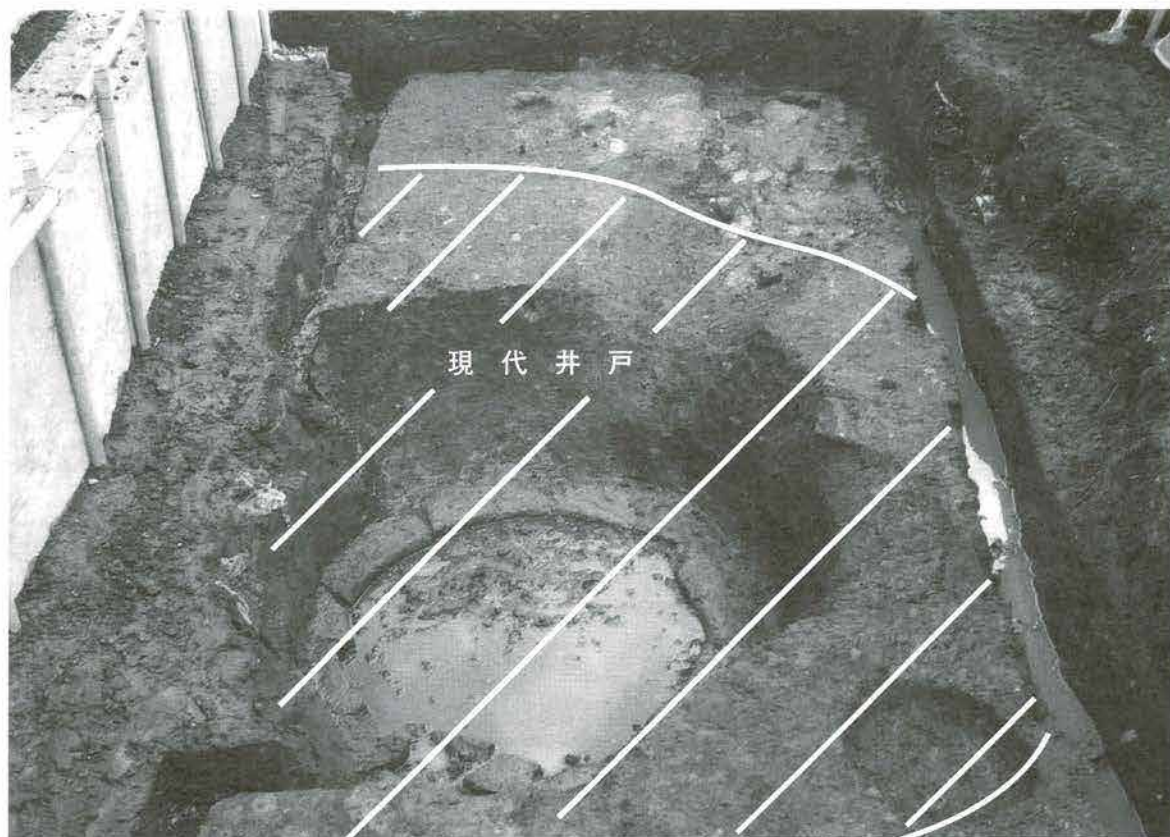
◀ B. 柱穴列1 P2



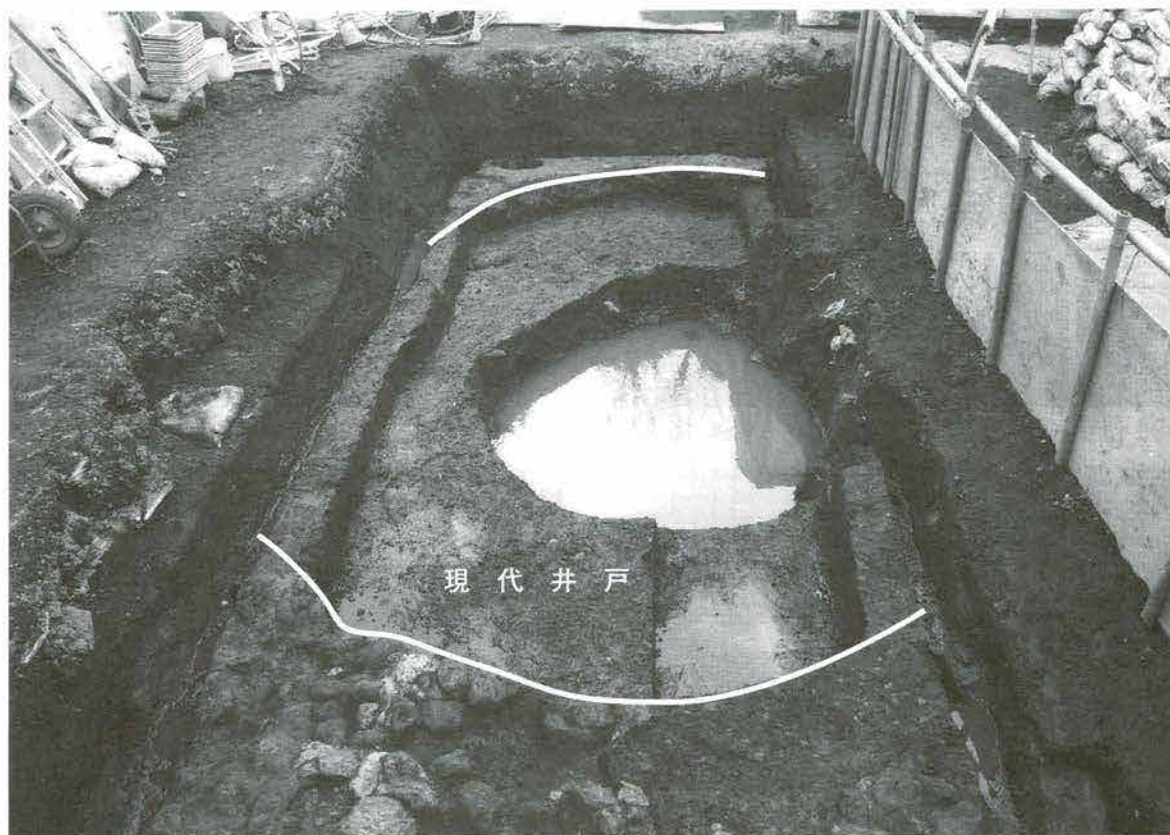
▲ A.I区1面道 (北から)



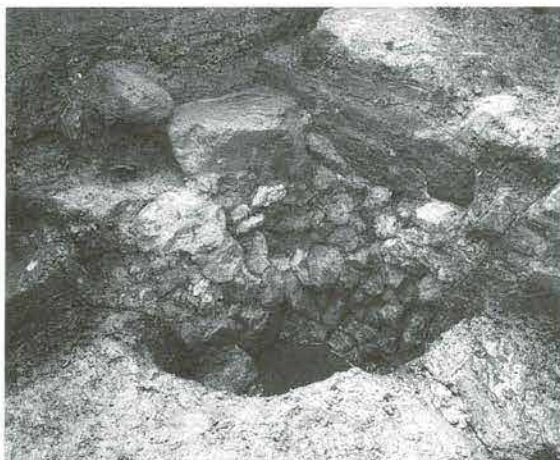
▲ B.I区1面道 (東から)



▲ A. II区 1a面 (北西から)



▲ B. II区 1b面 (南東から)



▲ A. 井戸1 (北から)



▲ B. 井戸1 東壁土層



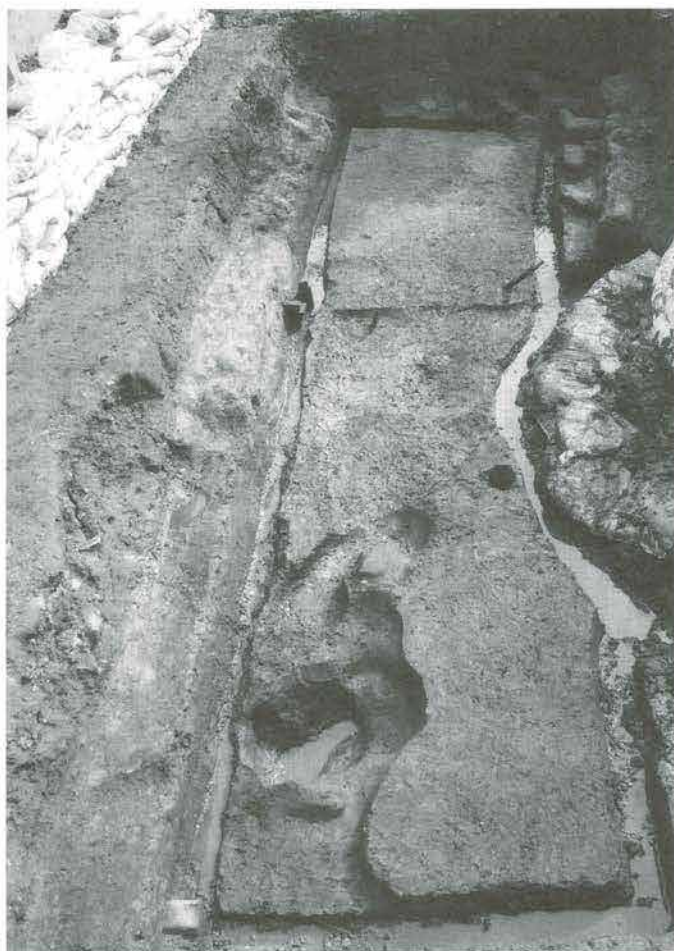
▲ C. 井戸1 (北から)



▲ A. 井戸1 (東から)



▲ A. 井戸1 (南から)



▲ B. I区2面 土坑3 (南東から)

◀ A. I区2面 (北東から)

▼ C. II区2面 (南東から)



▲ D. II区2面 P34・35 土坑4
(西から)



▲ E. II区2面 P33~35 (南東から)





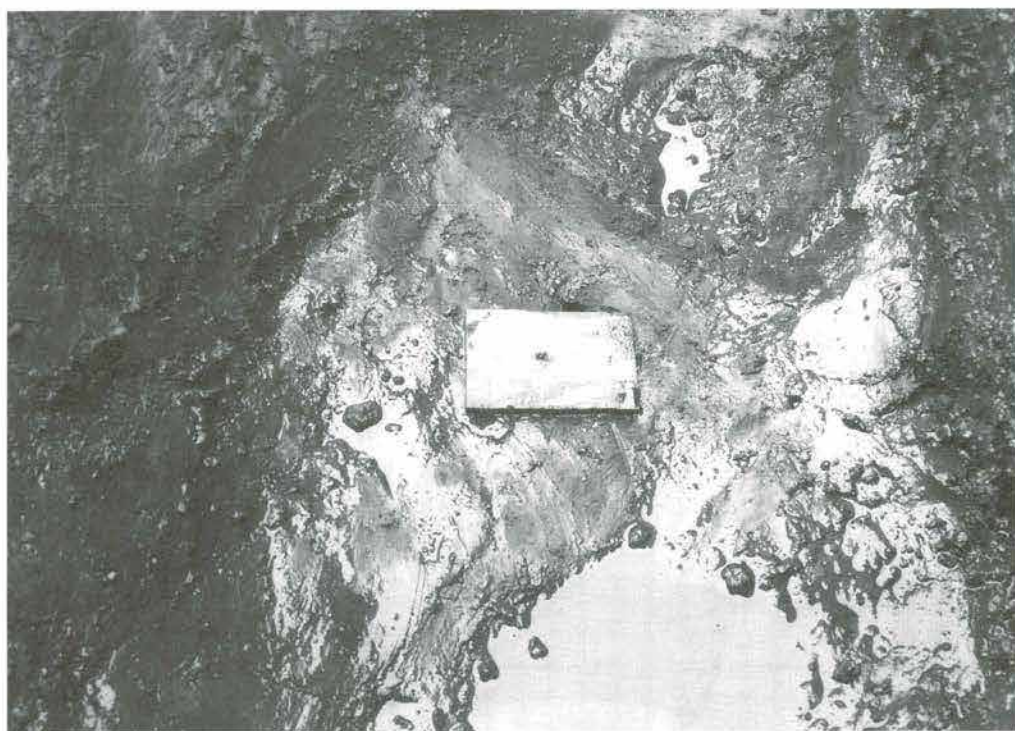
◀ A. I区3面 (北西から)



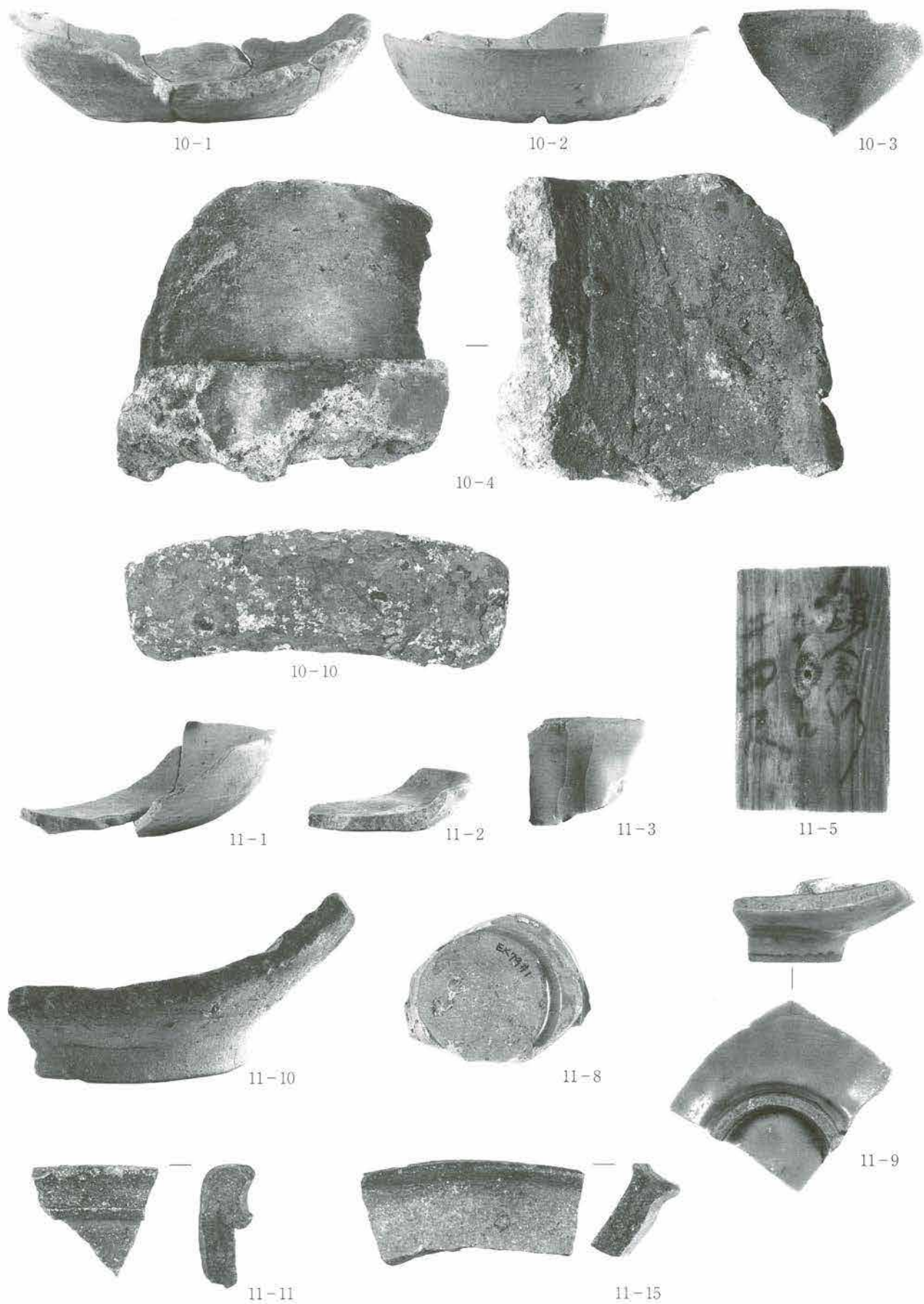
▲ B. I区3面 溝3 (北東から)



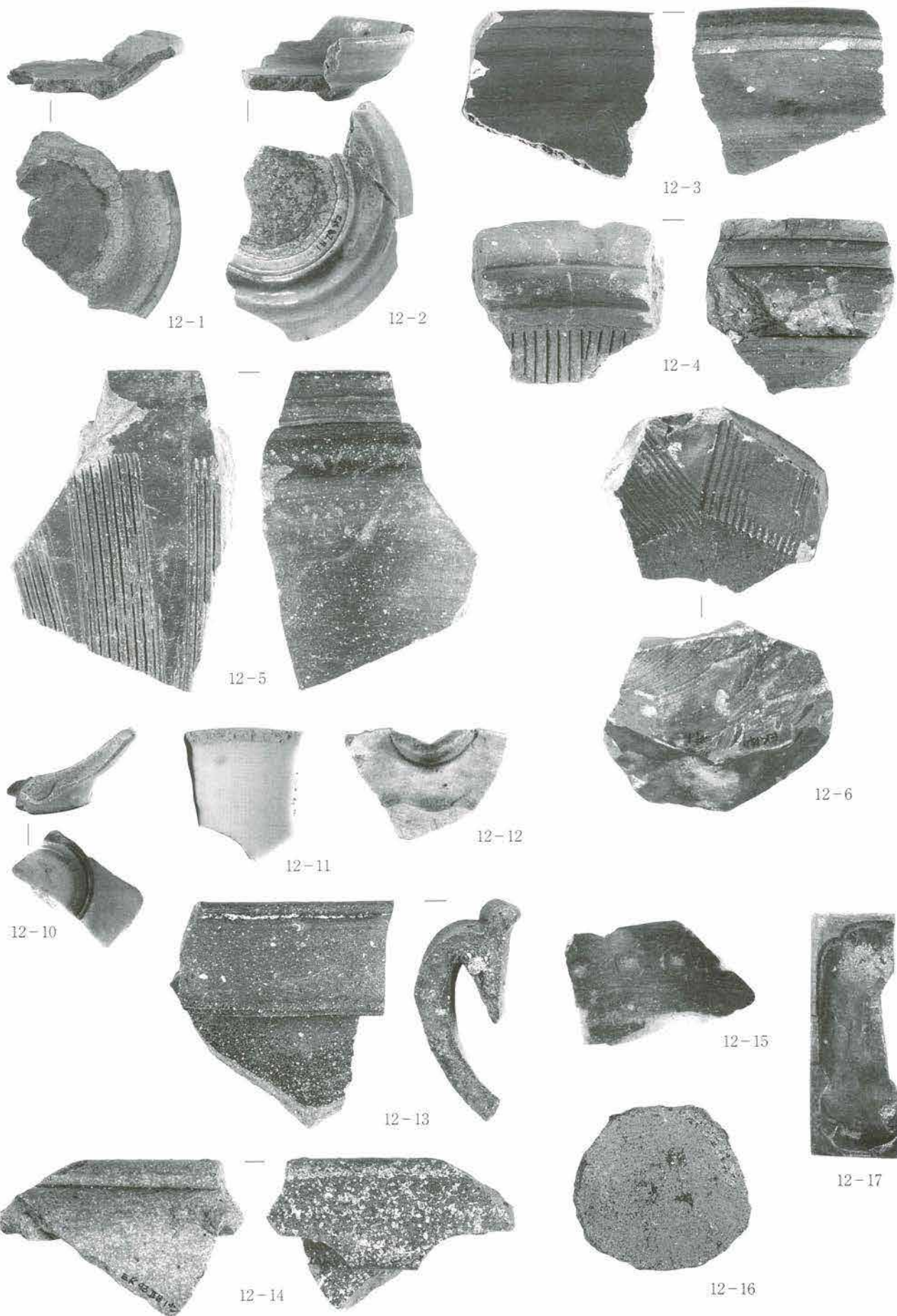
◀ A. II区3面 (南西から)



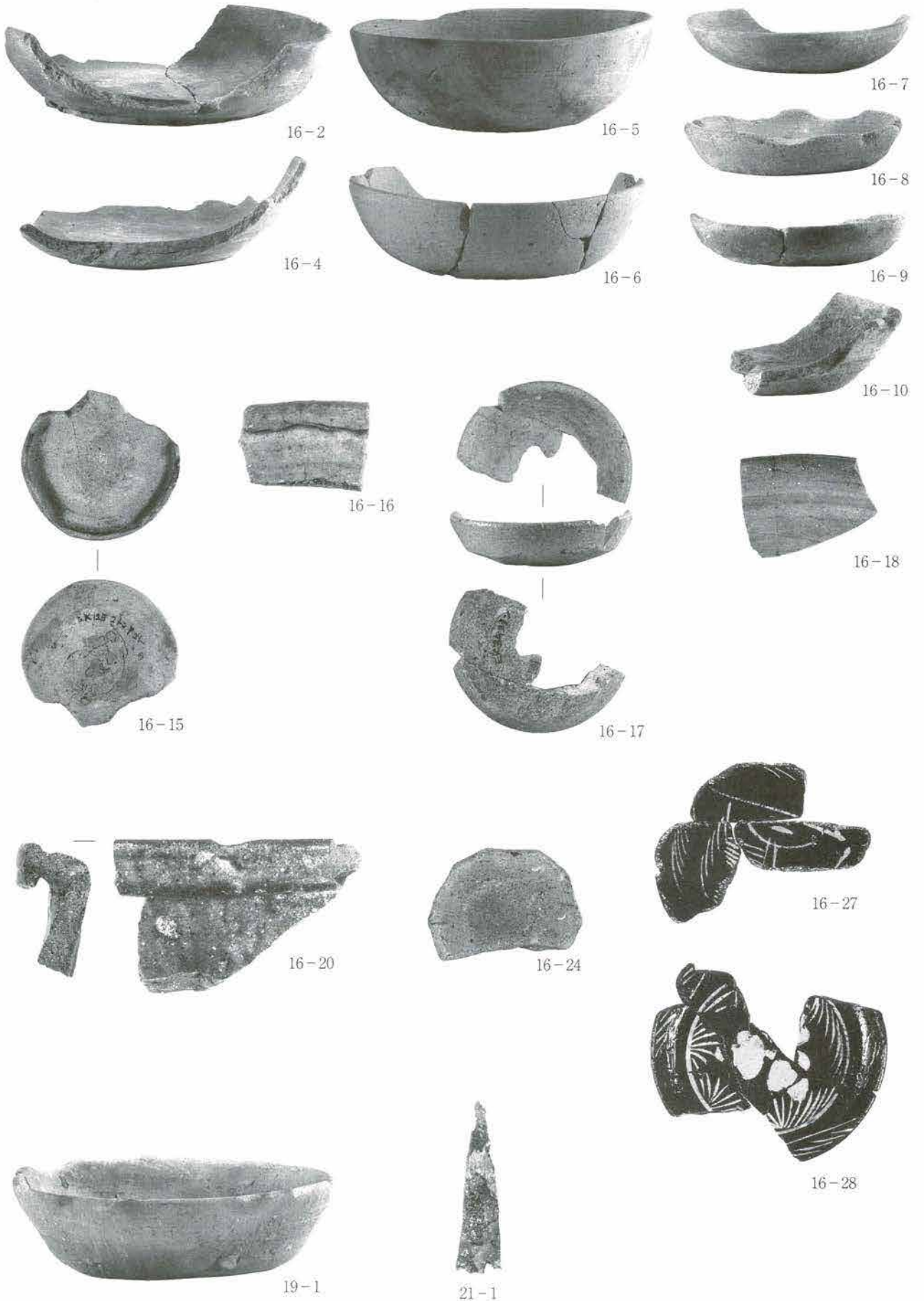
▲ B. 攪乱出土 墨書板 (西から)



出土遺物 (1)



出土遺物 (2)



出土遺物 (3)

ささめいせき
笹目遺跡 (No. 207)

笹目町423番2

例 言

1. 本報は鎌倉市笹目遺跡（鎌倉市No.207）の内、笹目町 423 番 2 地点における埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査期間は以下の通りである。
平成 17 年 12 月 1 日～平成 18 年 3 月 8 日
3. 調査体制は次の通りである。
担 当 者 齋木秀雄
調 査 員 鯉淵義紀、三ツ橋正夫
調査補助員 伊藤博邦、
調査参加者 （鎌倉市シルバー人材センター）
4. 本報告に関する資料整理は以下の体制で行った。
担 当 者 降矢順子
調 査 員 加藤千尋、伊藤博邦、岡田慶子、三浦恵、村松彩美
5. 本報告の執筆は、調査に関った齋木、鯉淵、三ツ橋の協力、資料提供を受けて降矢順子がおこない、齋木が補助した。
6. 本書に使用した遺構、遺物図版の縮尺は以下の通りである。
遺構全体図 1/120
個別遺構 1/30～1/80
遺構図の水糸高は、海拔を示す。
遺物実測は1/3、銭は1/1
7. 出土品、図面などの資料は、鎌倉市教育委員会が保管している。

本文目次

第1章 調査概観	191
第1節 調査地点の位置と歴史環境	191
第2節 周辺の調査	191
第3節 調査の経過と堆積土層	193
第4節 調査軸の設定	195
第2章 検出された遺構と出土遺物	196
第1節 1面の遺構と遺物	196
第2節 2面の遺構と遺物	200
第3節 3面の遺構と遺物	206
第4節 4面の遺構と遺物	211
第5節 4面下の調査	213
第3章 まとめ	215
第1節 基壇遺構	215
第2節 遺構の変遷と年代	215
第3節 調査地点の性格	216

挿図目次

図1 調査地点周辺図	192	図10 2面出土遺物(1)	205
図2 堆積土層図	193	図11 2面出土遺物(2)	206
図3 調査軸設定図	194	図12 3面全体図	207
図4 1面全体図	197	図13 基壇遺構	208
図5 1面検出遺構	198	図14 3面検出遺構	209
図6 1面遺構・面出土遺物	199	図15 3面遺構・面出土遺物	210
図7 2面全体図	201	図16 4面全体図	212
図8 2面検出遺構	202	図17 4面検出遺構	213
図9 2面遺構出土遺物	204	図18 4面遺構・面出土遺物	214

表目次

遺物法量表1	217	遺物法量表4	220
遺物法量表2	218	遺物法量表5	221
遺物法量表3	219	遺物法量表6	222

写真図版目次

PL1	1. I区1面(北から) 2. I区2面(北から) 3. I区3面(南から) 4. I区遺構 2 5. II区1面・近代柱穴列(北から) 6. II区2面(北から) 7. イヌ埋葬2 8. イヌ埋葬3……	225
PL2	1. II区基壇状遺構(南から) 2. 同、(南から) 3. 同、土丹積み(西から) 4. 同、鎌倉石据え方溝(西から) 5. 同、張り出し部(南から) 6. 同、張り出し部内側の礎石(北から) 7. 瀬戸小壺出土状況 8. I区北壁土層堆積 ……………	226
PL3	出土遺物(1) ……………	227
PL4	出土遺物(2) ……………	228

第1章 調査概観

第1節 調査地点の位置と歴史的環境

調査地点は鎌倉市笹目町 423 番 2 にあり、鎌倉市の笹目遺跡 (No. 207) 範囲内に含まれる。笹目遺跡は北が鎌倉市立御成中学校に向かう道路から笹目ヶ谷の山裾、西が吉屋信子記念館辺り、東が御成中学校下から長谷小路に向かう道路、南が長谷小路までの範囲を含んでいる。大まかには、笹目ヶ谷の中とその前面の長谷小路までの範囲である。

現況に沿って説明をくわえる。由比ガ浜の六地藏前の変則的な交差点から、カトリック由比ガ浜教会に向かう道路に入り西に向かうと、鎌倉税務署裏から御成中学校下を通過して真直ぐに南に進み、若宮大路下馬交差点から長谷観音に向かう国道 134 号線に至る道路 (以下、国道に向かう道路という。) と交差する。ここを直進すると、すぐに道路は右手の「笹目ヶ谷」東側丘陵端部に沿うように西南にむかって曲がり、笹目ヶ谷中央を走る道路に合流する。調査地点はこの丘陵端部の東側で道路の北側に位置して、敷地は道路に面している。本来の笹目ヶ谷内ではなく、谷の東側尾根の東にあたる。本地点からの方角は、六地藏が東、鎌倉税務署が北、国道 134 号 (若宮大路下馬から長谷観音に向かう道路) が南、笹目ヶ谷が西になる。したがって、鎌倉市立御成小学校は本地点の北西にあたる。

遺跡名に使用されている笹目あるいは佐々目という地名は、『吾妻鏡』にもたびたび記述が見られるので古くからの名称であるが、記述からは煩雑な町屋地域を想像するのは難しい。初期には北条経時 (1226-46) の墓所あるいはそれに伴う寺院があり、長楽寺や遺身院もこの谷にあったとされる。長楽寺は佐々目の長楽寺谷にあったと伝わっているが、現在乱橋材木座、長谷、坂ノ下に長楽寺の字名が残っている。

長谷の甘縄神明社辺りから御成の無量寺ガ谷前辺りまでが「甘縄」であったと考えられるので、どうも本来の佐々目は谷の内部に限られていたようである。これは佐助ヶ谷、無量寺ガ谷なども同様である。また、佐々目谷の内部に長楽寺谷 (おそらく支谷) があることは他の谷でも確認できるので、不思議ではない。

第2節 周辺の調査

本遺跡範囲内では幾つかの地点で発掘調査が実施されているが、多くは同一遺跡範囲内とはいえ、本地点西の尾根を越えた谷、本来の笹目ヶ谷内の調査である。したがって、本地点との関連は薄い可能性が高い。

本節では、東に接する今小路西遺跡 (鎌倉市 No. 201) の調査地点を含めて、周辺の調査状況を説明する。まず遺跡範囲内の地点 2 は、国道に向かう道路と本地点南側の道路が交差する南西角に位置する。調査では、東西方向の道路が確認され、その南側から方形竪穴建物や土坑が多く確認されている。道路は数回にわたり造成されている。最終的な路面レベルは 9.70m 前後である。堆積している土層は、やや砂質を帯びているが、小さな土丹を含む茶褐色ないし暗褐色の粘質土である。道路は笹目ヶ谷から六地藏方向に向かっている。

次いで、本地点の北東 50m ほどの調査 3 は、国道に向かう道路に面した敷地内に位置する。調査で

は、南北方向の道路らしき版築面が確認されている。報文では、道路と言及していないが、掲示されている図面・写真等を見ると、この版築は数回にわたって造成された道路であろう。最終的な路面レベルは9.90m前後である。堆積している土層は暗褐色の土丹を含む粘質土で砂層ではない。現在の南北方向の道路に沿っているが、地点2では確認されていない。

遺跡は異なり今小路周辺遺跡範囲内になるが、本地点南の道路を国道に向かう道路を越えて東に60mほど進んだ南に位置する地点4では海拔8.10mから8.70mの間に3枚の生活面が確認されている。現地

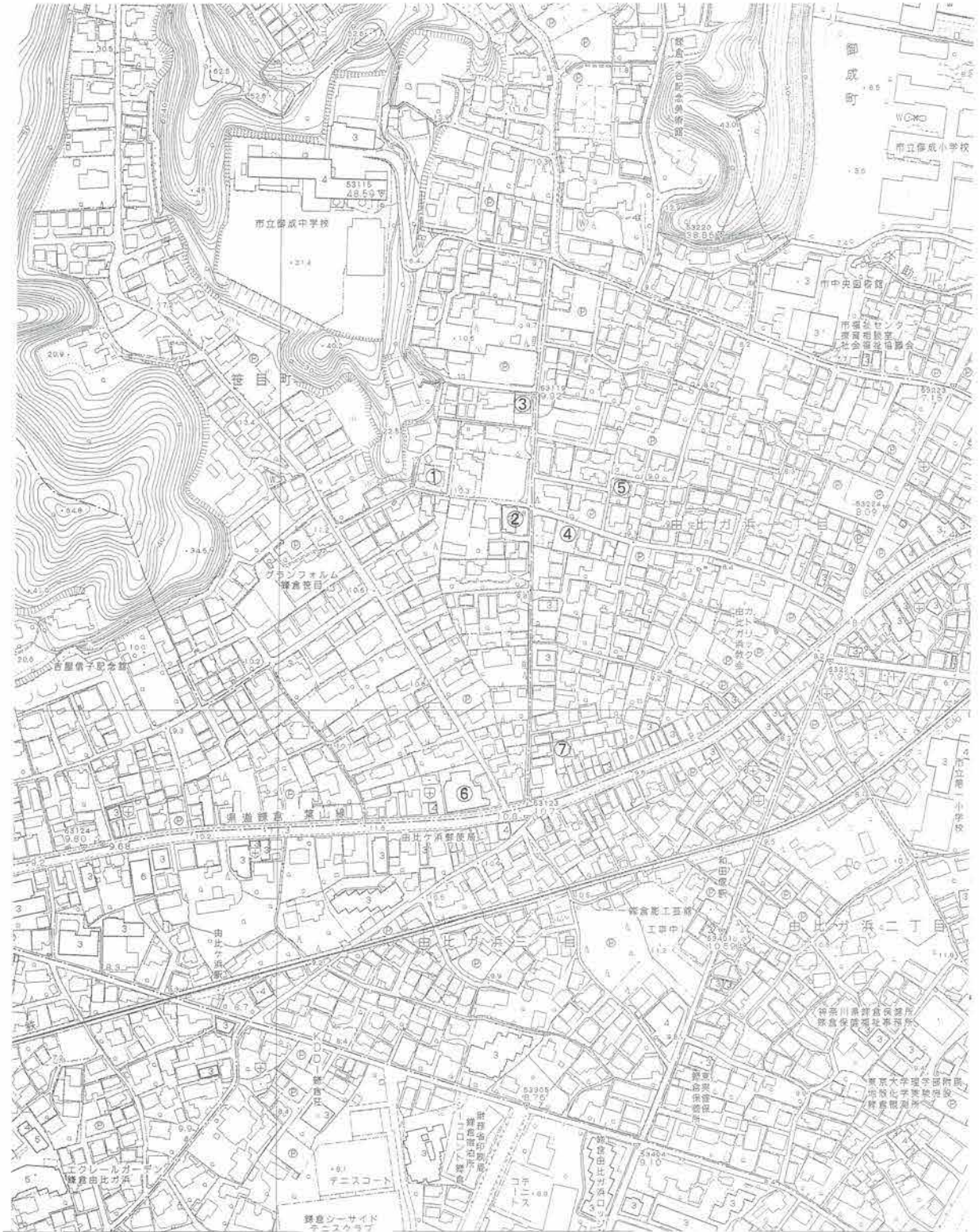


図1 調査地点周辺図

表面のレベルは9.50m前後で、堆積土の殆どは暗褐色砂層に土丹や炭化物が混じったものである。小面積の調査のため遺構は明確では無いが、方形堅穴建物が中心のようである。同じく今小路周辺遺跡内の地点5は、地点4の北30mに位置している。未報告であるが、調査では海拔7.90mで中世基盤層の黒褐色砂質土が確認されている。遺構は方形堅穴建物や土坑が中心である。また、国道に向かう道路が国道と交差する南側と北西で調査が行なわれている。前者（地点6）は笹目ヶ谷遺跡に、後者（地点7）は今小路西遺跡に含まれる。地点6は中世基盤層がかなり深い位置で確認され、方形堅穴建物や井戸などが確認されている。地点7は2009年の調査で方形堅穴建物が多く確認され、古墳時代の土器片もややまとまって出土している。

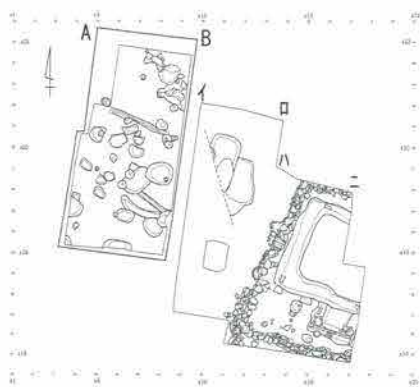
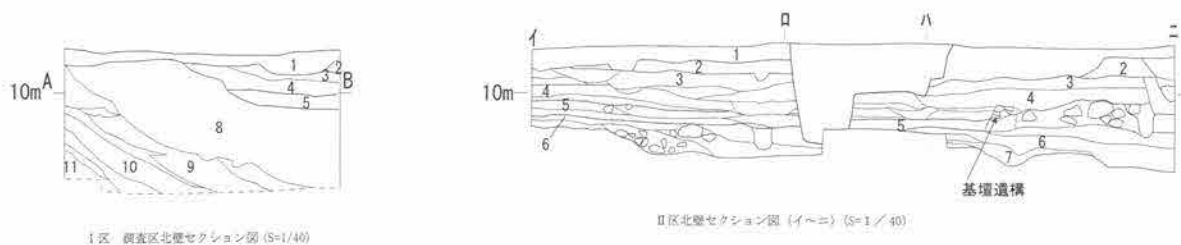
以上のように、調査地点周辺の調査件数は少なく、中世の様相を知ることは難しい。しかし、道路があり方形堅穴建物が多く立ち並ぶ空間であったことは確かである。

第3節 調査の経過と堆積土層

調査は個人住宅の建設に伴う事前調査として、調査を行った。調査では現地表から40cm前後を重機によって掘削し、以下を人力で掘り下げて遺構確認を行っていった。

調査にあたっては、表土・調査発生土を敷地内で処理したため、対象面積を1回で掘削する事が困難であった。そのため、対象面積を2分割して調査を行なった。便宜的に、最初に調査した部分をI区、次いで調査した部分をII区としている。また、I区を埋めた発生土が崩落する危険性も考えられたので2分割した調査区間にはベルト状の未調査区を残した。

I区では、現地表下30～40cm（1面）、同70～90cm（2面）、同80～100cm（3面）で確認した版築や土層変化を面として捉えた。1面は近世耕作土（第2層）に削平された中世遺物包含層であり、正確には生活面ではなく、削平された包含層である。2面は比較的小さな土丹を版築した良好な生活面である。3面は削平した岩盤面にあわせて版築された生活面である。3面以下では生活面らしき土層変化な



主要土層説明

- 1層 表土
- 2層 茶褐色砂質土（近世耕作土）
- 3層 暗褐色土 中世遺物包含層（上部が1面）
- 4層 暗褐色土 土丹を多く含む弱い版築面。（上部が2面）
- 5層 暗褐色土 細かい土丹を多く含む版築層。（上部が3面）
- 6層 灰茶褐色粘質土 細かい土丹を少量含む。（上部が4面）
- 7層 黒褐色粘質土 中世地山に類似。
- 8層 明茶褐色砂質土 30cm大の土丹を密に含む。
- 9層 明茶褐色土 土丹が少ない。
- 10層 明茶褐色砂質土
- 11層 岩盤

図2 堆積土層図



図3 調査軸設定図 (200分の1)

どは確認できなかった。また、3面以下の岩盤斜面に人工的な加工痕跡は確認できなかった。Ⅱ区では、現地表下50cm(1面)、同80cm(2面)、同100cm(3面)、同120cm(4面)で確認した版築や土層変化を面として捉えた。4面以外はⅠ区と同一面である。

第4層以下の堆積土には炭化物や遺物片は全く含まれていないので、第4層以下は自然堆積の土層と思われる。これらの土層は調査区西のⅠ区から東のⅡ区に向かって下がる堆積である。まず、Ⅱ区の4面が営まれ、次いでⅠ区の岩盤を削平して面積を広げた3面が造成され、その後2面、1面に引き継がれたと推定できる。

第7層は鎌倉市街地で中世地山とされている土層に類似している。ちなみに、本地点の東に位置する地点4では、黄褐色砂層が中世の基盤層である。本地点の第7層は東に向かって大きく落ち込み、その

上に海岸からの砂層が堆積したのであろう。本地点と地点4の間にある、鎌倉市立御成中学校下から長谷観音に向かう大通りに至る道路は、古墳時代以前に流れていた佐助川の流路と考えられている。現在の佐助川は御成中学校の下で東に流れを変えている。

第1層 表土・造成土

第2層 近世耕作土。

第3層 遺構覆土・生活面

1面 10.40m～10.60m

2面 10.0m～10.10m

3面 9.80m～10.0m (I区は削平岩盤面)

4面 9.60m

第7層 黒褐色粘質土。

第8層 大型土丹層。

第9.10層 茶褐色砂質土。

第11層 岩盤

第4節 調査軸の設定

調査測量に当たっては、国家座標系に基づいた測量軸を設定し、主に光波測距儀を用いて平面図の作図に当たった。図3中、小文字の「x・y」で表記したものは現地調査時に使用した座標値で、本報告ではこれを用いて記載を進める。()内に大文字の「X・Y」で記した数値は旧測地系の国土座標値である。図中には示していないが、国土座標値は鎌倉市4級基準点「D269」と「D270」2点間の関係から、開放トラバース測量によって算出した。

なお、世界測地系の座標値については、国土地理院が公開する座標変換ソフト「Web版TKY2JGD」によって任意2点の値を算出して図中に記した。

参考文献

田代郁夫・松山敬一郎他「2. 笹目遺跡 (No.207) 笹目町302番5地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書11』第1分冊 平成7年(1995)3月 鎌倉市教育委員会

田代郁夫「10. 笹目遺跡 (No.207) 笹目町425番1外地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書10』第2分冊 平成6年(1994)3月 鎌倉市教育委員会

降矢順子・齋木秀雄『今小路西遺跡発掘調査報告書—由比ガ浜1丁目197-2外地点—』2007年3月 有限会社鎌倉遺跡調査会

第2章 検出された遺構と遺物

本章では、検出された遺構と遺物について説明を加える。なお、遺構の説明にあたっては遺物が出土している遺構を優先したが、図示できる遺物の出土している遺構が少ないため、形状のわかる遺構については幾つか説明を加えた。

第1節 1面の遺構と遺物

1面は表土下30cm～50cm、標高10.40～10.60mで検出された。1面はI区、II区ともに近世耕作土に削平された面で、正確には版築面ではなく削平された包含層である。したがって、検出した遺構は上層からの掘り込みである。1面で検出した遺構は、I区では柱穴、土坑と溝状に掘り窪めて底に角材を据えている性格不明の遺構で、II区では土坑と柱穴が確認されている。

遺構1

I区北側のx23～24、y7で検出した土坑である。平面形は円形で、確認規模は東西77cm、南北83cm、深さ18cm、底面レベル10.01mを測る。出土遺物は2点が図示できた。図6-1、2は糸切りかわらけ皿で、1は大皿、2は小皿。1は器高が低く緩やかな丸みを持ち薄手。

遺構2

I区中央付近の西寄りで検出した溝状土坑内に角材を据えた遺構である。土坑は長さ215cm、上幅38cm、深さ32cmを測り、底面に長さ193cm、幅15cmの角材が土坑の長軸に沿って据えてある。この角材は中央部分と両端近くの3箇所に柄柱状の柱が残っている。中央は直立し、両端の柱は中央の柱を支えるような角度である。構築年代は、木材の遺存状況から近代と考えられるが、類似遺構は目にしたことがない。洗濯物を干す柱の一方とも考えられる。

出土遺物は2点が図示できたが、いずれも本遺構の年代を示す資料では無い。図6-3、4は糸切りかわらけ小皿で、3は口縁部にススが付着し灯明皿としての使用痕跡が残る。

遺構3

I区南東部の壁際で検出した土坑である。一部が調査区外に延びているため、全体規模は確認できない。平面形は円形と推測できる。確認規模は南北77cm、東西(60cm)、深さ26cm、底面レベル9.99mを測る。出土遺物は1点が図示できた。図6-5は糸切りかわらけ小皿。

遺構4

I区の遺構3の北で検出した土坑である。一部が調査区外に延びて、南側で遺構プランが不明瞭になる。中央にやや大きな土丹があるが、礎石とは断定できない。平面形は円形と推測できる。確認規模は南北(72cm)、東西(40cm)、深さ12cm、底面レベル10.07mを測る。出土遺物は1点が図示できた。図6-6は糸切りかわらけ大皿で、口唇部がわずかに内側に屈曲する。

遺構5

I区の東壁際の遺構3の南で検出した柱穴状の遺構で、調査区外に延びている。平面形は円形と推測できる。径35cm、深さ11cm程度の規模である。出土遺物は1点が図示できた。図6-7は糸切りかわらけ小皿で、口唇部が内側に屈曲する。

遺構7

I区の南側のx16～17、y5～6で検出した土坑である。平面形は不整円形で、確認規模は東西

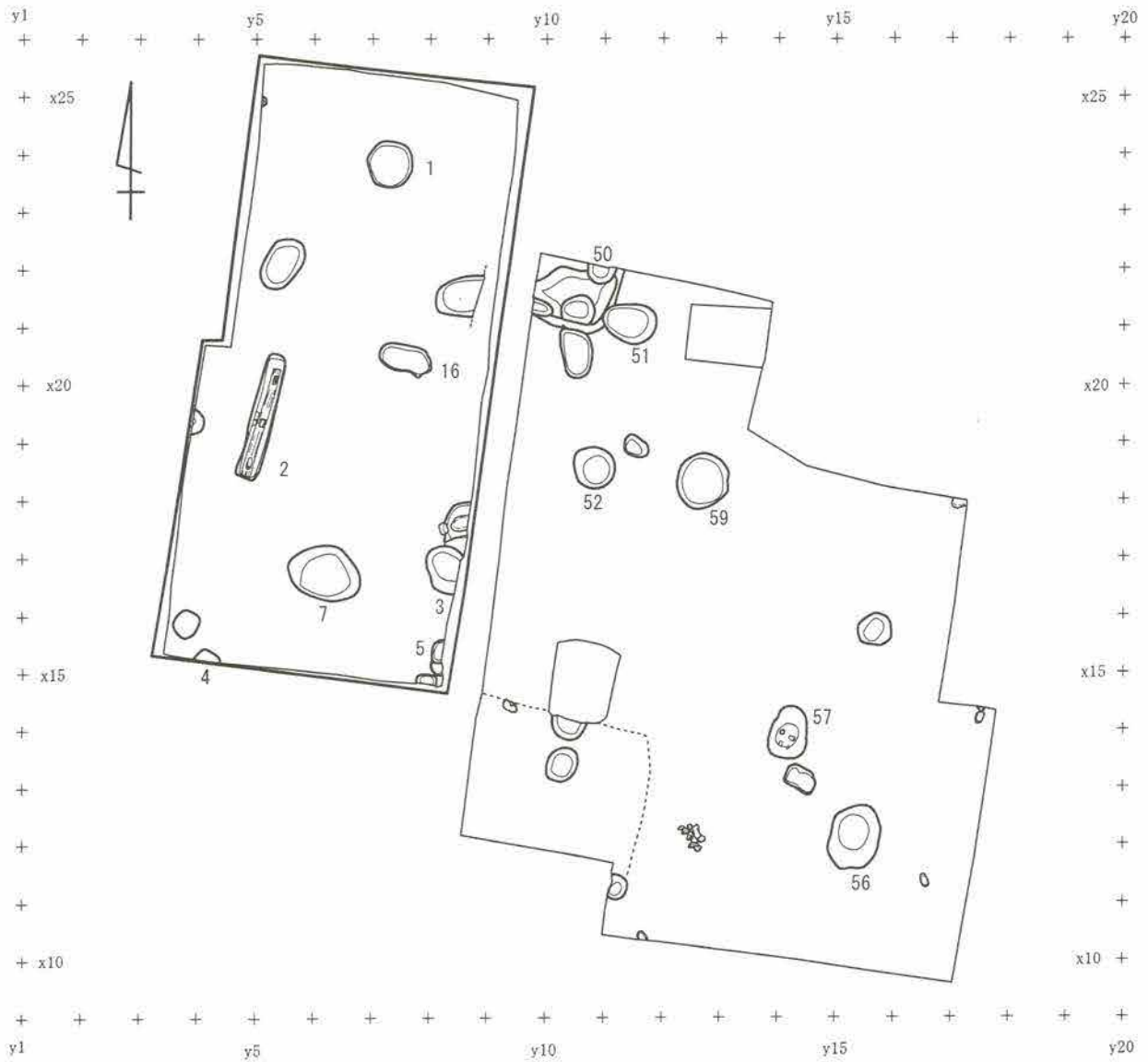


図4 1面全体図（120分の1）

130cm、南北98cm、深さ34cm、底面レベル9.9mを測る。出土遺物は2点が図示できた。図6-8,9は糸切りかわらけ皿で、8は小皿、9は大皿。8は薄手である。

遺構16

I区北側のx20、y8で検出した柱穴である。平面形は円形で径45cm、深さ25cmの規模を有す。底面に土丹が配されているが、礎石と断定はできない。出土遺物は1点が図示できた。煩雑ではあるが、図6-(2面の)10は糸切りかわらけ大皿。

遺構50

II区北西部のx21、y10で検出した土坑である。平面形は不整形でややかまぼこ型に近い。確認規模は長径57cm、短径47cm、深さ15cm、底面レベル9.96mを測る。

出土遺物は2点が図示できた。図6-11、12は糸切りかわらけで、11は小皿、12は大皿。

遺構 51

II区北西部のx20～21、y11で検出した土坑である。西側で以降62と切り合うが、新旧関係は明確に出来なかった。平面形は東西に長い楕円形で、確認規模は長軸45cm、南北34cm、深さ26cm、底面レベル9.89mを測る。

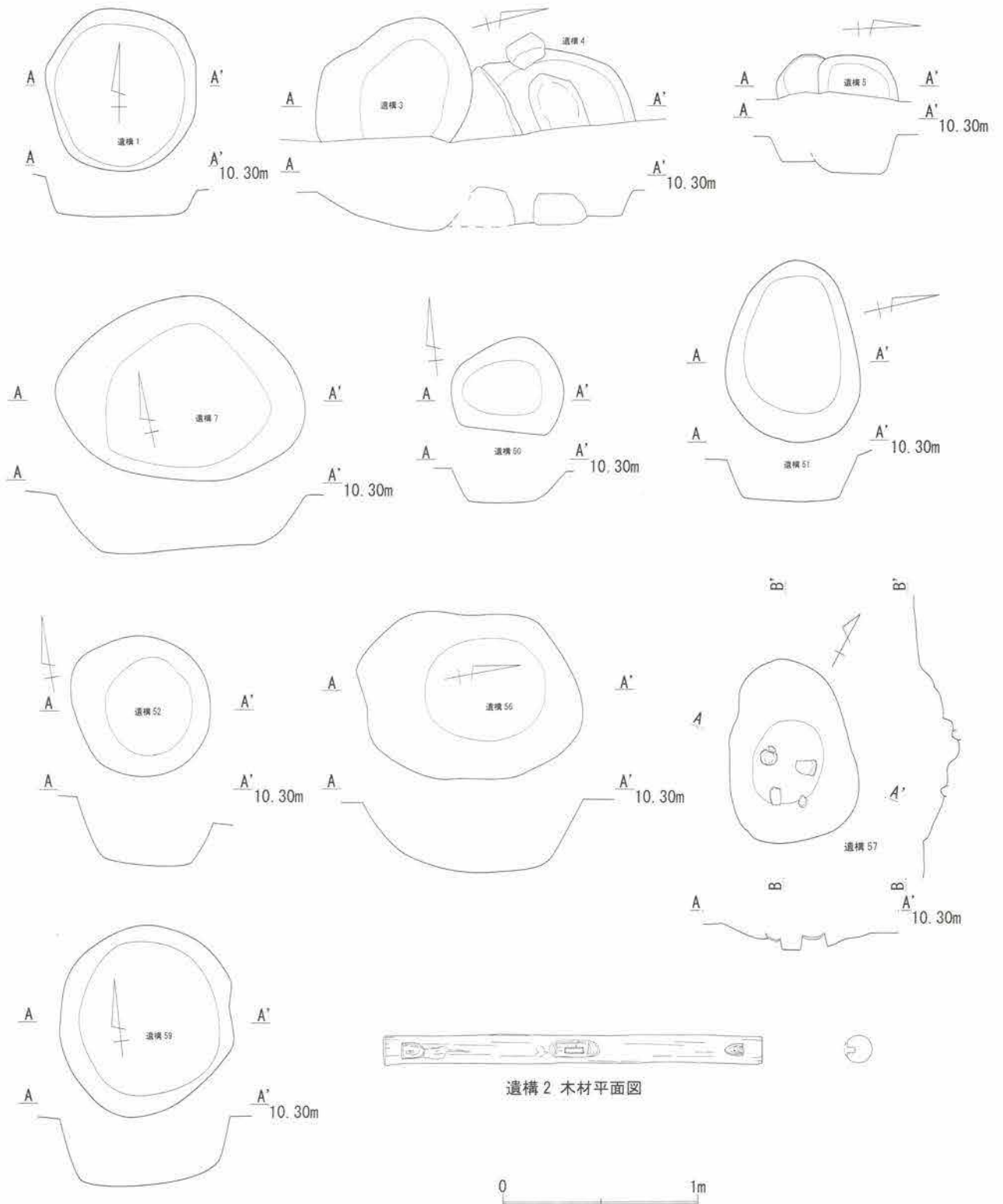


図5 1面検出遺構

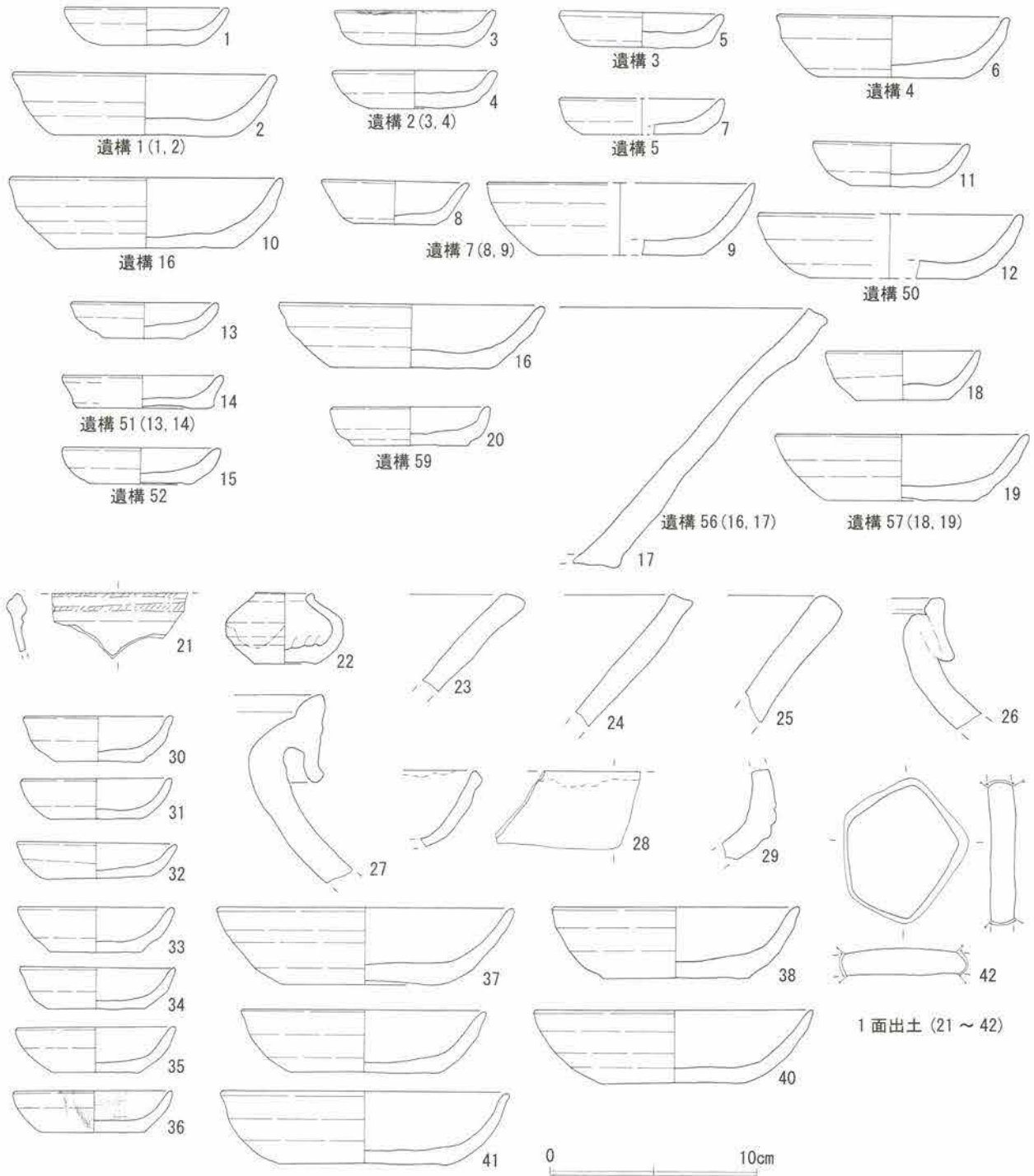


図6 1面遺構・面出土遺物

図6-13、14は糸切りかわらけ小皿で、14は底部から口縁部にかけて三角状に立ち上がり、口径と底径の差が少ない。

遺構 52

II区西側の x18、y10～11 で検出した土坑である。平面形は不整円形で、確認規模は長径 75cm、短径 70cm、深さ 33cm、底面レベル 9.86m を測る。

出土遺物は1点が図示できた。図6-15は糸切りかわらけ小皿。

遺構 56

II区南東部の x11～12、y15 で検出した南北にやや長い土坑である。平面形は長円形で、確認規模は

長径 112cm、短径 85cm、深さ 32cm、底面レベル 9.77m を測る。

出土遺物は 2 点が図示できた。図 6-16 は糸切りかわらけ大皿、17 は常滑窯の片口鉢口縁部から底部でⅡ類-9。

遺構 57

Ⅱ区北西部、遺構 51 の南で検出した不整形で浅い落ち込みである。調査時点で番号を附したが、遺構としては不自然さも残るため図は提示しなかった。人為的な遺構ではない可能性が高い。

図 6-18、19 は糸切りかわらけで、18 は小皿、19 は大皿。18 は薄いつくりで側壁は内湾気味に立ち上がる。

遺構 59

Ⅱ区北側の x17～18、y12 で検出した土坑である。平面形は円形で、確認規模は長径 97cm、短径 90cm、深さ 35cm、底面レベル 9.76m を測る。

出土遺物は 1 点が図示できた。図 6-20 は糸切りかわらけ小皿で、底部から口縁にかけて丸味をもって立ち上がる。

I 面出土遺物

I 面の遺構群を調査中に出土した遺物をここに含めた。図 6-21～34 が I 面調査中に出土した遺物である。21 は舶載陶磁器で黄釉盤の口縁部。22 は瀬戸褐釉小壺の完形品、23 は常滑窯片口鉢口縁部でⅡ類、24 は常滑窯片口鉢口縁部でⅠ類、25 は土器質手焙りの口縁部、26・27 は常滑窯甕の口縁部、28 は瀬戸窯の卸皿の口縁から体部で中期Ⅲ類、29 は常滑窯の壺頸部から肩部にかけて、30～36 は糸切りかわらけ小皿で 30、33、34、35、36 は口縁部が内湾し、器高が高い。35 は内外面にススが付着し灯明皿としての使用痕跡がある。37～41 は糸切りかわらけ大皿。37、40～41 は口径が大きく薄手タイプ。42 は磨き陶片で 2 平面に磨き痕がある、常滑甕片の転用品。

第 2 節 2 面の遺構と遺物

I 区の削平岩盤面上に作られた薄い版築面とⅡ区の海拔 10.0m～10.10m で確認した薄い、部分的な土丹版築面を 2 面とした。Ⅱ区の版築は部分的で、所々で確認できなかった。2 面で検出した遺構は、I 区では柱穴・土坑とイヌの埋葬 2 体、Ⅱ区では土坑と北西部の遺物集中 (66) と南西部の性格不明の土丹版築面 (64)、イヌの埋葬 1 体で、整然とした遺構群ではない。

遺構 14

I 区北側の x22、y7 で検出した柱穴である。平面形は円形で径 35cm、深さ 13cm の規模を有する。これに対応する柱穴は確認できなかった。出土遺物は 1 点が図示できた。図 9-1 は糸切りかわらけ大皿。

遺構 20

I 区南側の x17、y6 で検出した土坑である。平面形はやや歪んだ円形で、確認規模は南北 72cm、東西 70cm、深さ 12cm、底面レベル 9.8m を測る。図示できる出土遺物はない。

遺構 27

I 区南西部で検出した柱穴である。平面形は円形で径 50cm、深さ 27cm、底面レベル 9.66m を測る。出土遺物は 1 点が図示できた。図 9-2 は糸切りかわらけ小皿。

遺構 63

Ⅱ区北西部の遺構 66 の上部、x19～20、y11～13 で検出した極めて浅い、不整形の土坑状落ち込みである。ここでは別遺構として扱っているが、遺構 66 内の土層変化あるいは遺物集中の可能性もある

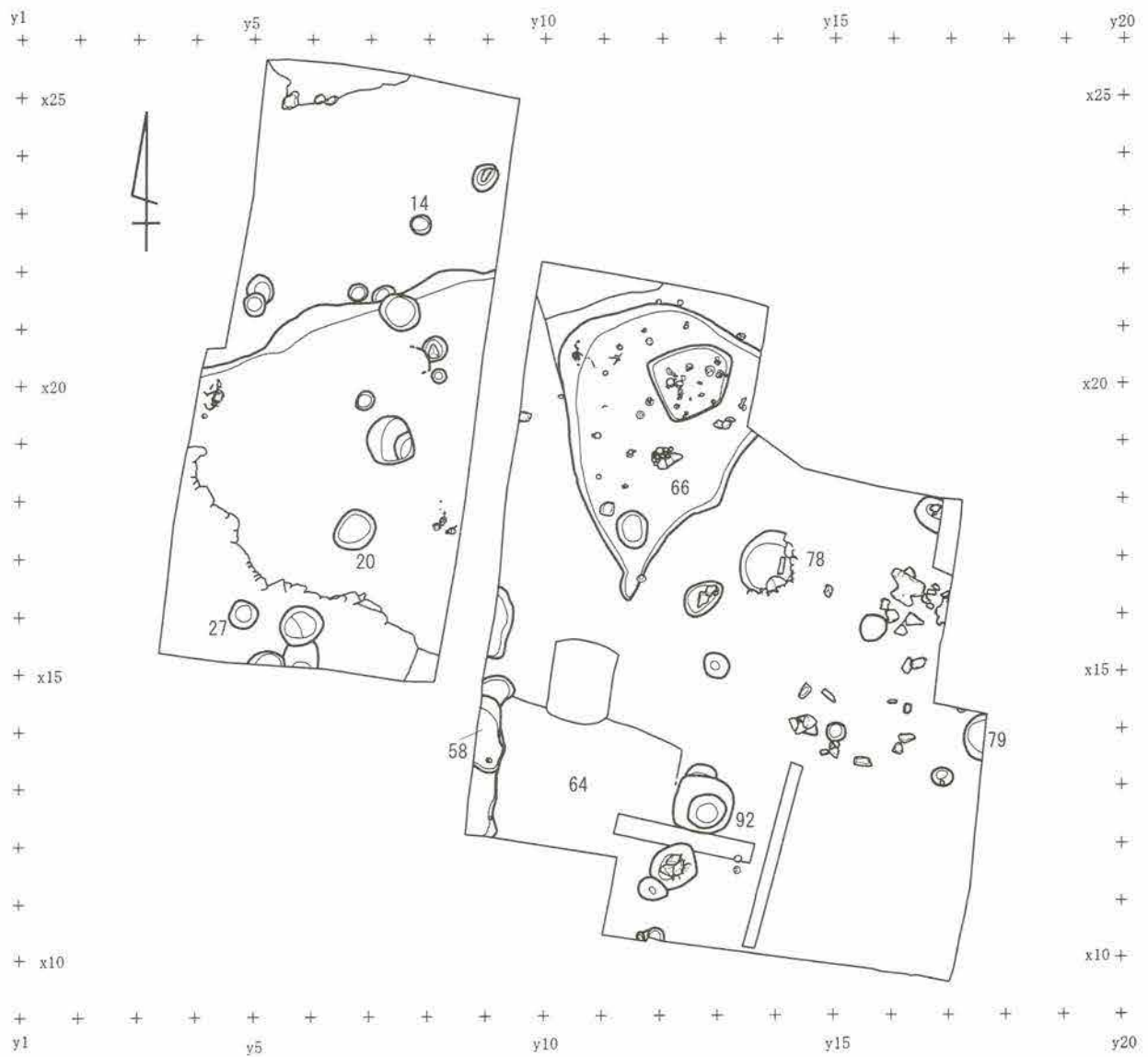


図7 2面全体図 (120分の1)

ことを記しておく。確認規模は長軸 140cm、短軸 120cm、深さ 3cm～5cm、底面レベル 9.85m を測る。

出土遺物は 6 点が図示できた。図 9-3 は常滑片口鉢口縁部でⅡ類、4 は瓦質火入れ口縁部から底部、5～8 は糸切りかわらけ小皿。

遺構 64

Ⅱ区南西部で検出した 10cm 大の土丹が集中する東西 300cm、南北 230cm の範囲に附した番号である。通路あるいは建物に付随する土間等が考えられるがいずれも確証はない。遺構の性格は掴めないが、調査中に附した番号であり、そのまま使用した。面上レベル 9.97m 前後を測る。

出土遺物は 1 点が図示できた。図 9-15 は常滑窯広口壺の口縁部。

遺構 66

II区北西部で検出した広く、浅い落ち込みである。落ち込み範囲は出土遺物を追求した結果、無意識の内に作られた可能性がある。そのため、平面図は提示しなかった。遺構としては版築面の弱い部分に作られた遺物集中の可能性が高い。また、遺物の検出中にイヌの埋葬体を確認している。新旧関係は確認できなかつた。埋葬体は、検出した骨から見ると、頭が西で背が北と考えられる。確認規模は南北500cm、東西310cm、深さ5cm～11cm、底面レベル9.87m～9.81mを測る。

出土遺物は24点が図示できた。図9-16～36は糸切りかわらけ皿。16～29は小皿で16は小型で器壁が薄い、17も器壁が薄く底部から口縁部に向かって緩やかな丸味をもち立ち上がる。30～36は大皿で、34～36は薄手タイプ。36は口縁部内外にススが付着し、灯明皿としての使用痕跡あり。37は常滑窯壺の胴部下、38、39は鉄製品の釘。

遺構 68

II区南壁際で検出した、径30cm、深さ25cmほどの柱穴であるが、多くは調査区外に延びる。出土遺

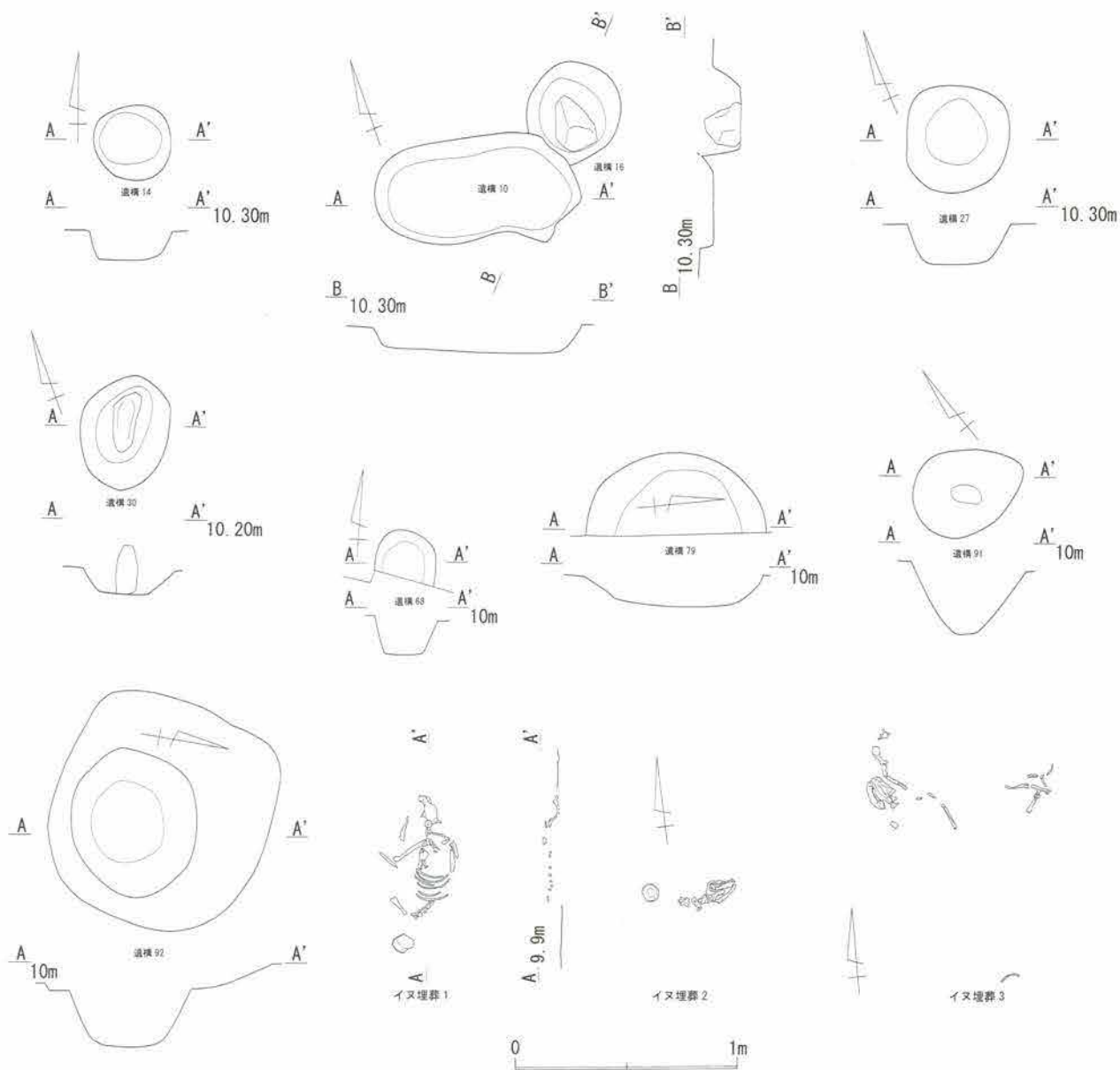


図8 2面検出遺構

物は2点が図示できた。図9-40は糸切りかわらけ小皿の薄手タイプ。41は打ち欠きかわらけ片。

遺構 76

Ⅱ区中央部のx16～17、y13～14で検出した土坑である。基壇遺構の西側の一部を壊して作られている。平面形は円形で、確認規模は東西114cm、南北115cm、深さ30cm、底面レベル9.62mを測る。

出土遺物は2点が図示できた。図9-42は常滑窯片口鉢の口縁部でⅡ類、43は常滑窯甕の口縁部で14世紀後半代。

遺構 78

Ⅱ区の中央部で検出した径40cm、深さ5cmほどの落ち込みである。遺構番号は附したが遺構の可能性は低いと判断した。平面図は提示しなかったが、遺構76の南東近くである。出土遺物は1点が図示できた。図9-44は糸切りかわらけ小皿で口唇部が内側に折れる。

遺構 79

Ⅱ区北東部の壁際で検出した土坑であるが、多くは調査区外に延びる。平面形は、残存部から円形と考えられる。確認規模は東西80cm、南北(37cm)、深さ14cm、底面レベル9.73mを測る。

出土遺物は1点が図示できた。図9-45は瀬戸窯入子で輪花型、外底面に糸切り痕が残る。

遺構 88

Ⅱ区西壁よりのx12～14、y8～9で検出した落ち込みであるが、殆どは西側調査区外にあるために全体形は不明。確認規模は南北(280cm)、東西(55cm)、深さ25cm、底面レベル9.7mを測る。南北に長い、溝状土坑とも考えられる。遺構64を壊している。

出土遺物は2点が図示できた。図9-46は瀬戸窯入子で碗型に近い、47は糸切りかわらけ中皿で薄手タイプ、口縁部内外にススが付着し灯明皿としての使用痕跡あり。

遺構 91

Ⅱ区南西部のx11、y11で検出した径50cm、深さ35cmの柱穴である。本遺構に対応する柱穴は確認できなかった。出土遺物は1点が図示できた。図9-48は常滑窯片口鉢の口縁部でⅡ類。

遺構 92

Ⅱ区南西部のx12、y12～13で検出した土坑である。平面形は円形で、確認規模は東西100cm、南北95cm、深さ80cm、底面レベル9.11mを測る。

出土遺物は3点が図示できた。図9-49は土器質手焙りの口縁部、50は滑石スタンプで楓文様が彫られている。51は鉄製品の釘で腐食が著しく原形を留めていない。

イヌ埋葬 1

I区西側のx19～20、y4で検出した。頭部、脊椎、肋骨、肢が部分的に確認できたが、土坑は確認できなかった。頭を北に、肢を西に向けた埋葬と考えられる。後肢近くでかわらけ皿の破片が見つまっているが、直接の関係はない。確認レベル10.07m前後。

イヌ埋葬 2

Ⅱ区のx12、y9～10で検出した。頭部及び脊椎の一部が確認できたが、土坑は確認できなかった。土丹層を掘り下げる時に確認されていること、多くの部位が確認できなかったことなどから、埋葬の可能性は低いと考えている。近くの埋葬遺構が壊されて投げ込まれたのかもしれない。確認レベル9.67m前後。近くから出土したかわらけ皿は面出土遺物に含めた。

イヌ埋葬 3

Ⅱ区北側の遺構66範囲内のx19～20、y10～11で検出した。埋葬されたものが、後世の攪乱等で頭部と肢骨が散乱したと考えられる。埋葬姿勢は不明で土坑は確認できなかった。確認レベル9.87m前後。

2面出土遺物

2面の遺構を検出中に出土した遺物、あるいは遺構番号は附したものの遺構と認定できなかった出土遺物をここに含めた。図10-52～図-124である。52～55は舶載陶磁器。52は龍泉窯青磁鎚蓮弁文碗の口縁部、53は緑釉洗の口縁部、54と55は青白磁花瓶の脚、56は瀬戸窯卸目皿の底部で中期Ⅱ、57は瀬戸窯褐釉天目碗の体部から底部、58は常滑窯片口鉢の口縁部でⅡ類、59は瀬戸窯片口鉢の口縁部、

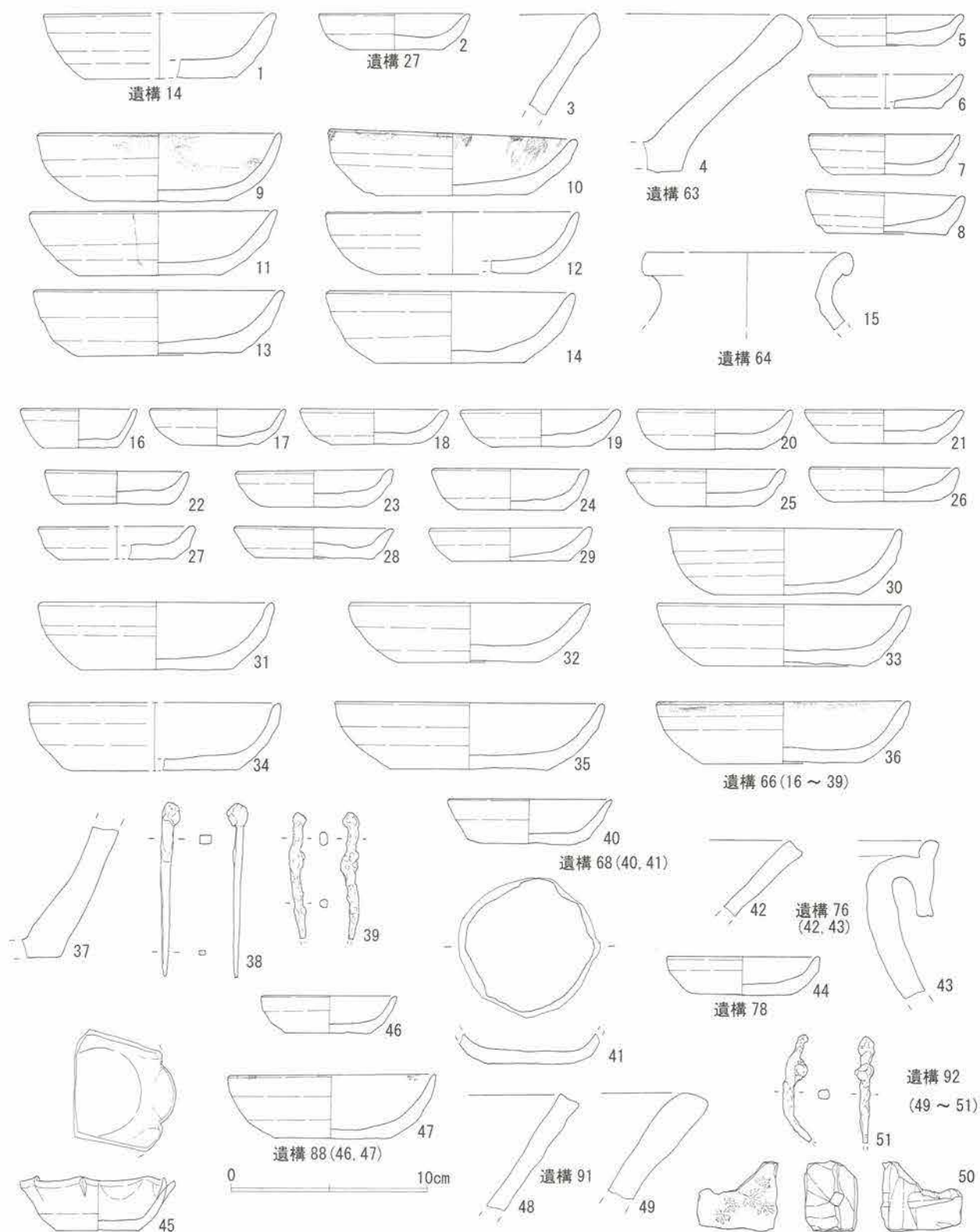


図9 2面遺構出土遺物

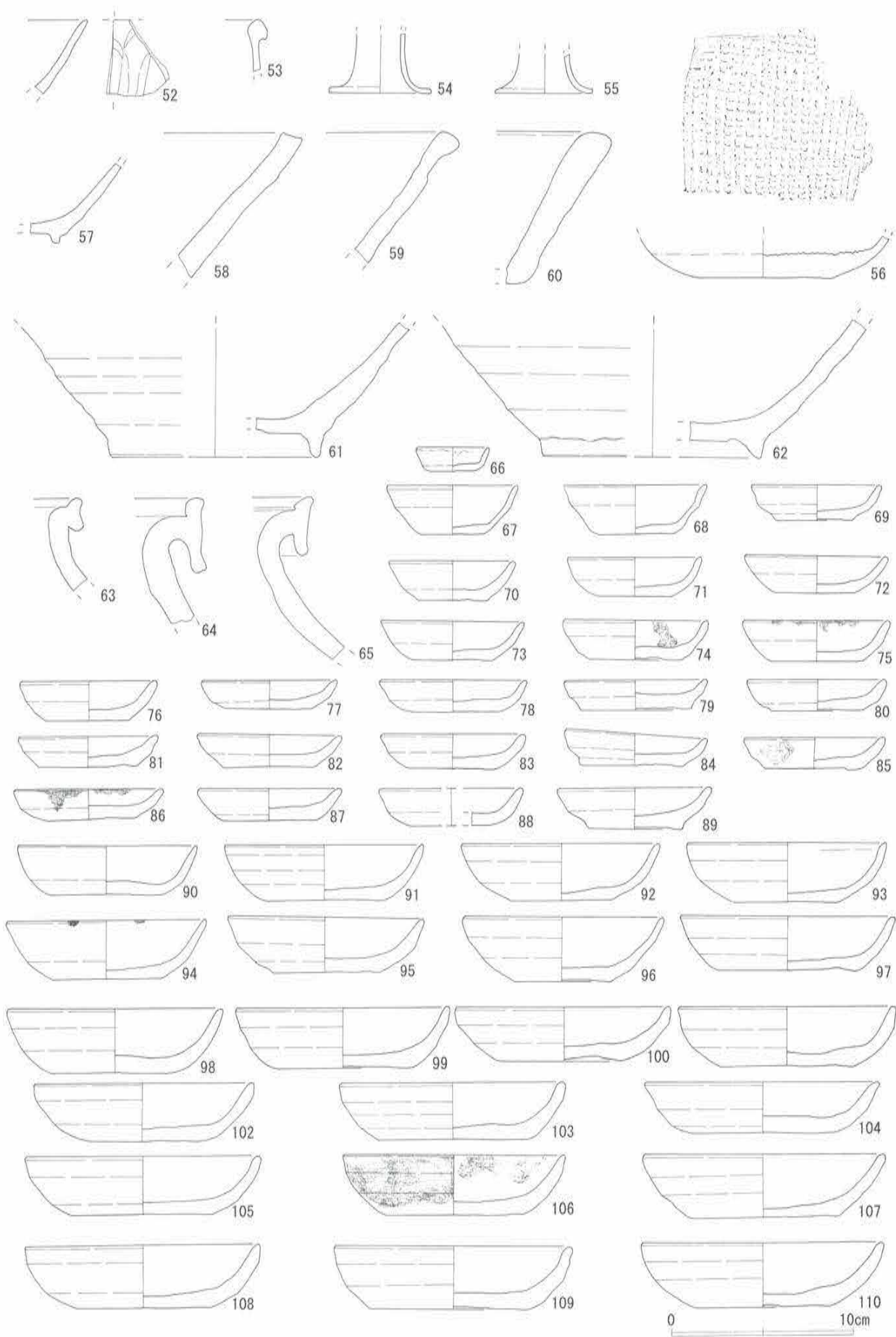


图 10 2 面出土遗物 (1)

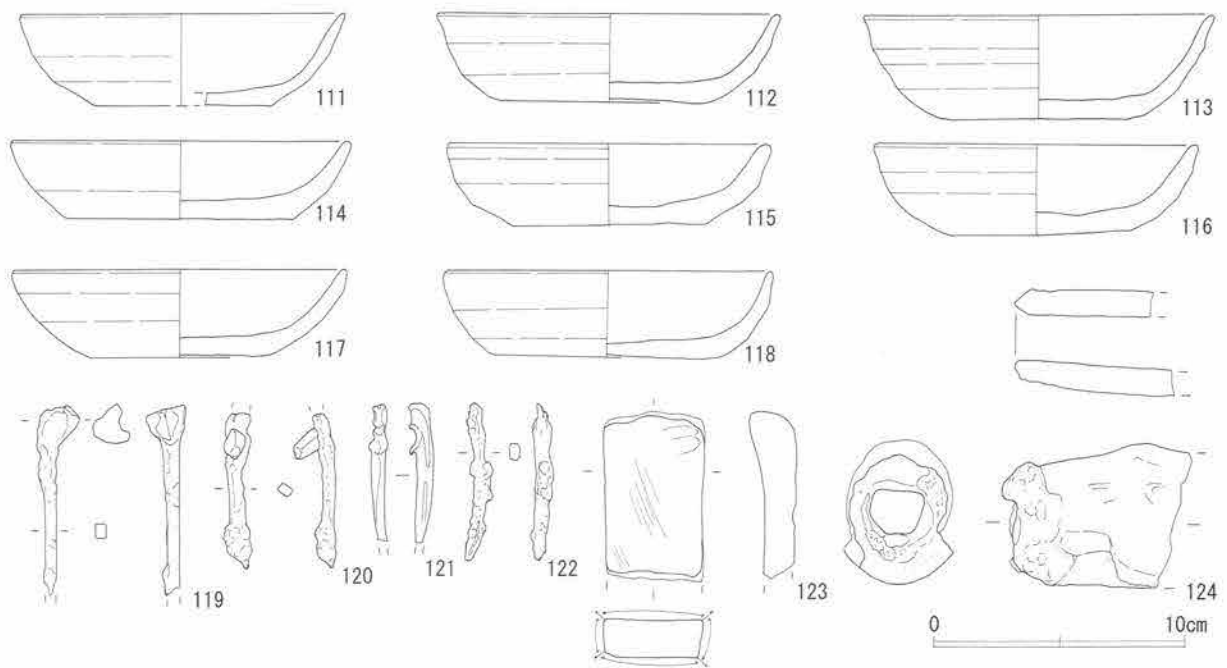


図 11 2面出土遺物(2)

60 は土器質手焙りの口縁部から底部、61 は山茶碗窯片口鉢の胴部から底部で 14 世紀代、62 は瀬戸窯片口鉢の胴部から底部で 14 世紀代。63 ～ 65 は常滑窯甕の口縁部で、63 は 13 世紀中頃、64 は 14 世紀代、65 は 13 世紀後半頃と思われる。66 は瀬戸窯入子で小型。67 ～ 118 は糸切りかわらけ皿、67 ～ 89 は小皿。67 ～ 75 は薄手タイプで、74、75 は器高が高い。72、73、85、86 は口縁部にススが付着し、灯明皿としての使用痕跡あり。90 は薄手糸切り中皿。91 ～ 118 は大皿で、92、93、94、96、97、111、112、113、117、118 は薄手タイプ。92、94、106 は口縁部及び内外面体部にススが付着し、灯明皿としての使用痕跡あり。119 ～ 122 は鉄製品の釘。123 は石製品の砥石で、石材は細粒泥岩、中砥石で産地は鳴滝である。124 は土製品の吸子。

第 3 節 3 面の遺構と遺物

I 区の削平岩盤面と、II 区の海拔 9.80m ～ 10.0m で確認した薄い版築面を 3 面とした。II 区の薄い版築面は、I 区の削平岩盤面の高さに合わせて造成している。I 区の削平岩盤面では柱穴、土坑、溝などが検出され、II 区では、調査区東側で基壇遺構を検出している。II 区の西半分では不明瞭な落ち込みが幾つか確認されているが、これらは番号を附して遺物を取り上げたものの、明確な遺構と断定できないでいる。

基壇遺構

調査時点では、遺構の全体像復元を誤り、各部分に幾つかの番号を附した。しかし本遺構は、土丹積み石垣で方形の基壇状区画を造り、その上に鎌倉石を使用した建物が造られていると考えた。鎌倉石の多くは後世に持ち去られているが、建物外周の鎌倉石は横位で立てて使用しているのが特徴である。建物は南側に入口状の張り出しを持っている。全体の規模は、本遺構の約半分が調査区外に延びているため不明。おそらく、鎌倉でもあまり例のない遺構であるため、復元が間違っている可能性もある。

各部分に付けた遺構番号では、遺構 65 が横位の鎌倉石で囲まれた内陣の主体部、遺構 83 と遺構 84

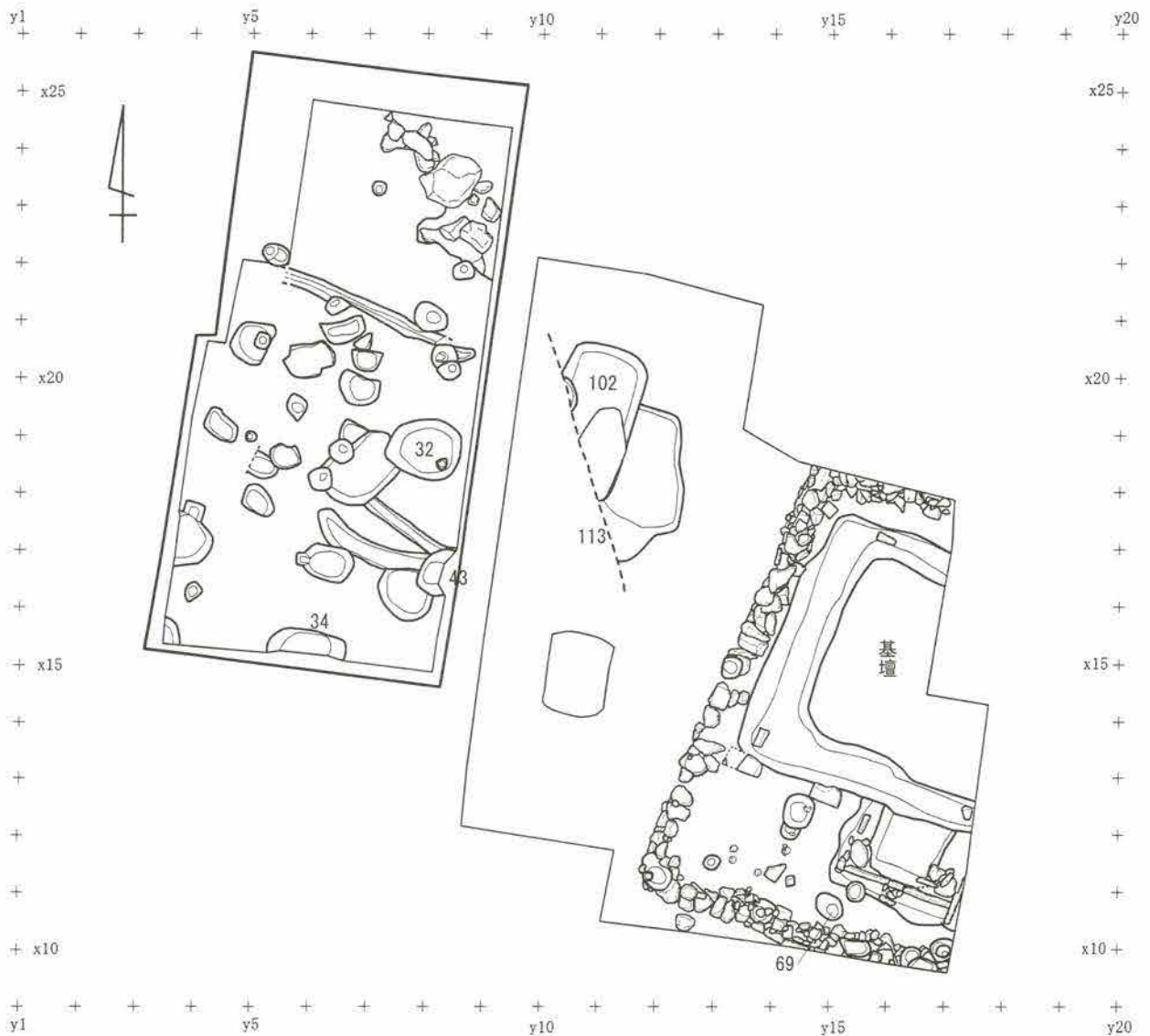


図 12 3面全体図 (120分の1)

は内陣内で検出した柱穴、遺構 67 は入り口部、遺構 75、90 は主体部外周に鎌倉石を据えたと考えられる掘り方、遺構 69、遺構 99、遺構 100、遺構 103、遺構 107、遺構 71 は基壇上で検出した柱穴。遺構 114 は西側土丹積み外の溝、遺構 111、遺構 108、遺構 72、遺構 70A・B、遺構 94 は土丹積み近くの柱穴、遺構 76 は西外の柱穴。

土丹積みは3～4段で積み上げられ、確認規模は長さ7.30m高さ30m、上面レベル9.87m前後、軸方向を測る。調査区の北壁、南壁際で土丹積みが東方向に曲がっているようにも見えるので、土丹積みで区画された基壇の大きさは8.50m～9mの方形であったと推定できる。

建物は鎌倉石を横位に立てて区画された内側に在ったと考えている。鎌倉石は失われて掘り方の溝が

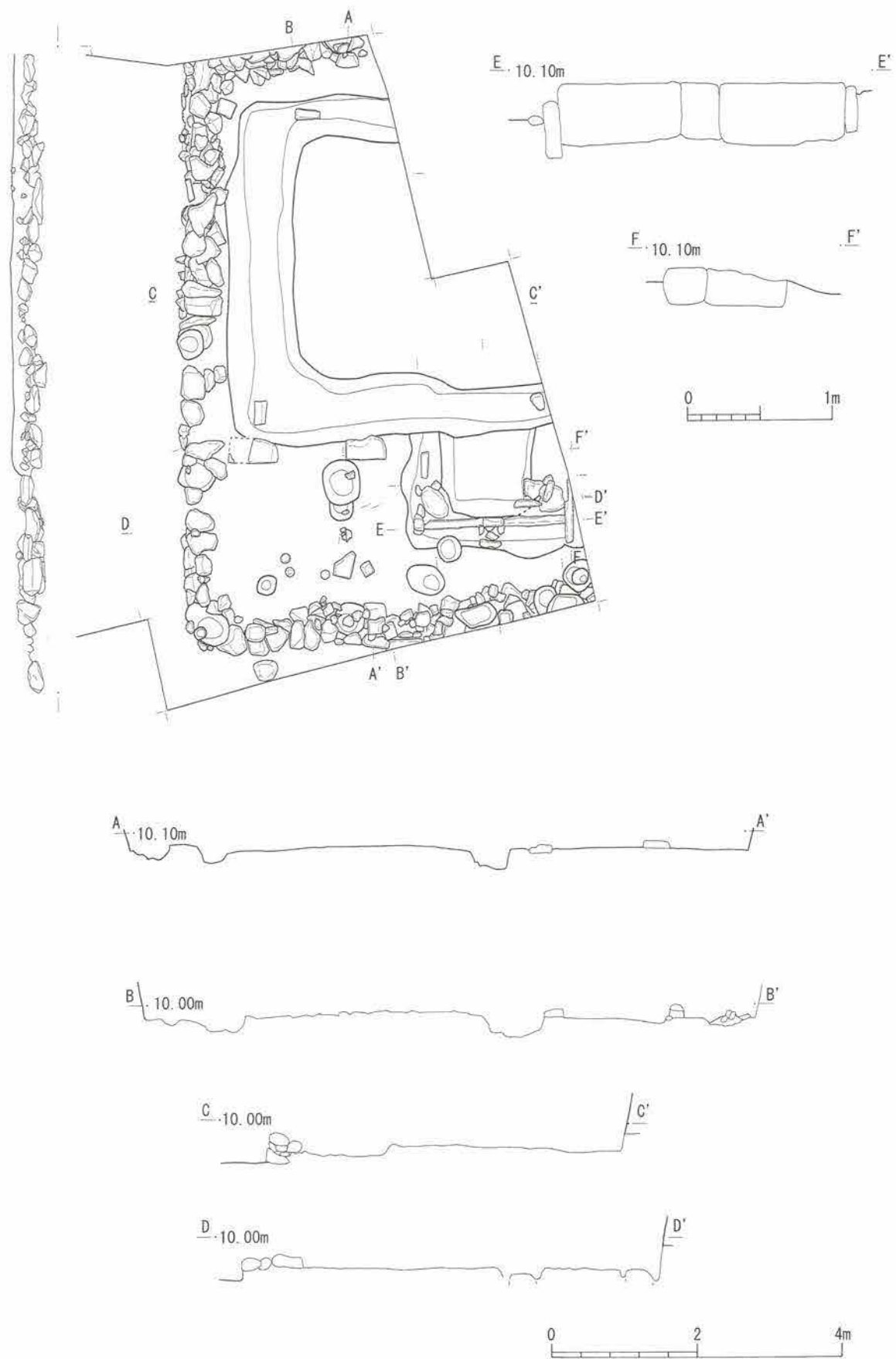


图 13 基壇遺構

確認されている。溝は幅 55cm ~ 75cm、深さ 18cm ~ 35cm、軸方向を測る。掘り方溝で区画された空間を復元すると、西側では長さ 380cm 程が、南側では 395cm が確認されている。仮に張り出し部（入口）の中心線で左右対称の空間を想定すれば、南北 380cm、東西 640cm となる。この掘り方から外側から 60cm（石の外側の面）離れて、平たく置かれている鎌倉石が南側で 2 石確認できた。直線的に敷き並べて在った痕跡は確認できなかった。確認した 2 石は中心で 150cm ~ 160cm 離れている。

張り出し部は、掘り方溝の南壁から 150cm 離れて横位に立てられた鎌倉石の南面があり、東西は石の外側で 218cm を測る。南西及び南東の隅には径◎ cm の柱穴が掘られ、底面に◎大の礎石が据えられている。基壇上の柱穴で礎石が確認されたのはこの 2 箇所だけである。

図 15-9, 10 は糸切りかわらけ小皿、11 は打ち欠きかわらけ片。共に掘り方溝の出土である。

遺構 32

I 区中央付近の x19 ~ 20、y7 ~ 8 で検出した土坑である。底面の東側の一部が深くなっているが、これは下層の土層変化である。平面形は不整形円形で、確認規模は南北 105cm、東西 132cm、深さ 28cm を測る。底面レベルは 9.51m で岩盤を掘り込んでいる。図 15-1、2 は糸切りかわらけの大皿。

遺構 34

I 区南壁際で検出した土坑である。半分以上が南壁外に延びている。平面形は不明であるが、確認規模は南北 (40) cm、東西 135cm、深さ 38cm を測る。底面レベルは 9.28m で岩盤を掘り込んでいる。図 15-3 ~ 6 は糸切りかわらけ皿で、3、4 は小皿、5、6 は大皿。

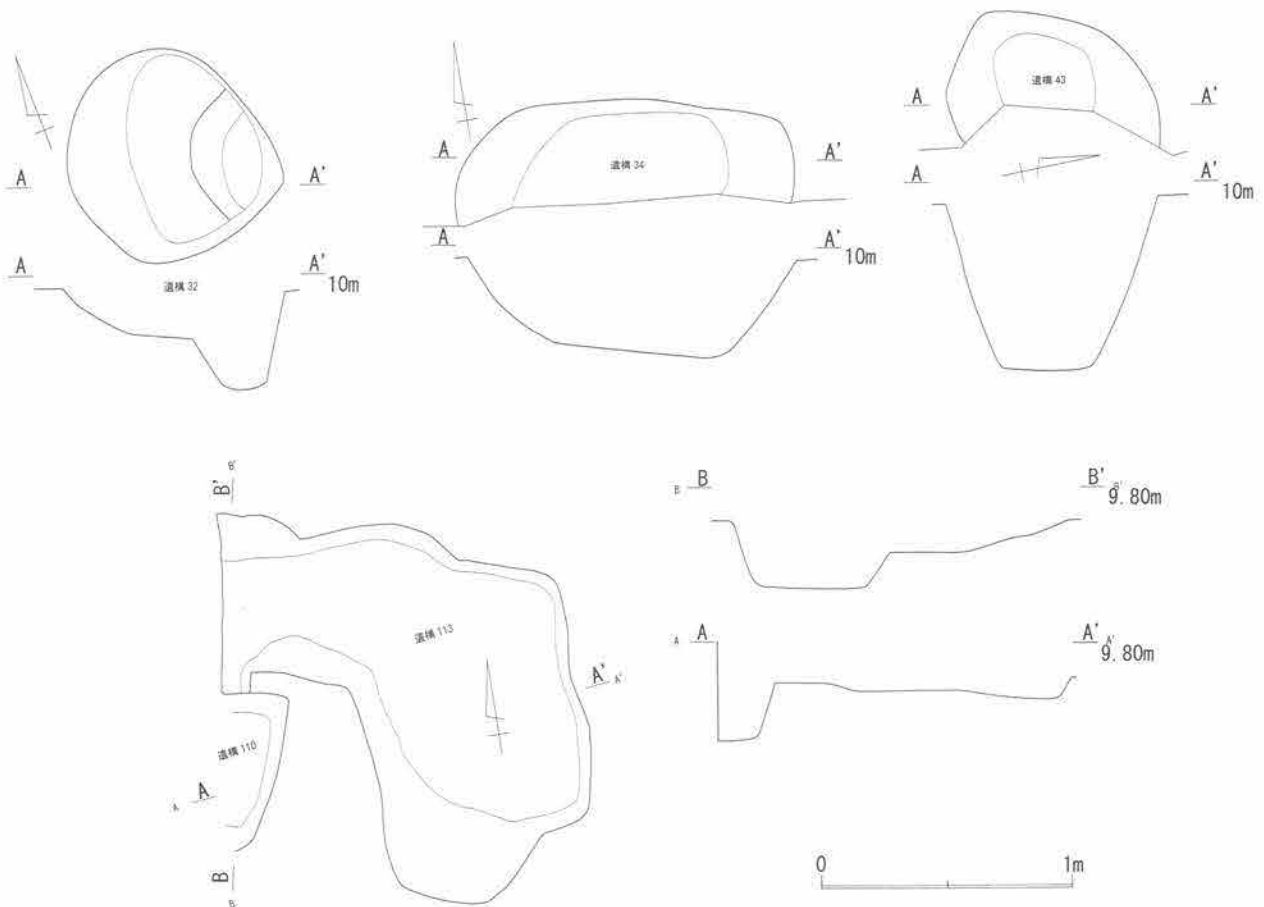


図 14 3 面検出遺構

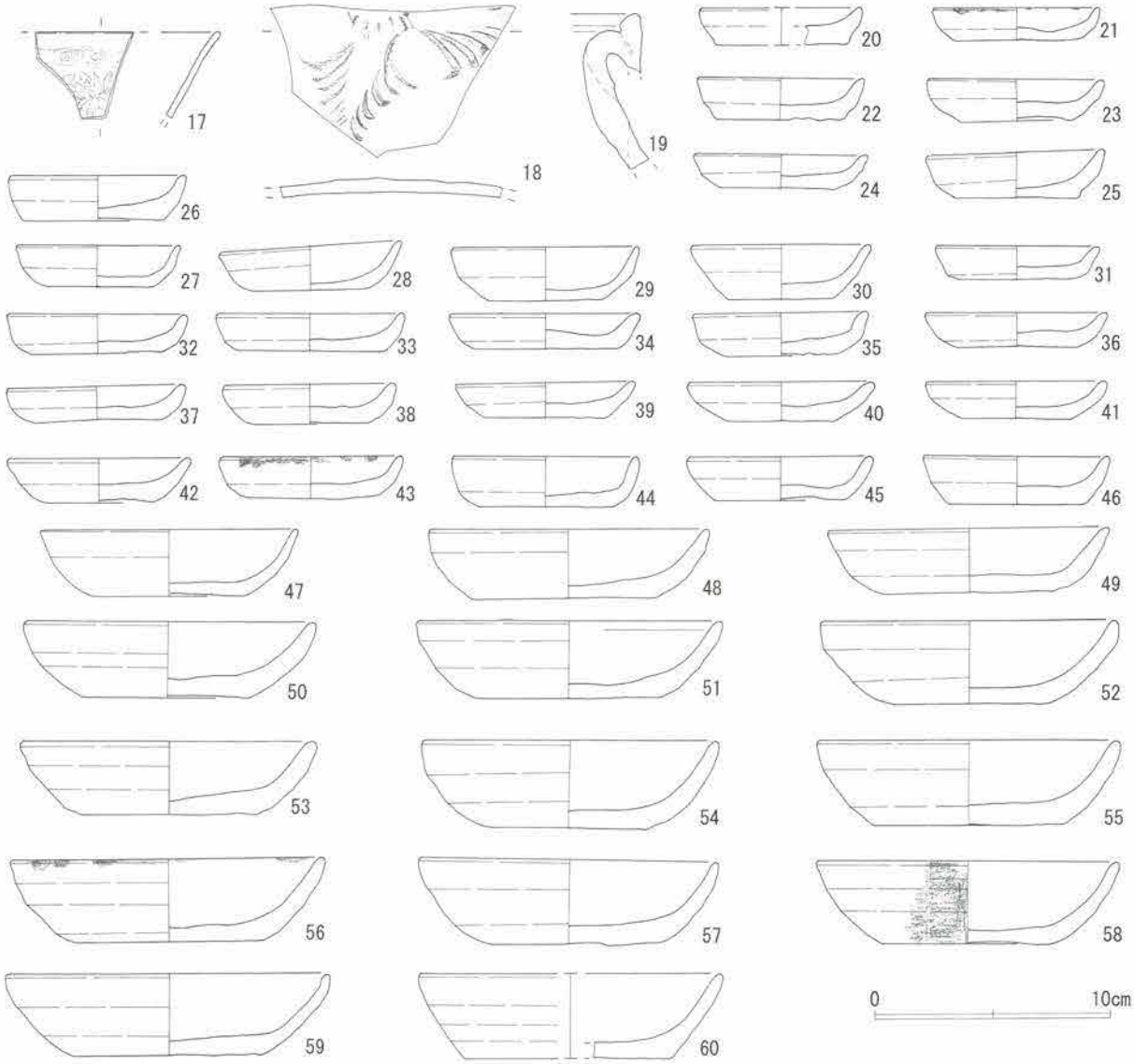
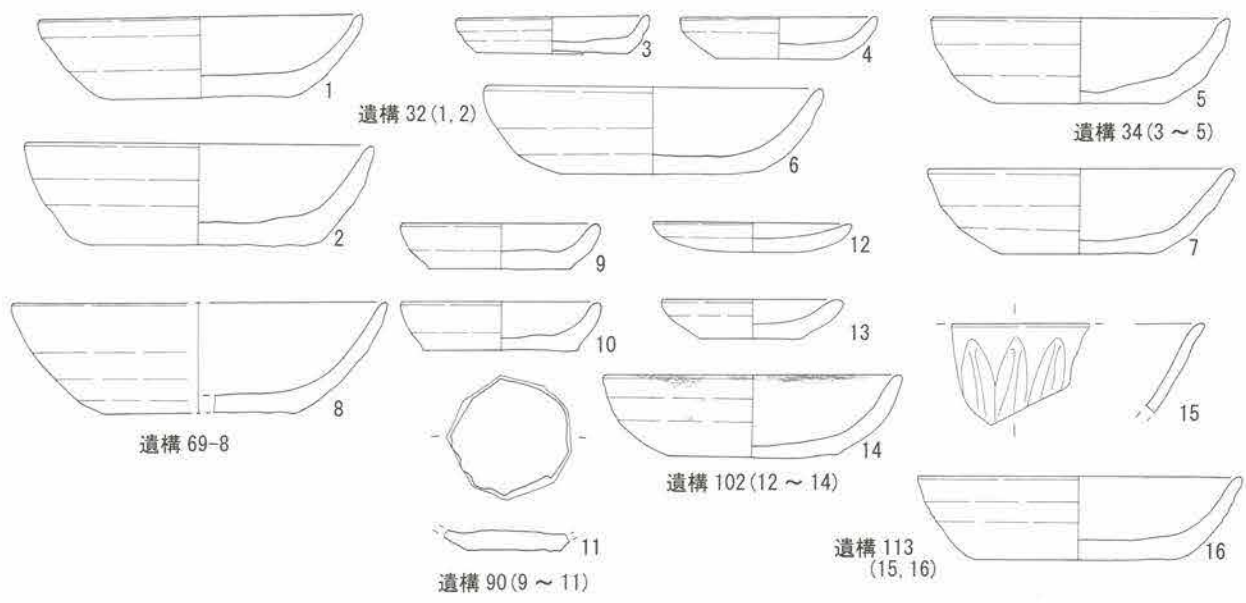


图 15 3面遺構・面出土遺物

遺構 43

I 区南東部で検出した土坑である。半分以上は調査区東壁外に延びている。平面形は不整形円形と思われる。確認規模は東西 (50) cm、南北 80cm、深さ 68cm を測る。底面レベルは 9.02m で一部は岩盤を掘り込んでいる。図 15-7 は糸切りかわらけ大皿。

遺構 69

II 区南東部の x10 ~ 11、y15 で検出した柱穴状の落ち込みである。基壇状遺構とは直接的には無関係と考えている。確認規模は径 35cm ほど、深さは 4cm と浅い。形状は、礎石等の据え方に類似しているが、小さくて性格は不明。図 15-8 は糸切りかわらけ大皿の薄手タイプで、口径は 14cm 以上と大きい。

遺構 102

II 区の南側で確認した浅い窪みである。調査時点では番号を附したが、人工的な窪みの可能性が低い。ため、図は提示しなかった。覆土としたのは包含層と考えている。

図 15-12 は手づくねかわらけ小皿、13 は糸切りかわらけ小皿で、側壁は底部より外販気味に直線的に立ち上がる。14 は糸切りかわらけ大皿で、側壁は丸みを帯び、内外面全体にススが付着している。

遺構 113

II 区北西部の x17 ~ 19、y9 ~ 12 で検出した不整形の落ち込みである。上面の遺構 66 同様に遺物の集中部分で遺物を追求した結果の落ち込みである可能性が高い。そのため、図は示したが人為的な掘り込みではない可能性が高い。確認規模は、東西 265cm ~ 290cm、南北 120cm ~ 275cm、深さ 14cm ~ 25cm を測る。

図 15-15 は龍泉窯青磁鎚連弁文碗の口縁部、16 は糸切りかわらけ大皿。

3 面出土遺物

3 面を検出するまでに出土した遺物をここに含めた。図化した遺物は図 15-17 ~ 60 に示した。

17、18 は舶載陶磁器。17 は白磁碗の口縁部で、内面に線彫りで雷文、花文様が描かれている。18 は黄釉洗の底部。19 は常滑窯甕の口縁部で 13 世紀後半。20 ~ 60 は糸切りかわらけ皿で 20 ~ 46 は小皿。27 ~ 30 は薄手タイプで 29、30 は器高が高く、体部中ほどで屈曲する。21、23 は口縁部にススが付着して灯明皿としての使用痕跡あり。47 は薄手タイプで中皿。48 ~ 60 は大皿で、59 は薄手タイプで口径は大きい。56、58 はススが付着し灯明皿としての使用痕跡あり。60 は体部が底部より外に向かって直線的に立ち上がる。

第 4 節 4 面の遺構と遺物

海拔 9.60m 前後で確認した炭化物層及びその下の薄い版築面を 4 面とした。サブトレンチの堆積を見ると、4 面の下は大型土丹が投げ込まれた層で、ほとんど遺物が出土しない。4 面が本地点最初の生活痕跡である。4 面の時点では、I 区には丘陵の斜面があり生活領域では無い。

4 面で検出された遺構は土坑と埋葬イヌだけであり、生活痕跡は少ない。

遺構 96

基壇遺構の南側、調査区壁に沿って検出した、浅い落ち込みを伴う土丹列に附した遺構名である。落ち込みは土丹を検出した結果作られた可能性が高い。そのため、図は提示しなかった。この土丹列の南調査区外に、基壇遺構の南側土丹積みがあると考えている。出土した遺物は、基壇遺構に伴う可能性が高いが、ここに図示した。図 18-1 は糸切りかわらけ中皿で薄手タイプ、口縁部にススが付着。

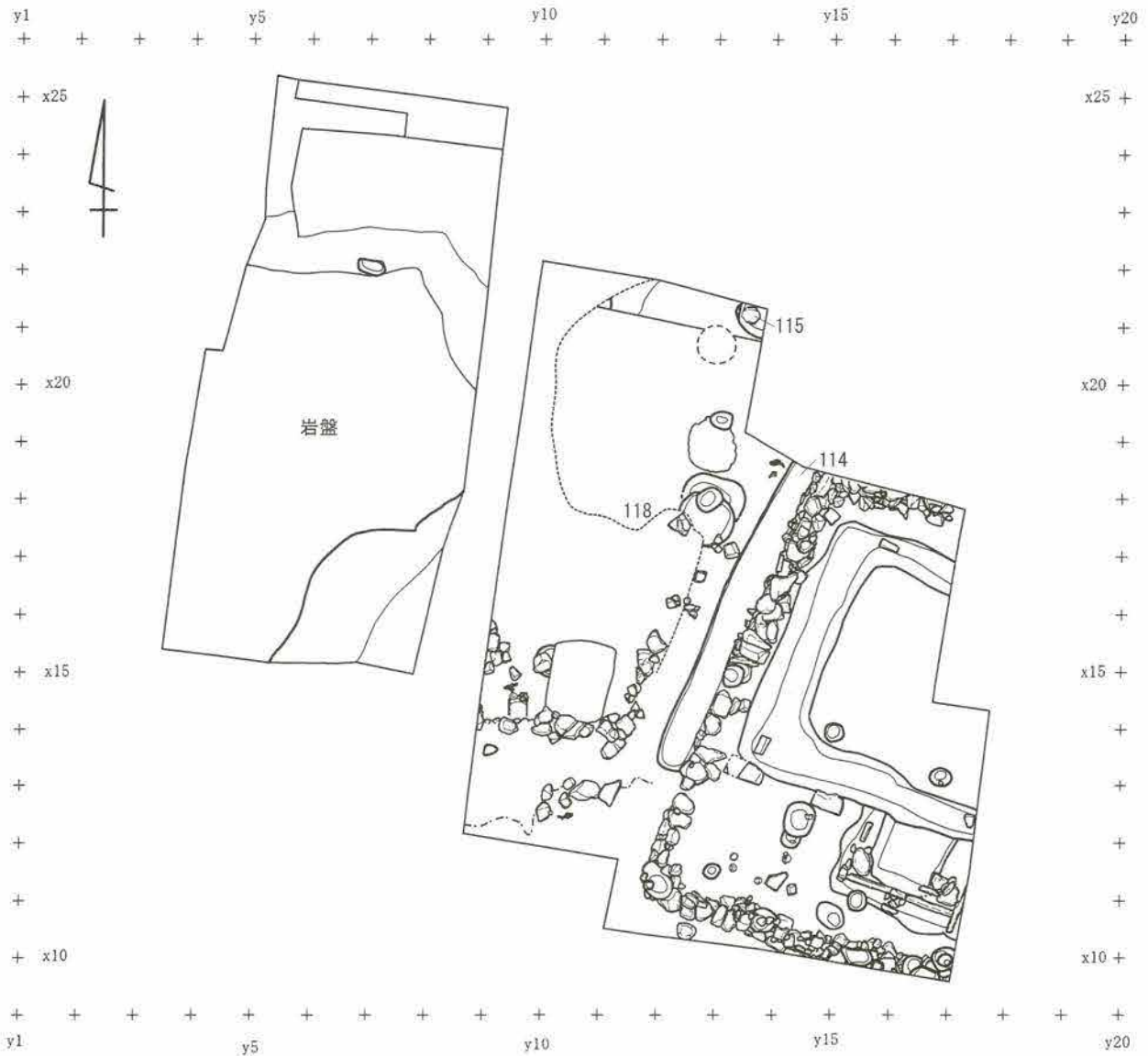


図 16 4面全体図 (120分の1)

遺構 114

基壇遺構西側土丹積みに沿って検出した溝状の落ち込みである。調査時点では基壇と同時期の遺構としたが、途中で消滅すること等から先行する遺構とした。土丹積みと軸線は合っているので、先行した場合でも、密接な関係が考えられる。確認規模は幅 60cm 前後、深さ 8cm ~ 13cm で北壁から 570cm で消滅する。図 18-2 は糸切り小皿。

遺構 115

Ⅱ区北東隅のサブトレンチ内で検出した土坑である。ほとんどが調査区外にあるため全体規模は不明。確認した深さは 9cm ほどで斜面に廃棄された常滑壺である可能性が高い。図 18-3 は常滑窯三耳壺の口

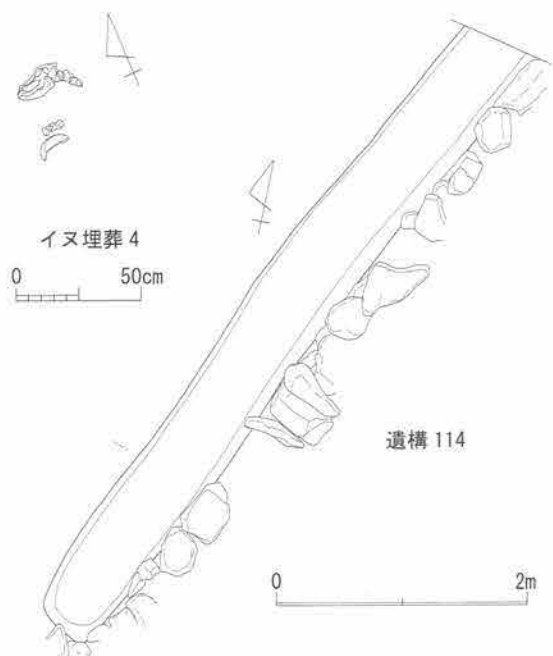


図 17 4 面検出遺構

た。図示した遺物は図 18-9 ~ 29 に示した。

9 は龍泉窯青磁鎬連弁文碗の口縁部、10 は常滑窯甕の口縁部、11 は常滑窯小型甕の口縁部、12 はかわらけ皿で、底面に 2 つの穿孔があげられている。13 ~ 19 は糸切りかわらけ小皿で、14、17、19 は口縁部手前で屈曲し、三角状を呈する。20 ~ 28 は糸切りかわらけ大皿で、23、27 は口縁部で屈曲し三角状を呈する。29 は鉄製品の釘である。

第 5 節 4 面下の調査

4 面の下に堆積する土層や遺構の有無を確認するため、II 区の北側壁に沿って 2 箇所（図 2 のイ - ロ、ハ - ニ）、南壁に沿って 1 箇所、トレンチを設定して掘り下げた。

北のイ - ロに沿ったトレンチでは海拔 8.99m（地表下 170cm）まで掘り下げて堆積土の確認をした。最上部で遺構 115 を検出したが、以下は西から東に下がる斜面堆積である。トレンチ西半分では土丹が密集した土層が 9.50m 前後で確認された。この土層は岩盤とは異なるが、かなり締った土層である。遺物はかわらけ皿の細片が見られた。

ハ - ニに沿ったトレンチでは海拔 9.40m（地表下 130cm）まで掘り下げた。トレンチ西側の海拔 9m 前後で岩盤の斜面を確認した。I 区中央部で確認した岩盤の延長と考えられる。堆積は北側のトレンチ同様、4 面以下は西から東に下がる斜面堆積である。

南壁に沿ったトレンチでは、海拔 8.44m（地表下 230cm）まで掘り下げた。その結果、トレンチ東部で、調査区外東と西に延びる、東西 300cm、南北 300cm の範囲に 15cm ~ 30cm 大の土丹が充満した遺構らしき窪みを確認した。土丹は充満しているものの所々に空洞があり、遺物は確認できなかった。調査時点では、この窪みに遺構名を付けたが、不明な点が多い。南東部に下る斜面に、土丹が投げ込まれた可能性を考えている。

3 箇所のトレンチ調査の結果、4 面以下の堆積は西の岩盤から東に向かって下り、北から南に向かって下る傾斜地であり、生活面は無いと判断した。したがって、本地点の最初の生活面は 4 面である。

縁から肩部。落ち込み内から出土している。

遺構 118

II 区中央近くの x17、y12 ~ 13 で検出した円形の土坑である。確認規模は南北 100cm、東西 125cm、深さ 42cm、底面レベル 9.02m を測る。

図 18-4 ~ 6 は糸切りかわらけ小皿、7、8 は大皿。

埋葬イヌ 4

II 区北東部で検出した。頭部と頸部が確認できたが、その他の部位及び土坑は確認できなかった。頭を西に脚を南に向けた埋葬と考えられる。頭部の南でかわらけ皿の破片が出土しているが、関係は掴めなかった。確認レベル 9.45m。

4 面出土遺物

4 面を検出するまでに出土した遺物をここに含め

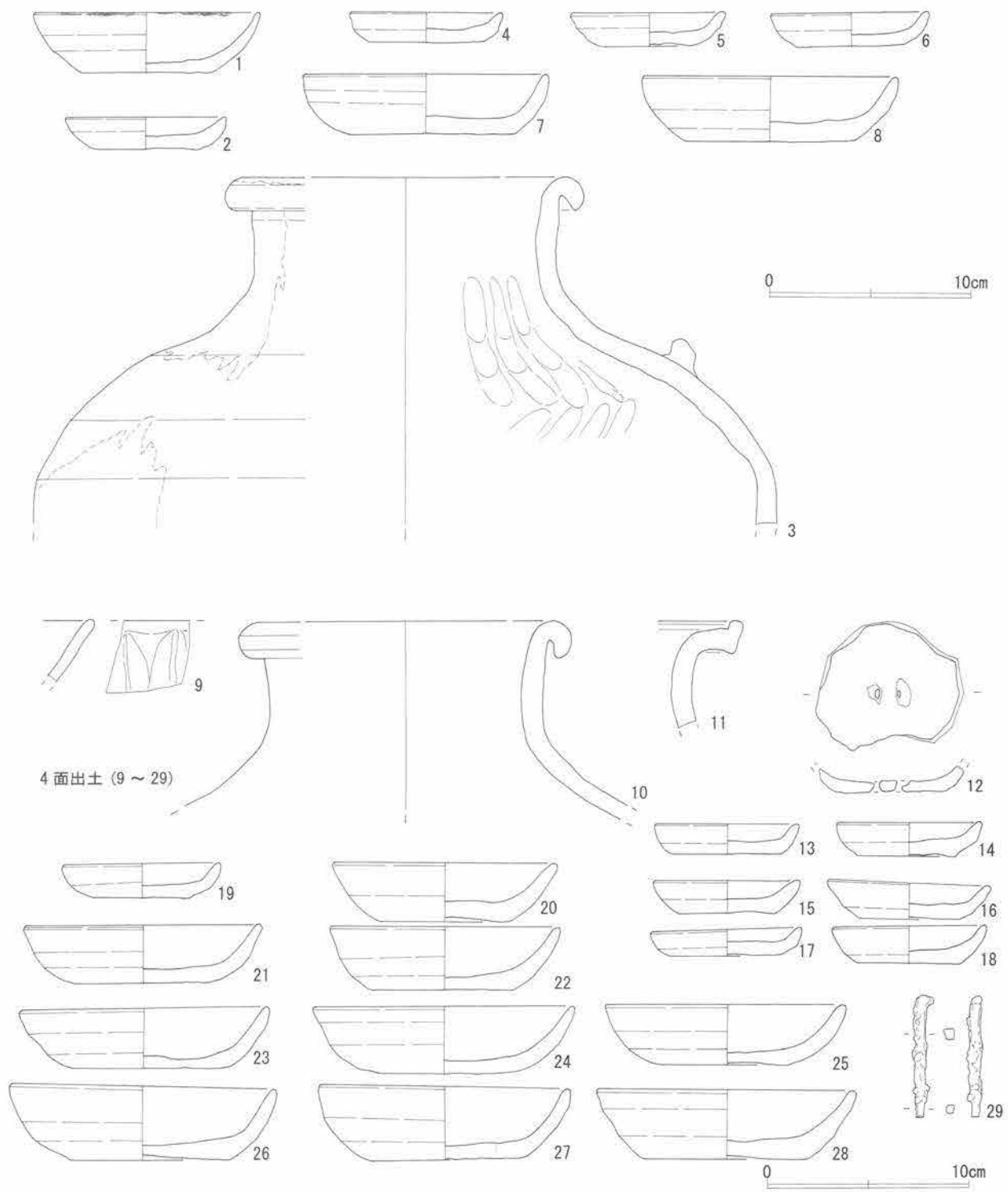


图 18 4面遺構・面出土遺物

第3章 まとめと考察

本章では、第1面～第4面で検出された遺構について簡単な考察を加える。とはいえ、特に基壇状遺構は、鎌倉でも例を知らない。そのため、やや見当はずれの結果になっている可能性もある。ご容赦いただきたい。また、本地点の調査でもⅠ区とⅡ区の間には、埋没土が崩落しないように50cm程度の幅で未調査区を残している。この結果、遺構や堆積土層に連続しない

第1節 基壇状遺構

土丹積み石垣で方形の基壇状区画を造り、その上に鎌倉石を使用した建物あるいは区画が造られていると考えた遺構である。規模は、仮に方形であれば、一辺8.50m～9.0m程を推定している。鎌倉石の多くは後世に持ち去られているため、以下の復元は推定に推定を重ねている。

横位で立てて使用した鎌倉石は、基壇状遺構上に建築されたであろう建物の区画を示している。特徴的な石の使用方法である。この区画は南側に張り出しを持っている。全体の規模は、本遺構の約半分が調査区外に延びているため不明。おそらく、鎌倉でもあまり例のない遺構であるため、復元が間違っている可能性もある。この区画の規模は、張り出し部（入口）の中心線で左右対称の空間を想定すれば、南北380cm、東西640cmとなる。これに東西218cm、南北150cm程の張り出し部が付く。建物は南北2間、東西3間（あるいは2間四方）であった可能性が高い。残念ながら、この区画内では建物の痕跡を確認できなかった。この建物から60cm前後離れて、平たく置かれている鎌倉石の礎石が建物の周囲あるいは南面だけに配されている。

復元すると、東西3間（あるいは2間）・南北2間で、南側に幅3尺あるいは4尺・長さ4尺か5尺の張り出しが付く建物の可能性が高い。この建物の性格は、根拠に乏しいが、小さな社を考えている。建物は推定に推定を重ねた結果であり、その性格もやはり推定に過ぎない。しかし、土丹積みで基壇が造られて、その上に鎌倉石で区画された小規模な建物があって、その建物には小さな張り出しが付いている。こうした遺構を組み合わせると、小さな階段を持つ社が浮かんでくるのである。

第2節 遺構の変遷と年代

各面で検出した遺構を見ると、第4面が本地点の開発時期である。この時点ではⅠ区の殆どは泥岩の斜面で開発を受けていない。検出した遺構は少なく、明確な建物はない。Ⅱ区の南側に設定したトレンチ調査では、本面の下は西から東に下がる斜面堆積である。出土しているかわらけ皿等には京都系の手づくね皿が含まれていないので、13世紀前半の常滑（図18-3）が出土しているものの、13世紀中頃を考えている。周辺での山裾及び谷の開発年代に合っている。

第4面と第3面の時間差は、出土遺物からも、あまり多くないと考えている。第3面になると、基壇建物が造られる。基壇建物の西側は、狭い空間があり、開発を受けていない泥岩の斜面がある。基壇建物を除くと、土坑と柱穴で明確な遺構が少ない。所々で礎石らしい安山岩や泥岩が散見されるが、建物は復元できない。年代は、13世紀後半のどこかを考えている。

第2面ではⅠ区側の山裾が開発され、削平岩盤面が出現する。この面にあわせてⅡ区では版築面が造

られる。遺構は柱穴と土坑と散見される礎石であり、明確な建物は復元できない。第3面の基壇建物の上面ではやはり遺構が少ない傾向がうかがえる。Ⅱ区北西部の遺構66は版築面の弱い部分あるいは窪みに造られた遺物集中と考えられる。ここにはイヌの埋葬も行われている。年代は、出土遺物で細分は不可能である。14世紀初頭を前後する時代を考えたい。

第1面は、削平岩盤面の上に版築面が造られ、それに合わせてⅡ区にも極薄い版築面がある。多くは、上部に堆積する近世耕作土に削平された包含層でもある。柱穴は多く確認できるものの建物は復元できない。出土したかわらけ皿には15世紀～16世紀のものは含まれていない、14世紀中頃までの年代を考えるべきかもしれない。

第1面で検出した遺構には、Ⅰ区の遺構2やⅡ区で検出した近代建物の柱穴群がある。遺構2は岩盤に掘り込んだ細長い穴に長い角材を据え、角材の中央柱を両端から立ち上がる斜めの柱が支える構造の遺構である。洗濯物を干す2本の柱の一方と考えているが確証はない。

近代建物の柱穴は、確認・図化はしていながらあまり報告することもないので、若干説明を加えておく。この柱穴群の特徴は、表土直下に掘り込み面を持ち、覆土に土丹が充満していることである。充満している土丹は堅くたたき締められている。この柱穴の上部に礎石が置かれると考えている。この構造の遺構は、鶴岡八幡宮二十五坊の調査で確認したのが最初であるが、市街地の調査では機械で掘削した壁面によく見かける。近世・近代建物の建物では、覆土に樹皮の付いた松の杭2～3本を打ち、この周囲に土丹を入れて堅くたたき締めた柱穴も稀に見られる。近世の土蔵等に見られる礎石下の構造で、東京都や川越市内の遺跡で類似例が多く確認されている。

第3節 調査地点の性格

調査では、社のような基壇遺構と土坑、柱穴の他にイヌの埋葬が4体確認されている。確認されている地点はすべて基壇遺構の西側で、丘陵との間になる。イヌの埋葬体が検出されることはめずらしいことではないが、由比ガ浜の旧砂丘地帯で確認されることが多い。旧砂丘地帯に近いとはいえ、狭い範囲に4体も埋葬されていることはめずらしい。社的な空間とイヌの埋葬、両者を結び付けて性格などを考えたいが、それほど資料は無い。しかし、何らかの宗教的な空間があったと考えておきたい。

この性格は本地点を造成した直後に始まり、2面まで継続したようだ。1面の遺構2は、洗濯物を干す柱のような構築物と考えているが、簡便な鳥居の可能性もある。今後の資料の蓄積を待ちたい。

笹目遺跡遺物法量表1

No	遺構	器種	法量(cm)			備考		
			口径/長さ	底径/幅	高さ/厚さ			
第6区								
1	1面	遺構1	土器	かわらけ皿	(7.6)	(4.4)	1.8	
2	1面	遺構1	土器	かわらけ皿	(12.4)	(8.4)	2.9	
3	1面	遺構2	土器	かわらけ皿	7.4	5.2	1.8	内外面口縁部 ス ス附着
4	1面	遺構2	土器	かわらけ皿	(7.2)	4.8	1.8	
5	1面	遺構3	土器	かわらけ皿	(7.6)	(5.0)	1.7	
6	1面	遺構4	土器	かわらけ皿	(11.0)	7.0	2.9	
7	1面	遺構5	土器	かわらけ皿	(7.6)	(5.8)	1.7	
8	1面	遺構7	土器	かわらけ皿	(6.8)	(4.0)	2.1	
9	1面	遺構7	土器	かわらけ皿	(12.6)	(8.0)	3.5	
10	1面	遺構16	土器	かわらけ皿	(12.8)	(8.4)	3.4	
11	1面	遺構50	土器	かわらけ皿	(7.2)	4.0	2.1	
12	1面	遺構50	土器	かわらけ皿	(12.2)	(7.8)	3.1	
13	1面	遺構51	土器	かわらけ皿	(6.6)	(3.8)	1.8	
14	1面	遺構51	土器	かわらけ皿	7.8	6.8	1.5	
15	1面	遺構52	土器	かわらけ皿	(7.0)	5.0	1.8	
16	1面	遺構56	土器	かわらけ皿	(12.4)	(7.8)	3.1	
17	1面	遺構56	常滑窯	片口鉢	-	-	12.8	
18	1面	遺構57	土器	かわらけ皿	7.2	4.4	2.4	
19	1面	遺構57	土器	かわらけ皿	(15.8)	7.4	3.2	
20	1面	遺構59	土器	かわらけ皿	(7.2)	5.6	1.9	
21	1面		黄釉	盤	-	-	[2.8]	中国黄釉
22	1面		瀬戸窯	褐釉小壺(水滴)	2.4	3.1	3.5	
23	1面		常滑窯	片口鉢	-	-	[4.7]	
24	1面		常滑窯	片口鉢	-	-	[6.4]	
25	1面		土器質	手焙り	-	-	[6.1]	
26	1面		常滑窯	甕	-	-	[6.4]	
27	1面		常滑窯	甕	-	-	[9.1]	13世紀後半
28	1面		瀬戸窯	卸目皿	-	-	[3.6]	
29	1面		常滑窯	壺	-	-	[1.4]	
30	1面		土器	かわらけ皿	(6.6)	(4.2)	2.2	
31	1面		土器	かわらけ皿	(6.8)	4.2	1.9	
32	1面		土器	かわらけ皿	7.4	5.2	1.9	
33	1面		土器	かわらけ皿	(7.0)	(4.2)	2.2	
34	1面		土器	かわらけ皿	7.4	4.2	2.2	
35	1面		土器	かわらけ皿	(7.4)	4.2	2.2	
36	1面		土器	かわらけ皿	7.0	5.0	2.0	内外面被熱
37	1面		土器	かわらけ皿	(14.0)	8.0	3.7	
38	1面		土器	かわらけ皿	(11.4)	(7.2)	3.4	
39	1面		土器	かわらけ皿	(11.2)	7.0	3.1	
40	1面		土器	かわらけ皿	13.0	7.0	3.6	
41	1面		土器	かわらけ皿	(13.4)	(8.2)	3.5	
42	1面		常滑窯	磨陶片	7.0	6.1	1.3	

笹目遺跡遺物法量表2

No	遺構	器種	法量(cm)			備考		
			口径/長さ	底径/幅	高さ/厚さ			
第9図								
1	2面	遺構14	土器	かわらけ皿	(11.4)	(7.6)	3.3	
2	2面	遺構27	土器	かわらけ皿	7.4	4.8	1.9	
3	2面	遺構63	山茶碗窯	片口鉢	-	-	[5.0]	
4	2面	遺構63	瓦質	手焙り	-	-	[7.9]	
5	2面	遺構63	土器	かわらけ皿	(7.4)	(5.0)	1.6	
6	2面	遺構63	土器	かわらけ皿	(7.6)	(5.8)	1.7	
7	2面	遺構63	土器	かわらけ皿	7.7	5.2	2.1	
8	2面	遺構63	土器	かわらけ皿	7.5	6.2	2.3	
9	2面	遺構63	土器	かわらけ皿	11.9	7.0	3.6	内外面被熱
10	2面	遺構63	土器	かわらけ皿	12.0	8.2	3.4	内外面被熱
11	2面	遺構63	土器	かわらけ皿	12.2	7.2	3.4	外面被熱
12	2面	遺構63	土器	かわらけ皿	(12.4)	(7.6)	3.2	
13	2面	遺構63	土器	かわらけ皿	12.2	8.6	3.4	
14	2面	遺構63	土器	かわらけ皿	12.0	7.6	3.7	
15	2面	遺構64	常滑窯	広口壺	(10.0)	-	[3.9]	
16	2面	遺構66	土器	かわらけ皿	(5.6)	(3.6)	2.0	
17	2面	遺構66	土器	かわらけ皿	(6.6)	4.2	1.9	
18	2面	遺構66	土器	かわらけ皿	7.3	4.7	1.9	
19	2面	遺構66	土器	かわらけ皿	(7.4)	(5.0)	1.7	
20	2面	遺構66	土器	かわらけ皿	7.5	4.9	2.1	
21	2面	遺構66	土器	かわらけ皿	(7.6)	(5.4)	1.7	
22	2面	遺構66	土器	かわらけ皿	7.0	5.4	1.7	
23	2面	遺構66	土器	かわらけ皿	7.6	5.0	2.0	
24	2面	遺構66	土器	かわらけ皿	(7.4)	5.4	2.1	
25	2面	遺構66	土器	かわらけ皿	(7.4)	5.0	1.9	
26	2面	遺構66	土器	かわらけ皿	7.1	5.2	1.8	
27	2面	遺構66	土器	かわらけ皿	(7.6)	(5.8)	1.7	
28	2面	遺構66	土器	かわらけ皿	(7.6)	(6.0)	1.6	
29	2面	遺構66	土器	かわらけ皿	(8.0)	(6.0)	1.8	
30	2面	遺構66	土器	かわらけ皿	11.8	8.0	3.6	
31	2面	遺構66	土器	かわらけ皿	11.6	7.6	3.5	
32	2面	遺構66	土器	かわらけ皿	11.6	7.5	3.1	
33	2面	遺構66	土器	かわらけ皿	(12.4)	8.4	3.2	
34	2面	遺構66	土器	かわらけ皿	(12.4)	8.6	3.5	
35	2面	遺構66	土器	かわらけ皿	(13.2)	(8.0)	3.4	
36	2面	遺構66	土器	かわらけ皿	(12.6)	8.0	3.1	内外面口縁部被熱
37	2面	遺構66	常滑窯	壺	-	-	[6.5]	
38	2面	遺構66	鉄製品	釘	8.9	1.1	0.9	
39	2面	遺構66	鉄製品	釘	6.3	0.8	0.7	
40	2面	遺構68	土器	かわらけ皿	7.9	4.6	1.3	
41	2面	遺構68	土器	打ち欠き	3.7	12.0	[1.6]	
42	2面	遺構76	常滑窯	片口鉢	-	-	[4.1]	II類
43	2面	遺構76	常滑窯	甕	-	-	[8.1]	
44	2面	遺構78	土器	かわらけ皿	7.3	5.0	2.0	
45	2面	遺構79	瀬戸窯	入子	(7.2)	4.6	2.8	

笹目遺跡遺物法量表3

No	遺構		器種		法量(cm)			備考
					口径/長さ	底径/幅	高さ/厚さ	
46	2面	遺構88	瀬戸窯	入子	6.6	4.4	1.9	
47	2面	遺構88	土器	かわらけ皿	10.3	5.6	3.3	内外面口縁部スス附着
48	2面	遺構91	常滑窯	片口鉢	-	-	[6.1]	
49	2面	遺構92	土器質	手焙り	-	-	[5.6]	
50	2面	遺構92	石製品	滑石スタンプ	4.1	3.5	2.7	
51	2面	遺構92	鉄製品	釘	5.4	1.1	1.0	
第10図								
52	2面		青磁	碗	-	-	[4.0]	中国龍泉窯 鎬蓮弁文
53	2面		磁器	洗	-	-	[2.8]	中国緑釉
54	2面		磁器	燭台	-	-	[3.2]	中国青白磁
55	2面		磁器	燭台	-	-	[2.2]	中国青白磁
56	2面		瀬戸窯	卸目皿	-	7.4	[2.2]	中期2
57	2面		瀬戸窯	天目碗	6.5	4.3	[4.4]	褐釉 中期Ⅱ
58	2面		常滑窯	片口鉢	-	-	[7.9]	Ⅱ類
59	2面		山茶碗窯	片口鉢	-	-	[7.2]	
60	2面		土器質	手焙り	-	-	[8.3]	
61	2面		瀬戸窯	片口鉢	-	(11.4)	[7.4]	
62	2面		瀬戸窯	片口鉢	-	(12.0)	[7.7]	
63	2面		常滑窯		-	-	[5.0]	
64	2面		常滑窯		-	-	[6.8]	
65	2面	南北ベルト	常滑窯		-	-	[9.0]	
66	2面		瀬戸窯	入子	(3.8)	2.4	1.3	
67	2面		瀬戸窯	入子	(7.0)	(3.4)	2.8	
68	2面		瀬戸窯	入子	(7.6)	4.0	2.8	
69	2面		土器	かわらけ皿	6.8	4.2	2.2	
70	2面		土器	かわらけ皿	(6.4)	4.2	2.2	
71	2面		土器	かわらけ皿	(7.0)	4.4	2.1	
72	2面		土器	かわらけ皿	7.5	4.4	2.0	
73	2面		土器	かわらけ皿	(7.4)	(4.4)	2.2	
74	2面		土器	かわらけ皿	(7.6)	5.2	2.2	内面被熱
75	2面		土器	かわらけ皿	7.8	4.8	2.3	内外面口縁部スス附着
76	2面		土器	かわらけ皿	7.1	4.6	2.2	
77	2面		土器	かわらけ皿	7.0	4.7	2.2	
78	2面		土器	かわらけ皿	7.5	5.1	1.8	
79	2面		土器	かわらけ皿	7.5	6.0	1.7	
80	2面		土器	かわらけ皿	7.3	5.2	1.8	
81	2面		土器	かわらけ皿	7.2	5.4	1.8	
82	2面		土器	かわらけ皿	7.6	5.0	1.9	
83	2面		土器	かわらけ皿	7.4	5.0	2.1	
84	2面		土器	かわらけ皿	7.4	5.2	2.1	
85	2面		土器	かわらけ皿	7.2	5.2	1.9	外面被熱
86	2面		土器	かわらけ皿	7.8	5.0	1.8	内外面口縁部スス附着
87	2面		土器	かわらけ皿	(7.4)	(5.0)	1.8	
88	2面		土器	かわらけ皿	(7.4)	(4.4)	2.1	

筐目遺跡遺物法量表4

No	遺構		器種	法量(cm)			備考
				口径/長さ	底径/幅	高さ/厚さ	
89	2面		土器 かわらけ皿	8.0	5.2	2.4	
90	2面		土器 かわらけ皿	(9.8)	(6.0)	2.8	
91	2面		土器 かわらけ皿	(9.6)	(5.4)	3.1	
92	2面		土器 かわらけ皿	(10.4)	(5.6)	3.2	内面被熱
93	2面		土器 かわらけ皿	(10.6)	5.5	3.3	
94	2面		土器 かわらけ皿	(10.6)	6.0	3.3	内外面被熱
95	2面		土器 かわらけ皿	10.3	5.8	3.2	
96	2面		土器 かわらけ皿	(11.0)	5.2	3.6	
97	2面		土器 かわらけ皿	(11.2)	(7.6)	3.1	
98	2面		土器 かわらけ皿	(11.4)	(7.0)	3.4	
99	2面		土器 かわらけ皿	(11.4)	7.4	3.2	
100	2面		土器 かわらけ皿	(11.2)	(7.0)	3.4	
101	2面		土器 かわらけ皿	(11.4)	(7.2)	3.2	
102	2面		土器 かわらけ皿	11.8	7.0	3.3	
103	2面		土器 かわらけ皿	(11.8)	(8.2)	3.2	
104	2面		土器 かわらけ皿	(12.4)	(8.2)	2.9	
105	2面		土器 かわらけ皿	(12.4)	8.0	3.3	
106	2面		土器 かわらけ皿	11.6	7.6	3.5	内外面被熱
107	2面		土器 かわらけ皿	12.4	8.4	3.7	
108	2面		土器 かわらけ皿	(12.4)	7.2	3.4	
109	2面	南北ベルト	土器 かわらけ皿	12.4	8.5	3.4	
110	2面		土器 かわらけ皿	12.7	7.7	3.5	
第11図							
111	2面		土器 かわらけ皿	(12.8)	(7.0)	3.8	
112	2面		土器 かわらけ皿	13.6	8.1	3.5	
113	2面		土器 かわらけ皿	(13.8)	7.0	4.1	
114	2面		土器 かわらけ皿	(13.0)	9.0	3.1	
115	2面		土器 かわらけ皿	12.2	7.6	3.3	
116	2面		土器 かわらけ皿	12.3	7.3	3.7	
117	2面		土器 かわらけ皿	12.6	7.4	3.5	
118	2面		土器 かわらけ皿	13.0	9.1	3.4	
119	2面		鉄製品 釘	7.6	1.7	1.6	
120	2面		鉄製品 釘	6.1	1.6	1.1	
121	2面		鉄製品 釘	5.6	0.8	0.8	
122	2面		鉄製品 釘	6.2	0.8	0.7	
123	2面		石製品 砥石	6.7	4.1	1.9	鳴滝産 中砥 砂粒泥岩
124	2面		土製品 輪	7.7	5.9	4.4	
第15図							
1	3面	遺構32	土器 かわらけ皿	(12.8)	(7.0)	3.2	
2	3面	遺構32	土器 かわらけ皿	(13.4)	8.8	3.9	
3	3面	遺構34	土器 かわらけ皿	7.2	6.0	1.6	
4	3面	遺構34	土器 かわらけ皿	7.3	5.0	1.8	
5	3面	遺構34	土器 かわらけ皿	(11.4)	(7.0)	3.4	
6	3面	遺構34	土器 かわらけ皿	12.8	8.5	3.5	
7	3面	遺構43	土器 かわらけ皿	11.5	6.2	3.3	

笹目遺跡遺物法量表5

No	遺構		器種		法量(cm)			備考
					口径/長さ	底径/幅	高さ/厚さ	
8	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	(14.6)	(7.6)	4.4	
9	3面	遺構90	土器	かわらけ皿	(7.4)	(5.6)	1.8	
10	3面	遺構90	土器	かわらけ皿	(7.4)	(6.2)	2.0	
11	3面	遺構90	土器	打ち欠き	5.0	4.9	-	
12	3面	遺構102	土器	かわらけ皿	(7.4)	-	1.2	
13	3面	遺構102	土器	かわらけ皿	(6.4)	(4.0)	1.6	
14	3面	遺構102	土器	かわらけ皿	11.3	7.0	3.4	内外面被熱
15	3面	遺構113	青磁	碗	-	-	[3.5]	中国龍泉窯
16	3面	遺構113	土器	かわらけ皿	(12.6)	8.0	3.3	
17	3面		磁器	白磁碗	-	-	[3.5]	
18	3面	炭層内	磁器	洗	10.5	6.3	0.6	中国黄釉
19	3面	土丹列南北サブトレ	常滑窯	甕	-	-	[6.5]	
20	3面		土器	かわらけ皿	(6.6)	(5.6)	1.6	
21	3面		土器	かわらけ皿	6.8	5.4	1.4	内外口縁部スス付着
22	3面		土器	かわらけ皿	6.8	5.4	1.8	
23	3面		土器	かわらけ皿	7.2	4.9	1.9	
24	3面		土器	かわらけ皿	7.1	5.0	1.5	
25	3面		土器	かわらけ皿	7.2	5.3	2.1	
26	3面		土器	かわらけ皿	7.2	6.0	2.0	
27	3面		土器	かわらけ皿	(6.8)	(4.2)	1.8	
28	3面		土器	かわらけ皿	7.3	4.8	2.1	
29	3面		土器	かわらけ皿	(7.6)	4.8	2.4	
30	3面		土器	かわらけ皿	(7.2)	4.5	2.4	
31	3面		土器	かわらけ皿	6.6	5.0	1.5	
32	3面		土器	かわらけ皿	7.3	5.6	1.8	
33	3面		土器	かわらけ皿	7.6	6.0	1.7	
34	3面		土器	かわらけ皿	7.7	6.0	1.5	
35	3面		土器	かわらけ皿	(7.0)	(4.4)	1.8	
36	3面		土器	かわらけ皿	(7.2)	(5.0)	1.5	
37	3面		土器	かわらけ皿	(7.0)	(5.2)	1.5	
38	3面		土器	かわらけ皿	7.0	5.0	1.7	
39	3面		土器	かわらけ皿	7.2	5.0	1.6	
40	3面		土器	かわらけ皿	(7.4)	4.6	1.7	
41	3面		土器	かわらけ皿	7.3	4.6	1.7	
42	3面		土器	かわらけ皿	(7.2)	(4.6)	1.9	
43	3面		土器	かわらけ皿	7.8	5.1	1.8	内外面口縁部被熱
44	3面		土器	かわらけ皿	(7.4)	(5.6)	2.1	
45	3面		土器	かわらけ皿	(7.4)	(5.4)	1.9	
46	3面		土器	かわらけ皿	(7.2)	(6.0)	2.1	
47	3面		土器	かわらけ皿	(10.6)	(6.4)	2.9	
48	3面	炭層内	土器	かわらけ皿	11.4	7.8	3.1	
49	3面		土器	かわらけ皿	(11.4)	(7.2)	3.9	
50	3面		土器	かわらけ皿	11.8	7.0	3.2	
51	3面	土丹列南北サブトレ	土器	かわらけ皿	(12.8)	(8.0)	3.3	

筐目遺跡遺物法量表6

No	遺構		器種		法量(cm)			備考
					口径/長さ	底径/幅	高さ/厚さ	
52	3面		土器	かわらけ皿	12.1	7.0	3.5	
53	3面		土器	かわらけ皿	11.6	7.4	3.2	
54	3面		土器	かわらけ皿	12.2	7.0	3.9	
55	3面		土器	かわらけ皿	(12.2)	(8.0)	3.6	
56	3面		土器	かわらけ皿	12.7	8.4	3.6	内外面口縁部スス附着
57	3面		土器	かわらけ皿	12.2	7.5	3.7	
58	3面		土器	かわらけ皿	(21.6)	(7.0)	3.6	外面被熱
59	3面		土器	かわらけ皿	(13.2)	8.0	3.5	
60	3面		土器	かわらけ皿	(12.6)	(9.0)	3.6	
第18図								
1	4面	遺構96	土器	かわらけ皿	11.6	6.8	3.0	
2	4面	遺構114	土器	かわらけ皿	7.6	5.0	2.1	
3	4面	遺構115	常滑窯	甕	16.0	-	[13.1]	
4	4面	遺構118	土器	かわらけ皿	(7.2)	(5.8)	1.5	
5	4面	遺構118	土器	かわらけ皿	(7.0)	4.5	1.7	
6	4面	遺構118	土器	かわらけ皿	(7.2)	(5.6)	1.7	
7	4面	遺構118	土器	かわらけ皿	11.6	8.2	2.9	
8	4面	遺構118	土器	かわらけ皿	12.0	8.2	3.1	
9	4面		青磁	碗	4.3	-	[3.5]	中国龍泉窯
10	4面		常滑窯	甕	14.8	-	[9.9]	
11	4面		常滑窯	甕	6.0	-	[5.2]	
12	4面		土器	穿孔かわらけ皿	7.5	6.4	[1.3]	
13	4面		土器	かわらけ皿	(6.6)	5.4	1.6	
14	4面		土器	かわらけ皿	6.9	4.9	1.8	
15	4面		土器	かわらけ皿	(6.8)	(4.8)	1.6	
16	4面		土器	かわらけ皿	7.6	5.0	1.9	
17	4面		土器	かわらけ皿	7.2	5.3	1.4	
18	4面		土器	かわらけ皿	7.3	5.2	2.0	
19	4面		土器	かわらけ皿	7.5	4.9	1.8	
20	4面		土器	かわらけ皿	(10.6)	(6.4)	2.9	
21	4面	北トレンチ	土器	かわらけ皿	(11.2)	(6.8)	2.9	
22	4面		土器	かわらけ皿	11.0	7.2	3.2	
23	4面		土器	かわらけ皿	11.9	7.8	3.1	
24	4面		土器	かわらけ皿	(12.6)	7.6	3.4	
25	4面		土器	かわらけ皿	(11.2)	(6.4)	3.0	
26	4面		土器	かわらけ皿	12.6	8.6	3.8	
27	4面		土器	かわらけ皿	11.9	8.0	3.8	
28	4面		土器	かわらけ皿	(12.4)	8.0	3.4	
29	4面		鉄製品	釘	6.1	1.0	0.7	

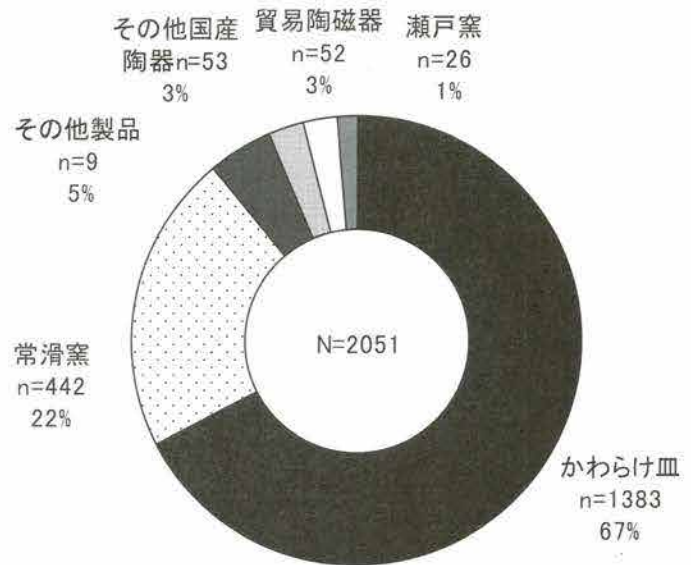
出土遺物

遺物の構成

本遺跡における出土遺物の構成は、貿易陶磁器 3% (52)、常滑窯 22% (442)、瀬戸窯 1% (26)、その他国産陶器 3% (53)、かわらけ皿 66% (1383)、その他製品 5% (95) である。

グラフには含めていないが、この他に、炭化材、動物遺存体、石が出土している。

* () 内は点数



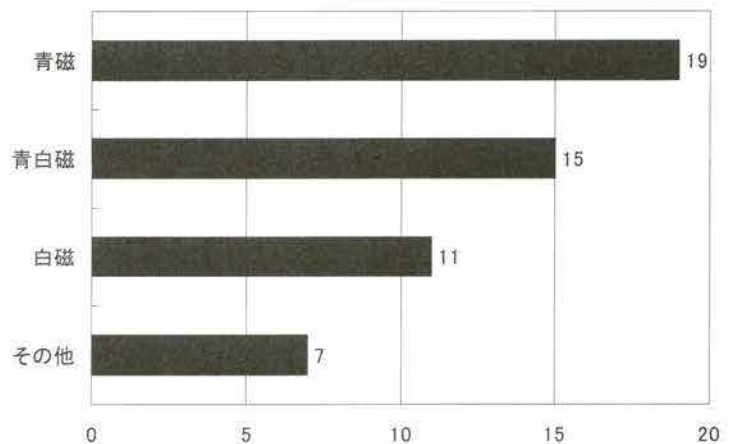
出土遺物の構成

遺物の出土点数

貿易陶磁器

青磁 (19)、青白磁 (15)、白磁 (11)、その他貿易陶磁器には黄釉盤 (5)、緑釉盤 (1)、天目碗 (1) が含まれる。

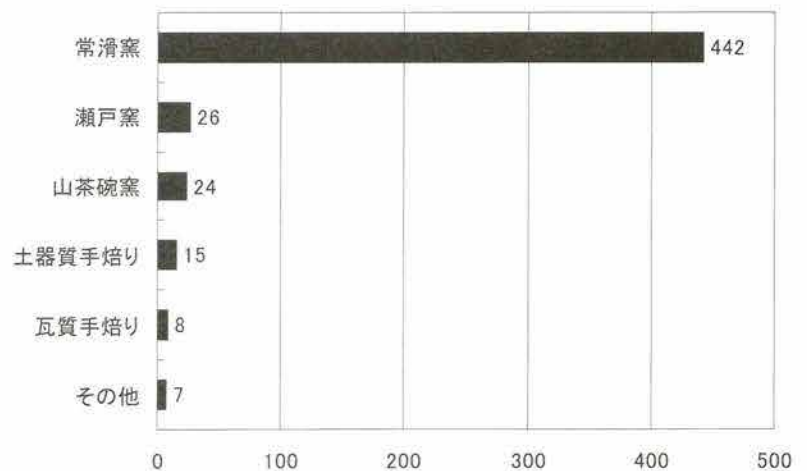
* グラフの単位は点数



貿易陶磁器の構成

国産陶器

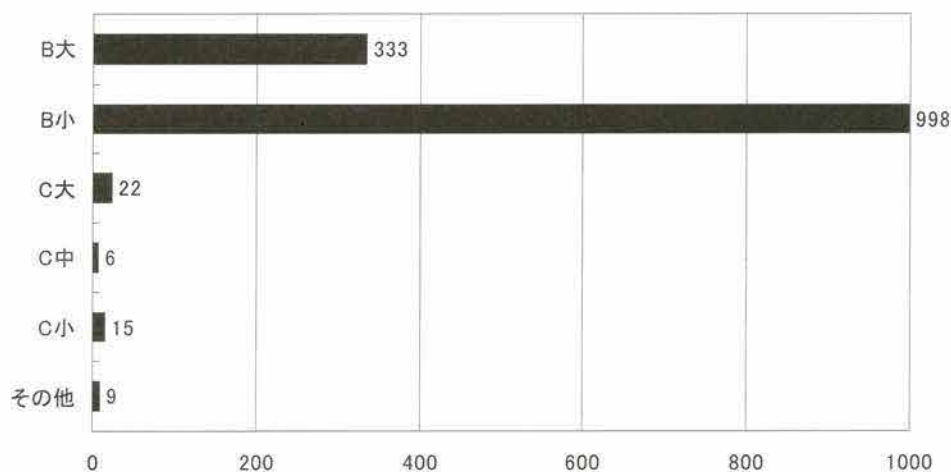
常滑窯 (442)、瀬戸 (26)、山茶碗窯 (24)、土器質手焙り (15)、瓦質手焙り (8)、その他国産陶器には、東濃系黒縁瓦器質碗 (3)、魚住 (2)、渥美、磨常滑 (各 1) が含まれる。



国産陶器の構成

かわらけ皿

B小 (998)、B大 (333)、C大 (22)、C小 (15)、C中 (6)、その他には、白かわらけ皿 (7)、コースター、とりべ (各 1) が含まれる。集計には含めていないが、この他に、D小 20g、E小 40gが出土している。



土器かわらけ皿の構成

その他の製品

金属製品

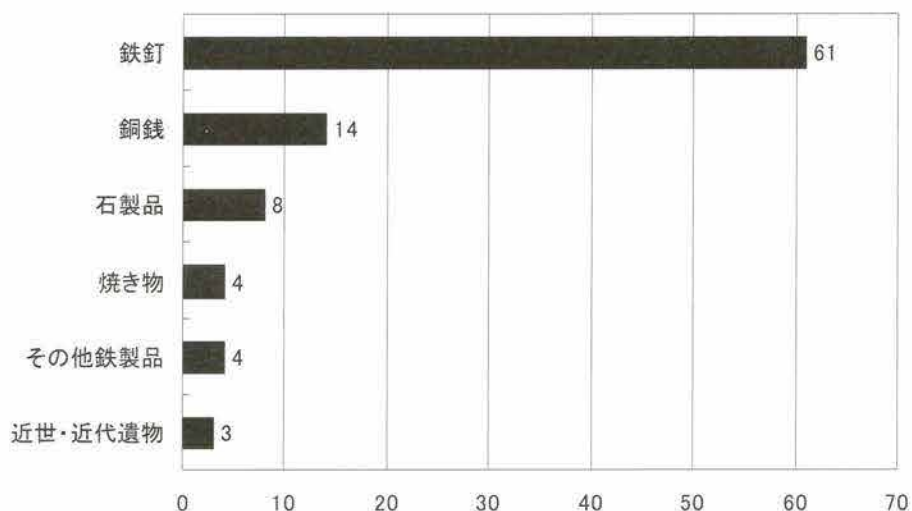
鉄釘 (61)、銅銭 (14)、その他鉄製品には刀子、鉄滓 (各 1) が含まれる。

石製品

天草産砥石 (2)、鳴滝産砥石 (2)、滑石鍋 (3)、滑石スタンプ (1) が出土している。

焼き物

平瓦(1)、瓦質鍋(2)、鞆(1)が出土している。



その他の製品の構成

この他に、近世・近代遺物が 3 点出土している。



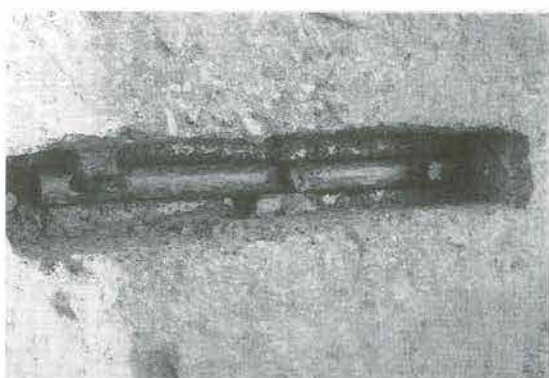
1. I区 1面 (北から)



2. I区 2面 (北から)



3. I区 3面 (南から)



4. I区 遺構 2



5. II区 1面・近代柱穴列 (北から)



6. II区 2面 (北から)



7. イヌ埋葬 2



8. イヌ埋葬 3



1. II区 基壇状遺構 (南から)



2. 同. (南から)



3. 同. 土丹積み (西から)



4. 同. 鎌倉石据え方溝 (西から)



5. 同. 張り出し部 (南から)



6. 同. 張り出し部内側礎石 (北から)



7. 瀬戸小壺出土状況



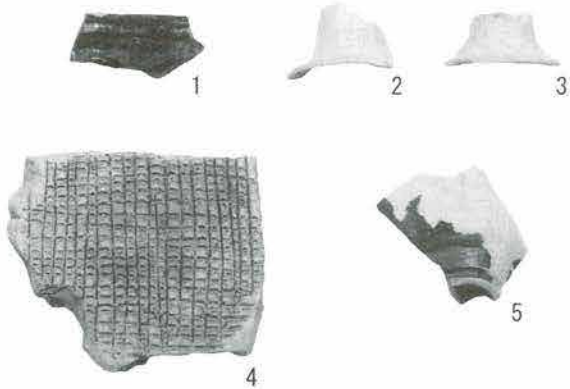
8. I区北壁土層堆積



1. 青磁碗 2. 鉄絵盤 (4面)



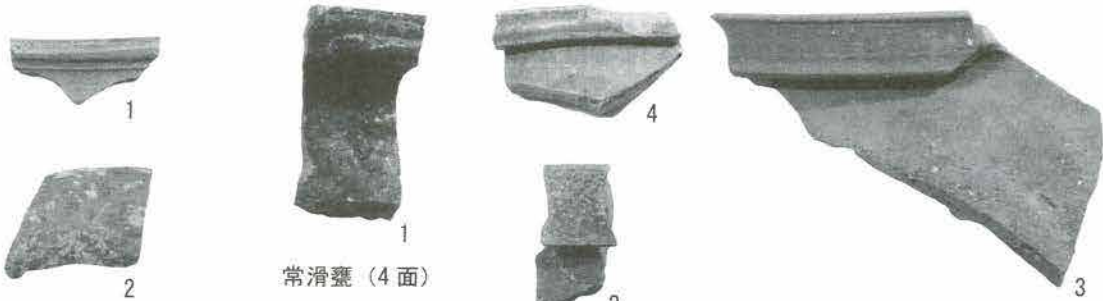
瀬戸小壺 (2面)



1. 緑釉盤 (3面) 2・3. 青白磁瓶 (3面)
4. 瀬戸御目皿 (2面) 5. 瀬戸天目碗 (2面)



常滑有耳壺 (4面)



1. 瀬戸盤 (1面)
2. 瀬戸御目皿 (2面)

常滑甕 (4面)

2・3. 常滑甕 (2面)
4. 渥美甕

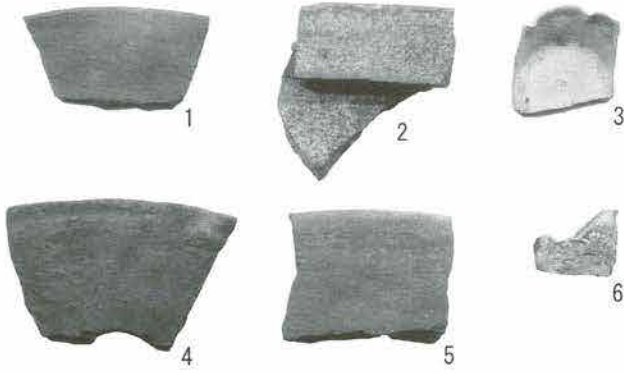


1. 常滑片口鉢 (遺構 56)
2. 土器質火鉢 (3面)

1. 山茶碗窯鉢 2. 瓦質火鉢 (遺構 63)
3. 常滑小壺 (遺構 64) 4. 常滑壺 (遺構 66) 5. 釘 (遺構 66)

3. 常滑甕 (2面)
4. 常滑甕 (1面)
5. 常滑壺 (1面)

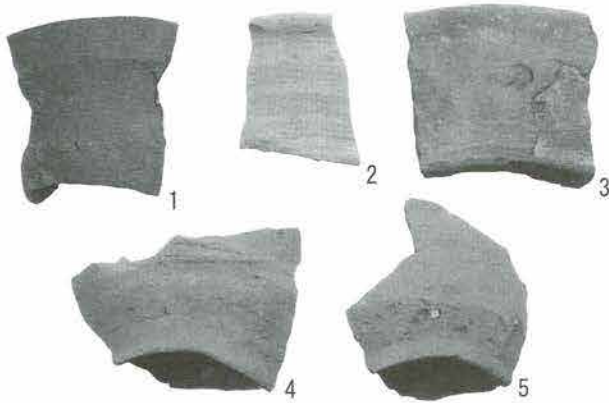
出土遺物 (1)



1. 常滑片口鉢 (遺構 76) 2. 常滑甕 (遺構 76) 3. 瀬戸入子 (遺構 79)
4. 常滑片口鉢 (遺構 91) 5. 土製品火鉢 (遺構 92) 6. 滑石スタンプ (遺構 92)



1・2. 常滑陶片 (2面)



1. 常滑鉢 2. 魚住片口鉢 3. 常滑火鉢
4. 瀬戸片口鉢 5. 山菜碗窯片口鉢 (2面出土)



羽口 (3面)



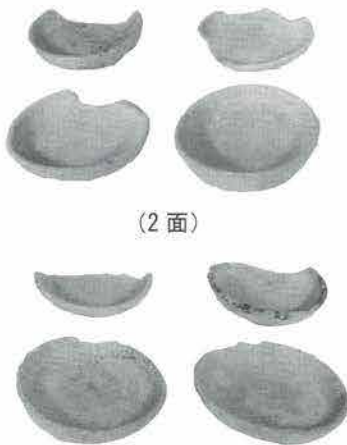
砥石 (3面)



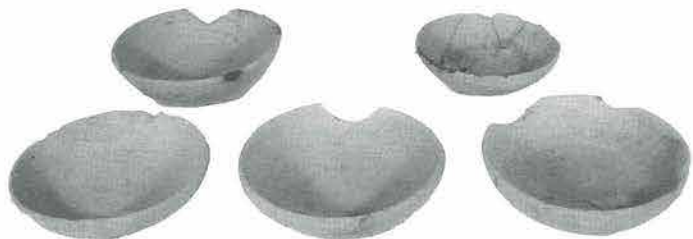
かわらけ (遺構 66)



(3面)



(2面)



(2面)

出土遺物 (2)

じょうみょうじ きゅうけい だい い せき
浄妙寺旧境内遺跡 (No. 408)

浄明寺三丁目115番14外

例 言

1. 本報は、浄妙寺旧境内遺跡 (No. 408) 内の鎌倉市浄明寺三丁目 115 番 14 外における個人専用住宅の新築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告である。調査面積は 28.50 m²。
2. 発掘調査は、平成 17 年 7 月 25 日から 9 月 2 日にかけて鎌倉市教育委員会が実施した。
3. 発掘調査体制は次の通りである。
調査担当者 熊谷満
調査員 伊藤博邦
調査補助員 児玉和彦
作業員 赤坂進、川島仁司
4. 本報作成にあたっての資料整理参加者、および分担は次の通りである。
整理参加者 熊谷満、押木弘己、加藤千尋
遺物洗浄：加藤 遺物分類・実測：押木 遺物トレース、図版・表作成、写真撮影、原稿執筆、編集：熊谷
5. 本報の凡例は次の通りである。
 - ・図版縮尺 調査区配置図：1/500 遺構図：1/60、1/200 遺物図：1/3、1/2
 - ・遺構図版 水系高は海拔標高値を示す。
 - ・遺物図版 - - - は軸葉の範囲、←・→は使用痕の範囲を示す。
 - ・遺物法量表 () は復元数値、[] は残存数値を示す。
6. 本報記載の「土丹」はシルト質凝灰岩、「鎌倉石」は粗粒凝灰岩を示す。
7. 現地調査から本報作成に至るまで、以下の諸氏、諸機関に御教示・御協力を賜った。記して感謝の意を表したい。(順不同、敬称略)
松尾宣方、原廣志、汐見一夫、佐藤仁彦、社団法人鎌倉市シルバー人材センター
8. 本調査に関わる出土遺物、図面、写真などの資料は鎌倉市教育委員会が保管している。

本文目次

第1章 遺跡の立地と環境	233
第2章 調査の概要	235
第3章 検出された遺構と遺物	238
第4章 まとめ	252

挿図目次

図1 調査地点周辺	233	図10 第4面	246
図2 調査区配置図	235	図11 第4面出土遺物	248
図3 堆積土層	236	図12 第5、6面	249
図4 表土掘削時出土遺物	238	図13 第5面出土遺物(1)	250
図5 第1面	239	図14 第5面出土遺物(2)	250
図6 第1面出土遺物	240	図15 周辺地点合成図(1)	253
図7 第2、3面	242	図16 周辺地点合成図(2)	254
図8 第2面出土遺物	244	図17 周辺地点合成図(3)	255
図9 第3面出土遺物	245		

表目次

表1 出土遺物法量表	251	表3 出土遺物構成表(2)	258
表2 出土遺物構成表(1)	257		

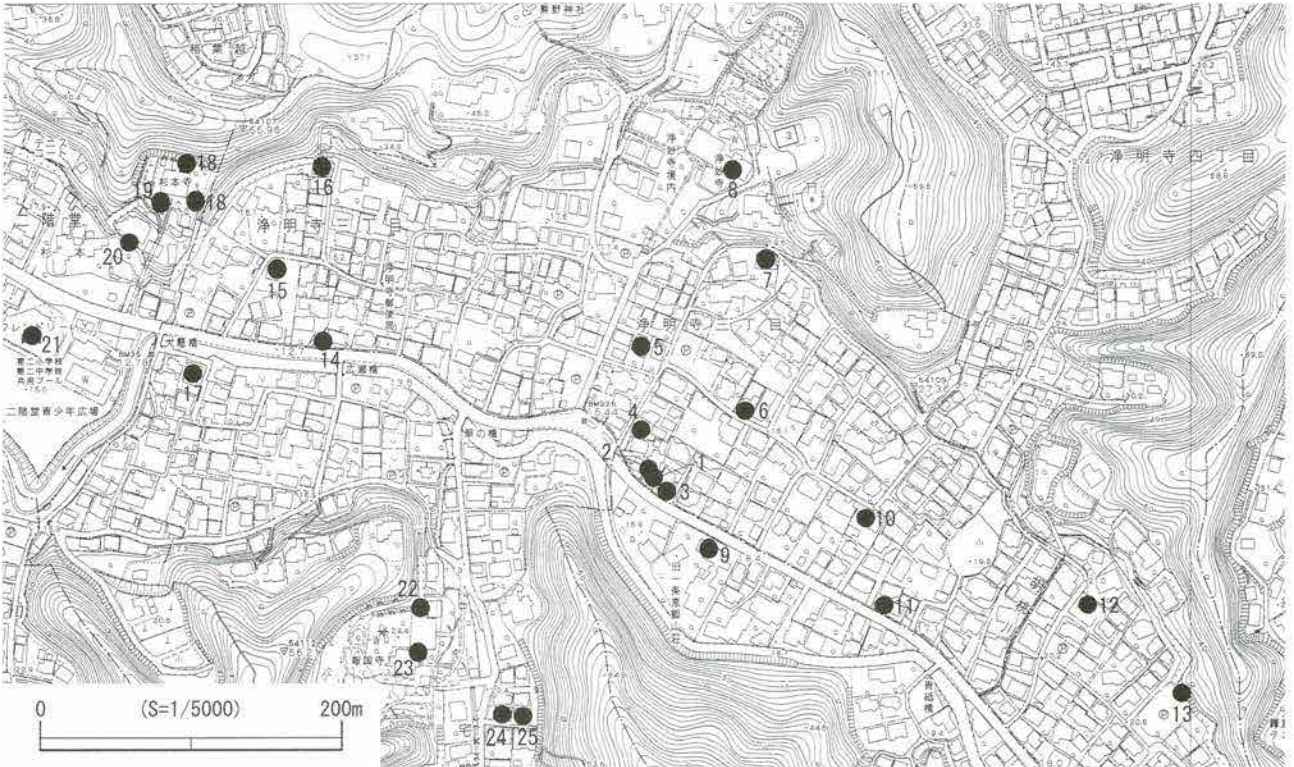
写真図版目次

図版 1	1. 第 1 面 全景……………259	図版 2	2. 第 4 面 溝内板組……………260
	2. 第 1 面 道路側溝土留……………259		3. 第 4 面 土坑……………260
	3. 第 2 面 全景……………259		4. 第 5 面 全景……………260
	4. 第 2 面 柱穴列……………259		5. 第 5 面 南北溝杭列……………260
	5. 第 3 面 全景……………259		6. 第 6 面 全景……………260
	6. 第 3 面 土坑 2……………259		7. 調査区西壁……………260
	7. 第 4 面 全景……………259		8. 調査区北壁……………260
	8. 第 4 面 東西溝……………259	図版 3	出土遺物 (1)……………261
図版 2	1. 第 4 面 溝内敷板……………260	図版 4	出土遺物 (2)……………262

第1章 遺跡の立地と環境

本調査地点は鎌倉市浄明寺三丁目115番14外に所在する、浄妙寺旧境内遺跡(No. 408)の一地点である。鎌倉市街地と横浜市金沢区とを結ぶ県道204号金沢鎌倉線は西流する滑川に沿ってその北側を通っており、本調査地はこれに接続して報国寺へ至る華の橋入口から東へ約140mの地点、金沢鎌倉線に北面して位置している。周辺には浄妙寺・報国寺・杉本寺といった中世に創建された寺院が所在しており、本調査地との位置関係は浄妙寺が北へ約200m、報国寺が南西へ約190m、杉本寺が北西へ約370mを測る。滑川を挟んで南北は丘陵地帯であり、金沢鎌倉線周辺は滑川によって開析された狭隘な低地となっている。調査地の現地表面は、標高約16.0mを測る金沢鎌倉線の道路面より段差を伴って1.8mほど高い位置にあり、段差の露頭で既に中世基盤層となる黒褐色粘質土層が見受けられることから、この部分の現道路が旧地形を切下げて通したものであることが判る。

県道204号金沢鎌倉線は環状4号線を介して東京湾に面した六浦へと通じている。六浦は、中世には東京湾側からの物資流通の拠点となる港湾都市であり、朝比奈切通を抜けて鎌倉へと至る陸路が「六浦



1. 本調査地点
2. 浄明寺三丁目115番3『浄妙寺旧境内遺跡発掘調査報告書』2008
3. 浄明寺三丁目115番2『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書15』1999
4. 浄明寺三丁目101番13『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書22(第2分冊)』2006
5. 浄明寺字向小路90番1『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書7』1991
6. 浄明寺字稲荷小路129番2『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書1』1985
7. 浄明寺三丁目126番『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書21(第2分冊)』2005
8. 浄明寺字向小路78番『鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報I』1983
9. 浄明寺字稲荷小路129番2『神奈川県埋蔵文化財調査報告28』1986
10. 浄明寺三丁目143番2『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書10(第1分冊)』1994
11. 浄明寺三丁目151番1外『公方屋敷跡発掘調査報告書』1996
12. 浄明寺四丁目273番『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書22(第2分冊)』2006
13. 公方屋敷跡内やぐら
14. 浄明寺三丁目6番3外『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書12(第2分冊)』1996
15. 浄明寺三丁目3番2『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書23(第1分冊)』2007
16. 浄明寺三丁目16番1『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書18(第2分冊)』2002
17. 浄明寺字宅間562番33『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書8』1992
18. 二階堂字杉本903番『鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報I』1983
19. 杉本寺境内『中世石窟遺構の調査Ⅲ 平成9年度鎌倉市内急傾斜地崩壊対策事業に伴う発掘調査報告書』1999
20. 杉本寺周辺『杉本寺周辺遺跡内やぐら発掘調査報告書 昭和62年度鎌倉市浄明寺地区内急傾斜地崩壊対策事業にともなう調査』1988
21. 二階堂字杉本912番11ほか『杉本寺周辺遺跡』2002
22. 報国寺境内『報国寺境内やぐら発掘調査報告書 昭和62年度鎌倉市浄明寺地区内急傾斜地崩壊対策事業にともなう調査』1988
23. 浄明寺字宅間533番『鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報I』1983
24. 浄明寺二丁目474番11外『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書23(第1分冊)』2007
25. 浄明寺二丁目474番12『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書23(第1分冊)』2007

図1 調査地点周辺

路」と呼ばれた。北条泰時により仁治元年（1240）設置が計画され、翌年から工事に着手したという。この六浦路は現在の金沢鎌倉線とほぼ同じところを通っていたと考えられている。

稲荷山浄妙寺は、文治四年(1188)に足利義兼が創建したとされる。開山退行行勇、中興開基は足利貞氏。もと鎌倉五山第五位の臨済宗建長寺派。当初は寺号を「極楽寺」と称しており、正嘉元年（1257）から正応元年（1288）の間に現在の「浄妙寺」に改号したらしい。五山に列したのは延文三年（1358）頃で、その当時に最も繁栄したものと推測されている。かつての浄妙寺は、般若池・山門・仏殿・法堂・方丈・庫裡のほか、多くの堂や塔頭、大檀那霊廟などを構える盛観な伽藍であったらしいが、貞享二年（1685）刊の『鎌倉志』では、仏殿・開山塔・鐘楼・稲荷社のほか塔頭の直心庵や延福寺跡・大休寺跡などを伝えるのみである。延福寺は雲谷山と号し足利高義が建立したものとされ、創建年次は未詳であるが室町時代までは存続していたらしい。大休寺は熊野山と号し開基足利直義・開山覚智禪師月山希一と伝える。現在の寺容は「稲荷山」の額をかける門と本堂・客殿・庫裡・再興の喜泉庵や熊野神社などで構成されている。

本調査地周辺では、比較的近接した範囲でいくつかの発掘調査が実施されている。本調査地点のすぐ西に隣接する浄明寺三丁目 115 番 3 地点（図 1-2）では 13 世紀前半～15 世紀前半にわたる 4 枚の遺構面と、部分的なトレンチで基盤層を確認している。多数の柱穴・土坑類などのほか、第 2 面では調査区東端部に道路面とこれに伴う側溝を検出しており、側溝より西に約 2.0 m のところにはこれに平行する礎石列も検出されている。本調査地点約 5 m 東に近接する浄明寺三丁目 115 番 2 地点（図 1-3）では 13 世紀後半～14 世紀初頭にわたる 4 枚の遺構面が検出されており、礎板を伴う掘立柱建物跡などが確認されている。本調査地点約 30 m 北西に位置する浄明寺三丁目 101 番 13 地点（図 1-4）では 2 枚の遺構面が検出されており、13 世紀前半～14 世紀代にわたる多数の柱穴・土坑類などのほか、六浦路に平行すると見られる溝状遺構も検出されている。

引用・参考文献

白井永二『鎌倉事典』 1992 年 東京堂出版

三浦勝男『鎌倉の古絵図 I 鎌倉国宝館図録 第十五集』 1992 年 鎌倉市教育委員会・鎌倉国宝館

『浄妙寺旧境内遺跡発掘調査報告書 -浄明寺 3-115-3 地点-』 2008 年 有限会社鎌倉遺跡調査会

『浄妙寺旧境内遺跡 (No. 408) 浄妙寺三丁目 115 番 2』『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 15 (第 2 分冊)』 1999 年 鎌倉市教育委員会

『浄妙寺旧境内遺跡 (No. 408) 浄妙寺三丁目 101 番 13』『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 22 (第 2 分冊)』 2006 年 鎌倉市教育委員会

第2章 調査の概要

1. 調査の経過と方法

本調査は浄明寺三丁目115番14外地点における、個人専用住宅の建築に伴う埋蔵文化財発掘調査である。現地調査期間は平成17年7月25日から9月2日までの1ヶ月余で、調査面積は28.50㎡。現地表の標高は約17.8mを測る。調査はまず重機により表土・およびその下層となる近世以降の耕作土を除去することから始められ、その後はすべて人力による作業となった。調査の結果8枚の土丹地業面と基盤層となる自然堆積層上面が検出され、各面において遺構を掘削後、測量・写真撮影などの記録保存を行い作業を終了した。

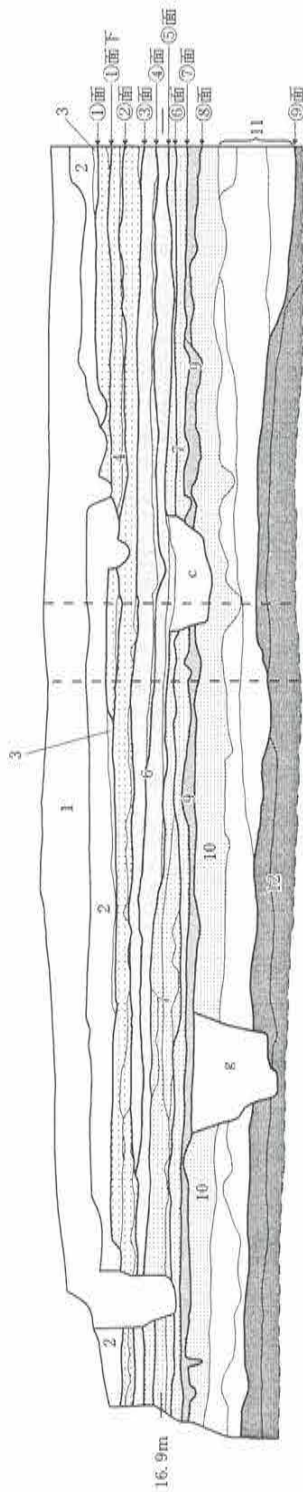
測量に際しては、日本測地系（座標系 AREA9）の国土座標軸を用いてグリッドを設定した。このため本報で用いている方位標の北は真北を示す。世界測地系第IX系の国土座標値に準じて算出した数値は図2に示した。また海拔標高値は、鎌倉市三級水準点 BM326（標高 15.437 m）を基に移設した。

2. 堆積土層

本調査では、計9面の調査を行った。整理作業における検討の結果、このうち一時期の版築と思われる層については一括し、第3章以降は遺構検出面として計6面を提示することとするが、ここでは現地



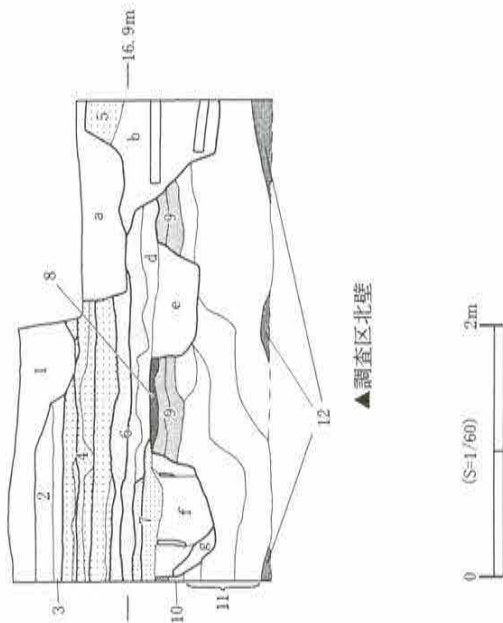
図2 調査区配置図



▲調査区西壁

※○番号の面は現地調査時の検出面

1. 暗褐色土 表土。
2. 暗褐色砂質土 近世耕作土。土丹粒・炭粒を少量含む。
3. 暗褐色土 土丹粒をやや多く含む。中世遺物を含む。
4. 土丹を密に含む地葉層+薄い暗灰色シルト層の互層。第1面道路敷築。
5. 暗褐色土 土丹粒・塊をやや多く含む。暗灰色シルト層の互層。第1面。
6. 土丹を密に含む地葉層+薄い暗灰色シルト層の互層。第2面道路敷築。
7. 土丹を密に含む地葉層+薄い暗灰色シルト層の互層。第3面道路敷築。
8. 土丹地葉層 第4面道路地葉。
9. 黒灰色粘質土 土丹粒を微量含む。褐鉄を少量含む。締まりあり。第4面。
10. 黒褐色粘質土 土丹粒・小塊を少量含む。褐鉄を微量含む。第5面。
11. 腐植土質の暗褐色粘質土+粗粒青黒色砂の互層。斜交葉理認められる。自然木多く含む。
12. 黒褐色粘質土 不純物を含まず。粘性・締まり強い。第6面。



▲調査区北壁

- a. 暗褐色土 土丹粒・塊をやや多く含む。第1面道路東側溝覆土。
- b. 暗褐色土 土丹粒・砂粒をやや多く含む。第2面柱穴列P1覆土。
- c. 暗灰色粘質土 土丹粒・褐鉄を少量含む。粘性やや強く締まり強い。第3面土坑2覆土。
- d. 暗褐色土 土丹粒・炭粒縁倉石細粒を少量含む。締まりあり。
- e. 暗褐色粘質土 腐植土質。土丹粒・塊を少量含む。木片多く含む。締まりやや弱い。第4面土坑覆土。
- f. 暗褐色粘質土 土丹粒・塊を少量含む。粗粒青黒色砂多量混入。第4面道路西側溝覆土。
- g. 黒褐色粘質土 土丹粒・塊を少量含む。褐鉄を微量含む。粘性強い。第5面南北溝覆土。

図3 堆積土層

調査で検出した各面について網羅しておく。

厚さ約 20 cm の表土層を除去すると、標高約 17.6 m で近世以降の耕作土層上面が現れる。明治前期の迅速測図では当地域には田あるいは畑との表記が見られるが、本地点においては畑とみられる耕土の様相であった。

厚さ約 10 cm を測る耕作土の下層には中世遺物包含層が薄く残っている部分が認められる。その下層が人頭大余の大型土丹塊を主体とする地業面となっており、これを①面と呼称した。調査区北部においてのみ認められ、面標高約 17.4 m を測る。厚さ最大約 10 cm を測る①面地業層の下層は、ごく薄い暗灰色シルト質土を挟んで、破碎粗粒凝灰岩を主体とする地業面となっており、これを①面下と呼称した。調査区北半部でのみ認められるものであり、面標高約 17.3 m を測る。厚さ最大約 10 cm を測る①面下地業層の下層もごく薄い暗灰色シルト質土を挟んで大型土丹塊を主体とする地業面となっており、これを②面と呼称した。①面下検出時に、①面下地業範囲より南部で認められた地業面はこの②面となる。②面の標高は調査区南部で約 17.3 m、北部で約 17.2 m を測り、若干北側の方が低い。調査区壁堆積土層の観察の結果、①～②面の直上には耕作土下層の中世遺物包含層が等しく載っており、①・①面下地業層が、北下がりの傾斜となる②面北半部に貼り増しを行った同時期の版築となることが考えられ、ここまですべてを第 1 面と捉えた。

②面地業層は厚さ最大約 20 cm を測り、その下層はごく薄い暗灰色シルト質土を挟んで③面と呼称した大型土丹塊を密に含む地業面となる。面標高は約 17.1 m を測る。③面地業層の厚さは最大約 20 cm を測るが南部ほど薄くなり、南端は下層の④面と呼称した大型土丹塊を密に含む地業面と接合する。④面の標高は調査区南部で約 17.1 m、北部で約 16.9 m を測り、北側の方が低い。③面地業層と④面の間にもごく薄い暗灰色シルト質土層が堆積している部分が認められる。第 1 面の状況を考慮すると、同様に北下がりの傾斜となる④面北半部に③面地業層の貼り増しを行った同時期の版築となるものと考え、③・④面を一括して第 2 面とした。

④面地業層は厚さ最大約 20 cm を測り、その下層はごく薄い暗灰色シルト質土を挟んで⑤面と呼称した拳大余の中型土丹塊を主体とする地業面となる。⑤面の標高は調査区南部で約 17.0 m、北部で約 16.9 m を測り、北側の方が若干低い。⑤面上には南半部で部分的に地業層の貼り増しが認められたが、この貼り増しを除けば標高約 16.9 m でほぼ平坦である。⑤面地業層は厚さ最大約 20 cm を測り、その下層はごく薄い暗灰色シルト質土を挟んで⑥面と呼称した大型土丹塊を主体とする地業面となる。⑥面は標高約 16.8 m でほぼ平坦であるが、これまでの地業面と比較して地業の粗い部分も認められ全体的に均一でないことから、版築の基底部と捉え、この⑤・⑥面を一括して第 3 面とした。

⑥面地業層は厚さ約 10 cm を測り、その直下層が⑦面と呼称した中型土丹塊を主体とする地業面となる。面標高は約 16.7 m で全体的に平坦であり、これを第 4 面とした。

⑦面地業層は厚さ最大約 10 cm を測り、その下層は土丹粒・小土丹を少量含むものの締まりのある黒褐色粘質土で、この上面を⑧面と呼称した。面標高は約 16.6 m で全体的に平坦であり、これを第 5 面とした。

⑧面構成土層は厚さ最大約 20 cm を測り、これより下層の標高約 16.4～16.5 m 以下はかなり乱れた堆積状況を示している。黒褐色粘質土層と青黒色砂礫層が幾層にもわたって互層を成しており、斜交葉理を形成している部分もみられた。また、いずれの堆積層中にも自然木を多く含んでおり、自然流路あるいは氾濫原といった様相を呈している。この下層は締まりの強い黒褐色粘質土となり、面標高は約 16.2 m を測る。土丹粒などの不純物を含まない安定した堆積土で、⑨面と呼称した。これが基盤層であり、第 6 面とした。

第3章 検出された遺構と遺物

第2章で述べたとおり、現地調査時には8枚の地業面と基盤層上面について調査を行ったが、整理作業における検討の結果、合計6面の遺構面に集約して提示することとした。以下に、各面の遺構と遺物についての説明を加えていくこととする。

表土掘削時の出土遺物

第1面直上までは、薄く中世遺物包含層が残っている部分もあるものの、概ね表土層および近世以降の耕作土層が堆積していた。これらの堆積土中からも混入した中世遺物が出土しており、図4-1～15に図示した。

1～7はかわらけ。すべてロクロ成形で底部に回転糸切り痕が残る。8は瓦質輪花形火鉢。体部上位には菊花の印判が捺される。9,10は砥石。9は鳴滝産の仕上砥。10は出羽産の仕上砥。11～13は碁石。すべて黒石。14は鉄製釘。15は銭。「元豊通寶」。

第1面

調査区を南北に貫く状態で、土丹地業による道路面とそれに伴う東側の側溝を検出している。ほか、道路面上より3基のピットと1基の土坑を検出した。側溝より東側の生活面はわずかな一部分しか確認できなかったが、土丹粒・小土丹塊をやや多く含み、暗灰色シルト質土の混入する暗褐色土で構成されているようであった。

[道路遺構]

道路面は調査区ほぼ全域にわたって検出された。破碎粗粒凝灰岩による地業層を基底とし、北半部ではさらに2枚の土丹地業層を貼り増している。最下層の地業面標高が南端部約17.3m・北端部約17.2

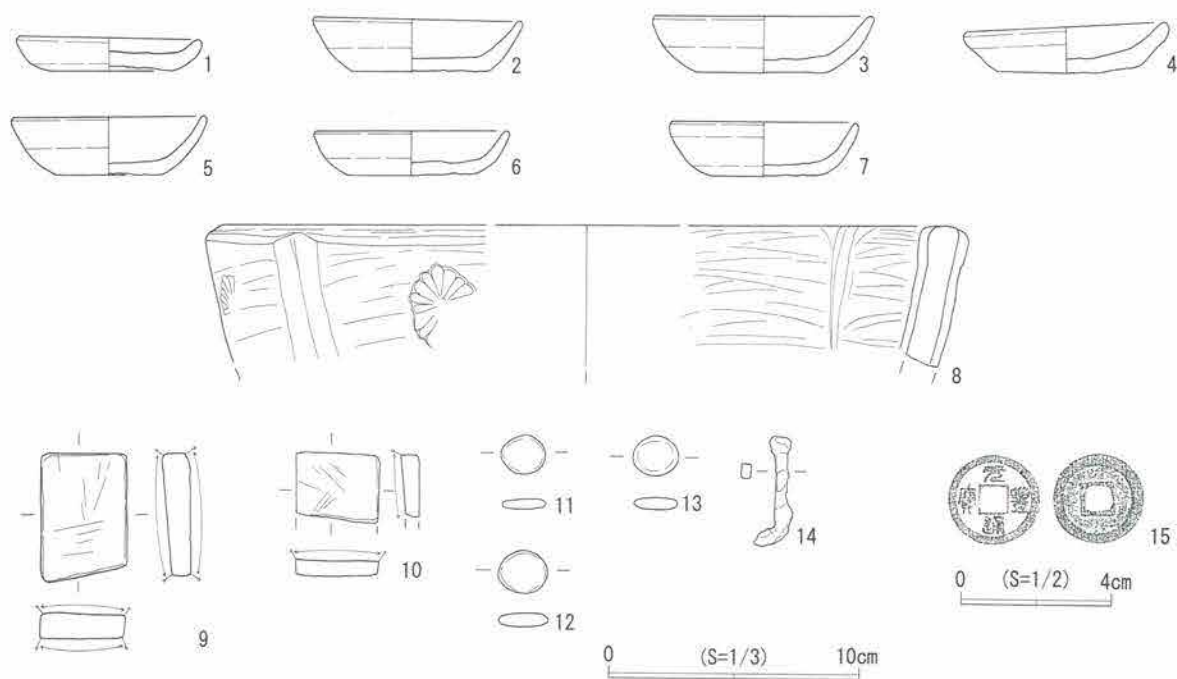
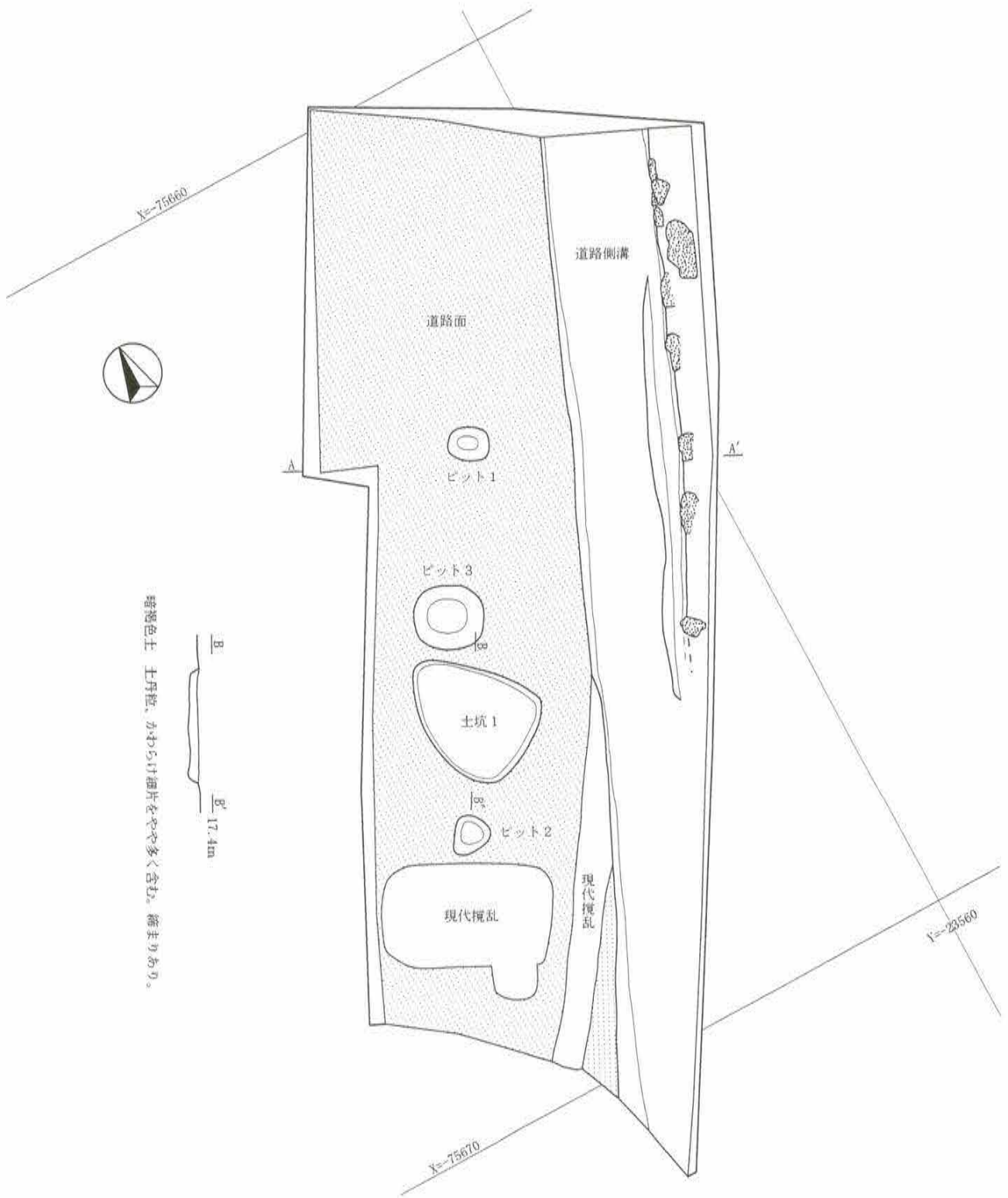


図4 表土掘削時出土遺物



暗褐色土 土丹粒、かわらけ細片をやや多く含む。締まりあり。

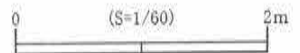
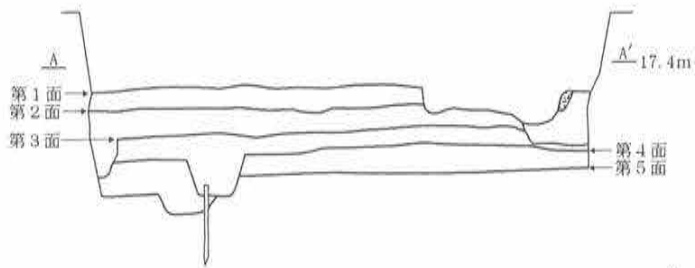


図5 第1面

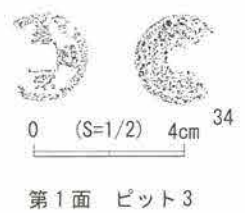
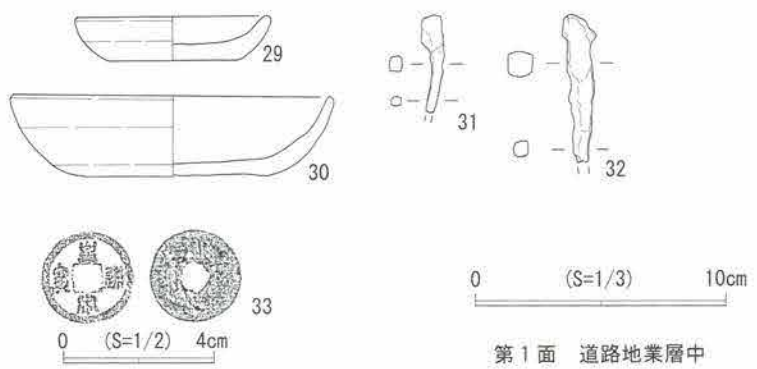
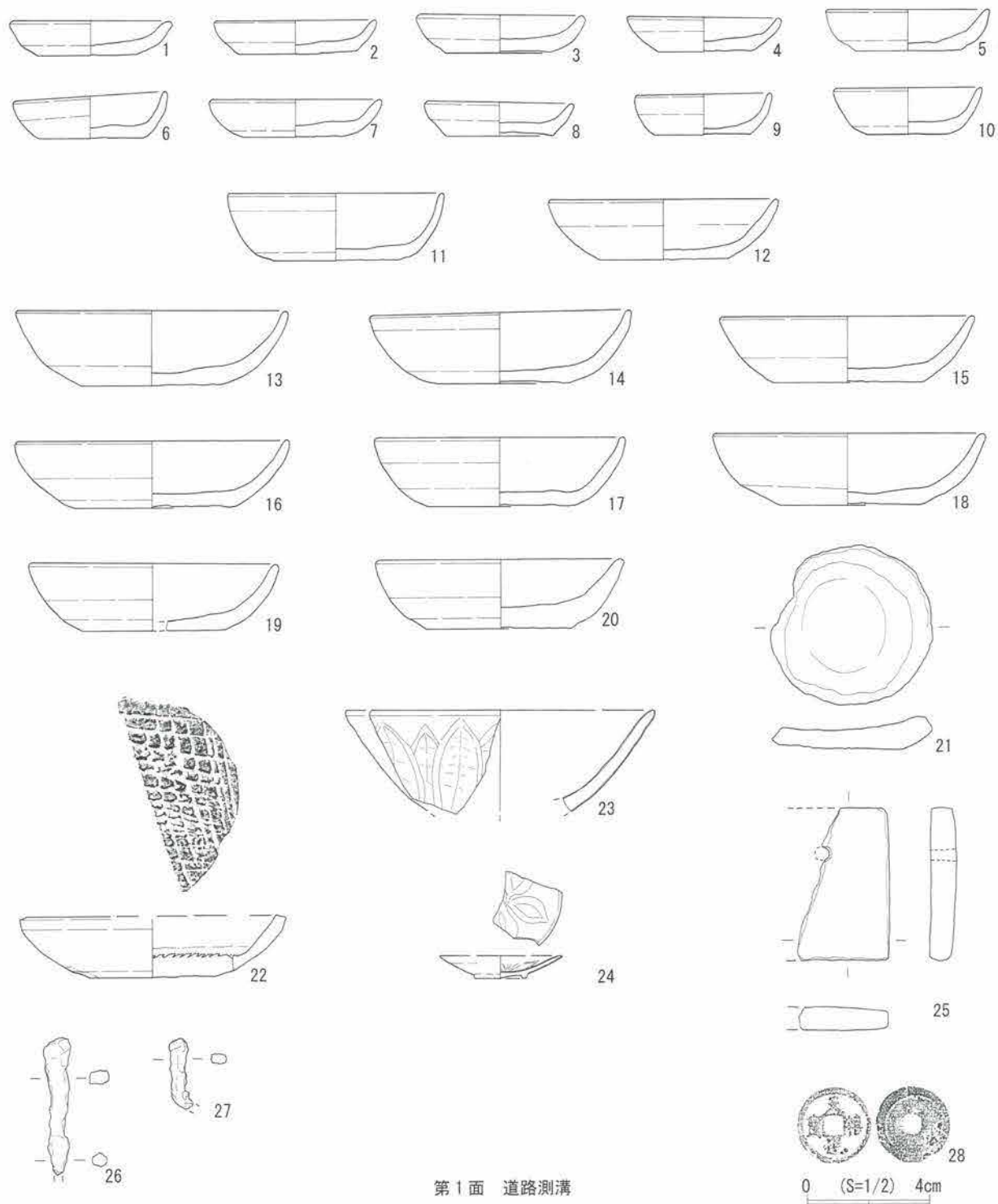


図6 第1面出土遺物

mを測り、北部ほど若干低くなっているが、丘陵へ向かって高まる地形に合わせて北部に地業層を貼り増したものだろう。最下層の地業層が南部ほど高まってくるのは、その下層の地形に影響されたものではないことが後の堆積土層の観察から確認できるため、地業を行う工程上の都合によるものではなかったかと思われる。路面標高は南端部約 17.3 m・北端部約 17.4 mを測り、北部の方がやや高まる。路面幅員は西側が調査区外となってしまうが、少なくとも 2.6 m以上を測る。

道路に伴う東側溝は調査区東部において検出された。調査範囲においてはきわめて直線的に延びており、主軸方位はN-22°-Eを測る。土丹粒・小土丹塊をやや多く含む暗褐色土の覆土をもつ。規模は幅約 110 cm×道路面からの深さ最大約 50 cmを測る。底面標高は北端約 16.9 m・南端約 17.0 mを測り、調査範囲内での流下方位は北と判断される。側溝東肩部では、抜けている部分が多いものの壁面や肩部上に土丹・鎌倉石を並べている様子が見て取れた。また、東壁直下部分が細い溝状に浅く掘り窪められており、この部分にも鎌倉石などの土留め施設が設けられていた可能性がある。側溝西肩部は壁面に板材の痕跡らしきものが散見されたが、ほとんど土壌化しており明らかでなかった。

遺物は側溝中から多数、また地業層中からも若干出土している。側溝中出土遺物は図 6-1～28 に図示した。1～20 はかわらけ。すべてロクロ成形で底部に回転糸切り痕が残る。21 はかわらけ加工品。体部を打ち欠いて底部を円形に残した円盤状のもので、用途は不明。22 は瀬戸卸皿。口縁部片と底部片は接合関係にないが同一個体と思われるため、復元して図示した。23 は青磁碗。鎬蓮弁文が陽刻された口縁片。24 は白磁小皿。内底面に花の文様が陰刻される。25 は温石。滑石製の石鍋を転用したもの。上部には紐を通すための穿孔が認められる。26, 27 は鉄製釘。28 は銭。「天禧通寶」。地業層中の遺物は図 6-29～33 に示した。29, 30 はかわらけ。いずれもロクロ成形で底部に回転糸切り痕が残る。31, 32 は鉄製釘。33 は銭。「皇宋通寶」であろう。

[土坑・ピット]

土坑・ピット類はいずれも道路面上から検出された。土坑 1 及びピット 1・2 は、土丹粒やかわらけ細片をやや多く含む暗褐色土を覆土にもち、その土質は直上層の遺物包含層に近似する。いずれも深さ 10 cm程度と浅いものであり、人為的に掘り込んだものではないのかもしれない。

ピット 3 は調査区中央付近で検出された。覆土は上層に土丹・鎌倉石小塊を密に含み、下層は砂礫混じりの締まりない黒褐色粘質土となっている。覆土上層の土丹塊が道路面より上部へ突き出しており、近世以降の削平によって失われてしまったであろう中世面より掘り込まれたものである可能性が高い。規模は直径約 70 cm×検出面からの深さ約 60 cmで、底面標高約 16.65 mを測る。

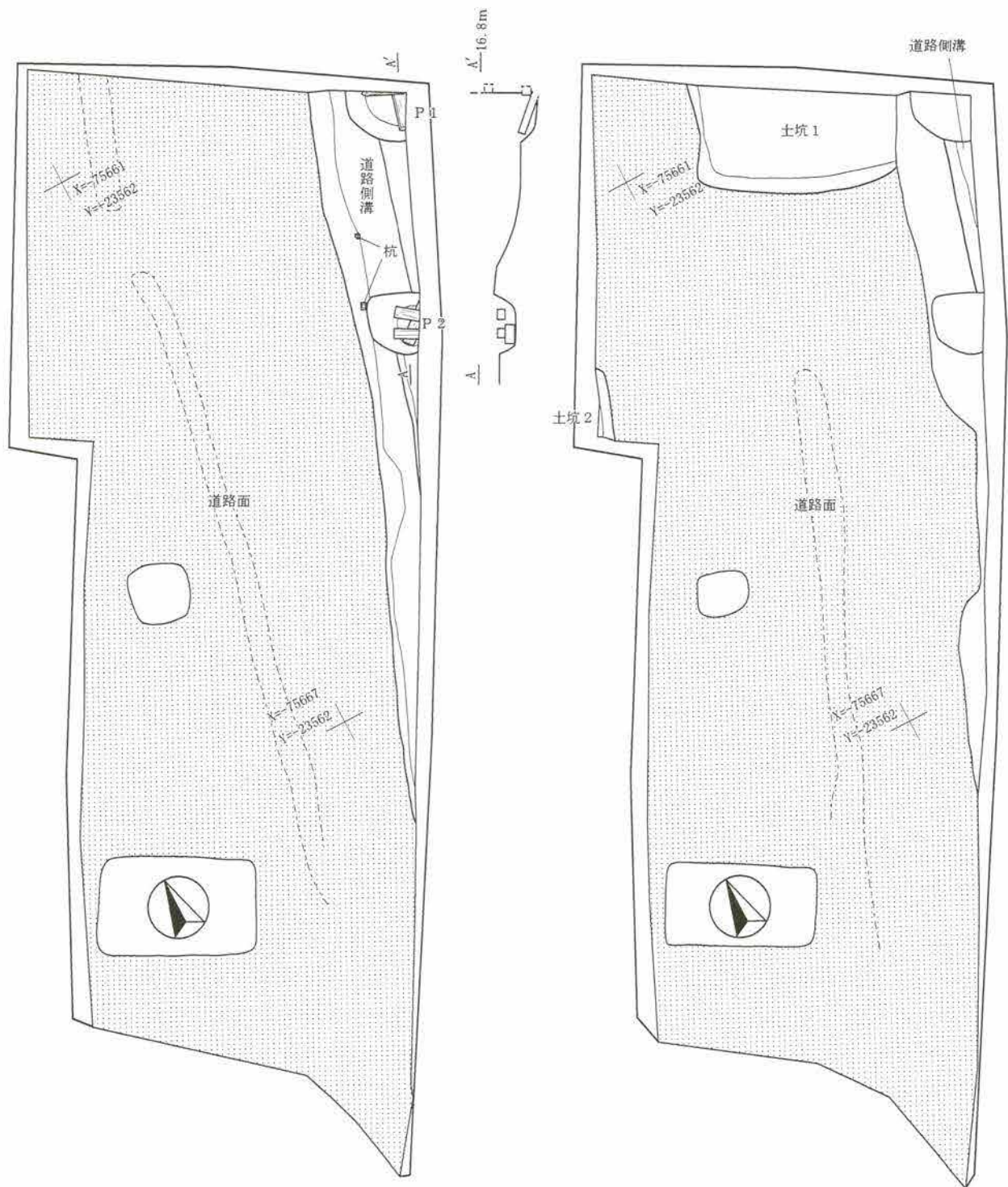
ピット 3 からはかわらけのほか常滑甕、瓦器碗、銭を出土しているがほとんどが小片であり、図示できた出土遺物は図 6-34 のみである。34 は銭。「皇宋通寶」。

第 2 面

調査区を南北に貫く状態で、土丹地業による道路面とそれに伴う東側の側溝を検出している。ほかに礎板を伴う柱穴列を検出した。

[道路遺構]

道路面は調査区ほぼ全域にわたって検出された。大型土丹地業層を基底とし、北半部にもう 1 枚の土丹地業層を貼り増している。下層の地業面標高が南端部約 17.1 m・北端部約 16.9 mを測り、北部ほど若干低くなっているが、第 1 面検出の道路面と同様に、丘陵へ向かって高まる地形に合わせて北部に地業層を貼り増したものと推測される。路面標高は南端部約 17.1 m・北端部約 17.1 mを測り、ほぼ平坦といえる。路面西側が調査区外となってしまうものの、幅員は少なくとも 3.4 m以上を測る。



▲第2面

▲第3面

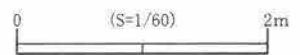


図7 第2、3面

道路に伴う東側溝は調査区東端で検出された。西肩部にやや崩れなどみられるものの概ね直線的に延びており、主軸方位はN-21°-Eを測る。土丹粒・砂粒をやや多く含む暗褐色土の覆土をもつ。調査区東端付近で底面がさらに一段落ち込むが、これは下面の遺構を同時に掘り上げてしまったものと思われる。このため側溝東肩部は検出できず、幅は不明である。道路面からの深さは最大約30cmを測る。底面標高は北端約16.7m・南端約16.8mを測り、調査範囲内での流下方位は北と判断される。側溝西肩部では壁面直下に、遺存状況が良好とはいえないものの杭が2本検出されている。板材による土留めがされていたものと考えるが、板材そのものは検出されなかった。

遺物は側溝中から多数、また地業層中からも出土している。側溝中出土遺物は図8-1～13に図示した。1～11はかわらけ。すべてロクロ成形で底部に回転糸切り痕が残る。7は口唇部に油煙が付着し、灯明皿に転用されたもの。8は口縁部の一端を内側へ折り曲げたもの。9は口縁の一部を打ち欠いたもの。11はコースターと呼称している極小型のかわらけ。12は常滑片口鉢の口縁片。13は青磁瓶子の頸部片。地業層中の遺物は図8-14, 15に示した。14は山茶碗窯片口鉢の転用品。15は常滑甕の転用品。14, 15とも研磨に用いたものと思われる、端部や器表面などに摩滅痕・擦痕が残る。

[柱穴列]

調査区東壁にかかる状態で南北一間分の柱穴P1・P2の2基が検出されており、いずれの柱穴も道路東側溝へ入り込んで位置し、底面に9cm角余の角材を数本寝かせて据えている。柱間約220cmを測り、主軸方位はN-22°-Eを測る。P1・P2とも調査区外へ延びるため平面規模は明らかでないが、側溝底面より角材上面まではP1が深さ約30cmで角材上面の標高約16.4m、P2が深さ約10cmで角材上面の標高約16.6mを測り、P2が20cmほど高い。またP1では、底面に据えた角材より約30cm高い位置にも寝かせた状態の角材を検出したが、調査区北壁面でその一部を確認したのみであり、詳細は不明である。道路東側溝との重複関係についても捉えることができなかったが、P1の上位で検出された角材上面が側溝底面より半ば突き出す高さにあり、側溝より先行する時期のものとは考えにくい。少なくとも第1面構成土より先行する時期のものであることが調査区北壁の堆積土層から確認できることから、第2面道路遺構と同時期か、あるいはそれが廃棄された後の比較的短期間に構築されていたものと捉えておきたい。柱穴列はこれより西への広がりは見られないが、北・東・南へは広がる可能性がある。

P2から遺物は出土しなかったが、P1からはかわらけ、常滑甕、瓦、青磁碗を出土している。図示できたものを図8-16に示した。16は常滑甕体部片。格子状の印判が捺される。

[遺構外出土遺物]

第1面から第2面への掘り下げに際して、道路遺構外より出土した遺物で、図8-17～20に図示した。17, 18はかわらけ。いずれも底部ロクロ糸切りによるもの。19は山茶碗窯片口鉢の底部片。20は丸瓦。

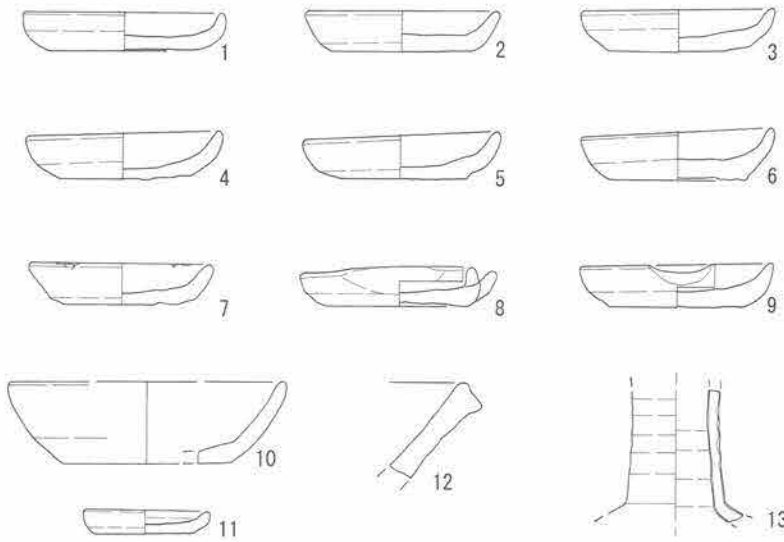
第3面

道路遺構と思われる土丹地業面と、土坑を検出している。

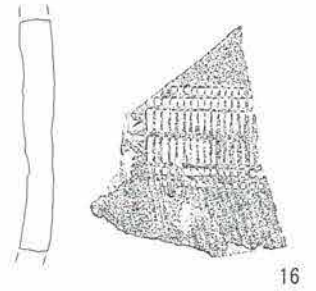
[道路遺構]

調査区ほぼ全域にわたって検出された。調査区東部は上面の道路側溝により失われている。大型土丹塊を主体とする上面のやや荒れた地業層を基底とし、上層に拳大余の中型土丹塊を主体とする地業層が版築される。上層地業層は南部でさらに部分的に貼り増しが認められる。下層の地業面は標高約16.8mでほぼ平坦であるが、上層の地業面標高は調査区南部で約17.0m、北部で約16.9mを測り、北側の方が若干低い。南部に貼り増しされた部分を除けば標高約16.9mでほぼ平坦である。

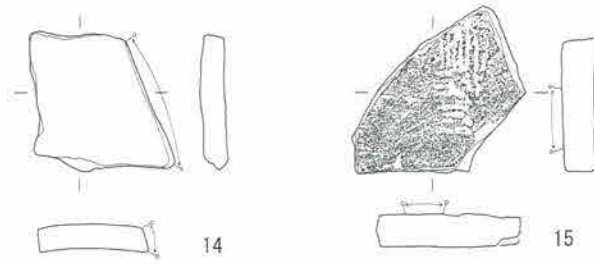
本址に伴うものとして明確に捉えたものではないが、第2面から第1面へと道路東側溝が西へ移動し



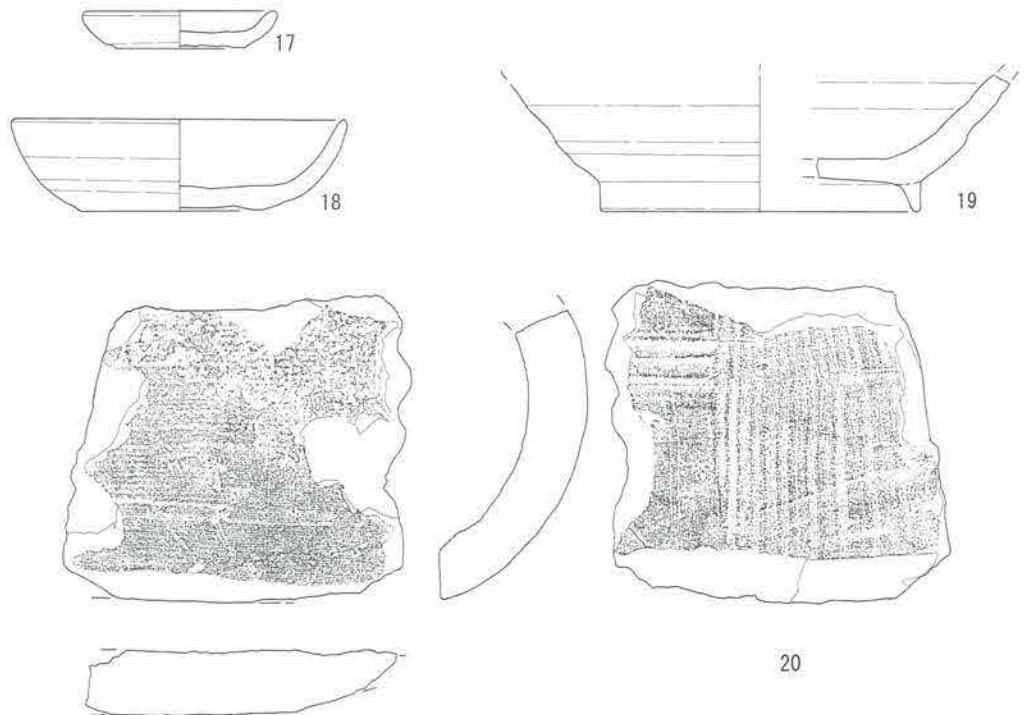
第2面 道路測溝



第2面 P1



第2面 道路地業層中



第2面 遺構外

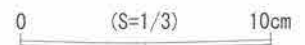


図8 第2面出土遺物

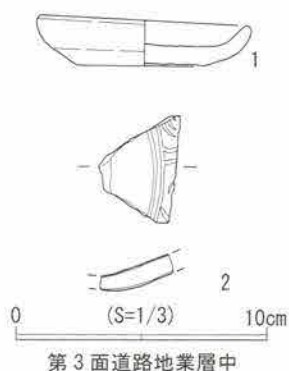


図9 第3面出土遺物 [土坑]

土坑1は調査区北端で検出された。東端は上面遺構により失われ、北部は調査区外となるが、検出範囲における最大規模は東西約200 cm×南北約110 cm、検出面からの深さ約15 cmを測る。立ち上がりの緩い浅い窪地状を呈しており、人為的に掘り込んだものではないかもしれない。かわらけのほか、常滑甕・片口鉢、山茶碗窯片口鉢、白磁皿を出土しているが、いずれも細片であり図示しなかった。

土坑2は調査区西端の張出し部南西角で検出された。南・西部が調査区外となるが、検出範囲における最大規模は東西約20 cm×南北約70 cm、検出面からの深さ約35 cmで、底面標高約16.5 mを測る。わずかに一部分を検出したに過ぎないが南北に方向性を有するように思われ、主軸方位はN-21°-Eを測る。

第4面

調査区を南北に貫く状態で、土丹地業による道路面とそれに伴う西側の側溝を検出している。ほか、東西溝と土坑を検出した。道路側溝より西側の生活面は土丹粒を微量含む暗灰褐色粘質土で、上面は部分的に褐鉄化している様子が見られた。

[道路遺構]

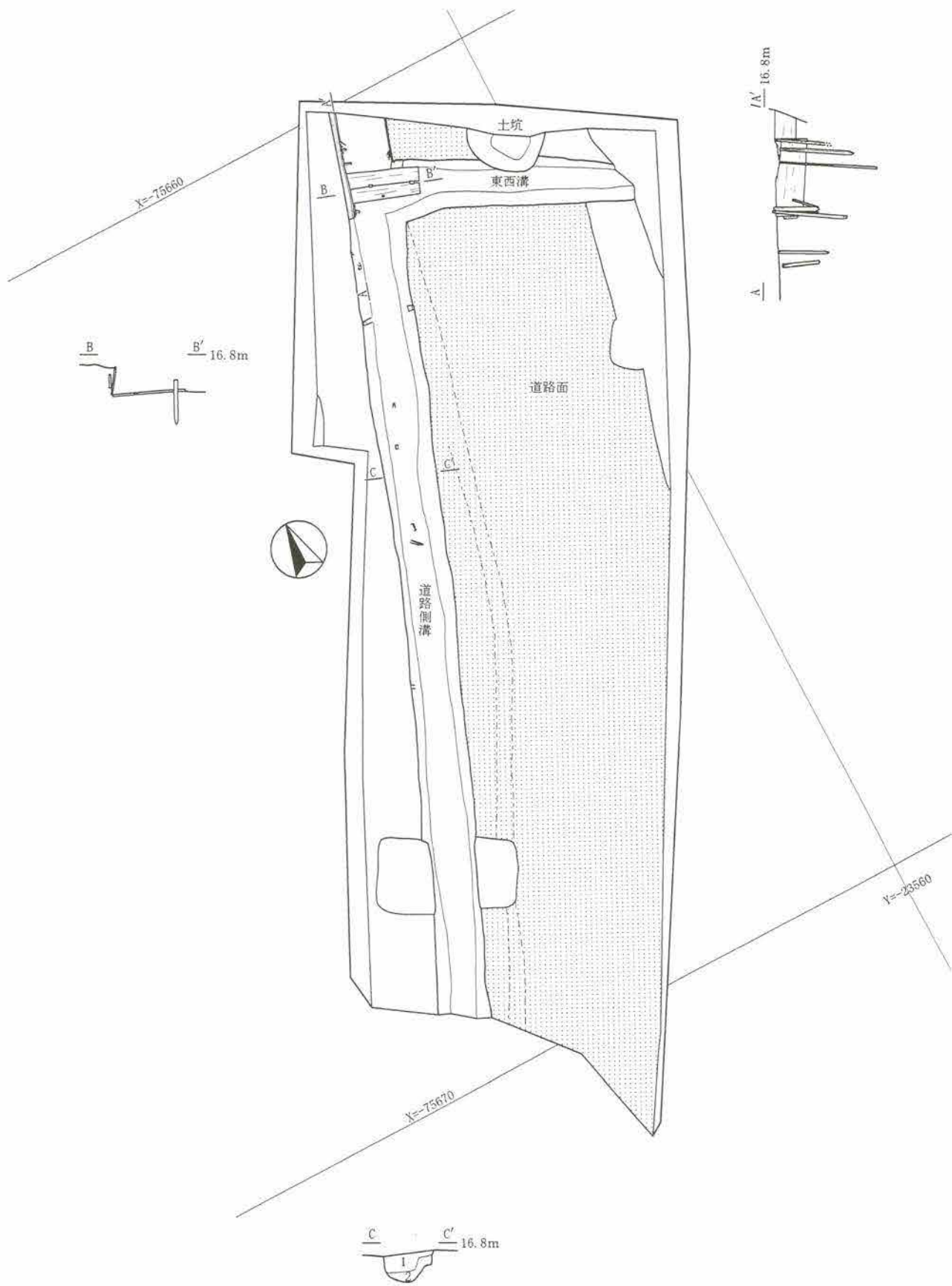
調査区ほぼ全域にわたって検出された。拳大ほどの土丹塊を主体とする地業面である。路面標高は約16.7 mで全体的に平坦である。路面東側は上面遺構によって失われているものの、幅は少なくとも2.4 m以上を測る。

道路に伴う西側溝は調査区西部で検出された。北西方向から南西方向へごく緩く湾曲しているもののほぼ直線的に延びており、全体的にみた主軸方位はN-20°-Eを測る。多量の砂礫と少量の小土丹塊を含む青灰色粘質土の覆土をもつ。規模は幅約60 cm×道路面からの深さ約40 cmを測る。底面標高は北端約16.4 m・南端約16.5 mを測り、検出範囲内での流下方位は北と判断される。調査区北端部付近では側溝両壁面に横板・杭による土留めが遺存しており、東西土留め板材の内法は約50 cmを測る。また、土留め板の主軸方位はN-17°-Eを測る。

出土遺物は図11-1～7に図示した。1,2はかわらけ。いずれも手づくね成形。3はかわらけ加工品。体部を打欠いて底部を残した円盤状のもので、用途は不明。4～6は瓦。すべて平瓦。7は木製の板草履。

[東西溝]

調査区北部で、道路面を横断する状態で検出された。直線的に延びており、主軸方位はN-64°-Wを測る。東部は上面遺構によって失われており、西部は道路西側溝に接続したところより西へは延びない。規模は幅約50 cm×道路面からの深さ約30 cmを測る。底面標高は東端約16.5 m・西端約16.4 mを測り、流下方位は西と思われる。俗に「マグソ」と呼称している、土壌化した腐植有機物による締まりのない茶褐色粘質土の覆土をもつ。遺構確認時における道路西側溝との重複関係は本址が先行する時期



1. 青灰色粘質土 土丹粒を少量含む。上位に総鉄を少量含む。縮まりあり。
2. 黒褐色粘質土 土丹・破砕鎌倉石塊を含む。縮まりあり。

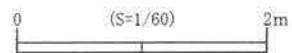


図 10 第 4 面

のものとは判断されたが、道路西側溝との接続部分底面には長さ 76 cm×幅 31 cm×厚さ 2 cmの板材が東西方向を長軸として1枚敷かれており、これが両溝に跨る状態で検出された。敷板はやや西に傾いているが、上面の標高は概ね約 16.4 mを測る。西端部が道路側溝西側板下端角部と接しており、東端は本址にやや入り込んでいる。中央の東西にはほぞ穴が穿たれ、東側のほぞ穴は杭を打ち込んで留められていた。敷板西端に接する部分の道路側溝西側板は、内面を長さ 81 cm×幅 25 cm×厚さ 2 cmの横板で2枚重ねとし、この横板の西端部を4本、東端部を3本の杭で強固に留めている。また両溝の接続部北東角では、調査区外北より延びる道路側溝東側板が接続部分で止まっており、その端部に重なる状態で東西溝北壁に沿って幅 13 cmの板杭が打ち込まれていた。これらのことから考えると、覆土には明らかな廃棄時期の差が認められるものの、両溝は同時期に使用されていたこともあったと推測される。

敷板の性格については類例が無く判然としない。東西溝の西延長にあたる道路側溝西側板を2枚重ねとしていることから、この面には補強の必要なほど圧力がかかることがあったと推測される。東西溝からの流れがこの面に当り、南北へと流れを変えるときに生ずる水流によって溝底面が削り取られてしまうのを防ぐために敷板を設けたものかもしれない。あるいは、道路側溝との境界部分で覆土の明らかな差異が見られることを考慮すると、東西溝の出水口に堰のような施設が設けられており、敷板はそれに伴うものであった可能性も考えられるが、その場合どのような構造であったか想定することは難しい。

出土遺物は図 11-8～13 に図示した。すべて木製品で、8～10 は箸。11, 12 は板草履。13 は刀子の鞘。
[土坑]

土坑は調査区北端で検出された。北部は調査区外となるが、検出範囲における最大規模は東西約 80 cm×南北約 50 cm、検出面からの深さ約 40 cmで、底面標高約 16.3 mを測る。覆土は東西溝と同様の、土壌化した腐植有機物による茶褐色粘質土である。南端部が東西溝と重複しており、遺構確認の段階で東西溝が本址に先行する時期のものであることが判った。

出土遺物は図 11-14～19 に図示した。すべて木製品で、14 は漆器皿。黒漆地で、内外面に朱漆による葵文の印判、および蔓草が手描きで施文される。底部は畳付をわずかに削り残した輪高台となっている。15 は漆器碗底部片。黒漆地で、内面のみ朱漆によってシダ植物が手描きで施文される。16～19 は箸。

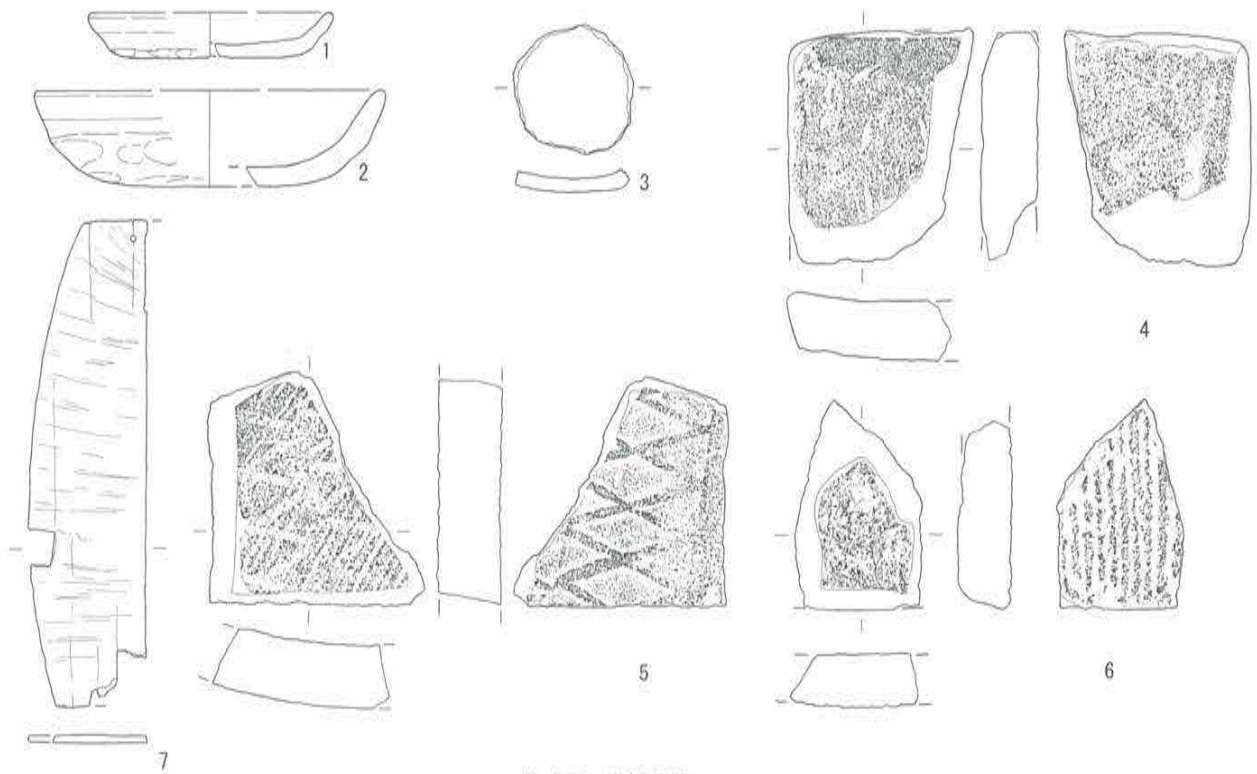
第5面

調査区を南北に貫く状態の溝を検出している。溝より西側の遺構面は土丹粒を少量含む黒褐色粘質土で、東側は砂礫・シルトを多量含む締まりの良い暗褐色粘質土で構成されていた。検出面標高約 16.5 mを測る。

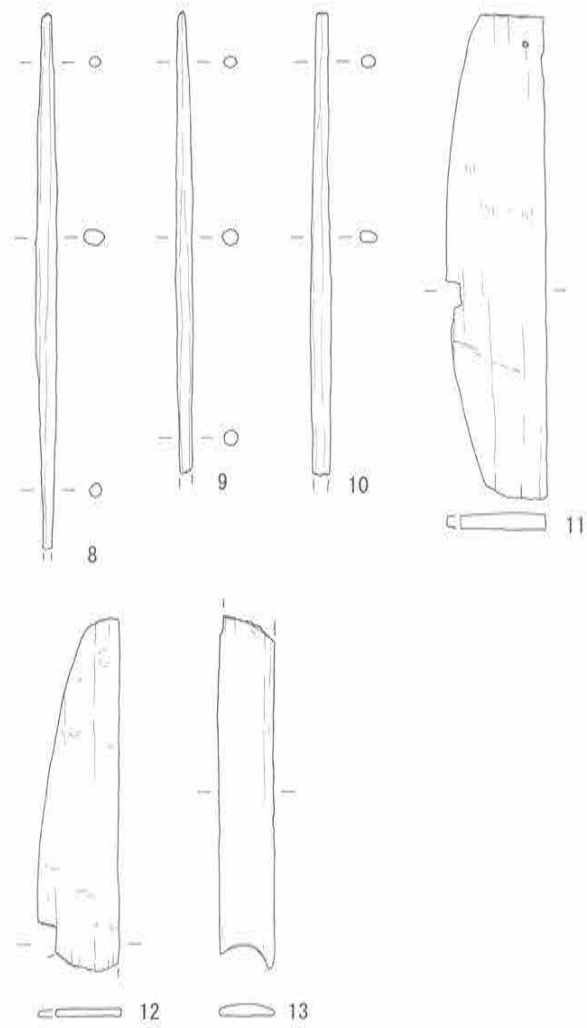
[南北溝]

調査区西部で検出された。ほぼ直線的に延びており、主軸方位はN-22°-Eを測る。土丹粒・破碎粗粒凝灰岩粒を少量含む粘性強い黒褐色粘質土の覆土をもつ。規模は幅約 60 cm×検出面からの深さ約 30 cmを測る。中央よりやや南部では、西へ分岐するような状況が確認された。底面標高は分岐部分より北側が約 16.2 mでほぼ平坦であり、分岐より南側は南端約 16.1 mを測り南への流下方位を示している。溝底面の東西端に多数の杭が遺存しており、板材による土留めがされていたものと推測されるが、板材は検出されなかった。

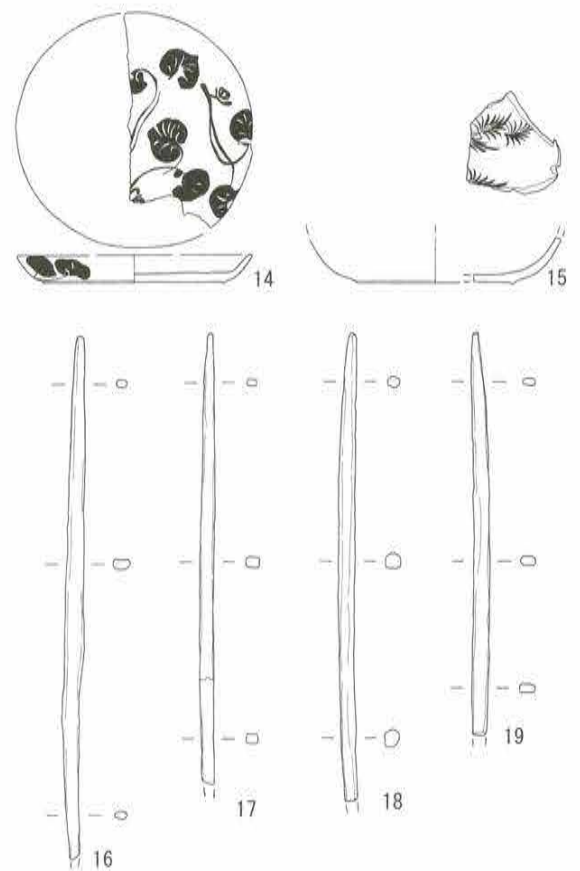
本址より西側と東側では遺構面の構成土が全く異なっている。後に調査区壁の堆積土を観察したところ、東側の面構成土は自然流路、あるいは氾濫原堆積と思われる自然堆積層のようであった。西側は地業によるものか判然としない少量の土丹を含む黒褐色粘質土であり、本址はこの境界部分に開削されている。第1面から第4面までの様相を考慮すると、本址より東側が道路面であったことも考え得るが、



第4面 道路側溝



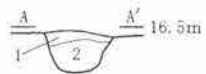
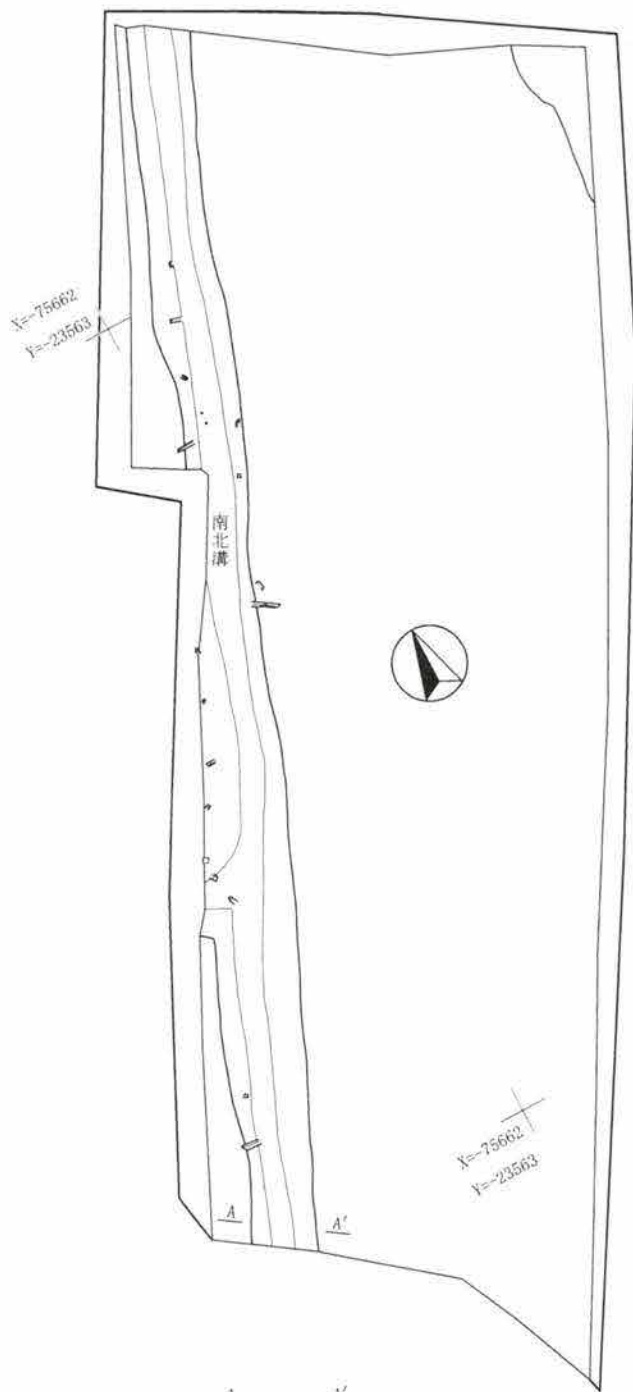
第4面 東西溝



第4面 土坑

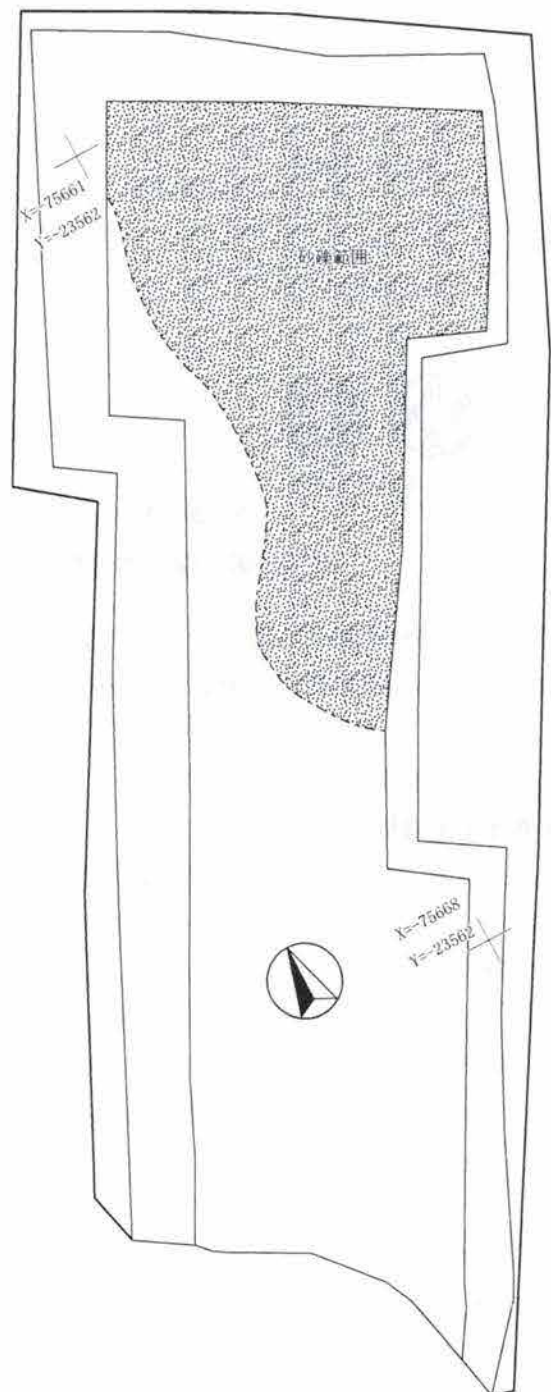
0 (S=1/3) 10cm

图11 第4面出土遺物



1. 黒褐色粘質土 土丹・破砕鎌倉石粒をやや多く含む。縮まりあり。
2. 黒褐色粘質土 土丹粒・塊を少量含む。粘性強く、縮まりあり。

▲第5面



▲第6面

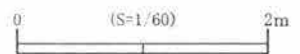


図12 第5、6面

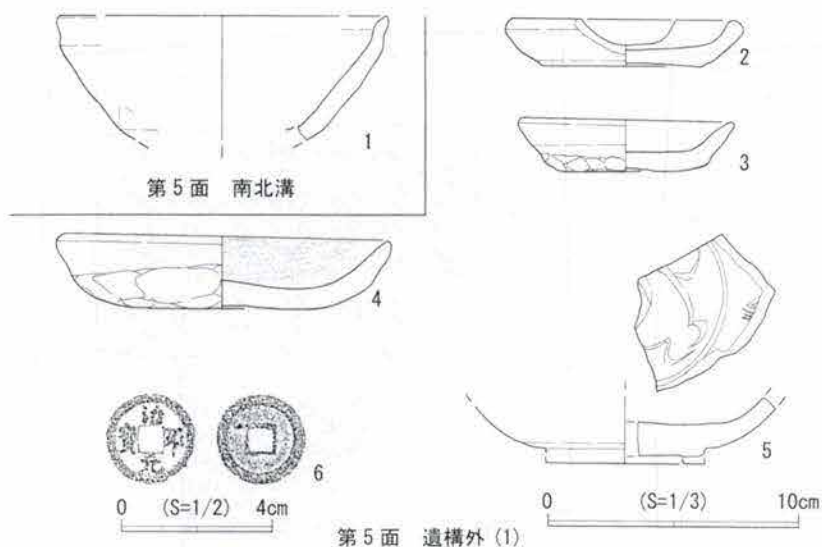


図 13 第 5 面出土遺物 (1)

上面を叩き締めた様子も窺うことはできず明らかでない。

遺物はかわらけのほか常滑甕、山茶碗窯片口鉢、天目碗、貝を出土しているが、ほとんどが細片であった。図示できた遺物を図 13-1 に示した。1 は舶載天目碗口縁部片。

[遺構外出土遺物]

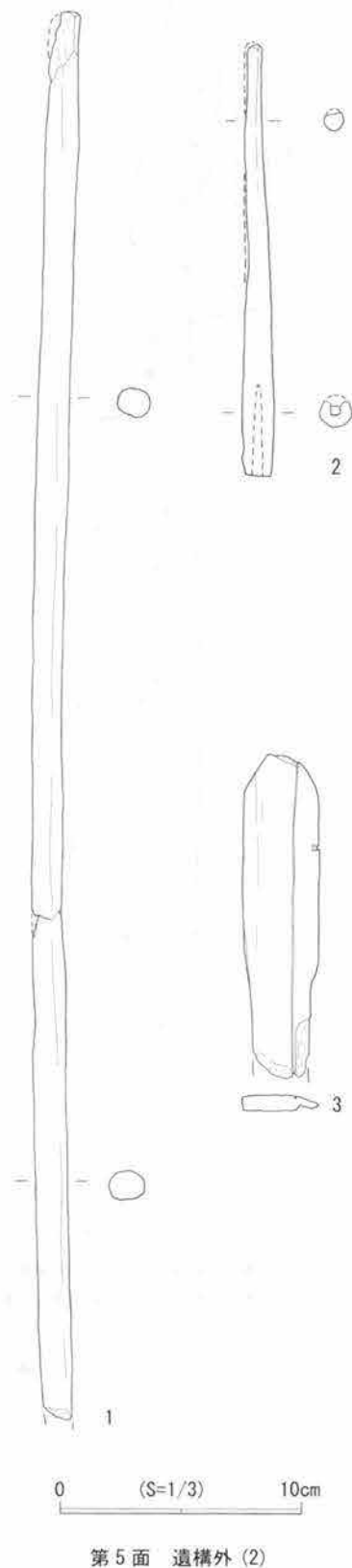
第 4 面から第 5 面までの掘り下げ時出土遺物で、図 13-2 ~ 6、図 14-1 ~ 3 に図示した。図 13-2 ~ 4 はかわらけ。2 はロクロ成形で底部に回転糸切り痕が残る。口縁部を一部打欠いている。3, 4 は手づくね成形。4 は内面に油煙が付着し、灯明皿に転用されたもの。図 13-5 は青磁碗底部片。内面に劃花文が認められる。図 13-6 は銭。「治平元寶」。図 14-1 ~ 3 は木製品。1 は衣紋掛けと思われる断面円形の棒状製品。2 は錐の柄。3 は杓子か。ややくびれの付いた板状製品。

第 6 面

本面は、縮まりの強い均一な黒褐色粘質土で構成される基盤層である。検出面標高は約 16.2 m を測る。第 5 面以下が乱れた堆積状況を示しており、安定した基盤層の確認と、堆積土中に遺物が含まれるものかを確認するため、本面まで掘り下げたものである。

本面では人為的に掘り込まれた遺構は検出されなかったが、調査区北西から南西にかけての北東部一帯において、上層の自然流路か氾濫原堆積と思われる砂礫層がさらに深くまで入り込んでいることが確認できた。調査区南半部は、黒褐色粘質土の基盤層が安定した広がりを見せている。上層の堆積土には斜交葉理も見られ、南に降る傾斜が確認されている。

本面までの掘り下げ時に、常滑甕 1 点と、須恵器甕 1 点を出土しているが、いずれも体部片であり図示しなかった。



第 5 面 遺構外 (2)

図 14 第 5 面出土遺物 (2)

表 1 出土遺物法量表

図 No.	種別	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	備考
表土層側時					
4 1	土器 かわらけ	7.1	5.0	1.4	
4 2	土器 かわらけ	8.1	5.4	2.2	
4 3	土器 かわらけ	8.6	5.1	2.3	
4 4	土器 かわらけ	7.8	5.7	2.0	
4 5	土器 かわらけ	7.6	5.3	2.3	
4 6	土器 かわらけ	7.8	5.0	1.7	
4 7	土器 かわらけ	7.3	4.3	2.1	
4 8	土製品 瓦質火鉢 (27.8)	—	—	[5.3]	
4 9	石製品 砥石 長さ5.2	幅3.4	厚さ1.0		
4 10	石製品 砥石 長さ[2.9]	幅3.3	厚さ0.7		
4 11	石製品 基石 長径1.8	短径1.6	厚さ0.4		
4 12	石製品 基石 長径2.0	短径1.7	厚さ0.5		
4 13	石製品 基石 長径1.8	短径1.7	厚さ0.5		
4 14	鉄製品 釘 長さ4.5	幅0.9	厚さ0.6		
4 16	銅製品 銭 直径2.5	—	—	—	元豊通寶
第1面道路側溝					
6 1	土器 かわらけ	7.6	5.0	1.7	
6 2	土器 かわらけ	7.7	5.8	1.7	
6 3	土器 かわらけ	7.9	6.2	1.9	
6 4	土器 かわらけ	7.3	4.7	1.8	
6 5	土器 かわらけ	7.6	5.1	2.0	
6 6	土器 かわらけ	7.5	5.2	2.2	
6 7	土器 かわらけ	8.2	5.0	1.8	
6 8	土器 かわらけ	7.0	5.2	2.2	
6 9	土器 かわらけ	6.6	4.7	2.0	
6 10	土器 かわらけ	7.1	4.0	2.3	
6 11	土器 かわらけ	10.4	6.2	3.3	
6 12	土器 かわらけ	11.1	1.4	3.0	
6 13	土器 かわらけ	13.3	7.0	3.7	
6 14	土器 かわらけ	12.7	6.5	3.6	
6 15	土器 かわらけ	12.3	7.4	3.2	
6 16	土器 かわらけ	13.5	7.6	3.3	
6 17	土器 かわらけ	11.9	7.1	3.4	
6 18	土器 かわらけ	13.1	6.8	3.6	
6 19	土器 かわらけ	12.0	7.0	3.3	
6 20	土器 かわらけ	11.9	7.2	3.4	
6 21	土製品 円盤 直径7.8	厚さ1.2	—	—	かわらけ打欠き
6 22	瀬戸 銅皿 (12.0)	(6.2)	(3.0)		
6 23	青磁 錦蓮弁文碗 (15.0)	—	—	[5.0]	
6 24	白磁 刺花文小皿 6.0	2.5	1.1		
6 25	石製品 温石 長さ7.5	幅[4.5]	厚さ1.2		滑石鑄転用品、穿孔有り
6 26	鉄製品 釘 長さ[6.7]	幅1.3	厚さ1.3		
6 27	鉄製品 釘 長さ[3.5]	幅0.9	厚さ0.8		
6 28	銅製品 銭 直径2.5	—	—	—	天禧通寶
第1面道路地業層中					
6 29	土器 かわらけ	7.6	5.0	1.8	
6 30	土器 かわらけ	12.6	7.2	3.4	
6 31	鉄製品 釘 長さ[4.0]	幅0.6	厚さ0.6		
6 32	鉄製品 釘 長さ[6.0]	幅1.0	厚さ1.1		
6 33	銅製品 銭 直径2.4	—	—	—	皇宋通寶
第1面ピット3					
6 34	銅製品 銭 直径2.55	—	—	—	皇宋通寶
第2面道路側溝					
8 1	土器 かわらけ	7.8	6.1	1.6	
8 2	土器 かわらけ	7.6	5.6	1.7	
8 3	土器 かわらけ	7.5	5.6	1.7	
8 4	土器 かわらけ	7.5	6.3	1.9	

図 No.	種別	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	備考
第2面道路側溝					
8 5	土器 かわらけ	7.7	5.0	1.9	
8 6	土器 かわらけ	7.5	5.4	2.1	
8 7	土器 かわらけ	7.1	4.7	1.7	口縁部油煙付着
8 8	土器 かわらけ	7.6	5.7	1.6	口縁一部折り曲げ
8 9	土器 かわらけ	7.6	5.3	1.8	口縁部打欠き
8 10	土器 かわらけ (10.8)	(6.7)	3.2		
8 11	土器 かわらけ	4.9	4.0	1.0	コースター
8 12	常滑 片口鉢	—	—	[3.7]	
8 13	青磁 甌子	—	—	[5.2]	
第2面道路地業層中					
8 14	常滑 甕 長さ5.6	幅5.8	厚さ1.0		研磨材に転用
8 15	常滑 甕 長さ8.0	幅4.7	厚さ1.3		研磨材に転用
第2面P1					
8 16	常滑 甕	—	—	—	
第2面遺構外					
8 17	土器 かわらけ	7.4	5.0	1.5	
8 18	土器 かわらけ	13.1	7.2	3.7	
8 19	山茶碗窯 片口鉢	—	(12.5)	[6.4]	
8 20	瓦 丸瓦 長さ[13.5]	幅[11.5]	厚さ2.4		
第3面道路地業層中					
9 1	土器 かわらけ	8.2	5.0	2.0	
9 2	高麗青磁 甕	—	—	—	
第4面道路側溝					
11 1	土器 かわらけ (9.6)	(8.0)	1.8		手づくね
11 2	土器 かわらけ (13.9)	—	3.7		手づくね
11 3	土製品 円盤 長径5.0	短径4.7	厚さ0.6		かわらけ打欠き
11 4	瓦 平瓦 長さ[15.9]	幅[7.3]	厚さ2.4		
11 5	瓦 平瓦 長さ[9.1]	幅[8.3]	厚さ2.5		
11 6	瓦 平瓦 長さ[18.4]	幅[5.0]	厚さ2.2		
11 7	木製品 草履芯 長さ[19.4]	幅[4.7]	厚さ0.3		
第4面東西溝					
11 8	木製品 箸 長さ[21.3]	幅0.8	厚さ0.6		
11 9	木製品 箸 長さ[18.4]	幅0.7	厚さ0.6		
11 10	木製品 箸 長さ[18.5]	幅0.9	厚さ0.5		
11 11	木製品 草履芯 長さ19.3	幅[4.1]	厚さ0.7		
11 12	木製品 草履芯 長さ[14.1]	幅[3.3]	厚さ0.3		
11 13	木製品 刀子鞘 長さ[14.1]	幅2.3	厚さ0.6		
第4面土坑					
11 14	木製品 漆器皿 (9.4)	(7.3)	1.1		英文印刷・蔓草文手書き
11 15	木製品 漆器椀	(6.3)	[1.9]		シダ植物文手書き
11 16	木製品 箸 長さ[20.8]	幅0.7	厚さ0.4		
11 17	木製品 箸 長さ[17.8]	幅0.6	厚さ0.4		
11 18	木製品 箸 長さ[18.5]	幅0.7	厚さ0.8		
11 19	木製品 箸 長さ[15.9]	幅0.7	厚さ0.4		
第5面南北溝					
13 1	中国産 天目茶碗	13.0	—	[4.8]	
第5面遺構外(1)					
13 2	土器 かわらけ	8.8	6.3	1.9	口縁部打欠き
13 3	土器 かわらけ	8.3	—	2.0	手づくね
13 4	土器 かわらけ	12.9	—	3.0	手づくね、内面油煙付着
13 5	青磁 刺花文碗	—	(6.2)	[2.4]	
13 6	銅製品 銭 直径2.3	—	—	—	治平元寶
第5面遺構外(2)					
14 1	木製品 衣紋掛け 長さ[58.3]	長径1.3	短径1.2		
14 2	木製品 錘柄 長さ[17.8]	直径1.3	—		
14 3	木製品 杓子 長さ[13.4]	幅3.1	厚さ0.6		

第4章 まとめ

1. 遺跡の年代および周辺地点との関連

今回の調査では各面とも調査区の殆どが道路遺構によって占められており、遺物の出土量はそれほど多くない。年代観はかわらけに依る部分が大きくなってしまいが、第1面が14世紀前半～中頃、第2・3面が13世紀末～14世紀前半、第4・5面が13世紀中頃～後半と思われる。第6面では常滑甕片1点と須恵器甕片1点を出土しているものの、いずれも体部片であり詳細な年代は明らかでなく、13世紀中頃までとしかいえない。これらの年代観や遺構面標高などを基に、近接する調査地点の成果から本遺跡の状況を概観してみたい。なお、以下文中での地点名表記は、図1の地点番号を使用することとする。

地点2では、第2面から道路面および西側溝を検出しているが、既に第1面において道路面西端部に当たる位置に同一の方向性をもった土丹の並びが確認されている。道路遺構路面標高は調査区北壁で約17.4mを測り第1面の遺構面標高と一致しており、道路遺構出土遺物は第1面出土遺物と形式的な差がほとんど見られないことから、これを第1面に帰属させて考えることとした。この道路遺構路面標高は本調査地点の第1面道路面標高と合致しており、これらを同一の道路面と捉えると幅員は約4.0mを測る。道路の東西両側には側溝を伴い、東側溝が幅約110cm×深さ約50cmを測るものであるのに対し、西側溝は幅約48cm×深さ約80cmとその規模は異なっている。また、東側溝は東肩部に鎌倉石を並べていた痕跡が認められるのに対して、西側溝にはそのような様相は見えない。道路より東側では、地点3の第1面が標高約17.3mで検出されており、本調査地点の第1面標高と合致する。遺構密度は疎らであるが東西方向に直線的に並ぶ柱穴列が検出されており、調査区より北側に向かって遺構が展開することが想定されている。これより下層の状況は、地点2では第2面が標高約17.0m、第3面が標高約16.9m、第4面が標高約16.8mで、本調査地点第2・3・4面とそれぞれほぼ合致する。第2～4面とも多数の柱穴・土坑類が検出されており、第2面では道路遺構にほぼ並行する礎石列も検出されている。また、調査区北壁の堆積土層において標高約16.6mの土層上面から遺構らしき掘り込みが確認されており、これは本調査地点第5面に相当する高さとなる。下層トレンチでは多くの礎板が検出されているが、この層からの掘り込み遺構となる可能性があるだろう。安定した黒褐色粘質土の基盤層は標高約16.2mで確認されており、本調査地点第6面と標高・土質とも整合する。地点3では、第2面が標高約17.1m、第3面が標高約16.9mと、本調査地点の第2・3面標高とそれぞれ合致するが、第3面の遺構出土遺物を見ると手づくねかわらけが含まれてきており、本調査地点第4面に相当する印象もある。標高約16.5mの第4面は、標高や面構成土の質からも本調査地点第5面に相当するものと捉えられる。第2～4面のいずれも多数の柱穴・土坑類が検出されており、第3面では掘立柱建物跡も確認されている。第4面以下は、トレンチ調査により滑川へ向かう斜面堆積となることが確認されており、本調査地点第5面以下の堆積層と同様に自然流路か氾濫原のような様相となるものだろう。

道路遺構より西側は、地点2検出の第2面礎石列や第4面掘立柱建物が道路遺構に平行することから、各時期を通じてこれに沿った建物が展開することが予想される。ところが道路遺構より東側の地点3では、第1・2面で検出された東西柱穴列・東西溝が本遺跡第1・2面の道路遺構に直交せずむしろ現在の金沢鎌倉街道に平行しており、こちらでは六浦路を意識した区画を採っているように感じられる。第3面検出の掘立柱建物跡や柱穴列の軸方位は第1・2面と比べるとわずかに異なっており、第3面から第2面への移行期に区画の改変が行われたことも考えられるが、軸方位の変化は微妙なものでやや判断

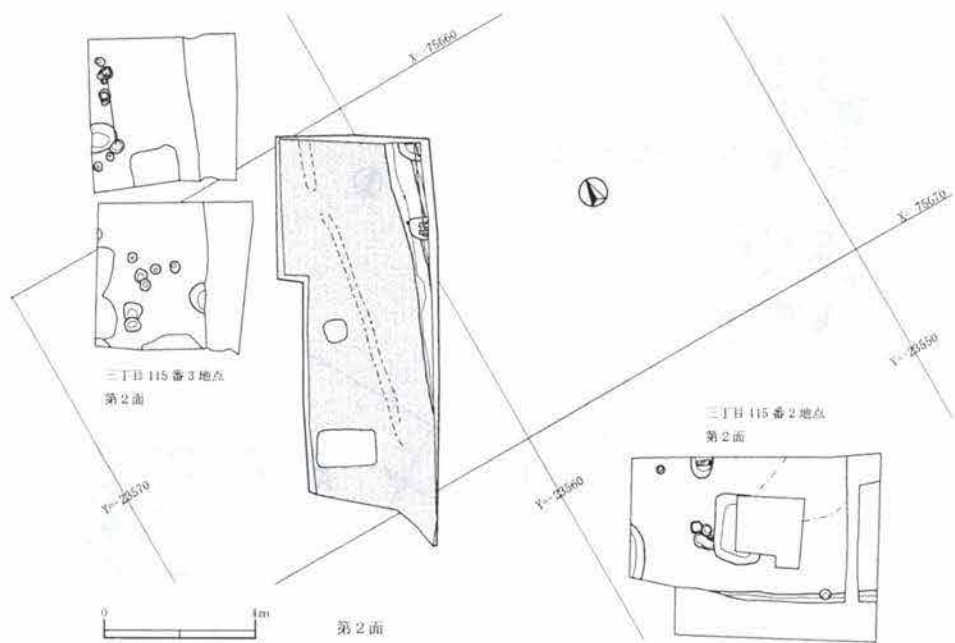
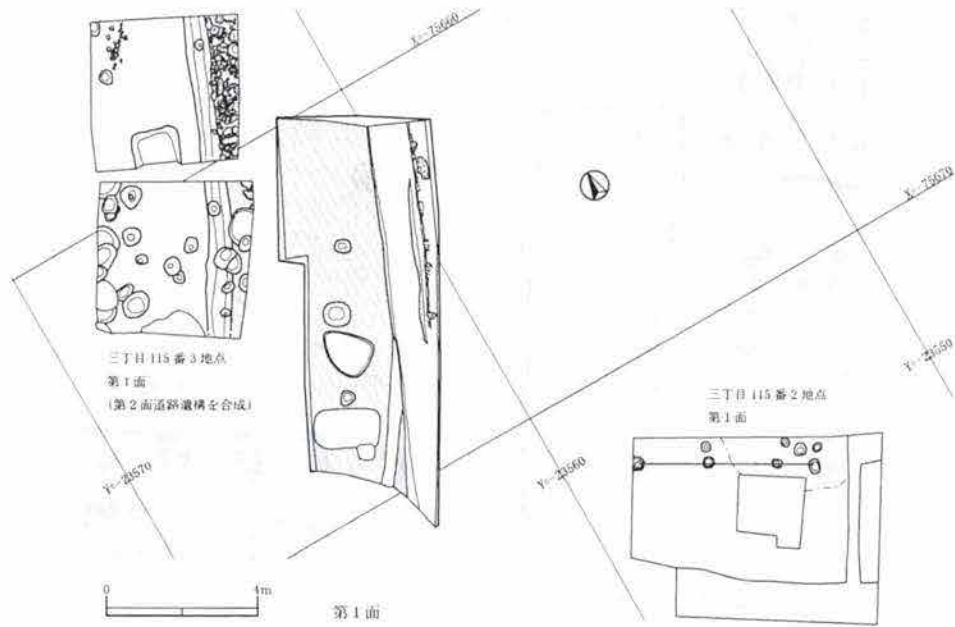


图 15 周边地点合成图 (1)

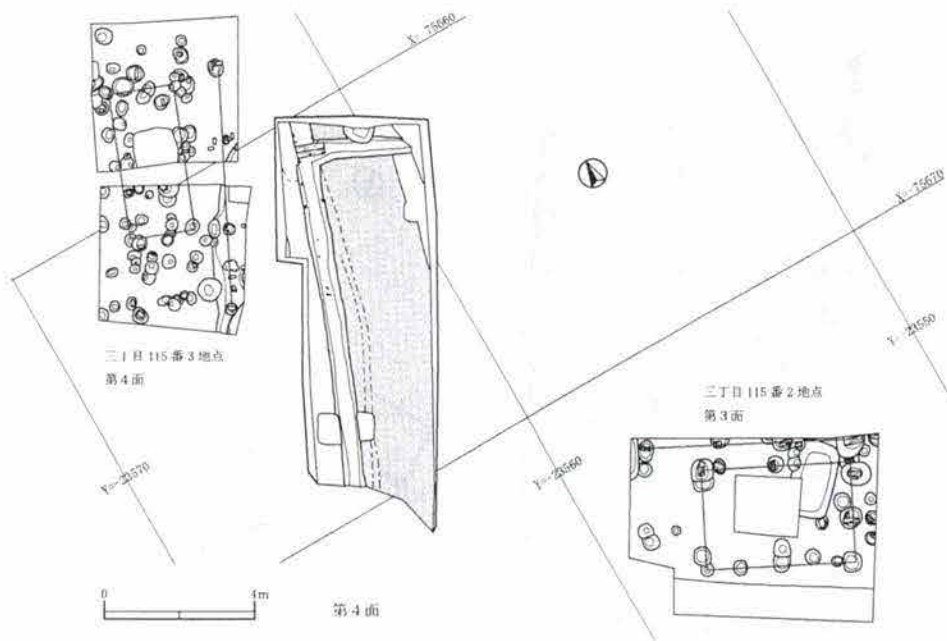
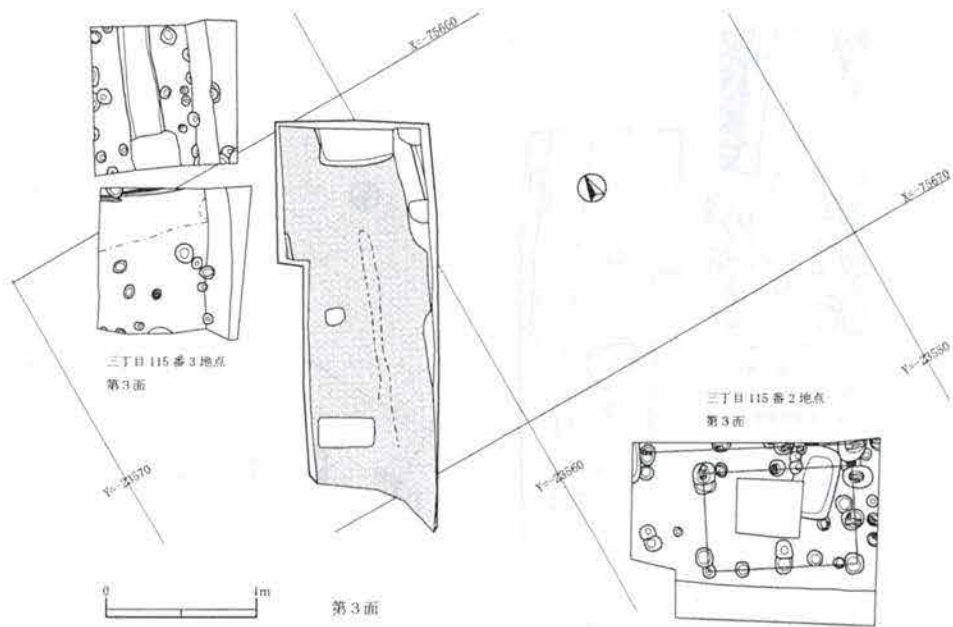


图 16 周边地点合成图 (2)

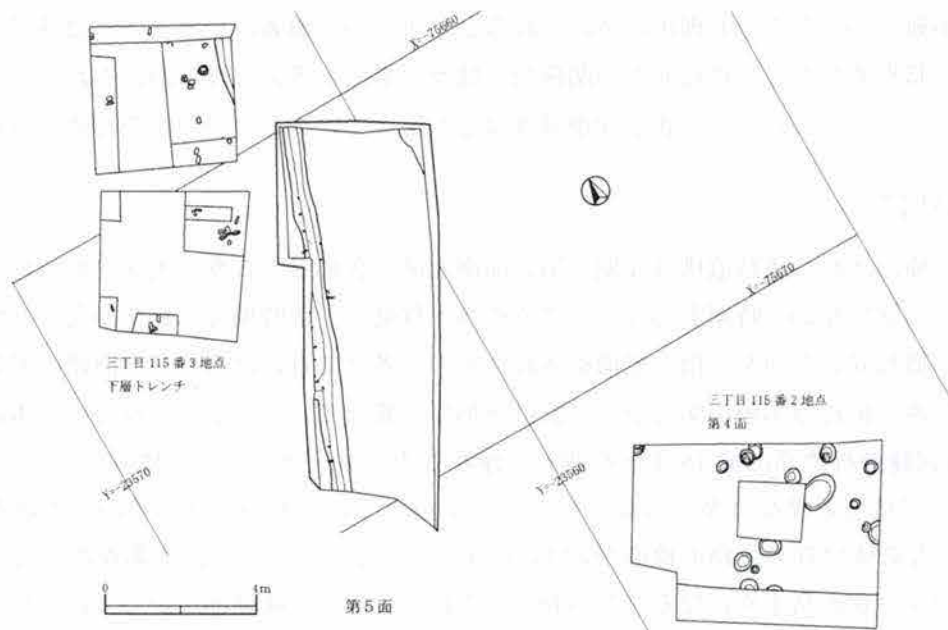


図17 周辺地点合成図(3)

としない。いずれにしても第1・2面の時期には、道路遺構を境界として東西で空間の性格が異なっていた可能性は考えておきたい。そしてその場合には、道路遺構より東側地域で区画の再編成が行われていたとしても、その影響が西側には及んでいないということも推測される。また、そうしたことが第1面道路西側溝と東側溝の様相の違いに影響したことも考えられる。ただし、地点4では六浦路に平行すると思われる東西溝なども検出されており、本地点検出の道路遺構に沿った区画が西側のどの辺りにまで広がっていたものかは現在のところ不明である。

2. 出土遺物構成について

出土遺物は、破片点数からなる全体構成で見ると、85%以上がかわらけで占められている。かわらけは破片点数が膨大であり、接合個体をすべて抽出することは困難であるので、個体数の指標としては破片重量によるデータの提示が有効と考えた。このためかわらけについては重量からなる構成表を追加し、後述することとする。かわらけ以外の容器類では常滑窯産の壺甕類が卓越して多く、山茶碗窯系の片口鉢、青磁碗皿類が続く。常滑窯産の壺甕類は総数で254点が出土しているが、その91.339%にあたる232点が第3面以降の出土となり、特に第3面では構成比率55.674%を占めるかわらけに対して37.234%と高い割合を示している。常滑窯産壺甕類以外の遺物に関しては突出した数値を示すものは見受けられないが、全体的に見て第3面以降遺物量が増加する傾向にあり、遺物総数3053点の93.547%にあたる2856点が第3面以降の出土である。物量的には第3面以降活発になってくるといえるが、第5面では舶載天目碗といった高級品も出土していることから、第4面以前の生活痕跡が希薄というわけでもない。

かわらけについては前述した理由から、重量による構成比率を基に説明を加えることとする。破片点数による全体構成と同様、かわらけについても第3面以降急激に出土量が増加する傾向が認められる。また、第5面から第4面へ推移するにつれ、やや減少傾向を見せていたDタイプは、この第3面以降姿を消してしまい、第2面以降はBタイプの中皿が見られるようになってくる。今回の調査で特徴的であっ

たのは、Cタイプの出土が見られなかったことである。出土かわらけの大半が細片でありBタイプとCタイプの分類が難しかったことも理由に挙げられると思うが、顕著にCタイプと認識できるものは見られなかった。時期的なことや供給元との関係など様々な事由が考えられるが、これらのデータを集積していくことによって、かわらけの狭小な地域性なども捉えていくことができる可能性はあるだろう。

3. おわりに

本調査地点で検出された道路遺構は4期、第5面南北溝を含めると5期に大別され、地業はきわめて良好といえる。造営当初から時期を追うごとにやや西へ移動し、各時期毎にわずかな方向性の振幅も見られるものの、概ね同じ方向を目指して構築されたものと考えて良いだろう。六浦路に対しては直交というよりもやや西に振れる印象があるが、これは地形が影響しているのかもしれない。本調査地点より約90m東の金沢鎌倉線標高は約18.4mを測り、浄妙寺入口ロータリー前の標高約14.7mより3.7mも高い。全体的に見ると標高は金沢方面へ向かって上がっていくものではあるが、本調査地点より約230m東にある青砥橋付近の道路面標高が約17.1mと一旦降ることから、本調査地点付近から青砥橋までの間はマウンド状の高まりになることが判る。これは北部の丘陵裾部がかつては舌状に南へ張り出す微高地であったためであろうと思われ、青砥橋を起点として地点4付近の間は、北西に向かって流れていた滑川がこの微高地を迂回するように一旦南側へと方向を変えている。こうしたことから、道路遺構は微高地の西裾付近を地形に沿って南北に延びていたものと捉えることもできる。道路遺構を北へ直線的に延長すると、現在の浄妙寺東端付近を掠める位置を通ることになるが、本調査地点も含め、隣接する調査地点の成果からも寺院を想定できるような遺構・遺物は発見されておらず、現在のところ浄妙寺と直接結びつけて考えることは難しい。また、各面で検出されている道路側溝は流下方位が滑川とは逆方向の北を示すものが多い。溝底面の比高差はわずかなものであるので、限られた調査範囲内での若干の誤差であるかもしれないが、洪水堆積などの影響で調査地南側の地形が若干高くなっていたことも考えられ、一旦北方へ排水を迂回させる必要があったのかもしれない。

本地点の大まかな変遷をまとめると、まず中世前期までの状況であるが、これは洪水堆積により詳細は不明というほかない。第5面から第6面までの堆積層中からは須恵器甕とともに常滑甕片も出土しており、この堆積層が中世を遡る時代から継続的あるいは断続的に堆積が進行していたものか、中世前期のある時点での一時的な堆積であるのか、遺物が少なく判断が付かない。ただ、第6面では基盤層上に遺構が検出されておらず、本地点では13世紀前半までの生活痕跡が希薄である印象は強い。これに対し第5面以降は継続的に濃密な遺構群が展開されることから、本格的な整備が開始されるのは第5面からと考えたい。そしてこれは、六浦路の整備が始められた仁治二年(1241)年からの時期と平行してけると言えるだろう。その後13世紀末頃から14世紀中頃となる第1～3面にかけて遺物の出土量が急増するが、これは浄妙寺が五山に列する延文三年(1358)頃までの時期と合致し、周辺地域が最盛期を迎える様子が窺える。ただし、今回の調査では13世紀後半と比定できる遺物があまり多くない印象もある。浄妙寺は足利貞氏(1273～1331)によって中興されるが、それまで周辺地域も含めて一時的に衰退傾向にあったものか、判然としない。

表2 出土遺物構成表(1)

出土遺物構成(点数)

分類 出土面	かわらけ			白かわ らけ	青磁			高麗 青磁	白磁			青白磁		彩繪 天目碗
	手づくね	糸切り	加工品		碗皿類	壺瓶類	不明他		碗皿類	壺瓶類	不明他	梅瓶	不明他	
表土掘削		943												
第1面		1245	1		4				6			1	6	
第2面		719		2	11	1	1		3	1	3	1		
第3面		157		3	2		1	1	1					
第4面	23	32	1	2	1				2				1	
第5面	39	43			5					1				1
第6面														
合計	62	2539	2	7	23	1	2	1	12	2	4	7	1	1

分類 出土面	瀬戸			常滑			瀬美	山茶碗窯			火鉢		その他 土製品	瓦器 碗皿類
	碗皿類	鉋皿	鉢類	片口鉢	壺瓶類	転用品		壺瓶類	片口鉢	転用品	土師置	瓦質		
表土掘削	1	1	1	2	23			1					1	1
第1面			1	3	51		3		2		1	3	1	1
第2面		1		2	53	1		2	13	1	1	2		1
第3面				2	105		2		4					
第4面					11			2	2					1
第5面					10		2	1	6					
第6面					1									
合計	1	3	2	9	254	1	7	5	28	1	2	6	2	3

分類 出土面	瓦			金属製品			石製品				加工骨	自然遺物			縄文～ 古代	合計
	平瓦	丸瓦	釘	銭	不明他	硯	砥石	転用品	不明他	鳥獣魚		貝	種子			
表土掘削			6	1	1			2		3			1			388
第1面	2		5	3					1		1		13			1358
第2面	3	1	2										1		1	828
第3面	2														2	282
第4面	6															84
第5面	1			1										1		111
第6面																2
合計	14	1	13	5	1	1	2	1	3	1	15	1	3	4	8053	

面別遺物構成比率

分類 出土面	かわらけ			白かわ らけ	青磁			高麗 青磁	白磁			青白磁		彩繪 天目碗
	手づくね	糸切り	加工品		碗皿類	壺瓶類	不明他		碗皿類	壺瓶類	不明他	梅瓶	不明他	
表土掘削		88.402%	0.074%		0.295%				0.442%		0.074%	0.442%		
第1面		91.679%	0.074%		0.242%	0.121%	0.121%		0.362%	0.121%	0.362%	0.121%		
第2面		86.836%			0.242%	0.709%	0.355%	0.355%	0.355%					
第3面		55.674%			0.709%	1.190%	1.190%	2.381%					1.190%	
第4面	27.381%	38.095%	1.190%	2.381%	1.190%									0.901%
第5面	35.135%	38.739%			4.505%					0.901%				
第6面														
合計	2.031%	83.164%	0.066%	0.229%	0.753%	0.033%	0.066%	0.033%	0.393%	0.066%	0.131%	0.229%	0.033%	0.033%

分類 出土面	瀬戸			常滑			瀬美	山茶碗窯			火鉢		その他 土製品	瓦器 碗皿類
	碗皿類	鉋皿	鉢類	片口鉢	壺瓶類	転用品		壺瓶類	片口鉢	転用品	土師置	瓦質		
表土掘削	0.258%		0.258%	0.515%	5.928%			0.258%				0.258%	0.258%	
第1面		0.074%	0.074%	0.221%	3.756%		0.221%	0.147%				0.074%	0.221%	0.074%
第2面		0.121%		0.242%	6.401%	0.121%		0.242%	1.570%	0.121%	0.121%	0.242%		0.121%
第3面				0.709%	37.234%		0.709%	1.418%						
第4面					13.095%			2.381%	2.381%					1.190%
第5面					9.009%		1.802%	0.901%	5.405%					
第6面					50.000%									
合計	0.033%	0.098%	0.066%	0.295%	8.320%	0.033%	0.229%	0.164%	0.917%	0.033%	0.066%	0.197%	0.066%	0.098%

分類 出土面	瓦			金属製品			石製品				加工骨	自然遺物			縄文～ 古代	合計
	平瓦	丸瓦	釘	銭	不明他	硯	砥石	転用品	不明他	鳥獣魚		貝	種子			
表土掘削			1.546%	0.258%	0.258%			0.515%		0.773%			0.258%			100.000%
第1面	0.147%		0.368%	0.221%					0.074%		0.074%		0.957%		0.147%	100.000%
第2面	0.362%	0.121%	0.242%										0.121%		0.121%	100.000%
第3面															0.709%	100.000%
第4面																100.000%
第5面																100.000%
第6面															50.000%	100.000%
合計	0.459%	0.033%	0.426%	0.164%	0.033%	0.033%	0.066%	0.033%	0.098%	0.033%	0.491%	0.033%	0.098%	0.131%	100.000%	

表3 出土遺物構成表(2)

種別遺物構成比率

分類 出土面	カマシ		白カマシ かけ	青磁			高麗 青磁	白磁		青白磁		彩釉 天目碗
	手づねね	糸切り		加工品	碗皿類	壺瓶類		不明他	碗皿類	壺瓶類	不明他	
表土掘削		13.509%										
第1面		49.035%	50.000%		17.391%			50.000%			25.000%	85.714%
第2面		28.318%		28.571%	47.826%	100.000%	50.000%	25.000%	50.000%	75.000%	14.286%	
第3面		6.184%		42.857%	8.696%		100.000%	8.333%				
第4面	37.097%	7.260%	50.000%	28.571%	4.348%			16.667%			100.000%	
第5面	62.903%	1.694%			21.739%				50.000%			100.000%
第6面												
合計	100.000%	100.000%	100.000%	100.000%	100.000%	100.000%	100.000%	100.000%	100.000%	100.000%	100.000%	100.000%

分類 出土面	瀬戸			常滑			混美	山系陶器			次鉢		その他 土製品	瓦器 碗皿類	
	碗皿類	銅皿	鉢類	片口鉢	壺瓶類	転用品		壺瓶類	碗皿類	片口鉢	転用品	土師質			瓦管
表土掘削	100.000%			22.222%	9.055%					3.571%			16.667%	50.000%	
第1面		33.333%	50.000%	33.333%	20.079%		42.857%		7.143%		50.000%		50.000%	50.000%	33.333%
第2面		33.333%		22.222%	20.866%	100.000%		40.000%	46.429%	100.000%	50.000%	33.333%			33.333%
第3面				22.222%	41.339%		28.571%		14.286%						
第4面					4.331%			40.000%	7.143%						33.333%
第5面					3.937%		28.571%		21.429%						
第6面					0.394%										
合計	100.000%	100.000%	100.000%	100.000%	100.000%	100.000%	100.000%	100.000%	100.000%	100.000%	100.000%	100.000%	100.000%	100.000%	100.000%

分類 出土面	瓦		金属製品			石製品				加工骨	自然遺物		縄文へ 古代	合計	
	平瓦	丸瓦	釘	鉄	不明他	礎	砥石	転用品	不明他		鳥獣骨	貝			種子
表土掘削			46.154%	20.000%	100.000%		100.000%		100.000%			6.667%			12.709%
第1面	14.286%		38.462%	60.000%		100.000%		100.000%		100.000%	86.667%			50.000%	44.481%
第2面	21.429%	100.000%	15.385%								6.667%		33.333%	25.000%	27.121%
第3面	14.286%														9.237%
第4面	42.857%												66.667%		2.751%
第5面	7.143%			20.000%									100.000%		3.636%
第6面														25.000%	0.066%
合計	100.000%	100.000%	100.000%	100.000%	100.000%	100.000%	100.000%	100.000%	100.000%	100.000%	100.000%	100.000%	100.000%	100.000%	100.000%

出土かわらけ構成(重量) ※単位はg(グラム)

分類 出土面	B大	B中	B小	D大	D小	合計
表土掘削	3,440		589			4,029
第1面	14,865	135	2,000			17,000
第2面	6,048	50	1,307			7,405
第3面	936		91			1,027
第4面	262		36	276	23	597
第5面	248		106	495	79	928
合計	25,799	185	4,129	771	102	30,986

※かわらけ分類について

先頭のアールファベットは成形・器形を示し、Aを胎土粉質で口縁部外反するロクロ糸切り成形、Cを施成良好な薄手造りのロクロ糸切り成形、Bをそれ以外のロクロ糸切り成形、Dを手づね成形、Eを初期かわらけに見られるロクロ低回転糸切り・静止糸切り成形で器表面をナデ調整しないタイプとした。

後部の漢字は器種を示し、大皿を大、中皿を中、小皿を小とした。コースターは器壁の極端に低い極小型かわらけを示す。

※コースターは個体数が明確であるため、またA・C・Eタイプは出土していないためそれぞれ項目を除いた。第6面はかわらけが出土していないため項目を除いた。

面別かわらけ構成比率

分類 出土面	Bタイプ	Dタイプ	合計
表土掘削	100.000%		100.000%
第1面	100.000%		100.000%
第2面	100.000%		100.000%
第3面	100.000%		100.000%
第4面	49.916%	50.084%	100.000%
第5面	35.147%	64.853%	100.000%
合計	97.183%	2.817%	100.000%

タイプ別かわらけ構成比率

分類 出土面	Bタイプ	Dタイプ	合計
表土掘削	13.380%		13.003%
第1面	56.451%		54.863%
第2面	24.591%		23.898%
第3面	3.410%		3.314%
第4面	0.990%	34.250%	1.927%
第5面	1.176%	65.750%	2.995%
合計	100.000%	100.000%	100.000%



▲ 1. 第1面全景（北から）



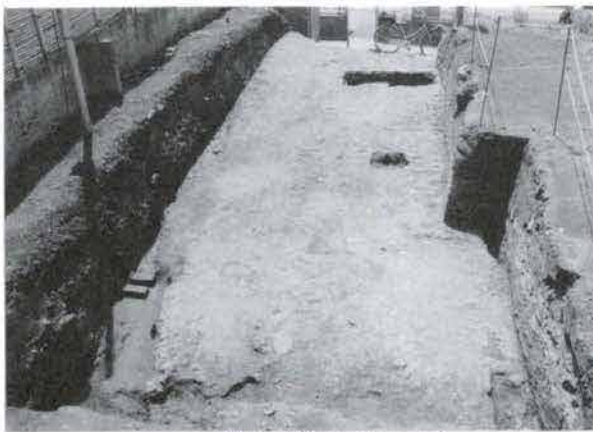
▲ 2. 第1面道路側溝土留（北西から）



▲ 3. 第2面全景（北から）



▲ 4. 第2面柱穴列（南から）



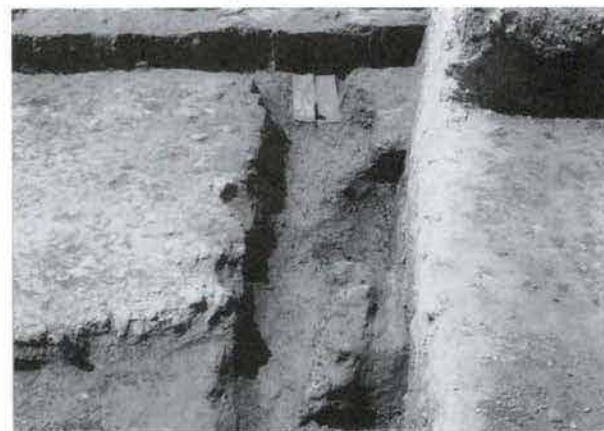
▲ 5. 第3面全景（北から）



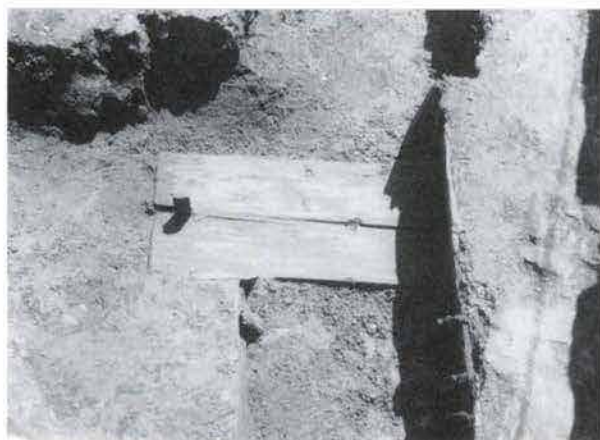
▲ 6. 第3面土坑2（東から）



▲ 7. 第4面全景（北から）



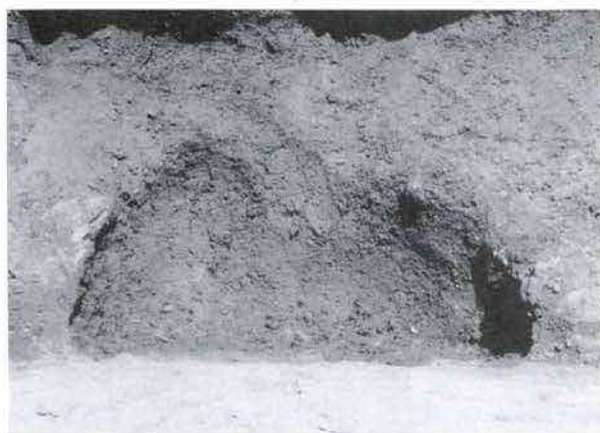
▲ 8. 第4面東西溝（東から）



▲ 1. 第4面溝内敷板 (北から)



▲ 2. 第4面溝内板組 (南東から)



▲ 3. 第4面土坑 (北から)



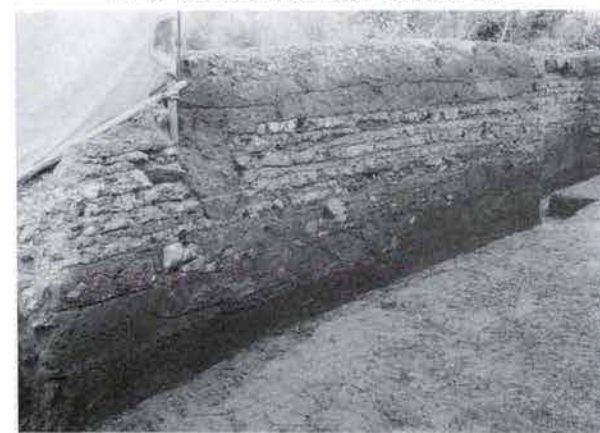
▲ 4. 第5面全景 (北から)



▲ 5. 第5面南北溝杭列 (北東から)



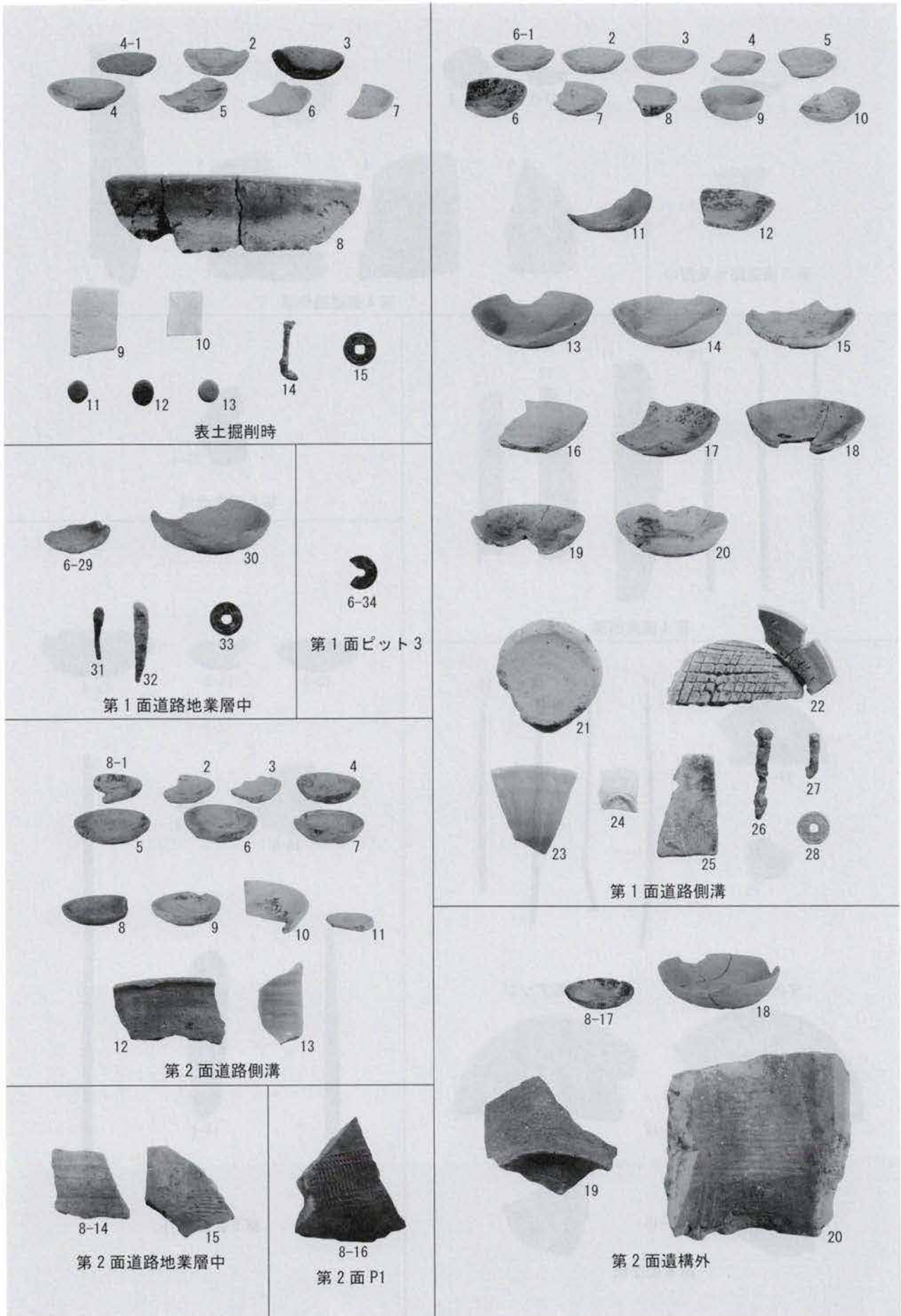
▲ 6. 第6面全景 (北から)



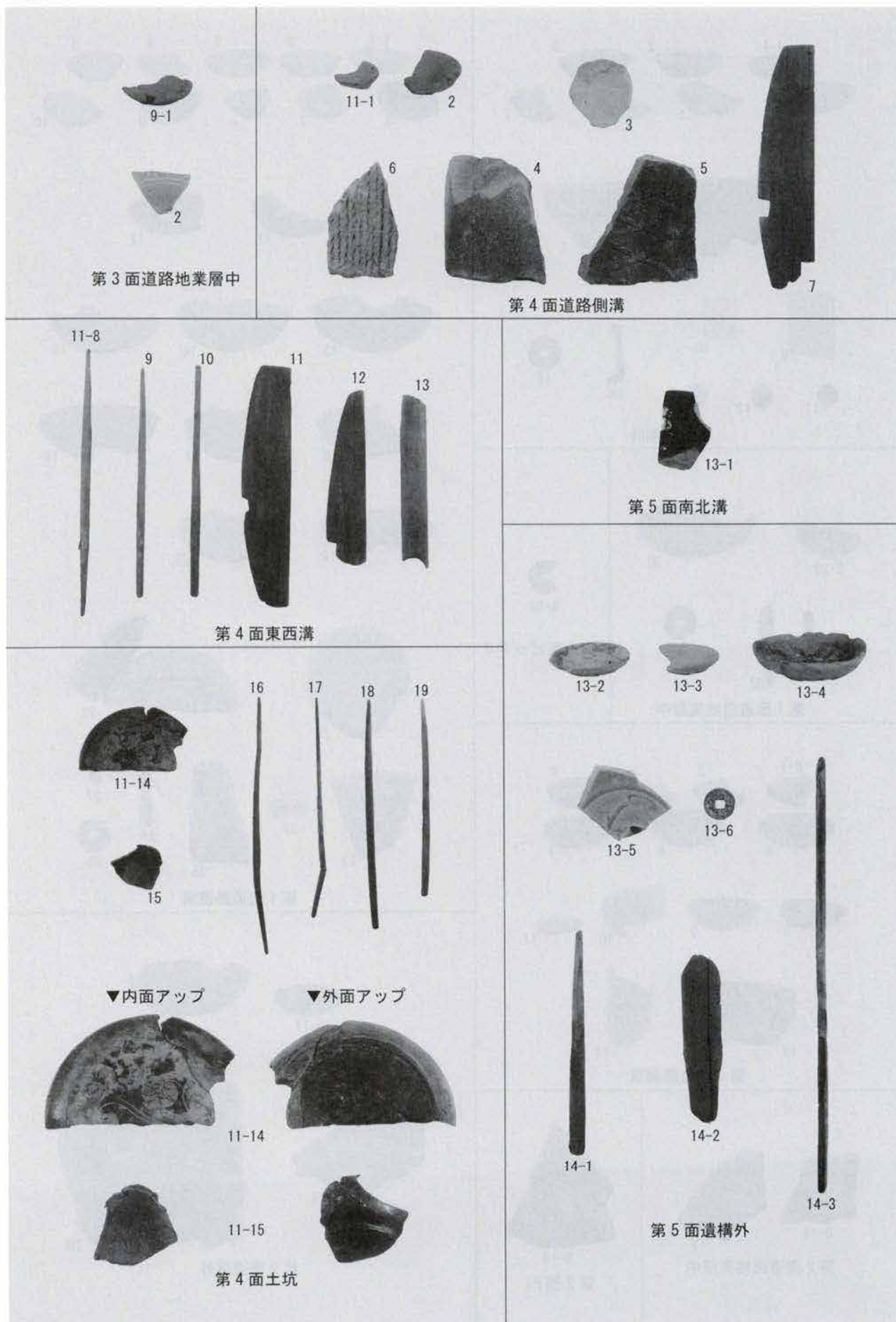
▲ 7. 調査区西壁 (南東から)



▲ 8. 調査区北壁 (南から)



出土遺物 (1)



出土遺物(2)

えんかく じもんぜん いせき
円覚寺門前遺跡 (No. 287)

山ノ内字藤源治947番8

説 明

この遺跡は、鎌倉時代後期の円覚寺の遺跡である。遺跡の中心部には、東西に並ぶ二つの長方形の礎石の遺構が認められる。これは、円覚寺の門前を構成していた二つの礎石の遺構と推定される。礎石の長さは約10メートル、幅は約3メートルである。礎石の周囲には、土壌の層が観察され、その層の厚さは約10センチメートルである。この層は、礎石の基礎を築くために掘られた溝の土壌と推定される。また、礎石の周囲には、土壌の層が観察され、その層の厚さは約10センチメートルである。この層は、礎石の基礎を築くために掘られた溝の土壌と推定される。また、礎石の周囲には、土壌の層が観察され、その層の厚さは約10センチメートルである。この層は、礎石の基礎を築くために掘られた溝の土壌と推定される。

例 言

1. 本報は、鎌倉市山ノ内字藤源治 947 番 8 における個人住宅建設に伴う埋蔵文化財の緊急調査発掘調査報告である。
2. 発掘調査は、国庫補助事業として鎌倉市教育委員会が実施した。
調査期間は 2005 年 4 月 5 日～同年 5 月 13 日にかけて実施され、調査対象面積は 54 m²である。出土遺物に関しては鎌倉市教育委員会がこれを保管している。
3. 調査団編成は以下のとおりである。
調査の主体 鎌倉市教育委員会
調査担当 森孝子
調査員 安達澄代 渡辺美佐子 安藤龍馬 下江秀信 倉方尚子
調査協力者 浅香文保 沼上三代治 柴田英輔 安達越郎（以上、社団法人鎌倉市シルバー人材センター）
4. 本書の遺構・遺物の縮尺は次の通りである。
遺構図 1/80・1/40（遺構図の水糸高は海拔高を示す。）
遺物実測図 1/3・1/6・1/1
5. 遺物実測図には次の記号が使用されている。
軸の限界線 ----- 使用痕の範囲 <====>
調整の変化点 - - - - - 加工痕の範囲 <----->
6. 本書の執筆は第 4 章検出遺構、古代以前の遺物を赤堀、他は森が担当し、森が編集をした。
7. 本書の図版作成、写真撮影・編集は次の者が分担した。
遺構図版 赤堀祐子
遺物図版 赤堀祐子 森孝子
遺構写真 森孝子
遺物写真 森孝子 赤堀祐子
写真編集 赤堀裕子
8. 本遺跡の略称は ETK である。
9. 現地調査及び資料整理に関しては御助言並びに御協力を戴いた。記して感謝の意を表する。
松尾宣方 福田誠 汐見一夫 馬淵和雄 原廣志 菊川英政 諸橋千鶴子
10. 本遺跡の略称は ETK である。

本文目次

第1章 調査の概要	267
第2章 遺跡概観	267
第3章 調査経過	274
1 調査の経緯経過	274
2 調査区配置図 グリッド設定図 旧測地系による座標表示	276
3 基本層序	276
第4章 発見された遺構と遺物	277

挿図目次

図1 遺跡位置図	269	図13 2面出土遺物	283
図2 本調査地点と周辺遺跡	271	図14 3面遺構配置図	284
図3 試掘坑位置図	274	図15 溝3	285
図4 グリッド配置図	275	図16 溝3出土遺物	285
図5 基本層序	276	図17 柱穴列1	286
図6 1面遺構配置図	277	図18 3面出土遺物	287
図7 溝1	278	図19 4面遺構配置図	288
図8 溝1出土遺物	278	図20 溝状遺構1・溝4	289
図9 1面出土遺物	279	図21 溝状遺構1出土遺物	290
図10 2面遺構配置図	280	図22 溝4出土遺物	290
図11 溝2	281	図23 4面出土遺物	290
図12 溝2出土遺物	282	図24 古代以前の出土遺物	291

表目次

表1 周辺遺跡一覧表	272	表5 3面部材概要表	287
表2 1面ビット概要表	279	表6 4面ビット概要表	290
表3 2面ビット概要表	282	表7 遺物観察表	292
表4 3面ビット概要表	287		

図版目次

図版 1	A. 調査地点	295
	B. 調査風景（北から）	295
図版 2	A. 1面全景（北東から）	296
	B. 溝1土層（南から）	296
	C. 溝1（南から）	296
図版 3	A. 2面全景（北東から）	297
	B. 溝2土層（西から）	297
図版 4	A. 3面全景（北東から）	298
	B. 溝3（南東から）	298
図版 5	A. 4面全景（北東から）	299
	B. 溝状遺構1・溝4（南東から）	299
図版 6	A. 溝4土層（北西から）	300
	B. 溝状遺構1土層（北西から）	300
	C. 溝4出土火鑽臼（西から）	300
	D. 溝状遺構1出土板杓子（北から）	300
図版 7	A. 調査区南東壁堆積土層（西から）	301
	B. トレンチ土層（北西から）	301
図版 8	出土遺物（1）	302
図版 9	出土遺物（2）	303

第1章 調査の概要

1. 調査に至る経緯

本調査地点は鎌倉市山ノ内字藤源治 947 番 8 に位置する。本地点は神奈川県遺跡台帳 NO. 278 に掲載されている円覚寺門前遺跡内に所在する。当地点における個人住宅建設工事計画に関する申請がなされ、この工事計画が埋蔵文化財に影響を与えると判断した鎌倉市教育委員会は 2005 年 1 月 18 日～19 日に確認調査を実施した。その結果、表土下 90 cm に近世層、その直下に中世面が検出され、さらにその下に 2 面の中世面、及びそれに伴う遺物が出土したため埋蔵文化財への影響が避けられないと判断し本調査が必要であると決定した。以後、鎌倉市教育委員会と事業者との協議、事業者の〔文化財保護法第 57 条の 2〕の届出続き、2005 年 3 月 24 日施工者と発掘調査主体者との協議をへて本調査を実施するに至った。当地点の発掘調査は 2005 年 3 月 31 日の表土掘削後、2005 年 4 月 5 日～同年 5 月 13 日まで実施された。調査面積は 54 m²である。

第2章 遺跡概観

本調査地点は鎌倉市山ノ内藤源治 949 番地に所在する。JR 北鎌倉駅西側を通る主要地方道横浜・鎌倉線を大船方面に 100m 進むと西瓜川に架かる十王堂橋がある。そこを左折し西瓜川に沿って進むと 40 m 付近で小袋谷川に合流する。その先 15 m の小橋を右折し道なりに 80 m ほど進んだ場所が調査地点である。遺跡地は台峰が北側に張り出した丘陵部の一小支谷の開口部に所在する。谷戸の最奥には 5 穴からなる瓜ヶ谷やぐら群がある。船形光背を持つ地藏菩薩坐像、如来坐像、大五輪塔、十王像、鳥居を伴う神殿等の彫刻が残されている非常に貴重なやぐら群である。また、西瓜川に架かる十王堂橋付近には十王堂があったと言われている。中世期「鎌倉中」とは東は六浦、南は小坪、西は稲村、北は山内と『吾妻鏡』に書かれており、十王堂橋あたりが北の境界であったようである。本調査地点東直上の台地上には弥生時代後期～古代にかけての集落址が検出された北鎌倉女子学園があり、本地域は弥生時代から中世期までの幅広い複合遺跡が検出できる地域として知られている。

本調査地点を含む鎌倉市の地形は滑川、柏尾川沿いの沖積地、市内の大部分を占める山地、大船北部の関谷方面に広がる関東ロームなどの洪積層によって作られている洪積台地と大きく 3 つに大別される。本遺跡地は山地であり、その山稜基盤は新世代、第 3 紀、新第 3 紀に形成されたもので、建長寺あたりが三浦層群逗子シルト岩層、それ以西からは上総層群となり、北鎌倉駅西側の素掘りトンネル付近までが深沢凝灰質粗粒砂岩層、その西側からは野島凝灰質砂岩シルト岩層となる。本地域内の大部分をしめている山地には瑞鹿山、巨福山、金宝山等の標高 90 ～ 120m の小山が多く座する。その山々が複雑に入り込んでの大小の谷戸（明月谷、西瓜ヶ谷、東瓜ヶ谷等）を形成し、丘陵頂部から湧出した小河川（明月川、西瓜川、山之内川）が地形に沿って低地に流れ込み山ノ内の中央部を貫通する小袋谷川に合流する。その流れは鎌倉市北西部を流れる柏尾川へと続く。調査地点東側を北流する西瓜川は瓜ガ谷の山間部から湧出し小袋谷川に合流し柏尾川へと続いている。

本調査地点が所在する山ノ内は現在の鎌倉市の中央部やや北東寄りに位置し、東側は雪ノ下、西御門、

南側は扇ガ谷、西側は山崎、台、北側は大船、今泉と7地域と行政の境界を接する。山之内は奈良時代には相模国鎌倉郡尺度郷といわれた地域で、初見は天平7年の相模国封戸租交易帳である。年代は不詳ではあるが鎌倉時代には山之内荘と称するようになったといわれている。範囲は現在の山之内、大船付近から横浜市戸塚区、栄区の一部、及び藤沢市俣野の広範囲に亘った地域であったと想定されている。長元4(1031)年、源頼信が甲斐守に任ぜられて平忠常の乱を平定、子・源頼義が相模守となり東国方面に進出し、この2人によって源氏は中央政界から東国方面への威風を強めたといわれている。伊豆を根拠地とする上総介平直方はこれを見込んで頼義を婿とし、頼義は直方の領地である鎌倉の地で義家を授かり以後、鎌倉は源家相伝の地となったと伝えられる。頼義が康平6(1063)年、8月由比郷に岩清水八幡宮を勧請したのもこのような背景があったからであろう。頼義、義家は奥州前9年、後3年の役と2つの戦いを遂行し、「天下第1武勇の家」の名声を得て中央政界の武力権門の代表者とされるようになるが、保元、平治の乱後、源氏は中央から姿を消す。源頼朝が鎌倉に開幕することで「天下第1武勇の家」は結実する。

開幕当初から本遺跡地が所在する山ノ内は政権都市鎌倉への入り口としての重要拠点とされた。その後、義時に私領として授与され以来、北条氏が大寺院を次々と創建する。南北朝、室町時代には関東を制御するため鎌倉府がおかれた。公方足利基氏は補佐として管領職をおいたが、その屋敷は山ノ内であったといわれており、本調査地点内に管領屋敷の地名が残る。また、扇ガ谷、犬懸ヶ谷、宅間ヶ谷にも管領屋敷があったと推測されている。

以後、戦国時代に突入し、鎌倉は小田原北条氏の支配になる。北条長氏は玉縄に永正9(1512)年、相模国東部一帯の押さえとして玉縄城を築城した。玉縄城は山ノ内から北西方向3000mに位置する。北条氏は氏綱が永正17(1520)、氏康は天文16(1547)年と、2回の検地を実施し禄高制による年貢、さらに棟別銭を課した。また、天文元～9(1532～40)年、鶴岡八幡宮再建を実施し、各地域から多数の職人を呼び寄せてこれに当たらせたといわれる。小田原衆所領役帳永禄2(1559)年によれば相当数の職人の所領が書かれており、職人が定着し、鎌倉の様相が一変したと推測されている。また、山ノ内庄では氏政が天正2(1574)年の検地で棟別銭の外、段銭も課したとある。

戦国期には鎌倉郡に代わって小坂郡との名称となる。天正18(1580)年、小田原北条氏の旧領を与えられた徳川家康は翌年、北条氏を踏襲した検地を実施し、禄高制、棟別銭、段銭を課した。また、建長寺、円覚寺、浄智寺、東慶寺、光照寺の5寺に領地を寄付したが、寺社領も検地の対象となっていたためこの五寺も税を徴収された。

江戸幕府は鶴岡八幡宮、光明寺、英勝寺には保護を与えたが、ほかの寺社は顧みられず衰退していった。一方、江戸時代のはやりとして、古都の寺社参詣、名所遊覧が盛んになり鎌倉もその対象とはなっていたが、その当時の鎌倉は辺鄙な農村という風情であったといわれている。戦国期に引き続き家康の時代も鎌倉は「小坂郡鎌倉の内」といわれ、鎌倉時代には四境の外であった極楽寺と山ノ内もその範囲内になる。それ以外は東郡と呼ばれていた。家光の慶安の頃より鎌倉郡の名前が復活し、小坂郡の名前が消える。幕末頃、外国船の接近が多くなり三浦半島沿岸の警備強化対策が行われ、この海防策のために鎌倉地域は文化7年～文政3年(1810～1820)は会津藩、文政3年～弘化4年(1820～1847)は川越藩、文政3年～嘉永6年(1847～1853)は川越藩・彦根藩、嘉永6年～安政5(1853～1858)は萩藩の預地となり外国船到来の際の人夫、人足等が徴発された。文久3(1863)年、佐倉候堀田鴻之丞、慶応3(1867)年、代官江川太郎左衛門、明治元年、葦山県に属し、同年12月本年本県の所轄となる。『相模国鎌倉郡村誌』には「建長寺、円覚寺、浄智寺、東慶寺、光照寺の領地は、明治4年にいたりて上知し本県に属せり」とある。

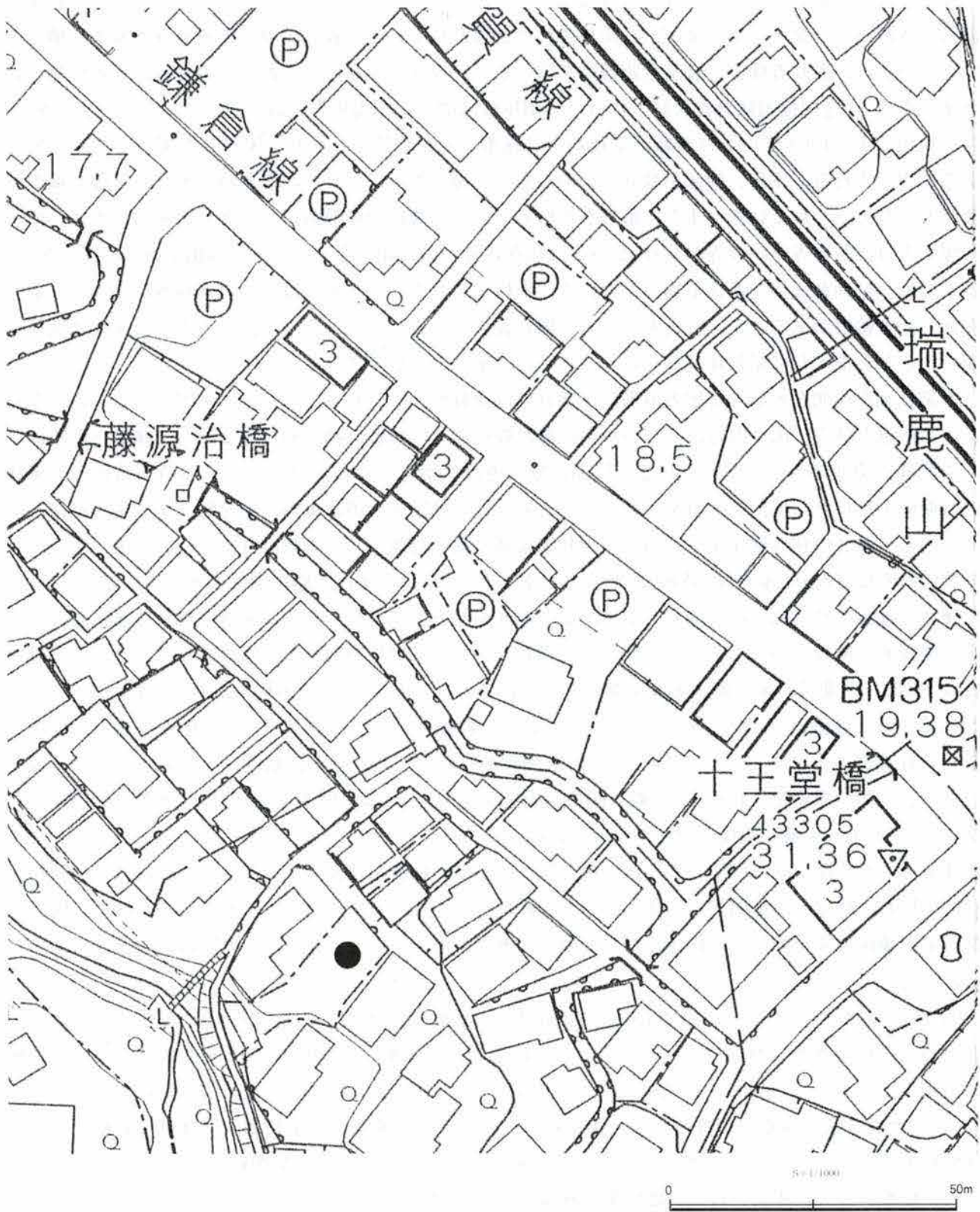


図1 遺跡位置図

本遺跡地が所在する山ノ内には古跡、旧跡、寺院等が多く存在する。奥州後3年の役の際の義家の従者に藤原資道という名前がある。資道は山内首藤7代目で、その孫の俊道が義朝の家人として山之内荘に家居したといわれている。現在の長寿寺南方の白黒小路あたりに比定される。白黒小路とは首藤家の徽号とされる白一文字、黒一文字から由来されたといわれている。義朝は現在の寿福寺に邸宅を構えていたといわれており首藤家とは至近距離にある。また、現在、明月院の南西方向の地域に管領屋敷という地名が残る。『相模国鎌倉郡村誌』には「管領屋敷は明月院の馬場先東隣の畠なり」とあり、正平18年（貞治2年、1363年）上杉憲顕が足利基氏の執事（関東管領）となり、家居した場所がこの地域であると想定される。また、管領屋敷向かいの谷戸は尾藤ガ谷といわれ、北条泰時の家令の尾藤影綱の屋敷があったといわれている。また、亀ガ谷の傍らに「足利尊氏の屋敷跡があった」とある。現在、亀が谷坂の入口に長寿寺という寺があり、長寿寺は現在建長寺の塔頭となっているが開創年暦は不明である。延文の頃、足利基氏が父尊氏追福のためにこれを修営したこと、長寿寺境内の岩窟祠内には尊氏の遺髪を祀った五輪塔があること、尊氏を「長寿寺殿妙義仁山大居士」というなど、長寿寺とは非常に関係が深いことから推定して屋敷址はおそらくこの近辺であったと想定される。

本調査地点西側を走る主要地方道横浜・鎌倉線は鎌倉街道といわれ、また、山ノ内を通るあたりを特に山ノ内道と呼ぶ。山ノ内道は山ノ内から巨福呂坂を通過して鎌倉八幡宮前に至る道で、鎌倉への防御として北条氏関連のもので固められる。巨福呂坂の道は仁治元（1240）10月、北条泰時が被官の安東藤内左衛尉を奉行として山ノ内道をつくらせたとあり、それ以前の道は亀が谷坂を越えて武蔵大路に合流している。山ノ内荘は健保1（1213）年の和田義盛の乱の行賞として義時に与えられ、以後、北条氏との関係が密接となり、泰時邸、時頼邸、時宗邸があったといわれ、また北条氏関係の大寺院も建立される。

鎌倉八幡宮より巨福呂坂を越え、山ノ内道を300m北方向に進むと北側に臨済宗建長寺派総本山「巨福山建長興国禅寺」がある。この地は当寺地獄谷といわれ処刑場があったと伝承されている。本寺は建長5（1253）年北条時頼が蘭溪道隆を開山として創建したものである。創建以前は心平寺が在ったといわれている。延慶元（1308）年12月太政官符宣降し勅願寺とし、至徳3（1386）年関東五山の位次が定められ五山の第1位となる。往時は塔頭49個院あったといわれるが、数回に及ぶ大火を受け、現在は外門、山門（県指定文化財）、仏殿（国指定重要文化財）、法堂（県指定文化財）、唐門（国指定重要文化財）、方丈、宝蔵、鐘楼などからなっている。

建長寺より北西700mに明月谷には「明月院」がある。臨済宗建長寺派である。この地は北条時頼が私邸の傍らに建立した最明寺の旧址であるともいわれている。また、文永5、6（1268、69）年頃、北条時宗が蘭溪道隆を開山とし創建した「福源山禅興寺」があったとされる。明月院はその塔頭であるといわれる。

明月院の北西方向300mに臨済宗円覚寺派総本山「瑞鹿山円覚興聖禅寺」がある。弘安5（1282）年、北条時宗が仏光禅師（無学祖元）を開山として創建した。延慶元（1308）年12月太政官符宣降し勅願の道場とし、至徳3（1386）年関東五山の位次が定められ五山の第2位となる。応安7（1374）年11月23日火災を受け伽藍が全焼したが、義堂周信、此山妙在、関東公方足利満氏、鎌倉府管轄下諸国の棟別銭等で永和4（1378）年仏殿が完成した。仏殿には足利義満の書いた梁牌銘が伝わる。現在は総門、山門、仏殿、方丈、庫裏、書院、選仏場、鐘楼などからなる。

また、山ノ内道南側には金宝山内に臨済宗円覚寺派「金峰山浄智寺」がある。弘安4（1281）年、北条宗政没後、宗政菩提のためにその夫人、子師時が創建した。開山元庵普寧、請待開山大休正念、準開山南州宏海である。正安元（1299）年、北条貞時が五山に列し、至徳3（1386）年関東五山の位次が定められ、五山の第4位となる。明治以降、円覚寺境外塔頭の要素を持つ。往時の塔頭等は江戸末期には

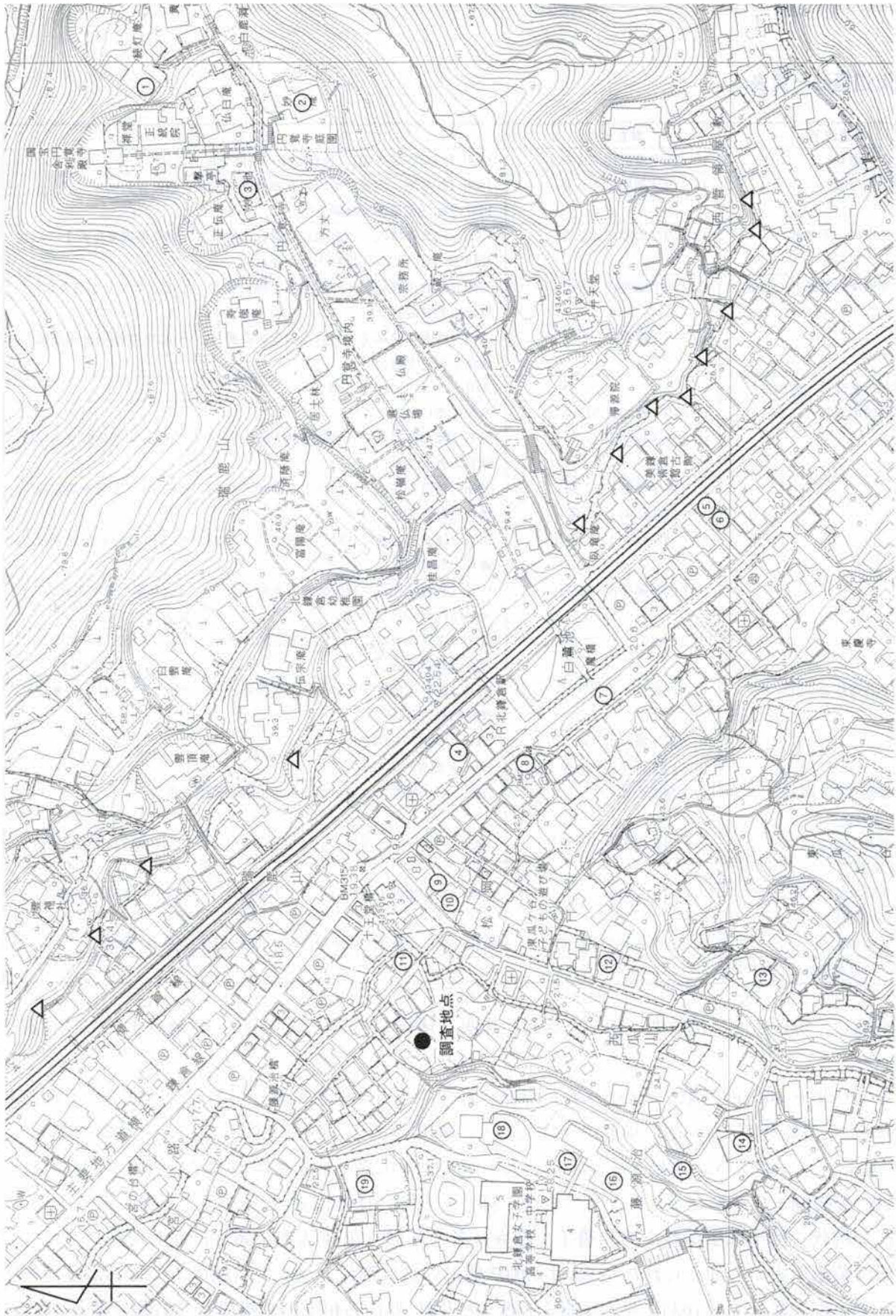


図2 本調査地点と周辺遺跡

表 1 周辺遺跡一覧表

	遺跡名	調査地点	報告書
①	円覚寺統燈庵	山ノ内字端鹿山 431 番	1990『円覚寺統燈庵』 統燈庵境内遺跡発掘調査団
②	円覚寺如意庵	山ノ内字端鹿山 425 番	1990『如意庵 円覚寺境内如意庵遺跡発掘調査報告書』 円覚寺如意庵遺跡発掘調査団
③	円覚寺境内(明香池)	山ノ内字端鹿山 438 番	1983『円覚寺境内(明香池)』『鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報 I 昭和 46 年度～52 年度』 鎌倉市教育委員会
④	円覚寺旧境内遺跡 (No.434)	山ノ内字端鹿山 509 番 1	1998『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 14 平成 9 年度発掘調査報告』 鎌倉市教育委員会
⑤		山ノ内字端鹿山 393 番 3	2007『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 23 平成 18 年度発掘調査報告』 鎌倉市教育委員会
⑥	円覚寺門前馬道土塁地点		2001～2002 年調査・未報告
⑦	円覚寺門前遺跡 (No.287)	山ノ内字藤源治 947 番 8	本報告書に収録
⑧		山ノ内字松岡 1344 番	2005『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 21 平成 16 年度発掘調査報告』 鎌倉市教育委員会
⑨		山ノ内字松岡 1337 番 1	2008『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 24 平成 19 年度発掘調査報告』
		山ノ内字松岡 1337 番 6	鎌倉市教育委員会
⑩		山ノ内字松岡 1377 番 6	2007『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 23 平成 18 年度発掘調査報告』 鎌倉市教育委員会
⑪		山ノ内字藤源治 951 番 2	1998『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 14 平成 9 年度発掘調査報告』 鎌倉市教育委員会
⑫		山ノ内東瓜ヶ谷 1229 番 1・5	2000『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 16 平成 11 年度発掘調査報告』 鎌倉市教育委員会
⑬	西瓜ヶ谷遺跡 (No.213)	山ノ内東瓜ヶ谷 1294 番 4・5	2006『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 22 平成 17 年度発掘調査報告』 鎌倉市教育委員会
⑭		山ノ内字藤源治 930 番 5 他	2002 年調査・未報告
⑮		山ノ内字藤源治 928 番 1 他	1991 年調査・未報告
⑯	台山藤源治遺跡 (No.29) (第 1 次調査)	台字藤源治 914	1985『台山藤源治遺跡』 台山藤源治遺跡発掘調査団
⑰	台山藤源治遺跡 (No.29) (第 3 次調査)	山ノ内字藤源治 914 番他	1993『台山藤源治遺跡 -第三次調査報告-』 台山遺跡発掘調査団
⑱	台山藤源治遺跡 (No.29) (第 2 次調査)	山ノ内 914～927	1996『台山藤源治遺跡 -第 2 次調査報告-』 台山遺跡発掘調査団
⑲	台山遺跡 (No.29)	山ノ内字藤源治 860 番 1	2002『台山遺跡発掘調査報告書』 有限会社(現株式会社) 博通
△	過去に発掘調査が行なわれているやぐらが所在する地点		

すべて廃絶し、現在境内には総門、山門、仏殿、庫裏、鐘楼などが建つ。境内には鎌倉十井の「甘露ノ井」がある。

浄智寺より北方 300 m 松岡に「縁切り寺」で知られている円覚寺派東慶寺がある。円覚寺の対面である。「松岡山東慶総持禅寺」、創立年暦は不詳である。頼朝時、その叔母が住していたとの伝承がある。弘安 8 (1283) 年、北条時宗の死去後、時宗夫人が潮音院覚山尼と称して開山、子の貞時が開基と伝える。その後、後醍醐天皇の皇女が尼となり用堂尼と称して当寺に住み以来、松岡御所と称せられたという。また、江戸時代、徳川家康が豊臣秀頼遺子を当寺に置き尼僧 (20 世天秀法泰尼) として住持させ、以後、住持は黄連川家から迎えられたが 22 世玉淵法盤尼の後は無住となり、塔頭の 1 つである蔭涼軒主が代行している。寛永 11 (1634) 年、天樹院 (徳川秀忠娘、豊臣秀頼室) を檀那とし仏殿が建立された。現在は横浜市三溪園に移築されている。「縁切寺」「駆込寺」といわれるが、当寺に現存する最古の縁切状は元文 3 (1738) 年である。

貞治2(1363)年四月の「円覚寺文書目録」にある『円覚寺境内絵図』(一帖 寺山井門前新御寄進絵図)がある。この絵図は円覚寺境内を朱線で表し、絵図の四方には足利直義の執事であった上杉重憲の花押が描かれたもので、元亨3(1323)年～建武2(1335)年に描かれたものであるといわれている。絵図には総門の南前面に白鷺池があり、その東側に新寄進と書かれた2区域、絵図左下に「薩摩掃部大夫入道跡」「飯嶋孫次郎入道跡」と書かれている。また、総門前面には、小住宅が道路際、およびその近辺に隙間なく描かれ門前の賑わいを感じさせる。調査地点は絵図外となるが、この近辺であり、絵図が示すような宅地であったものと想定される。

本遺跡地では過去に発掘調査が実施されており、徐々にこの遺跡内の様相が明らかになりつつある。実施された調査地点は図2、表1の通りである。以下、遺跡の概要を述べる。

⑧地点からは1面～6面の13世紀末～14世紀前半期に比定される遺構群が検出された。円覚寺創建時以降の隆盛期に相当する。検出遺構は馬道とその側溝、及び下馬門を囲う柵である。馬道は当該期には存続し、また、1面時の「馬道」の特殊な造成方法が確認された。赤松の丸太を5～6本並べたものを1組に、一定間隔で並べたものを路盤とし、その上に砂を蒔くといった技法である。また、職人が使用する機織具、へら等の道具類、芸能人が持つ「山猫木偶」が出土しており、この調査地点周辺に職農民の居住区があると推定している。さらに、この「山猫木偶」を鎌倉時代末期からの伝世品とも推察している。また、古代以前の出土遺物は丘陵上の居住域から流れ落ちたもの想定している。

⑨地点では5面の生活面、及び掘立柱建物址、井戸、溝等を検出している。2面～5面は⑧地点と同様の時期に相当し、円覚寺創建時以降の様相が確認されている。また、「木製人面」、及び内底面に「薬種」と書かれた墨書かわらけなど特殊な遺物が出土しており、⑧地点の推察どおり職農民の居住区を推察させる遺物である。前述の「円覚寺境内絵図」内の小住宅が描かれた位置であり、また、遺跡地の立地上、円覚寺関連であろうか。また、古代以前の出土遺物は台山藤源治遺跡に平行した時期に遺跡が存在したことも想定される。

⑩地点は13世紀末～16世紀まで4面の遺構群、及びそれに伴う遺物が検出された。この遺跡地では15世紀後半以降に遺跡の繁栄をみる事が明らかになっている。

⑪地点では遺構は検出されなかったものの弥生時代中期後半以降断続的に遺跡が営まれていたことが確認され、14世紀代に本格的な土地利用が開始されたことが確認されている。

⑫地点では近世以降の大きな削平のため遺構面の遺存率が小さかったため調査成果は14世紀代に開発の手がくわわったことが確認されたのみであった。

本遺跡地は谷戸が開口する平坦部に所在し、鎌倉時代後期以降の遺構が多く検出される。遺跡地西側の丘陵地帯は台山藤源治遺跡(表1-⑯、⑰、⑱)に代表される弥生時代中期後半以降から古代にわたる集落址がある遺跡地である。本遺跡地内では古代以前の遺物が多数発見されているが、当該期の遺構は検出されていない。台山藤源治遺跡と至近距離であり、また、該期の多数の遺物も出土しており遺跡がある可能性も考えられ、今後それを念頭において調査に臨む必要があると考えている。

参考文献

- 鎌倉市史編纂委員会 1959年 「鎌倉市史総説編」 鎌倉市
鎌倉市史編纂委員会 1959年 「鎌倉市史考古編」 鎌倉市
鎌倉市教育委員会 1998年 「鎌倉の自然」 鎌倉市教育委員会
関幸彦 2006年 戦争の日本史5「東北の戦争と奥州合戦」 吉川弘文館
下中邦彦 1984年 「神奈川県地名」 平凡社
神奈川県図書館協会郷土資料編集委員会 1999年 「神奈川県皇国地誌相模国鎌倉郡村誌」 神奈川県図書館協会
三浦勝男 1992年 鎌倉国宝館図録第15集「鎌倉の古絵図1」 鎌倉市教育委員会 鎌倉国宝館

第3章 調査の経過

1. 調査に至る経緯

2005年1月18日～19日の確認調査の結果、表土層及び近世層が90～120cmまで堆積しているのが確認されたので、100cm前後の表土層を重機により掘削することにし、以下を人力によって調査することにした。また、調査面積に対して敷地が広いので、場内での廃土処理が十分可能と判断し、調査区を一気に掘りあげることとした1日で表土掘削を終了し、次週より調査を開始した。5月の連休を挟んで5月12日に調査は終了した。調査の結果、中世の遺構面は4面検出された。検出遺構は溝4条、溝状遺構1、柵列1、ピット群である。出土遺物は整理箱3箱で、4面掘り下げ時に古墳時代遺物が比較的多く出土した。以下、作業経過は下記のとおりである。

- 2005年 3月31日 重機による表土掘削。
- 4月5日 1面調査開始。
- 4月7日 1面の遺構検出作業。溝1検出。
- 4月8～13日 溝1、ピット、攪乱坑の堀上げ。
- 4月14日 1面全景写真、及び、平面測量。
- 4月15日 2面への掘り下げ開始。
- 4月18日 2面の遺構検出作業。溝2のプラン検出。

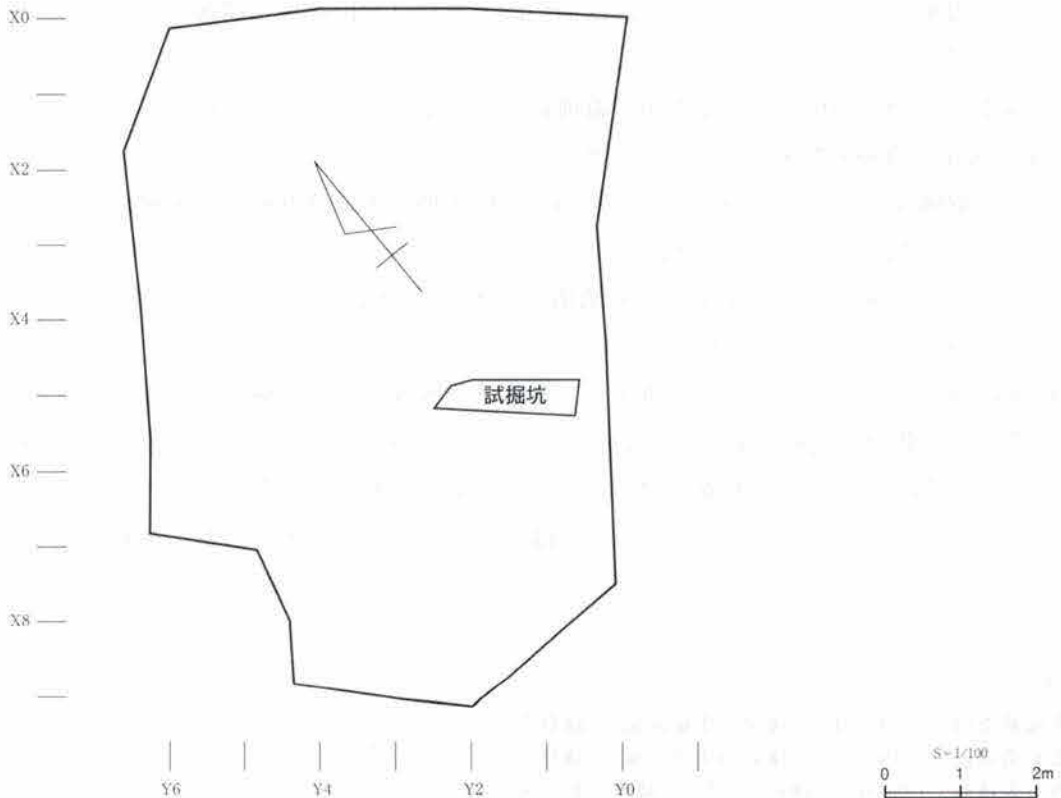


図3 試掘坑位置図

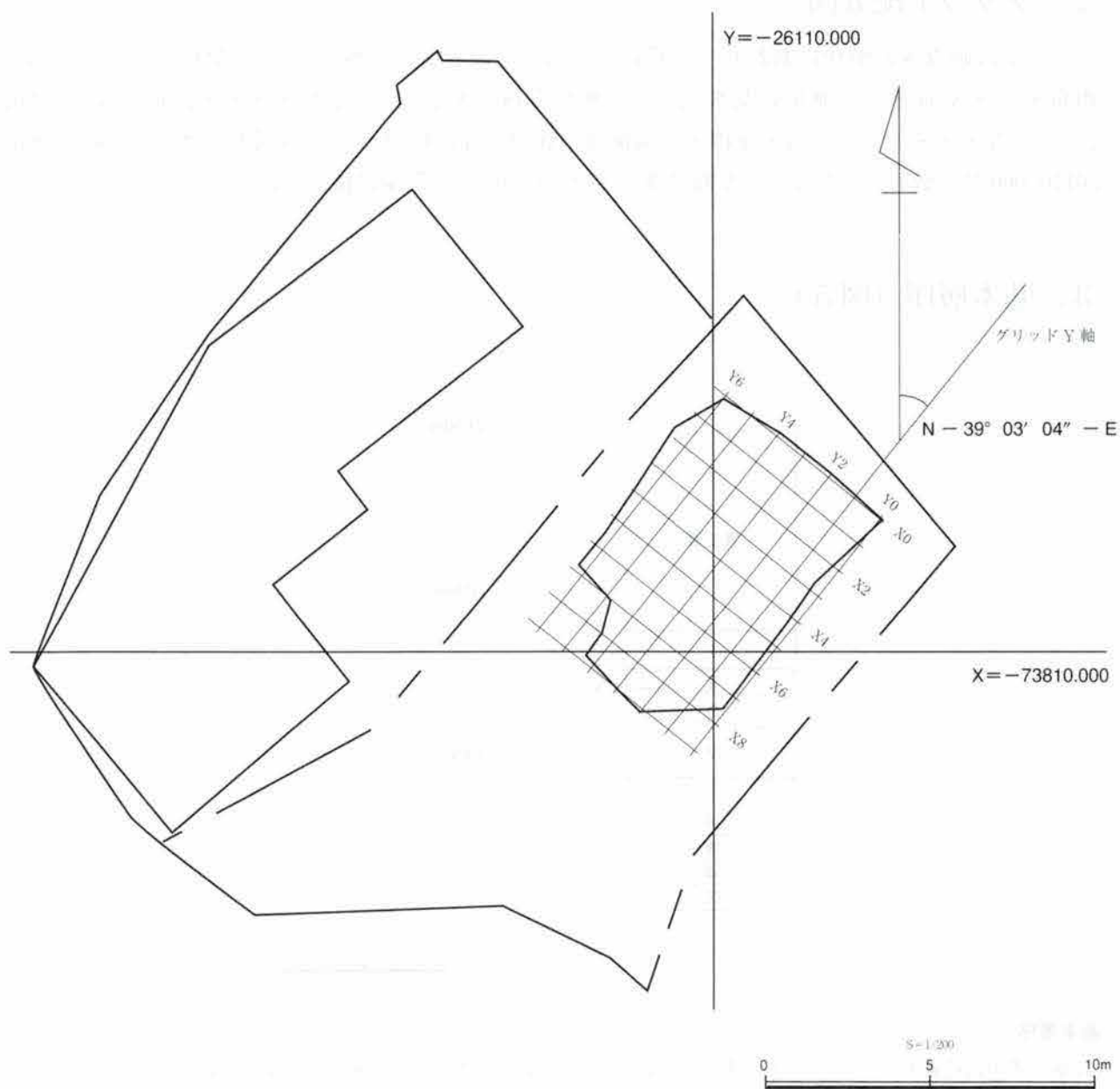


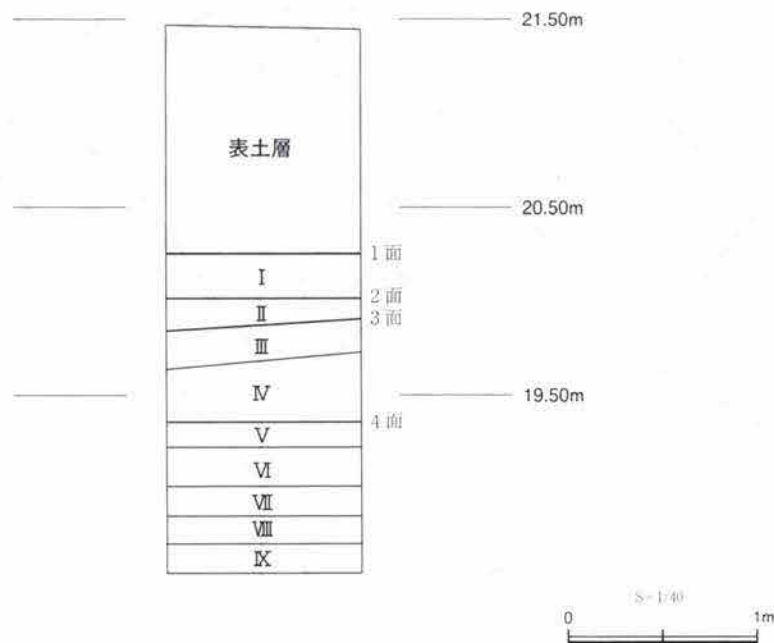
図4 グリッド配置図

- | | |
|----------|------------------------------|
| 4月19日 | 2面の全景撮影、及び平面図作成。 |
| 4月20～21日 | 3面への掘り下げ |
| 4月22日 | 3面の遺構検出作業。溝3のプラン検出。 |
| 4月26日 | 3面の全景撮影、及び平面図作成。 |
| 4月27日 | 柱穴列エレベーション。4面へ掘上開始。 |
| 5月6日 | 4面の遺構検出作業。 |
| 5月9日 | 溝4、溝状遺構1のプラン検出。 |
| 5月10日 | 溝4、溝状遺構1掘上げ。4面の全景撮影、及び平面図作成。 |
| 5月11日 | 地山を確認するためのトレンチ調査。 |
| 5月12日 | 調査終了。機材撤収。調査 |

2. グリッド配置図

グリッドは調査区の形状にあわせて任意に設定した。調査区の東西辺に平行に任意の2点を設け、北西角をx0・y0として測定の基準点とし、東から西にY0、Y1、Y2、Y3・・・、北から南にX0、X1、X2、X3・・・とした。国土座標との関係は、X6.32; Y1.42グリッドが国土座標のX-73810.000、Y-26110.000に一致し、グリッドのY軸は真北より39°03'04"東に振れている。

3. 基本層序 (図5)



基本層序

I層	茶褐色粘質土	土丹粒子・鎌倉石粒子を含む。褐鉄分が多い。粘性あり。しまり良好。
II層	茶褐色粘質土	土丹粒子・かわらけ細片・炭化物を含む。褐鉄分が多い。粘性あり。しまり良好。
III層	灰茶色粘質土	土丹粒子を含む。褐鉄分が多い。粘性あり。しまり良好。
IV層	黒灰色粘質土	褐鉄分が多い。粘性あり。しまり良好。
V層	黒色粘質土	褐鉄分が多い。粘性あり。しまり良好。
VI層	茶褐色粘質土	炭化物を多く含む。粘性あり。しまる。
VII層	黒灰色粘質土	土丹粒子を含む。粘性あり。しまる。
VIII層	黒茶色粘質土	有機物・土器片を含む。粘性あり。しまりなし。
IX層	赤黒色粘質土	有機物層。粘性あり。しまりなし。

図5 基本層序

第4章 検出遺構と出土遺物

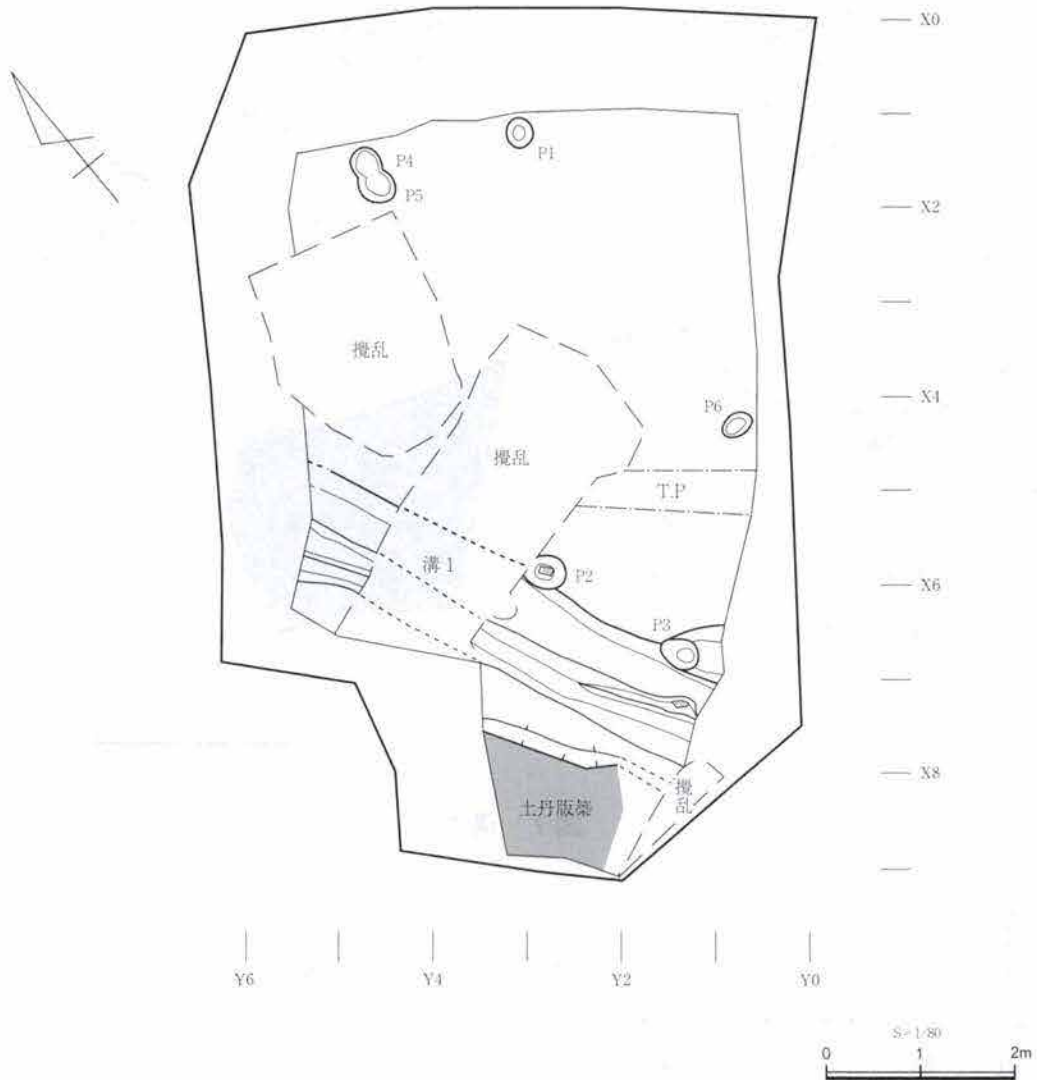
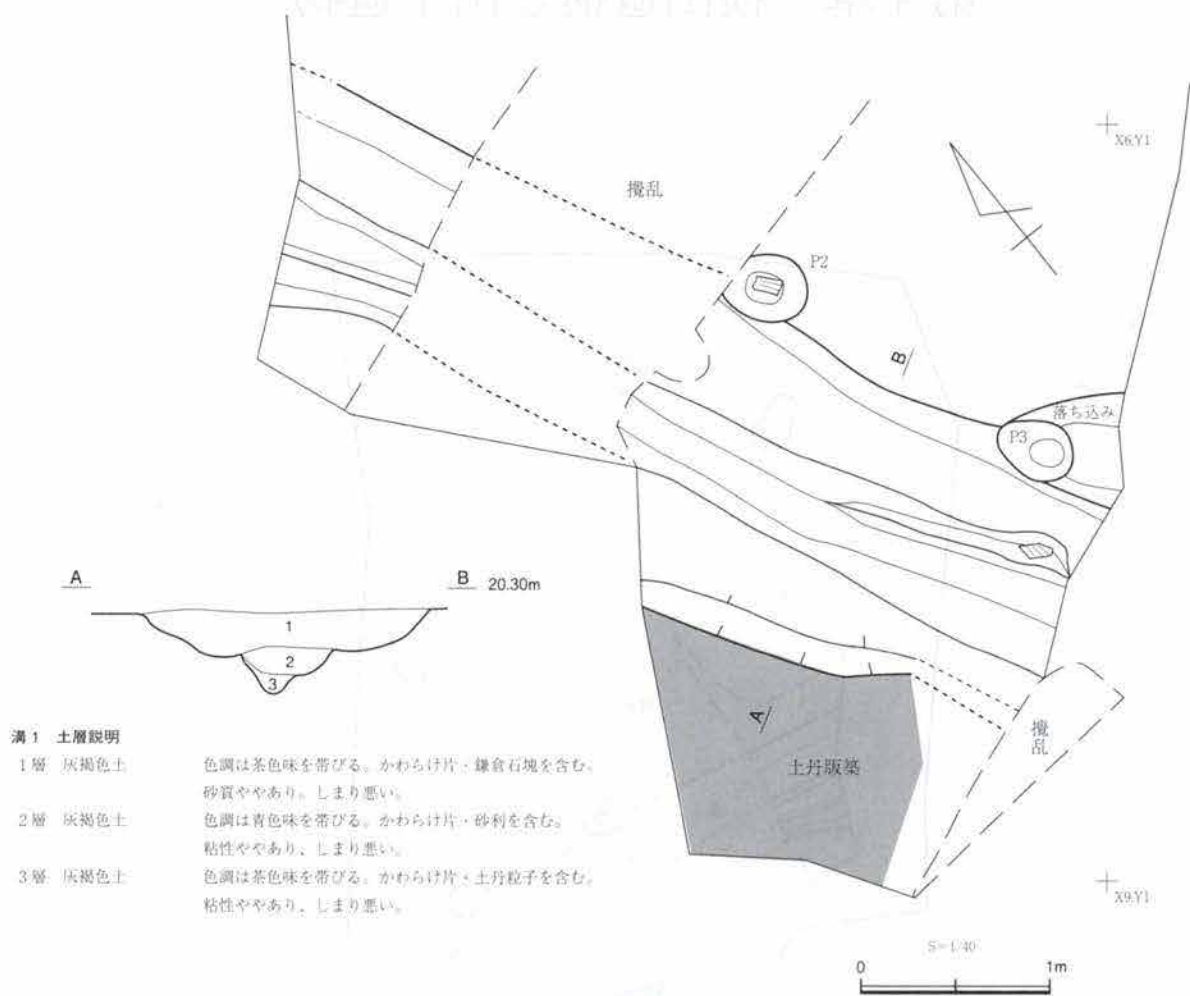


図6 1面遺構配置図

1面 (図6)

表土を取り除いた現地地表下120～130cmで確認された地形層である。土丹粒子・鎌倉石粒子を混じえる茶褐色粘質土を構成土とする。遺構確認面の標高は海拔20.1～20.3mで北側へ緩く傾斜しており、調査区南西側に土丹版築面が一部遺存するほかは表土層に攪乱され本来の生活面の大半は失われているものと思われる。検出された遺構は溝1条、ピット6口である。



溝1 土層説明

1層 灰褐色土	色調は茶色味を帯びる。かわらけ片・鎌倉石塊を含む。砂質ややあり。しまり悪い。
2層 灰褐色土	色調は青色味を帯びる。かわらけ片・砂利を含む。粘性ややあり。しまり悪い。
3層 灰褐色土	色調は茶色味を帯びる。かわらけ片・土丹粒子を含む。粘性ややあり。しまり悪い。

図7 溝1

溝1 (図7)

X3～8, Y1～5グリッドで検出された。北西側の一部を現代の攪乱により失う。両端は調査区外に延びる。P2・P3及び南東肩で重複する落ち込みとの新旧関係は不明である。検出面の海拔は22.15～22.35m付近で、軸方向はN-23°-Wである。両側に幅広いテラス状の平坦面を持ち、中央を1段深い掘り込みが走る形状である。断面形や堆積土層の状態から幅狭で深い溝(土層A-Bの2・3層部分)から、幅広で浅い溝(土層A-Bの1層部分)への新旧2時期の利用、あるいは(土層A-Bの3層→2層→1層)への3時期の利用も考えられるが、明確な痕跡は検出されていない。幅狭の深い掘り込みの北東壁面に付帯するテラス状部分では板状の木片が検出されている。

検出された遺構の規模は、長さが439cm、幅は上端が最大169cm、幅狭の深い掘り込み上端部分が32～68cm、下端は10～19cmを測る。深さは27～43cm、下端標高は海拔19.90m前後で一定している。

溝1出土遺物(図8)

1は白磁の口元皿である。横田・森田編年白磁皿IX類で13世紀後半～14世紀初頭に属する。

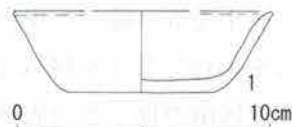


図8 溝1出土遺物

表2 1面検出ピット概要

NO	規模 (cm)	深さ (cm)	底面標高 (m)	備考
P1	34 × 30	19	19.94	
P2	[48] × 36	34	19.87	溝1との新旧関係は不明。礎板:14×6.5×2を伴う。
P3	43 × 32	23	20.01	溝1との新旧関係は不明。
P4	[32] × 31	7	19.94	P5との新旧関係は不明。
P5	[36] × 37	11	19.93	P4との新旧関係は不明。
P6	35 × 27	7	20.11	

ピット (表2)

1面からは6口のピットが検出されている。覆土は何れも粘性、しまりの欠ける灰褐色土である。詳細は1面検出ピット概要(表2)を参照されたい。

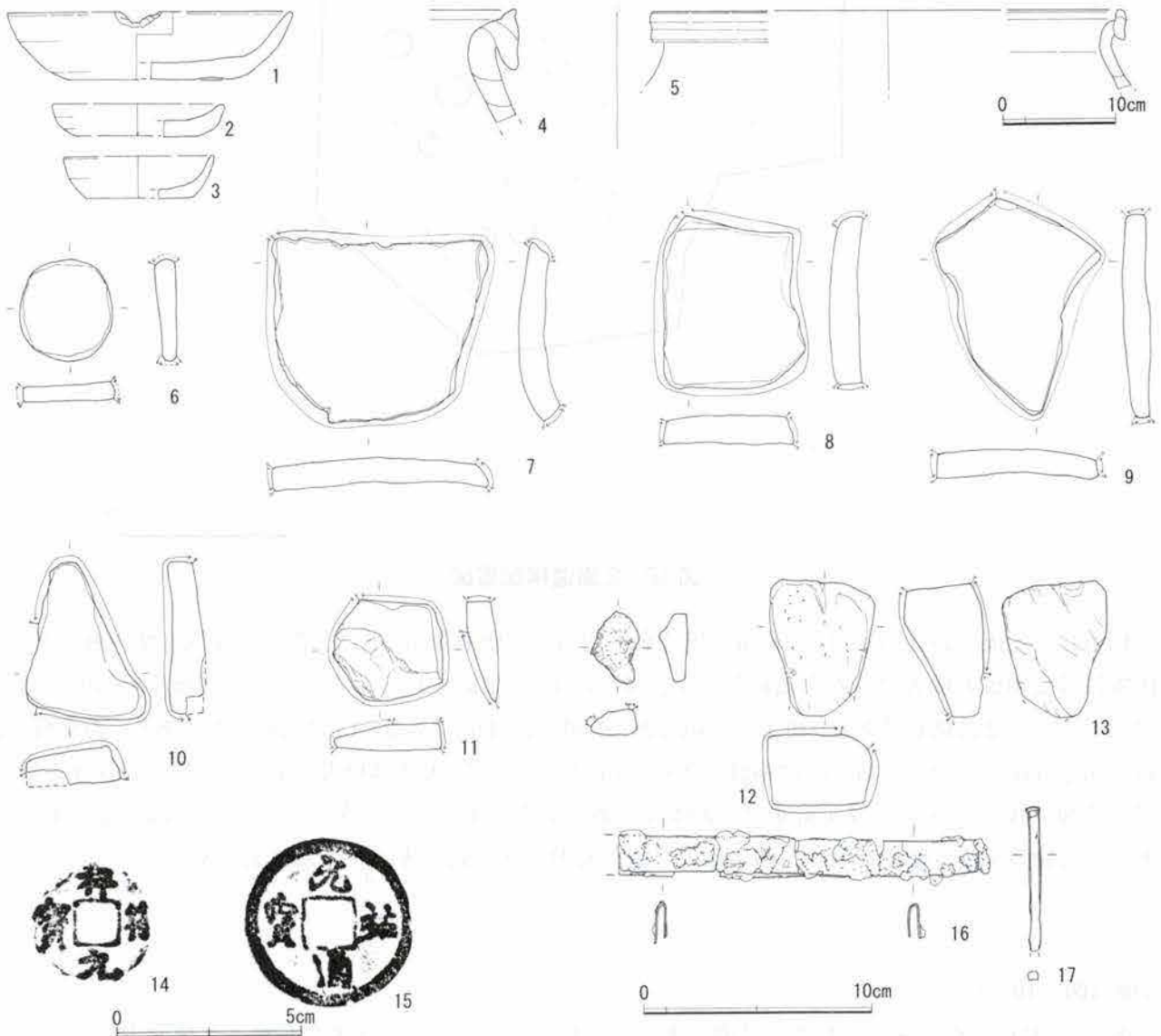


図9 1面出土遺物

1面出土遺物 (図9)

1～3はロクロ成形のかわらけで、1は大皿、2、3は小皿である。1、2は胎土がやや粗く、3は精緻な胎土で硬く焼きしめる丸深タイプである。14世紀前半期に比定される。4、5は常滑窯の甕の口縁部である。4は7型式、5は6b型式13世紀後半～14世紀前半期の様相を示す。6はかわらけの底部

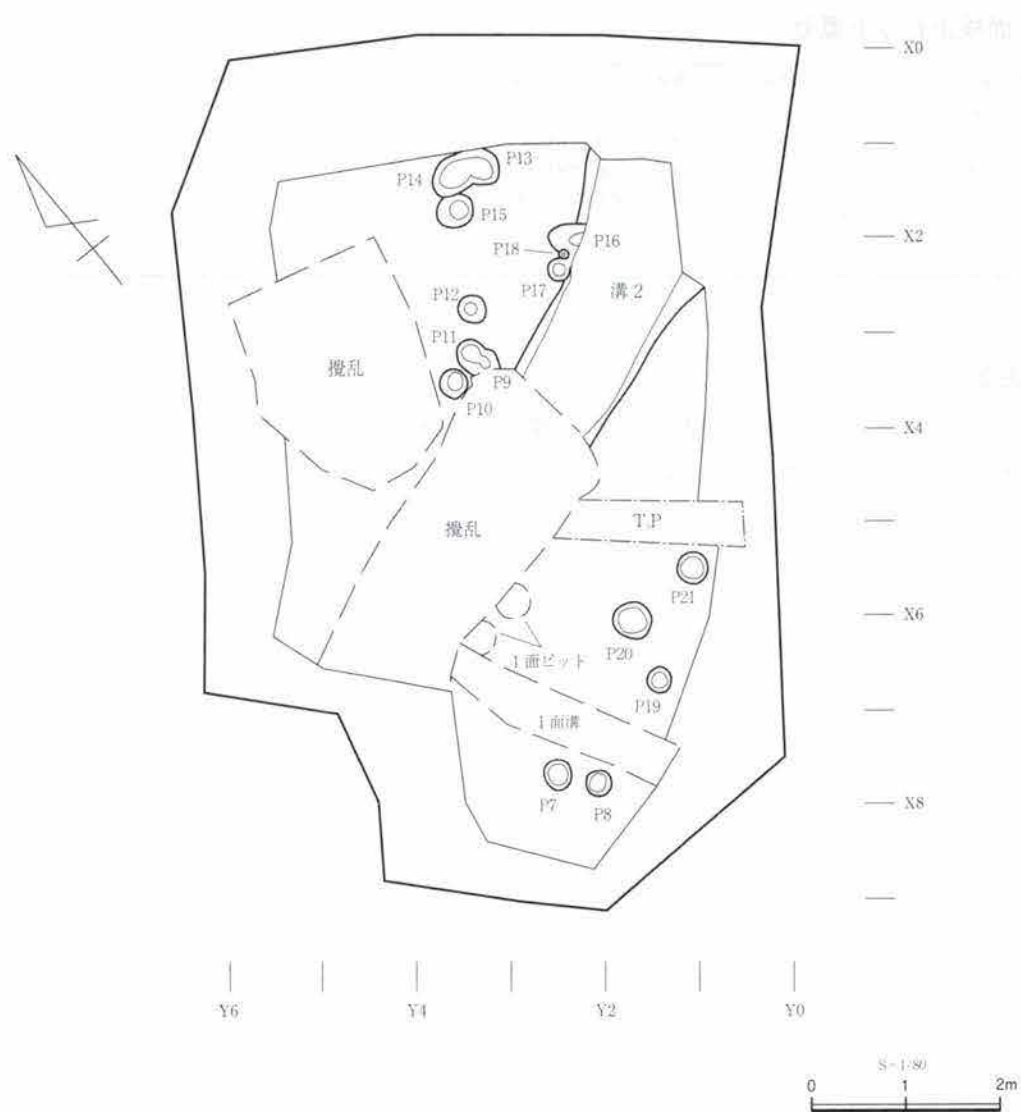


図 10 2面遺構配置図

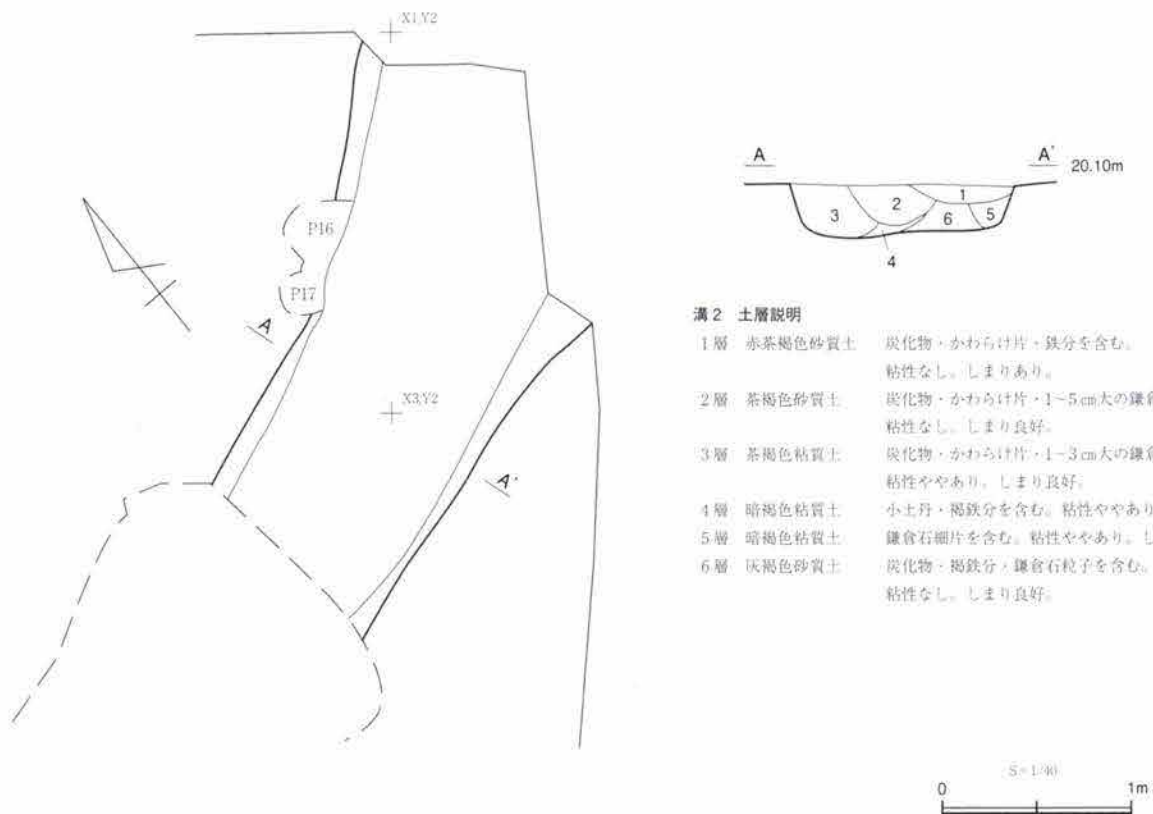
を転用した円板である。7～11は常滑の破片を再利用した研磨製品である。断面の4周に使用痕がある。図版には使用痕の顕著な5点を掲載したが、ほかに11点確認された。すべて常滑の破片を転用したものであった。12は砥石である。伊予産中砥である。砥面は4面である。13は火打ち石である。石英質で、敲打部分は煤けている。14、15は銅銭である。14は祥符元宝、書体は楷書である。また、周縁部を磨っている加工銭である。15は元祐通宝、書体は行書である。16、17は鉄製品である。16は用途不明品である。刃物等を覆う鞘状を呈し、幅4mmの空洞、器肉は0.5mmと薄い。17は鉄釘である。

2面 (図 10)

海拔20.0m付近で検出された生活面である。土丹粒子などを含む茶褐色粘質土を構成土とする。検出された遺構は溝1条、ピット15口である。

溝2 (図 11)

XI～4, Y1～2グリッドで検出された。西側を現代の攪乱により失う。東端は調査区外に延びる。P16・P17との新旧関係は不明である。検出面の海拔は22.0m付近で、軸方向はN-71°-Eである。西半は断面箱型を呈する比較的整った形状を持つが、東半は北側へ幅を広げて延びている。



溝2 土層説明

- | | |
|------------|--|
| 1層 赤茶褐色砂質土 | 炭化物・かわらけ片・鉄分を含む。
粘性なし。しまりあり。 |
| 2層 茶褐色砂質土 | 炭化物・かわらけ片・1~5cm大の鎌倉石片を含む。
粘性なし。しまり良好。 |
| 3層 茶褐色粘質土 | 炭化物・かわらけ片・1~3cm大の鎌倉石片を含む。
粘性ややあり。しまり良好。 |
| 4層 暗褐色粘質土 | 小土丹・褐鉄分を含む。粘性ややあり。しまり良好。 |
| 5層 暗褐色粘質土 | 鎌倉石細片を含む。粘性ややあり。しまり良好。 |
| 6層 灰褐色砂質土 | 炭化物・褐鉄分・鎌倉石粒子を含む。
粘性なし。しまり良好。 |

図11 溝2

検出された遺構の規模は、長さが386cm、幅は計測し得る範囲で、上端が110~155cm、下端が90~115cmを測る。深さは15~35cm、下端標高は海拔19.82~19.59mで西側から東側へ傾斜している。

溝2 出土遺物 (図12)

1~4はロクロ成形のかわらけである。1は大皿、2は中皿、3、4は小皿である。1、2は同質の胎土であり、大中の揃いと推定される。3は口径、底径比が小さいが器肉が若干薄い。4は復元口径8cmに満たない。これらの様相から14世紀前半期に想定される。5は竜泉窯青磁鎗蓮弁文碗の口縁部の小片である。13世紀前半期の所産である。6、7瀬戸窯の製品である。6は灰釉卸皿の口縁部の小片である。口縁部のみの施釉である。14世紀後半に比定される。7は入子である。器高の低い小型品である。14世紀前半期に比定される。8~11は常滑窯の製品である。8、9は片口鉢I類である。8は高台幅が広く12世紀中葉の様相を呈する。9の高台際の回転へら削り調整は雑である。13世紀中~後半が想定される。10は片口鉢II類の底部である。11は鷹口の壺の底部である。13世紀後半期に比定される。12は瓦質浅型手焙りである。砂粒の非常に多い胎土で、還元焼成で焼かれ器肉は黒色を呈する。口縁部下に小孔が穿たれる。器表には縦方向の工具による調整痕が観察される。13世紀後半期に比定される。13は円板である。かわらけの底部を転用して作られている。14は研磨製品である。常滑の甕体部片を再利用している。この他に、若干の使用した痕跡のある常滑の体部片が4片出土している。当址からは12世紀中葉~14世紀後半の幅広い年代の遺物が出土しているが、出土遺物から判断して14世紀前半期の様相が想定される。6は当址付近に攪乱坑が検出されておりそこからの混入した後世の遺物と考えられる。

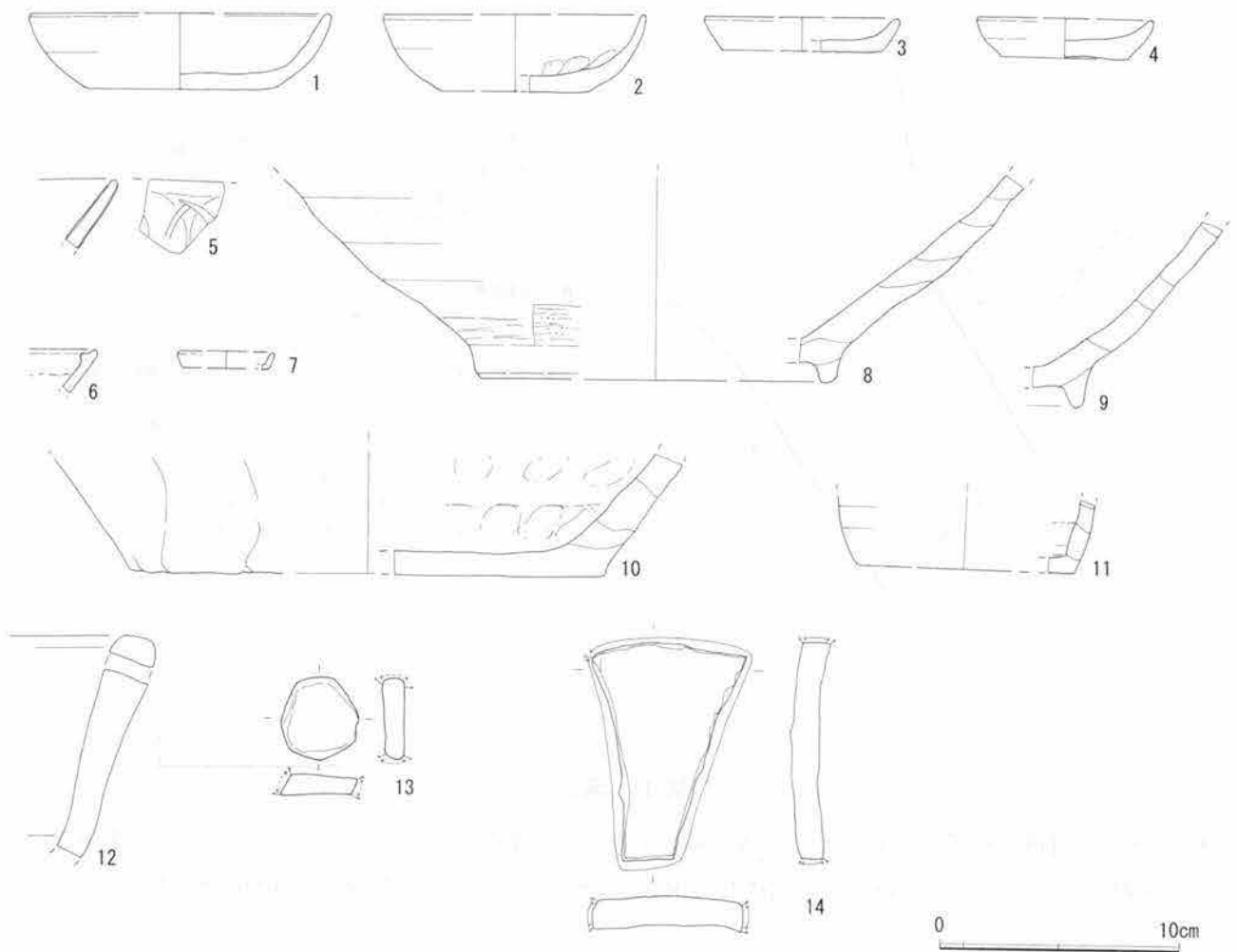


図 12 溝 2 出土遺物

ピット (表 3)

2面からは15口のピットが検出されており、何らの施設を構成するものと思われるが、明確なセット関係を見出せないため個別に詳細を示した。2面検出ピット概要(第3表)を参照されたい。

表 3 2面検出ピット概要

NO	規模 (cm)	深さ (cm)	底面標高 (m)	備考
P7	33 × [24]	15	19.96	
P8	30 × 50	12	19.97	
P9	[23] × 24	16	19.84	P11との新旧関係は不明。
P10	30 × 31	-	-	
P11	30 × 30	21	19.77	P9との新旧関係は不明。
P12	30 × 19	8	19.89	
P13	[38] × [25]	14	19.80	P14との新旧関係は不明。
P14	[40] × 12	14	19.86	P13・P15との新旧関係は不明。
P15	42 × 11	16	19.77	P14との新旧関係は不明。
P16	[39] × 20	21	19.77	溝 2、P17・P18との新旧関係は不明。
P17	25 × 33	17	19.82	溝 2、P16・P18との新旧関係は不明。
P18	10 × 8	13	19.76	杭痕? P16・P17との新旧関係は不明。
P19	28 × 34	20	19.93	
P20	39 × 9	19	19.93	
P21	33 × 7	11	19.89	

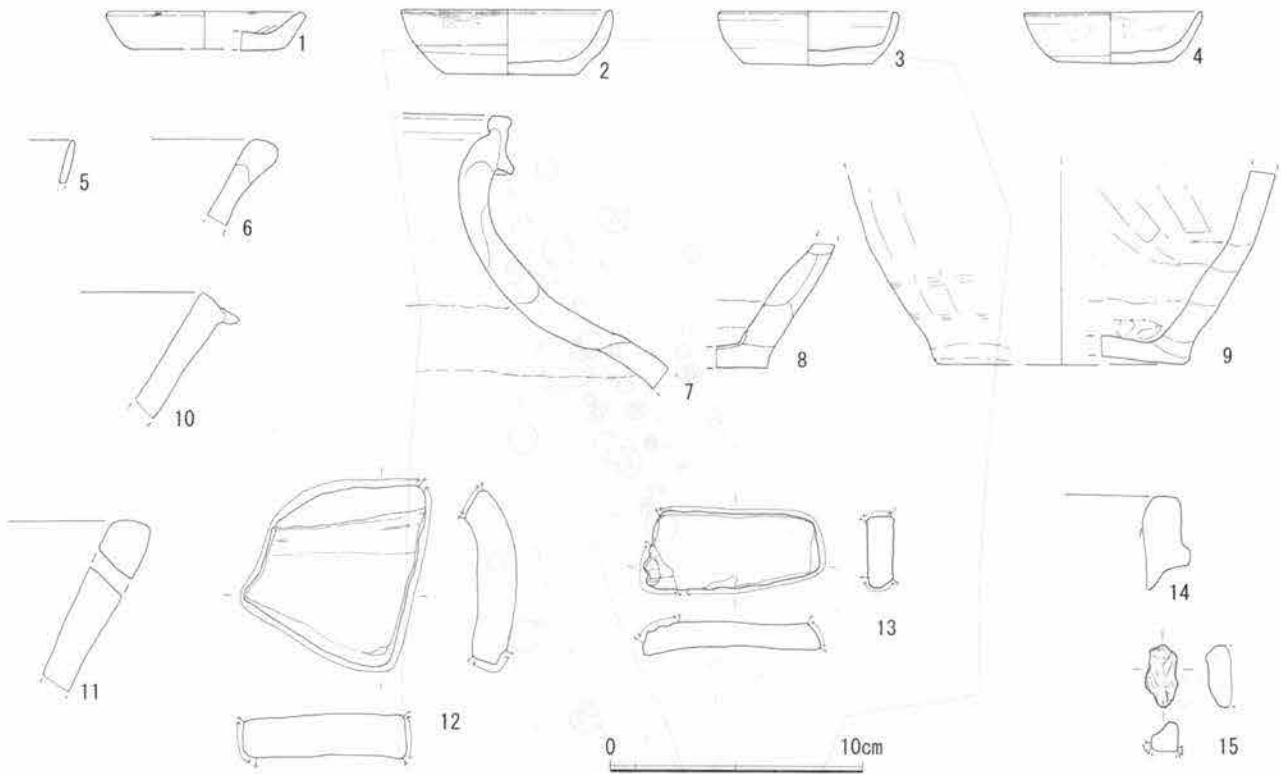


図 13 2面出土遺物

2面出土遺物 (図 13)

1～4はロクロ成形の小皿である。1は粗胎で焼成はさほど良くない。2～4は良好である。2は体部が開き底部際がすぼまる。3は薄手丸深タイプ、4はそれに近い。すべて灯明皿である。14世紀前半期に想定される。5は瀬戸窯の入れ子の口縁部の小片である。6～10は常滑窯の製品である。6は片口鉢Ⅰ類である。口唇端部がやや角張り口縁部下の器肉は薄くなる。13世紀後半に想定される。7は甕である。6b型式、13世紀後半に想定される。8は甕の底部、9は壺の底部である。10は9形式、15世紀前半期に相当する。10は2面の年代観より1世紀ずれる。11は瓦質浅鉢型手あぶりの口縁部の小片である。体外面に工具による縦方向の調整痕がある。12、13は常滑の破片を転用した研磨製品である。断面の四週を転用している。この他に同様、常滑の甕の破片を転用した研磨製品が19点確認されたが、使用痕はさほど明瞭ではない。14は滑石鍋の口縁部の小片である。上顎幅5mm、下顎幅1cmを測り、下顎幅は2倍である。15は石英質の火打ち石である。以上の様相から2面は13世紀末～14世紀前半期を想定される。

3面 (図 14)

海拔19.65～19.85m付近で検出された生活面である。土丹粒子を含む灰褐色粘質土を構成土とする。検出された遺構は溝1条、柱穴列1を含むピット30口の他、部材10点である。

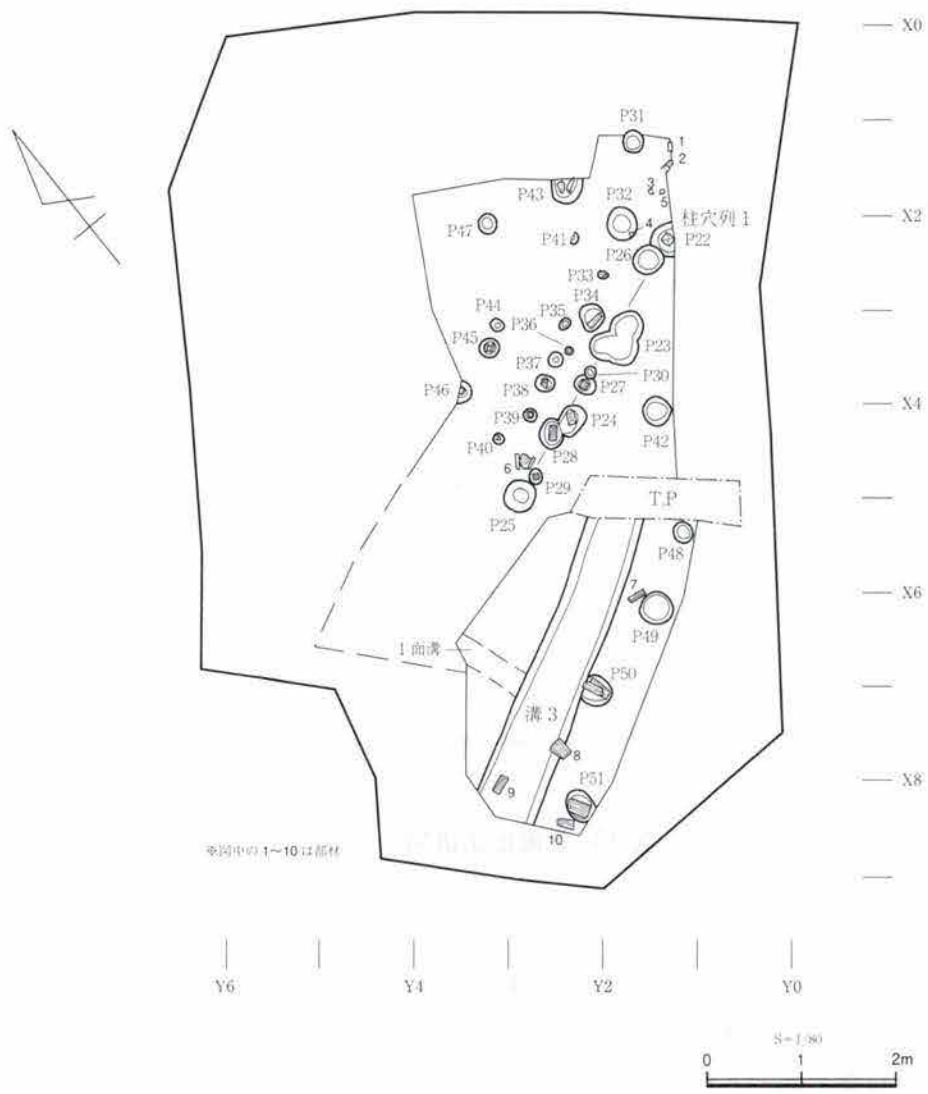


図 14 3面遺構配置図

溝 3 (図 15)

X5 ~ 8, Y1 ~ 3 グリッドで検出された。北東側は試掘坑と重複する部分で途切れている。南西側は調査区外に延びる。部材 8・9 よりも古い。P50 との新旧関係は不明である。検出面の海拔は 19.85 m 付近で、軸方向は $N - 61^{\circ} - E$ である。平面形は直線的で、断面形は箱型に近く、比較的整った形状と言える。

検出された遺構の規模は、長さが 350cm、幅は上端が 59 ~ 69cm、下端が 38 ~ 65cm を測る。深さは 8 ~ 20cm、下端標高は海拔 19.84 ~ 19.65 m で南西側から北東側へ傾斜している。

溝 3 出土遺物 (図 16)

1 は竜泉窯青磁鎚蓮弁文碗の口縁部の小片である。透明感のある釉で器表は粗く貫入する。13 世紀

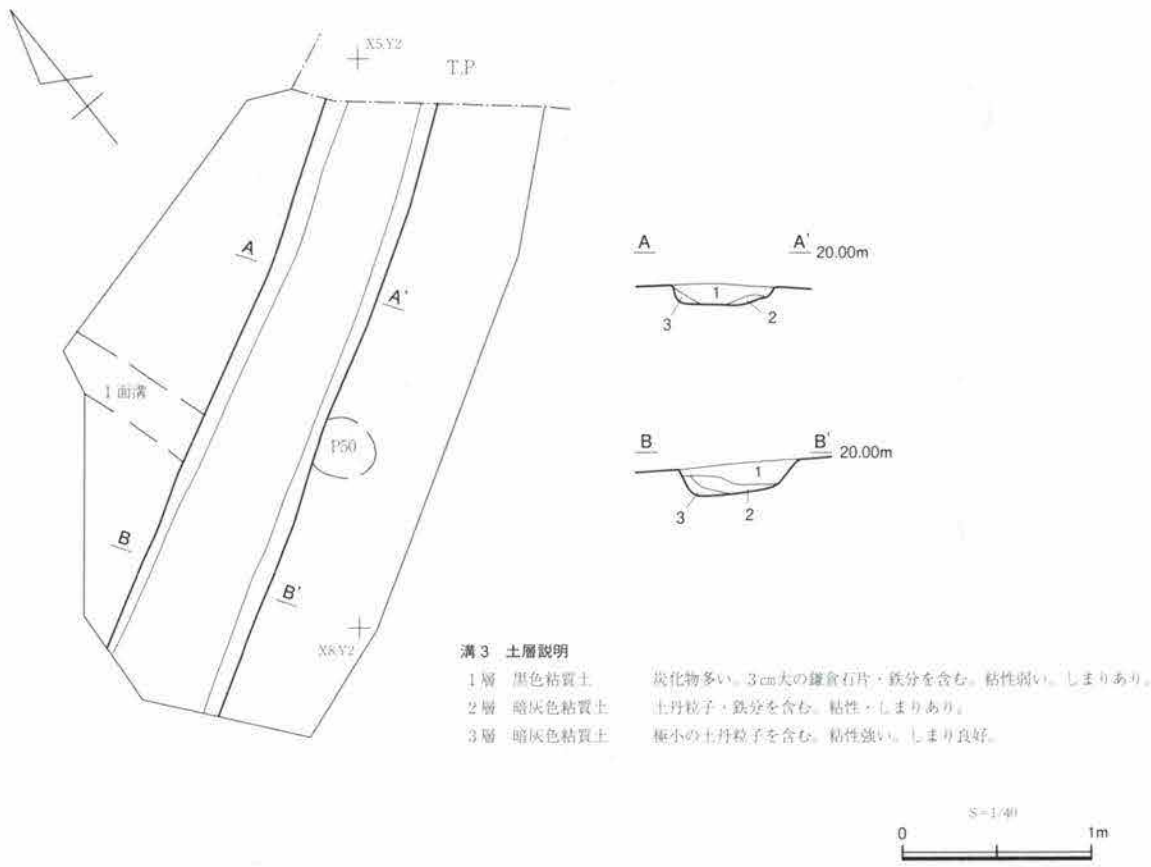


図15 溝3

前半期の所産である。また、当址からは渥美の甕の破片の断面部分に研磨痕を有するものが3片が出土した。

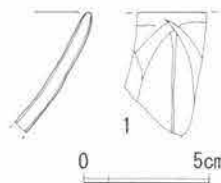


図16 溝3出土遺物

柱穴列1 (図17)

X2～5, Y1～3グリッドで検出された。4口のピットの配置からセット関係の成り立つ可能性が高いものと判断し柱穴列とした。P22がP26と、P24がP28と重複するが新旧関係は不明である。検出面の海拔は19.65m付近で、軸方向はN-69°-Eである。P22は柱を、P24は礎板を伴っている。P23は3口のピットが重複するように見受けられるが詳細は不明である。心々間の距離は、P22からP25の方向へ、108・108・100cmを測る。各柱穴の詳細は1面検出柱穴概要(第4表)を参照されたい。

ピット・部材 (表4)

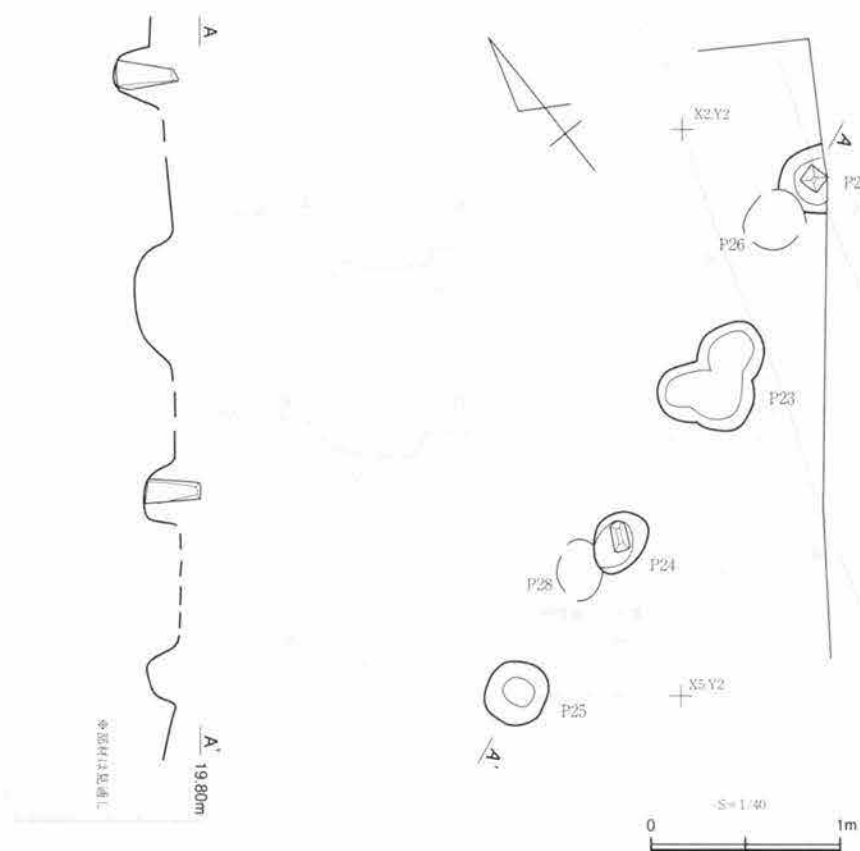


図 17 柱穴列 1

3面からはピット 30 口及び、10ヶ所で部材が検出されている。調査区北東半に集中する。ピット・部材の多くは個別の遺構として扱っているが、柱穴列 1 に近い軸方向を持つと思われる配列なども見受けられる。詳細は 3 面検出ピット概要（第 4 表）・3 面検出部材概要（表 5）を参照されたい。

3 面出土遺物（図 1 8）

1～4はロクロ成形のかわらけで、1～3は大皿、4は小皿である。大皿は 3 点共に灯明皿である。1は器表が荒れており被災した様相を呈する。1, 3は体部が開くタイプ、2はさほど開かず立ち上がるタイプである。小皿は器高の低い皿型である。かわらけの様相は 14 世紀前葉と想定される。5は白磁口元皿の口縁部の小片である。13 世紀後半～14 世紀初頭に属する。6は常滑片口鉢 1 類の口縁部の小片である。13 世紀後半期に比定される。7は瓦質浅鉢型手あぶりの底部片である。内面は横手で調整、外面は、工具を縦横無尽に強く押し当てた粗い調整である。8, 9は研磨製品である。8は渥美の甕の体部片を転用し 4 周全体を使用しており、摩滅が非常に顕著である。9は常滑の体部片である。一端部を刃物状に薄く加工して使用している。3 面で出土した研磨製品は他に 2 点あり、共に渥美の甕の体部片を転用している。3 面の様相は 14 世紀前葉であると想定される。

表4 3面検出ピット概要

NO	規模 (cm)	深さ (cm)	底面標高 (m)	備考 ※部材の寸法は「縦×横×厚さ・長さ、単位はcmとする。
P22	36 × [24]	22	19.44	柱穴列1。柱：(12) × (11) × 24を伴う。
P23	57 × 50	19	19.46	柱穴列1。3口のピットが重複すると思われるが、詳細は不明。
P24	[34] × 24	16	19.51	柱穴列1。柱：(16) × (8) × 30を伴う。P28との新旧関係は不明。
P25	36 × 31	14	19.53	柱穴列1。
P26	33 × 30	16	19.48	P22との新旧関係は不明。
P27	22 × 19	7	19.58	
P28	(28) × (25)	10	19.58	P24との新旧関係は不明。
P29	17 × 12	5	19.65	杭：(6) × (3) × 19を伴う。
P30	12 × 11	-	-	杭痕？ 確認面の標高は19.75m。
P31	24 × 20	9	19.50	
P32	35 × 33	7	19.61	部材5よりも新しい。
P33	11 × 8	6	19.59	杭：(2) × (2) × (7)を伴う。
P34	28 × 34	18	19.46	礎板：(19) × (13) × 2を伴う。
P35	10 × 9	8	19.69	杭痕？
P36	8 × 7	-	-	杭痕？ 確認面の標高は19.79m。
P37	14 × 14	12	19.54	
P38	18 × 15	6	19.60	杭：? × ? × (15)を伴う。
P39	11 × 10	5	19.64	杭：(5) × (3) × ?を伴う。
P40	12 × 11	5	19.62	杭：(3) × (3) × (6)を伴う。
P41	11 × (7)	11	19.65	杭痕？
P42	29 × 29	8	19.57	
P43	33 × [23]	13	19.55	木片(礎板?) 2枚：長さ17 / 10を伴う。
P44	13 × 12	8	19.60	
P45	22 × 21	9	19.59	礎板：(10) × (7) × (2)を伴う。
P46	23 × [12]	2	19.66	杭：(5) × (2) × (11)を伴う。
P47	20 × 16	16	19.51	
P48	20 × 20	8	19.68	
P49	35 × 34	10	19.69	
P50	[31] × 29	12	19.76	礎板2枚：(24) × (10) × 2 / (21) × (5) × 3を伴う。溝3との新旧関係不明。
P51	[33] × 30	14	19.77	礎板：(23) × (12) × 3.5を伴う。

表5 3面検出部材概要

※寸法は、縦×横×厚さ・長さ。
※底面標高は部材の下端の高さ。また、確認しえた底面標高より更に深く埋まっている場合はxxx以下と記した。

NO	寸法 (cm)	上面標高 (m)	底面標高 (m)	備考
材1	× (7) × (2)	19.78	19.55	板状。側板？
材2	(3) × (3) × (13)	19.55	19.42以下	杭
材3	- × - × -	19.42	19.55	杭
材4	(2) × (2) × -	19.61	-	杭
材5	- × - × -	19.55	-	杭。P32よりも古い。
材6上	(10) × (10) × 3	19.64	19.61	礎板
材6下	(14) × (12) × -	19.63	-	礎板
材7	(22) × (6) × 2	19.82	19.80	礎板
材8	(16) × (14) × 1.5	19.91	19.89	礎板。溝3よりも新しい。
材9	(20) × (9) × 3	20.01	19.98	礎板。溝3よりも新しい。
材10	(16) × (9) × 2	19.95	19.93	礎板

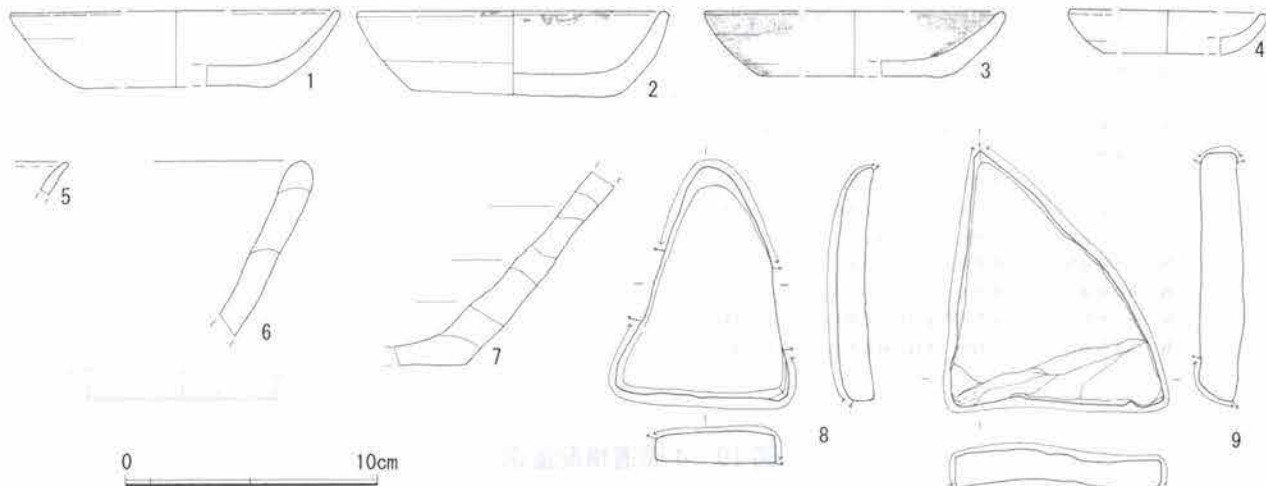
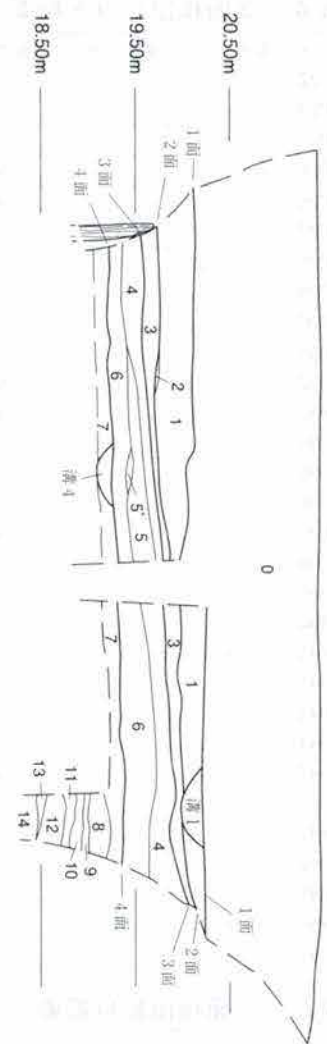
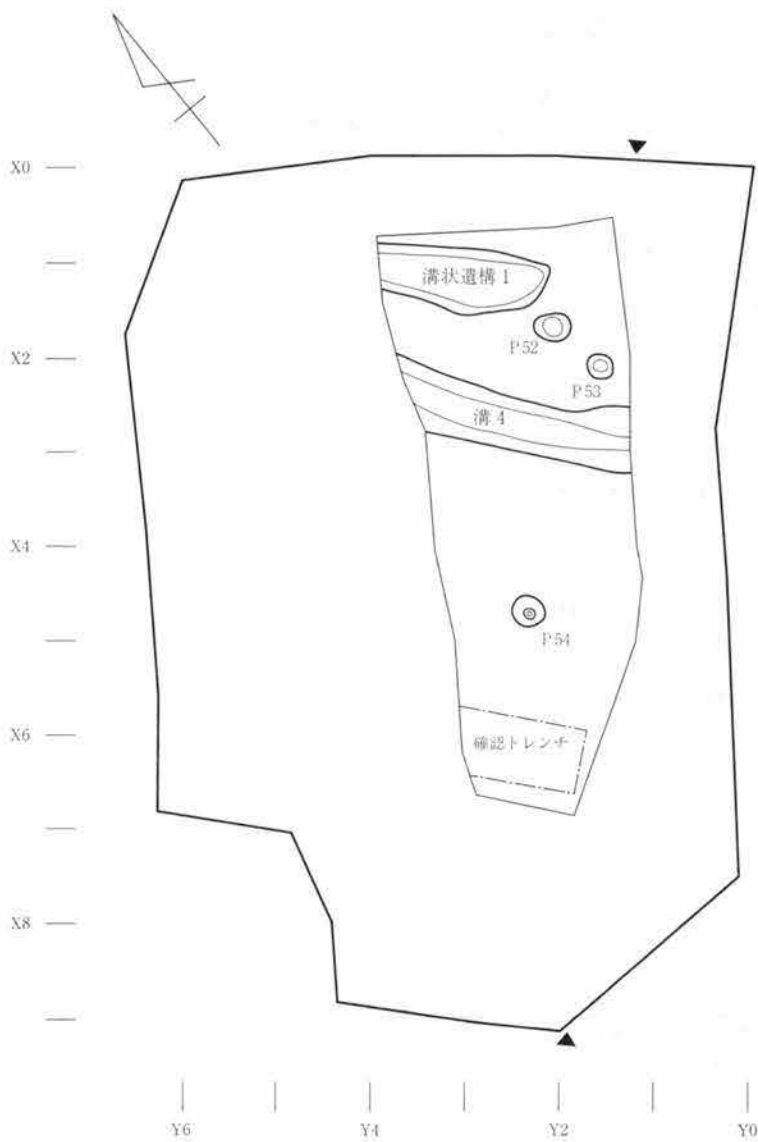


図18 3面出土遺物



土層説明

- 0層 表土層 砂利を若干混入する砂層。宝永の火山灰が存在する。
- 1層 茶褐色粘質土 (1面構成土) 土丹粒子・鎌倉石粒子を含む。褐鉄分が多い。粘性あり。しまり良好。
- 2層 茶褐色粘質土 炭化物を多く含む層。粘性あり。しまり良好。
- 3層 茶褐色粘質土 (2面構成土) 土丹粒子・かわらけ細片・炭化物を含む。褐鉄分が多い。粘性あり。しまり良好。
- 4層 灰茶褐色粘質土 (3面構成土) 土丹粒子を含む。西側は褐鉄分が多い。粘性あり。しまり良好。
- 5層 黒灰色粘質土 土丹粒子を含む。粘性あり。ややしまる。
- 6層 黒灰色粘質土 古代の土器を含む。夾雑物を含まない。粘性あり。しまり良好。
- 7層 黒色粘質土 (4面構成土) 混入物なし。粘性あり。しまり良好。
- 8層 黒茶色粘質土 有機物(木器)・土器を多く含む。粘性あり。しまりなし。
- 9層 黒色粘質土 粗い青砂を含む。土器片を若干含む。粘性高い。しまりなし。
- 10層 赤黒色粘質土 有機物(木器)層。
- 11層 黒灰色粘質土 粘性あり。しまり良好。
- 12層 黒色粘質土 粘性あり。しまり良好。
- 13層 灰色粘質土 灰色粗砂を含む。粘性あり。しまり良好。
- 14層 赤茶色粘質土 有機物(木器)層粘性あり。しまり良好。

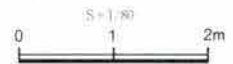


図 19 4面遺構配置図

4面 (図19)

海拔 19.2 ~ 19.3 m 付近で検出された生活面である。混入物の少ない黒色粘質土を構成土とする。検出された遺構は溝1条、ピット3口である。

溝状遺構1 (図20)

X0 ~ 1, Y2 ~ 3 グリッドで検出された。北西側は調査区外に延びる。検出面の海拔は 19.20 m 付近で、軸方向は N - 44° - W である。丸みのある逆台形を呈する。

検出された遺構の規模は、長さが 185m、幅は上端が 48 ~ 70cm、下端が 17 ~ 48cm を測る。深さは 15 ~ 19cm、下端標高は海拔 19.04 ~ 19.10 m で北西側がやや高い。

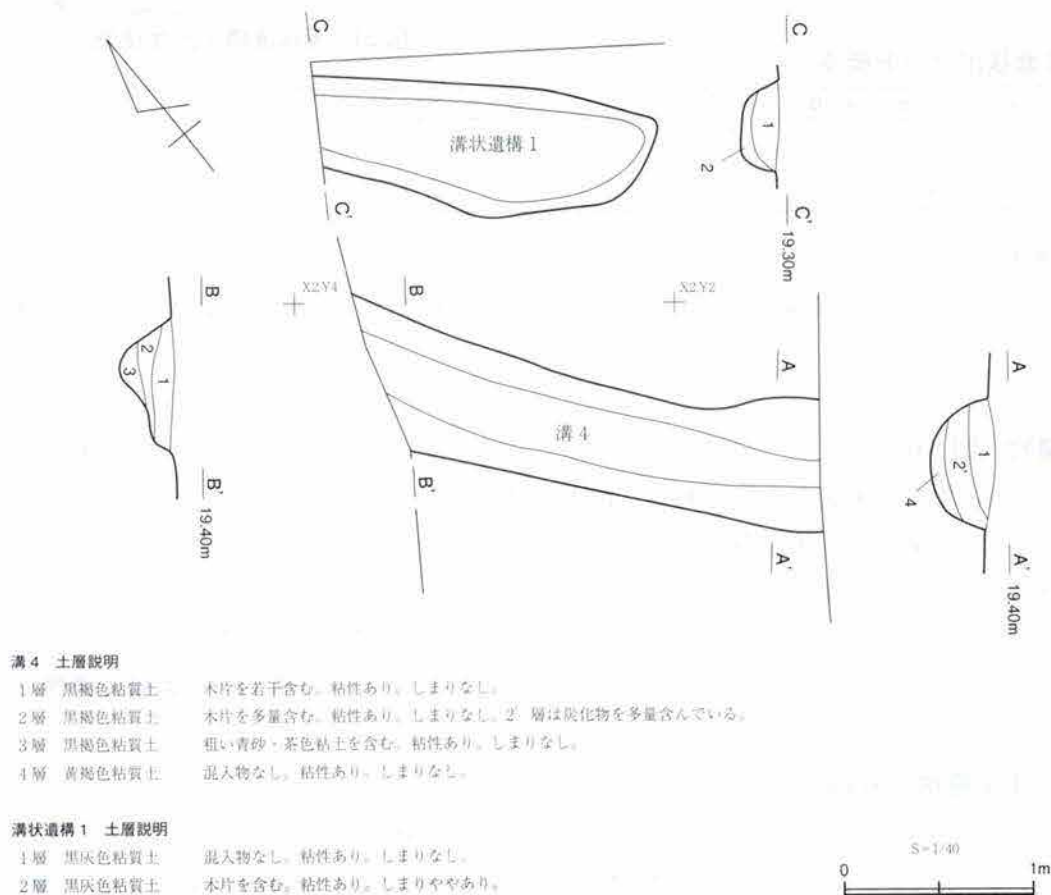


図20 溝状遺構1・溝4

溝4 (図20)

X2 ~ 3, Y1 ~ 3 グリッドで検出された。両端は調査区外に延びる。検出面の海拔は 19.30 m 付近で、軸方向は N - 38° - W である。断面形は場所により異なるが、概ね丸みのある逆台形に近い。

検出された遺構の規模は、長さが 276cm、幅は上端が 53 ~ 70cm、下端が 13 ~ 29cm を測る。深さは 28 ~ 34cm、下端標高は海拔 18.95 m 前後で一定している。

溝状遺構 1 出土遺物 (図 21)

1 は木製品、板杓子である。身の部分は身幅 5 cm、身丈 9.5 cm を測る長円形を呈する。柄幅は 2.3 cm を測り、身幅の半分足らずである。

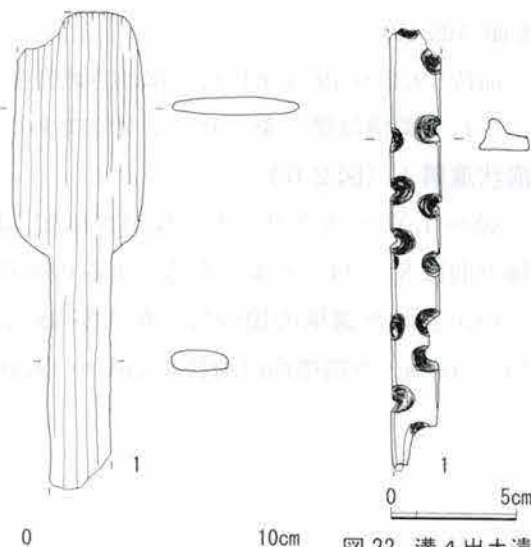


図 21 溝状遺構 1 出土遺物

溝 4 出土遺物 (図 22)

1 は火鑽臼である。遺存した長さは 17.6 cm、幅 2 cm を測り、1 ~ 2 cm 間隔で両端に 6 箇所ずつ、両端に 2 箇所の計 14 箇所の使用痕が確認できる。臼は直径 1 cm、深さ 6 mm 前後を測る。

図 22 溝 4 出土遺物

表 6 4 面検出ピット概要

NO	規模 (cm)	深さ (cm)	底面標高 (m)	備考
P52	38 × 30	17	19.06	※部材の寸法は：縦 × 横 × 厚さ・長さ、単位はcmとする。
P53	29 × 26	28	18.98	
P54	35 × 33	27	19.02	

ピット (表 6)

4 面からは 3 口のピットが検出されている。詳細は 4 面検出ピット概要 (第 00 表) を参照されたい。

4 面出土遺物 (図 23)

1 は東遠型山皿の口縁部の小片である。13 世紀の所産である。2 は渥美窯の鉢の小片である。13 世紀前半期の所産である。3 は砥石である。白色を呈する伊予産の中砥である。

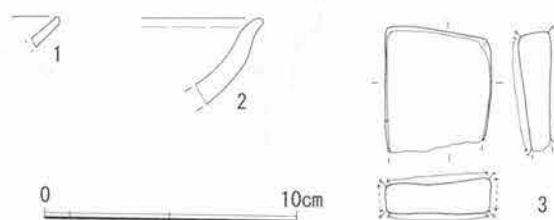


図 23 4 面出土遺物

古代以前の出土遺物 (図 24)

1 は台付鉢の接合部片で、弥生時代後期の土器である。内外面ナデ調整で、内底面にわずかに赤彩の痕跡が残る。2・3 は S 字状口縁を持つ台付甕の口縁部片・接合部で古墳時代前期のもの。2 は肩部に斜位のハケ目が観察される。3 の外面は斜位のハケ目調整が施されており、器壁が薄く、ハの字状に開いた幅広い脚台を持つ形態と思われる。4 ~ 7 は高坏で古墳時代前期から中期のものと思われる。4 は坏部に段を持ち口縁部が外反し開く形態で、内外面とも赤彩が施されている。5 は接合部片で内外面とも赤彩が施されている。6・7 は脚裾部片である。6 は裾部に段を持つ形態を持ち、外面は赤彩され縦方向のミガキが施されている。7 は欠損部付近から緩く屈曲して立ち上がる形態を有するものと思われる。外面は赤彩され横方向のミガキが施されている。8 ~ 10 は古墳時代後期の土師器坏口縁部片で、口縁部から内面ナデ調整、外面底部はケズリが施されている。8 は口縁部と底部の境に稜を有するもの。9 は口縁部が直線的に外反し深い器型を呈するもので、内外面とも赤彩が施されている。10 は内湾する口縁部を持ち、底部が弧状を呈するもので、北武蔵地方に系譜を求められるものと思われる。11・12 は土師器甕である。11 は古墳時代後期のもの。口縁部ナデ調整、胴部は縦位のケズリが施されている。

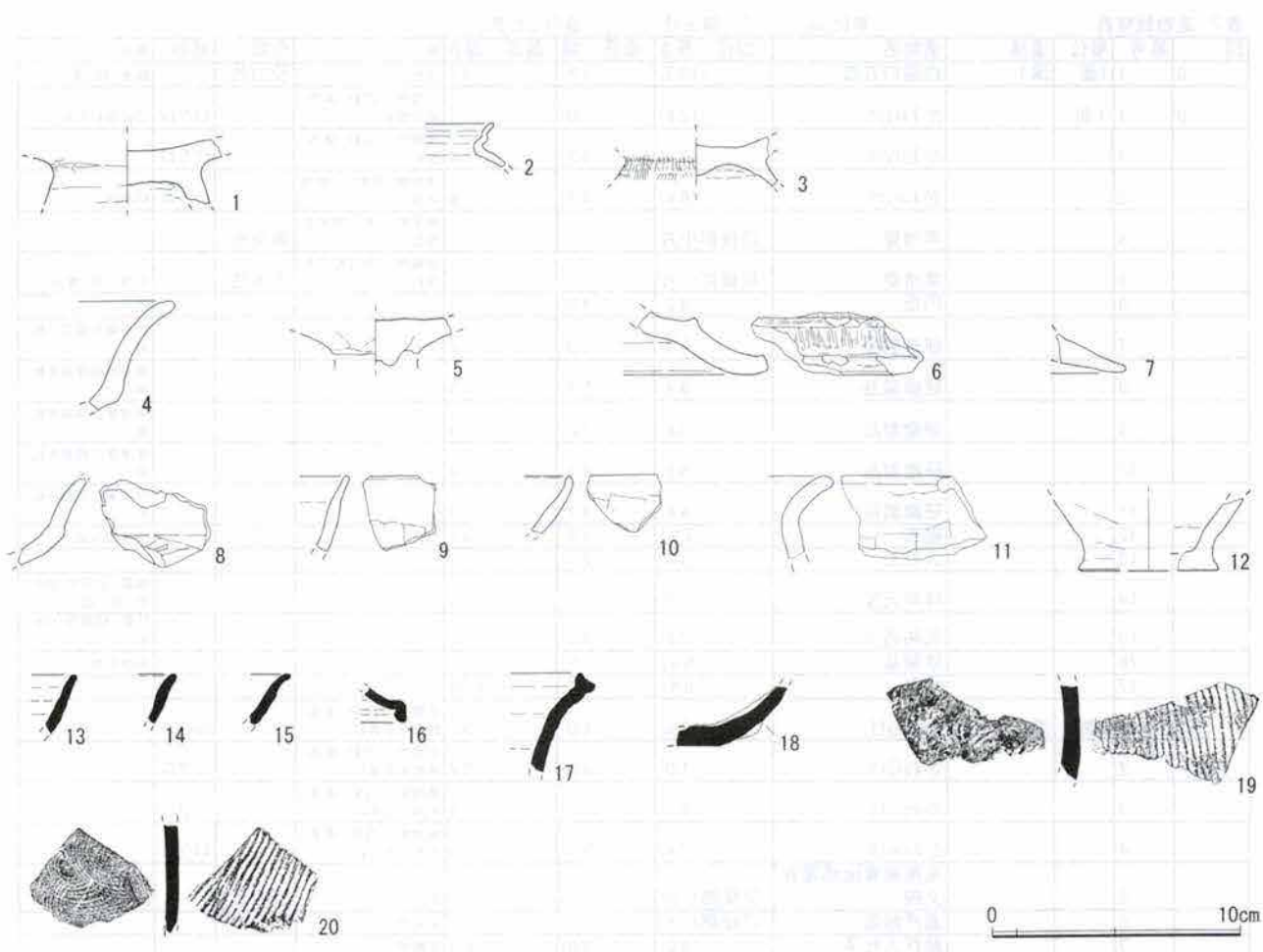


図 24 古代以前の出土遺物

12は相模型の甕で9世紀代のものと思われる。器壁は薄く、胴部ナデ調整、底部には木葉痕が観察される。13～15は須恵器坏、16は須恵器蓋で9世紀から10世紀代の製品と思われる。15、16の胎土には白色針状物質が含まれている。17は須恵器長頸瓶で、内外面とも降灰による自然釉を被っている。18は須恵器壺（瓶）類の底部片と思われる。胴部下位から底部にかけて回転ヘラケズリが施されている。内底面は降灰による自然釉が厚くかかり、外面胴部下にも灰の付着が認められる。19・20は須恵器甕の胴部片で、いずれも外面に平行叩き目、内面に同心円状のあて具痕が観察される。17～20は古墳時代後期以降のものと思われるが、小片のため詳細な時期は不明である。

表7 遺物観察表

単位cm ()=復元径 []=遺存した長さ

図	番号	層位	遺構	遺物名	口径/長さ	底径/幅	器高/厚さ	胎土	色調	成形	備考
	8	1面	溝1	白磁口元皿	(10.3)	5.8	3.2	白色	灰白色		器表 粗く貫入
	9	1面		かわらけ	(12.6)	(7.0)	3	淡橙色 / 白針、赤茶色粒子を含む		ロク口	口縁部打ち欠く
		2		かわらけ	(7.6)	(5.2)	1.4	淡橙色 / 白針、雲母を含む		ロク口	
		3		かわらけ	(6.6)	(4.7)	1.8	淡橙色 / 白針、白色粒子を含む		ロク口	灯明皿
		4		常滑甕	口縁部小片			暗茶色 / 長石粒子を含む	黒茶色		
		5		常滑甕	口縁部小片			灰褐色 / 長石粒子を含む	赤茶色		外面に厚く降灰
		6		円板	4.2	4.0	0.9				用
		7		研磨製品	9.4	7.8	1.2				常滑甕の肩部を転用
		8		研磨製品	9.4	5.7	1.3				常滑甕の体部を転用
		9		研磨製品	8.8	7.0	1.3				常滑甕の体部を転用
		10		研磨製品	6.8	4.3	1.4				常滑甕の頸部を転用
		11		研磨製品	4.6	4.7	1.3				常滑甕の体部を転用
		12		磁石	[5.9]	4.5	3.1	白色			伊予産中磁
		13		火打石	3.0	2.0					
		14		祥符元宝	1.5	1.5					祐書 初鑄年1008年 加工銭
		15		元祐通宝	2.2	2.2					行書 初鑄年1086年
		16		鉄製品	[15.8]	1.5					用途不明
		17		鉄釘	[6.4]	0.4	0.35				
12	1	2面	溝2	かわらけ	(12.6)	8.0	3.1	淡橙色 / 白針、赤茶色粒子を含む		ロク口	
	2			かわらけ	(11.0)	(6.0)	3.2	淡橙色 / 白針、赤茶色粒子を含む		ロク口	
	3			かわらけ	(8.2)	(6.7)	1.4	濃橙色 / 白針、赤茶色粒子を含む		ロク口	
	4			かわらけ	(7.4)	(5.4)	1.55	淡橙色 / 白針、赤茶色粒子を含む		ロク口	
	5			竜泉窯青磁蓮弁文碗	口縁部小片			灰色	灰緑色		器表に傷多い
	6			瀬戸卸皿	口縁部小片			灰褐色			
	7			瀬戸入れ子	(4.0)	(3.6)	0.8	灰褐色			
	8			常滑片口鉢Ⅰ類		(15.2)	[8.4]	灰色 / 長石粒子を含む			内面摩滅顕著
	9			常滑片口鉢Ⅰ類	底部片			灰色 / 長石粒子を含む			内面摩滅顕著
	10			常滑片口鉢Ⅰ類		(20.0)	[5.1]	む			内面摩滅顕著
	11			常滑薫口壺		(9.0)	[3.0]	灰褐色 / 長石微粒子を含む			
	12			瓦質手焙り	口縁部小片			暗灰色 / 砂粒子を含む			浅鉢型
	13			土製円板	3.5	3.2	0.9				かわらけの底部片利用
	14			研磨製品	9.2	6.2	1.2				常滑甕の体部片利用
13	1	2面		かわらけ	(7.9)	(5.7)	1.5	橙色 / 白針赤茶色粒子を含む		ロク口	灯明皿
	2			かわらけ	8.4	5.4	2.5	淡橙色 / 白針、雲母を含む		ロク口	灯明皿
	3			かわらけ	8.2	5.2	2.1	淡橙色 / 白針を含む		ロク口	灯明皿
	4			かわらけ	7.1	4.6	2.0	淡橙色 / 白針雲母を含む		ロク口	灯明皿
	5			瀬戸入れ子	口縁部小片			白色			
	6			常滑薫片口鉢Ⅰ類	口縁部小片			灰色 / 長石を含む			内面に厚く降灰
	7			常滑窯甕	口縁部小片			灰褐色 / 長石粒子を含む			外面に厚く降灰
	8			常滑窯甕	底部片			茶黒色			
	9			常滑窯壺		(10.0)	[7.6]	暗灰色			内底面に降灰
	10			常滑片口鉢Ⅱ類				灰茶色 / 長石粒子を含む			
	11			瓦質手焙り	口縁部小片			暗灰色	灰黒色		浅鉢型・口縁部下に小孔あり
	12			研磨製品	7.2	6.5	1.6				常滑甕の頸部使用
	13			研磨製品	2.8	7.1	10				常滑甕の体部使用
	14			滑石鍋	口縁部小片						
	15			火打ち石	2.1	1.0	1.1				
16	1	3面	溝3	青磁蓮弁文碗	口縁部小片			暗灰色	灰緑色		
18	1	3面		かわらけ	(13.2)	(7.0)	3.1	濃橙色 / 白針、赤茶色粒子を含む		ロク口	粗胎 灯明皿
	2			かわらけ	12.3	8.1	3.1	む		ロク口	灯明皿
	3			かわらけ	(12.0)	(9.0)	2.6	端橙色 / 白針、雲母、微砂を含む		ロク口	灯明皿
	4			かわらけ	(8.0)	(5.0)	1.7	端橙色 / 白針、雲母、微砂を含む		ロク口	
	5			白磁口元皿	口縁部小片			白色	灰白色		

	6			常滑窯片口鉢1類	口縁部小片			白褐色/黒色粒子を含む		
	7			瓦質手焙り		底部片		淡褐色/黒色粒子を多く含む		浅鉢型 黒色胎芯 残る
	8			研磨製品	9.4	4.8	1.1			渥美窯体部片の転用
	9			研磨製品	9.9	8.7	1.7			常滑窯体部片の転用
21	1	4面	溝状遺構1	板杓子	[18.9]	5.0				
22	1	4面	溝4	火鑽臼	[17.6]	2.0	1.2			
23	1	4面		山皿				灰色/白色粒子を含む		東遠型
	2			渥美窯鉢				暗灰色/白色粒子を含む		
	3			砥石	[4.7]	4.2	1.3	白色		伊予産中砥

図	番号	器種	観察内容(法量:cm)
24	1	台付鉢	現存率:接合部1/3 法量:— 色調:にぶい肌色 胎土:角閃石多量・長石粒・金雲母少量 焼成:良好 せいけい:[内外面]ナデ 備考:内面わずかに赤彩の痕跡 出土位置:遺構外
	2	台付甕	現存率:口縁部片 法量:— 色調:灰褐色 胎土:長石粒・石英・金雲母・白色粒 焼成:良好 せいけい:[外面]口縁部・ナデ 肩部・ハケ [内面]ナデ 出土位置:遺構外
	3	台付甕	現存率:接合部1/2 法量:— 色調:灰白色 胎土:長石粒多量・石英・金雲母少量 焼成:良好 せいけい:[外面]ハケ [内面]ナデ 出土位置:遺構外
	4	土師器 高坏	現存率:口縁部片 法量:— 色調:橙褐色 胎土:長石細粒多量・金雲母少量・白針少量 焼成:良好 せいけい:[内外面]ナデ 備考:内外面赤彩 出土位置:遺構外
	5	土師器 高坏	現存率:接合部片 法量:— 色調:にぶい褐色 胎土:長石粒・白色粒・白針少量 焼成:良好 せいけい:[内外面]ヘラナデ 備考:内外面赤彩 出土位置:遺構外
	6	土師器 高坏	現存率:脚部片 法量:— 色調:肌色 胎土:粉質 微細雲母・細砂 焼成:良好 せいけい:[外面]ミガキ [内面]ナデ 備考:外面赤彩 出土位置:遺構外
	7	土師器 高坏	現存率:脚部片 法量:— 色調:橙色 胎土:粉質 細砂少量・白針 焼成:良好 せいけい:[外面]ミガキ [内面]ナデ 備考:外面赤彩 出土位置:遺構外
	8	土師器 坏	現存率:口縁部片 法量:— 色調:淡褐色 胎土:黒色粒・長石粒 焼成:良好 せいけい:[外面]口縁部・ナデ 底部・ケズリ [内面]ナデ 出土位置:遺構外
	9	土師器 坏	現存率:口縁部片 法量:— 色調:にぶい褐色 胎土:角閃石・白濁粒 焼成:良好 せいけい:[外面]口縁部・ナデ 底部・ケズリ [内面]ナデ 備考:内外面赤彩 出土位置:遺構外
	10	土師器 坏	現存率:口縁部片 法量:— 色調:橙色 胎土:長石粒・黒色粒 焼成:良好 せいけい:[外面]口縁部・ナデ 底部・ケズリ [内面]ナデ 出土位置:遺構外
	11	土師器 甕	現存率:口縁部片 法量:— 色調:赤褐色 胎土:白色粒・白針・赤色粒少量 焼成:良好 せいけい:[外面]口縁部・ナデ 胴部・ケズリ [内面]ヘラナデ 出土位置:遺構外
	12	土師器 甕	現存率:底部1/8 法量:底径(5.7) 色調:淡褐色 胎土:黒砂多量・金雲母 焼成:良好 せいけい:[内外面]ヘラナデ 備考:底部木葉痕 出土位置:遺構外
	13	須恵器 坏	現存率:口縁部片 法量:— 色調:灰白色 胎土:長石粒 焼成:良好 せいけい:[内外面]ロクロナデ 出土位置:遺構外
	14	須恵器 坏	現存率:口縁部片 法量:— 色調:灰色 胎土:チャート 焼成:良好 せいけい:[内外面]ロクロナデ 出土位置:遺構外
	15	須恵器 坏	現存率:口縁部片 法量:— 色調:灰色 胎土:長石粒・白色粒・白針 焼成:良好 せいけい:[内外面]ロクロナデ 出土位置:遺構外
	16	須恵器 蓋	現存率:口縁部片 法量:— 色調:灰色 胎土:長石粒・白針 焼成:良好 せいけい:[内外面]ロクロナデ 出土位置:遺構外
	17	須恵器 長頸瓶	現存率:口縁部片 法量:— 色調:灰褐色 胎土:細砂・チャート 焼成:良好 せいけい:[内外面]ロクロナデ 備考:内外面降灰 出土位置:遺構外
	18	須恵器 壺(瓶)	現存率:底部片 法量:— 色調:黒灰色 胎土:緻密 長石粒 焼成:良好 せいけい:[内外面]ロクロナデ [外面]胴部下位～底部:回転ヘラケズリ 備考:内面降灰 外面灰付着 出土位置:遺構外
	19	須恵器 甕	現存率:胴部片 法量:— 色調:青灰色 胎土:長石粒・白色粒 焼成:良好 せいけい:[外面]平行叩き目 [内面]同心円状のあて具痕 出土位置:遺構外
	20	須恵器 甕	現存率:胴部片 法量:— 色調:淡灰色 胎土:長石粒・白色粒 焼成:良好 せいけい:[外面]平行叩き目 [内面]同心円状のあて具痕 出土位置:遺構外

第5章 まとめ

今回の調査地点は現代の削平を受け、近世以降の土層は失われていた。今回、確認出来たのは中世期の4面の生活面が検出された。出土遺物はさほど変化が見られず、また少量であり、年代の特定は難しいが、円覚寺創建以降の開発と考えられ概ね13世紀後半～14世紀前半であると思われる。

以下、各時期の様相を述べる。

中世第4面

褐鉄分の多い黒色粘質土で、粘性が強くしまりのよい面である。山ノ内道に平行な溝2条が検出され、溝の両側に柱穴が点在する閑散とした状況である。出土遺物は13世紀前半に比定されるものも出土しているが、近隣の遺跡地と同様、開発されるのは円覚寺創建以降、13世紀後半～末頃であろうと想定される。

中世第3面

土丹粒子を多く含む灰茶色粘質土で粘性がありしまりの良好な生活面である。山ノ内道に直交する溝の両側に柵を設け、建物を構築した様子で、整然としている。4面時より生活空間が広がった様相で、出土遺物から14世紀前葉に比定される。円覚寺が隆盛期に向かう、それに付随するような開発の状況である。

中世第2面

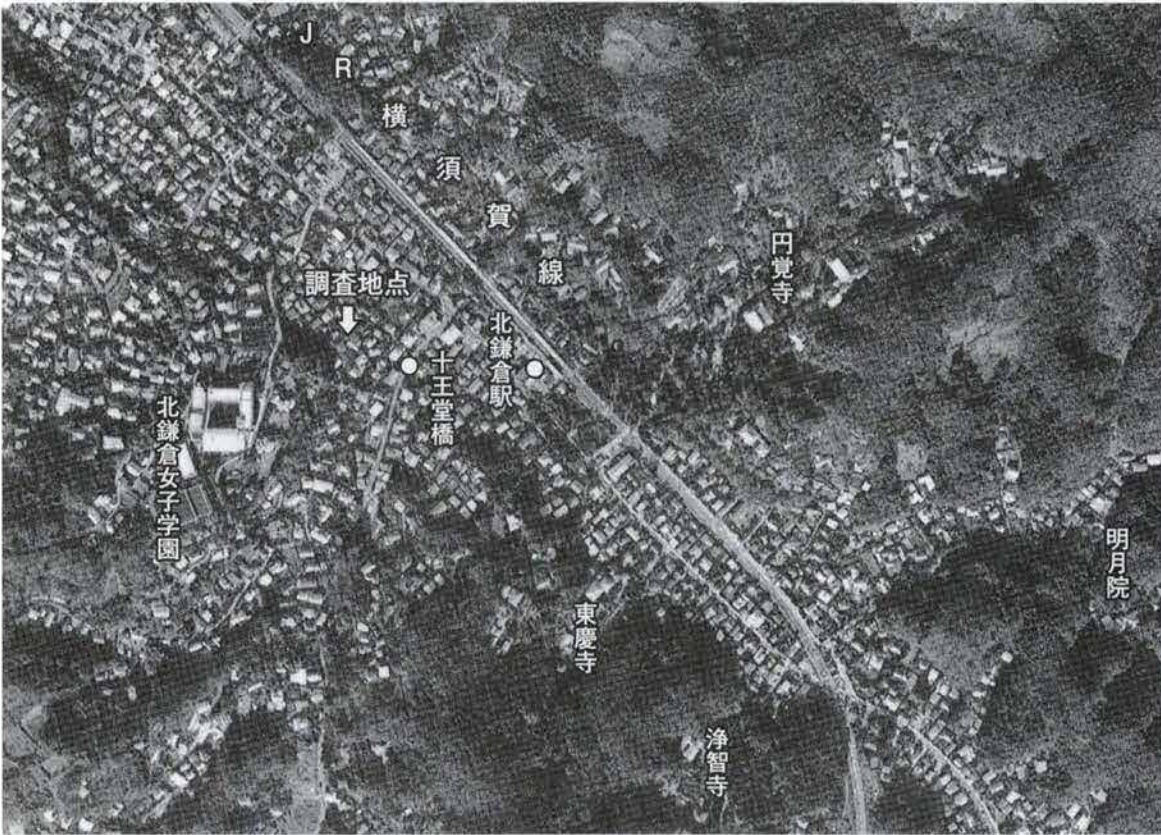
土丹粒子、かわらけ細片を含む茶褐色粘質土で、褐鉄分が多く粘性がありしまりの良好な生活面である。3面とさほど時期差はないが、若干の時期差をみて14世紀中頃であろうか。3面時の溝は踏襲するが柵は設けない。溝および、溝の両側の柱穴群はやや大型化する。前時期同様、円覚寺の様相を反映し隆盛をみるような遺構群の状況である。

中世第1面

土丹粒子、鎌倉石粒子、炭化物片を含む茶褐色粘質土で粘性がありしまりの良好な生活面である。出土遺物から14世紀前半期に比定される。溝は山ノ内道と平行方向に変化し、溝の両側の遺構群は谷戸奥側を意識して開発したのであろうか。谷戸奥側に明確な土丹地形が確認された。山ノ内道側は空間が多く居住域といった様相が感じられない。

各時期ともに地境溝の検出がありその両側に遺構群が展開する。各時期の溝の軸方向は一定方向を示し山ノ内道と平行、或いは直交関係を示す。遺跡存続期間中、敷地の面積、位置等小規模な地割の変化は見て取れるが、基本的な軸が変化した様相はみられない。第1章で述べた円覚寺境内、及び門前を描いた絵図のとおり、小さな建物がこの近辺にも建てられていたような状況ではなかったと思われる。

また、本遺跡地東方100mの台地上には弥生時代～平安時代の遺跡地である台山藤源治遺跡（現北鎌倉女子学園）がある。当遺跡地内では弥生時代後期～古代にかけての遺物が発見されているが、該期の遺構群は検出されなかった。流路により運搬されたものが氾濫時に本遺跡地に流れ込み堆積したか、或いは搬入した造成土に混入していたものと判断したい。



▲ A. 調査地点



▲ B. 調査風景 (北から)



▲ A. 1面全景 (北東から)



▲ B. 溝1土層 (南から)

◀ C. 溝1 (南から)



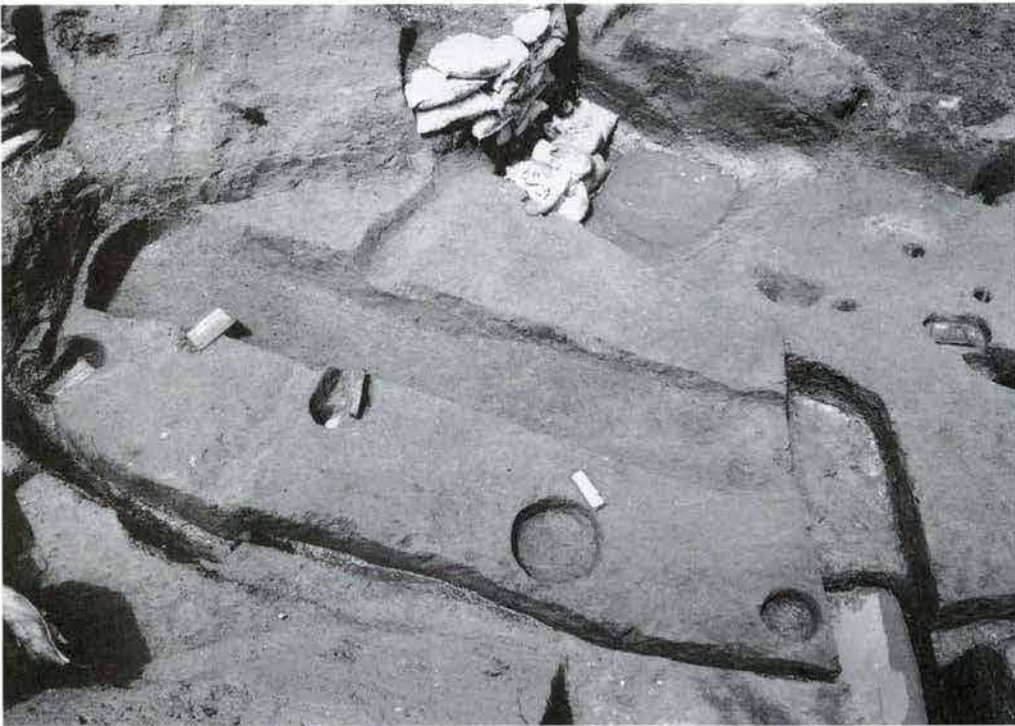
◀ A. 2面全景 (北東から)



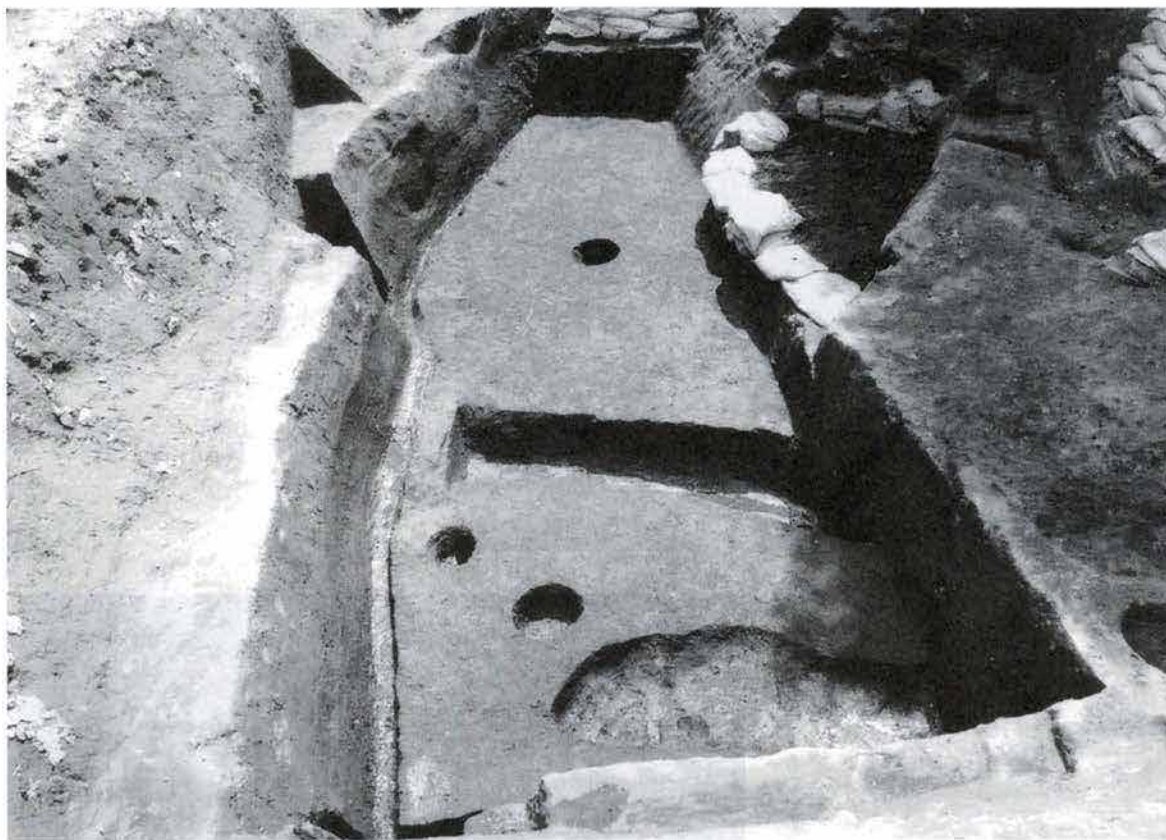
▲ B. 溝2土層 (西から)



◀ A. 3面全景 (北東から)



▲ B. 溝3 (南東から)



▲ A. 4面全景（北東から）



▲ B. 溝状遺構1・溝4（南東から）



◀ A. 溝4土層（北西から）



▲ B. 溝状遺構1土層（北西から）

▼ C. 溝4出土火鑽臼（西から）



▼ D. 溝状遺構1出土板杓子（北から）

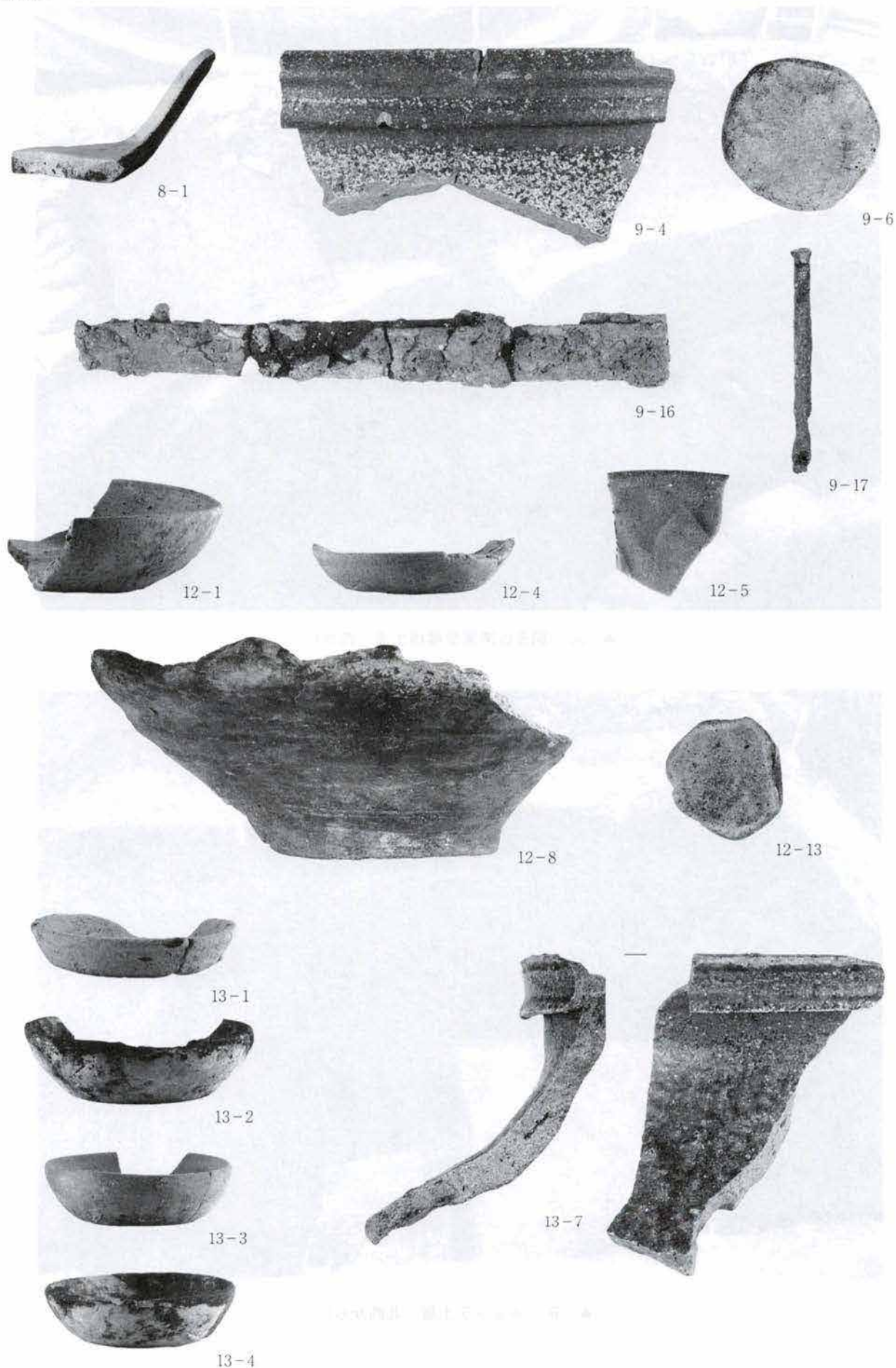




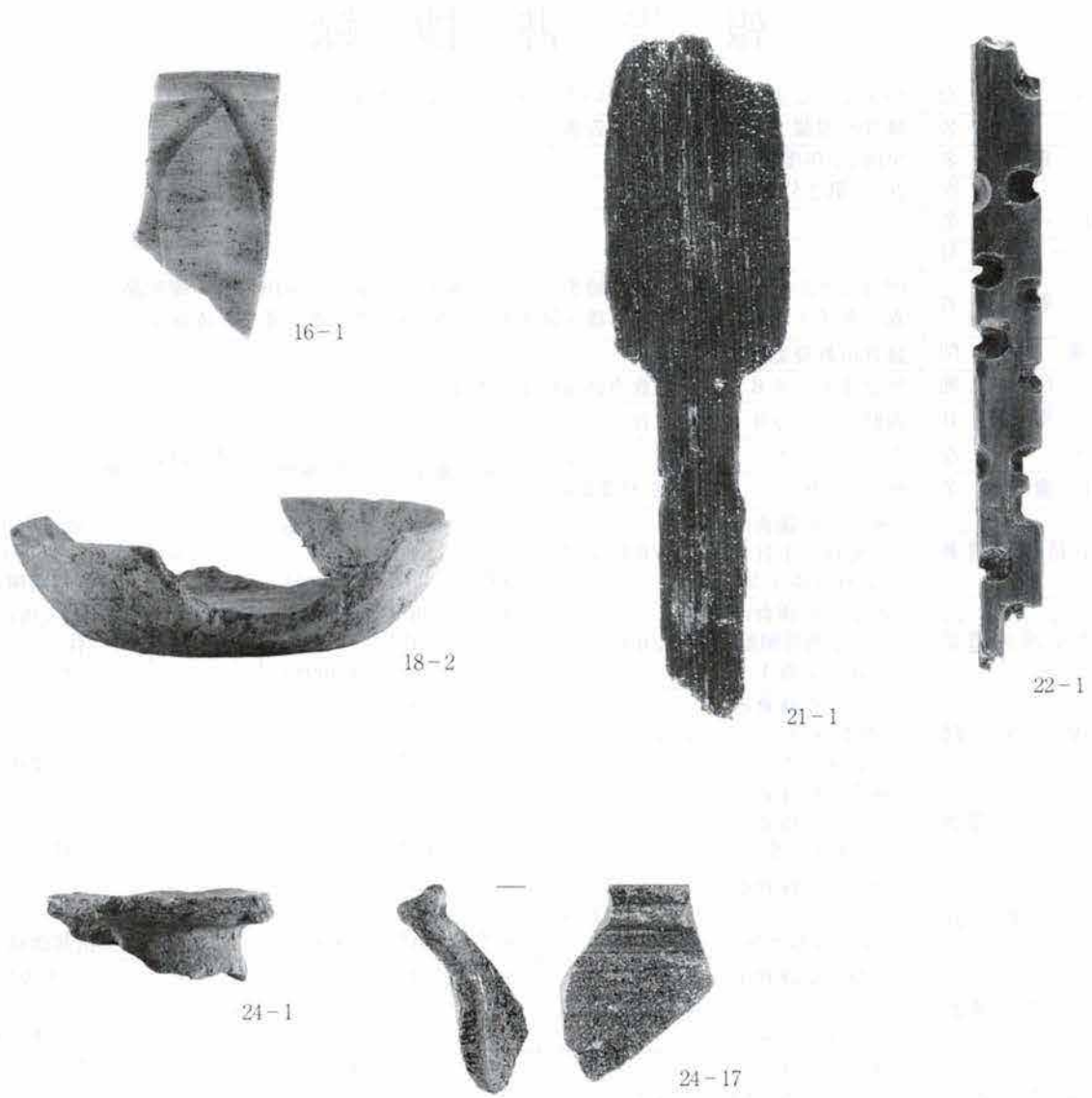
▲ A. 調査区南東壁堆積土層（西から）



▲ B. トレンチ土層（北西から）



出土遺物 (1)



出土遺物（2）

報告書抄録

ふりがな	かまくらしまいぞうぶんかざいきんきゅうちょうさほうこくしょ							
書名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書							
副書名	平成21年度調査報告							
巻次	26 (第2分冊)							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者	伊丹まどか・須佐直子・鈴木絵美／宮田 眞・滝沢晶子／宮田 眞・滝沢晶子／森 孝子・赤堀祐子／齋木秀雄・降矢順子／熊谷 満／森 孝子・赤堀祐子							
編集機関	鎌倉市教育委員会							
所在地	〒248-8686 鎌倉市御成町18番10号							
発行年月日	西暦2010年3月31日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
はせこうじしゅうへんいせき 長谷小路周辺遺跡	神奈川県鎌倉市 長谷一丁目 265番19	14204	236	35° 31′ 39″	139° 54′ 17″	20050225 ～ 20050411	56.00	個人専用 住宅 (杭基礎構造)
えんがくじきゅうけいだいせいせき 円覚寺旧境内遺跡	神奈川県鎌倉市 山ノ内字西管領屋敷 377番1	14204	434	35° 32′ 19″	139° 54′ 73″	20040722 ～ 20040913	67.84	個人専用 住宅 (地下室)
だいらくじせき 大楽寺跡	神奈川県鎌倉市 浄明寺四丁目 246番1	14204	262	35° 33′ 59″	139° 57′ 40″	20050222 ～ 20050421	41.50	個人専用 住宅 (杭基礎構造)
えんがくじきゅうけいだいせいせき 円覚寺旧境内遺跡	神奈川県鎌倉市 山ノ内字瑞鹿山 393番	14204	434	35° 33′ 59″	139° 54′ 65″	20050111 ～ 20050228	45.00	個人専用 住宅 (杭基礎構造)
ささめいせき 笹目遺跡	神奈川県鎌倉市 笹目町 423番2外	14204	207	35° 31′ 61″	139° 54′ 30″	20051201 ～ 20060331	144.75	個人専用 住宅 (杭基礎構造)
じょうみょうじきゅうけいだいせいせき 浄妙寺旧境内遺跡	神奈川県鎌倉市 浄明寺三丁目 115番14外	14204	408	35° 32′ 09″	139° 57′ 10″	20050725 ～ 20050902	28.50	個人専用 住宅 (車庫・擁壁築造)
えんがくじもんぜんせいせき 円覚寺門前遺跡	神奈川県鎌倉市 山ノ内字藤源治 947番8	14204	287	35° 3′ 75″	139° 54′ 28″	20050405 ～ 20050513	36.00	個人専用 住宅 (杭基礎構造)

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
はせこうじしゅうへんいせき 長谷小路周辺遺跡	都市	中世	土坑、方形竪穴 建築址等	貿易陶磁器、かわらけ、 国産陶器、瓦質製品、 石製品、金属製品	
えんがくじきゅうけいだいせいせき 円覚寺旧境内遺跡	社寺跡	中世	柱穴、土坑、溝等	貿易陶磁器、かわらけ、 国産陶器、瓦質製品、 石製品、金属製品	
だいらくじせき 大楽寺跡	寺院	中世	礎石建物跡、柱穴等	貿易陶磁器、かわらけ、 国産陶器、瓦質製品、 石製品、金属製品	
えんがくじきゅうけいだいせいせき 円覚寺旧境内遺跡	寺院	中世	柱穴、土坑、溝等	貿易陶磁器、かわらけ、 国産陶器、瓦質製品、 石製品、金属製品	
ささめいせき 笹目遺跡	都市	中世	柱穴、土坑等	貿易陶磁器、かわらけ、 国産陶器、瓦質製品、 石製品、金属製品、木製品	
じょうみょうじきゅうけいだいせいせき 浄妙寺旧境内遺跡	寺院	中世	柱穴、土坑等	貿易陶磁器、かわらけ、 国産陶器、瓦質製品、 石製品、金属製品、木製品	
えんがくじもんぜんせいせき 円覚寺門前遺跡	都市	中世	柱穴、溝等	貿易陶磁器、かわらけ、 国産陶器、瓦質製品、 石製品、金属製品、木製品	

鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 26

平成21年度発掘調査報告

(第2分冊)

発行日 平成22年3月31日

編集
発行 鎌倉市教育委員会

印刷 テクノヤマモト

